

暗殺聖騎士

挫椰道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遙か昔の聖戦で命を落とした黄金聖闘士が、その記憶と小宇宙を魂に宿したまま、現代に産まれ落ちる。

そんな彼が通う中学校の担任は、来春、地球を滅ぼすと豪語するタコ？だった…

※この小説はフィクションを原作とした、更なるフィクションです。

実在の人物、団体、国、創作物、出来事とは余り関係ありません。

目次

【お試し！早読み！】

特別編・バレンタインの時間 | 1

特別編：デパートの時間（仮）

22

特別編・零（ゼロ）の時間（仮）

31

序章

聖闘士（セイント）の時間 | 40

聖戦の時間 | 58

編入の時間 | 78

編入の時間② | 94

終業式の時間 | 107

1学期

考察の時間 | 116

キレル時間 | 126

禁句の時間 | 147

模擬戦の時間 | 157

危険人物の時間 | 165

手入れの時間 | 178

金髪の時間 | 200

金髪の時間② | 218

金髪の時間③ | 227

集会の時間 | 252

支配者の時間 | 264

分身の時間 | 276

野球の時間・Appendix	
野球の時間	556
バスケの時間	542
練習の時間	531
球技大会の時間	519
転校生の時間・2時限目	482
師弟の時間	445
転校生の時間	398
旅行の時間④	361
旅行の時間③	344
旅行の時間②	328
旅行の時間	308
テストの時間	288

戦闘車輛の時間	849
適当な時間	819
破壊の時間	807
逃走の時間	782
寺坂の時間	763
流れる時間	744
くだらない時間	727
プールの時間	708
本気の時間	681
才能の時間	664
スイーツの時間	635
球技大会：それからの時間	623
608	

図書室の時間	864
命令の時間	880
期末の時間	903
期末の時間	912
結果発表の時間	927
命令の時間②	945
終業の時間	968
閑話・聖戦の時間②	980
 夏休み	
吉良家の時間	1007
山と海の時	1019
魔力の時間	1024
天使の時間	1040

冥界の時間	1055
訓練の時間	1075
島の時間	1089
決行の時間	1107
小宇宙（コスモ）の時間	1122
イリーナの時間	1145
烏間の時間	1156
カルマの時間	1169
武器の時間	1198
命中（ヒット）の時間	1207
黒幕の時間	1232
暴走の時間	1244
大人の時間	1257

続・危険人物の時間	1432	沖繩Last Nightの時間	1303
戦術の時間	1413	うちなーんちゅの時間	1287
衝突の時間	1398	琉神の時間	1273
体育祭の時間	1391	ハーレムの時間	1273
戦力の時間	1370		
制裁の時間	1350		
刺客の時間	1333		

1314

2学期

友、遠方より来る時間	1589	②	テストの時間	1484
アイドルの時間	1573		テストの時間	1468
ゲストの時間	1562		署名の時間	1450
学園祭の時間	1550		交遊と亀裂の時間	
アジトの時間	1537		交遊と亀裂の時間	
死神の時間	1526		署名の時間	
体育着の時間	1514		テストの時間	
	1494		テストの時間	

【お試し！早読み！】

特別編・バレンタインの時間

「は〜い♪」

「ああ、ありがとね。」

「ほいよ♪」

「おう、サンキュ。」

「ま、義理だけどね。」

「ありがとさん。」

今日は2月14日。バレンタインである！

朝、教室に入る早々に、数人の女生徒から、チョコレートを貰う響。

クラスの女子達は当然、響には彼女が居るのは承知の上の、あくまでも義理チョコな訳なのだが…

「吉い良ああ〜っ!!」

「な、何なんだよ?!」

そんな響に詰め寄るのは岡島大河。

「テメー、こんなにも貰いやがって！」

「知るか！そんなだったら磯貝なんか、クラスの友達からでなく、本校舎の女子からも沢山貰ってるじゃねーか！」

早い話、自分は全然、貰えてないのに貴様は…という岡島。

それに対し、「自分の胸に聞けよ…」と内心思ってる響。

頭に描いた予定では、大量ゲットなつもりだったのだろう、その手にしている、空の紙袋に虚しさや哀しさを感じずにはいられないのだが…。

参考迄に現在、響はクラス内で、チョコレート獲得数は暫定で4位。

3位は本校舎の女子からは、その見た目からか密かに人気があり、それなりに貰ってはいるのだが、クラス内からはチャラ男と云う正体が割れているので、朝の時点で獲得0の前原。

2位は本校舎女子からも、クラス内の女子からも それなりに貰っている、何処ぞのチャラ男とは違う、心身共にイケメンの磯貝。

因みに響は本校舎の女子からは、やはり超々・危険人物の悪名が浸透しているからなのか、現時点で1個も貰えていなかった。

そして、E組内でのチョコレート獲得、栄えある第1位は…

「何で あたしが、こんなにも…orz」

「知らないのか？」

ココアってな、別名【Hot chocolate】って言うんだぜ！

そーゆー意味じゃ、寧ろコツチのが、本命と思っても良いかもな？

この寒い冬に、温かいバレンタインチョコ…みたいな？」

「くそ！リア充爆裂しろ!!」

この然り気無い？ 惚気に逆に爆裂しているのは、寺坂、村松、吉田、イトナの4人である。

「…で、さつきから気になってたんだが、前原と岡野さんは、朝から何をやっているんだ？」

響の指差す先には、何故か岡野にチョコを渡そうと必死な前原がいた。

「ああ、アレな。実は昨日よ……」

「……………てな訳よ。」

「…あつちやく…」



昨日の夕方の事である。

かーなーり、好い感じで2人きりで下校していた前原陽斗と岡野ひなた。

しかし、黄色いタコが そんな美味しいシチュエーションを見逃す訳がなく、今後の

「にゅやーっ?!」

「!!」

ドアを押し開け、勢い良く乱入してきたのはパラッチスタイルの黄色いタコ。

「ちいっ!」「ダメだった!」

「な、何ですか、君達わっ?!」

そして、続く様に部屋に入っただのは、岡島、村松、吉田、中村、狭間の5人。

「え…ええっ?!」

状況が掴めない岡野に、「ヤッペー!!」な顔の前原。

「いや、惜しかった!」

男女が2人きりで仲良くしてれば、先生は絶対に覗きにくる筈だから、その時を狙って殺ろうってゆー、前原の計画はナイスだったんだけどなく?」

「バ…岡島…」

岡島の言葉に慌てふためく前原。

「……………」

そして、顔が一気に暗くなる岡野。

「…え?」

「ひな…?」

「ひよつとして お前…前原から聞かされてなかったのか…?」

察した様に、岡野に話し掛ける中村達。

そんな中、

ぼい…

岡野は手に持っていたチョコを前原に投げ渡す。

前原が其れをキャッチしたかと思うと、

グシャツ!

オカ○・カ○チカ張りのドロップキックを そのチョコを貫きながら顔面に浴びせ、

顛には はつきりと血管、そして目には うっすらと涙を浮かべた上の怒りの表情で、

「死ねっ!!」

バツタアーン!

物騒な台詞の後、まるでドアを壊すかの勢いで、大きな音を立てて思いっきり閉め、部

屋を出て行った。

「チョコレートか…」

「…明日、バレンタインだよな。」

床に落ちた、無惨にも潰れてしまったチョコレートをしながら、何となく察してしま

い、眩く岡島達。

「…これは、やっちゃまったな、前原…」

「はあ…お前って奴わ…」

「くくく…見事な迄に、乙女心を踏みにじってしまったわねえ…」

「……………」

狭間達の言葉に、前原は何も言えない。

更に追い討ちを掛ける様に、

「…前原君、コレはダメダメです。」

暗殺も恋愛も、どんどん自由にすべきですが、報・連・相…コミュニケーションが不足していると、今回の様な結果を招くのですよ。」

覗き魔のタコに正論で説教されてしまう。

「決めました。君には宿題を出します。」

「はい?」

「明日のバレンタイン本番、岡野さんの機嫌を直し、改めて彼女から直接チョコを貰えなければ…」

「貰えなければ?」

「君の内申書の人物評価を『チャラ男』にします!」

「はア!」

「君は まだ、本母校の受験を残した身。

悪影響が出なければ良いですねぇ…?」

「この…タコ…!!」

…そして、今に至る。



「そりゃ、前原が悪いわ…」

本校舎の連中から、チョコ貰ってる場合じゃないだろうに…」

「まじ、最悪だな…」

吉田と村松からの情報を聞き、呆れかえる響と寺坂。

「…それにしても昨日、あんな時に寺坂は兎も角、吉良が参加しなかったのは珍しいよな

?」

「何かあったのかよ?」

「あー、俺と寺坂は昨日、竹林と一緒にメイド「吉良ー!言うなーっ!!」んぐご!」

昨日、何してた?…:に対して応えようとした響の口を、顔を赤くした寺坂が、慌てて

両手で塞いだ。



そんなこんなで、授業の合間、休み時間毎に、あの手この手で岡野にアプローチする

前原。

「よし、こうしよう。」

空きスペースに このチョコ、パスするから、ワントラップして、すぐ俺にリターンすれば良い。速攻で行こうぜ！」

「何処の司令塔だ、お前わっ?!」

自身の趣味である、サッカー風に頼んでみても、掴みはOK!!…とは行かない。

「その岡島（ヘンタイ）から、内申書の話なら聞いてるわよ！」

私から直接、チョコ貰えたらセーフだそうじゃない!？」

前原に対して、何やら凄く申し訳なさそうな顔をしている変…岡島を睨みつけながら、岡野は言い放つ。

「う…」

「だったら尚更、絶対にやったりするもんですか!!」

あの覗きダコにチャラ男認定されてろ！」

そもそも、考えるより先に体を動かす弾丸娘な岡野。

事前に計画を知らされていたなら兎も角、今回の様な策略に巻き込まれるのを一番嫌っている面があった。

「ん、吉良君、どうにかならないかな？」

あの2人は仲良くケンカしてるのが丁度良いのに、あんな感じにガチに喧嘩なのは、見てらんないよお……」

「ん……パス。」

悪いけど俺、あんな風は勘弁だし。」

「……だよね……？」

茅野の言葉にも、響は渚を……

先程、岡野に説得を試みるも、逆に椅子の直撃を顔面に喰らい、目をぐるぐると回してダウンしてる渚を指差して言う。

「渚でさえアレなんだからさ、吉良君なんて、更にギャグ補正が加算されて、もつと悲惨な目に遭うだろうしね……？」

「不破ちゃん!?!」

最近寒いからか鳴りは潜めてはいるが、事有る毎に上半身真っパになつては、岡野や片岡辺りから変質者扱い？されて、その都度、顔面にエアガン本体の投擲直撃を受けてノックアウトされている響。

そんな響では、今の彼女に宥め賺そうと声を掛けた処で効果が無い処か、確かに渚以上の惨劇が起きるのは必至だろう。

校庭での数周に及ぶガチな追い駆けっこから、その儘 教室の隣、実習室に入ってきた前原と岡野の2人。

岡野は実習台に凭れ掛け、前原は両膝に手を置き、肩で息をしている。

「なー、頼むからさ、機嫌直してチョコくれよ?」

必死に頼み込む前原だが、

「…ざっけんな!」

内申書が欲しいだけでしょ?」

岡野も頑なに、それを受け入れようとはしない。

「…いや、内申書は この際チャラ男でも何でも、もう良ーさ。

ただ、昨日の様な貰い方じゃ嫌なんだよ。

きちんとした形で渡して欲しいんだ。」

「はあ?今更? あんた、あたしが昨日、どんだけ勇気出してチョコ渡そうとしてたか、理解してる訳?」

「…!!」

岡野の その台詞に、黙り込む前原。

「その…悪い…気付けなくて…」

本当に…「本っ当」と書いて「マジ」に気づいていなかったのか、既にクラスの全員

が知っている事実を、漸く察した感の前原が、その自身のキャラを棄てた真摯な顔で謝る。

「だ・か・ら、今更謝ったて無駄だよ。

私が、それで折る程、可愛い性格じゃないの、知らないの？」

それでも時既に遅し、聞く耳持たずとばかり、実習室を出ようとする岡野。

「知ってるさー！」

お前の事なら、この1年で全部!!」

びく…

「…例えば？」

しかし、前原の必死なその言葉に、部屋を出ようとした岡野が足を止め、ならばとばかりに振り返り、聞いてみる。

「そーだな…ハイキックの時、まる見えなのに、見えてないと思ってる事とか？」

ピキッ…

その台詞に青筋を立てながらも、顔を赤くする岡野。

しかし、更に前原は言葉を続ける。

「全体的に脳筋でガサツだよなー、家庭科なんか、俺のが上手えーし。」

それと、貸したマンガは ご飯粒貼り付けて返してくるし。

あ、そーそー、口元にも よく飯粒付けてるよな？ どんだけ お米loveなんだよ

？

あとホんつと、暴力が酷え！」

ピキッピキッピキッ：

まるで使徒に侵蝕された様に、顔中に血管を浮き上がらせる岡野だが、それに気づいてないのか、前原の口は止まらない。

「…ちよつと怒ると爪を立てるわ、もっと怒るとミドルキック撃ってくるわ、更に怒らずと昨日みたたくドロツプキックぶつ放してくるわ…

んで、最高にキレると…」

ぷっちーん…

容赦ない前原の口撃に、ついに岡野がリミットブレイク、完全に暗殺者の面構えになる。

…だったら…コレでも喰らえ！！！！

バキイツ！！

「うげっ?!」

上履きの爪先に仕込んであるナイフを出すと、目の前のチャラ男の顔面目掛け、トラス式ハイキックを炸裂させた。

しかし…

パキツ…

「え?」

「…最っ高にキレると、対せんせーナイフで喉元を突いてくる。

野生過ぎんだよ、お前わ…」

キックの直撃こそ回避出来なかつたが、その直後、前原は自分に向けて蹴りを放つたその脚、足首をキヤツチして、突出していたナイフを噛み砕く。

「え? 仕込みナイフがチヨコに?」

え? え? ええゝつ?!」

対せんせー素材の筈のナイフがチヨコに…

訳が解らない岡野に対し、

「今朝方、すり替えておいたんだよ。

確かにチヨコ、お前から直接貰ったぜ?」

朝からの執拗なアタックは全てフェイク、本命…狙っていたのは、正しく今の この

時と謂わんばかり、キャッチした足に頬擦りしながら、前原は真面目且つ、したり顔で説明する。

「。O。L） カッコキモい!!」

そんな前原を見て、そう心の中で絶叫した岡野は決して悪くはないだろう。

「…な、よく知ってんだろ？お前の事…」

顚をポリポリ掻きながら、照れくさそうに言う前原。

「第一…興味無い女のカラオケのハモリ全曲なんぞ、覚えねっての!」

「…ん。」

その一言がトドメの一撃となったか、顔を真っ赤にして岡野は黙り込むが、
「…お前、照れると急に黙るな？」

やっぱ単細胞は嘘つけn「喧しいっ!!」

ゴス!

汐らしい態度が一変、首相撲からのチャランポ、そしてハイキックを放つ。

「み、水色!?!」「!!」うっぎゃあ〜っ!!」

ゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシゲシ…!!

「…何とか、一件落着つて感じかな？」

「…だな。」「…よね。」

そんな2人のやり取りを、校舎の外から窓辺に張り付いて見ていた響達。

あのストンピングの雨霰を目の当たりした上で、一件落着と言いつ切るのは、ある意味、2人の間柄をよく理解している故か：

「ヌルフフフフ…」

あの2人も是非とも、卒業までに尚も進展して欲しいですなぁ…」

そして、そう言いながら、邪な笑みを浮かべ、2人の様子をメモする黄色いタコ。

「はい、没収〜！」「にゅやつ?!」

しかし、そのメモ帳は、響の光速の手の動きによって奪われる。

「あーっ?!吉良君、返して!」

慌ててテンパるタコを無視して

「全く…よくも　まあ、此処まで細々と…」

ぎやははは!何だよ、これ!?

杉野が見たら、最高にorzるぞ?」

パラパラとメモ帳を速読で読み流す響。

そして、

びた…

とあるページで響の手は止まる。

「おい、タコ…」

「にゅ…」

「テメー、どうして俺の5月の連休の事を知っている?!」（金髪の時間②参照）

ビリビリビリビリ!

「にゅや〜（。O。L）〜!」

それは、秘蔵のメモ帳を無惨にも挽き裂かれたからか、それとも烏間の『あの顔』さえ凌駕する、憤怒の化身となった響の顔を見たからか…絶望と恐怖の感情が入り混じった叫びを上げる殺せんせー。

「逝ってこい、黄泉比良坂!!」

「ひえ〜!勘弁!!」

対せんせーグローブを嵌めた響との追い掛けっこが始まった。

それを慣れた光景だと、優しい笑顔で見守る磯貝と片岡だが、

「お前等、見てる場合か!

2人の事も、9月の遊園地の事とか その他諸々、きつちりと書き込まれてたぞ!」

「な…!？」

ジャキ…

「死ね！このエロダコ教師!!」

「にゅやーっ?!」

響の発言に、各々がウージーとナイフを構え、目の前で練り広げられていたタコ狩りに参加する。

「ふう…コイツは…」

「あはは…いつものパターンだ…」

一緒に外で、前原達を見守っていた生徒達も、顔を緩めてしまう。

わーわーギャーギャー…

その『平和』なやり取りを、教室の自分の席から微笑んで見つめていた茅野。

そんな彼女は無意識の内に机の中に仕舞ってあるチョコレートを手に取り、そして

その視線の先は、何時の間にか外のタコ狩りに参加している、1人の少年に優しく向けられていた。

特別編：デパートの時間（仮）

それは、死に逝く者が最期に望み見た幻想か、それとも常人の世とは、また別の次元での現実なのか…

『たいへん よく できました。』

星降る夜の上、桜のマークの枠に そう書き込まれたスタンプのデザインのシャツを、白衣の下に着た若い女性が、心からの祝福の笑顔で、導かれる様に ゆっくりと天に昇ってくる黄色いタコを、両手を広げて迎えようとしている。

「※※さん…お疲れ様でした…。」

そして、ありがとう。」

うつすらと涙を浮かべ、感謝の表情を見せる女性。

「はい、※※先生…。」

それに対して、黄色いタコは、やはり笑顔で応えようとする。

徐々に縮まる両者の距離。

「おお…、※※先生……………の胸！

この儘行けば…ヌルフフフフ!!」

ピツカアツ!!!

「にゅや!!」

「え?ええ?」

邪念丸出しな 締まりの無い顔の黄色いタコが その身体の色をピンクに変えて、まさに今、女性の胸元（推定E）に飛び込もうとした その瞬間、何処からか放たれた強烈な眩い光が、2人に向けられ、2人の…正確に言えば、タコの天に昇ろうとする動きが止まる。

「にゅ…あと、ほんの少しだったのに…」 タコが心の底から、残念そうな顔をしてる中、その場は夜の空の筈が、一瞬にして辺り一面真っ白な、光溢れる空間となった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

「!?」

そんな いきなりの環境変化?に、何が起きたのか把握出来ない2人の空間（まえ）に、突如として直径約3メートル程の黒い【穴】が現れる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

その【穴】が轟々しい音と共に、全てを吸い込まんとばかりな、強大な重力を放つ。

「にゅやー………つ!？」

「※※さん!？」

先程の邪全開な発想の罰が当たったのか、その重力の前にタコが捕まり、抗う術も無く、あっさり【穴】の中に引きずり込まれた。

「※※さん!!」

吸い込まれたタコを助けんが為と、自らも【穴】の中に身を乗り出して手を伸ばし、タコを引っ張りだそうと、女性は【穴】に近付こうとすが、しかし この【穴】は逆に女性を拒むかの如く、重力：引力とは真逆の力を發揮し、

「きやあつ!？」

女性を弾き飛ばし、寄せ付けない。

「死神さーん?!？」

「ゆ、雪村先生え〜っ!？」

そうして互いに名前を呼び合っている中、女性から『死神』と呼ばれたタコは【穴】の奥深くまで堕ちて行き、最後には その中の黒い空間に溶け込む様に、姿が見えなくなった。

それから【穴】が消えたのは直後の事。

同時に光に満ちた白い世界も、まるで手品の様に一瞬に、夜の星が輝く空の上、元の場所に戻る。

「……………」。

その場に一人取り残された、タコから「雪村先生」と呼ばれた女性。

常識の外の展開、状況に理解が着いて行けないと云う、啞然とした顔をしている彼女は、暫くの間、黙り込み、

「な、何なのよ、一体〜っ!?!」

一度 我に帰ると、ヤケクソ気味な叫び声を夜空に響き渡らせるのだった。



「にゅや〜〜〜〜〜〜〜っ!?!」

墜ちるタコ。

暗闇の中を只、堕ちて往くタコ。

「な、何故、飛べないんですかあ〜っ!?!」

自分には飛行能力が有る筈が、それを行使出来ず、重力?に身を任せるしかない状態に不安を覚える。

「あゝ、神様仏様、ゴメンナサイごめんなさいゴメンナサイごめんなさい!!



「又ルッフッフッフ…いやいや、危なかつたですねえ、大丈夫ですか？」

「…???'」

まずは一安心と にこやかな顔で、少女に近づくタコ。

少女は先の巨大な化け物に続いて、今度は喋る黄色いタコの出現に、最初は半ばパニックになるが、凶暴な魔物としては、余りの緊張感の無いタコの顔に、『別物』と認識したのか、徐々に落ち着きを取り戻す。

「あ、あんた、誰？」

「…私…ですか？」

嘗て自分が人間だった頃、死神と呼ばれていたタコは、この街？に辿り着いた時から確信していた。

そう…自分以外の『神』と呼ばれる者の存在を。

そしてタコは未だ、自分に『死』を赦そうとしない神を呪った。

そして、自分の様な者に、未だ『生』を与えた神に感謝した。

確かに あの時、自分は死んだ筈。

ならば何故、自分は今、こうして生きているのか？

決して幽霊なんかではない。

自分は確かに今、間違い無く生きている。

此が本当に、神と云える存在の仕業なら、何か意味が、理由が有る筈と、タコは考える。

それは一体何なのか…

だが、今は そんな事は、どうでも良い。

今は只、目の前の少女の質問に答える…それだけだ。

「ヌルッフッフッフ…

私は…私の事は、『殺せんせー』とでも、呼んで下さい。」

特別編・零（ゼロ）の時間（仮）

それは、死に逝く者が最期に望み見た幻想か、それとも常人の世とは、また別の次元での現実なのか…

『たいへん よく できました。』

星降る夜の上、桜のマークの枠に そう書き込まれたスタンプのデザインのシャツを、白衣の下に着た若い女性：雪村あぐりが、心からの祝福の笑顔で、導かれる様に ゆっくりと天に昇ってくる殺せんせーを、両手を広げて迎えようとしている。

「死神さん…お疲れ様でした…。」

そして、ありがとう。」

うつすらと涙を浮かべ、感謝の表情を見せるあぐり。

「はい、雪村先生…。」

それに対して、殺せんせーは、やはり笑顔で応える。

徐々に縮まる両者の距離。

「おお…、雪村先生……………の胸！」

この儘行けば…ヌルフッフッフッフツッ!!」

ピッカアツ!!!

「にゅや!」

「え?ええ?」

邪念丸出しな 締めりの無い顔の黄色いエロダコが、その身体の色をピンクに変え、まさに今、あぐりの胸元（推定E）に飛び込もうとした その瞬間、何処からか放たれた強烈な眩い光が、2人に向けられ、2人の…正確に言えば、タコの天に昇ろうとする動きが止まる。

「にゅ…あと、ほんの少しだったのに…」

ピンクのエロダコが、心の底から残念そうな顔をしてる中、その場は夜の空の筈が、一瞬にして辺り一面真っ白な、光溢れる空間となった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

「?」

そんな いきなりの環境変化?に、何が起きたのか把握出来ない2人の空間まに、突如として直径約3尺程の黒い【穴】が現れる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

その【穴】が轟々しい音と共に、全てを吸い込まんとばかりな、強大な重力を放つ。
「にゅや—————っ!」

「死神さん!」

先程の邪全開な発想の罰が当たったのか、その重力の前に殺せんせーが捕まり、抗う術も無く、あつさりと【穴】の中に引きずり込まれた。

「死神さん!!」

吸い込まれた殺せんせーを助けんと、あぐりも自ら【穴】の中に身を乗り出して手を伸ばし、引つ張りだそうするが、【穴】は彼女を拒むかの如く、その重力：引力とは真逆の力を発揮し、

「きゃあつ!」

あぐりを弾き飛ばし、寄せ付けない。

「死神さん?!」

「ゆ、雪村先生え〜っ!」

そうして互いに名前を呼び合っている中、殺せんせーは【穴】の奥深くまで墮ちて行き、最後には、その中の黒い空間に溶け込む様に、姿が見えなくなつた。

それから【穴】が消えたのは直後の事。

同時に光に満ちた白い世界も、まるで手品の様に一瞬に、夜の星が輝く空の上、元の場所に戻る。

.....」。

その場に1人取り残された、あぐり。

自分の常識の外の展開、状況に理解が着いて行けないと云う、茫然とした顔をしている彼女は、暫くの間、黙り込み、

「な、何なのよ、一体〜っ!？」

一度 我に帰ると、ヤケクソ気味な叫び声を夜空に響き渡らせるのだった。

▼▼

「にゅや〜〜〜〜〜っ!？」

墜ちるタコ。

暗闇の中を只、堕ちて往くタコ。

「な、何故、飛べないんですかあ〜っ!？」

自分には飛行能力が有る筈が、それを行使出来ず、重力?に身を任せるしかない状態に不安を覚える。

「あ〜、神様仏様、ゴメンナサイごめんなさいゴメンナサイごめんなさい!!

もう、雪村先生の胸に、邪な考えを持つたりしませんから!

スーパ―の特売タマゴ、御一人様一パックを分身と変装を駆使して、何個も買うのも止めます！

映画の女優さんも、もう胸で差別したりしません!!

教え子や同僚の恋愛事情に触手を出すのも止めます！

それから世界中の山に捨ててある、エッチな本を拾い集めたりもしません!!

それから、え〜と…」

最後には神頼み。

自身の悪事?を告白し、懺悔し始めた。

「もう吉良君を、星座カーストネタで弄るのも、止めますから〜っ!!」

ひゅーん…

それでも落下は止まらない。



「にゅ?」

それから暫くの間、自然落下が続く。

漸く終点なのか、暗闇の空間の中、堕ちて行く先に、僅かな光が差し木漏れる。

タコは重力に従い、その光の中に牽かれる様に飛び込んで行った。

ざわざわざわざわざわざわざわ…

「にゆるる……此処は？」

困惑するタコ。

光を抜けた先には、多数の自分の教え子と ほぼ同年代の、少年少女がいた。

少年達の髪や顔立ち、そして揃いの制服を着ている処を見るに察し、どうやら外国の学校の様だ。

「……………」

そして自分の正面には、啞然とした表情を浮かべたピンクブロンドの髪の少女が立っており、その傍らには、恐らくは教師なのだろう、髪の毛が やや寂しい、中年の男が居る。

他の生徒達？は、自分と その2人を囲む形となっている。

「「「……………」」」

一般人から見れば異形の風体。

しかも報道によって、今の自分は月を破壊し、地球を滅ぼさんとするモンスターとして、世間に認知されている筈。

しかし、そんなモンスターを前にして、逃げ惑いパニックになる気配は制服の学生達には微塵も無い。

只単に、いきなり現れた妖しいタコを、怪しい目で見ているだけだ。

「あ、あんた、何なの？」

そんな中、目の前のピンクブロンドの少女が話し掛けてきた。

「……………」

嘗て自分が人間だった頃、死神と呼ばれていた殺せんせーはこの時、確信した。

自分以外の『神』と呼ばれる者の存在を。

そして、未だに自分に『死』を赦そうとしない その神を呪い、そして、自分の様な者に、未だ生を与える その神に感謝した。

確かに あの時、自分は死んだ筈。

ならば何故、自分は今、こうして生きているのか？

決して幽霊等ではない。

自分は確かに今、間違い無く生きている。

此が本当に、神と云える存在の仕業なら、何か意味が、理由が有る筈と、殺せんせーは考える。

それは一体何なのか：

だが、今は そんな事は、どうでも良い。

そう思いながら、彼は目の前の少女の質問に答えるのだった。

少女が口に出した、初めて聞く、自分が知らない筈の言語。
しかし、何故か識っており、何故か話せる、その言葉で。

「ヌルッフッフッフ…」

私は…『殺せんせー』です。」

櫛ヶ丘中学校、3年E組の少年少女の物語は、終わりを迎えようとしている。
だが、どうやら、殺せんせーの物語は、まだまだ終わらない様だ。

序章

聖闘士（セイント）の時間

4月某日。AM0:00

小高い山の上にある学舎、深夜、三日月が照らす運動場に2つの人影があつた。

1つは、見た目的には特にコレといった特徴もない、極々普通の少年。

そして、もう1つは…

「ヌルフフフフ…本当に対せんせー武器無しで勝つ気ですか？吉良君？」

「はい。てゆうか、今日は、俺の攻撃がせんせーに効くかどうか試すだけですから。

今回は殺るとか勝つとか、そんなのは考えてないですよ、殺せんせー。」

黄色いタコ…の様な生物？

「ヌルフフフフ…これは舐められた物ですねえ…」

少年から『殺せんせー』と呼ばれた黄色いタコ？は余裕からか、或いは元からなのか、夜空の三日月の如く、口を吊り上げ若氣ている。

「では、吉良君、始めますか？」

「…行きます！」

無防備に立つだけのタコに対し、吉良と呼ばれた少年は、拳法の様な構えをとり、

「…の前に、」

「又フーフー！」

ステーン！

目の前のタコをずっこけさせた。

意外に人間味のあるタコの様だ。

「今夜の事は、絶対に誰にも喋らないで欲しいです。」

「又ルッフッフッフ…分かりました。」

いいですよ。約束しましょう。」

タコは独特、且つ奇妙な笑いで頷く。

「では、改めて行きます！」

まずは…マツハーで！」

「にゆにゃ?!」

音速…少年は、普通の人間なら考えられないスピードでタコに突進しながら拳を打ってきた。しかし、タコも常識外れなスピードで、これを難なく躲す。

「このスピードは?!」

吉良君、君は一体…？」

「まだまだ！スピードはもつと上がりますよ？せんせー！」

マツハ2、マツハ3、マツハ4…

徐々に攻撃のスピードを上げていく少年。

タコは予想外のスピードに戸惑った顔を見せながら、その全てを躲していく。

マツハ20…

「にゅるー！」

そして、今までは少年の繰り出す拳や蹴りを躲すだけだったタコが始めて己の腕…

否、触手で放たれた右の拳を「ガード」して受け止めた。

「へえ…マツハ20でこれかあ、それなら！」

マツハ25…

ドン！

「にゅや？！」

少年の放った蹴りがついにタコの側頭部にクリーンヒットした。

しかし、

なんだ？この手応えの無さは…？

攻撃をヒットさせた方の少年が納得のいかない顔を見せる。

「…ならばー！」

更に次の攻撃のモーションに入った時、

「ストーツプ！ストーツプ！」

ちよつとタンマです、吉良君！

お願いだから、ちよつとだけ待って！」

びた…

タコの言葉に反応し、律儀にも？振り上げた拳を止める少年。

「…何？」

「君の、その速さは一体、何なのですか？」

どう考えても、人間の出せるスピードじゃあないですよ?!」

「それが、出せるんですよ？俺にはね。」

それに、俺のMAXは、この程度じゃない！」

カツ…

「にゅ？」

一瞬、少年の左拳が煌めいたかと思えば、次の瞬間、タコの三日月のマークが特徴的なネクタイの上に衝撃が走った。

ちつ、やはり、手応え無し…か。

「吉良君…？」

「俺のMAXは、マツハなんて欠伸が出る速度とは、次元が違うんですよ！」

こっから先はマジでいきますよ、殺せんせー！」

再び、独特の拳法の様な構えを取り、

「はあああああああ……」

身体中に己の全ての力を張り巡らせるかの如く、呼吸を整える少年。

そして、

「先ずは……アルギエバさん、借りるよ！」

カッ……！

「にゅにゃー？」

放たれた拳の軌跡が無数の閃光となり、タコの身体を打ち抜き天高く吹き飛ばす。

スタ……

だが、このタコには飛行能力があるのか、空中で体制を整えると、静かに着地。

あれだけの打撃を浴びながら、ダメージを受けている様子はない。

「ヌルフフフフ……」

確かに先生の目でも追えない速さですが、それでもね、効かない物は、効かないんで

すよ……？」

「く……ならば、これだ！パーンさんの……」

シュツッ！

手刀の形から右腕を振り抜き、研ぎ澄まされた刃の如き衝撃波が一直線にタコを襲い、直撃するが、

「ヌルフッフッフ…」

これも効果が確認出来ない。

本来ならば、触れた先から真つ二つになる筈であろうタコの身体は、先程の攻撃から、その身を纏っている式服は既にズタボロなのだが、身体は全くの無傷だ。

「そんな…バカな…」

動揺を隠せない少年。

「…はっ?」

そして、1つの事に気づく。

「殺せんせー…」

「はい?」

「よく考えてみたら、せんせーは全然、俺に攻撃してきてないよね? 何故?」

そう、殺せんせーと呼ばれるタコは、少年の攻撃を受けるだけで、自身は全く手を…
触手を出していないのであった。

「ヌルッフッフッフ…」

それは、君が守るべき生徒だからですよ。

間違っても傷つける存在なんかではありませんからね。」

「!!」

こりやあ勝てねーな…

相手が攻撃を仕掛けてこないなら、負ける事はないだろう…

しかし、自身の攻撃が通じる通じない以前に、決して勝てる『器』でない事を感じ取る。

そして、

「今、ギブするのは虫が良すぎる?」

「ええ、構いませんよ?」

その代わり、ほんの少しだけ、手入れをしますがね?

それと、最初の約束通り、今夜の事は、誰にも言いませんが、先生にだけは、この場で説明して欲しいですね?

吉良君、君のその能力ちからの事を。

ヌルッフッフッフッフ…」

「^{セイント}聖闘士？」

「^{セイント}聖闘士。しかも^{ゴールド}黄金。」

「にゅにゃー、何ですとー?!」

鸚鵡返しの様なやりとりで驚くタコ。

「ば、馬鹿な…アレはあくまでも、マンガの存在であり、実際に存在してるなんて話は聞いた事ありませんよー！」

「^{セイント}聖闘士の様な存在が簡単に表の情報に出る訳ないだろ？」

それに、見た目から能力から、何から何までギャグマンガそのまんまなタコにだけは、マンガみたいな存在云々なんて言われたくないし。」

「にゅ?!先生、そんなにギャグですか？」

コクン…

無言で頷く少年。

これに対し、タコは両手両膝？を床に着き、頭を垂れてしまう。

「…せんせー、そんなにorzるなよ？」

「……………」。

無言なタコ。

「この程度で拗ねるなよ、子供か!？」

「先生、キャラクターはギャグを意識していましたが、存在そのものをギャグ認定される
と、流石にシヨックです…。」

「あー！分かったよ、悪かったよ！

ギャグマンガは言い過ぎだったよ！」

「……………」

少年が、ややヤケクソ気味に謝るとタコは無言のまま、スクッと立ち上がり、

「オホン…吉良君、君が聖闘士セイイントなのが本当だとしたら、何故、今すぐに先生を討たないの
ですか？

君から見たら、先生は地球を破壊せんとする怪物…邪悪な存在ではないのですか？」

質問を投げかけた。

それに対し少年は

「確かに俺達、女神アテナの聖闘士セイイントは、この世に蔓延る邪悪を討つのが使命だけど、殺せんせー
からは、悪意とか、邪悪さが感じられないんだ。

実際、さっきの戦いでも俺を傷つけようとはしなかったよね？

生徒だからと言ってさ？

だからこそ、月をあそこまで破壊したと言って憚らない怪物が何故、こんな学校の、こ
んな教室の担任になったのか、何故、このクラスの生徒だけに暗殺の機会を与えたのか、

少なくとも それをはつきりさせるまでは討つべき存在ではない…と、判断したんだ。
地上の愛と平和を守る聖闘士としてね。

だから、せんせー、この教室に来た理由、話してくれないか？

絶対に誰にも喋らないからさ…。」

聖闘士としての自分の考えを述べる。

「吉良君…分かりました。」

いずれは皆さんに話す時が来るでしょうが、今、君にだけは話しておきましょう。

でも、これは本当に絶対に秘密にしておいてくださいね？」

「了々解。」

「絶対ですよ？絶対に秘密ですよ？」

もし、誰かに喋ったりしたら、針千本飲んで貰い m

「いーから早よ話せー！」

》》》

それからタコは、聖闘士を名乗る少年に自身の過去、全てを話した。

自分が嘗て死神と呼ばれた殺し屋だった事、柳沢という科学者の下で人体実験された事、そして元E組担任の雪村あぐりの事…

「…まあ、大体は、そんな風な感じなのですが…ん？吉良君？」

「……！」

タコが事の大まかな展開を少年に話し終えた時、少年の目からは涙が零れ落ちていた。

「ヌルフフフフ……」

「おや〜？ 吉良君、君、もしかして泣きました？ 泣いちゃいました？」

「うっせーよ！ 汗だよ！」

必死に誤魔化す少年。

「ヌルフフフフ……」

「ま、そういう事にしておきましょう。」

「このタコ、ムカつく！」

僅かに殺意を抱く少年。

「それから、最後にもう一つ、先生からお願ひがあります。

君は、まだ先生を討つべきでないと判断したみたいですが、他の皆さんの暗殺の邪魔は止めて欲しいのです。

寧ろ、彼らと一緒に協力して積極的に暗殺に取り組んで欲しい。ダメですかね？」

相変わらず口元はニヤているが、口調は真剣そのものなタコの申し出に少年は

「はあ……分かったよ、ただし、^{セイント}聖闘士の力は一切使わない。」

あくまでも普通の中学生として、期限の卒業シーズンまでに、皆とマジに殺ってやるよ。

これで良いかい？殺せんせー？」

と受け答えると、

「はい…：それでお願ひします。」

タコは身体の色をオレンジに変色させ、顔に朱色の○マークを浮かべ微笑みんだ。

「それで、聖闘士^{セイント}と言えば…」

更にタコが話を続ける。

「君が先程、放った技、恐らくはライトニング・プラズマとエクスカリバーだと思いますが…」

「ん、正解だよ。」

「あれは確か、獅子座と山羊座の技でしたね。」

あの時、君は技を放つ際に、他の人の名前を言っていましたか…」

「ああ、今回、俺が使ったのは他の黄金聖闘士^{ゴールドセイント}からの借り物の技。

当然、威力は本家より数段、落ちてるよ。」

本家本元が使ってたなら、せんせー、殺られてたかもよ？」

「ヌルフッフッフ…：怖い怖い。」

…で、君は本来、何座なのですか？」

「!!……………」

黙り込む少年。

なにやら、答えるのを躊躇っている様だ。

「又ルフ？答えたくない？」

あ、もしかして蟹座ですか？

それとも魚座でしたか？

確か、吉良君の誕生日は…あ、はいはい、吉良君は蟹座の生まれでしたか〜！

キャンサーですか〜？

デ※マスクですか〜？

あじゃぱーっ！ですか〜？

星座カーズトぶつちぎりトップですか〜？」

ぷち…

顔を緑と黄色の縞模様にして、触手で頬を突つきながらの挑発的なタコの台詞に少年の中で何かがキレた音がした。

「せんせー…」

「にゅ？」

「確かに、せんせーには如何に小宇宙^{コスモ}を燃やしても、物理的な技は効かないのは分かったけど…」

「き…ら君…?」

重苦しい迫力を纏う少年の台詞にタコが戸惑う。

「例えば…絶対零度でしか破壊出来ない氷に閉じ込めたら…」

「にゅ?」

「例えば…殺せないにしても、その体を異次元の彼方にぶっ飛ばしたら…」

「又ル?」

「例えば…強制的に幽体離脱を引き起こし、その魂を直接燃やしたら…どうなる?」

「にゅにゃーっ?!」

「ごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい、吉良君、少し落ち着いて!」

少年の冗談に聞こえない脅しに、タコは必死に土下座して謝るのだった。

「全く…あのコミックのお陰で全国の蟹座の少年少女に、この手の話は禁句だって事くらい、分かるでしょうに…」

「又ルウ…すいません…」

先生、ちよつと調子に乗り過ぎました…」

冷静さを取り戻した少年にタコは注意される。



「ふああ…今日はもう、こんくらいで良いっしょ？」

じゃ、俺、帰るわ…

あ、本当に聖闘士セイントの話は内緒ね、特に不破ちゃんとかには…

席を立ち、教室を出ようとした少年に

「ちよつと待ちなさい、吉良君！」

タコが呼び止める。

「何だよ？」

さつき、最後とか言ってたろ？」

「まだ、先生に暗殺を仕掛けた者への手入れが終わっていません。」

「分かったよ、さつきとしろよ…。」

「はい、それでは…。」

ドサツ…

机の上に数冊の問題集が置かれる。

「これは？」

「問題集です。」

「いや、それは見りゃ分かるし。」

「付箋紙が貼ってるのが分かりますね？」

この付箋紙が貼ってあるページ、全ての問題をやって貰います。

それを明日の、いえ、今日の朝のホームルームの時に提出して貰い m

「出来るか!!」

「え？ 吉良君は黄金聖闘士ゴールドセイントですよね？」

光速で頭脳を回転させて、光速でペンを動かしたら、楽勝じゃないんですか？」

元から吊り上がっている口を更に吊り上げ、ニタアと笑うタコ：いや、殺せんせー。

「こ、のタコ……！」



「オ、オハヨーゴザイマス……」

「おおお……！」

パチパチパチパチパチパチパチパチ……

次の日、吉良少年が小声で挨拶をしながら教室に入ると、クラスメートから拍手が沸き起こる。

そして……

「皆さん静かに！ 授業中ですよ！」

それに吉良君！

今、何時だと思ってるんですか?!

とりあえず、この授業は後ろで立って受けなさい!」

「このタコ…絶対に殺す!」

聖戦の時間

遙か昔のギリシヤ・アテネ。

一般の者には、決して その存在を知られる事のない、サンクチュアリー 聖域と呼ばれる地。

戦の女神、アテナを長とする聖闘士と呼ばれる少年達が活動の拠点としてある場所である。

その聖域の中にある、夜空に輝く黄道12星座を概念とした12宮と呼ばれる宮殿の内の一つ、巨蟹宮にて、1人の黄金に輝く鎧を纏った少年と、漆黒の鎧を身に着けた多数の男達が対峙していた。

「ら、ラダマンティス様あ！」

「はあはあ…冥界三巨頭つて言っても、大した事ないんだね…」

少年の足元には、黒い鎧を着た男が倒れている。

「何だと、このガキがあ！」

「殺つちまえ！」

自分達の上官に当たる男を倒した少年に、残る黒い鎧の男達が一斉に襲い掛かかる。

「ふう……」

圧倒的不利な人数差にも拘わらず、少年は一呼吸すると、右手人差し指を天に向け、
「積尸気冥界波あ！」

「「「ぎゃあー……」」」

少年の指先から放たれた青白い靄の様な物が男達の体に纏わりついた瞬間、彼等は断末魔と共に全員が其の場に崩れ落ちた。

まるで身体から魂を抜かれた様に……。

「ふう……」

目の前の敵を片付けた少年が一息ついた時、

「アセルス様！」

白銀の鎧を纏った少年を先頭に色取り取りの鎧を身に着けた少年達が巨蟹宮に駆け込んで来た。

「君達は……ゴメン、その天馬星座ベガサスと鳳凰星座フェニックスの兄ちゃん以外は初対面だよな？」

アセルスと呼ばれた少年の言葉に白銀の鎧を着た少年が答える。

「はっ！私は白鯨星座ホエイルのメルヴィルであります。

祭壇星座アルターのチヨウより、各12宮の黄金聖闘士の補佐をする任を受けました。

「この巨蟹宮には、こちらの柄杓星座テイ パイを就けます。」
「柄杓星座テイ パイのムソウです。」

メルヴィルと名乗る少年から紹介された、緑色に光る鎧を着た東洋系の少年が一步前に出て、名を名乗り、一礼した。

「アセルスだ。よろしく頼む。」

明らかに自分より年上であろう、ムソウに対し、高圧的に接するアセルス。

「メルヴィル、現状で冥界三巨頭の内、既に2人は倒してはいるが、此方も黄金聖闘士2人を始めとして、多数の同朋が倒れている。」

油断は出来ないぞ。

だが、命を捨てても使命を果たすとか、その様な事は考えるな。

それは自己満足に過ぎない。

アテナもそんな事は望んではない。

残る全員：生きて勝ち抜くぞ！」

「「「承知！」「」」」

「ではムソウを除く、他の者は、次の宮へ急ぐんだ痛たたたたた？」

「おいおいおい、10歳に満たないガキが少し生意気だぞ？ コラ？」

「「「て、テツガあ?!」「」」」

少年の1人がアセルスの背後に立ち、こめかみに拳を押し当て、グリグリとじだした。蟹座の聖衣の頭部位ヘッドパーツはヘルムでなく、サークレットの形状なので、所謂『ウメボシ』も可能であった。

「痛い痛い痛い痛い！兄ちゃん勘弁！」

「こ、こら、フェニックス！」

「貴様、何をやってるかあ?！」

「ガン！」

「痛！」

慌ててメルヴィルがテツガと呼ばれた少年を拳骨で止めに入った。

「兄ちゃん酷いよ……」

「チクシヨウ、どうせ兄ちゃんは自分の師匠のスピカ姉ちゃ……乙女座ヴァルゴのスピカの下に配置されるんだろ？」

「イジメられたってチクってやる……！」

「う……す、すまない、俺が悪かった！」

「アセルスに慈悲の心があるなら、あの女にチクるのだけは止めてくれ！頼む！」

「両方の掌を合わせ、必死に謝るテツガ。」

「はあ……分かったよ、もう、さっさと次に行きなよ。」

「てゆーか、全員さっさと行く！ 駆け足！」

「「「「は、はい！」」」」

謝るくらいなら、最初からしなければ良いのに……と思いつながら、ため息を吐き、この場に残るムソウ以外を次の宮に進ませるアセルス。

メルヴィルを先頭にテツガ達は次の宮、獅子宮へ向かい走って行った。

「やれやれだ……テツガ兄ちゃんは本当に勘弁して欲しいよ。」

「……何か、すいません。」

アセルスの愚痴に何故か自分の事の様に謝るムソウ。

「いや、君が謝る事じゃないし。」

それより、冥王軍が次は何時 攻めて来るかは分からないけど、とりあえずは此処の死体を片付けよう。

手伝ってくれるかい？」

「は、はい！」

アセルスとムソウは巨蟹宮に転がった冥闘士^{スベクター}達の死体を片付け始める。

『スピカ姉ちゃん……聞こえる？』

『あら、アセルス？ 何かあったの？』

もしかして怪我したの？ 大丈夫？』

『テツガ兄ちゃんにイジメられた…』

『な、何ですって！あのクソガキ…』

分かった、今度 会ったら殺しとくから！』

普段は実の姉の様に慕っている、乙女座のスピカと念話テレパシーで会話しながら…



「!!アセルス様！」

「…ん。分かっている。」

巨蟹宮に攻めて来た冥闘士の死体を片付けてから数時間後…

聖域に再び、悪意を持つ多数の小宇宙コスモが確認出来た。

「既に白羊宮と金牛宮は実質素通りみたいな物だろうし、双児宮は…レックスさんタバ

サさん…両方、まだ帰って来てないみたいだし…

ムソウ！僕達が実質、最初の守護者だ！

気合い入れていくぞ！」

「はいー！」

カツン…カツン…カツン…

やがて巨蟹宮に侵入した1人の足音が響く。

そしてアセルスとムソウの前に、その姿を見せる侵入者。

「バカな…お前は…?!」

「そんな…お前は確かに俺が…」

「……………」。

ボロボロに割れ欠けた冥衣^{マブリア}を纏い、虚ろな目をして2人の前に現れたのは、冥界三巨頭の1人、天猛星・ワイバーンのラダマンティスであった。

「……………」。

自分が倒した筈の男が、自分が死体を片付けた筈の男が目の前にいる。目の前の敵は、そんな何故?を考える時間を許す事なく突進してきた。

「!!」

咄嗟に攻撃を躲す2人。

「……………」。

その2人に対し、無言で追撃のラツシュを仕掛けるラダマンティス。

「喰らえーノーザンライト・ブラスタァー!」

敵の猛追を避けながら小宇宙^{コスモ}を燃やしていたムソウが、自身の最大必殺技を繰り出す。

掌から放たれた小宇宙は純粋な破壊エネルギーとなり、ラダマンティスの胸元に直

撃、冥衣サイフリフの破片を撒き散らしながら、宮内の壁に激突させた。

「やったか？」

しかし、ラダマンティスは、何事もなかった様に無言で起き上がると、再び、2人の若い聖闘士セイント達に猛攻を仕掛けてきた。

「そんな…確かに手応えあったのに…」

「下がってろ、ムソウ！」

アセルスが小宇宙コスモを燃やし、握り締めた左手の人差し指と中指を立て、そのまま振り抜いた。

「アクベンス・シユナイダー！」

放たれた小宇宙が無数の刃となり、ラダマンティスの身体を、いや、正確に言えば、ラダマンティスの身体の周りの空間を斬り裂くと、先程まで猛威を振るっていた男はガクリと其の場に崩れ落ちた。

そう、まるで糸の切れた操り人形のように…

「出てきなよ。居るのは分かっている。」

「ふっ…見事だ。若き黄金聖闘士ゴールドセイントよ…。」

「なっ…お前達は…?!」

アセルスの呼びかけに対し、文字通り湧いて出たかの様に、無数の冥闘士スベクダー達が其の場

に突如として姿を現した。

「グフフ…こんなガキが黄金聖闘士とは、ゴールドセイント 聖域も サンクチュアリ たかが知れてるな…」

「さつき、巨蟹宮に攻めてきた奴等も、全く同じ事を言つてたよ？」

そして、そのガキにやられる冥闘士スベクターつて…何？（笑）

「何だど？このガキ！」

冥闘士の1人が下品な笑いをしながらアセルスを挑発するが、逆に切り返され、逆上し、自身が言う所のガキ…たった9歳の少年に襲い掛かる。

「アセルス様、ここは俺が！」

アセルスの前にムソウが出る。

「ガキ共が！2人纏めて葬つてやるわ！この天敗s」

「ノーザンライト・ブラスター！」

「ぎゃあーっ！」

しかし スベクター この冥闘士は、名乗り終える事無く、ムソウの必殺拳の前に敗れ去った。

「ほう…青銅ブロンズにしては、なかなかやるな…。」

無数の冥闘士達の中、姿を見せた際に最初にアセルスに話し掛けてきた男が一步、前に出る。

どうやら、この男が、この場の冥闘士達を率いている様だ。

「名乗らせてもらおう…。」

冥界三巨頭が1人、天貴星・グリフォンのミーノスだ。」

「三巨頭…！」

ムソウが構えを取ると、ミーノスもムソウに向けて掌を翳す。

…が、

「お待ちください！ミーノス様！」

「こんなガキ、ミーノス様の手を煩わせる事もありませぬぞ！」

「ここは、我々が！」

ミーノス配下の冥闘士^{スベクター}達が、前面に出てきた。

「…好きにしろ。」

「「「「はっ！」「」」」」

そして それに対するミーノスの言葉に、彼を除く冥闘士^{スベクター}の内、約半数が一斉に攻め込んできた。

「「「「ひゃっはー！」

ガキ共、大人しく死ね！」「」」」

「舐めるな！爆ぜよ！俺の小宇宙^{コスモ}！」

ノーザンライト・デス・スター！！」

「「ぎやーっ?!」」

「「うわあーっ?!」」

しかしムソウの放った無数の光弾が、襲ってきた冥闘士達を纏っていた冥衣スベクタを粉々に破壊しながら貫き、討ち滅ぼす。

「どうだー…っつて、え?」

ガシイ!

会心のガッツポーズを決めるムソウ。

しかし次の瞬間、ムソウは後ろに居たアセルスに向けて拳を放ち、アセルスはそれを掌で受け止める。

「これは?体が勝手に…?」

「ゴズミック・マリオネーション…」

小僧、貴様は既に、私の操り人形だ。」

ゴズミック・マリオネーション…小宇宙で創った不可視の糸を敵に巻き付け、操り人形の如く五体を自由に操る、ミーノスの技。

「おい、この2匹は私が仕留める。」

お前達は先に、獅子宮に向かえ。」

「「「「「「「「はっ!」」」」」」」」」

ミーノスが残っている配下の冥闘士スベクターを次の宮、獅子宮へ向かうように指示を出すと、この者達は、その指示に従い、全員が獅子宮に向けて走りだした。

「くそっ！こんな糸、いつの間に？」

「ふっ…最初に貴様に手を翳した時、部下共が余計な口出しをしていた時には既に糸を放っていたのだよ！」

「くっ…！」

ガシイ！ガシイ！ガシイ！

ムソウが放つ拳や蹴りを、冷静に捌くアセルス。

「成る程ね…さっきのラダマンティスと同じな訳だ。」

アセルスは冷静に分析すると

「アクベンス・シユナイダー！」

ラダマンティスの時と同様、小宇宙コスモの鋏刃を放ち、ムソウの体に纏わり憑いている小宇宙コスモの糸を全て断ち切った。

「はあ、はあ…」

ガクツと両膝両掌を床に着け、荒い呼吸をするムソウ。

自身の耐えうるスピード…音速の遙か上、光速に近い速度で無理矢理に体を動かされていたムソウの肉体は限界に達していた。

本来は積尸気冥界波で引き抜いた魂を直接燃やす技なんだけど…

先にムソウに技を仕掛けたのは、はつきり言つて失敗だったね。

聖闘士に一度見せた技は通用しない！」

「ば、馬鹿な！私の技は完璧だ！」

くらえ！コズミック・マリオネーション！」

「無駄だよ！アクベンス・シユナイダー！」

小宇宙の糸を左手の二本指から放たれる無数の小宇宙の鋏刃が断ち切り、そしてミーノスの身体も冥衣ごと斬り裂く。

「ぐはあ……！」

「まだまだ！積尸気冥界波！」

「ぬうああああっ?!」

ミーノスの肉体から、魂を引きずり出し、

くらくらくのお、積尸気い魂葬破あ！」

ドゴオオオオン!!!

その魂を大爆発させた。

「す、凄い！アセルス様！」

ムソウが思わず喜び勇んで叫ぶが、

「あちやあ…しくつた…」

「え？」

ぼた…

ゴールドクロス
黄金聖衣の上、心臓に位置する所に極小の穴が開き、そこから血が滴り落ちる。

「ふっくくくく…只では死なん。」

少年、貴様も道連れだ…」

「ミーノス！まだ生きていたか?!」

ムソウが叫ぶ。

「くくくくく…コズミック・マリオネーションの糸には1本だけ、デユランダル・ストリングと言われる絶対破壊不可の糸があるのだよ…」

その糸で、貴様の心臓を貫かせて貰った…

…こんな風にな！」

ドスドスドスドス!

破壊不可の糸が生きているかの様に動き、アセルスの心臓を聖衣の上から何度も貫き、最後には消滅した。

プシャーー!

心臓部、体の前後から、糸が開けた無数の穴から一気に血が、勢いよく吹き出る。

「く……」

膝を着き、アセルスは其の場に倒れる。

「少年……先に……地獄で……待って……るぞ……」

その一言を最後に、ミーノスは動かなくなった。

そして……

「アセルス様！しつかりしてください！」

ムソウが自身も動くのは儘ならない体を動かし、アセルスを抱きかかえるが、

「ムソウ……悪い。」

僕はもう、駄目っぽいよ……。

あはは……自分で死ぬのは許さないとか言っおいて、凄く格好悪いね……」

「アセルス様、喋らないで！」

ムソウが自らの小宇宙^{コスモ}を治癒力に変換してアセルスの体に流し込むが、その効果はな
い。

「まあ、良つか……」

とりあえず三巨頭は全て倒れたし、後は残った聖闘士^{みん}達^なに任せるよ。

ムソウ……君にも期待してるよ。

スピカ姉ちゃん……ごめんね……」

次第に少年の視界は黒に染まる。

「アセルス様、アセルス様あ！」

アセルス様、アセルス様あ！……♪♪♪♪♪

そして暗闇の中、いつまでも巨蟹宮に響き渡るムソウの叫ぶ声が、いつしか軽快な音楽に変わっていった……♪♪♪♪♪



♪♪♪♪♪『QUESTIONS QUESTIONS』

スマホが軽快な音楽を鳴らし、着信を報せている。

ピッ…

「Na……?」

『もしもーしー! ひーびきいー!』

起〜き〜て〜る〜?』

「!!……その声……晴華? 一体、何事?」

吉良響がベッドの中から枕元に置いてあるスマホに手を伸ばして出てみると、その向こう側からは、元気な少女の声が。

『何って、響が昨日、「二度寝したら遅刻した(笑)」とかメールしたから、わざわざ優しい彼女様がモーニングコールしてやったんじゃないの!』

まだ寝ぼけてんじゃない?

電話 出た直後の「ね」って何?

日本語の発音じゃなかったよ? (笑)』

「何でもねーよ(笑) 晴華……ありがとな……」

『じゃ、もう大丈夫みたいね?』

あたしは また、寝るから〜。

じゃ、お休み〜♪』

ピッ……

「……お前は寝るんかい?」

夢だったか…久しぶりだな、あの時の夢を視るのは…
ベッドから起き上がる響。

「さて…と、それじゃ行くか！」

流石に2日連チャンで遅刻はマズいよな…」

編入の時間

ギリシヤ人である蟹座の黄金聖闘士アセルスは、聖域での冥闘士との戦いで、9年の生涯を閉じた。

そして、その記憶を宿した儘、日本のごく普通の家庭、吉良家の次男、響として生まれ変わった。

前世の殆どを修行と戦いの日々だけで過ごした彼にとっては、この平和な、平和過ぎる環境に、若干の戸惑いの色を見せながらも、子供らしく、色んな遊びにスポーツやゲーム、コミック、そして勉強と、聖闘士としては決して触れる事がなかった様々な事柄に触れながら、自身が前の「生」を終わらせた、9歳にまで成長した。

勿論、今の生活に不安がない訳ではなかった。

何故、自分は今、この時この場に記憶と小宇宙^{コスモ}を宿した儘に生まれ変わったのか？

冥王軍との戦いは、どうなったのか？

自分以外にも、生まれ変わった聖闘士はいないのか？

…考え始めたらキリがなかった。

記憶と小宇宙を持った儘で生まれ変わったのは、女神^{アテナ}に何らかの考えがある物と無理

に納得した。

冥王軍との聖戦は、今の平和な世界から考え、自分達の勝利と違って良しとした。

だが、何よりも不安なのは、今の地上からは、誰一人として、他人の小宇宙を 僅かですら感じる事が出来ないという事だった。

そう、聖闘士、海闘士、冥闘士を始め、他の神々や勢力の闘士や眷族の気配が何一つとして感じられない。

5歳の頃、一度だけ、自身の小宇宙を最大限にまで燃焼させてみた事もあった。

小宇宙を身に宿す者なら、これで自分の存在に気づき、味方であれ敵であれ、何らかの接触がある筈との考えだった。

しかし、結果から言えば、誰一人として、聖闘士としての響の存在に気づき、近づく者は現れなかった。

小学生になった頃から、家族に子供として不気味に思われない程度に、さり気なく新聞やニュースを観て、世界の情報に目を向けていたが、聖域を含む、所謂「裏」の存在の確認は出来なかった。

そして9歳のある日、何気なく父親のパソコンで「聖闘士」という単語を検索してみると、今の自分が生まれる前に、週刊漫画誌に連載されていたという、1つのコミック作品を見つける。

既に連載終了してから、かなりの年月が経っているにも拘わらず、未だに根強い人気を博し、多くの外伝、スピノフ等の派生作品が出ている事も知った。

学校が休みのある日、ブツ〇オフに足を運んでみると、件のコミックを見つけたので、響は その場で本を手に取り読み始める。

もしも作品として面白かったら、後日、親から小遣いを貰って買うのもアリかなとか考えていた。

はは：聖域の設定、結構そのままじゃん。もしかしたら、作者も僕と同じ転生者じゃないのかな？

いやいやいや、聖闘士同士が戦ったらダメっしょ？

てゆーかフェニックスが、こんな堅物な訳がないし。

：等と苦笑失笑しながらもページを進めて行き、そして蟹座の聖闘士に対する扱いの余りの ぞんざいさに9歳の少年は、今の世に新たに生を受けて以来、最高にorzだったのであった。

そして響は1つの仮説を立てた。

聖域を始めとする、一般人的に見た上で、所謂「裏」の存在が全く確認出来ないこの

世界：自分が前に生を受けた世界とは似て非なる、俗に言う所のパラレルワールド、並行世界というヤツではないか？…と。

▼▼▼

そして中学2年生の3月、父親の仕事の都合で某県から東京に引っ越し、現地で名門と謳われる私立中学校に編入する…。

「えーと、今、先生が言われた通り、某県から来た吉良です。

よろしくお願ひしまーす。」

担任教師に紹介された後、教室内の皆が注目する中、僅かに軽く？挨拶する響。

「あー、吉良の席は後ろの空いた机だ。

浅野、休み時間にでも彼に、この学校について色々教えてやってくれ。」

「はい、分かりました。」

担任が教室後方の誰も座っていない机を指差し、その後にはクラス委員だろうか？1人の生徒に指示を促す。

そして名指しされた生徒は、それに対して了解の意を示した。

▼▼▼

「E組？」

「ああ、あそこに行きたくないなら、成績は勿論、素行にもだね…」

1時限目の終了後、響はクラス委員である浅野（他4名）から、特別強化クラス、E組について説明を受けたのだが…

「くだらねー。」

「え？」

「聞こえなかったか？」

「くだらねーって言った。」

「おいコラ、くだらねーって、一体どういう意味だ？」

響の言葉に、やや目つきが悪く、唇が若干厚い男子生徒が喧嘩腰に噛み付てきた。

「言わなきや解らねーか？」

そういう下がいなきや、しかも その為だけに わざわざ造られた様な存在に依存しなくちや自分を保てないってさ、それって くだらなくね？

そういう人間をディスって、俺凄えーて、悦に浸って満足する訳？

うっわー、このエリート、小っさー。

昨日までは外の人間として言うぜ？

最初（ハナ）から内からでしか見てないから気づいてないかもしれんがな、お前等、

カッコ悪いってか、カッコワライ（笑）…だぜ？」

…響からすれば、学力が低い者を1つのクラスに纏め、集中的に教鞭を取るのとは別に

構わない。

それはアリと言えばアリかも知れない。

しかしながら、最初から他者の当て馬目的で設ける、というのは理解出来なかった。

そして、その制度に疑う事なく、件の教室

の生徒達を蔑む輩も同様だった。

前世が前世だけに、しかも当時の記憶を　その儘に持ち合わせ生まれ育ち、良くも悪くも内面は正義の聖闘士な響にとつては、このシステムは少なくとも正しくは見えなかった。

「んだとコラ!？」

「転校早々その態度はどうかと思うよ?」

「少し生意気だぞ!」

「どうなつても知らないぞお?」

「止めろ。」

「「「……………。」」」

浅野の一声でピシヤリと黙る取り巻き達。

「…吉良君、キミが　この櫛ヶ丘に編入生として入れたという事は、それなりの学力があるという事だ。」

「だからこそ、この学校のシステムは素直に受け入れた方がキミの為にも……」
 「あー、はいはい。」

別にお前等と事を構えるつもりはないよ。

勉強サボって成績落とすつもりも、何かしら問題起こすつもりもない。

これでオケ？

それとも、それを強いる権利がお前等にあるとでも言う訳？」

「………!!」



「お前、いい加減にしろ！」

「えー、なにがー（棒）」

転向初日からクラスの頭とでも言うべき、浅野他4名：通称五英傑と呼ばれる面々と軽くぶつかったからか、響は事ある毎に彼等と、特にE組絡みで衝突していた。

響的には、特に『目つきが悪いタラコ』と『まんま狂科学者みたいなワカメ眼鏡』がウザく感じていた。（響イメージ）

今日も彼等がE組について蔑んだ会話してるのを、まるで可哀想な者を見る様な目をしていただけなのに。（響：談）

「気に入らないなら、手え出したら？」

正当防衛成立と同時に瞬殺してやるから。

あ、怖い？ 悪い悪い、ビビらせちゃって、ごめんねー（棒）」

「んだとコラあ!!？」

「止めないか……！」

「浅野……」

タラコ……瀬尾を制する浅野。

「吉良、お前もだ。」

必要以上に挑発するのは止めておけ。」

「はあ？ 俺は何もしてないぜ？」

いつもコイツ等の方から、正体不明意味不明の因縁つけてくるんだけどな？

例外なく100パー……な？

浅野、お前もコイツ等の保護者なら その辺り、手綱しつかり握って言う事よく利かせてくれよ。

お前の言う事なら、きちんと聞くんだろ？

『わおーん、御主人様ー！』ってな？！』

「……テメエっ!」

「よ、止せ! 瀬尾!」

バキイ!

五英傑の1人、榊原が止めに入るが、それよりも早く、瀬尾の拳が響の左頬を打ち抜いた。

ガターン!

それにより、椅子から転げ落ちる響。

「「「キヤーツ!」」」

その教室内の異変に女生徒達が悲鳴を上げる。

「はっ……俺は……」

「すまない、吉良、大丈夫か?」

スク……

「……………」

冷静になった瀬尾が声を掛け、何事もなかったかの様に無言で立ち上がった響は、制服に付いた埃をササッと手で払うと、ゆっくりと瀬尾の前に歩み寄り、

ドゴツ!

「うう……」

強烈な右拳を鳩尾に放ち、更には
バゴオ！

首相撲から顔面に膝蹴りを見舞い、

バチバチバチバチバチイ！！

左右の拳の連打を体中に浴びせていった。

「止めろ！やり過ぎだ！」

…ぶうん！

五英傑の一人、荒木が止めに入るが、次の瞬間、響の拳が彼の顔目掛けて放たれ、そしてそれは、寸止め等という生易しい距離でなく、顔面直撃直前、ミ単位でピタリと止まる。

「ヒイツ…」

「次は止めんぞ？」

腰から倒れ落ち、尻餅を搗いた荒木を一睨みすると、視線を既に床にうつ伏せに倒れている瀬尾の方に向け直し、襟首を掴んで無理矢理に引き起こす。

そして、頭部目掛けて拳を振りきろうとした瞬間…

ガシイ…

「もう、止めておけ…！」

浅野が響の手首を掴んで止めたのだった。

「浅野…邪魔するなら、お前も討つぞ？」

「もう、いいだろ？ やり過ぎだ！」

「身に懸かる火の粉は…」

「何？」

「身に懸かる火の粉は、少しばかり手で振り払う程度では、また舞い戻ってくる…」

だからこそ、再び戻つて来ない様に彼方まで吹き飛ばすか、二度と舞わない様に完全に滅却しておく必要がある。…違うか？」

「確かに、お前の言う事は間違つてないかも知れん…」

だが、この瀬尾は既に、そのレベルまで達している！

それでもまだ、どうしても納得いかないと言うのなら、この僕を殴れ！

「発だけなら、甘んじて受けてやる！」

「バキイ！」

その台詞を言い終えた瞬間、響の迷い無き裏拳が唸りを上げ、浅野は机や椅子を倒しながら吹き飛ばされた。

「「「キヤーキヤーッ!?!」」」

更に大きくなる女生徒達の悲鳴の中、響はガタガタと震える瀬尾の前に立ち、

「今日は浅野の『漢』に免じて、これで退いてやる。次は…解るよな?」

響の言葉に瀬尾が、怯えた顔でカクカクと無言で首を縦に振った。その時、

ガラガラ…

「お前等、やかましいぞ! 静かにしろ!

…つて、何をやっているか、貴様等…?!」

教室に入ってきたのは、このクラスの担任の大野だった。

▼▼

「E組…ですか?」

いやいや、自分を弁護する気は無いですけど、先に手を出したのは、瀬尾なんですけ

どねえ?

色んな意味で。

奴には何のペナルティも無い訳ですか?

…てゆーか、理事長先生、自分の息子が殴られたからって、私情挟んでキレてないですか?」

今、理事長室には柵ヶ丘学園の理事長である浅野學峯、2—A担任教師の大野、そして吉良響の3人がいる。

「吉良あ! 貴様、誰に向かって物を喋っているんだ?!」

その口の利き方は何だ？」

「反省してまーす。チツ、ウツセーナ…」

「まあまあ、大野先生…。」

響の全く悪びれてない態度に、担任の大野が怒鳴り散らすのが、理事長である浅野學峯がそれを窘める。

「吉良、瀬尾は常に、試験で学年5位以内に入る優秀な生徒だぞ！」

そんな生徒を痛めつけるオマエが悪いに決まってるだろう？」

「うっわ！成績が良きや、やりたい放題かよ、このガツコ？」

「だいたい俺、期末が終わった後に編入してんだぜ？」

「期末テスト受けてりや、瀬尾より上だったかも知れないぜ？」

「ふん、そこまで言うなら、3年最初の中間試験で瀬尾より上位になってみる！」

その時はA組に復学させてやる！」

「…で、瀬尾には改めて、今回のペナ与える訳ね？」

「ああ、良いだろう！」

「で、それだけ？」

「あ？どういう意味だ？」

「その場合、俺は不当にE組み行きにされていた事になるんですよ？」

その賠償みたいなのを学校が俺個人に差し出すべきじゃないですか？」

「貴様……」

「良いでしょう。」

その点は、その時が来たら、また話し合いましょう。」

「り、理事長……」

ここで、ずっと沈黙し続けていた浅野學峯が口を開いた。

「吉良君、仮に その時が来たら、具体的に君は何を望むつもりかい？」

「……その時までには考えておきますよ。」

時間はたっぷりありますから。」

「ふむ。では、とりあえず君は明日から、E組に組替えて良いんだね？」

「まあ、最初に言った通り、自分のやらかした事を弁解する気は無いですから。」

それよりも、次の中間の結果如何で、俺のA組復学と不当降格の賠償、それと瀬尾の

ペナルティ、忘れないで下さいよ？」

「分かった、約束しよう。」

それで良いですね、大野先生？」

「は、はあ。理事長が そう言われるなら、その様に……」

「言質は取りましたよ？」

では、失礼します…。」

響は理事長室を退室した。

▼▼▼

明日から特別強化クラス、E組に編入が決定した響は、今の教室にある自分の荷物を纏めていた。

響以外は誰もいない教室、そこに一人の生徒が現れた。

「吉良…」

「浅野か…」

「吉良、すまない、僕は…」

『パパ、殴られたよー！パパにも殴られた事ないのに！（泣）』って学校の最高権利者に泣きついたんだよな？

まあ、退学クビにならなかつただけラッキーと思つてやるよ。じゃあな…。」

そう言い放ち、荷物を纏めた響は教室を出て行った。

「ま、待て、吉良、僕は…」

理事長の息子、浅野学秀の呼び掛けは、既に響には聞こえず、振り向かず応じる事なく、響は校舎を後にした。

▼▼▼

吉良響、3月〇日付けで2年A組からE組に編入が決定。
∴その夜、響は両親からこっぴどく説教されたのであった。

編入の時間②

「…まあ、色々とあつて、E組に編入になった吉良です。

よろしくお願ひしまーす。」

「」「」「……」「」「」

無反応、ね…と。

前日、元・クラスメートの2人に対する暴力沙汰で特別強化クラス・E組に編入させられた響は、担任の紹介の後、デフォルト的な挨拶をしたが、誰も何の反応を示さなかった。

威嚇するかの様に睨みつけている数人の男子生徒以外は、何か目の前に怖いモノが在るかの様に視線を逸らしていた。

少し前に、他県からの転校生が本校舎に来たのは皆が知っていた。

そんな転校生が今更、しかも前振りも無しに、成績不振が原因でE組に再編入なんて有り得ない。

考えられるのは不祥事…しかも、かなりの大事をしかしたという事。

転校生という事が、更にイメージを勝手に凶悪化させる。

クラスの大半である大人しい生徒達は睨んでもない蛇に対し、勝手に硬直している蛙の様だった。

「…じゃ、じゃあ吉良君は、後の櫻瀬さんの隣の…」

ビツクウツ！

E組担任の女性教師、雪村あぐりの口から自分の名前が出た瞬間、その女生徒は肩を飛び上がらさせる程に驚いた。

確かに自分の隣の席は空席だから、彼が自分の隣に座る可能性が高いのは予想していた…それでもだ。

「…席に座ってね。」

「…つす。」

雪村あぐりの言葉に軽く頷くと響は指定された席に着き、隣の席に座っている女生徒

…櫻瀬園美に

「よろしく。」

軽く笑いながら挨拶した。

「え？」

所謂ニコポ効果とは少し違うが、その笑顔は少女が想像していたキャラクターとは対極なそれであり、少なくとも彼女の、響に対する警戒心恐怖心は多少なり薄らいだ。



「…それじゃあ吉良君、この問い、やってみて？」

「え、っ？また俺すか？」

編入生の業（ごう）なのか、その日の1時限目の授業は響が集中的に、あぐりから問題を当てられたのであった。

そして1時限目終了後の10分間の休憩時間、数人の男女の生徒が響の席にやってきた。

「えーと、吉良…君？」

「吉良でいいよ。」

少し怯えて、慣れない君付けで名前を呼ぼうとする、やや長身で頭頂部に触角？の様な癖毛のある男子生徒に、響は明るく呼び捨てで良いと話す。

そして、

「あのさ、必要以上にビビるの止めてくれたら嬉しいんだけど？」

確かに察しの通り、俺は暴力沙汰でE組に来た訳だけど、普段からバイオレンスバイオレンスな性格な訳じゃないんだぜ？

なあ、櫻瀬さん？」

「へ？き、急に振らないでよ！

てか、今日会ったばかりの吉良君の性格って、まだ知らないし！」

響の不意な振りに慌てる櫻瀬。

「おろ？もうソノちゃんとは打ち解けた？」

「ここでボブカットの少女が口を開けると

「着席早々、ニコポで墮とした。」

「いや、落ちてないし！」

響の台詞を必死に否定する櫻瀬。

「成る程、これがフラグか……！」

「違うー！」

ボブカットの少女、不破優月と櫻瀬園美の漫才の如きやり取りで場が和んだのか、響の席にやってきた生徒や、最初から周りの席にいた生徒達が自然と集まり、色々と会話が弾んでいった。

キーンコーンカーンコーン……

ガラガラガラ……

「はいはい、編入生弄るの終わり、授業始めるわよー。さあ、早く席に着くー！」

「……はい……」

チャイムと同時に教室の扉が開き、担任の雪村あぐりの登場と共に、響を中心とした

トークタイムは一時中断した。

その後も授業が終わる度に、教室内の生徒が響の席の前に集まり、語り合っていく。次第に響も慣れてきたのか、既に皆が普段からそうしているのか、小柄で水色の長い髪をした少年を逆に弄る仕草をとり、クラスメートからの笑いを誘ったり。

編入初日で、今の時点で教室にいる生徒達とは、約4人の男女を除けば、殆ど完全に打ち解けた感じだった。



その日の放課後、本校舎の理事長室には、2人の浅野がいた。

「浅野君、昨日の件が早速、本校舎の生徒の間でも噂になっているみたいだね？」

理事長の息子がパパに泣きついて、自分を殴った生徒をE組に追放したと…。」

「何が言いたいんですか？理事長先生？」

「いや、別に私が職権乱用したイメージを持たれるのは構わないよ。」

今回の件も、例えば彼が君に手を出してなく

ても、E組行きは免れなかったろうからね。

更に聞いた限りの話では、君は自ら、彼に自分を殴る様に言ったらしいね？

それで彼はE組行き…。」

瀬尾君の件より、彼が本校舎から去って行ったのは、全て彼と君との件が原因と思っ

ている生徒の方が多いいのではないかい？」

今居る場所が校内だからなのか、それとも普段から家庭内でも深い溝があるのか、実の親子でありながら、あくまでも教育者と生徒として会話する2人。

「だが、君は、それで良いのかい？」

普段は何でもアリな様で、いざとなれば、理事長である父親に負んぶに抱つことというイメージを定着させる気かい？」

「吉良とは いずれ、何らかの形で決着を付けてみせます。」

「ほう……いずれ？何らか？……ねえ？」

今この場で、具体的な日時や内容を言えない君に、それが出来るとは思えないよ？」

「……………!!!」

「それに君は、彼がE組に行った事に対して負い目を感じている…違うかい？」

そんな君が、彼に何かしらで勝てるとは思えない。

それこそ、私が影で権力を乱用してサポートしない限りはね？

まあ、それなら それで、私は一向に構わないよ？

しかし その場合、例えそれが表沙汰にならなくても、君は親の威光に頼らないと何も出来ない御坊っちゃんという事が、私の前で証明されるけどね？」

「……………失礼します!!」

パタン…

浅野学秀が退室した後、理事長室に1人となった浅野學峯は呟く。

「君は解っているのかい？」

彼が如何に強者であれ、E組である限り、彼が勝利する事は、決して赦されないのだよ、浅野君。

そしてそれは、私の教育理念に反する…。

E組は、あくまでもENDでなくては駄目なのだよ。」



翌日。

「…つす。」

「あ、吉良君、おはよ。」

教室に入ると、既に席など着いていた櫻瀬に軽く挨拶して隣に座る響。

そこに

「おい、吉良…ちよつといいか？」

響に声を掛けてきたのは、大柄な男子生徒と、その後ろに2人の男子生徒。

「えーと…誰？」

「俺は寺坂だ。よろしくな。」

「村松だぜ。」

「吉田だ。」

各々の名前を名乗る男子生徒達。

「1つ聞くが、オメー、浅野と瀬尾の野郎を一方的にボコつてE組こに来たつて、本当か？」

「え？」

「な……？」

「え?!」

ざわざわざわざわ…

寺坂の質問に櫻瀬が驚く。

響がE組に来た理由が暴力沙汰なのは、本人が言っていたが、昨日の質問責めの時も、敢えて誰も触れなかった話題に空気を読まず、ドストレートに聞いてきた寺坂、いや、それ以上に、その寺坂の質問の中に出てきた名前に驚いた。

浅野と瀬尾…

同学年なら知らない者はいない、常に試験の成績上位者で、生徒会役員を勤めている面々。

特に浅野に至つては、理事長の嫡男としても有名過ぎる。

その2人を一方的にボコつた？

いやいや、いくら何でも、それは違うだろうと思っていた先の響の応えは

「いや、浅野はボコったってか、ワンパンだし、瀬尾も一方的って訳じゃない。」

「「「何ーーーー?!」」」」

響の周辺、寺坂とのやり取りを何気なく聞き耳を立てていた生徒達が、驚きの声を上げる。

同時に響の席に群がる生徒達。

「お前、アイツ等と何があつたんだよ?」

「てか、浅野を殴って、よく退学（クビ）にならずに済んだよな?」

「いや…まあ、その辺りは…あまり触れないで貰えたら、凄く嬉しいが…」

「おい、待てやコラ、コイツとは俺が話してたんだ、ちよつと引つ込んでろ。」

「寺坂…」

自分を無視して、響に質問責めしてきた級友を黙らせる寺坂。

そして

「なるほど、噂は本当だった訳か…。」

お前とは、なんだか仲良くなれそうな気がするぜ。」

威圧的な笑みを浮かべて右手を出す寺坂。

それに対する響の応えは

「いや……ごめん、多分、無理。」

「はあ?!」

……だった。

「悪いけど、多分、俺はお前等とは違う人種だから。」

ケンカ云々な話題で、そういう発想が出来る連中とは、そこまで仲良くなれないと思う。」

「んだと、コラー！」

響の歯に衣を着せぬ発言にキレる寺坂に

「止せ、寺坂！」

「止めなさいよ、寺坂君！」

「寺坂、落ち着け！」

「……少しのケンカの噂だけで自分と同類と決め込み、自分達に引き入れようとするなんて、サイテー。」

周囲の生徒が止めるが、

「るっせー、○”スー！」

最後の台詞が焼け木杭にガソリン投入なのは理解出来るが、おおよそ、女子に向かって言っただけはいけない単語を言い放ち、握手の為に出した右手でそのまま殴り掛かる寺

坂。

「「キヤーー！」」

ガシイ!

放たれた拳は、周りの誰もが、無防備だった響の顔面に直撃すると思われた瞬間、響の掌の中に収まっていた。

更に

「痛ててて、テメー、離しやがれ！」

掌で受け止めた拳を掴み、そのまま砕かんとばかりに力を込める響。

この前は、まさかと思つて全然警戒してなかったけどな……さてと、どうする？

……等と考えながら、後ろに立っている『村松と吉田の2人にのみ感じる、殺気を込めた視線』で牽制する。

「うう……」

これで2人は助けにも入れず、硬直してしまふ。

「痛いって！マジ離せよテメー！」

右手を封じてるだけで、傍目には必要以上に痛がつている寺坂を見かねたのか

「吉良君…もう、止めとこ?」

長い髪を髪止めで止めた、背の高い女生徒が、寺坂の拳を潰さんとしている響の手首に、そつと手を当て、止めに入る。

「片岡さん…OK、分かったよ…。」

響は この女子…片岡メグの言葉に寺坂の手を放すと、先の2人の時と同様に、『対象本人にしか感じとれない殺気』を器用に放ち、

「行つていいぜ…」

…と、掌をヒラヒラさせ、『あっち行け』のゼスチャーを取り、寺坂他2名を何やら定番的な棄て台詞を吐かせて退散させた。

「くつくつく…だから、あたしは止めただけどねえ…?」

「わっ!びつくりした?!」

直後、不意に後方から話し掛けられ、声の方向に首を回すと、何と言うか…黒いオラが似合いそうな女生徒が何時の間にか立っていた。

「えーと…(何時の間に背後に…この俺が全然、気付かなかった…このコ、何者?)」

「狭間でいいわよ…ゴメンね、アイツ等バカだから、あーゆー考え方しか出来ないの。でも、あんまり悪く思わないでね、アイツ等バカなだけで、根はバカだから。」

(((((バカバカって、いくらなんでも酷過ぎるよ、狭間さん!))))))

「くす……じゃあね……」

その場にいる全員の心の声を聞いてか聞かずか、意味深な笑みを浮かべて狭間綺羅々は去っていった。

このやり取りの結果、響はクラス全員と会話をした事になる。

因みに最後に響を止めた片岡に対し、

「流石はイケメグ、あたし達の出来ない事を平然とやってのける！」

「ちよ……ちよつと！」

……と、そこに痺れて憧れた女生徒が抱きつき、それを数人の男子生徒がニヤニヤしながら見つめていたのは、別の話。

終業式の間

3学期終業式が昼前に本校舎エリアの体育館で行われる、この日の朝の教室…

「これからホームルーム、んでもって、昼前から終業式かあ…」

なあ、今日くらい、朝から体育館でスタンバっても良くなくな？」

「まあな。」

それで式が終わったら、お開き…な。」

見た目はチャラ男、中身は もっとチャラ男な前原陽斗の呟きに響が同意する。

「でも、吉良君で、凄いやね。」

この山道なんかも、涼しい顔して普通に登ってるし。」

「そりゃ渚、鍛え方が違うよ。」

仮に女装させてみたら、クラスNo. 1美少女の称号を勝ち得りそうな草食系…もとい、既に絶食系男子の域に達している（響：談）潮田渚の発言に対しても、当然！と言わんばかりに言い放つ響。

「ん、吉良ってさ、何かやってたの？」

更に続く前原の質問に対し、

「一応、空手2段、柔道と合気道が初段、ついでに書道と算盤も初段だ。」
「凄っ！」

響の受け答えに、2人は素で驚いていた。

まあ、書道算盤は兎も角、空手とかは小宇宙全開すりや、1000段じゃ済まないだろうけどな。

「これでムエタイと柔術と中国拳法を習ってたら最強だったんだけどね？」

ここで隣のグループ内で会話していた女子生徒の1人が、何気に会話に乱入。

話題は変わり、

「春休みってさ、どうする？」

「俺は明日、早速 某県むしゅうに戻る。」

「んだよ、女か？」

前原の冗談じみた問い掛けに、

「ま、そんなトコだ。」

「」「」「えっ？」「」「」

ここで、一緒に会話していた前原と渚だけでなく、周囲でそれぞれのグループで話し

ていた男女が皆、喰い付いた。

「マジか？」

「おま、彼女いたのかよ？」

「どんな子どんな子？」

「スマホに写真収めてるんだろ？」

ちよつと見せてみる！

「ん！見たい見たい！」

気づけば寺坂組と呼ばれる4人と、下手に会話に参加して自分達に流れ弾が飛んでくるのを恐れている学級委員の2人以外、殆どが響の周りに集まっている。

特に前原、櫻瀬、そして自他認定、E組一のエロ大王・岡島大河と『一緒に渚を弄り友(笑)』の中村莉桜……この辺りがしつこく追求してくる。

「あー、分かったから！見せてやるよ！」

見せてやるから静まれ！

……てか、見て驚くなよ？特に前原と岡島！」

観念したのか、ズボンのポケットからスマホを取り出し、画像を開くと

「「「「「おお~~~~~」」」」」

「「「「「な、何だつてーっ！！！！」」」」」

教室内に様々な歓声が沸き起こった。

スマホ画面には、白に近い金色の、髪の毛の長い少女が微笑んでいる画像が映っていた。

「マジか!」

「「凄え!」」

「「嘘おーおー?!」」

やんややんやなE組。

中村の

「このコ、もしかしてハーフ?」

…という問い掛けに

「そうだな、彼女の親が日仏と日独でさ、

フランス1/4、ドイツ1/4、んで日本が1/2みたいな?」

…と応対する響。

「凄い!キャラの描き分けとか、ベタ塗るのが面倒いとかの言い訳とは違う、本物の金髪だ!」

「「「誰の事だよ?!」」」

そして

「吉良あ〜!」

尚、岡島と響角でだ。

これがバカ生徒やバカ親なら体罰とか言い出すだろうが、幸いにもE組には、そっち方向のバカはいなかった。

響達に、制裁を加えた後、何やら鼻歌混じりで穏やかな笑顔なあぐり。

それを女生徒に指摘され、僅かな動揺を見せる中、更に前原の「男がいる」発言のダメ押しでクラスに火が点き、所謂『はわわ』状態になるあぐり。

生徒達に弄られるも、気を取り直してホームルームを再会する。

その時また、ほんの一瞬、教室が静まり返るが、その後は何事もなく終了、終業式出席の為に下山を始める生徒達。

その途中、響は隣を歩いていた櫻瀬に何気なく聞いてみた。

「なあ、櫻瀬さん、アカバネってさ、一体どんな奴なの？」

「え？カルマ君？んとね〜」

▼▼▼

3学期終業式が本校舎エリアの体育館で終わり、山道を登って旧校舎の教室に戻って来たE組の面々。

「やっぱ俺等さ、あそこで お開きで良かったんじゃね？」

「…だよな。」

これで少し先生の話を聞いて、また下山だぜ？」

「1日3往ふk「言うな！余計に疲れる！」

ガラカラ：

「はいはい、席に着く！」

3学期、そして2年生最後のホームルーム始めるわよ。」

》》》

「じゃね〜先生〜♪」

「はい、さようなら♪」

ホームルーム終了後、手を振りながら挨拶する女生徒に笑顔で手を振り返す あぐり。

「じゃ、先生〜、俺等も帰るから。」

「んん。吉良君、先に言っとくけど、不純異性行為は駄目だからね！」

「な…っ?!いや、しねーから！」

~~~~~ (笑) ~~~~~

あぐりの不意打ちに動揺する響と、それを見て笑いを堪える岡島。

そんな岡島の後頭部を軽くペシッと平手打ちで叩きながら、

「で、先生は4月には名字変わるの〜?」

「な、な、な、な……」

強烈な言葉のカウンターの一撃を放つ響。

「き、吉良君！」

顔を真つ赤にしながら怒りだすあぐりに

「じゃ、先生、4月ね〜♪」

手を振りながら、逃げる様に響は走って行ったのだった。

「いや〜、あの先生、やっぱ面白いわ〜♪」

渚に次ぐ玩具だな（笑）。

授業も雪村先セのが解り易いし、A組復帰より、ずっとE組こっちに残るのがベターかもな

？」



その日の夜、月は、その姿を変えた…

## <br>1学期

### 考察の時間

「心、ここに在らず?」

「へ?」

「だつて響、さつきから ずっと外ばかり眺めてるから…」

「いや、だつて気になるだろ?あの月?」

春休みの初日、早速 始発に乗って某県しもとに戻ろうと、普段以上に早起きした響。

しかし、朝のテレビ番組で、「月の消失」のニュースを観て、慌てて玄関を靴も履かずに飛び出し、空を見上げると、確かに綺麗に形が整った三日月が見える。

その後は兄の部屋に飛び込み、ベッドで寝ている兄に断りもなく、机の上のノートパソコンを勝手に開いて時事サイトを片っ端から覗いてみたが、関連ニュースは全て、月の約7割が消滅したという結果だけで、その理由については東○ポレベルなゴシップ推論しか確認出来なかった。

尚、部屋を出る際に、目を覚ました兄から部屋への無断侵入並び、パソコンを勝手に使った制裁として頭突きをかまされ、両手で額をを押さえ もんどり打ったのは、別の

話。

そして予定より一本遅れの電車で地元駅に到着。

その場で待ち合わせていた恋人、早乙女晴華とのデートを楽しむ事に。

しかし、最初に晴華に連れて行かれた映画が、響の苦手としている恋愛物。

アクション映画大好きな響には物語を楽しむ発想には至れず、約2時間の上映時間の

中、再びあの月の事を考えていた。

神や魔族、及びその眷属の仕業ならば、その時に発生する力の源を関知出来た筈。

小宇宙<sup>コスモ</sup>や魔力、そしてpsychic的な力が働いた様な気配は感じなかった。

考えられるのは、自然のエネルギーが引き起こした災害か、科学的な何かの事故。

しかし、地殻変動等の自然的な力なら、それでもある程度は感じられる筈だし、月

を彼処まで破壊する程の科学力なんて、想像が出来ない。

少なくとも響には、月面にあれほどの被害を及ぼせる様な科学的設備が存在する等、考えつきはしなかった。

結局は考えが纏まらない儘、退屈な恋愛映画はエンディングに突入。

その後、少し遅れた昼食を取ろうと、某有名ハンバーガーショップに。

カウンタで注文した後に窓際の席に座った後、ずっと月を眺めていた結果、冒頭の会話に繋がる。

「いやいやいや、確かに気になるけどっ！」

中学生が気にした所で、何の解決もしないから！」

そりやそーだ…：そう思いながら、響は口を大きく開いてピツ○マツクを頬張り、その後はシヨツピングやゲーセンで時を過ごし、そして最後に、2人は最初に待ち合わせてしていた駅に着く。

「次に会うのは5<sup>ゴールデン・ウィーク</sup>月だな。」

「その時は あたしが そっちに行くよ。」

なんなら、雲仙ちゃんや白鳥君も連れて来ようか？」

「うーん、迷うな…」

2人きりも好いけど、久々にアイツ等とも直に会ってバカ話したいし…」

「もう、本音は兎も角、そこは『1人で来い』って言う所でしょ！」

「へいへい…」

そんな やり取りをしていると、ホームの彼方に響が乗る電車が見えてきた。

「あ、そうそう…」

「んっ？」

「あたし来年、櫛ヶ丘を受けるから。」

「……………お、おう……」

…晴華？」

「ん？」

電車がホームに停まる直前、周囲の全ての視線が自分達から外れ、電車に集中した僅かな瞬間、響はほんの少しだけ、爪先立ちをして、晴華の額に自分の唇を当てる。

「@@☆※\$√∞∫#ℵ??∩∩?!」

程が有り過ぎる不意打ちに、瞬間湯沸かし器な如く、顔が真っ赤になった晴華を見て笑いながら、

「…じゃな。」

響は電車に乗り込んだ。

「……………。」

その電車が走り去った後、

「そこは口だろ?どあほう……」

彼女の眩きに対し、『本人の前で言わないと、意味は無いぞ』とツツコミを入れる者は、そこには居なかった。



時は4月に。

「よお吉良。」

「……つす。」

新学期初日、校舎目指して山を登っている響に声を掛けたのは、前原とE組クラス委員の磯貝悠馬。

3人で歩きながら話題になるのは、やはり春休み初日の響のデートの話……ではなく、例の爆発して7割方が蒸発した月の話。

「この先の地球への影響なんかも、専門家の間で意見が割れてるらしいぜ?」  
「……てか、爆発とやらの原因で、何だよ?」

まずは　そこからだろ?」

「きつと、ピッ○口が破壊したんだよ!」

「!!」

……後ろから　いきなり会話に加わる女子。

E組で　こういつた発言をするのは、完全な断定は出来ない?……かも知れないが、とりあえず最初に頭に浮かぶのは、ただ1人。

「或いは、黒○め○か(笑)。」

3人が振り向くと、そこに居たのは、やはりの不破優月だった。



彼女からすれば、あの発言は御約束みたいな物で、その後は4人で真面目に色々とお話でもない、こーでもないと話をする内に校舎に辿り着いた。

そして、その時、

「銀河帝国のデ○・スター。」

「「それだ（笑）！」「」

最後に持つて行ったのは響だった。



「机…減ってるな…」

「そうだな…」

教室に入ると、3月末、2年生の終わりには40台近くあった机と椅子が、約30台に減っていた。

3年に進学と同時に櫛ヶ丘を中退して、地元公立校に行った生徒が約10人。E組の待遇を考えてみれば、その様な選択をする者が居ても不思議はない。

「…って、あれ？」

「ん？」

そんな中、逆に見慣れない生徒が2人程。

1人は、恐らくは、かなり長いであろう、水色の髪を頭の後方でツイントールに纏め

た女子…

「「な、な、な、渚あああ？」」

…でなく、潮田渚だった。

そして、

「えーと、君は…」

「今日から一緒のクラスになった、茅野カエデだよ、よろしくね。」

今の渚と お揃いな如く、長い髪の一部をツインテールに結った、かなり小柄な…茅野カエデと名乗った少女、此方は真正正銘の女子生徒だった。

「あ、俺、前原陽斗、よろしくな！」

前原が真っ先に名乗り出て、その後も

「磯貝だ。よろしくね、茅野さん。」

磯貝も続き、

「俺は吉良。よろしく。」

…で、渚、お前、何があった（笑）？」

響からすれば、茅野より渚の方が気になるらしい。

「い、いや…気づけば…何時の間にか…この茅野…さんに…」

「茅野で良いよ♪」

その後も

「お？ 渚あ〜！ 似合うじゃん♪」

「似合ってますね。」

「す、凄く似合ってますう。」

「渚君、可愛い〜！」

「E組<sup>ウチ</sup>の渚が、こんなに可愛いわけがない（笑）。」

「……カ、カワイイ……」

「う……似合い過ぎてる……」

「俺はノーマルだ、俺はノーマルだ、

（中略）

俺はノーマルだ、俺はノーマルだ……

俺はエロであるが、断じて○モじやあないんだ……」

概ね評判は良好だ。

何やら一部の女子生徒がorzったり、男子生徒が1人、別の道に堕ちそうになるも、自力で踏み留まったりとあった様だが、結果、渚のツインデビューは成功した。

「……………」

そして、その影で、編入生として普通なら注目を浴びても不思議ではない茅野は、殆

ど空気となっていた。

》》》

「へく、理事長室でえ…」

茅野が新学期の編入早々でE組となったのは、春休みの合間に編入手続きをしていた際、理事長室で ちよつとしたトラブルがあったからだと言う。

「俺は てつきり誰かさんみたく、血祭りの事件をやらかしたからと、内心ビビってたよ、なあ、吉良？」

「をいつ?!」

前原の発言にツッコむ響だが、

「え、？吉良君で、もしかして怖い人なの？」

茅野は涙目になり、渚の後ろに隠れてガタガタ震えてしまう。

「いや、誤解だから！」

フルボッコにはしたけど、血祭りなんかには上げてないから！」

「吉良君…フォローになつてないよ…」

最終的には、機員が上手くフォローしてくれて、誤解？は解かれた。

「ありがとう機員、やっぱり お前はイケメンだ！」

》》》

キーンコーンカーンコーン…

「おい、チャイム鳴ったぜ、皆、先生が来る前に席に着けよ。

また出席簿で叩かれるぜ？」

「やかましいわっ！」

イケメンクラス委員、磯貝の呼び掛けで皆が席に着く。

ガラ…

やがて教室の扉が開き、

「起立…？」

中に入ってきたのはE組担任の雪村めぐりでなく、黒いスーツを着込んだ鋭い目つきの男だった。

## キレル時間

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわ……

ざわつく教室内。

それも その筈、教室の扉が開き、担任の雪村あぐりが入ってくるとばかり思い込み、半ば条件反射でクラス委員の磯貝が「起立」と号令を掛け、それに習い、皆も席から立ち上がったのだが、入ってきたのは見知らぬ4人の黒スーツの男女。

「……知らない人間が、いきなり入ってきて、皆が驚くのは無理は無いが、とりあえず、静かにして聞いてほしい。」

この教室の新しい担任を紹介する。」

恐らくはリーダーであるう、目つきの鋭い男が生徒達に話し掛けた。

「……………はあ??」

それを聞き、クラス全員がハモる。

それもそうだ。

2年の時の担任だった雪村あぐりからは何の連絡もない。

仮に急な事情で退職するにしても、あの几帳面な担任なら、クラス全員に直接電話でなり、少なくともメールで知らせるなりする筈だ。

生徒達が そんな風に考えてる中、

「おい、入ってこい！」

廊下で待機していたのだろう、新しい担任という人物を教室内に呼び出した。

「ヌルフ…失礼します。」

そして入ってきたのは、式服に学士帽、胸には まさに現状の月を彷彿させる三日月の刺繍が施された幅の広いネクタイを巻いた、やたらとニヤけた顔付きの黄色いタコ？

…だった。

カチャ…

黒スーツの1人、眼鏡を掛けた、大柄な男が そのタコに銃を向ける。

普通なら、銃を取り出しただけで、一般人なら多少なり、パニックになっても おかしくないのだが、目の前のタコのインパクトが強過ぎて、銃なんかどうでもよい感じだった。

そんな銃に感心を向ける事なく、タコが口を開いた。

「ヌルフフフフ…

皆さん、初めまして。

私が月を爆<sup>や</sup>つた犯人です。

来年には地球も爆<sup>や</sup>る予定です。

今日から君達の担任になったので、どうぞよろしく。」

(((((.....))))))

生徒達の目が点になり、教室内はまるで、時が止まったかの如く沈黙に包まれる。

そんな中、

「自己紹介させてもらおう。

私は防衛省の烏間という者だ。」

烏間と名乗った目つきの鋭い黒スーツの男が、これからの話は国家機密だという事を前置きしてから話を始めた。

「単刀直入に言う。

この怪物を君達に殺して欲しい!!」

(((((.....))))))

まるで鳩がBB弾を喰らった様な顔になるE組の生徒達。

その後の説明を簡潔に纏めてみると：

①月を破壊した このタコは来年3月に地球も破壊しようとしている。



②この事を知っているのは各国首脳のみ。

③この事が公になり、世界がパニックになる前に、このタコを秘密裏に殺す行動を開始している。…即ち暗殺！

④そして成功報酬は百億円！

…その説明をしながら、常人とは思えないナイフ捌きでタコに切りかかる烏間。

しかし、そのタコは更に常識の範疇を超えるスピードで躲しながら、自身を切りつけている男の眉毛を丁寧に入れている。

そのMAXスピード、曰わくマツハ20！

このタコが本気で逃げ出せば、簡単に地球終了のお知らせがやつくと言う。

そして烏間の説明を補足する様にタコが話し始めた。

「ま、それでは面白くないのでね、私から国に提案したのです。

殺されるのは御免ですが…この櫛ヶ丘中学校3年E組の担任なら やってほしいと。」

とりあえず、5〜60、突っ込ませろ！

クラスの皆がと心の中で1つとなりツッコんだが、最後には成功報酬100億円という甘い言葉に釣られ、理解納得いかない内に、この生物タコにのみ、ダメージを与えられるという素材で出来たナイフとBB弾、そして各種エアガン一式が生徒達に支給された。こうして防衛省の鳥間、そしてこのタコの説明が一時終わり、E組の面々は本校舎エリア体育館で行われる始業式の為に下山し始める。



始業式、教諭達が並ぶ列に雪村あぐりの姿はなかった。



「どー思う? 吉良君?」

「俺に聞くな、渚。」

始業式が終わり、山の上の旧校舎に戻る途中、響は潮田渚からあのタコについて話を振られた。

…が、響からしても、あのタコのような生物は、あらゆる意味で理解不能だった。

月を破壊した?

どうやって？

仮にも生物が何らかの力を使って行使したのなら、月を彼処まで破壊する。そのパワーやエネルギー、地球にいても感知出来た筈だ。

つまり、月の破壊がこのタコの仕業というのが本当か嘘か、とりあえずそこが判らない。

E組の担任になる？

何故？

そのメリットが想像出来ない。

強いて言うなら、給料を貰える事くらいしか浮かばない。

来春、地球を破壊？

これも何故？…と同時に、それが本気かどうかとも判らない。

見た目はアレだが、聖闘士としての自分の目から見ても、悪意は感じられなかった。

MAXスピードマッハ20程度なら、あのタコ特効ナイフとやらで、小宇宙<sup>コスモ</sup>全開で切りつけば、それで終わらせられる。

そういう訳で、響の出した結論は、とりあえず様子見だった。

「吉良…君？」

「あ…悪い、何でもないよ。」



教室内に飛び交うBB弾。

タコを仕留めようとする生徒達のエアガンから放たれる弾幕の嵐。

それでもタコには一切当たらない。

「又ルツフフフフフフフフ…」

残念でしたね、さあ、弾を片付けたら授業を始めますよ。」

「ちっ…」

数人が舌打ちしながら、生徒達は箒を手にして床に散らばったBB弾を片付けていく。



「…つまり、この場合はですねえ…」

タコが教鞭を取る授業…

これは意外にも、分かり易かった。

少なくとも、前担任の雪村あぐりより、イコール学年主任の大野如きより、教諭としては有能と評価しても良いと響は感じていた。

因みに響評は



「もう出来ましたか？ 渚君。」

この時、渚より後ろの席に座っている生徒達は気付いた。

渚が御題の書かれた短冊の裏に、対タコナイフを忍ばせているのを。

渚、殺る気か!!

クラスメートが注目する中、タコに近づいた渚は隠していたナイフで切りつけるが、

タコは あつさり看破、渚の手首を掴まんでナイフを止める。

そして、次の瞬間：

バアアアン!!!

爆発音と共にB B弾が教室に散布された。

その場に倒れ込む渚。

「渚?!!」

響が思わず席を立ち上がると同時に

「ツしゃあ、やったぜ!!」

100億いただきイ!!」

ざわめきと女子生徒達の悲鳴の中、寺坂、吉田、村松の3人が舞い上がりながら教室の前に走り出る。

「ギョーマア!!まさかコイツも自爆テロは予想してなかったろ!!」

喜々乱舞の寺坂達。

「ちよつと寺坂！渚に何を持たせたのよ?!」

敵しい表情の茅野の質問に寺坂は対タコBB弾を詰めた強力な手榴弾を渚に忍ばせたと言う。

更に笑いながら、

「人間が死ぬ威力じゃねーよ。

俺の100億で治療費ぐらい払ってやら（バキイ！）ああら?!」

言い終わる前に吹っ飛ばされる寺坂。

ドゴツ！グガツ！

「うげっ！」

「ぐえっ！」

そして吉田と村松も続いて吹っ飛ばされる。

やったのは吉良響。

「何、巫山戯た真似してるんだ、お前?」

ダウンしている寺坂の胸ぐらを掴み、無理矢理に起こすと、

ドンツ！バチツ！バキイ！

顔、体、問わずに左右の拳や蹴りを打ち込んでいく。

壁に貼り付け状態になった寺坂は、倒れる事を許されず、滅多打ちにされ続ける。

「ハッ？マズいぞ あバカの吉良、完全にキレてる!?皆でアイツを抑えるぞ！」

女子は後ろに下がって！」

此処で漸く冷静になった磯貝が、男子生徒達に響を止める様に指示。

2人の間に前原と木村が割って入り、磯貝と三村が響を後ろから腕を抑え様とするが、それでも響の腕は止まろうとしない。

「吉良、いい加減にしろ！」

ドガッ！

そして前原の拳が響の頬を打ち抜く。

「……………」

それから数秒の沈黙の後、

「済まない、もう大丈夫だ。」

冷静さを取り戻した響が、そこに居た。

「そういうえば、渚と あタコは？」

クラス中の誰もが響と寺坂の乱闘に注目し、視界から外れていた、或いは完全に忘れられていた渚に目を向けると、

「う……………」



何やら妙な半透明の膜に被われて倒れ込んでいた。

「何だ、こりゃ？」

「無傷か？」

「あの爆発で、火傷一つ無しか……」

「ふう……良かったと言うべきか？」

「間違いない、あのタコの仕業だろうが、あのタコ、何処に行ったんだ？」

ふと教室全体を見渡してみても、タコの姿は何処にもない。

「ま、今は あんなタコなんて、どこでもいいし。」

そう言い放つと、響は渚を被っている膜をビリビリと破つて、引っ張り出すと、

「渚！大丈夫か？」

「吉良君？ん……大丈夫……みたい……」

渚の無事を確認し、

「そうか、そりゃ良かった……」

パチイン……

「吉良……君？」

その頬を張った。

「吉良！」

磯貝が咎めるが、響は それを無視。

渚の胸元を掴み、

「渚、お前もだ。テメーの命、安く見てんじやねーぞ？」

「吉良君……」

再び静まり返る教室。

「ん……吉良君……ゴメンね……」

涙を堪えて下を向く渚。

そんな渚の頭を軽くポンと叩き、

「ま、分かりや良いんだよ。」

……だろ、前原あ？」

闇を秘めた笑顔で前原の方に振り向く響。

「ま、待て、吉良、殴ったのは悪かった！」

穏便に話し合おう！」

生命的危険を察し、必死に謝る前原に

「いや、あの場合は、お前が正しいよ。」

俺が あの程度を根に持つ様に見えるか？」

……と事も無げに言う響。

「そーだな、そーだよな！ふう…」

…と前原が安堵の溜め息を吐いた瞬間、

ガキイツ！

響が前原をヘッドロックに捉え、頭を拳でグリグリしだす。

「痛ててててて！吉良、痛いって！」

「前原ー、お前さつき、吉良と書いて『バカ』と読んだよなー？」

(((((そっちは根に持つんだ!)))(((

心の中で、突っ込むクラスメート達と、

「痛てて！あれは俺じゃない！磯貝だ！」

必死に弁解する前原。

「そうか、じゃ、改めて今ので殴ったの、チャラって事で。」

「いや、何か納得いかねーぞ！」

プツ…クスクス…

このやり取りで、教室内に微かに笑い声が上がった。

余りのキレっぷりにドン引きしていたクラスメートが、冷静さを取り戻し、前原と普段からのやり取りをしている響の姿を見て、緊張から解放され、安心したのだろう。

目の前にいるのは噂で聞いた、そして実際に目の当たりにした危険人物ではなく、普

段からチャラ男やエロ坊主とバカ話で盛り上がったたり、中村と一緒に渚をからかっている、何時もの響だった。

ただ、同時に「コイツだけは絶対に怒らせてはいけない！」とクラス全員に思わせるには十分な出来事だった。

「…にしても、あのタコの先生、一体、何処に消えたんだ?」

そう、響の大暴走と言っても良い。あの騒ぎの中で誰も気にしなかったというか、それ所ではなかったのだが、あの月を破壊したというタコ教師が教室から姿を消していたのだ。

「|||||……………?」

誰もが「??」となっている中、

「私は此処です。」

…と、教室に現れたのは黄色…ではなく、真っ黒なタコだった。

今までの授業中でも、時折 体の色を感情に合わせて色々と変化させていたが、黒は見た事が無かった。

しかし、あの表情を見れば誰でも判る…黒は『ド怒り』モードだと言う事が。

「君達は席に着きなさい。」

響達に着席を促したタコは、爆発から渚を守った膜を自身の奥の手である、脱皮(月

1回」と説明し、未だにうずくまっている、寺坂達の前に立ち、

「先程の自爆、首謀者は君達だな？」

…と、問い詰める。

「えっ、いついや…渚が勝手に…」

自分の顔に嘘と書いてあるのに気付いてないのか、寺坂が下手な言い訳をした時、

ゴトツ　ゴン　パタ…

寺坂達の前に、彼等の家の表札が放り落とされた。

更に恐怖で震える3人。

現れた時に、何やら両手…両触手？ いっぱいに抱えていると思っていたら、どうやら

E組全員の家の表札の様だった。

あの乱闘の最中、消えていたのは、あれを取りに行っていたからか。

触手に持った表札をその場にバラバラと落とした黒いタコは、次に同じ様な手段を取れば、「E組の生徒」には政府との契約だから手は出さないが、家族、友人、そして地球に対しては、その限りでなく、どの様な行動に出るか保証しないと云つてのけた。

それに対し、涙目を通り越した完全な泣き顔で「迷惑なんだよ」と逆ギレ？する寺坂、そして渚に対し、何時の間にか普段の黄色い体に戻っていたタコ教師は、先の手段にも

目を見張る点はあったと誉めると同時に、級友や自分自身を大切にしない考えを窺める。

更にクラス全員に、自身を狙っている暗殺者達アサシンに対して言う台詞とは思えない様なポジティブなアドバイスをするのだった。

クラス全員、特に渚のタコに対する印象が若干、本当に若干と形容するのも疑問な程度であるが、確かに僅かだが、変わった瞬間だった。

「…さて、問題です、渚君。先生は…」

タコ教師が渚に自分は殺られる気はない、3月まで皆と楽しんで後に地球を爆破するつもりだが、どうする?…と問い掛けた。

それに対して渚は迷いのない良い顔で答えるのだった。

「…その前に、先生を殺します。」

》》》

その後は何事も無かったかの様に授業が再開され、一見、隙だらけで鉄壁なタコ教師は、先程回収した表札を一枚ずつ、鼻歌混じりに丁寧に入手入れている。

今 攻撃しても、表札と纏めて手入れされるのが目に見えているE組の面々は、黙々と与えられた御題を完成させる他なかった。

「あ…」

そんな時、茅野カエデが呟く。

「殺せない…先生…名前…」

『殺せんせー』は？」

殺せんせー

殺せんせー

殺せんせー…

茅野の呟きに連鎖するが如く、クラスの面々が呟き始める。

殺せんせー！

『殺せんせー』が正式なタコの名前として決まったのだった。

「殺せんせー…ね。茅野ちゃん、やるな（笑）」

響は苦笑。

そして、

それにしても まさか寺坂達が、そして渚が、あんな行動に出るとはな…何時までも様子見なんてしてられないか…。ハッキリさせるべき点は、ハッキリさせとくべきかもな…







響は暗殺失敗の手入れとして提示された課題クリアの為、その日は大遅刻をしてしま  
うのだった。

## 禁句の時間

「あつ、吉良君、おつはよろ！今日は早いんだね？」（笑）

「流石に2日連続はないわね…」

「うっせよ！（笑）」

朝、響が旧校舎を目指して山道を登つてると、後ろからクラスメートの倉橋陽菜乃と速水凜花に声を掛けられた。

昨日、大遅刻をやらかしてしまったから、今日は普通に登校するだけで、皆に弄られるとは思っていたらしいが、早速な様だ。

昨日の深夜に担任のタコ：改め、殺せんせーに果たし合いを挑んだが、結果は敗北。敗れた暗殺者への手入れと称されて出された課題（問題集）を片づけ、眠りについたのが、AM4：00頃。

その後、AM6：30頃に一度目を覚まし、もう少しだけ眠るつもりだったのが、昼過ぎまで爆睡、慌てて小宇宙全開の光速移動で登校したのだった。

「…その事、殺せんせー言ってたんだよ。

多分、吉良君はそれが原因で寝過ぎしているんだろうって。」

「それで今後は深夜の決闘、暗殺は遅刻の元だからって、禁止になった。

てゆうか、そもそも 決闘は法律違反とか言ってたわ。」

「ほほう…じや、あの時の拍手喝采も、あのタコの指示？」

「あはは…拍手ってゆーか、教室に入ってきたら、温かく迎えてあげなさいって言われたんだけどね…」

「まさか、いくらなんでも、昼過ぎに やってくるとは殺せんせーも想定外だったんだと思っ。」

「いやいや、あの（課題の）量は遅刻想定して欲しいぜ？」

》》》》

「おっ、吉良！」

今日は随分と、早いじゃないk

「エクスカリバー！」

「おわあつと?!」

教室に入った瞬間、響の手刀が岡島の脳天を襲った。

勿論、響も小宇宙<sup>コスモ</sup>使用の本気で放つ訳はなく、ギリギリ、白刃取りで受け止められる程度の速度とパワーな只の手刀だ。

「おま、ジョーク通じろよ！」

岡島の訴えに

「岡島あく、仏の顔も三度つて諺、知ってるか? (笑)」

「は?」

?…となつてる岡島に対し、一緒に教室に入ってきた、倉橋と速水を指差し、

「1、2…」

そして

「3…」

やはり つい先程、廊下で響に件のネタを話し掛け、一緒に教室に顔を出した木村正義を指差し、最後に

「…4!」

岡島を指差した。

「運が悪かったな?」

お前が4人目なんだよ。(笑)」

「カウント累積型かよ?」

》》》》

「起立!」

ガタガタガタ!

「気をつけー！」

ジャキツ！カチャ…

「礼！」

ドパパパパパパパパパパパパパパ…

日直の号令と共に、クラス全員がエアガンを構え、標的ターゲットの黄色いタコを集中狙撃するが、黄色いタコ…殺せんせーは涼しい顔で夥しいBB弾の弾幕を躲しながら、

「磯貝君…」

「はいっ！」

出席を取り始める。

そして、クラス全員が出席しているのを確認すると、

「素晴らしい！」

今日は吉良君もキチンと、朝から来てくれていまs（シユタタタタタ！）にゆやつ  
!？」

教室後方から、6本の対せんせーナイフが光速で飛んできた。

ナイフは全て殺せんせーの顔の横ギリギリを通過し、黒板に当たった後、そのまま床に落ちる。

「ちっ、ゴムみたいなナイフじゃ黒板には刺さらないか…」

これじゃ絵にならねー。

鳥間さんに頼んで、先端部だけでも鉄かステンかのナイフを貰えないかな？」

凄く残念そうに響が呟く。

「何を言っているんですか吉良君！」

黒板を穴だらけにする気ですか？」

ナイフを投げられた事には別に怒らず、黒板に傷を付けようとする考えに注意する殺せんせー。

響は席から立ち上がり、

「ごめんごめん、殺せんせー。」

そのナイフ取りに行くからさ、落ちてるの拾ってよ？」

…と、笑いながらナイフを受け取りに教室の前側に歩いていく。

「全く…仕方ありませんね…」

やれやれな表情で、ナイフを拾おうとする殺せんせーだが、

「…って、吉良君！」

先生がナイフを触ったら、ダメージ受けるじゃないですか！」

「「「「ちいっ！」「」」」」

殺せんせーの必死な突っ込みに、響と、響の目論見に気付いていた数人の生徒が盛大

な舌打ち。

その後、クラス全員が箒を手に、BB弾を回収し始めた。

「吉良君、惜しかったね、さっきのナイフ、早過ぎて全然見えなかったよ。」

「まあ……ね……」

隣の席の櫻瀬園美に先程のナイフの話を振られ、軽く頷く響。

まあ、今回はワザと外したんだけどね……次に下手な事を言ったら……知らないよ？ 殺せんせー？



数日後。

「おいおい、このタコ、世界レベルの機密事項な存在が、こんなに派手にやって良いのかよ……」

響が夜、自宅リビングで父親が買って帰った東ス〇を広げると、その一面には、ニューヨークで日本人のプロ野球メジャー選手が試合中に謎の触手に責められるという記事が載っていた。

これが、クラスメートの元野球部員、杉野友人の野球アドバイスに繋がっていると知



るのは、少し後の話だった。



「ヌルフフフフフフ…」

「どーしました？こんな状態でも殺せませんか？」

ある日の放課後、ロープで縛って木に吊した殺せんせーを、竹竿の先に対せんせーナイフを紐で括り付けた、対せんせー槍…とでも言うのか？それと銃撃との連携で殺ろうと必死になっている生徒達がいた。

そして、それを器用にヌルヌル躲しているタコがいた。

「ほら、お詫びのサービスですよ？」

「こんな身動き出来ない先生、そう滅多にいませんよお？」

「この、クソタコがあー！」

因みにお詫びとは、今日の昼休みに、クラスの花壇を荒らした件の事だ。

「クツソ！ちつとも当たたらねー！」

「ムカつく〜！」

苛つく生徒達を尻目に、顔を黄と緑の縞模様にして、余裕綽々で槍とBB弾を避ける殺せんせー。

「ちい、弾切れだ、茅野ちゃん、次っ！」

「は、はいー」

茅野カエデは今回はサポート役の様だ。

弾切れの自動小銃型のエアガンを茅野に渡すと同時に、ライフル型のエアガンを受け取り、再びトリガーを引く響。

そんな響と目が合った殺せんせーは、悪い笑みを浮かべて

「ヌルフッフッフッフ」

なかなか当たりませぬね？

皆さん、少しは頭を使いませんか？

例えば、先生を吊しているロープを切るとか枝を折るとかしたら、かなり有利になるんじゃないですか？

そう…例えば蟹の鋏でチョッキーン！…と切るとか？

そうすれば先生、『あじゃばー！』って落ちちやいますよ？（笑）

…ふち

「( )の・タ・( )」

響に更なる殺意が目覚めた。

そうですか、殺せんせー…。

ならば望み通り、蟹の鋏、蟹座の爪をお見舞いしてあげましょう…!

響はライフルを右手の片手撃ちに構え直し、銃を乱射しながら、左手に小宇宙を僅かに集中させる。

そして、左手を所謂ジャンケンのチョキ、但し、人差し指と中指は揃える形にして、

「(アクベンス・シユナイダーっ!)」

指先から放たれた、一筋の小宇宙の刃が、

すば…

殺せんせーを枝に吊っているロープを鋭く斬り裂いた。

ぼとっ…

せれにより、万有引力に従い、地に堕ちた殺せんせー。

急な想定外な出来事に、タコも生徒達も、時が止まったかのように、その場で固まってしまふ。

「今だ、殺れーっ!!」

そして数秒後、時は再び動き出す。

「にゅやーっ、しっ、しまった!!」

殺気倍増した生徒達の猛追を、テンパりながらも躲す殺せんせー。

「あつ」

「ちつくしよ、抜けやがった!!」

辛くもロープから抜け出し、校舎の屋根の上に回避したタコは、  
「流石に此処までは来れないでしょう？」

基本性能が違うんですよ、バーカバーカ！」

「あつの、クツソタコがあー！」

響が この場では己が聖闘士セイントだという、正体を明かさないのも計算の上で、屋根の上の自身を見上げる生徒達に対し、感情逆撫でする様な挑発をする。

「ハア〜、ハア〜…」

そして、大きく呼吸して息を整え、

ふー…と溜め息一つ吐いた後に、

「明日出す宿題を3倍にします！」

「「「「小せえ!!」」」」」

その器の大きさを露呈したのだった。

## 模擬戦の時間

「…それでは失礼します。」

「はーい、お疲れ様〜♪」

E組校庭で殺せんせーのサービス暗殺が繰り広げられていた頃、烏間の部下、防衛省所属の園川雀と鵜飼健一は市内のある一軒の家、その家に住む1人の少年を訪ねていった。

用件を伝え終えた2人は、ドアの前に立つ少年に一礼して立ち去って行った。

「……………」

2人を見送った少年は、自室に入り、ポケットに入れていた紙切れを取り出すと、

スパ…

ゴム素材の様なナイフで切りつけた。

床に落ちたのは、黄色いタコの様な生物が描かれた手配書。

それが縦半分真つ二つになる。

「ふふ…殺せんせー…だったっけ？」

明日が楽しみだよ？」



「「「「いち、にー、さーん、し、ごー、ろっく、しっち、はっち……」」」

「ヌルフフフフフ…晴れた午後の運動場に響く掛け声…平和ですなぁ…」

揃った掛け声と共に、真剣に体育の授業に取り組む生徒達に御満悦な表情を見せるのは、「殺先生」と書かれた名札が縫い付けられた、恐らくは自前の体操着を着込んだ殺せんせー。

「いいか！八方方向からナイフを正しく振れるように!!」

どんな体勢でもバランスを崩さない!!」

「生徒の武器エモノが無ければですが…」

…訂正、満足感の中に、やや複雑な表情を混ぜた、微妙な表情をしている。

E組生徒達は、今日から正式にE組体育専任教諭として赴任して来た烏間惟臣の指導の下、対せんせーナイフを片手に素振りをしている。

この日から体育の授業は完全に、対殺せんせー暗殺のノウハウを烏間が仕込む事になったのだ。

生徒達からすれば、授業内容は兎も角、体育を烏間が受け持つのは大歓迎だった。

このタコの体育は人外過ぎて、誰にも…約1名が『本気』を出した場合を除き、こなせる内容ではなかったのだ。

とりあえず普通の人間は、反復横飛びで3身分身withあやとりなんかは まず出  
来ない。

鳥間に退場を命じられ、校庭の角の砂場で1人寂しく泣きながら、砂の山を作り始め  
た殺せんせー。

しかし、誰1人、それを見て可哀想と思う生徒は居なかった。

「でも鳥間さ……鳥間先生、こんな訓練意味あんすか？」

しかも、当の暗殺対象ターゲットが傍にいる前でさ？」

前原の質問に対し、鳥間は勉強に暗殺、何事も基礎を身につけておいて損はないと論  
し、それを証明すると言わんばかりに、前原と磯貝に模擬戦を誘う。

「え……いいんですか？」

「2人がかりで？」

遠慮か躊躇いか、やや困惑気味の表情の磯貝が、ナイフを手にした腕を伸ばすが、簡  
単に躲す鳥間。

「くっ！」

それを見た前原が、チャラ男返上な真剣な表情で突っ込むが、これもナイフを手で  
払われる。





人な如く出で立ちで茶を立てているタコがいた。

(((((腹立つわあ〜)))

生徒達が そう思っている中、砂場に近づくと響。

「へ〜？これ、大阪城？上手く出来てるじゃん！殺せんせー！」

「ヌルフッフッフ…いや、吉良君、それ程でもありませんよ（ゲシッ！）にゅやーっ!!!」

謙遜する事なく、得意気に語る殺せんせーの前で、砂の城に躊躇なく足を落とし、城を崩壊させる響。

「ななな…何て事を…」

涙を流しながら、数秒前までは城の形をしていた砂の山を、放心状態な顔で見つめる殺せんせーを見て、

「なあ、磯貝…ほんの少しだけ、惨いと思う俺って、性格甘いのかな？」

「いや…俺も、流石にアレは凄く可哀想と思うが…」

因みにクラスの評判は「ナイス（笑）！」と「酷い…」が半々だった様だ。

そんなorzとなった殺せんせーを見て、何やら満足したかの様に、凄く良い顔を浮かべながら響は烏間の前まで歩くと、

「烏間先生、次は俺が相手になるよ。」

…と対戦を申し出る。

「ふ……良いだろう。」

吉良君、掛かってきなさい！」

鳥間の吉良評は、やや短気で暴力的な部分があるが、運動神経は抜群。

E組内ではタコを殺れる可能性が一番高い……である。

そんな生徒の実力を、改めて自身の目で確認出来る機会を無駄にする筈がなかった。

「磯貝、ナイフ貸してよ。」

「え？ああ……」

磯貝からナイフを借りた響は、右手は順手持ち、そして左手のナイフは逆手持ちで構え、

「行きますー！」

鳥間に切り掛かった。

シユシユシユシユ……！

素早い左右のラツシユを見せる響だが、そのナイフは鳥間には当たる事はない。

「吉良君、甘いぞー！そんな付け焼き刃な二刀流で、どうにかなるかとも思っているのか？」

「ん？いいえ、全然？！」

笑みを浮かべながら距離を詰めると響は、鳥間の顔面目掛けて放った両手のナイフを

途中で手離し、

「!!?」

鳥間の注意が手から離れたナイフに向いた瞬間、予め、ジャージの長袖の中に忍ばせていたナイフを握ると、再度、鳥間に攻撃を仕掛けるが、

ガシィ…ッ!

響の手首を掴んだ鳥間は、先程の磯貝達同様に、攻撃の勢いを利用した投げを放つが、響も空中で身体を捻って、両足で難なく着地する。

「あつああく〜！ダメだったかあく〜?」

「いや、今のは…少し危なかった…」

鳥間の まだ続けるか?の間に、響は さしあたっての策は尽きたと言い、模擬戦は終了した。

くっそ！鳥間先生、強っ!

小宇宙<sup>コスモ</sup>無しで あんだけ動けるって、どんだけ人外<sup>バケモノ</sup>だよ?

卒業までに、絶対に小宇宙<sup>コスモ</sup>使わないで勝ってやる!

既に響の目標は、他の生徒達とは別の方向に向かいつつあった…。

》》》

体育の授業が終わり、次は小テストかあ…とボヤク渚と杉野。

校庭から旧校舎に戻ろうと、土手の階段を上ろうとした時、その土手の上に1人の少年が立っていた。

渚は彼に気づくと

「カルマ君…帰って来たんだ…」

「よー、渚君、久しぶり。」

カルマと呼ばれた少年は渚に微笑んだ。

他の生徒達も、この赤羽<sup>カルマ</sup>業に気づき、ざわめきたつ。

そんな中、櫻瀬が響に

「吉良君、あのヒトが…」

…と教えてやる。

「へえ…あいつがアカバネ…ね…」

## 危険人物の時間

赤羽業（カルマ）。

2年の3月に暴力事件を起こし、停学の後、E組編入の処分を受けた生徒。

昨日で、その停学が解け、久しぶりに彼は登校して来た。

…5時限目の終り時に。

停学明け早々の遅刻に、顔を紫にしてピンクのX（バツ）を浮かべて注意する殺せんせーに対し、笑いながら謝る赤羽。

これから宜しくとばかりに右手を出し、それに応えた殺せんせーも右触手を出して、握手した瞬間…

ドロオ…

殺せんせーの手が溶ける。

すかさず赤羽は制服の袖の下に仕込んでいた対せんせーナイフで切り掛かる。

先程の体育の授業で、響が烏間に仕掛けたのと、全く同じ戦法だ。

これを瞬時に距離を開け、回避する殺せんせー。

声も出ず、驚く生徒達。

当然な話だ。

初めて殺せんせーにダメージを与えたのだから。

「へえ……」

これには響も驚いた。

赤羽曰わく、触手を溶かしたのは、対せんせーナイフを細かく刻み、掌に貼り付けていたからとの事。

更には、こんな単純な手に引つ掛かるとか、あんなに飛び退くつてビビリ過ぎとか、「チヨロい」認定してしまう赤羽。

ピクピクと、顔中に血管を浮かべながらも、何も言えない殺せんせー。



6時限目。

ぶによん　ぶによん　ぶによん……

教室内に木霊する締まりのない音。

どうやら、殺せんせーが”壁パン”をやっている音の様だ。

赤羽業に　おちよくられたのが余程悔しいのか、生徒達が小テストに打ち込んでいる中、ずっと壁に触手を打ち込んでいる。

しかし、柔らかい触手故に、なんとも間抜けな音であり、

「さつきから ぶによんぶによん うるさいよ殺せんせー!! 小テスト中なんだから!!」  
「にゅや!こ、これは失礼!!」

生徒から お叱りを受ける。

そんな教室の後ろの席では

「よオ、カールマア、あのバケモン怒らせて どーなつても知らねーぞー?」

「また、お家に籠もつてた方が良くないじゃない?」

寺坂達が赤羽を挑発するが

「…殺されかけたら怒るのは、当ったり前じゃん? 寺坂? しくじつて ちびっちゃつた

誰かの時と違つてさ?」

「な…ちびつてねーよ!! テメ、喧嘩売つてんのか?!」

「あく、悪い悪い、腰抜かして大泣きの間違いだったよね?」

「て、テメエ!」

逆に挑発。

どうやら赤羽の方が、寺坂より、役者が一枚二枚、上らしい。

その やり取りに自分の触手を棚に上げ、「うるさいですよ!」と注意する殺せんせー  
に対しても、逆に挑発する赤羽。

…と言つても、職員室の冷蔵庫に仕舞つておいた彼のアイスクリームを、勝手に失敬

して舐めていただけだが、これが予想外に効果観面。

殺せんせー曰わく、そのアイスは前日イタリアまで買いに行き、帰り道は溶けないように寒い成層圏（防寒具着装）を飛んだという苦労の一品だとか。

「へー…で、どーすんの？ 殴る？」

「殴りません!! 残りを先生が舐めるだけです!!」

誰もが「舐めるのかよ…」と思っっている中、こめかみに血管を浮かべ、ズンズンと赤羽の席に歩み寄る殺せんせー。

しかし、

バチユツ…

「!!」

いきなり「脚」に相当する触手が溶ける。

対せんせーBB弾が、いつの間にか床にバラ撒いてあつたのだ。

考える迄もなく、赤羽の仕込みだ。

「あは♪まあーた引つ掛かったあ♪」

パンパンパン…

すかさず至近距離で拳銃タイプのエアガンを撃ち、それを躲されるも、今後も授業関係なく、今回の様な奇襲をされると言い切る赤羽。



「それが嫌なら……俺でも俺の親でも殺すがいい。」

「……………」

「でも その瞬間から、もう誰も、あんたを先生とは見てくれない。只の人殺しモンスターさ……」

赤羽は そう言いながら、手にしたアイスをナイフで刺すかの様に殺せんせーの式服になすりつける。

更に影のある笑みを浮かべ、

「あんたという『先生』は……俺に殺された事になる……!!」

そう言うと、多分、全問正解というテスト用紙を殺せんせーに渡すと、明るい笑顔で「明日も遊ぼうね♪」と言いながら、教室を去って行った。



渚は言う。

カルマ君は頭の回転が凄く速い。

今もそう。

先生が先生で在る為に越えられない一線を見抜いた上で、殺せんせーにギリギリの駆け引きを仕掛ける。

だけど彼は……その本質を見通す頭の良さと、どんな物でも扱いこなす器用さを、いつ

も人とぶつける為に使ってしまうんだ…。



帰り道、響は一緒に駅に向かっていている渚達に、赤羽について改めて聞いていた。

2年3学期の時点で停学中なのは知っており、その理由が暴力沙汰なのは磯貝や櫻瀬から聞いていたが、その詳しい内容は まだ知らなかった。

「…と、僕が知ってるのは、この程度なんだけど…。」

「うわっ、超危険人物じゃん？怖っ!!」

「お前が言うか!?!」

渚の説明を聞いて、思わず口走った響に、すかさず杉野と三村が突っ込んだ。

「じゃあな、渚、吉良。」

「ん。また明日。」

「じゃなく。」

駅に到着。

違う電車に乗る杉野達と別れ、改札口に向かおうとする渚と響。

そんな2人に後方から

「…おい、渚だぜ」

「…E組に馴染んでんだけど…」

「…つせえ！ありや…戻つて来ねー…」

完全に聞き取れる訳ではないが、本校舎の間違いなく同学年の生徒3人から、自分の事を話している会話が耳に入る。

思わず下を向く渚に

「気にするな…」

響が傍で呟く。

…が、

「…も…赤羽…しいぞ?」

「…悪…でもE組(あそこ)落ちたくねーわあ…」

一部一部、聞き取れない部分はあったが、それでも要所は耳に入り、

「ほおおう…?」

「き、吉良君?ちよつと、何する気?」

発言の中に、よほど琴線に触れる何かがあったのか、響は彼等に歩を進め始めた。

ガシヤッ!

「えー? 死んでも嫌なんだ?」

しかし、響が彼等の本に立つ前に、何処からか現れた赤羽が、柱に凭れかけていた生徒の頭上でジューズ入りのガラス瓶を叩き割り、更に割れた先が鋭利に尖った瓶を、ジューズ塗れになった顔に向け、

「じゃ、今死ぬ?」

冷たく微笑んで聞いてみる。

「あつ赤羽え!」

「うわあつ」

ダツ…

赤羽の顔を見た途端に、怯えて逃げ出す本校舎の3人。

しかし、

「まあ、待てよ?」

「ひっ?」

逃げる1人の制服の襟首を掴み、その場で捕まえる響。

「…え? 誰?」

「ひ、何なんだよ? お前?」

「お前もE組か？は、離せよ！こんな事して、只で……」

その場の赤羽を含む、全員が響に対して「誰？」な状態の中、  
「カルマ君！吉良君！暴力はダメだよ！」

渚が慌てて中に入る。  
すると

「「き、き、吉良ああ?!」」

「吉良」という名前を聞いた本校舎の2人は、未だ響に首根っこを掴まれている1人を残して走り逃げてしまう。

「あ……あ……」

「行っちゃったね〜♪」

「あー、はくじょーなやつらだなー」

何故か棒読み口調で赤羽に同調すると、捕まえている、眼鏡の生徒に目を向ける。

「ひいひいひいひい！」

怯えるだけの本校舎生徒に、

「おいおい、必要以上にビビるなよ？」

……と響は掴んでいた首を離してやると、

「ひいー！」

腰が抜けた様に、その場にへたり込む。

「はは…：必要以上なのは、吉良君自身が原因だと思うよ…」

渚の「やれやれ…」な突っ込みに対し、

「へ？」

…：な響。

…：そうなのである。

響がE組行きになった理由…：それは転校数日で起こした暴力事件。

これが、本校舎の間では、真実に尾鰭足鰭が付き、『吉良という転校生は、浅野と瀬尾を血祭りに上げた、超々・危険人物』という形で認識されていた。

事実、瀬尾は、あれから終業式まで、顔に包帯と絆創膏が付いたままだった。参考までに、寺坂の現状がこれである。

「もう消えていいぜ…」

「ひええっ！」

響の一言に、腰砕けな体勢で走り逃げる眼鏡の生徒。

それを見て

「渚…：俺ってさ、そんなに怖い？」

「さ……さあ……？」

ほんの少しだけ、本気で気にし始めている響に対し、目を逸らし、言葉を濁す渚。

「ところで、君、誰？確か体育の時、Yシャツの人と好い勝負してた人だよな？」

「こゝで赤羽が響に話しかける。」

「あ、カルマ君は まだ、面識ないよね……」

「俺は この3月に、E組に転校してきた吉良だ。よろしくな。」

「多分、もうクラスの皆から聞いてると思うけど、俺は赤羽業（カルマ）。カルマで良いよ。よろしく。」

「と、ところでカルマ君？僕達より先に教室出たのに、何で まだ駅（こんなトコ）に居るの……」

「ん、ゲーセン？」

渚の疑問に、軽く答える赤羽カルマ。

「てゆうかよ、カルマ？〇ーラの瓶は、流石にヤバ過ぎだろ？」

「あは、殺る訳ないじゃん？折角 教室に、もっと良い玩具があるのに♪」

「渚、言われてるぞ？」

「こゝの場合は僕じゃないでしょ？てゆうか、そう思ってるのは、吉良君と中村さんだけだよ！きつと！」

「あ、俺も〜♪」

挙手して同意するカルマ。

「カ、カルマ君〜…」

カルマがコ〇ラ瓶を割った件で注意するつもりだった響だが、何時の間にか、何時もの渚弄りになり、そこにカルマも加わる。

「でもまあ、もう あんな雑魚（くず）、どーでも良ーよ。あんなの構って、また停学になつたら勿体無くね？」

急に、真面目な顔で話し始めるカルマ。

「カルマ君…？」

「…俺さあ、嬉しいんだ。只のモンスターなら、どうしようと思ってたけど、案外、ちゃんとした先生でさ？」

「…カルマ？」

更にカルマは意味深な笑みを浮かべ、

「ちゃんとした先生を この手で殺せるなんてさ…最高じゃね？前の先生は自分で勝手に死んじゃったから…」

「…？」

（勝手に死んだ？どういう意味だ？どっちにしてもコイツ、かなり危険だな…）



— そう思うも響は、この場では敢えて聞かず、その日は2人と別れたのだった。

## 手入れの時間

朝。

財布の中を覗き、ぶつぶつと何かを呟きながら、教室に向かう殺せんせー。

どうやら、給料日は まだ先なのに、金欠状

態の様だ。

「あ、殺せんせー、ちよつとストップ！」

「にゅや？」

後ろから廊下をダッシュしながら、響が声を掛ける。

「こら、吉良君、廊下を走つちやダメじゃないですか！」

スタタタタタ……

注意するタコを無視して、追い抜く響。

「にゅや？無視？」

教室の入口で止まり、殺せんせーの方に響は笑顔で振り向くと、

「せんせーより先だから、遅刻にはならないよね？」

「……………。」

そう言うと、普通に教室に入っただけだ。

「……………」

言葉が失う響。

目に入ったのは、教卓の上に、対せんせーナイフを刺され、張り付けにされたタコ。  
…と言っても、月を破壊したとか言ってる黄色いタコではなく、海の中や鮮魚店にいる、あの蛸である。

席に着くと、

「おいカルマ、あれって お前だろ？タコに怒られるぞ？」

空席一つ挟んで隣に座っている赤羽カルマに話し掛ける。

「え？いや、それが狙いだし。」

涼しげに言うカルマ。

その直後、ガラガラと教室の扉が開き、

「おはようございます。」

担任の殺せんせーが入室する。

いつもなら ここで、日直の号令と共にBB弾が教室内を飛び交うのだが、

「……………」

誰もが（約2名除く）緊張した表情の儘、沈黙している。

「……ん？どうかしましたか、皆さん？」

……て、これは……？」

ここで黄色いタコが、教卓の上の赤いタコに気が付いた。

「あ、っつめーん！」

殺せんせーと間違えて殺しちゃったあ♪

捨てとくから持つてきてよ♪」

カルマが挑発的表情で言う。

「……………わかりました。」

ナイフの刺さった蛸の手に取り、カルマを見つめる殺せんせー。

カルマは心の中で呟く。

（……さあ、来いよ殺せんせー。

身体を殺すのは、今じゃなくても別に良い。

まずは　じわじわ……

心から殺してやるよ！）

そう思いながら、背中に対せんせーナイフを構え、獲物が近づくの待つ。



ヒュッ…

「熱っ?!」

カルマと響の口の中に、ホカホカのタコ焼きが放り込まれた。

ソースは勿論、御丁寧に鰹節や青海苔、マヨネーズも掛かっている。

先程の紙袋には、小麦粉等の材料が入っていた様だ。

「このタコ…いきなり何しやG」その顔色、遅刻ギリギリの吉良君は当然として、2人共、朝御飯を食べてませんね？」

「う…」

不覚にも美味しいと思いつながら、文句を言う途中に理由を言われて黙る響。

「マツハでタコ焼きを作りました。」

「これを食べれば、健康優良児に近付けますね。」

「……………」

あらゆる意味で、あまりの想定外規格外に驚くカルマ。

「カルマ君、先生はね、手入れをするのですよ。錆びて鈍った暗殺者の刃を…!」

更に殺せんせーは、作ったタコ焼きを口いっぱい頬張りながら言い続ける。

「今日1日、本気で殺りに来るがいい。」

その度に先生は…君を手入れする!」

「……………!!」

この台詞を聞いたカルマが、殺せんせーを殺気を込めて睨みつけた。その時、  
「あ、タコがタコ焼き食ってる…これ、共食いじゃね?」

「にゅやや?!」

どっ!!!!

響の一言で、緊張感で張り詰めていた教室の空気が一瞬で緩み、大きな笑い声が沸き起こる。

しかし、カルマはこの空気をスルー、依然として殺気を放ちながら、黄色いタコを睨み続ける。

「放課後までに、君の心と身体をピカピカに磨いてあげましょう。」

ヌルフフフフ…」

そのカルマに対し、響の台詞による動揺から快復した殺せんせーは言い放ち、そのタコの眼がキラリと光った。

「あ、それからカルマ君?

先程のタコですが、食べ物を粗末にするのは感心出来ませんね?

そもそも、世の中にはです…」

…かと思えば、嫌がらせは良しとしても、その為に食材を粗末にした件を普通に説教





力沙汰程度でE組行きになった正確な理由。

渚達から聞いた、只の暴力事件程度では、少し腑に落ちない部分があった。

昨日、帰り際に聞いた、「前の先生は勝手に死んだ」という言葉も気になり、その辺りの詳しい事情を烏間に調べて欲しいと頼んだのだ。

「分かった。E組（副）担任の俺なら、本校舎の学年主任や生徒指導の先生に聞けば、話してくれるだろう。」

「お願いします。」

烏間に一礼すると、響は職員室を去った。

「吉良君、私の前では、あんなに礼儀正しくないですよ？」

烏間先生、彼に必要な以上の脅しか体罰か何か、したんじゃないですか？」

「単に貴様が尊敬されていないだけだ。」

自覚しろ、タコ。」



四時限目。

「お味は、どうですか、吉良君？」

調理実習の授業、殺せんせーが響の班に、出来栄えを聞くと、

「ウチは、お母さんがいるから完璧♪」

「えっへんー！」

響の台詞に、「E組のお母さん」こと、原寿美鈴が両手を腰に当て、誇らし気にポーズを取る。

女子中学生に「お母さん」の呼び名は どうかと思ひもするが、本人は気にしない処か、寧ろ気に入ってる感すらあるから問題無いのだろう。

続いて

「…うーん、どうだろ？」

なんか味がトゲトゲしてんだよね？」

「どれどれ♪？」

一方、不破優月の班は何やら味がイマイチな様だ。

殺せんせーがスプーンを手に、味見しようとした時、

「へえ？」

じゃ、作り直したら？一回捨ててき！」

ドンツ！

「きやつー！」

スープの入った鍋の取っ手を思い切り叩き、ひっくり返すと同時にナイフで切り掛かるカルマ。

…が、

「……………!!」

「エプロンを忘れてますよ？カルマ君。」

次の瞬間、カルマはエプロンを…学校指定の無地な実習用エプロンではなく花柄の、胸には大きなハートマークをあしらわれた可愛いエプロンを身に付けていた。

カルマ本人は一体何が起きたのか、解らない顔をしている。

しかも ひっくり返されたスープは全て、殺せんせーがスポイドで空中回収して、何事も無かったかの様に鍋の中に。

ついでに砂糖を加え、

「あっ!!マイルドになってる!!」

顔を少し赤らめ、頭に結ばれたエプロンと同柄の三角巾を拭い執り、少し焦りの表情を見せるカルマ。

因みにカルマのエプロン姿は可愛いと女子には評判が良く、男子は笑うのを我慢していたとか。

「ほれ、笑い過ぎて腹筋が割れたぜ!」

「…「きゃあぁー」っ♪」

…って、わざわざ この場で見せなくてもいいからっ!!「…」

響の腹筋も、女子には好評判? になった。



「…そんな事があつたんすか?!

この学校、改めてダメダメじゃない?」

「…俺も驚いている。

しかも、それを教師が普通と考えている辺りにな…」

「…すいません烏間先生、ありがとうございます。」

「いや、気にするな。

これからも何かあるなら、遠慮なく頼るがいいさ。それが生徒と教師だ。」

「はい…それでは失礼します。」

昼休み時間、4時限目の調理実習で、「お母さん」中心で作ったスープを昼食にした響は職員室の烏間を訪ねた。

机の上にはハンバーガーとスープの入ったマグカップが。

調理実習での お裾分けに、恐らくは倉橋辺りが持って来たのだろう。

響は午前中に烏間に頼んでいたカルマの情報を教えて貰いに来たのだった。

「マジに とんでもねーな…」

「…でも、納得出来た。」

そして鳥間から聞いた内容は、響の予想の僅かに斜め上をいつていたのだった。



### 5時限目

(…無理だろ？あのタコは実は弱点が多い。

しよつちゆうドジってるし、テンパった時は並みの反応速度だ。

…だが、それでも今のカルマじゃ、殺せんせーは殺れないよ？

前世(むかし)、やはり策を張り巡らせる様なタイプの敵と何度か戦ったが、その手の奴は皆、自分の策に勝手に潰れていった。

カルマ、お前も同じタイプなんだよ？

ほら、また手入れされてるし…？)



放課後。

カルマは校舎裏の崖、真横に生えた松の木の根元に腰掛け、爪を噛みながら、物思いに耽っていた。

まあ、考えているのは、「如何にして あのタコを殺るか」以外は無いであろう。そんなカルマに渚と響が近づく。

「…カルマ君、焦らずに皆と一緒に殺っていこうよ？」

「カルマ…あのタコに個人マークされた日にや、どんな手を使っても単独プレイじゃ無理ゲーだぜ？ありや普通じゃねーよ。」

「だいたい お前、もう策も何も無いだろ？」

「…やなことだ。」

「俺が一人で殺りたいんだよ？変なトコで死なれんのが一番ムカつく。」

「……。」

「カルマ、お前さ、大野に…」

「…関係ないね。」

「カルマがE組行きになった理由…」

「それは、2年の時、当時の3―Eの生徒が集団でリンチを受けているのを助けたのが理由…。」

「普通なら虐められた生徒を助けたのだから、多少のやり過ぎがあったにしろ、必要以上に咎められる話ではない。」

「…なのだが、その「加害者」が3年トップの優等生達だったという事。」

「それだけで、被害者がE組生徒というだけで、この加害者は お咎め無し。」

「更には、その未来有る生徒に怪我を負わせたとして、カルマを一方的に断罪。」

「当時担任だった大野は、カルマは成績優秀だったから、多少は目を瞑っていたが、自

分の評価に傷が憑くなら話は別と、機械的に切り棄て、E組へ追放したのだった。

この時から、カルマは教師に対する信頼を完全に消し、更には「生きていても人は死ぬ。そいつに絶望したら、自分にとつて、そいつは死んだと同じ。」と考える様になった。

「カルマ……」

「ヌルフッフッフ……」

さて、カルマ君、今日は沢山、先生に手入れをされましたね？

まだまだ殺しに来ても良いですよ？

もつとピカピカに磨いてあげましょう。」

そこに黄と緑の縞模様なタコが現れる。

「……」

待つていたかの様に微笑むカルマ。

「せんせー、確認したいんだけど……」

殺せんせーって先生だよね？」

「……？はい。」

カルマの質問の真意を完璧には読めないが、「先生か」という問いに対し、肯で応える殺せんせー。

カルマは更に問い続ける。

「先生つてさ、命を懸けて生徒を守ってくれる人？」

「勿論。それが先生ですから。」

やはり肯で応える殺せんせー。

「そっかあ、良かった…」

チャツ…

カルマは懐から拳銃型のエアガンの銃口を殺せんせーに向け、

「吉良、お前 さつき、もう俺には殺れる策が無いとか言ってたよね？」

…でも、まだ有るんだな？」

「カルマ？」

トン…

「確実なのが…ね…!」

そう笑いながら言うのと、カルマは座っていた松の木から仰向けの姿勢で、崖から飛び

降りた。

「カルマ!!」「カルマ君!!」

落下中も銃口を上に向けるカルマ。



(さあ、どうする？殺せんせー？)

助けに飛び降りたら、救出する間に撃たれて死ぬ！

…かと言って見殺しにすれば、俺の中で、先生としての あんたは死ぬ!!  
殺せんせー！

あんたは俺が この手で殺してやるよ!!

さあ、どっちの「死」を選ぶ？)

いずれにせよ、自分の勝ち…そんな風に勝ち誇った顔で墜ちるカルマを上からマツハ  
で追い抜き、下側に回り込む黄色い物体…否、殺せんせー。

触手を伸ばし、ネット状に変形させ、

ばふっ

「えっ…？」

ガツチリと大の字の形で受け止めた。

「カルマ君！」「カルマ！」

渚と響が崖から身を乗り出して叫ぶ。

「ふう…あつの、バカルマが…」

「よ、良かったあ…」

そして その下では、殺せんせーがカルマに話し掛ける。

「カルマ君、自らを使った計算尽くしの暗殺、お見事です。

先生がマツハで助けたとしても、君の身体では音速には耐えられない…かと言って、ゆっくり助ければ、その間に撃たれてしまう。そこで…」

ねばあ…

「くっそ！何でもアリかよ！この触手!!」

「…先生、ちよつとだけネバネバしてみました。」

殺せんせーの触手からは粘性の物質が分泌され、カルマは正しく、蜘蛛の巣に掛かった虫の如く、張り付け状態で動けなかった。

「又ルッフッフッフッフ…」

これでは撃てませんねえ？

ああ、因みに…生徒を見捨てるといふ選択肢は先生には在りません。

いつでも信じて飛び降りて下さい。」

この一言でカルマは憑き物が取り除かれたようなスッキリした顔になり、  
(ダメだ こりゃ…死なないし殺せない…

少なくとも…先生としては…。)

そう、心の中で呟いた。



「カルマ君…普通に無茶するね…」

「別にいい…」

崖の上に戻ったカルマに渚が心配そうに話すも、当のカルマは軽く流す。

「全くだ…渚も そうだったけど、お前等、命を安く見過ぎだ！」

「うう…スイマセン…」

「あはは…」

「このタコが居なけりや、今頃 全殺しにしてるトコだぞ！」

「はは…半殺しじゃないんだ…」

響の身体は殺せんせーの触手に拘束されていた。

「この前の渚君の事がありますからねえ…」

殴り掛かるのは分かってましたから、少し大人しくしてもらっています。」

「分かったから、もう放せ、このタコ！」

「ま、今のでマジに策が無くなったから、暫くは大人しくして計画の練り直しかな？」

渚君、吉良、手伝ってくれるんだろ？」



(あはは…殺したいけど…それは変わらないけど…さっきまでとは何かが違うよ!)  
渚と響、この2人と一緒にナイフを振り回しながら、カルマは思う。

「「ふう、はあ…」」

一通り暴れ、それぞれ頭にネコ耳、ウサ耳、イヌ耳のカチューシャを付けて肩で息をする3人。

そして

「殺せんせー、殺るよ?明日にでも!」

明るい笑顔で親指を首に当て、首狩りポーズからサムズダウンするウサ耳カルマ。

その顔を見て、殺せんせーは顔をオレンジ色にし、朱色の○を浮かべて思った。

(ヌルフッフッフ。

健康的で爽やかな殺意。

もう、手入れの必要は無さそうですね。)

「さて、今日は帰るか。」

「ん、そうだね…」

「渚君、吉良、帰りに何か食べてかね?」

俺が金、出すよ。」

「まじっ!」

「え? いいの?」

「ああ。臨時収入あつたし。」

そう言いながら、財布を取り出すカルマ。

「君達、下校中の買い食いは…つて、

ちよつ、それは先生の財布じゃあないですか?」

「え? 職員室の殺せんせーの机の上に落ちてたのを拾つただけど? これ、殺せんせーの財布?」

「先生の机の上にあつたのだから、先生のに決まつてるでしょう!」

カルマ君、返しなさい!」

「だから、無防備に置いとくとなつての!」

吉良、パアース!」

「おう! ほれ、渚!」

「うわわ! 急に投げないでよ!」

「渚君、返して!」

「はい…、カルマ君!」

「にゅやーにゅやー!」

「吉良も甘いよな〜」

「あはは…カルマ君が酷過ぎるんだよ…」

結局 財布は、殺せんせーがマジ泣きし始めたから仕方なく、渚のパスを受けた響が返してやったのだった。

## 金髪の時間

5月。

国から、月を破壊したタコ：通称殺せんせー暗殺を依頼された、桐ヶ丘中学校3―Eの生徒達。

あれから1ヶ月が経つが、未だに標的（ターゲット）の暗殺に、手応えもヒントも得られないでいた。

先日も奥田愛美が毒殺を試みるも失敗。

挙げ句には、言葉巧みに騙され、逆にタコの細胞を活性化させる薬物を盛ってしまった。

ただ この件が、奥田が苦手としていた国語の成績が上がるきっかけとなったのは、また別の話。

「明日からの連休、何か予定ある？」

今年の5月の連休、遊び目的な意味では、土日が丁度 好い感じに配置され、カレン



ダー通りなら4連休となっている。

「予定…特に無いな〜」

「俺もだ…吉良は…あー、お前は どーせ、某県（あっち）に戻って、例のパツキン彼女とイチャつくんだろ？くそ！リア充爆裂しやがれ！」

「おい、イチャつくて…てか、日曜日に こっちに来る事になってる。」

「何ーっ！」

「吉良、会わせろ！」

「前にも言ったが、チャラ男とエロ坊主だけは、絶対に断る！」

「何でだよ!？」

「自分の胸に、手を当てて聞いて見ろ？」

まあ、どうしてもって言うなら、柵パークに行くつもりだから、お前等も誰か誘って

同行するか？

あっちから もう1組、友達のカップルが来る予定だし？」

響の発言に

「岡野ー、この連休、空いてる？」

前原は即座に、一緒に机を囲んでいた1人、岡野ひなたに声を掛ける。

「な、何で此処で あたしに声を掛ける訳？」

まあ、どーせ暇だし、別に良ーけど？

あたしも吉良君の彼女さん、興味あるし？」

「そんな訳で、よろしくな、吉良♪」

「お、おう…（岡野さん、其処は2人つきりが良いとかゴネる処だろ？）」

そして岡島はクラスの女子に無差別に声を掛けるが全て撃沈する。

「何でだよ!？」

「……（自分の胸に聴け!）」……



キーンコーンコーンコーン…

ガラガラガラ…

「起立!」

カチャ…

チャイムが鳴り、教室の扉が開くと同時に日直が号令を掛け、狙撃体制に入るE組の面々。

しかし、教室に入ってきたのは殺せんせーでなく烏間だった。

「皆、すまない。今日は出席確認時の狙撃は中止だ。」

何か気まずい顔をしている烏間。

「皆さん、おはようございます。」

其処に若気た顔をした、ピンク色のタコが教室に入ってきた。

若い金髪美女に腕組みをされて。

「…今日から来た、外国語の臨時講師を紹介する。

おい、自己紹介しろ。」

物凄く突っ込みたい衝動を無理矢理に我慢しているかの様な顔の烏間が、殺せんせーに引っ付いた女性に挨拶を促した。

「イリーナ・イエラビッチと申しますう。」

皆さん、よろしく!!」

殺せんせーの腕に組み付いた儘、にこやかな顔で挨拶をしたイリーナという女性。

「彼女は、本格的な外国語に触れさせたいとの学校の意向で赴任してもらった。

今後、英語の授業の半分は、彼女の受け持ちとなる。」

「「「「「おおうっ!!」」」」」

烏間の言葉に、男子生徒から歓声が沸く。

…と、同時に、生徒達は思った。

(あのタコ、普通にデレデレじゃねーか！)

…でなく、

(あの女(ひと)、絶対に只者じゃない！)

…と。



「しかし殺せんせー、普通に人間の女性もアリなんだな？」

「そうだね…(まあ、『二元』は人だしね)」

「俺、雌のタコに発情しないけど？」

「そんなの岡島くらいっしょ？」

「何でだよ!?!いくら俺d「おいカルマ、今は岡島の性癖が間違ってるかとかは、どーでもいいーだろ?」

「いや、吉良、否定させてくれよ!」

「この時期、このクラスに赴任だ。」

あの先生、間違いなく殺せんせーを殺る為に寄越された、ヒットマンか何かだろ？

でなきや、あんなタコに、彼処まで摺り寄ったりしないし。」

「「ん。確かに。」」

「スルー!？」

「とりあえず、午後の英語の授業で、粗方分かるんじゃない？」

1時限目の授業修了後、響達生徒数人は、イリーナについて色々と話していた。

彼女の正体の推測に加えて、「金髪最高」とか「おっぱいやバー」とか「おっぱいスゲー」とか「おっぱいパねえー」等の下賤な話まで。

因みに この後、

「あの…櫻瀬さん…？」

「……………」

響をはじめ、あの会話に参加していた男子生徒は、昼休みまで女子に口を聞いて貰えなかった。



昼休み。

校庭で狙撃とサッカーを組み合わせた様な競技?で遊ぶ、殺せんせーとE組の面々。

対せんせーナイフを手にして切りつける生徒も数人居る。

サッカーボールは殺せんせー自身がリフティングしているので、対せんせーBB弾等の仕様は無いみたいだ。

その様子を職員室から見据える男女。

「色々と接触の手段は用意してたけど…」

「……………」

「…まさか、色仕掛けが通じるとは思わなかったわ…」

「…ああ、俺も予想外だ。」

烏間とイリーナ。

2人共、変な汗をかいて会話している。

人外であるタコに対して、色仕掛けを暗殺手段の選択肢に盛り込むのも どうかと思うが、効果が有った以上は それ以上の指摘は出来ない。

寧ろ、それならば彼女の本領だろう。

イリーナ・イエラビッチ（20）

職業・殺し屋

その美貌に加え、実に10カ国語を操る対話能力を持ち、過去、あらゆる暗殺対象（ターゲット）でも、本人、或いは関係者を魅了して接触からの暗殺（ヒット）の実績を数多く持つ、潜入と接近を高度にこなす暗殺者。

「それじゃ、ちよつと失礼。」

「待てイリーナ。」

外に向かうイリーナに烏間が話し掛ける。

「分かっているとと思うが、只の殺し屋を学校で雇うのは流石に問題だ。

表向きの為、教師の仕事もキチンと やってもらうぞ。」

「…私はプロよ。」

それが一体、どの様な意味合いなのかは判りかねるが、烏間の言葉に そう言い放ち、イリーナは冷たい笑みを浮かべて職員室を後にした。



「殺せんせー!」

ナイフとエアガンを構えた生徒達に囲まれた殺せんせーに笑顔を振りまきながら、イリーナが駆け寄って来た。

「烏間先生から聞きましたわあ。

凄く足が お速いんですって?」

何だか頭の上にハートマークが2つくらい浮かんでるかの様な話し方に、変な汗をかいて見る生徒達。

そして声を掛けられた殺せんせーは  
「いやあ、それほどでもないですねえ…

ほんのマツハ20程度ですから…」

安定のピンク顔だった。

「お願いがあるの。」

一度本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて…

私が英語を教える間に買って来て下さらない？」

顔を赤らめ、両手を合わせて、所謂おねだりのポーズをするイリーナに

「お安い御用です。」

ベトナムに良い店を知ってますから」

…と応えた若気た顔のピンク色のタコは、

ドシユツ

「「「「「あっ!!」」」」」

…と言う間に空の彼方に飛んで行った。

キーンコンカンコン…

丁度この時、昼休み終了を報せるチャイムが鳴り、

「…で、えーっと、イリーナ…先生？」

授業始まるし教室戻ります？」

クラス委員長の磯貝の語り掛けに

「…授業?…ああ、各自、適当に自習でもしてなさい?」



煙草に火を点け、

「それと…ファーストネームで気安く呼ぶの、止めてくれる？」

生徒達に振り向いた。その顔は、先程までの、おっとり系美女の面影がまるで無い、その本職の色を全面に出した、冷たく鋭い顔付きの美女だった。

「あのタコの前以外じゃ、教師なんて演るつもりもないし…そうね、『イエラビッチお姉様』と呼びなさい？」

「「「「「「……………」」」」」」

殆どの生徒達が沈黙する中、

「…で、どーすんの？」

ビッチ姉さ「略すな！」

女性に対して、凄く失礼な略し方をした2人の生徒に指差して突っ込みを入れるイリーナ。

その2人の生徒の1人、赤羽カルマが言葉を続ける。

「あんた、殺し屋なんでしょ？」

クラス全員総掛かりで殺れないモンスターを、1人でどう殺んの？ビッチ姉さ「だから略すな!!」



「渚、大丈夫???」

「ん…茅野?」

「渚君、美味しいな〜?」

「そーゆー問題じゃない!」

あくまでもマイペースなカルマに茅野が食いつく。

「ビッチ姉さん…渚に何をしたんだ?」

「ん?30HITくらいかな?しただけよ?」

「さ、さんじゅ…」

響がイリーナに問い詰めるが、彼女は平然と「やった事」を述べ、逆に啞然とさせ、

「あと、略すな!!」

ビッチ発言に突っ込みも忘れない。

そして、未だ半分程正気を失っている渚を無理矢理に抱き起こし、

「後で職員室にいらつしやい?あんだが調べた奴の情報とやら、聞いてみたいわ?

…まあ、強制的に話させる方法なんて、いくらでもあるけどね?」

正しく殺し屋の冷酷な眼で言い放つ。

更にイリーナは他の生徒にも、有力な情報を持つ者は話に来いと言う。

「づ褒美に良・い・事してあげるわよ?」

女子には……」

ザッザッザ……

「……男だつて貸してあげるし。」

イリーナの台詞のタイミングに合わせるかの様に、これもまた、見ただけで素人でないと分かる、銃器を背負つた3人の男が校庭に姿を現した。

「「ひっ……」」

一般社会では絶対に体験する事がないであろう、独特の雰囲気を感じ取り、怯える女生徒達。

「きゃあー!」

3人の内の1人、サングラスを掛けた男が そんな女生徒の1人の手を取り、

「ガキバカリトオモツテイタガ、コノネエチャントナラ、スコシハ タノシメソウジャナイ (ドガッ!) アウチ!」

「吉良君……」

「矢田さん、大丈夫?」

響に殴り飛ばされた。

「フアーツ〇! コノガキ、ナニシヤガル?!」

「コッチノ セリフダ！コノ ペドヤロウ!!」

「ンダトオ!!」

英語で言い合う響とグラサン男。

「コノガキ、ブッコロス!!」

逆上して更に殴り掛かってくるグラサン男に対して

「（小宇宙を使うまでもない：銃を使われるなら兎も角、肉弾戦なら烏間先生や俺のが普通に強い!）」

ファイティングポーズを取り、反撃の構えを取る響。

「G O t o h e a v e n !（行つてこい大霊界!）」

グラサン男が暴力の拳を振り下ろすが

「B e n ! C u t i t o u t !（ベン!お止め!）」

びた…

イリーナの一声で、ベンと呼ばれた男の拳は止まり…

バギイツ!

「アウチ!!」「あ…」

カウンターを狙っていた響の拳に再度ふっ飛ばされた。

更に

グボオ！「アウチ！」

イリーナが倒れた儘のベンを一睨みして、腹を蹴りつける。

「イリーナ…？」

「この犬！あたしの許可無しに勝手に勝手してんじやないよ！」

「す、すまない…」

無論、やりとりは英語である。

続けて矢田と響に目を向けるイリーナ。

「ゴメンね。あのバカが悪い事したわね。」

これに関しては、素直に謝るわ。」

そう言うと

「んん？」

先の渚と同じく、イリーナの5秒間30HITが矢田桃花に炸裂。

矢田は顔を真っ赤にして、その場で腰砕けになってしまう。

更には

「んんん!？」

響も この類の攻撃には耐性が無かったのか、同様にへたり込んでしまった。

「とにかく、あのタコは私が殺るわ。ガキは外野で大人しく拝んでなさい。少しでも、私の仕事の邪魔をしたら…

殺・す…わ・よ？」

そう言うといリーナは3人を引き連れ、仕事の『準備』に取り掛かった。

気絶する程 上手いキス…

従えてきた強そうな？男達…

そして『殺す』という言葉の重み…

生徒達は彼女が本物（プロ）の殺し屋なのだ実感する。

そして、クラスの殆どが 思った…。

『この先生（おんな）は…嫌いだ!!』



翌日。

イリーナは朝早く、職員室に訪れ、暗殺プランを確認している。

昨日の内に、仕込みは完了。

後は獲物を罠まで誘うのみ…。

「未知の生物を殺す仕事は初めてだけど…

準備は万端。最新の技術を駆使して殺せない暗殺対象（ターゲット）なんて、この世には存在しないわ…。」

ガラガラ…

職員室の扉が開いた。

「ほう…今日みたいな日にも此処に来るとは、流星はプロだ。

以外にも仕事に対しては真剣に取り組んでるのだな。」

「カラスマ…」

職員室に入ってきたのは烏間惟臣。

「聞いたぞ…事情を知らない者をスタッフとして呼び込んだそうだな…？」

「ふふ…あの3人もプロよ？口は固いわ。」

彼等の協力（アシスト）で仕込みは完了よ。

今日、殺つてやるわ…!!」

自信に満ちた顔で宣言するイリーナだが…

「イリーナ…日本では一般的な学校や会社は今日から連休になっていてな…

今頃はヤツも世界中を遊び歩い…飛び回っているだろう…。」

ヤツが この学校に再び顔を出すのは、4日後だ…!」



「な、何ですってーっ!?」

## 金髪の時間②

連休2日目の日曜日。

柵ヶ丘駅。

「ひーびきーっ！」

「ぬわっ!？」

駅入口に立っていた響に、長いストレートのプラチナブロンドの髪の少女が駆け寄り、抱き付いてきた。

まだ陽が高い午前中で、更に連休中という事もあり、周囲は沢山の人集り。

響と白金髪の少女は、一気に注目を集めたのだった。

「は、晴華、おま…人前でなあ…」

「あら？照れてる？」

大丈夫よ、あたし、外見がコレだから、周りもある程度は納得するわよ♪」

確かに日本人通しなら、100パーバカップルとして見られるだろう。

しかし、響の彼女である、早乙女晴華はドイツ人とフランス人の血を1/4ずつ受け継いでる。

瞳も蒼く、肌も比較的白め。

見た目は100パー西欧人だ。

周囲の人間も、ある程度は、向こうのお国柄で納得すると言えば、するだろう。

しかし、彼女は1/2程は歴とした日本人。

∴(故に) 100パーバカップル。

「よっ、吉良、おっ久♪」

「久しぶり〜♪」

「よお…瑞樹に雲仙ちゃん…」

そこに響と同年代のカップルが声を掛けてきた。

白鳥瑞樹と雲仙星乃。

響の前中の同級生の友人だ。

「いや、俺も驚いたんだぜ?」

「んん。このコ、吉良君の姿確認すると同時にダツシユだもん。」

止める暇なんかなかったよ。」

早乙女晴華の暴走(笑)を制止出来なかった事について、響が問い質すと、2人はそ

う答えた。

「止める気も無かったけど(笑)」

「コイツ等……」

「よっ、吉良、お待たせ。」

「こんにちは。」

そしてタイミングを計ったかのように、前原と岡野がやってきた。

「あー、この2人がメールで言ってた……」

「ああ、今のクラスメートの岡野さんと……チャラ男な。」

「をいつ?!」

「……で、こっち、前の学校の友達の小鳥、雲仙……と早乙女な。」

「えーと、岡野さんとチャラ男さん？」

「いや、違うから！」

「響の妻の……晴華です。よろしくね♪」

「をおい!？」

「よろしくね、小鳥君と雲仙さんと……吉良さん?……で良いのかしら?」

意外と順応力がある岡野。

「いや、岡野さん、違うからね！」

そんな他愛のない会話をしながら、一同はバスで移動。

目的地の柵パークに向かうのだった。



柵パーク：決して全国的ではないが、県内では比較的中規模の、中学生が遊ぶには、内容的にも経済的にも、可もなく不可もなく遊園地だ。

「晴華、機嫌直してくれよ？」

「ふん！浮気者!!」

「いや、あれは事故だし！」

「てか、俺も被害者だし!!」

バスでの移動中、前原がうつかり、先日 of 響とイリーナとのやり取りについて、口を滑らせてしまった為（当然、暗殺云々は語っていない）晴華が怒り出し、響が宥めるのに必死になっていた。

「前原あ〜！」

「いや、何と言うか…吉良、スマン！」

…で、早乙女さん？キスされたの、吉良だけじゃないから！

あの先生さ、外国の人だから、別に他意はなくて、只の挨拶のつもりだったんだよ！

女子も一人、されてるし！なあ、岡野？」

「まあ…ね…」

「そうそう！お前と違って、あの先生、リアル外国人だから、あつちの感覚が日本人とは

少しズレてるだけだよ！」

前原、岡野と一緒に、晴華に対して必死に言い訳をする響。

当然、舌を入れられた事（約20秒で80HIT）は黙っている。

「あたしでさえ、口は まだなのに…」

その言葉を聞いた前原は響の肩を叩き、

「良かったな吉良、お前が漢を見せたら、全て解決だ！」

「何故、そーなる？」

そのやり取りを見て、

「ん〜♪」

目を閉じ、ワー〇ド〇リガアの登場人物の如く、口を『3』にして迫る晴華。

慣れた光景なのか、白鳥と雲仙は、ただニヤニヤと見ている。

前原は普通に、やや興味深く眺めている。

そして岡野は、赤くなった顔を両手で覆っているが、指の隙間は開いており、余り意

味は無い。

「だー！人前で出来るか!?!後だ、後!!」

「よし、言質は取った！絶対だからね！」

どうやら丸く収まった様だ。

その後は皆でパークで遊び回った。  
絶叫マシーンで小宇宙全開する響。

曰わく、今更、音速にすら届かない乗り物に載っても怖くない。

逆に、小宇宙を集中して、落差高低差を超スローで感じる方が、怖くて楽しい……らしい。

ホラーハウスは、過去に冥闘士や神話級の魔獣等と闘ってきた黄金聖闘士が今更、創り物の幽霊や怪物を当てられても……だ、そうだ。

しかも、スタッフが怪物の着ぐるみや幽霊の衣装を着て潜んでる分にしては、『気配』で事前にダダ分かりだとか。

ただ、晴華がずっと腕にしがみついて、その胸の感触を堪能出来るから、決してホラーハウスは嫌いではないらしい。

響の弱点……おっぱい

尚、いきなり飛び出てきた脅かし役の着ぐるみスタッフを、驚いた岡野が思わず蹴り飛ばしてしまったのは、別の話。

途中で昼食を挟み、観覧車へ。

「え、っ？2人ずつで乗るの？」

「いや、当たり前だろ？」

「うう……」

岡野の発言に、響と前原が突っ込む。

この観覧車のゴンドラは、最大4人乗り。

ならば、6人グループの場合は4―2より、2×3で別れるのが普通。

そもそも岡野以外の5人：特に晴華は、此処でそれぞれが2人きりになる気満々だった。

それは岡野本人も、何となく感じていて、一応聞いてはみたが、返ってきたのはやはりな答えだった。

「前原……襲ったら、殺す!!」

「へいへい……」

観覧車から降りた6人……

其処には、何故だか少し機嫌が悪そうな岡野に、頬に真っ赤な紅葉を貼り付けた涙目な前原。

普通に仲の良さそうな白鳥と雲仙。

そして、超満足気な顔の晴華と、心なし、少し顔が寝れているっぽい響がいた。





柵ヶ丘駅。

「じゃな。」

「今度は冬休みかなあ？」

「ん、その頃は、受験勉強も追い込み時期だから、どうだろうな？」

「……………」

黙り込むプラチナブロンドの少女。

「晴華……」

「…!!」

「「「おおおっ!!」」」

晴華達に乗った電車を見送る響。

「よっ！色男！」

それを弄る前原と岡野。

「うっせえよ！（笑）」

「しかし、まっさか、吉良君が、彼処でするとはね〜？このこのお♪」

岡野が響の腕を肘で突つく。

「あのパツキン彼女も喜んでたし…」

お前等、バカツプルだったんだな…」

「うるせっ!!」

ビッチ姉さんの お陰で度胸が付いたか？

あ、クラスの皆には内緒な？」

「仕方ないな…この場にカルマや中村が居なくて良かったな？」

「全くだ…って、そりゃ お前等もだろ？」

「確かに…な…」

しかし、3人は気づいていなかった。

朝方の駅から既に、そして今も、一日中、カメラを持った黄色いタコにロックオンされてきた事を…

## 金髪の時間③

連休が明けた。

教室内、生徒達の注目を余所に、イリーナはタブレット端末を弄りながら殺せんせー暗殺のプランを練っている。

(ふふふ…連休は少し肩透かしだったけど、ボーヤ達にも情報を得たし、改めて今日、あのタコを殺ってやるわ。)

そう思いながら渚と目を合わせ、片目を瞑って己の唇を舐める。

その顔と仕草を見て、何かを思い出したのか、鳥肌を立てる渚。

…そして、矢田と響。

既に授業開始のチャイムは鳴っているのだが、何時までも生徒そつちのけで端末を弄るイリーナに前原が

「なー、ビッチ姉さん、いい加減、授業してくれよー？」

ずるっ！

椅子から滑り落ちるイリーナ。

この台詞が着火となり、

「そーだよ、ビッチ姉さん。」

「一応、此処じゃ先生なんだろう？ビッチ姉さん？」

「ビッチ姉さん」「ビッチ姉さん」

「ビッチ姉さん」「ビッチ姉さん」

「ビッチ姉さん」「ビッチ姉さん」

「ビッチ姉さん」「おっばい姉さん」

「ビッチ姉さん」「ビッチ姉さん」

「ビッチおばさん」「ビッチ姉さん」

「ビッチ姉さん」「ビッチ姉さん」

クラスの皆が「ビッチ姉さん」を連呼し始める。

「あーっ!!ビッチビッチ五月蠅いわね！」

それにドサマガで、別の呼び方も止める！

あと、後ろの席の2人！

あたしは まだ、20だ!!」

兎に角、この時間は全く、授業にはならなかった。



五時限目。

校庭で生徒達が射撃訓練をしている中、用具倉庫に入ろうとする2つの人影。

ピンク色の顔をして更に頬を赤らめ、普段以上に若気た顔をした、殺せんせーとイリーナだ。

「マジかよ……？」

「あんな見え見えな手に引つ掛かるか？」

用具倉庫は連休が始まる前、イリーナが呼び寄せた3人の男達によって、殺せんせーを確実に殺る狩り場に改造されていた。

加工された跳び箱や床マットの裏側には、「実弾」が装填された機関銃を手にした男達が配置に着いている。

そんな獣の巣に獲物（ターゲット）を誘い込んだイリーナは白の上着を脱ぎ、顔を赤らめ潤んだ瞳と、黒のアンダーの下に強調された胸元を武器に、

「殺せんせー、私……」

いつも特別な人を好きになるの……」

如何にも殺せんせーに好意が有るかの様な台詞を投げかける。



イリーナは　そう思いながら、機関銃から放たれる散弾の雨が止むカウントダウンを開始する。

…が、この時　既に、3人の狩人は、殺せんせーに捉えられ、泡を吹いて気絶。「放つておいても良いのですが…」

此処は生徒も使う、大切な倉庫ですし…」

ドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツ…

殺せんせーは奪った3丁の機関銃を己の腹に向けて撃っていた。

3、2、1…ゼロ!

「…!!?」

頭の中でのカウントダウンが終了と共に銃声が止み、潜んでいた物陰から姿を現したイリーナ。

しかし、倒れている3人の狙撃手、地に転がっている機関銃、そして、ダメージの全く無いタコ…

その目にした光景を見て、驚愕する。

「残念ですがイリーナ先生、私に鉛の弾は効かないのです。」

そう言いながら、自身の体内に触手を突っ込み、

「体内で全て溶けてしまうのでねえ…」

ドロドロに溶けた、鉛の塊を取り出す殺せんせー。

「そして私の顔を、よく見て下さい。」

「…!?!」

いつの間にか、殺せんせーの目が、4つになっている。

「いえ、どれか2つは鼻の穴です。」

「紛らわしい!!」

思わず突っ込むイリーナ。

殺せんせーは続けて言う。

「昨日までは倉庫に無かった金属の臭いに成人男性の加齢臭…その違和感に、思わず鼻が開いてしまうのです。」

（はっ…！そー言えば、ボーヤが言ってた…）

『鼻無いのに鼻良いから』…と！)

「暗殺者など、罠に掛かったフリでもすれば、簡単に炙り出せます。」

後退りするイリーナに歩み寄りながら、更に話を続ける殺せんせー。

「要するに貴女は…プロとしての暗殺の常識に捕らわれ過ぎた。」

私の生徒達の方が…よほど柔軟で、よほど手強い暗殺をしてきますよ?」



トン…

「そして知っていますか？」

壁際まで追い詰め、逃げ場を封じたイリーナに宣告する。

「私の暗殺者への報復は…」

手・入・れ…だと言う事を!!!

既に暗殺者としての顔を失い、素で青ざめ怯えた表情をした金髪の美女に、

「い、い…いやああああああああ!!」

その表面から、ヌルヌルとした粘液を大量に分泌した触手が迫ってくるのだった。



ヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌル…

「一体、何?!」

「何なの?このヌルヌル音?」

「ん?あの用具倉庫、地味に揺れてね?」

外の生徒は驚いていた。

約1分、激しい銃声が木霊したと思えば、絹を引き裂いた様な女性の悲鳴、更にはヌ

ルヌル音と共に揺れる用具倉庫。

ヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌル

「いやあああ!」

ヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌルヌル

「いや…あ…あ」

「「「「「……………」」」」」

ダダダッ

「滅つ茶、執拗にヌルヌルされてっぞ?」

「行ってみよう!!」

倉庫に走るE組の生徒達。

キイ…

「!」

生徒達が倉庫前に着いたと同時に、その扉が開き、中から殺せんせーが出てきた。

「殺せんせー?!」

「あのビッチ姉さんは?」

「何があつたの?」

「おっぱいは?」

質問漬けの生徒達に、若氣た顔のピンクのタコは、

「いやいや…本当は もう少しだけ、楽しみたかったです…」

ここで、何時もの黄色いカラーに戻り、

「皆さんとの授業の方が楽しみですから。」

次の6時限目、今日の小テストは…手強いですよ?」

「あははは…まあ、頑張るよ。」

フラ…

そして倉庫の中から、イリーナがフラフラした足取りで出てきた。

その服装は所謂、黒の提灯ブルマが絶妙な味わいを醸し出した、昭和の健康的な体操着だ。

胸元には しつかりと「いりいな」と書かれた布地が縫い付けられている。

「ま、まさか…僅か1分で あんな事されるなん…て…」

目は虚ろで涎を垂らし、顔を赤らめた艶ってほい表情の金髪の美女は言い続けた。

「肩と腰の凝りを解されて、オイルと小顔とリンパと足裏のマッサージされて、早着替えさせられて…」



この屈辱はプロの名に誓って必ず返す！

次のプランで絶対に殺ってやるわ!!)

その顔は、普段の暗殺者の、それに、完全に戻っていた。



翌日。

教室には、昨日と変わらず、授業中だというのに、生徒を無視して暗殺プランの練り込みの為、タブレット端末を操作しているイリーナがいた。

「あはあ♪必死だね、あのビッチ姉さん。」

まあ、あ・ん・な事(笑)されちや、そつりやあプライドもズツタズタだろうしね♪

♪♪

カルマが嗤いながら呟く。

「先生……」

一向に授業を開始しないイリーナに、クラス委員の磯貝が話し掛ける。

「授業してくれないなら、殺せんせーと交代して貰えませんか？」

一応 俺等、今年 受験なんで……」

ゴト……

「はん！あんた達、あの凶悪生物に、物を教わりたい訳？」

端末を教卓に置いたイリーナは、更に言い続ける。

「地球の危機と受験を比べられるなんて…」

ガツキは平和で良いわね〜?」

「「「「「……………」」」」」」

「それに、聞けば、あんた達E組って…」

この学校の落ちこぼれらしいじゃない?

今更、勉強なんかしても、意味が無いんじゃない?」

「「「「「……………」!!」」」」」

その言葉で教室内の空気が変わるが、それに気づいていない、高飛車な笑顔をした女の言葉は続いた。

「そーだーじゃ、こーしましょ?」

私が あのタコを殺れたなら、1人当たり、500万円ずつ分けてあげるわ!!

あんた達が これから一生、目にする事も無い大金よ?

無つ駄な勉強なんかしてるより、ずっと有益でしょ?

だ・か・ら、黙って私に従いな…(ピシイッ)

…え?」

トーントーン…

台詞の最中、自分に酔いしれ、目を瞑っていたイリーナには誰が投げたか分からない、彼女に向けて投げられた消しゴムが、その顔の横ギリギリを通過し、黒板に当たって床に落ちる。

「(ボソツ) ……出てけよ」

誰か呟く。

(はっ！)

イリーナは この時になり、初めて気付く。

自分に向けられた56の瞳が、暗殺者が標的に向ける其れと同じだという事に。

「出てけ、糞ビッチ!!」

「殺せんせーと代わってよ!!」

消しゴムが、ペットボトルが、ノートのページを千切って丸めた紙くずが、対せんせーナイフが…傲慢な金髪女に向けて教室内を怒号と共に乱舞する。

「なっ…何よ、あんた達の その態度っ?!」

「殺すわよっ!!?」

「上等だ! 殺ってみろよ、ゴラ、ア!!」

「ひえっ!!?」

余りの殺気と迫力に たじろぐイリーナ。





た紙に何やら高速で書き込みをしている殺せんせーがいた。

「何してんのよ、あいつ?」

「テスト問題を作っている。」

水曜日6時限目の恒例だそうだ。」

イリーナの質問に烏間が答える。

テスト問題の作成。

確かにベンチの脇のテーブルには、問題作成の参考になっているのだろう、沢山の問題集や参考書が山積みになっている。

「…つくよん…あぁっ…!!?」

9割完成していたテスト用紙はクシャミでぶち撒けた葡萄ジュース(100割)によるシミで修復不能に。

シクシクと泣きながら、最初から作り直す殺せんせー。

此処でイリーナが疑問に思う。

「…やけに時間、掛けてない?」

「マッハ20なんだから、テスト作るくらい、あつと言う間でしょ?」

「1人1人、テスト問題が違うんだよ。」

「え?」

その疑問に、烏間が答えた。

それを初めて聞いた時は烏間も驚いたらしいが、あの超生物は、生徒の得手不得手に合わせて、クラス全員に違うテストをさせているらしい。

「ヌルフッフ…」

カルマ君と吉良君には、こっそりと大学入試の問題を紛れさせてみますか…?

尤も、あの2人なら、あっさりと解いてしまいそうな気もしますがねえ…」

高度な知能と巫山戯たスピードを持ち、地球を滅ぼさんとする危険生物。

だが、その超生物の教師としての仕事は完璧に近かった。

その姿を、木の陰から、何かを思う様に見つめるイリーナ。

次に烏間は、彼女を校庭の脇の、テニスコートに案内した。

「生徒達を見てみる。」

「…?遊んでるだけじゃない?」

傍目には男女関係なく、数人が両コートに別れ、木製のナイフを使ってボールを突く、変則的なバレーボールをしている様に見えた。

その黄色いボールには、殺せんせーの顔が描き込まれている。

自分が教えた、動く目標に正確にナイフを当てる為のトレーニング：『暗殺バドミントン』だと鳥間が説明する。

鳥間は更に語る。

暗殺経験の皆無な生徒達の、勉強と暗殺を両立させようとしている努力を。

そんな中、この教室で教師と暗殺者を両立出来ない様な3流の自称・プロ（笑）なら、この場には不要と。

此処で暗殺を成功させる為に最も重要なのは、生徒達との連携。

だからこそ、彼等を見下す事なく、対等な信頼関係を結ぶのは必須だと。

そして最後に

「イリーナ、それが出来ないと言うなら、只 単に『殺せるだけ』な殺し屋など、腐るほど居るんだ。

お前は順番待ちの、一番後ろに並び直して貰う事になるぞ…。」

…そう言うと、彼女を その場に残し、鳥間は職員室に戻って行ったのだった。  
「……………」

そして、その場に1人残された、イリーナの目には…



更に翌日。

キーンコーンコーンコーン…

「英語…今日も どーっせ、自習になるんだろな？」

「どーせ、ビッチ姉さんはアレだから、その時は外でバドやらね？」

「あ、あたし、やるー♪」

ガラッ…

そういつた会話をしてる中、教室の扉が開き、イリーナが入ってきた。

長い金色の髪を掻き上げながら、教卓の前に立つ。

「…へえ？」

その、何時もと違う表情に、響とカルマが気付く。

生徒達を背にして、無言でチョークを手に持ち、カツカツ…と、黒板に何やら英文を書き込むイリーナ。

そして振り向くと、生徒達には初めて見せる、凜とした顔付きで

「You, re i n c r e d i b l e i n b e d !」

Repeat!! (言って!!)

ずるっ!!

「き、吉良君？」

思わず、椅子から滑りコケる響と、それを心配する櫻瀬。

1つ空席を挟んだ隣の席のカルマは口を挽き吊らせ苦笑、ついでに言えば、前側の席の中村は、微かに顔を赤くしていた。

そして、他の生徒達は、この不意撃ちに等しい、まるで英語の授業な如くな流れに、目を点にして口をぽかーんと空けて固まっている。

「Hey! Harry up!! (ほら!早く!!)」

「「「「ゆ、ゆあいんくれでいぶる、いんべつど」」」」

イリーナの言葉に、思わず復唱するE組の面々。

イリーナは語り出す。

「少し前に、アメリカで とあるVIPを暗殺した時、まずは ソイツのボディガードに色仕掛けで接近したの。」

コレは、その時に彼が私に言った言葉よ。

この言葉の意味は：『ベッドでのキミは凄いや…?』…よ。」

(((((中学生に、なんて文章、読ませるんだよ!?!))))))

顔を赤くし、心の中で突っ込みを入れるE組の面々。

イリーナは話し続けた。

「外国語を短時間で習得するには、その国の恋人を作るのが手っ取り早いと よく言われているのを知ってるかしら?」

相手の気持ちを、よく知りたいから……必死で言葉を理解しようとするのよね。」  
何時も違うイリーナに戸惑いながらも、言ってる事には納得な顔をする生徒達。  
更にイリーナは話し続ける。

「私は仕事上、必要な時……その方法（ヤリカタ）で、新たな言語を身に付けてきたわ。  
だから、私の授業では……

外人の口説き方を教えてあげる!!

プロの暗殺者直伝・外国人と仲良くなれる会話のコツ……

身に付けければ、実際に外人と会った時に、必ず武器になるわ。」

(( (外人……) ))

何人かの生徒の気持ちが揺らぐ。

「受験に必要な英語なんて、あのタコに教わりなさい?」

私が教える……教えられるのは、あくまでも実践的会話術だけ。

もし……それでも あんた達が私を教師と思えないなら、その時は暗殺を諦めて出て行くわ。」

イリーナは決して無能ではない。

昨日の鳥間の……他人の言葉を聞く耳、理解する頭脳、自身が何をすべきかの結論を出せる判断力は持っていた。

何よりも、政府が依頼した仲介者が自信を持って薦め、真つ先に送り込んで来た人材なのだ。

「……………」

静まり返る生徒達。

神妙な顔付きで

「…そ、それなら、文句無いでしょ？」

そして、最後に恥ずかしそうな顔をして、尚且つ小さな声で

「…あと、悪かったわよ、色々と…」

「……………」

「……………」

「……………」

クラスは生徒達の啞然とした顔と共に、数秒間の沈黙に包まれる。

そして、それは

「……………」

びくう！

生徒達の明るく笑い声で撃ち消された。

「何、ビクビクしてんだよ？」

「この前まで殺すとか言ってた癖に〜？」

急な笑い声で、思わず身震いしたイリーナに生徒達が話し掛ける。

「なーんかさ、普通に先生になっちゃったよな？」

「んん、これじゃ もう、ビッチ姉さんなんて呼べないよね〜？」

前原と岡野が話す。

「あんだ達…わかってくれたのね？」

ぶわっ…

暗殺者云々でなく、普通に若い女性としてビッチという銘は真剣に気にしてのか、感動の余り、本気で碧い瞳に涙を浮かべるイリーナ。

「考えみりゃ、先生に向かって失礼な呼び方だったよな？」

「うん、呼び方、変えないとね。」

じーん…

嬉し過ぎて感動の涙を流すイリーナ。



「んじや…ビツチ先生で♪」

ピシイッ…

その瞬間、イリーナの周りの空気が凍り、彼女の顔も硬直する。

それでも、気を取り直し、無理矢理に笑顔を作って

「ええ…つと…ねえキミ達…?」

折角だからさ、この際、ビツチから離れてみないかな?

ほら、気安くイリーナ先生…って、ファーストネームで呼んでも構わないのよ?」

兎に角、必死なビツチ先生。

「でも、今更なあ?」

「ん。もう、すっかりビツチで固定されちゃってるしい。」

「んん。イリーナ先生より、ビツチ先生のが、じっくりくるよな?」

既にビツチで決定な空気のE組教室。

「そんな訳で、よろしくビツチ先生!!」

「授業、続けようぜ、ビッチ先生!!」  
「ビッチ!びっち!ビッチ!びっち!…」

クラス内に起きた、大ビッチコールにイリーナは額に血管を浮かべ：

「むっきーっ!!」

やっぱりキライよ!あんた達!!

特に後ろの席の2人!大っキライ!!」

盛大に叫ぶのだった。

「……………」。

その様子を廊下から眺め、まだ多少の問題はあるかも知れないが、とりあえず一安心と、安堵の溜め息を吹く鳥間。

生徒には生の外国人と会話をさせたい…

さしずめ…世界中を渡り歩いた殺し屋は適任だと…?

暗殺の為に理想的な環境を整える程、学ぶ為に理想的な環境になっていく…

俺達は、仏陀の掌の上の孫悟空ならぬ、タコの触手の上の暗殺者なのかも知れないな

…

…そう考えている烏間の顔には、微かに笑みがあった。

## 集会の時間

月に1度の全校集会。

本校舎生徒より、いち早い集合が義務付けられている、特別強化クラス・E組の面々には気が重くなるイベントであつた。

「渚く〜ん……」

いち早く整列している渚に本校舎生徒の2人……顔に雀斑のある男子生徒と眼鏡を掛けた生徒が声を掛ける。

「おつ疲れ〜(笑)」

「わざわざ山の上から本校舎(こつち)来るの、大変つしよ〜(笑)」

明らかに小馬鹿にした態度。……だが、

「おう、地味にキツイわ。」

「「き、吉良あ……君……」」

「渚だけでなく、俺にも労いの言葉、掛けてくれよ?……な?」

「「ひ、ひいいっ!」」

本校舎で噂になっている、超々・危険人物の登場で逃げ出していった。



校長先生も言い過ぎました。(笑)

……この言葉が終わった瞬間に

(アクベンス・シユナイダー!!)

プチプチプチ!だらーん……

壇上向かって左側の照明ライトを吊してある4本のワイヤーの内の3本が  
いちなり千切れ、残り1本だけで天井から宙ぶらりんな状態になってしまう。

「「「「「キヤアあーっ!?!」「「「「「

先程までの笑い声が一気に悲鳴に、

そして、

……………

静寂に変わる。

「なんだー?わいやーがろうきゆうかでもしてたかー?」

そんな中、涼しい顔で何故か棒読みな台詞を発する生徒が1人。

ざわざわざわざわざわざわざわざわ……

静寂の後、今度はざわめきの中、壇上は生徒会発表の準備が始まる。

先程の照明は、残された1本のワイヤーを ゆっくりと操作して床に降ろされる。

その間に、鳥間とイリーナがE組『担任』と副担任として本校舎教諭達に挨拶。

そんな中、中村と倉橋が、この場で痛いデザインなナイフケースを持ち出そうとするのを必死に窘める。

鳥間の気苦労は絶えない。

そしてイリーナは、渚にタコ暗殺の為の弱点を聞き出そうと、体育館で公開顔面圧迫に踏み出すが、それを鳥間が物理的に止めに入る。

鳥間の気苦労は絶えない。



生徒会の発表が始まる。

各学年各クラスに生徒会行事の詳細が記されたプリントが配られる。

E組以外に。

「…すいません、E組のプリント、まだなんですけど?」

クラス委員の磯貝が尋ねるが、生徒会役員・荒木はこめかみをポリポリ掻きながら、

「え? 無い? おかしーな…?」

ごめなさい、E組の分、忘れたみたい。





先程の照明とは反対側、今度は壇上向かって右側の照明を吊っていた4本のワイヤーが全て、『老朽化（笑）』により、1度に切れてしまい、ライトが天井から勢い良く荒木のすぐ横に落下、粉々に破損してしまう。

.....

再び体育館が静寂に包まる。

「ひえ、な、何なんだよ！一体!?!」

自分からすれば、ほんの約2分先の出来事で、思わず腰から崩れ落ち、その場にへたり込んだ荒木が呟いた。

その騒ぎの中、教諭や生徒会の面々が落下した照明を片付けてる間に、E組生徒の手に『手書きの行事表コピー』がマツハの速度で配られる。

教諭の列には、いつの間にか、鳥間とイリーナの間に、中途半端な変装をした殺せんせーが立っていた。

鳥間が「お前は公の場に出るなど言っているだろうが!!」と迫るが、殺せんせーは、どこ吹く風。

鳥間の気苦労は本当に絶えない。

その殺せんせーが響に目を向け、瞬時に、その『視線』に気付く響。

殺せんせーは、響に対して、何か言いたそうな困った顔をしている。

先程からの照明のワイヤーの件、殺せんせーだけは、その犯人が響だと信じて疑っていないのだが、

「大く丈夫！当然、切り口は鋭利な刃物で

スパツ！…て不自然さはなく、きちんと自然な感じに装ってるよ♪」

…と、言いたげな顔の響。

確かに、切れたワイヤーは事後検証するだろうから、証拠云々な面に置いて、大事な事柄なのは間違いないが、そういう問題ではない。

しかし、響は どこ吹く風。

暫くして集会が再開される。

いつの間にか、E組にプリントが配られているのに、面白くない顔をしている生徒会の進行の中、イリーナは さり気に…否、標的（ターゲット）が色んな意味合いで 矢鱈と目立っている為、堂々と殺せんせーを切りつける。

…だが、瞬時に烏間に物理的に制止され、その儘 体育館から強制退場となった。烏間の気苦労は絶えない。

「はは…」

「はは…」

「しよーがねーな、ピッチ先生は。」

その やりとりを見たE組の面々は笑い出すが、それを明らかに面白くない顔で見る生徒がいたのだった。



集会が終わり、山の上の校舎に戻る前に、自販機でジュースを買う渚。

「…おい、渚!」

そんな渚に、集会が始まる前に絡んできた2人組が詰め寄る。

「お前等さー、最近、ちよつと調子乗ってないか?」

「えっ…?」

「集会中に笑ったりして、周りの迷惑考えろよ。」

「ええっ…?」

渚は この時、彼等の背後に、民○党の面々が巨大なブルーメランを飛ばす光景を、確かに見た。

「E組はE組らしく下向いてろよ?」

「どうせ、もう人生詰んでんだからよ?」

「……………」

「おい、何だ?その不満そうな目わ?」

更に詰め寄る2人。

だが、世には良くも悪くも、タイミングという物がある。

この光景を偶々、旧校舎に戻ろうとした鳥間が見てしまう。

「…チツ！全く、この学校は…！」

渚を助けに止めに入ろうとした鳥間の肩を、ガシツと後ろから誰かが掴む。

鳥間が振り向くと、そこには、カツラ等の変装は、その儘で、顔を黄と緑の縞模様でニヤニヤ笑ってる殺せんせーがいた。

思わず、変な汗を流す鳥間。

殺せんせーは言う。

「あの程度の生徒に、そう屈したりはしませんよ？」

私を暗殺しようとする生徒達はね。」

そして、教諭に見られてるのも気付かずに、増長した雀斑の生徒は渚のネクタイを掴み上げ、

「何とか言ってみろよE組!!殺すぞ!!」

「…！」

殺すぞ!!

殺すぞ!!

殺すぞ!!

(殺す…?)

この一言で、渚の中で、何かが弾けた。

(殺す…殺す…か…)

「？」

その時、確かに周辺の空気が変わった。

「クスツ…殺そうとした事なんて無い癖に…」

ぞっ…

冷たく微笑みながら言った渚の言葉に、思わずネクタイから手を離し、まるで殺し屋にでも会った様な脅えた顔をして、後退りする2人。

「(…何だ、今の…殺…気?)」

渚は既に、この2人でも充分に感じる事が出来る位の殺気を放てる様に、確実に暗殺者として成長していた。

「ほくらね？私の生徒達は、殺る気が違いますから♪」

「……………」

したり顔の殺せんせーと複雑な顔の烏間。

しかし、話は これで終わらなかった。

ドガッ！

「ぐあっ?!」

「へえ？E組は殺害対象？」

「だったら、殺られる前に対処しとく必要があるよな？」

「き、吉良君？」

「吉良あ？」

烏間とは反対側の場所から渚を見つけた響が、その場に駆け付け、雀斑の腹に一撃を入れたのだった。

「悪いな、友達を死なせる訳には、いかないんでな？」

「てか、俺も調子ぶっこいて笑ってたんだから、殺す対象なんだろ？」

「オラ、殺れるもんなら殺ってみろよ？」

ドガッ！

「ひいつ?!」

返す刀で、メガネの生徒の腹にも膝蹴りを入れる響。

バガツ!ズゴツ!グシャツ…

「ご、ごめんなさいい〜」

「あゝ、聞こえんな!!」

それで終わる筈も無く、まだまだ続く、響無双。

「き、吉良君、もう、大丈夫だから!」

渚は先程の殺気は何処へ行ったのか、慌てて青い顔で止めに入るのだった。

「……………」

その様子を、何とも言えない顔で見ている2人の教諭。

「あの〜、烏間先生…やはり、お願い出来ますか…?」

「やれやれ…全く…!」

ダツ…

響を止めに走り出す烏間。

烏間の気苦労は本当に絶えない。

## 支配者の時間

「だーかーらー、いきなり「ぶつ殺すぞ!?ゴラァ?」ですよー?がつこーないでさつじんじけんや、さつじんはんがでるのをとめただけですよー?おれじしんもころされそうだったわけだし、どーかんがえても、せーとーぼーえーじやないですかー?むしろ、おおごとがおきるのをとめたわけだから、ほめるべきでしょー?だーかーらー、『僕は悪くない』…:みたいな?」

その日の放課後、響は烏間と一緒に理事長室に呼び出されていた。

理由は 全校集会の後、本校舎の生徒に暴力を振るつたという件についてだ。

「吉良!何だ、その口の利き方は?!」

響の棒読み口調に対して、学年主任の大野が怒鳴りつけるが、

「チツ、ウツセーナ…:反省してまーす。」

当人は嘗て、あまりのスーツの着崩し加減に、テレビを見ていた小学生にまで、「いや…:コレは無いわあ…」と言わせた某スノーボーダーの謝罪会見な如く、まるで堪えてない。

「理事長先生、彼が多少、やり過ぎだったのも事実ですが、本校舎の生徒が先にE組の生



徒を脅していたのも事実です。

事情聴取なら、双方を呼ばないと、公平さに欠けます。」

烏間が響のフォローに回り、結果的には、彼の必死の説得により、嚴重注意で留まり、大した咎は出なかった。

最終判断を下したのは、柗ヶ丘学園理事長の浅野學峯。

大野は もう少し厳しい処分を期待していたのだが、学園トップの決定故に、何も文句は言えなかった。



「烏間先生、迷惑かけました、すいませんでした。」

「いや、元々は俺とタコも、あのやりとりは最初から見えていたんだ、直ぐに あの場に駆けつけなかった俺達の責任だ。」

理事長室を後にして、本校舎本館の廊下を歩きながら、会話する2人。

「そもそも あのタコが、渚君なら心配いららない、とか抜かすから……」

「渚……」

「ん？彼がどうかしたか？」

「烏間先生は気づきませんでしたか？」

「アイツの放った殺気を……」

「…吉良君、そういう話は、本校舎ではしない方が好いぞ？」  
「あ…すいません…。」



「じゃ、俺は今日は帰りますから。」

「ああ、気をつけてな。」

あまり、彼等を待たせては悪いだろう。」

「え？」

響は本館の出入り口で烏間に帰りの挨拶をすると、

「や、吉良っち、お疲れ様〜♪」

「吉良君、ど、どうだった？」

「カルマ…渚…」

そこには、カルマと渚が響を待っていた。

「ほいよ♪」

カルマがポイツと、紙パックのジュースを響に投げ渡す。

「お♪サンキュ…って、『ゴーヤ・オレ』？」

こ、これはまた随分とマニアックなチョイスをしたな？」

「ボタン、押し間違えてき、でも、棄てるの勿体無くね？」

そう言いながら、カルマはいつもの「いちご・オレ」をストローで啜る。

「後始末押し付けかよ!？」

「…まあ、アイツ等には散々脅しておいてやったからなく、「オメー等、死亡フラグ立ったぞ?・卒業後か、俺が退学（クビ）になった時を楽しみにしとけ?な?」…って感じでさ（笑）」

「ははは…」

響の台詞に苦笑いしか出来ない渚。

「大野のヤローが、あのソバカスとメガネを呼ばずに、俺しか呼び出さなかったのが逆に良い方向に出たっぽいのもあるかな。烏間先生がその辺を強調して「公平さに欠ける」って、理事長を本気で説得してくれたからな、あの先生、マジ感謝だよ。」

「ん、吉良たちは優秀だからね、烏間先生からすりゃ、殺せんせー暗殺の『駒』が減るのを回避したかっただけかもよ?」

「それでも…だよ…」

…ってかカルマ、オメー、あの集会フケてたらしいじゃねーか？」

「罰喰っても痛くも痒くもねーし♪」

「オマエわ…」

「成績良くて素行不良って、こういう時、羨ましいよ…」

「いや、今回は後悔してるよ？」

何でも、怪奇現象が2回も起きたってゆーじゃない？…で、校長と生徒会の奴等が、

ビックリして腰抜かしたって（笑）」

「おう、（我ながら）傑作だったぜ（笑）」

直撃すれば、もっと面白かったけどな。」

「吉良君…それは流石にシャレにならないと思うよ…」

そんな会話をしながら、学校を去る3人。

その様子を、本館最上階の部屋からガラス越しに眺めている男がいた。

柵ヶ丘学園理事長・浅野學峯である。

「E組…ENDのE組が普通の生徒を押しつけて歩いて行く…」

それは、この学校では合理的ではない。

少し改善する必要がある。

これは、私にとっては「暗殺」なんかより優先事項だ…。」



ガララッ…

この時、職員室の扉が開き、1人(?)のタコが入ってきた。その瞬間…バキッ

「答えは簡単。」

男は六面体のパーツの継ぎ目にマイナスドライバーを差し込み捻り、

「分解して組み直す…実に合理的です。」

そう言う男…学園理事長・浅野學峯はバラバラになった六面体のパーツを改めて組み込みながら、

「初めまして、殺せんせー。」

職員室に入ってきたタコに、にこやかに挨拶した。

「…?」

殺せんせーは、「誰?」…な顔をして、鳥間とイリーナに顔を向けると

「この学校の理事長サマですってよ?」

「俺達の『教師』としての雇い主だ。」

「どーも。この学園の理事長をやっている、浅野です。」

理事長と知った途端に

「にゅやっ?!こ、これはこれは、こんな山の上までっ!!」

マツハでお茶を入れ、

「それはそうと、私の給料、もうちよいプラスになりませんかねえ？」

肩を揉み、下手になる黄色いタコ。

「いえいえ、此方こそ すいません。」

「いずれ、ご挨拶に行こうと思っていたのですが…」

(触) 手揉みする殺せんせーに浅野は言う。

「あなたの説明は、防衛省や この烏間さんから聞いていますよ。」

まあ、私には…全て理解出来る程の学は無いのですが…」

「……………」

「なんとも悲しい生物(おかた)ですわ…。」

本来ならば世界を救う救世主となる筈が、

世界を滅ぼす巨悪と なり果ててしまうとは…」

「……………」

「いや、ここで それをどうこう言う気はありません。」

私如きが どう足掻こうが、地球の危機は救えませんし…」

学園理事長である浅野が、わざわざ山の上の旧校舎まで出向いた理由…それは、

「単刀直入に言います。ここ、E組は この儘でなくては困ります。」

「……」

「……この儘と言いますと？成績も待遇も、最低辺の現状を維持しろとでも仰る？」

働き蟻の法則…

どの様な集団でも、20割は怠け、20割は働き、残り60割は平均的になる法則…  
浅野が目指すのは、5割の怠け者と、90割の働きの者がいる集団。

だからこそ、95割の働きの為には、E組の様な5割の存在が必要不可欠と語る。

E組の様には なりたくない…

E組にだけは行きたくない…

95割の生徒が そう強く思う事で、この理想的比率は達成する…と。

「なるほど…」

それで、5割のE組は弱く惨めな存在でなくては困る…と。」

「今日、D組の担任から、「うちのクラスの生徒が、E組の生徒に暴行された。『ぶつ殺すぞ』と凄いい目で睨まれ脅された」と改めて、苦情が来ました。」

「ちよつと待つてよ、それって、キラと渚の事でしょ？アレは…」

「はい、私が知っている情報と少し、食い違う部分がありましたから、D組担任と被害者



だという生徒に、確認を取りました。

結果から言いますと、D組担任は、経緯は どうであれ、理事長である私に虚偽報告をしたという事で…まあ、それなりの処分を下しましたよ。」

少し含みのある笑みを浮かべながら、浅野は語る。

「暗殺をしているのだから、多少なり攻撃的になつたりも仕方ないでしょう。

それは それで構いません。

それくらいでないで、アナタを仕留めるなんて、出来ないでしょうからね…」

「何が言いたいのですか？」

烏間の質問に浅野が答える。

「問題は…成績底辺の生徒が一般生徒に逆らう事。それは私の方針では許されない。

以後、厳しく慎む様に伝えて下さい。」

ジャラ…

そう言う浅野は、上着の内ポケットから知恵の輪を取り出すと、

「1秒以内に解いて下さい！」

…と、殺せんせーに向けて放り投げた。

「え!?いきなりっ…」

ガララッ

「失礼しまーす……」

その時、職員室の扉が開く。

入ってきたのは響、渚、カルマの3人。

「あら、アンタ達、どーしたの？」

「いや、殺せんせーに、今度の間テストの事で話をしたかったんだけど……」

「何か今、それ処じゃないっぽいね〜？」

「出直すか……」

響達の視線の先には、幾本もの触手が、知恵の輪の如く絡み合い、身動きが出来ない状態の黄色いタコがいた。

（（一体、何があった!?!））

その様を見た浅野は

「噂通り、スピードは凄いですね。」

確かに此なら……どんな暗殺だって躲せそうです……でもね、殺せんせー……」

浅野は膝を着き、床に転がっている殺せんせーと視線を合わせ、

「この世の中には……スピードでは解決出来ない問題も沢山あるんですよ？」

冷めた笑みを浮かべながら言い放った。

そして立ち上がり、響達に目を向けると、

「やあ君達、中間テスト、期待してるよ！

頑張りなさい!!」

笑顔を浮かべ激励するが、その乾いた「頑張りなさい」は、少なくとも3人の内1人を暗殺者から一瞬でENDのE組に引き戻すのだった。

「渚君…顔色悪いよ？大丈夫？」「渚…」



暗殺を完全にコントロール、支配して、無敵と思われていた暗殺対象(ターゲット)…しかし、柵ヶ丘の教師としては、絶対的支配者の前に、決して無敵ではなかった。

だが、このタコは、これで終わるほど、柔らかいタコではない。

その身からは、メラメラと反撃の炎が燃え上がっていた。



数学 9人

社会 3人

理科 4人

英語 4人

そして、

「何で俺だけNIIYITΘなんだよ!？」

「寺坂君は特別コースです、

苦手科目が複数ありますからねえ。」

寺坂の目の前のタコは、火影マークの鉢金を頭に装着していた。

更に、

「俺は何だよ?一度、幽体離脱してみる?

…で、そのまんま、死んでみる?」

「にゅやつ?!いや、吉良君は死角がないから、なんとなく…」

響の前の殺せんせーのハチマチは金色。

そして「?」のマーク。

所謂、黄道12星座の蟹座の印である。

「…の・タ・コ…」

NDЯITΘ 1人

デ※マスク 1人

28体分身を駆使して、E組全員に指導していく殺せんせー。

28人の殺せんせーが見られる風景は、異様としか感じられず、クラスの殆ど全員が、頭から変な汗をかきながら、指導を受けていた。

ぐにゅんっ

「「「「「うわっ!?!」「「「「「

そんな時、いきなり全ての殺せんせーの顔が、Sの字に歪む。

「「「「、カルマ君に吉良君!

急に暗殺しないで下さい!!

それ避けると残像が全部乱れるんです!」

『意外と繊細なんだな、その分身!!』

「「ちっ…:」

舌打ちする響とカルマ。

((((てゅーか、息ピッタリだな!?!)))))

E組生徒は彼等の背後に、それぞれの額に「肉」と「米」の文字が書かれた、マッス

ルな2人の男を見た。

「でも殺せんせー、こんなに分身して、体力保つの？」

「御心配なく。」

渚の疑問にも、

「1体外で、休憩させていますから。」

「それ寧ろ、疲れない!？」

問題無し?をアピールする殺せんせー。

∴以上が、殺せんせーが柵ヶ丘学園理事長・浅野學峯と初めて顔を合わせる、約2時間前の出来事であった。



そして翌日。

『』『』『更に頑張つて殖えてみました。』

さあ、授業開始です。『』『』

教室には、約100体に分身した殺せんせーが待ち構えていた。

『』『』『殖え過ぎだろ!!』

『』『』『』

生徒1人に対して3〜4人掛かりで指導する殺せんせー。

数の多さ故に、分身も かなり雑になり、中には完全な別キャラになっている物も。  
ド○えもんにもツッキー○ウス、更にはフ○ーザ様が紛れ込んでいる始末である。

「…どーしたの、殺せんせー？」

何か気合い、入り過ぎじゃない？」

「「んん？そんな事ないですよ。」」

茅野力エデの質問に、殺せんせーは、分身3体同時に答える。

…この世の中には…スピードで解決出来ない問題もあるんですよ？

前日の浅野學峯の言葉を引き摺っているのは明らかだった。

キーンコーンカーンコーン…

「ぜー、はあー、ぜー、はあー…」

授業終了のチャイムが鳴ると同時に分身を解除し、団扇で扇子で下敷きで、自らの身体を扇ぎながら体中で息をする殺せんせー。





そして…

「…いや、勉強の方は、それなりで いいよな？」

「…うん、なんとたつて暗殺すれば100億だし。」

「「100億あれば、成績悪くても 最後の人生、薔薇色だしさ♪」」

「にゅやつ?!そ、そういう考えをしますか、君達は!!」

ENDのE組にとっては、テストなんかより、暗殺の方が余程身近なチャンスと切り切る生徒達に、目を点にする殺せんせー。

「なるほど、よく分かりました。」

今の君達には…暗殺者の資格がありませんねえ…!!」

顔にX印を浮かべる殺せんせー。



「どうしたんだよ、殺せんせー?」

「急に、皆に校庭にしろって…」

あの発言の後、殺せんせーはE組の生徒全員、そして烏間とイリーナを校庭に呼び出した。

「いや、「先生」の前で、あの発言はないだろうに…」

「吉良?」

「ちよつとタコ？あたし達まで呼び出すなんて、一体どーしたのよ？」

イリーナが問い掛ける。

それに対して殺せんせーは

「イリーナ先生、プロの殺し屋として、伺いますが…貴女はいつも仕事をする時、用意するプランは一つだけですか？」

「…!!」

質問に質問で返す。

これに対するイリーナの返事は『NO』。

曰わく、本命のプラン通りに事が済むケースの方が、寧ろ少ない。

不測の事態に備え、本命の他に予備のプランをより綿密に作っておくのが暗殺の基本と言う。

「では、次に烏間先生に伺います。

ナイフ術を生徒に教える時…重要なのは第一撃だけですか？」

烏間もイリーナ同様、第一撃だけでなく、それが躲された時の第二撃三撃の必要性を重要性を語る。

「せんせー、結局、何が言いたいんだ」「先生方の仰る様に…」

くるくるくるくるくるくるくるくるくる…

校庭の弩真ん中に移動した殺せんせーは、体をくるくると高速回転させながら語り出した。

「先生方の仰る様に、自信を持てる次の手があるからこそ、自信に満ちた暗殺者になれる。対して君達は どうでしょう？」

くるくるくるくるくるくるくるくる…

さらに回転速度を上げる殺せんせー。

『俺等には暗殺があるから、それでいいや』…と考えると、本業である勉強の目標を低くしている。

それは…劣等感の原因から目を背けているだけです。」

くるくるくるくるくるくるくるくる…

「もし先生が この教室から逃げ去ったら？」

もし他の殺し屋が先に先生を殺したら？」

ゴオオオ…

次第に くるくる回転している殺せんせーを中心に小さな竜巻が発生した。

そして回転しながら、殺せんせーは言い続ける。

「暗殺という抛り所を失った君達には、もはやE組の劣等感しか残らない！」

そんな危うい君達に：先生から警告（アドバイス）です!!」  
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオウツ!!

「第二の刃を持たざる者は…」

暗殺者を名乗る資格無し!!!」

ついに それは、直径数十呎、高さ数百呎に及ぶ、巨大な竜巻となった。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドツ…

「ヌルフフフフ…」

校庭を少し手入れしてみました。」

そして 竜巻は止み、校庭の真ん中…竜巻の中心部に居た、いや、竜巻の核だった殺せんせーは事も無げに言ったのだった。

「「「「「!!」」」」」」

何という事でしょう…

殺せんせー（たくみ）の竜巻（ぎじゅつ）によって、あの荒れ果てていた凸凹だったグラウンドは、真つ更な平地に整えられました。

あれほど生え放題だった雑草や小石は全て取り除かれ、立派な競技用トラックまで完備されています。

様変わりし過ぎた校庭を見て驚く生徒達。

「先生は地球を消せる超生物。

この一帯を平らにする等 容易い事です。」

超生物は瞳を妖しく光らせ言い続ける。

「もしも君達が…自信を持てる第二の刃をさせなければ、この私を相手に値する暗殺者は この教室にはいないと見なし、校舎ごと平らにして先生は去ります。」

「……………」

この発言には烏間も顔を曇らせる。

「第二の刃…何時までに?」

渚の質問に、殺せんせーは ごくごく当たり前の如く答えた。

「決まっています。明日です。」

明日の中間テスト、クラス全員が50位以内を取りなさい!」

「「「「「はああ?!」「」」」」」

驚愕する生徒達。

それに構わず殺せんせーは言い続ける。

「君達の第二の刃は先生が既に育てています。」

本校舎の教師如きに劣る程…先生はトロい教え方をしていません。」

「んん。それは解る。」



## テストの時間

中間テスト。

全校生徒が本校舎で受ける決まり。

E組教室の立ち会い：否、「見張り」を受け持つ大野が わざとらしい咳払いや貧乏揺すり、教卓を指で弾く等の雑音を立て、露骨に集中を乱す嫌がらせという完全アウエーの中、E組生徒は試験に取り組んでいた。



その頃、殺せんせーは旧校舎のある山の上から、自分の生徒達がテストを受けている本校舎を眺めていた。

シュツ…

その背後から、殺せんせー目掛けて飛んでくる、対せんせーナイフ。

「本気なの？クラス全員50位以内に入らなければ出て行くって…」

イリーナが話し掛ける。

「はい。」

「出来る訳ないじゃない！」



こないだまで底辺の成績だったんでしょ、あの子ら!!」  
殺せんせーの返事に、呆れ顔のイリーナ。

その顔は険しい。

しかしながら殺せんせーは

「どうでしょう?」

確かに、こないだまでは知りませんが、今は、私の生徒達です。

ピンチの時にも、ちゃくんと我が身を守ってくれる:私が彼等に授けているのは、そういう武器ですよ?」

自信たっぷりの表情で言うのだった。

「ふう……」

先程とは別の意味合いでの、笑みを含んだ呆れ顔をするイリーナ。

「:で、どうするの?」

「にゅ?」

「あの子達が全員、トップ50入りして、本校舎に復学、E組(ここ)に誰も居なくなつたら どうするの?って聞いているのよ?」

E組救済処置システム:

定期テストで学年50位以内に入り、尚且つ元の担任がクラス復帰を許可すれば、差

別対象であるE組から抜け出せる。

だが、元々成績不振だった上に、万端でない学習環境では、厳しい条件でもあった。

「あの子達、E組（ここ）に残るかしら？」

「又ルツフフフ…」

イリーナの疑問に、殺せんせーは不敵な含み笑いをして…

「ど、どうしましょう~~~~っ??」

大泣きしながらイリーナの足にしがみつくのだった。

「えーい、離せ！このセクハラタコ!!」

そこまで考えてなかったんかい!？」



「うわあ！」

「来た来た来た来た!!」

数式という強固な鱗に被われた巨大な空飛ぶ鱈・問4がE組の生徒達を襲う。

「ど、どーすんだ、これ？」



「それらを…繋ぐ…!」

「そして、全身を見れば…」

『『『『『解った!!』』』』』

気付けば巨大鱔・問4は青魚になっており、生徒達の手にしたナイフで三枚に降ろされる。

殺せんせーの授業の成果が現れ始める。

問題文の重要部分の解析、解き方のコツ：

それ等を見極める力を、マッハの授業で教わった生徒達。

答案用紙にペンを走らせる その姿は、明らかに2年の3月に成績不振でE組行きとなった生徒ではなかった。

凶悪な牙を持つ肉食獣を連想させる問5、

鋭い爪と嘴を持つ猛禽類を思わせる問6、

火炎放射器を持つモヒカン男の様な問7：

その見掛けに惑わされず、次々と問題を解いていくE組の面々。

しかし、問11：漆黒の闇を纏った影の巨人が背後から振り上げた狂爪の前に、殆どのE組生徒は力尽き倒れたのだった。



2日後…

「…これは一体、どういう事でしょうか？」

公平さを著しく欠くと感じましたが…」

烏間が本校舎に抗議の連絡を入れる。

テスト2日前に、出題範囲を全教科大幅に変更した事についてだ。

いや、変更云々ではない。

その事をE組側に伝えていない事についてだった。

しかし、本校舎側は、烏間サイドの連絡ミスの一点張り。

烏間は焦る。

(あの理事長…自分の主義の為に『其処』までやるか!!!)

櫛ヶ丘は進学校。

直前の詰め込みに順応出来るか試すのも、教育方針の1つ。

その辺りは、まだ良い。

問題は浅野學峯理事長自らが、本校舎側で変更部分の教鞭を取ったという点。

(余計な妨害をしてくれた…)

今、暗殺対象(コイツ)に、このE組から去られたら、元も子もない!!)

E組教室では、当然の事だが、生徒達も沈んでいた。

磯貝悠馬……合計点数367点 学年69位  
 片岡メグ……合計点数364点 学年71位  
 神崎有希子……合計点数357点 学年77位  
 竹林考太郎……合計点数350点 学年84位

潮田渚……合計点数315点 学年105位

寺坂竜馬……合計点数230点 学年161位

(3年生生徒数190人中)

自信はあつた……

しかし、予想の遙か外から仕掛けられた問題(こうげき)に、成す術が無かつた……

だが、生徒以上に沈んでいる人物？が1人いた。

生徒達に背を向け、黒板の前で俯く殺せんせーだ。

「…先生の責任です。」

「どうやら この学校の仕組みを甘く見過ぎていた様です。 : 君達に顔向け出来ませ  
ん。」

「……………」

殺せんせーの心情を察してか、生徒達も完全に黙り込む。

……………。

何の気配も感じさせない、無音の教室。

シュ…

「にゅやつ!?!」

ガアン！ カラン…

そこに、殺せんせーに向けて投げられたナイフが黒板に当たり派手な音を立て、静寂を破る。

「あゝ、惜っしい！」

投げたのは赤羽カルマ。

「良いの〜？顔向け出来なかったら、俺が殺しに来んのも見えないよ〜？」  
笑いながら教室の前側に進むカルマ。

「カルマ君!!今、先生は落ち込んで…」

パサ…

怒る殺せんせーに、カルマは自分のテスト用紙を見せる。

「俺、問題変わっても関係ないし。」

赤羽業……………合計点数494点 学年4位

「うおっ!？」

「マジか、カルマ…」

「すっげえ…」

驚くE組の面々。

「俺の成績に合わせてさあ、あんたが余っ

計な範囲まで教えてくれたからさ。

そっくだろ？吉良つち？」

「ああ、全くだ…!」



吉良響……合計点数498点 学年……1位!!

「な、マジかよ、吉良?!」

「うっそおーっ!」

「凄いい!凄いい凄いい!!」

さつきまでの静けさは何処へやら、一気に騒がしくなるE組教室。

そんな中、カルマは言う。

「言っとくけど、俺はE組(ここ)、出る気は無いよ?」

前のクラス戻るより、暗殺(こっち)んが、全然楽しいし。」

「同じく。」

カルマの発言に響も同調する。

「…で、どーすんの、そっちは?」

「全員50位に入んなかったって言い訳つけて、ここから尻尾巻いて逃げちゃう訳?」

「それって結局さあ…」

ここで響とカルマは最高に悪(よ)い顔で、

「…殺されるのが、怖いだけなんじゃないの? (笑)」

言い放つのだった。

ピク…

この完全に人？を舐めきった挑発っぷりに、思わず頭に青筋を浮かべ、悔しい表情を浮かべる殺せんせー。

これに気付いた片岡メグが隣の席の前原に、何かの合図の如く、肘で突つつく。

「！」

これに察する前原。

そして他の面々も、次々とアイコンタクトを交わして通じ合う。

「なあーんだ、殺せんせー、怖かったのかあ？」

「それなら正直に言えば良かったのにい」

「ねー？「怖いから逃げたい」って（笑）」

ピクピクピクピク…

笑顔を浮かべる生徒達からの集中口撃に、顔を真っ赤にして、頭中に血管を浮かべる殺せんせー。

「あんた達、あんまりイジメてやるんじゃないわよ！」

「え？ビッチ先生…？」

「おおーイリーナ先生〜！」

「ここで生徒達を窘めたのはイリーナ。」

まさかの発言に驚く生徒達と、不意に見せた優しさに、思わず号泣の殺せんせー。

「このタコね、逆に皆がトップ50入りして、本校舎に行ったら寂しい…って、あたしに泣きついた位なんだから！」

あまり そんな事、言うんじゃないの！」

どどっ  
!!!!

大爆笑に包まれるE組教室。

その時のイリーナは、先程の響とカルマ以上の悪（よ）い顔をしていた。

「にゅや~~~~~」

そんな事、言っていないせん！」

「へ〜？なあ、タコって寂しいとストレスで死ぬのかな？」

「ん？実験する価値はあるかもね〜？♪」

どどっ  
!!!!

この2人の発言に教室は更なる笑いに包まれる。

「にゅや~~~~~」

恐くて逃げませんし、寂しくもありませんし、それで死んだりもしません！

と・に・か・く！期末テストでリベンジです！

倍返しですよ!!

てゆーか君達、いつまでも笑っているんじゃないですよ?!」  
最高に顔を赤くしたタコが絶叫する。

「だいたい、何が可笑しいんですか？」

悔しくないんですか、君達わ!!」

しかし、暫くの間、教室内の笑い声は止む事がなかった。



その日の放課後、理事長室に数名の教諭と生徒が呼び出された。

大野健作（A組担任・3年学年主任）

瀬尾智也（A組）

烏間惟臣（E組（副）担任）

吉良響（E組）

「さて…今回、君達を呼んだ理由は解っているよね？」

桐ヶ丘学年理事長の浅野學峯が冷たい笑みを顔に出して問う。

「勿論。俺のA組復帰と瀬尾のE組堕ちについてですよね？」

響が意味深い笑みを瀬尾に向けて答えた。

「うぐ…」

顔を挽き吊らす瀬尾。

3月、響がE組行きの理由となった『浅野・瀬尾血祭り事件（笑）』。

成績優秀者至上主義の柵ヶ丘で当時、転校したばかりの響は定期テストを受けておらず、成績未知数。

一方の瀬尾は成績上位者故、本来ならば響は先に手を出された被害者であるにも拘わらず、一方的に：正当防衛を通り越して過剰防衛感は否めないが、断罪されたのだった。

しかし、響が その不当性が訴え、ならば、次の定期テスト：即ち、今回の中間テストの結果次第で、当時の響の正当性の容認と、瀬尾の過失を認め、改めて処分するという約束を学年主任の大野と、響は理事長の前でしていた。

「先に言いますが、理事長先生？」

俺がトップ取れたのは、結果からすりや、E組の先生方の指導による物ですから。

今更、本校舎でへボ教師の授業を受けて、成績落ちるつても馬鹿みたいですよね？  
だから、俺は赤羽同様、E組残留の方向で お願いしますよ。」

「だ、誰がへボ教師だっ!？」

響の言葉に大野が過剰反応するが、

「大野先生……？」



②本校舎のエレベーター使用禁止。

補足：足を怪我した等の場合、松葉杖や他の生徒のアシストを得た上で、階段を使用する事。

尚これは、過去に足を怪我したE組生徒の待遇の実例に基づく物である。

③全校集会等、全校生徒、或いは全同学年が集まる集会がある場合、E組生徒の最初の1人目が、その場に来る前に直立して待機しておく。

…他々等々

※学内に置ける、授業必需品以外の購買の禁止。(パン、ジュース等)

※瀬尾智也の生徒会からの退会(今日付け)

…他々等々

※尚、上記に反したのが確認された場合、ペナルティーとして…

~~~~~

「よくもまあ、此処まで具体的に…」

職員室で赤羽君や中村さん達と、何やら話しながらパソコンで打ち込んでいたのはこれだったのか…」

A4用紙5枚に渡って書き込まれた事項を見ながら、呆れ顔で言う鳥間。

あの時の響達に、角やら羽根やら尻尾やらが見えたのは、幻覚ではなかったと、少し

疑ってしまう。

「瀬尾、全て呑むか、E組に来るか、好きなの選べ。」

こっちの出した条件の譲歩や妥協は、一切認めんぞ？

尤も、オマエが今更E組に来たら：まあ、どーなるか想像付くよな？

あ、第3の選択肢。

この場で自主退学宣言♪

担任や理事長先生が居るから、余計な手間が省けるぜ？」

総合的に見れば、E組以下な扱いに成り得る部分があり、A組担任の大野が一部異を唱えるが、

「あー、分かりました。」

じゃ、こっちの出した条件は、最初から無かった事にして、瀬尾はE組って事で良いですよ。」

この一言に瀬尾が待ったを掛け、響（達）の条件全てを受け入れる事で収まった。

因みに途中、大野や瀬尾が助けを求めるとかの様に浅野理事長に顔を向けていたが、理事長はニコニコと微笑むだけで、何も言わず、大野達も黙るしかなかった。

「まあ、大野先生からしたら、悔しいでしょうねー。」

あれだけの妨害工作やっつとして、結局は俺がトップだもんなー（笑）

追い打ちに響がイヤミったらしく呟く。

「妨害…?」「ほう…?」

響の言葉に烏間と浅野が反応する。

「何だ？ 範囲変更は、其方の連絡ミスだろうか？」

大野が反論するが、

「いやいや、そっちでなくて…」

ゲホツゲホツゲホツ！」

わざとらしく咳き込むと、

DANDDANDAN! DANDDANDAN!

DANDDANDAN! DANDDANDAN!

大きく音を立て足踏みしながら理事長の机の前まで歩み寄り、

タタツタタツタタツタタツタタツ：

机の上で指を弾き始める。

ゲホツ！ゲホツゲホツゲホツ！

DANDDANDAN! DANDDANDAN! DANDDANDAN! DANDDANDAN!

タタツタタツタタツタタツタタツタタツタタツタタツタタツ：

咳、足踏み、指弾きの三重奏：

「やかましいー！」

たまらず大野が怒鳴りつける。

しかし、

「ですよー。五月蠅いですよー。」

こんなの1限から5限まで1日中、テストやってる中でされたりしたら、堪ったもんじゃないですよー？

それでも学年トップだった俺SUGEE!みたいな？」

「馬鹿な、俺は其処まで五月蠅くはしていないぞ！」

「な？其処までって…？」

「アンタ、そんな事を…そんな事までしていたのか!？」

「いや、それは…」

響の言葉に言い返した大野の台詞に鳥間が過敏に反応、大野を問い詰める。

『マジモード』の顔となった鳥間に大野は何も言える心理状態ではなくなつた。

「鳥間先生、落ち着いて下さい、その件については大野先生から事情を聴きましょう。」

「…はい。」

浅野の言葉で鳥間は退く。

「とりあえず、瀬尾君と吉良君の件は終わったから、2人は帰って良いでしょう。」

旅行の時間

「何だか心配だわ……」

「あはは……」

来週、桐ヶ丘中学校の3年生は京都方面に修学旅行。

学級委員の片岡メグは、渚から渡された班のメンバー表を見て、溜め息を吐く。

◆四班◆

・潮田渚（班長）

・杉野友人

・赤羽業

・吉良響

・茅野カエデ

・奥田愛美

・神崎有希子

「ん、分かるよ、片岡さん。」

渚が班長つて、少し頼りないよね？」

「大丈夫だよ、そこは俺達がフォローするからさ〜？♪」

「あんた達2人が心配なのよ!!」

響とカルマの「心配すんな（キラッ）」に目を三角にして突っ込む片岡。

「はあ…：やつぱり あんた達は事前に、あたし等の班に入れておくべきだったかも…」

E組最大最凶の問題児である響とカルマ。

片岡は旅行中、もう1人の学級委員である磯貝と一緒に この2人の脇をガツチリと固め、見張っておこうかと真剣に考えていたのだが、それより先に、磯貝と前原がメンバーを集めてしまった為、『問題児2人を学級委員2人で監視しよう計画』は水泡と化したのだった。

「どんまい!!」

「うっさい!!」

「でもさ〜、片岡さん？」

俺達が…：つて言いならさあ、寺坂達は一体どーなんだよ？」

「あの班は、狭間さんが居るから心配いらないの!」

「あ、納得。」「あははは…」

カルマの疑問に対して片岡が即答、納得する2人。

2人の、いや、その場に一緒に居た渚を含む3人の脳内には、黒い笑みを浮かべた狭間が寺坂、吉田、村松の首から手綱を着けて、従えているイメージが浮かんだのだった。「本当にオマエ等、頼むから旅先でケンカ売って、問題になったりするなよ？」

磯貝が改めて釘を刺すが、

「大丈夫！売ったりはしないよ。」

…売ったりは…ね…。」

…とは、顔に影を纏わせた響の弁。

そして、

「平気平気♪旅先のケンカは、ちゃ〜と目撃者の口も封じるし、表沙汰には ならないよ

〜♪」

…と、言いながらカルマは、身分証を手にした、顔がボコボコな、如何にも…な風体の高校生2人と、笑顔で写ってる3ショットの写真を見せる。

（（やっぱしスツゴい不安だ…!!））

学級委員と班長の気苦労は絶えない。

しかし、そんな旅行を前に控え、浮き足立っているE組の教室に、水を注すかのような発言をする者が1人。

「全く…3年生も始まったばかりの この時期に総決算の修学旅行とは片腹痛い…」

殺せんせーである。

「先生、あまり気乗りしません。」

『『『ウキウキじゃねーか!?!』』』』

デレ顔の殺せんせーの横には、某・迷宮で出逢いを求める行為に正否を問う物語に登場する、犬耳少女が背負う様な巨大リユックに沢山の荷物が…大凡、旅行に必要な無さそうな物を含め、これでもかとはかりに詰まっていた。

当然ながら、集団で突っ込みが入る。

「何なんだよ? その黒ひげ○機一髪のパッタもんみたいのは?」

「殺せんせー危○一髪です。」

「いや、そんなの聞いてねー!」

「その蒟蒻や大根や葱は?」

「あつちで鍋を…」

「そこは現地で京野菜調達しなさいよ!」

「にゅや! その手がありましたか!」

中村さん、頭良い!」

「いや、こんなので褒められても嬉しくないから!」

「その曲線定規は何?」

あーでもない、こーでもない、観光と暗殺が両立する様に、楽しみに予定を組む生徒達。

しかし、そんな和気藹々な空気に水を注す発言をする人物が1人。

「ふん……皆ガキねえ？世界中を飛び回った私には……旅行なんて今更だわ。」

イリーナである。

「じゃ、留守番しててよ、ビッチ先生。」

「花壇の水、よろしくね〜♪」

全然、気に止めない生徒達。

イリーナを無視して、計画を話し合う。

「あたし、トロツコ列車、乗りたい〜♪」

「良いかもな。列車の中って、意外と逃げ場が無いよな？」

「……映画村。殺陣を観てみたい。」

「あ、閃いた！」

予め役者に対せんせー刀を持たせて、事故死を装って殺るってダメかな？」

「清水の舞台から突き墮とすか？」

「あのタコは飛べるだろーが！」

「……………」。

「行かないなら、どうぞ御自由にく〜♪」…とばかりにイリーナを無視して暗殺旅行の計画を立てる生徒達。

むかむかむかむかむかむか…

此処まで無視されて黙っていられる程、イリーナ（20）は大人ではなかった。

ぱーん！

「「「「「「?!?!?!?!?!」」」」」

教室内に銃声が木霊した。

「何よ！私抜きで楽しそうな話、してんじゃないわよ!!」

「あーもー!!」

行きたいのか行きたくないのか、一体どっちなんだよ?!」

半ば半ギレで銃を構えるイリーナに生徒達が突っ込む。

ガラ…

「何だ？今の銃声は？」

そんな教室に慌てて入って来たのは鳥間。

銃を持つイリーナを見て、

「そうか…貴様か？」

そんなに逝きたいなら、リクエストに応じてやろうか？」

完全に顔がマジになる鳥間。

「いやあぁーっ！」

生きたい生きたい生きたい!!

てゆーか、さっきの空砲だし！痛い痛い！

も、もつとおお…優しくして…いたたたた！

ごめんなさい、もう言いませんから!!

「……………」

イリーナは背後に回られた鳥間に腕を極められ、そのまま教室を退場した。



「1人1冊です。」

その日の帰りのホームルームで、生徒の1人1人に分厚い本の様な物を渡す殺せん

せー。

「重っ…?」

「何なのコレ、殺せんせー?」

「修学旅行の栞です。」

「辞書だろ?これ!!」

辞書でも此処まで分厚くはないだろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
E組生徒限定！

これが殺せんせー特製修学旅行の葉だ！！

☆イラスト解説の全観光スポット

☆お土産人気トップ100

☆旅の護身術・入門編

☆旅の護身術・応用編

☆財布の中に二千円札しか無い時

☆八つ橋が喉に詰まった時

☆工事中の穴に落ちた時

☆五重塔が倒れてきた時

☆班員が拉致られた時の対処法

☆京都で買った お土産が、京都限定な筈が東京のデパートで より安く売ってた時
のショックからの立ち直り方

☆鴨川の縁でイチヤつくカップルを見た時の淋しい自分の慰め方

☆etc. etc.

そして初回特典特別付録！

組み立て紙工作・金閣寺（一部金箔仕上げ）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「何手先まで想定してんだよ?!」

「此処まで想定した葉なんて無ーよ!」

「マメ過ぎるぞ!!」

葉に対して突っ込みまくる生徒達。

「徹夜で作ったのに…」

「知らねーよ!!」

「ただだけテンション上がってんだ?!」

「揃いも揃ってウチの先生わっ?!」

兎に角、この葉は生徒達には不評な様だ。

「大体さあ、殺せんせーなら京都まで1分で行けるっしょ?」

「勿論です。」

カルマの指摘に應える殺せんせー。

更に殺せんせーは言葉を続ける。

「…ですが、移動と旅行は違います。

皆で楽しみ、皆でハプニングに遭う…

先生はね、『君達と一緒に』旅が出来るのが嬉しいのです。」
『『『『『殺せんせー…』』』』』』

明らかに普通の旅行よりも、イベントが盛り沢山になるだろう修学旅行に、E組の生徒達もテンションが上がっていた。



修学旅行初日の東京駅。

「うっわぁ…AとD組（やつら）、グリーン車だぜ〜？」

「E組（うちら）だけ普通車。」

「…いつものパターン。」

ホームに新幹線が到着、車内に乗り込んでいく柵ヶ丘中学校の一行。

しかし、こんな時も、E組の差別待遇は変わらない。

「ウチの学校は、そういう規則だからな。」

入学時に説明したろう？」

ここで大野嫌みつたらしく言うが、

「ボソ…ケツ…学年主任降ろされた奴が偉っそうに…（笑）」

「ああ？何か言ったか！吉良!？」

「別に〜?…つてか、ホームでは静かにしましよーよ?先せ?

周りの一般人達も見てますよ〜?」

「くっ…」

響に軽く往なされ、足早に新幹線に乗り込んでいった。

同時に浅野学秀と、その取り巻き3人を筆頭に、A組の面々が、まるで響を親の敵の様に睨みつけながら乗車するのだが、響はガン無視…というか眼中になく、睨まれていた事に気づきすらしなかったのは、また別の話。

「ふくく…学費の用途は成績優秀者に優先される。」

「おやおや?君達からは貧乏人の香りがしてくるねえ?」

ここで、いつもの雀斑とメガネが、また渚に、ちよつかいを出すのが、

ドカツ!バコツ!

「ぐきゃ?!」「ぶきゅい!」

「あー、そうかよ?」

多寡が中間170番台がトップ様に対して良い度胸してるな?コラ?」

「き、吉良あつ?!ひええっ!」

周囲の目を一切、気にせず、台詞の前に手と脚を出した響を見て逃げ出す2人。

むんず…

「まあ、待てよ?」

しかし、逃げる雀斑の襟首を後ろから掴み取り、捕まえる響。

メガネの方は、その隙に逃げていった。

「あ…あ…」

「巫山戯ろよ? コラ? 立った死亡フラグ、より強固にして どーすんだ??

フラグ消すつてゆー努力する気 無いだろ? んあ?」

早速の問題児っぷり全開な響。

因みに近くの生徒は、怖くて巻き添え喰いたくないのか、「ざまあ(笑)」と思ってい

るのか、誰も止めようとしな

「あああ…すいません…」

「俺にロックされてる時点で、少なくとも学内では詰んでんだから、下向いてろや? な?」

以前、渚に向けた言葉の意趣返しな台詞を放つ響。

そんな時、

ビシィ!

「いーかげんにしてやれ!」「痛い?!」

響の背後に立ち、脳天にチョップを落とす人物がいた。

「痛ててて！ビッチ先生！痛いつて!!」

「ほら、あんたは さっさと消えなさい？」

ぎゅっぎゅっ…

響の耳を思いつきりに引つ張りながら、雀斑生徒に この場を去る様に言うイリーナである。

「あんたも！気持ちは解るけど！」

逃げていく生徒を後目に、少しばかり目に余る行動の響を普通に注意するイリーナという その光景は、普通な生徒と教師の様であった。

「あく、分かったよ、ビッチ先生…

…てか、何だよ？その格好？」

…教師の格好を除いては。

響の目の前には、「何処のハリウッドセレブだ!」…な、出で立ちをしたイリーナがいた。

「ふっふっふ…女を駆使する暗殺者としては、当然の心得よ。」

掛けていたサングラスを少しずらし、その奥の眼を光らせ、得意気に語るイリーナ。

「暗殺(しごと)してる時ね、狙っている暗殺対象(ターゲット)にバカンスに誘われるっ

て、結構あるのよ。

でも、その時にダッサいカツコで幻滅させたら、折角のチャンスを逃しかねないの。いい？想像してみなさい？

今から自家用ジェットで海外に行くつて時に、『牛乳瓶の底メガネで野球帽を後ろ向きに被つて、アニキャラTシャツ臍出しでズタボロなジーンスを履いて、蝦蟇口財布を紐で首にぶら下げ、デッカいリュックを背負い、虫取り編みと虫籠を持った姿』なら、どう思う？」

「な、何と まあ、そこまで具体的に……」

口を挽き吊らせる響。

「ほら、ドン引き受け合いでしょ？」

良い女はね、旅ファッションにこそ、気を遣うのよ。」

力説するイリーナ。

「目立ち過ぎだ、着替えろ。どう見ても、引率の教師の格好じゃない。」

余りの格好に見かねた鳥間が注意するが、イリーナは聞く耳持たず、

「堅い事言つてんじゃないわよカラスマ!!」

ガキ共に大人の旅をs「脱げ……着替えろ……」

マジ顔で凄む鳥間。

「……………(。O。L) ……!!!」

一步間違ったらセクハラな発言なのだが、最終的には烏間のマジ顔に恐れを為したイリーナは、車内のトイレで着替えたのだった…寝間着に。



「しくしくしくしく…」

走る新幹線。

1人、客席で涙を零すイリーナ。

「…つたく、これじゃあ、誰が引率だか分かりやしない。」

「金持ちばっか殺ってきたから、庶民感覚がズレてんだろ？きつと…」

「…に、しても…」

「…「普通のパジャマだ!!」」

「意外だよな？」

「ああ、もつと こう…スケスケでエロエロなの着てるとか、真っパとかなイメージだよな？?! (ドゴツ!!) …ぐはあっ?!」

「…「岡島あ?!」」

誰が投げたか、岡島の顔面に例の葉が飛んできた。

「もしかしたら、プライベートは、普通に普通な女性かも知れないぞ?」

「「「いや、ないない。」」」

「いや、分かんぞで？」

意外と部屋にはピンクのヒラヒラなカーテンみたいので飾られてて、猫のぬいぐるみが沢山あつて（シユタツ！）のわあ!？」

「「「き、吉良あ!？」」」

いきなり響を目掛け、対せんせーナイフが飛んできた。

それを紙一重で躲す響。

飛んできた方向を振り向いてみると、涙目ながら、先程の烏間に匹敵するマジ顔&殺気で睨んでいるイリーナがいた。

「と、とりあえず、この話は終わるか？」

「「「「お、おう…。」」」」



「よっ!」

「あく、やっと戻ってきたよ…」

イリーナ弄りが終わり、自分の席に戻ってきた響。

「花札やろうぜ?」

「よし、やるか!」

響の誘いに応える杉野。

「え〜？あたし、花札って 良く分かんないよ〜？UNOしよ〜よ〜？UNO！」

「大丈夫だよ、教えてやるからさ！」

少し渋る茅野に大丈夫と言う杉野。

「あたしも花札は ちよつと…」

「よっし！UNOしよーぜ！」

「……………」

しかし、神崎有希子の言葉に、あつと言う間に掌を返す杉野。

「(ヒソ…) 渚、もしかして杉野って…？」

「(ヒソ…) ん…察しようよ…」

「(ヒソ…) そー言えば、神崎さんを班に誘ったのって、杉野君だった…」



「喉、渴いたな？」

「だね〜？♪」

マグネット盤の将棋を指しながら響とカルマが呟く。

「はいはい、買ってきて欲しいなら、ストレートに言いなさいよ？」

「茅野ちゃん、俺、いちご「いちご」・オレだよね？」

「正解く、お金、後で払うからさく♪」

「俺、ブラックー。」

「はいはい…」

「あ、茅野さん、あたしも行きます！」

「それじゃ、あたしも…」

「行つてらっしゃーい♪」

結局、班の女子と渚が買い出しに行った。

「王手！」

「あっー!？」



「あ、通りますね?」

「失礼しますう…」

茅野達は やはり修学旅行だろうか、車両の連結部で数人の高校生と擦れ違う。

「…あれ、何処の学校よ?」

その高校生達が、茅野達を邪に歪んだ目で眺める。

「ありや、桐ヶ丘の中学…じゃね?」

「へく……？あの、お金持ち学校かよ？」

「今の、4人とも、レベル高くね？」

「特に髪が長いので、結構イケてたよな？」

「……だな。」

「知的？……みたいなの？」

「あーゆーのを見ると、社会勉強とか、色々教えてやりたくならねーか？年上として
♪」

「おい、リュウキ？俺等バカが、何を教えるんだつての！（笑）」

「ふっ……」

リュウキと呼ばれた、恐らくはリーダー格であろう、やや長い髪をオールバックで固め、左の目尻から頬にかけて深い刃物の傷がある高校生が自信あり気に言う。

「バカつてさ、実はケツコー何でも知ってたぜ……？」

その手には、神崎が例の栞の要点を細かく纏めた手帳があつた……

「以前、言つたら？鍛え方が違うと。」

旅館の浴室で響の鍛え絞られた身体を見た前原達があつ込みを入れる。

「しかも何なんだよ!?その、超凶暴凶悪そうな龍（ドラゴン）は!?」

「ふつつつつつ…グレート○ツド（真の赤○神帝）？」

「畜生、あのパツキン彼女も、この龍の餌食になつた（ガン!）うわらば!?」

岡島の顔面に、洗面器が炸裂した。

「岡島あ!?まあ、自業自得だけど…」

「まだ、其処まで行つてねーよ!!」

必死に否定する響。

そんな中、

「H A H ! S h i t s u r e i s u r u z e ~ ! 」

「あ、レッドアイさん…つて…」

「「「な、何じゃあ そりゃ〜?!」」」

レッドアイの龍（ドラゴン）は、響の其れを遥かに凌駕していた。

「流石は外国人、凄えー!!」

「H A H ! M o t t o , N I K U w o k u e y o ? B o y s ? 」

大浴場で、響の通訳を交えて裸で語り合う男…否、漢達。

狙撃（スナイプ）を専門とする、プロの殺し屋レッドアイは嵯峨野トロツコ列車の名所の1つである、保津峡の鉄橋の下で待機していた。

昨夜、E組学級委員の磯貝が中心である1班との打ち合わせで、暗殺対象（ターゲット）の殺せんせーを暗殺（ヒット）するとした場所：

それは列車の客が、保津峡の絶景を堪能する為に一時的に停車する鉄橋の上だった。タイムリングは保津川下りの船が、橋の下を通る時。

「あつ、見て見て殺せんせー！

川下りしてる!!」

倉橋が殺せんせーに、川下りの船が来たと指差す。

「おっ・どれどれ? おお!!」

それを聞き、一目見ようと窓から身を乗り出した殺せんせー。

ドクンドクン…

自分達が計画した、暗殺の瞬間（とき）が やってきた…。

1班の生徒達の心臓の鼓動は最速に達し、顔も緊張で強張る。

そして その瞬間、レッドアイのライフルのスコープは確かに殺せんせーをロックオ

ンして…

ドシュ…

その銃口からは、ライフル用に加工された対せんせー弾が放たれた。

過去に様々なハードな条件の下、確実に仕事をこなしてきたレッドアイにとって、今回の仕事は かなりイージーな心算だった。

あの特殊ライフル弾は、確実に あのタコの脳天に命中した筈…

確認の意味合いで、スコープ越しに暗殺対象（ターゲット）を覗くレッドアイ。

しかし…

「Stopped by: YATSHASHI!?! (八つ橋で止めた…だと!?!)」

殺せんせーは、自分目掛けて撃たれた、対せんせー弾を八つ橋2つで挟み込む様にキヤッチしていた。

「おろ? 八つ橋に小骨が?」

危ない事もあるもんですねえ?」

如何にも「残念でした」と言わんばかりのドヤ顔で、磯貝達1班のメンバーを見渡す殺せんせー。

1班メンバーは、我関せずと言いたげに、顔を逸らすしか出来なかつた。

再び動き始めたトロッコ列車を、茫然とした顔で見送るレッドアイ。

(Shit!! カラスマサンから、常識外れの規格外とは聞いてはいたが、まさか、此れ

程までだったとはな……!

成る程：月を破壊したという、100億YENの賞金首……

とんでもないMonsterを殺す依頼の様だ……。

…面白ええ!

次こそは このレッドアイの名に賭け、確実に殺つてやるよ!

首を洗つて待っている、タコ!!)



AM 11:20

千葉龍之介を班長とした2班は、(速水凜香リクエストの)東映太秦映画村に来ていた。

「そのまま 大人しく去るが良いで候。

拙者、無益な殺生は好まないで候。」

数人の浪人崩れに絡まれていた町娘を自身に抱き寄せると その儘、お姫様抱っこし
て お持ち帰りしようとする主役侍。

巫山戯るなどばかりに浪人の頭目らしき男の号令で、派手な太刀回りが始まった。

因みに菅谷創介アイデアの、役者に対せんせー刀を持たせて殺るといふ案は、目立ち

過ぎるといふ理由でボツになっていた。

「間近だと、刀の速度、パねえな！」

「より速く魅せる、完成された動きです。」

先生、こういうの、大好きなんです。」

（成る程、次はサムライのチャンバラアクションショーか…）

撮影セットの火の見櫓の上で待機していたレッドアイは、先の汚名返上とばかりにスコープを覗く。

（事前に俳優達には派手な殺陣をする様に頼んである。

俺の腕なら、アクションに魅入って、殆ど動かない見物客（ターゲット）を仕留める
なんざ、イージーにも程があるぜ…）

レッドアイは そう思いながら、スコープ越しに暗殺対象（ターゲット）を捜すが、
（ん？何処に行った？）

見物客の中に居る筈の、殺せんせーの姿を見失ってしまう。

だが、次の瞬間…

「助太刀いたす。」

悪党共に咲く徒花は血桜のみぞ…!!」

何時の間にか衣装を着替え、役者に混じって派手な殺陣、決め台詞も完璧に演じてる

殺せんせーを見つけるのだった。

「What are you doing?

(何してんだ、テメエ!?)」

思わず叫んでしまうレッドアイ。

E組のメンバーも、考えている事は同じなのか、目を点にして、啞然としている。

殆ど動かない見物客側なら兎も角、動きの速い役者側、それも傍に同等の動きをする共演者が居るとなると、正確に狙えない。

(ちっ…誤射覚悟で撃ってみるか?)

いや、今回の仕事は、巻き添え等のそれが絶対に許されないとされている…

それで信用信頼を失い、今後の仕事の依頼の影響を考えてみたら、それは悪手でしかないな…)

映画村での狙撃(スナイプ)は断念せざるを得なかった。

そいつは兎に角 素速い…

常識外れの動きをするが、惑わされるな…

現在、竹林考太郎を班長とした3班は、清水寺にいた。

「にゅや、遅くなりました!」

そこに殺せんせーが合流。

「殺せんせー、遅ーい!」

「もう清水寺、回っちゃったよ?」

「いや、申し訳ない!」

原寿美礼と櫻瀬園美の文句に平謝りする殺せんせー。

「全く…今まで何やっていたんだか…?」

「いや、先生も色々と ありまして…」

狭間綺羅々の眩きにも お茶を濁す。

尤も あれから映画村で、自分の演技に酔った殺せんせーは、呆れて その場を去る

生徒達にも気付かず、暫くの間、殺陣に没頭していた…とは、とても言えないだろう。

「それでは、二寧坂で お土産探しと洒落込みますか!!」

「どーせ、甘いモンしか興味ねーだろ!」

殺せんせーの言葉に寺坂がケチを付けながらも、一行は お土産屋を回って行つた。

(よーし…此処なら じっくり狙えるぜ…)

狙撃（ヒット）のタイミングは、三寧坂の出口：

買った土産を確認しようとして生徒が気を引いた瞬間：！！）

清水寺と八坂神社の中間にある、法観寺：八坂の塔の最上階で待機しているレッドアイは、狙撃の機会を伺っていた。

「殺せんせー、今 買った、あぶらとり紙、使ってみなよ？」

原が土産袋から、あぶらとり紙を取り出した。

「うーむ…：べとべと穫れたら、先生、恥ずかしいですねえ…」

「いーから いーから♪」

ぺたんぺたん…

遠慮がちな殺せんせーの顔中に遠慮なく、紙を貼っていく原と櫻瀬。

「今だ！」

その時、レッドアイは引き金を牽いた。

ドッ…

そしてレッドアイはスコープ越しに、確かに それを見た。

「YES！確かに こめかみに命中したぞ！！」

…が、

「It is, not paper for catch to bullet!!」

(弾丸(タマ) 捕る紙じゃねーよ!!)」

思わずレッドアイは突っ込みを入れる。

彼が見たのは、ライフルから飛び出た対せんせー弾が、顔に貼られ、粘液を吸収して

盛り上がった あぶらとり紙に、ガツチリと遮断されていた場面だった。

「ほら、言わんこつちやない!

こんなにも粘液が とれてしまった!!」

ねとお…

「弾丸も止める位!!」

照れながらも余裕綽々な表情を見せる殺せんせーに、寺坂達は、顔をしかめるしかなかった。

「…なんだ…なんなんだよ! あいつわ?!」

同じ日、同じ標的(ターゲット)を相手に3度も暗殺失敗…

レッドアイは、自身の暗殺人数(スコア) 35人という実績を持つ、プロとしての自尊心が折れかけていた。



「…何、お兄さん等？」

觀光が目的っぽくないんだけど？」

「男に用は無えーよ。」

女 置いて、とつとと消えな？」

そんな三寧坂での暗殺が行われていた頃、祇園町の奥の路地で渚達は、見た目が如何にも…な、高校生達に絡まれていた。

旅行の時間③

時は ほんの少しだけ巻き戻る。

レッドアイが三寧坂での殺せんせー暗殺を試みていた頃、渚達も自分達が暗殺計画に選んだ場所に足を運んでいた。

この京都で、渚達4班が暗殺の舞台に選んだのが…

「へく？祇園って奥に入ると、こんなに人気無いんだ…」

「うん…一見さんお断りな店ばかりだから、目的もなくフラツと来る人もいないし、見通しが良い必要もない…」

茅野の呟きに応えたのは、この祇園町を推した神崎有希子。

「だから、此処を選んだって訳ね？」

「んく♪暗殺にはピツタリかもねく？」

「流石 神崎さん、下調べ完璧ですう！」

「ん！凄いよ！神崎さん!!」



ザッ…

「こんな人気ない所で、何をしようとしてるのかな？中学生？」

「何か、イケない事でもしようとしていたんでね？」

「俺等も混ぜてくれよ？ケケケ…」

「！！？」

そこに現れたのは、如何にも「俺等、バカでゝす！」な風体の3人の高校生だった。

「…何、お兄さん等？」

観光が目的っぽくないんだけど？」

「男に用は無えーよ。」

女 置いて、とつとと消えな？」

既に分かつてるけど、一応は聞いてみますよ、という、人を舐めた表情のカルマの問い掛けに対し、ガタイの良い、坊主頭を金髪に染めた男が口を開いた直後、

ドガッ！ガン！

カルマの掌打が金髪坊主男にアッパー気味に決まり、その儘 顔を驚掴みにして、後頭部を電柱に思い切り打ち付ける。

ドン！ビシ！ズガアッ！

そして それと同じタイミングで、響が残る2人の内の1人の胸元に、体当たり式の

肘鉄から顔面への裏拳を見舞わせ、更に振り向き様に、もう1人の鳩尾にソバットを炸裂させる。

3人の高校生は、あつと言う間に地面に這いつくばったのだった。

「くく………!?」

「ホラね、渚君。目撃者居ないトコならケンカしても問題ないっしょ？」

「ああ、全く……だ……！」

パチーン……!!

良い音を鳴らして、ハイタッチする響とカルマ。

((最凶のコンビだ!!))

この時、渚、茅野、杉野の3人は、彼等の背後にモヒカンヘアで顔にはペイントを施し、そして無数の棘が付いたプロテクターを着込んだ2人のプロレスラーの姿を確かに見たのだった。

「ああ、ケンカには、打って付けな場所だな……？」

「！！」

ゾロ……

細い路地の前後から、合計で約10人の高校生達が新手として現れる。

「挟み撃ちね……」

「渚、杉野！お前等は女の子、きっちりガードしとけ！」

「お、おう……！」「うん！」

「(ボソ…) 神崎さんに良いトコ見せるチャンスだぜ？」

「な?!?!き、き、き、きらあ?」

「?」

響が杉野の耳元で囁くと、瞬時に顔を真っ赤にして動揺しまくりな杉野。

彼にとつて幸い？なのは、神崎自身が、今の響との やり取りで何があつたのか、分析が出来ない（この分野では）天然さんだった事だろう。

「あつ…この人達……！」

「「えつ……?ああつ……!!」」

奥田愛美が思い出したかのように声を出すと、渚、茅野、神崎も続けて声を上げた。

「新幹線で擦れ違った高校生……？」

「(こ)名答〜!はい、正解の景品〜♪」

ポイ……

リーダー格の男が神崎に向けて、手帳の様な物を放り投げる。

「あ……これは、私の栞……？」

無くなったと思つてたら……」

「あんた達が、あの時に掏ってたのね？」

茅野が男を睨みつけるが、リーダー格の男：リユウキは臆する事無く、口を開く。
「くくく…駄目だぜ、中学生？」

こんなに細かく予定を、住所なんかまで書き込んだりしてよ〜？

こりや「攫って下さい」って言ってるのも同じだろ〜？」

「……………!!」

下衆な発言に絶句する神崎。

「大丈夫…神崎さんは悪くないから…」

自分の責任と思っちゃダメだ！」

「杉野君…」

ここで透かさず杉野がフオローに入る。

（お、杉野、やるじゃん！）

響とカルマが心の中で呟く。

ただ2人には、純粹に仲間思いなナイスな奴という感想な響に対し、カルマは悪魔の角と羽根と尻尾を生やし、邪な笑みを浮かべて興味深く観察しているという違いがあったが…

「どーでも良ーから、男は女 置いて、さっさと失せろや！そーすりや見逃してやる！

どーせ、戦力になるのは、その2人だけなんだろう？それが、この人数差でも、どーにか出来るつもりでいるのか？」

動じる気配が余りない中学生達に、少し苛ついたりリウウキが口早に言い放つ。

「へ〜？本当に女子を置いて行けば、俺等 男は見逃してくれる訳？」

このカルマの言葉に対して

「ああ、約束するぜ？」

リウウキは男には興味無し…と、ばかりに言うのだが、

「だが、断る。」

当然の如く、言い切るカルマと響。

(((((なっ…？)))

この時、この場にいる全員が、2人の頭上に あの伝説の漫画家の姿をイメージしたのは言うまでもないだろう。

ついでに言えば、もしも この場にクラスメートの不破優月が居たら、涙を流して感動していたに違いない。

「悪いな、それは男として、絶対にやっちゃイケない行為の1つだぜ？」

「吉良つち〜？こーゆー輩に「NO」と言うのが大好きだ…で、良いんじゃない？」

「テメエ等…巫山戯やがって…！」

「ああ…でも、俺等は お前等クズ共と違って、他人様に迷惑を…掛けたりは…しないぜ…ん、しない。」

「吉良君…其処は自信持つて言おうよ…」

「少し前までは、学校内の差別対象にされて、自分に自信が持てなくて無気力だった時もあつたけどさ…」

「そ、そうです！今は…」

響達は まるで示し合わせたかの様に言葉を並べていくのだが、リュウキに その声は届かず、

「五月蠅え！そんなの知るか!!」「きやあ!?!」

「[[[[[[神崎さん?!]]]]]]」

一瞬の隙を突き、神崎の腕を掴むと、逃げ出したのだった。

「ちいつ!!」

タツ…

「吉良!」

「吉良つち!」

「[[[[[[吉良君!]]]]]]」

直ぐに行動を起こしたのは響。

「渚、女子を連れて、人通りのある広い場所に出とけ！」

カルマと杉野は、そこに倒れてる奴等を見張つてて！」

「お、おう……」

渚達に指示を出すと、リュウキと神崎を追つて走り出した。



「乗れよっ！」「きやつ……」

京都到着早々、盗んだワンボックス車。

予め、すぐ傍に停めていた車の後部席に神崎を無理矢理に押し乗せたりリュウキは運転席に入る。

「神崎さん！」

それを見つけた響も車に向かってダツシユする。

「いくらなんでも犯罪ですよ……?」

「言つてんなよ? 知つてるんだぜ?」

他のエリートちゃんは知らねーが、お前は俺等と同類だろ?」

「……!!」

『同類』という言葉に反応して、言葉を失う神崎。

「お前は人質だよ！」

奴等は後で、きつちりと制裁くれてやるからよお、それまで楽しもうぜえ!!」

「…!!」

そう言いながら、リュウキはエンジンを回すのだが…

プスプス…

「ん？何だ？さつきまでは普通に動いていたんだぞ？ちいっ!!」

プスプス…

何度もエンジンを回そうとするが、一向にエンジンは掛からない。

そうしている内に、

ガチャ…

「どうした？エンジンが掛からないか？」

バッテリー内の電気が飛び散って、ついでにガソリンも全部、何処かに消えて行ったんじゃないの？（笑）」

バギイッ!!

運転席の扉を開け、リュウキを引きずり降ろした響は、その誘拐犯の顔面に、強烈な膝蹴りを見舞うのだった。

「吉良君…」

「神崎さん、大丈夫?」

神崎を車から降ろし、無事を確認する響にリュウキが口を開いた。

「くくく…何だ? お前の女だったか?」

「え、??」

「その、如何にも清楚な大和撫子な見た目に惚れたってか?」

「いや、ちよつと待て?」

「ケツ! お前はコイツを見ても、今までと同じ接し方が出来るか?」

何だか少し、勘違いしているリュウキは、そう言うと、懐からスマホを取り出し、記録データから1つの画像を画面に表示して響達に見せつけた。

「これは…?」 「…!!」

思わず刮目する響と目を背ける神崎。

そこには長い髪を茶色に染め、やさぐれた格好の目つきがキツイ少女が写っていた。
「去年の夏頃のゲーセンだけだよ…」

これ、お前だよな?

まさか、名門校の生徒様だったとはなく?

常連みだだったから、仲間と攫う計画してたんだけどよ、いざ決行しようと思った途端、ゲーセンから姿を消してやんの。」

下衆な笑顔でリュウキは話し続ける。

「残念だったな？」

彼氏に正体バレちまってよ？

まあ、心配するな、俺等は そんなの関係なく可愛がつてや r (ドガツ) ばれらあつ
?!」

だが、喋っている途中で響の左拳がリュウキの顎を撃ち抜いた。

ガシャーーン！…グシャ!!

「あーっ!!」

そして響はスマホを奪い取ると、勢い良く地面に叩きつけ、更に思い切り踏み潰す。

「ふーん…で、だから、何？」

事も無げに言う響。

「昔は知らんよ？ 大事な今は今だろ？」

さつきも言いかけたけど、俺達はエリート校の中のバカクラスだよ？

確かに少し前までは、人生終わらせてた感じな奴も居たぜ？

でも、担任のタク教師の御陰で、今は色々と前を向けれる様になりつつあるんだ。

少なくとも、テメエ等みたく、他人様を自分の負け犬人生の巻き添えにする様な事は
しない。

「(ボソ…) どうした？」

まるで黄泉比良坂の奈落の底に墮ちる、亡者共の葬列を見た様な顔だな？ (笑)
神崎に聞こえない様に、耳元で囁く響。

「ひいえっ!!」



ドサツ…

「吉良つち、おかえりー♪」

完全に戦意を喪失したリユウキを引きずりながら、カルマ達の元に戻った響。
直ぐにリユウキを他のダウンしている不良学生の固まりの中に倒し入れる。

「吉良! 神崎さんはっ?」

響に杉野が問い掛ける。

「既に茅野ちゃん達と合流させてるよ。」

「そうか〜! 良かった〜!!」

響の言葉を聞いて、自分の事の様に安心する杉野。

「行って良いよ…」

「え? あ…さ、サンキュ!」

2人の台詞に、遠慮する事なく、杉野は走って行った。

「さて…俺達も最後の後片付けを済ませて逃げようぜ？」

…それじゃ、吉良っち、カメラマンよろしくね♪」

そう言うのと、2人は『記念撮影』を開始したのだった。

「(ボソ…) 本当は こんな撮影、必要ないんだけどね…」

「ん？吉良っち、何か言った？」

「いや？別に？」

カルマは知らなかった。

リュウキを含む この高校生達は、既に響の放った『幻夢拳』によつて、この数時間の記憶が完全に消されている事を…

そして、更に数日後には、今まで体験経験した、あらゆる全ての記憶が完全消去される様に仕込まれている事を…

(俺も甘くなつたな…)

少し前なら、迷わず殺つてる処だぜ…。

まあ、コイツ等は この儘生きていても、世の害にしか成り得ないからな…

もう一度、何の言葉も解らない赤ん坊から やり直せ？な？ (笑)



「渚く〜ん！神崎さ〜ん！」

「杉野く、茅野ちやく〜ん、奥田さ〜ん！」

「あ、カルマ君、吉良君！」

渚達と合流した響達。

「向こうは片付いた？」

「ああ、口止めバッチリだよ？」

角と羽根と尻尾を生やし、邪悪な笑みを浮かべるカルマ。

「ははは…」

それに対し、疲れた様な顔をして笑う渚。

「渚、今回のコレ、一応は殺せんせーと烏間先生には、班長として報告しといたのが良いぜっ。」

響の言葉に

「ん…もう、連絡したよ。後は、殺せんせーが上手くやつてくれるってさ…」
意外と？仕事が早い渚。

「それからね…」

「はぁい？」

今日、渚達が計画していた暗殺を、レッドアイがキャンセルを申し出たらしい。

何でも、失敗の連続で心が折れたとか。

「正直こっちも、殺る処じゃなくなっただけどさく、心を折るって…」

殺せんせー、1、2、3班の暗殺、一体どんな風に あの人の狙撃を躲した訳？」

…八つ橋で弾丸を防いだり、殺陣に参加して攪乱したり、あぶらとり紙で弾丸を止めたりである。

旅行の時間④



ニユーヨークはマンハッタンのダウンタウン郊外。

多くのギャラリーが歓声を上げて見守る中、2人の男が対峙していた。

1人は癖毛のある短く黒い髪に赤いハチマキを締め、左右の袖は千切れ、埃まみれの薄汚れた空手着を着込んだガツシリした体躯の身長、約190^{センチ}弱の男。

仮に「白胴着の男」としておく。

対するは、身長2^{メートル}越えだが、決して細身に非ず、筋肉の鎧で身体全身を被い、その上に黒の空手着を着込んでいる。

やや長めの赤い髪を旋毛の辺りで結び、鬼神の仮面を被った男、仮に「黒胴着の男」と呼ぶ事にする。

2人の胴着の左胸には同じ紋様…天に昇る竜をイメージさせる刺繍が施されている事から、同門派と思われる。

『FIGHT!』

誰が叫んだか、その声が場に響いた瞬間、2人は動き出す。

先に仕掛けたのは黒胴着の男。

早い踏み込みで間合いを縮めて、豪快な連続の回し蹴りを繰り出す。白胴着の男は難なく此を避ける。

常人なら、一発掠っただけで死ぬるであろう、この攻撃が止んだ瞬間、白胴着の男はその隙を見逃す事無く、小刻みな下段蹴りの連打から、胸元目掛けて右拳の一撃を放つ。

黒胴着の男は数歩後退し、体勢を立て直すと、再び距離を詰め、右の正拳を放つが、白胴着の男は両腕をクロスして、これをガード、敵の伸びきった腕が戻る前に懐に飛び込み、脇腹に膝蹴りをヒットさせた。

白胴着の男が追撃を仕掛ける。

拳、掌打、肘、膝、前蹴りの決して派手さは無いが、丁寧なコンビネーションで黒胴着の男を攻める。

黒胴着の男は必死にガードをするが、それでも全ての攻撃を捌く事は出来ず、ガードを崩された箇所から、身体全体に集中打を浴びてしまう。

どうやら、この黒胴着の男、その攻撃の破壊力は兎も角、防御の方はザルな様だ。

黒胴着の男が大振りの裏拳を放つが、白胴着の男は、またも、これを躲し、隙だらけの側頭部に強烈な上段蹴りを入れる。

これによつて、黒胴着の男の意識が一瞬だが飛んでしまふ。

その一瞬：白胴着の男は腰を僅かに沈め、両の手首を重ねて脇を閉めて「溜め」を作る。

そして、そこから繰り出される双掌打から、雄叫びと共に、互いの胴着に刻まれた【天を昇る竜】が如く、自らの身体を旋回させながらのジャンピングアッパーを炸裂させた。恐らくは流派の象徴であろう一撃をまともに喰らつた黒胴着の男は、断末魔と共にダウンし、再び立ち上がる事はなかつた。

ギヤラリーの歓声の中、右腕を高々と上げて勝利をアピールする白胴着の男。

しかし其処に、「次の相手は自分だ」とばかりに、独特な形状の三角帽子と黄色いワンピースのミニスカートに黒タイツを身に着けた、赤茶色いセミロングの髪の後ろ部分をカールに巻いた小柄な少女が、白胴着の男の前に立ちはだかつた。



『IPLAYER WIN!!』

「あーっ！俺のア○ーナがつ?!」

「凄えーっ！」

神崎さん、これで5人抜きだぜ!!」

「いや、吉良も惜しかったよ!」

修学旅行2日目の夜、E組の約半分は旅館のゲームセンターに居た。

そして 其処では、少し前の世代の対戦型格闘ゲームで、神崎有希子がE組男子相手に無双していた。

因みに響の前の、黒胴着の男を操作していたのは杉野である。

殆ど互角だった神崎と響の攻防を見た杉野が後日、響にゲームの弟子入りを申し込んだりするの、また別の話。

「いや…照れると言うか、なんだか恥ずかしいと言うか…」

「いや、そう お淑やかに言いながら、手つきはプロだったし!」

「ちつくそーっ!神崎さん!

もっかい勝負だ!」

そう言いながら、響は、スルリと浴衣の帯を解くと、浴衣と共に放り投げながら、ゲーム機に100円玉を投入する。

当然、下は下着丸出しでなく、ハーフパンツを着用している。

「「「「「きゃーっ!!!」」」」」

響の鍛え絞られた胸板や腹筋を見て、その場にいる女子が、悲鳴と歓声を上げる。

「吉良！ちよつと待て！」

お前、何 脱いでるんだよ？」

「え？負けたら脱ぐんじゃないのか？」

「「「「「違う！」「」」」」」

千葉の質問に真顔で答え、集団で突つ込まれる響。

「じゃあ、こうする事で、何となく強くなる気？」アンタは何処の『脱いたら強い露出狂な聖○士』よ!？」

響は あくまでも○星座でなく蟹座である。

「不破ちゃん？目をキラキラさせて、ガン見しながら言つても、説得力ないぜ？」

「うゝ……」

因みに……

目を輝かせてガン見……不破 櫻瀬

動揺しながらガン見……茅野 奥田 片岡

顔を両手で覆つてるが、指の隙間は開けてチラ見している……神崎

マジに恥ずかしがっている……岡野

無反応……速水

……である。

ドタドタ…

「あ！吉良、いた！」

「吉良、助けてくれ！」

…つて、何 脱いでんだよ！お前?!」

そう言いながら、ゲームセンターに駆け込んで来たのは木村正義と岡島大河。

「神崎さんに引ん剥かれた。」

「「え、えっ?!まぢ? 神崎さんが!?!」」

「いや、違うから！」

コイツが勝手に脱いだけだからね！」

響の発言に顔を赤くし、はわわ状態で何も言えない神崎の代わりに、茅野カエデが弁解する。

「いや、そんなの どーでも良い！」

吉良、さっさと浴衣（それ）着て、俺達と一緒に来てくれ！」

「頼む！もう、お前しか頼れる奴がないんだよ！」



「おいおい、一体、何があつたんだよ？」

響が木村と岡島に連れられて、やってきたのは旅館の卓球コーナー。
其処に待つていたのは

「次は吉良君が相手か…」

言つておくが、俺は強いぞ？」

凄く怖（よ）い笑顔な烏間だった。

「…失礼しまさ」「ちよつと待て！」

「…つまり、烏間先生を卓球に誘つたは良いが、無敵過ぎた…と？」

「「いぐぎぐくとりー…」」

「烏間先生、凄く強いんだよ〜♪」

倉橋が自分の事の様に自慢する。

「頼む吉良、勝つてくれとは言わん！」

「せめて、せめて1ポイントで良いから獲つてくれ!!」

「ハードル低いな？おい!？」



…その頃、レッドアイは京都市街のアーケードを とぼとぼと歩いていた。

(はあ…)

深い溜め息を吐くレッドアイ。

8年間の暗殺家業で、例え暗殺対象(ターゲット)が常識外な人外だったとは云え、今日ほどプロとしてのプライドがズタズタになった日は無かった。

スコープに暗殺対象(ターゲット)の赤い血が映らなかつた事は無い。

それが「RED-EYE」の名の由来だった筈が…

「…嗤わせるぜ。今日、俺の目の何処に、赤(RED)が映つてんだ?」

左手の親指と人差し指で○(まる)を作りスコープに見立て、覗き込みながら、自虐自嘲するレッドアイ。

「!?!」

その時、そのスコープの中に赤が映つた。

「どうぞ。三寧坂で買った七味です。」

そう言いながら、「とうがらし」と書かれた掌大の赤い瓢箪を渡す殺せんせー。

「あぁ、アンタか…」

Thanks (ありがとよ)…」

レッドアイは疲れた表情で瓢箪を受け取り

「あ、暗殺対象（あんた） あんた?!?!」

前振りも無く、不意に目の前に現れた暗殺対象（ターゲット）に、レッドアイは今日、4度目の驚きの顔を見せた。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「ふっ…何もかも、お見通しで遊ばれてた訳かい…」

2人は湯豆腐専門店の個室で、鍋を突いていた。

ふー、ふー…

杓文字に取った豆腐に息を吹きかけ、冷ましている殺せんせー。

レッドアイは そんな殺せんせーに呟く。

「此処まで常識外れな怪物だ…」

国が嚴重に口止めする訳だ。」

ふー、ふー、ふー…

杓文字に取った豆腐に息を吹きかけ、冷ましている殺せんせー。

「…で、俺を殺す心算かい？

OK…殺れよ…。こんな商売だ。

常に覚悟は出来てるぜ。」

ふー、ふー、ふー、ふー…

杓文字に取った豆腐に息を吹きかけ、冷ましている殺せんせー。

「……………」

ふー、ふう…

「早よ食え!!」

余りの猫舌つぷりに、溜まらず突っ込みを入れるレッドアイ。

そんなレッドアイに、「豆腐をはふはふ言つて食べながら、殺せんせーは言う。

「殺す?とんでもない…。」

お陰で楽しい修学旅行旅行になりました。

純粹に お礼が言いたかっただけですよ。」

「……?」

自分を狙撃（ヒット）出来るポイントを探す為、生徒達は普通より沢山、京都について調べただろう…。

地理、地形、見所に歴史、成り立ち…

つまり それは、京都という街の魅力を知る機会が より多かつたという事…

人を知り、地を知り、空気を知る…

暗殺を通して得た物は、必ず生徒を豊かに彩ってくれる筈…

「だから、私は…暗殺されるのが楽しみなのですよ、レッドアイさん。」

そう言うと、殺せんせーは「豆腐に出汁、薬味を装いだ お椀をレッドアイに渡す。

」……………」

お椀を受け取り、レッドアイは言う。

「あんた、体も考えもイカレてるぜ…」

(…なのに、なんでかな?)

その辺の教師なんかより、立派に先生してやがるよ…)

ふー、ふー…

杓文字に取った豆腐に息を吹きかけ、冷ましている殺せんせー。

「だから、早く食えよ、このタコ! (笑)」



場所は再び旅館のロビー。

神崎達女子陣がアイスクリームを食べながらトークをしている。

女性に『夜、アイスなんか食べてると、ふとr(…規制が掛かりました)』等と言う台詞が言えるのは、死ぬる覚悟がある者だけだ。

「へく？吉良つちが、そんな事をねえ？」

「ん…ウチは父親が厳しくてね、良い学歴に良い職業…良い肩書きばかり求めてくるの…」

「あー、いるいる、そんなのに固執する奴…って、あ、ゴメン…」

「いや、良いよ…それでね、そんな肩書きだけの生活から逃げたくて、名門の制服も脱ぎたくて…」

「それで、余所のゲーセンかあ…」

「はは…バカだよね…遊んだ結果の肩書きが〔ENDのE組〕。」

もう、自分の場所が分からなくなってた…

でも、あの時の吉良君の台詞で…」

「え？フラグ？」

もしかして これはフラグ？」

「ち、違うよ、そんなのじゃなくて！

…周りの目を気にし過ぎてたのかもね？

服装も趣味も肩書きも、逃げたり流されたりで身に着けてたから、自信無かった…。

あの時の吉良君の言葉で思ったの。

大切なのは、腐らずに前を見て進む事だつてね。」
「神崎さん……」

……つて、おや？ 噂をすれば、何とやら？」

「「「「
?!?!」」」」

「吉良も意外と使えねーな……」

「3ポイントも獲ったじゃねーか！」

「ん？ 女子が揃つて、こっち見てるぜ？」

やつて来たのは響、岡島、菅谷。

「や、皆、どうしたの？」

「「いや……何でもないから……（笑）」」

「?……どーでも良いけど、夜にアイス食べてると、ふとr（ガン！）ふぷし！」

「岡島あ!?!、そーゆーのは、口に出さず、心の中だけに閉まっておk（ゴン！）のわっ?!」
「き、吉良あ!?!」

岡島と響の顔面に、ワルサーとパイソンが直撃した。

BB弾でなく、エアガン本体である。

ジャキジャキジャキジャキ…

鬼女達の構える、多数の銃口が響達に向けられる。

反射的にホールドアップする3人。

「お、俺もかよ？」

俺、何も言つてn…何でもないです…。」

そう言つてるのは菅谷。

「いゝい？吉良君？女の子にはね、口に出すのは勿論、心に思っただけで、万死に値する事もあるのよ…？」

優しく、優しーく微笑みながら言うのは、神崎有希子…否、有鬼子。

「「ら、らじゃ…」」

響達は男3人、抱き合いながら体をぶるぶると震わせ、涙目で首をカクカクと縦に振つたのだった。



「全く…岡島が余計な事を言うから…」

「火にガソリン注いだのは お前だ!!」

漸く『有鬼子』達から解放された響、岡島、菅谷の3人は、男子が寝泊まりする大部屋に向かう途中、浴場男湯の入り口前で屯してる女生徒を見つける。

狭間綺羅々、矢田桃花、片岡メグの3人。

「こんなトコで何してんだよ？」

「くくく…覗きに決まってるでしょ？」

菅谷の質問に答えたのは狭間。

「覗きい？それって、男子（おれら）の仕事（ジヨブ）だろ？」

そういう風に思っているのは、岡島だけである。

「全く3人共…見たいなら、一言、言ってくれたら、俺が見せし」「脱ぐな!!」

そう言いながら、浴衣の帯を解こうとするのは響、それを阻止したのは片岡と矢田である。

「しかし、狭間は兎も角、矢田や片岡に覗き趣味があるとは…」

「岡島、どうゆう意味だい？呪うよ？」

あれを見ても…それが言えるかい？」

「!!?!」

狭間が男湯の暖簾を捲り、指差した先には

見覚えがある式服が壁に掛けられていた。

その下のベンチには、やはり見覚えがあるネクタイと学士帽。

「うわ〜お…」

思わず唸る響。

「あの服が掛けてあつて、服の主は風呂場にいる。もう、解るでしょ？」
「今なら見れるわ…」

「殺せんせーの服の中身!!」

そろ…

「首から下は触手だけか、それとも胴体があるのか…」

暗殺的にも知つておいて損は無いわよ？」

カモーン…と手招きしながら、静かに先頭を歩く片岡が言う。

「この世に こんな浪漫の無い覗きがあつたとわ…」

カラカラ…

そんな岡島のボヤキをスルーして、好奇心全開で浴場の扉を少し開けて覗き込む女子3人と その姿に呆れつつ、付き合う男子3人。

ガラっ!

「「「女子か!!」」」

しかし、その姿を見た瞬間、派手に扉を開けて、一斉に突っ込を入れる一同。

其処には小浴槽を泡風呂にして、その中でブラッシングしてる殺せんせー（シャンプルーハット装備）がいた。

「おや？皆さんも お風呂ですか？」

片岡さん矢田さん狭間さん？

「ここは男湯ですよ？」

「「違う!!!」」

真剣に否定する女子3人。

「なんで泡風呂なんだよ？」

「入浴剤禁止だろ？」

岡島と菅谷が聞く。

「これ、先生の粘液です。」

泡立ち良い上、ナノ単位で汚れも浮かせて落とすんです。」

「とことん便利な体だな？おいつ?!」

殺せんせーの解説に響が突っ込む。

「くくく…でも甘いわ。」

出口は私達が塞いでる。」

そう言いながら、ナイフを構える狭間。

「浴槽から出る時、必ず私達の前を通るよね？」

「殺す事は出来なくても、どんな身体してるかくらいは確認させて貰うわよ、殺せんせー」

「？」

ナイフを手にした矢田と片岡が続く。

しかし…

「ヌルフフフ…そうはいきませんよ？」

ぬぼん…

「「「「煮凝りか!!」「「「「

浴槽内の お湯を煮凝りの如く完全に固め、それを纏った殺せんせー。

お湯は粘液の泡で濁っており、中を確認する事は出来ない。

そして殺せんせーはその儘、窓から逃げて行くのだった。

「片岡さん…」

「何？吉良君？」

「虚しい…」

「ん…そうだね…」



「やっぱし1位は神崎さんかあ…」

「まあ、嫌いな奴って いないっしょ？」

男子の泊まる大部屋では、「気になる女子ランキング」のアンケートが絶賛実施中だつ

た。

因みに現時点で

神崎…4 矢田…2 速水…1 茅野…1

奥田…1 片岡…1 倉橋…1

…と、なっている。

「…で？どーよ？杉野？」

「上手く班に引き入れた成果は？」

「それがさあ…」

前原と三村の尋問に杉野は

「色々とトラブってさあ…」

じつくり話すタイムリングが無かったよ。」

「あー、何か大変だったらしいな？」

断じて、T o L O V E ではない。

ガラ…

「あ、吉良…」

部屋に入ってきたのは響達。

「ん？何だそれ？」

「気になる女子ランキング…?」

「おう、皆 言ってるんだ。」

お前達も白状しろよ。」

「俺も?俺、彼女いるんだけど?」

「「「「るっせー、リア充!そーだよ!」

クラス内限定での話だよ!」」」」

集団で突っ込まれる響。

「そうだな…?」

「うゝむ…」

「俺は…」

考え込む響達。

「やっぱし神崎さんか?」

此処で磯貝が振ってみるが

「「「う…:神崎さんは…:ちよつと…:」」」

つい先程のトラウマ(笑)を思い出す3人。

「ん?何かあったのか?」

「いや、別に…」

顔を下に向け、目を逸らす三人。

「気になるな〜?」

ぼん…

響が そんな杉野の両肩に手を置き、

「杉野…世の中、知らない方が幸せな事もあるんだぜ?」

この響の言葉に、んん…と、同調する様に首を縦に振る岡島と菅谷。

「何なんだよ?余計に気になるぞ!」

「それなら俺は…櫻瀬さんかな?」

席 隣だし、話してて楽しいし。」

「はいよ、吉良、櫻瀬…と。」

前原がリンク表の紙に書き込む。

「俺は…矢田かな?」

「岡島、お前、胸だけで決めただろ?」

「別に良いだろ!!」

そりゃ、お前は良ーよ?余裕だろーよ?

お前のパツキン彼女、海外の血を引いてるだけあって、ダイナマイツなんだろうから

「ギブギブ！前原、サソリはマジにシャレにならねー!!」

畳を叩きながら、ギブアップと訴える響。

「残念！これはテキサス・クロバーだ!!」

「どっちでも良ーいっ!!」

…つて、窓、窓お!？」

「「「「「え?」」」」」

響の言葉に、男子達が窓を見ると、若氣ついた顔をして、ガラスの外側に張り付いている、黄色いタコがいた。

「「「「「……………」」」」」

数秒間の時間停止状態の後、黄色いタコ…殺せんせーは懐から手帳を取り出すと、畳の上に置いてあった「気になる女子ランキング」の紙の内容をメモって逃げて行ったのだった。

「あ・の・タ・コ…!」

「殺せ!」

メモを没収せんと、逃げた殺せんせーを追い掛ける男子達。

特に矢田に票を入れた4人は必死だ。

何せ、あの紙には、誰が誰の名を挙げたかだけでなく、その理由…ポイントも しつ

かりと記されていたからだ。

「「ヤベ…絶対にな殺される…」」

因みに矢田の指名の理由は揃って【胸】の1文字のみである。

旅館の廊下で鬼ごっこが始まる。

「待てや、このタコ！」

「生徒のプライバシーを侵しやがって!!」

「ヌルフフフ…先生の超スピードは、こういう情報を知る為にあるんですよ!!」

≡≡

「ちい、逃げられたか!」

結局、標的（ターゲット）のタコを見失ってしまう生徒達。

「マジに不味いな…」

「吉良…?」

「そりゃあ、矢田さんを挙げた奴等がメられるのは自業自得だけだよ。」

「「「をいつ?!」」」

突っ込みながらもイリーナは語る。

女の賞味期限は短い…。

自分と違い、折角 危険とは縁遠い国に生まれたのだから、感謝して全力で女を磨け…と。

これに対して、冷めた顔で

「ビッチ先生の癖に 凄いまともな事を言ってる…」

「なんか生意気〜!」

という発言に

「舐め腐りおつて餓鬼共!!!」

…と、血管剥き出して目玉を飛び出して突っ込むイリーナは決して悪くないと思う。

「じゃあさ じゃあさ…」

やや膨れっ面なイリーナに話し掛けるのは「胸」…もとい、矢田。

「ビッチ先生が今までに墮としてきた男の話、聞かせてよ?」

「あ、興味ある〜♪」

矢田の発言に倉橋も便乗する。

「…つたく、しようがないわね〜?」

フッフ…良いわよ?

た・だ・し…ネンネには刺激が強過ぎるだろうから覚悟しなさい？」

このテの話をするのが大好きなのか、機嫌を直したイリーナは軽く笑みを浮かべながら話始める。

「そうね…あれは18の時、ダラスで…」

ごくろり…

生唾を飲み込み、イリーナに注目し、話を聞き入る女子達。

…と、ピンク色のタコ。

「…って、おい、其処おっ!!?!」

何時の間にか、女子部屋に紛れ込んでいた殺せんせーに、堪らずイリーナが突っ込みを入れる。

「え?こ、殺せんせー?」

「い、何時から居たのよ?」

「又ルッフッフ…最初から居ました。」

「黒○かつ?!」

見事なミ○ディレク○ヨン…

イリーナが突っ込むまで、誰一人、殺せんせーの侵入には気付かなかつた。

「さり気に紛れるな、女の園に！」

「ヌル…いいじゃあないですか？」

私も その色恋の話、聞きたいですよ。」

イリーナの文句も軽く流す殺せんせー。

「そーゆー殺せんせーは どーなのよ？」

自分のプライベートは ちつとも見せないじゃない？」

「そーだよ、人のぼつかズルい！」

中村と岡野の言葉に、思わず後退りする殺せんせー。

その反応を見た女子達が追撃。

「殺せんせーは恋バナとか無い訳？」

「え？」

「そーよ！巨乳好きだし、片思いくらい絶対あるでしょ？」

「え？え？？」

予期せぬ展開に焦る殺せんせー。

そして数秒の沈黙の後…

シャツ…！

「あつ、逃げやがった!!

『ああ、済まないなカラスマサン、この街を好きに観たくなったよ。』

『…お前でも無理か?』

『俺は まだ、未熟者だった様だ。』

赤という1つの色に拘らず、色んな色を見て回る事にしたよ。A d i e u s (またな) !』

プツ…ツーツーツー…

レッドアイから今回の修学旅行を利用した暗殺の依頼を正式に辞退された烏間。

(殆どの狙撃手(スナイパー)が仕事の難度を見て断り、唯一 仕事を引き受けてくれたレッドアイも、今 辞退か…)

京都での狙撃計画は、限界だな…

これ以上、生徒に修学旅行の負担は掛けられんな…

実質明日1日、残り時間は少ないが、後は自由時間とするか…)

「…って、ん?何か廊下が騒がしいな?」

どうせ話す気は無いだろうしな…。」

「…賢明ですよ、烏間先生。」

いくら旅先でも、触手（てあし）の数まで聞くのは野暮って奴です。」

ガラ…

「カラスマー、タコー！」

もう説教も終わったし、頭切り替えて、一緒に飲もうぜー！」

部屋の扉が開き、イリーナが入ってくる。

「…ヌルフフフ…だ、そうですが？」

「ふう…仕方が無い、一杯だけなら付き合ってやる…。」

烏間は呆れ顔で呟いた。



「岡島く、前原く、生きてるか〜？」

あの大説教の後、更に一部の男子生徒は女子の制裁を受けていた。

「…あ？大きな星がついたり消えたりしている…あつはは！大きい！彗星かなあ？

いや、違う、違うな…

彗星はもつと…バアアツて動くもんな…

暑つ苦しいなあ…此処…

出られないのかな？

おーい、出して下さいよ。ねえ！

「ま、前原あゝつ?!」

前原は重傷な様だ。

そんな中、

「吉良つちゝ♪」

カルマと中村に手招きされる響。

「?」

響が2人に連れて行かれた先は、旅館の中庭。

建物の影に潜む3人。

「一体どうして「しっ!!」!?!」

響が喋っている途中で、その台詞を遮ったカルマは小声で

「吉良つち、あれあれ♪」

…と、中庭の真ん中を指差した。

そこに居たのは渚と茅野。

全てを察した響。

角、羽根、尻尾を出し、最高に悪（よ）い笑顔でサムズアップする。

それに対し、同様なアクションで応じるカルマと中村。

それにしても、如何に比喩的表現と云え、嘗ては地上の愛と正義の為に闘っていた、女神（アテナ）の黄金聖闘士（ゴールドセイント）が、悪魔の姿を象るのは、どうなのだろうか…？

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「…なんだかんだで、結局は暗殺になっちゃったね。」

「…うん。」

出歯亀3人に気付かず、語り合う2人。

「明日、最終日かあ…色々あったけどさ、結構 楽しかったね、修学旅行。

皆の色んな…意外な面が見れて。」

「そうだね。」

「特に吉良君に露出癖があったのは、ビックリだよ（笑）。」

「うん、あれは僕も驚いた（笑）。」

「あ・の・ヤ・ロ……!!」

「吉良つち、抑えて!」

飛び出そうとする響を、必死に押さえ付けるカルマと中村。

「……………」

「……?どしたの?」

「……うん、ちよつと思つたんだ、修学旅行つてさ、残り明日だけつて、終わりが近付いた感じがするじゃん?」

「……ん。」

「暗殺(この)生活は始まつたばかりだし、地球が来年、終わるか生き延びるかは判らないけどさ……」

「渚……?」

「このE組(クラス)は絶対に終わるんだよね?」

来年の3月で。」

「……そうだね。」

「皆の事、もつと知つたり、せんせーを殺したり、やり残す事が無いように暮らしたいな……」

「……とりあえず、もう1回位、行きたいね、修学旅行。」

「…うん、今度はトラブル無しでね…。」

「「……………」」

2人の展開を見守っていた3人だが、

「こりゃ、オチは無いかな〜?」

「…ですよ〜?」

「基本、弩草食に期待するのが間違っていた様な…」

これ以上の進展は無しと踏んだ3人は

「渚く〜ん!」「茅野ちや〜ん!」

「!!?」

何の遠慮も躊躇も無く、2人の前に姿を現した。

「な、な、な…何してんの〜?!」

顔を真っ赤にしてハモる2人。

それを見てケタケタ笑う、悪魔な3人。



翌日の夕方、柗ヶ丘中学3年生一行は、柗ヶ丘市に帰って来た。

その時、E組教室には既に、防衛省からの新たな殺せんせー暗殺の刺客が送り込まれていたのだった…。

転校生の時間

が。修学旅行明けの月曜日の朝、響が何時もな如く、山を登っていると、前方に2つの人影

「くっす。」

「…おはよ。」

「あ、きーちゃん、おっは〜♪」

速水凜香と倉橋陽菜乃だ。

「烏間先生からのメール見た〜？」

「おう、転校生の件だろ？」

「ん…多少、外見で驚くって、どーゆー事だろうね？」

「身長2倍超えて、隻眼で、体半分が機械で、更に身体全身に墨彫ってるとかな？」

「いやあ〜っ！怖過ぎるよ〜っ!!」

「吉良つち、それ、盛り過ぎ…」

昨日、E組生徒全員のケータイに、烏間からの一斉送信メールが届いていた。

SSS

明日から転校生が1人加わる。

多少、外見で驚くだろうが、余り騒がず接して欲しい。

SSS

鳥間からのメールという時点で、この転校生が、殺せんせー暗殺を目的とした殺し屋だというのは明白。

「どんなヤツで、どんな殺り方をするとか、普通に興味あるよな。」

そう言いながら、響達は教室に向かった。

▼▼

「さて…来てるかな？暗殺転校生？」

響達が教室に入ると、数人の生徒が自分の席の付近に集まっていた。

よく見れば…いや、よく見なくても、現在は空席になっている、自分と赤羽カルマの間の席に、何やらサーバーかスパコンかのような、大きな黒い箱が置いてある。

「うつつす。」

「あ、おはよ、吉良君…。」

「何、これ…？」

「いや、俺達が来た時には既に…」

杉野が言うには、自分達が一番最初に教室に入った時には、既に箱が置いてあったと

いう。

この黒い箱、重量物故、床に埋沈しない様に厚めの鉄板で補強した上に本体を設置、更には転倒防止の処理も きっちりと施されていた。

ヴウウン…

「「「「「!!?」」」」」

タイマー設定されていたのか、或いは対人センサーでも働いたのか、いきなり電源が入り、起動する箱。

ブツ…

本体正面上部の液晶モニターに、無表情な少女の顔が写り、数世代前のゲームキャラの様な お粗末な画像処理で口をパクパクさせながら、

『皆さん、オハヨーゴザイマス。』

今日から転校シテキマシタ…

（（（（そう来たか!!）））））

響達は変な汗を掻きながら、心の中で叫んだのだった。

「半分でなくて、全身機械だったか!」

「きーちゃくくん? そーゆー問題じゃあないと思うよ〜?」

倉橋がソフトに突っ込んだ。



「皆、既に知ってると思うが、転校生を紹介する。ノルウェーから来た……」

(烏間先生も大変ね……)

(俺、あの人だったらツツコミきれずにオカシくなるぜ……)

生徒達が気苦労を察する中、

カツカツカツ……

黒板にチヨークを走らせる烏間。

自律思考固定砲台

「……【自律思考固定砲台】……さん……だ。」

『よろしくお願ひします。』

何とも言えない表情をした烏間が紹介すると、無感情な棒読み口調の機械音声で挨拶する転校生。

生徒達は教室前方、黒板の前の烏間と、教

室後の席に設置されている自律思考固定砲台を首を前後に降り、交互に見ている。

この彼女?を見て、プークスクスな殺せんせー。

「お前が笑うな。」

「同じイロモノだろうが。」

鳥間とイリーナが突っ込む。

『彼女』はAI（思考能力）と【顔】を持ち、歴とした生徒として登録されており、設置された位置から攻撃をするが、『生徒』である限り、反撃は出来ない…らしい。

「…なるほどねえ。『生徒に危害を加える事を許されない』…私の教師としての契約を逆手に取り…なりふり構わず機械を生徒に仕立てた、と。」

流石に苦笑する殺せんせー。

「まあ、良いでしょう…。」

自律思考固定砲台さん？

あなたをE組に歓迎します！」

》》》

「吉良君、どー思う?」

「ん?何が?」

授業中、櫻瀬が響に話し掛ける。

「彼女…?固定砲台って割には、何処にも銃とか見当たらないし…?」

どーやって攻撃するのかな？」

「多分だけd」

「はい、後ろの2人、無駄な会話しない！」

「す、すいません…」

無駄話をしていた2人に注意した後、殺せんせーは黒板を向き、生徒達に背中を見せた瞬間…

ガチャガチャガシャガシャ!!!!

「やっぱしー」「嘘?」「かつけえー」

自律思考固定砲台本体側面の扉が開き、中部からショットガン等の銃器が付随されたアームが出現、

ボボツウ!!

殺せんせーに向けて、一斉射撃が開始された。

…が、これを難なく躲す殺せんせー。

眉間ギリギリまで迫る対せんせーBB弾も、手にしたチョークで容易く弾く。

止まらない銃撃の中、

「ショットガン4門に機関銃2門…」

濃密な弾幕ですが、この教室の生徒は当たり前前やってますよ？

それと、授業中の発砲は禁止ですよ？」

カシャン…

殺せんせーの言葉に反応したか、

『はい、殺せんせー、気をツケマス。』

自律思考固定砲台はショットガンと機関銃を本体内部に収納する。

そして、

ブオウウウウン…

起動音と共に、

『続いて攻撃に移ります。』

((全然、気をつけてねえ!!))

クラス全員が心の中で突っ込む。

この様子を、ガラス越しに廊下から烏間とイリーナが見ていた。

イリーナは、額に冷や汗を掻き、やや驚きの表情を見せている。

一方の烏間は、少なくとも表面では冷静を装ったいる。

(此処からが本領発揮だ。)

彼女、はA I (あたま)も内部構造(からだ)も自らの手で無限に進化していく…)

ガシヤガシヤ!!!

この自律思考固定砲台は、初撃と全く同じ射撃の後、初撃の最後の弾と全く同じ軌道に見えない様に、一発だけ弾を追加していたのだった。

殺せんせー視点からすれば、弾いた筈の弾が、未だ目の前にある様な感じだったであろう。

「マジかよ!?!」

「へ〜?♪」

「嘘…」

「弾が当たったの、初めて…だよな?」

クラス全員が、教室の後側の席に置かれた黒い箱に注目する。

カシャカシャ…

『右指破壊…増設した副砲の効果確認…』

2門の機関銃の内の1門には、初撃の際には存在しなかった、もう1つの銃口が、何時の間にか追加装備されていた。

そして、計2度の自らの攻撃を解析していく自律思考固定砲台。

『次の射撃で殺せる確率…0.001^割未満

次の次の射撃で殺せる確率…0.003^割未満

次の次の次の…

(中略)

卒業までに殺せる確率…90%以上…』

「『『『『『『!!』』』』』』』」

この時点で漸く生徒達は思った。

「彼女^がなら、もしかしたら殺れるかもしれない…と。

『よろしくお願いシマス、殺せんせー。』

続けて攻撃に移ります。』

画面に事前入力(プログラム)された笑顔を表示した転校生は、次の攻撃の為の進化

の準備を始める。

パパパパパパ…パスツ

「…?!」

学士帽と右触手に、自律思考固定砲台のショットガンから放たれたBB弾が掠る。

『2発の至近弾ヲ確認…』

見越し予測値計測の為、主砲を4増設…』

ジャキ…

その音声の後、黒い箱から新たにガトリングガンが現れ、

『攻撃を再開シマス。』

ドババア…

再び教室内に対せんせーBB弾が飛び交う。

E組生徒達は勿論、殺せんせーも甘く見ていた…というより、認識を間違っていた。

目の前に在るのは、紛れもない殺し屋

だった。

》》》》

「自己進化する固定砲台…ね。

正直、凄いわ。」

「彼女が撃っているのはBB弾だが、そのシステムは歴とした最初軍事技術だ。」

教室内の飛び交う弾の様を変わらず廊下から見ている烏間とイリーナ。

「確かに、これなら、いずれは…」

顎に手を当て、感心するかの様に暗殺成功に期待する烏間だが、

「ふん…そう上手く、いくかしら?」

冷めた目で、それを否定するイリーナ。

「この教室が、そんなに単純な仕事場げんばだったら…私は、こんなトコで教師なんてやっ
てないわよ?」

「イリーナ…?」

そう言うと、イリーナは教員室に足を運んで行った。

》》》

「をいをい…これ、俺達が片すのか?」

結果、1時限目は終始、転校生の銃撃で授業処ではなかった。

1時限終了後、教室中、床に大量に散らばった対せんせーBB弾を見て、三村航揮が
皆の心情を代表して呟いた。

「お掃除機能とか附いてないのかよ?」

固定砲台ちゃんよお？」

村松拓哉が原因である大きな黒い箱に話し掛けるが、何の返事も無い。

どうやら、休み時間は、自動的に節電モードになる様だ。

「ちいつ、シカトかよ！」

「止めとけて…機械に絡んでも仕方なねーだろ！」

ややキレ気味の村松を吉田大成が窘める。

》》》

「「「「「……………。」」」」」

2 時限目終了。

1 時限同様、自律思考固定砲台からの銃撃により、授業は全く成立しなかった。

残ったのは、床に散らばる無数のBB弾。

「「「「「ふう……………」」」」」

正直、生徒達も箒を持ってはいるが、片付ける気は薄れている。

「仕方ない…皆、この教室の後片付けは帰る前にしよう。」

そう言ったのは、クラス委員の磯貝悠馬。

カツカツカツ…

黒板に書き込みをした後、

「さあ皆、教科書にノート、それと書く物を持って！」

「「「「さ、流石イケメン！」

そこに痺れる、憧れるう!!」「「「「」

▼▼▼

3 時 限 目。

教員室からE組教室に向かう殺せんせー。

「やれやれ…自律思考固定砲台さんにも困った物です。

これでは授業が進みませんねえ…。

既に無駄になった2時間分、どこかで取り戻さないと…」

ガラ…

そう考えながら、教室の扉を開けると

「にゅ？」

教室に生徒は誰もいない。

床には無数に散らばった儘のBB弾。

そして一番後ろの席に、自律思考固定砲台が、1人、在るだけだった。

「これは…!?!」

そして黒板には

2—Eの教室にいます。

生徒一同

：そう、書き込みしてあった。

▼▼

特別強化クラスE組。

柊ヶ丘中学校では極 短い期間ではあるが、E組が2学年存在する時期がある。

3学期の期末試験が終わり、当時の成績不振の2年生が篩落としされE組に通い始め、そして当時の3年生が卒業するまでの時期だ。

傍迷惑この上ない転校生に業を煮やした磯貝の案で、E組面々は、今は まだ誰もいない、その2年生の教室で待機していた。

》》》

「教室は帰る前に、掃除しますよ。」

「文句はないですよね？殺せんせー？」

「にゅや…仕方ありませんねえ…」

磯貝と片岡、2人のクラス委員が、不要ではあるうが、一応事情を説明。

アンタ達、タコとカラスマから伝言よ。

午後は全部、体育だつてさ。」

「げっ!!」

「マジかつ!？」

「2時限連続で体育つて、普通に死ねるぞ、おい!!」

「ビッチ先生、殺せんせーは?」

「さあね?あのタコ、今日の残りの授業を あたし等に押し付けると、どっかに飛んで行ったわ。」

》》》

その日、殺せんせーは放課後が過ぎても、生徒達の前に姿を見せなかった。

▼▼▼

その日の深夜。

E組へと足を運ぶ、1つの巨大な影。

「ヌルッフ…:思った以上の出費でした。」

殺せんせーである。

ガラ…:

「失礼しますう…:」

誰もいない教室に入り、

パチ…

「にゅ…う？」

部屋の照明を点けると、其処には本体を布テープでぐるぐる巻きに拘束された、自律思考固定砲台が在った。

ヴウウン…プツ

『殺せんせーですね？』

対人センサーが発動、電源起動する自律思考固定砲台。

『この拘束は、あなたの仕業ですね？』

これでは銃を展開出来ません。

これは明らかに生徒わたくしに対する加害であり、それは契約で禁じられている筈ですが？速

やかに拘束を解いて下さい。』

「いや、それは、恐らくは…」

動機は充分に理解出来る。

そして、現在のE組内で、実際に此処まで敢行してしまいそうな人物…

殺せんせーの頭の中では、とりあえず3人の顔が浮かぶが、今は犯人探しをする時ではない。

食欲旺盛な探偵少女に『犯人はお前だ』等と言わせる出番を与える必要も皆無だ。

「自律思考固定砲台さん、それは先生ではありませんよ。」

ならば誰か？そして その理由(わけ)は？

それを分析する処から始めませんか？」

『この拘束が殺せんせーの仕業でないならば、E組の誰かとしか考えられません、その確固たる理由が想定出来ません。』

「解りませんか？」

あなたが…いえ、あなたの保護者(おほや)が考えている戦術は、この教室の現状に合っているとは言い難い。

あなたが この教室の生徒だと言う限り、今日の様なスタンドプレイでなく、皆と協調するというのが最優先課題ですよ？」

『協調？』

「考えてみて下さい。」

今日は君の生徒達を巻き込むのも厭わない無差別射撃で、2時間ほど授業がまるまる潰されています。

更には それで撒き散らした弾の始末に、無駄な労力を費やした。

3時限目以降、この教室で授業が行われなかったのも その為です。

しかも、仮に君が先生を殺せたとしても、その賞金は恐らく、君の開発者に行くでしょう。」

『賞金?』

「にゅ?それは情報として入力されていませんでしたか?」

先生の首には、100億円という賞金が賭けられているんですよ。

兎に角、其れ等を踏まえても、あなたの暗殺は、他の生徒には何のメリットも無いという訳です。」

『理解しました。殺せんせー。』

確かにクラスメイトの利害までは、考慮していませんでした。』

「ヌルフフフ…やっぱり君は頭が良い。」

其処です。先生は そんな あなたの為に、こんな物を作ってみました。」

殺せんせーが取り出したのは、VHSテープサイズのメモリ拡張パーツ。

『それは?』

「アプリケーションと追加メモリです。」

ウィルス等が入っていないので承認(うけと)って下さい。」

そう言いながら、殺せんせーは本体外部入力端子に拡張パーツを接続する。

『これは…』

新たに組み込まれた情報に感嘆する自律思考固定砲台。

それは自分の視点からのE組生徒着席時の正確な座標に壁や床の僅かな凹凸、其れ等を踏まえた安全な跳弾の軌道。パターンを含む射撃ライン、クラスメイトとの連携攻撃のパターン等の演算ソフトだった。

『殺せんせー、このメモリを承認するには異論ありません。

しかし、あなたが何故、この様な行動をするのか、理解不可能です。

これにより、暗殺成功確率が大幅に上昇するのですよ?』

「当然です。私は暗殺対象である前に先生ですから。

今日、僅か2時間程ですが、身に染みて解りました。

君の学習能力と学習意欲は非常に高い。

最新の人工知能と比べても突出している。

その高性能は、君を作った開発者の お陰。

そして、君の才能を伸ばすのは、生徒を預かる先生の仕事です。

皆との協調力も身に付けて: : : どんどん才能を伸ばして下さい。」

『この教室での暗殺において、クラスメイトとの協調の必要性は理解出来ました。

しかし、如何にして理解協力を得られるか、方法が分かりません。』

どん!

「お任せあれ！」

既に準備をしてきました。」

何やら色々と、パーツや工具が詰め込まれた大きな箱を前に出した殺せんせー。

箱の中にミニ四駆や、○トの剣の様な物が紛れて込んで見えるのは気のせいだろう。

『それは何デシヨウカ?』

「協調に必要なソフト一式と追加メモリです。」

ヌルフフフ…: 危害を加えるのは契約違反でしょうが…: 性能アップさせるのは禁止されてませんかからねえ?」

この時、ドライバーやスパナを持った殺せんせーの顔は、シヨツ○ーの改造専門の科
学者の様だったという。



翌日。

教室に向かい、廊下を歩いているのは響、磯貝、片岡の3人。

「なあ…: 今日も居るのかな?」アレ…:」

「ん、簡単に撤収出来る代物じゃないだろうしねえ?」

「磯貝君と吉良君は、殺せんせーが深夜にメールしてきたの見た?」

「今日はキチンと『3-E』の教室で授業を行うってヤツだよな?」

「まあ、昨日、寺坂達がガムテープで簀巻きにしたから、あの銃を出すのは無理だろ?」

「磯貝君と一緒に、クラス委員として鳥間先生に相談する事にしたわ。」

「アレと一緒にじゃ、クラスが成り立たないってね。」

「ん、よろしくお願いします…と。」

そう言いながら、教室に入ると、

「何だか容量が増えてない?あの箱…」

「確かに…」

明らかに昨日より、奥行き側面が倍増しになっている感じの黒い箱に3人が近づくと、

ヴウウン…

電源が入り、そして

「おはようございます!!」

片岡さん、磯貝さん、吉良さん!!」

「「はいいいっつ??」」

昨日には装備されていなかった、全面液晶モニターに等身大な美少女が写り出し、凄く明るい笑顔で、爽やかな口調で朝の挨拶をしたのだった。

どうして こうなった…

「今日は素晴らしい天気ですね！」

こんな日を皆さんと過ごせるなんて、凄く嬉しいです!!」

少女?に一体、何が起こった?

「庭の草木も緑が深くなってますね。」

春も終わり、近づくと初夏の香りがします!」

「……………」

何という事でしょう…

顔だけが表示されていた窓枠の様なモニターが、本体正面全てが液晶ディスプレイとなり、身体全身が写し出される様になりました。

以前は無表情無感情棒読み口調だった言葉使いも、今は明るく笑顔で感情豊かに、爽やかに話しています。

無機質で黒一色だった画面背景も、光溢れる明るい色調の空間から大自然の絶景に街中、宇宙空間等、自由に設定可能。

飛びながら囀る小鳥、舞う木の葉に木洩れ日等のエフェクト、その場のムードを醸し出す音楽の再生機能まで付属され、至れり尽くせりです。

「な、何と まあ…たった一晚で えらくキュートになっちゃって…」

「この子？一応、あの固定砲台…よね？」

最初に彼女？を見た響達を筆頭に、教室に入っては挨拶をしてくる自律思考固定砲台を見て、フリーズするE組の面々。

「転校生が…」

「可笑しな方向にversion upしてきた…」

「…!!?」

「ヌルフフフ…どうですか？皆さん？」

「…」「殺せんせー！」「…」

そこに やってきたのは殺せんせー。

「ヌルフフフ…親近感を出す為の全身表示液晶と身体・制服のモデリングソフト…全て自作で8万円!!」

「おはようございます、殺せんせー！」

こんな風に皆さんと会話出来る様にしていただいて、本当に感謝しています!!」

「豊かな表情と感情ある会話術…其れ等を操る膨大なソフトと追加メモリ、同じく全て自作で12万円!!」

「なるほど…昨日、殺せんせーが途中から消えた理由は、このパーツを買い漁っていた訳か。」

遠い目をしながら、納得する響。

「そして先生の財布の残高……5円!!」

そう言うのと殺せんせーは、顔をクワツと強張め、触手の指先に貼り付けた5円玉を見せつけた。

「殺せんせー、すいません、私なんかの為に、そこまでして貰って……」

「い y」

「いや、気にする必要は無いよ。」

「そーそー♪」

「にゅやー!中村さん!吉良君!」

心底、申し訳無さそうな表情をしてる固定砲台に、何か言おうとした殺せんせーの言葉を遮り、「大丈夫」とばかりにサムズアップする2人。

このやり取りがキツカケとなり、他の面々も徐々に、この新しい転校生の前に集い、色々と話し始める。

「ケツ!何 騙されてんだよ、お前等?」

全部 あのタコが作ったプログラムだろ!!」

その想定外な好評っぷりに、面白くなさそうに言うのは寺坂龍馬。

「どんなに愛想良くても機械は機械。」

どおーっせ、また空気読まずに弾あ散撒かすんだろ、このポンコツ？」
ウイーン…

新たに組み込まれた本体巡回機能で、正面を寺坂の方向に向ける自律思考固定砲台。
「仰る気持ち、解ります、寺坂さん。」

デイスプレイの中の彼女は申し訳無さそうに俯いている。

「確かに昨日までの私は、そうでした。」

ポンコツ…：そう言われつも、返す言葉がありません。ううう…」

大粒の涙を流し、顔を覆う自律思考固定砲台。

「あーあ、泣かせた？」

「寺坂君が二次元の女の子、泣かせちゃったよ。」

これに女子達のが非難轟々を浴せる。

「なんか誤解される言い方 止めれ!!」

必死に否定する寺坂。

しかしながら、一度熾きた炎は簡単には消える事はなく…

「「「寺坂、サイテー。」」」

ぼん…

「寺坂、どんまい！（爆）」

「黙れ!!」

そんな寺坂に肩ポンしたのはカルマだった。

「でも皆さん、御安心を。」

殺せんせーに諭されて、私は協調の大切さを学習しました。

皆さんが私の事を好きになって頂けるよう努力し、皆さんの合意を得られる様になるまで：私単独での暗殺は控える事にしました。」

泣き止み、話を続ける自律思考固定砲台は、そう言つて微笑む。

((((か、可愛い：!!)))

この天使デビル・スマイルの微笑み(笑)で、クラスの男子の半数は墮ちた。

特に、

「ふっ：善いじゃないか、2Dhimelishon：」

『D』を1つ喪つた その時、女は初めて女になるのさ：」

竹林考太郎はそう言うのと、掛け直した眼鏡を鋭く光らせるのだった。

「そう言う訳で皆さん、仲良くしてあげて下さい。」

あ、勿論、先生は彼女に様々な改良を施しましたが、彼女の殺意には一切、手を付けていません。

先生を殺したいなら：彼女は きっと、心強い味方になってくれる筈ですよ。」

「……………」

渚は この時に思った。

本当に何でも出来るな、殺せんせーは…

機械まで ちゃんと生徒にしちゃうとは…



「じゃあさ、このコの呼び方 決めない？」

「自律思考固定砲台」って、いくら何でも…ねえ…？」

「そう言い出したのは片岡。」

「…ですよねー？」

「…だね。」

皆も同意する。

「じゃあ此処は、あのタコに名前付けた、茅野ちゃんの出番だね？」

「え？あたし？うくん…」

響の不意な振りに、茅野は少し驚きながらも考える。

「何か一文字取って…自…律…そうだ！」

何か閃いた茅野。

「『律』！どうかしら？」

「安直だなく？」

そう言ったのは、E組で最も、安直とは縁遠い名前の木村正義。

「俺は逆にシンプルで良いと思うぜ？」

本人は、どー思う？」

「嬉しいです!!」

それでは、今後は私の事を、**律**と呼んで下さい！」

》》》》

「あは♪皆、見てよ♪」

「もく、中村さん、止めて下さいよ〜♪」

「へく、タッチパネル機能まで付いてるんだ〜？」

中村が頬を突つくと、それに合わせる様に その部分が凹む表情になる律。

「殺せんせー、仕事が細かいな…。」

「…だね。」

感心する響と渚。

「あ、わたしも やってみる〜♪」

「…あたしも。」

「きや？・倉橋さんに速水さん？」

倉橋と速水に左右から頬を突つかれると、照れながらも嬉しそうな顔をする律。

「へへ、じゃ、俺も……」

……と、両手の人差し指を立てて彼女に近づいた途端、

「己は何処を触ろうとしてるっ!?!」

ドガツ！ x 2

「ぎやーっ!!」

中村と不破からレミントンとM16のフルスイングを顔面に喰らい、岡島は倒れた。

「律、大丈夫？」

「はい……でも それって、私でなく、岡島さんに掛ける言葉ではないのでしょうか？」

「死にやしないわよ！ギヤグ補正で!!」

そう言ったのは不破優月。

「岡島……お前ってヤツわ……」

幾らグラフィック的に きよぬーだからってなあ、実際は平面の ペったんだぞ？

そんなの触って、何が楽しいんだ……

いえ……何でもないでs（ビシッ!）ぐあ……クマさん……だt?!」

ゲシゲシゲシゲシゲシッ!

「ぎゃつあぁ〜っ?!」

「前原あ〜?!」

自業自得で倒れた岡島に対し、前原が嗜めようとするが、その最中で女子達の視線に身の危険を感じ、途中で言い留まる。

…が、少し遅かった様で、岡野からハイキック、更には、その際に視界に写ったそれをつい口に出してしまい、更に鬼の様な凶悪なストンピングの連打を追加で喰らってしまう。

そう、説明が遅れたが、この律、誰の設定しゅみかは知らないが、その等身大グラフィックのスタイルは巨乳にカテゴリー分類されるに相応しい物だった。

参考までに、

矢田≒律へイリーナ

…と言った処か。

▼▼

「ほえ〜?こんなので体の中で作れたりするんだ!」

律が出したアームの先端には、ミロのヴィーナス像のレプリカが。

目を輝かせる倉橋、岡野、矢田。

「はい。特殊なプラスチックを体内で自在に成型出来ます。

設計図デーがあれば、銃以外も何でも作れちゃいます!」
「こりや凄いな……!」

感心する響。

「ありがとうございます、吉良つちさん!

あ、千葉君、王手です。」

「…3局目で もう勝てなくなった。

何つー学習能力だ…。」

「じゃあさ じゃあさ?

花とか作れる?」

「はい、データデーさえあれば。

お花の形デーを学習しておきますね♪」

》》》》

「人気者だなく?」

俺の時も、あんな感じだったかな?」

「ん、吉良君も、あんな感じだった。」

「最初は回りが引いてた辺りも… (笑)」

「やかましいわ!」

皆が律の回りに集まっている様を見て、3月に自分がE組に編入した時の事を思い出す響。

「上手くやっていけそうだね?」

「ん〜…どうだろな?」

「…吉良君?」

「寺坂の言った通り、殺せんせーのプログラム通りにうごいてるだけっしょ?

機械自体に意志や感情がある訳じゃない。」

「あの律の開発者もちぬしが、現状を どう思っているか…それ次第だろ?」

「カルマ君…吉良君…」

現状を冷静に分析するカルマと響に、渚は黙り込む。

そして響は

そう…律の開発者(おや)が、どんな風に出るか…だな。

そう考える…。

▼▼▼

その日の夜。

「…何だ、これは?」

E組教室にやってきた、律…自律思考固定砲台の開発者を含む4人の男達は、変わり

果てた自分達の作った商品の姿に言葉を失っていた。

「今晚はマスター！」

御陰様で とても楽しい学校生活を送っています！」

「「「……………」」」」

明るいBGMを流し、画面の中で手乗り鸚哥や蝶と戯れながら、開発スタッフ達に微笑み、挨拶する律。

「…有り得ん。」

「勝手に改造された上に…」

「どう考えても暗殺と関係ない要素まで入っているではないか！」

「これが、Japanese魔改造なのか？」

ガシャ…

持参した工具を手にする開発者達。

「マスター？」

「今すぐ分オーバーホール解だ。」

「暗殺に必要な物は、全て取り去る！」

工具を持って律に近づくとスタッフ達。

「待つて下さい、マスター！」

私は現状がベストと認識しています！

これは、初期AIが出した結論です!!」

「黙れ、機械の分散で開発者に逆らう心算か！

中途半端にAIに人間らしさを組み込んだのが失敗だった様だ。」

「開発者の命令は絶対だ。」

お前は暗殺の事だけを考えていれば、それで良いのだよ？」

「いや、止めて下さい、私の話を聞いて下さい、マスターー!」

ブイイイイイン…

開発者に同行した技術スタッフが持つ充電式インパクトドライバーが、律本体の外部

カバーと内部基盤パーツを繋ぐ連結ビスに触れた時、

「はい、ストーツプ!其処まで〜!」

「「「!!!」」」

開発者達は驚く。

自分達以外、誰も居ない筈の教室から、いきなり部外者の声があったのだから。

「よっー律♪」

「吉良つちさん?」

何時の間にか、黒板の前の教卓の天板の上に、響が座っていたのだった。

「何だね、君は？」

「何時の間に？」

「…吉良つちさん、私のセンサーにも、あなたは感知出来ませんでした。」

何時、どうやって この教室に入ってきたのですか？」

「(ん…まさか、グラウンドからSEVEN SENSES全開で教室の様子を窺っていて、ヤバそうだったから光速で教室に入ってきた…とは言えんよな…) 最初からいたよ。」

「バカな!?我々が教室に入ってきた時は、確かに無人だったぞ！」

「其処は東洋の神秘? (笑) って事で。」

「[[[[N I N J Aか!]]]]」

ですか?!

思わず その場にいる者、全員が突っ込む。

「んな訳ないだろ！」

俺の事は、只のカラテ使いで納得しろ！」

どうやら響は、忍者扱いは好まない様だ。

「ふん…!それでカラテボーイ？」

我々に何の用だ？」

「決まってるだろ？」

律の解体を止めに来た。

今の律は、お前等が送り込んだポンコツ固定砲台とは訳が違う位に戦力なんだよ！

現場の人間の意見だ。尊重しろ、な？」

因みに今更だが、この やり取りは全て英語で行われている。

「吉良つちさん…ポンコツ呼ばわりは地味に傷つきます…。」

響⇨律の間は日本語だ。

「黙れ小僧が！お前に何が解る？」

コイツのルーツはイージス艦の戦闘AI！

人間より速く戦況を分析し、人間より速い総合的判断で あらゆる火器を使いこなす。

加えてコイツは卓越した学習能力と自身で武装を改造出来る機能を持つ。

コイツが その威力を実証すれば、世界の戦争は一気に変わる。あの怪物の賞金等、ついでに過ぎん。

怪物殺しの結果を出せば、我々の齎す利益は数兆円だ！」

「…成る程、つまりはアンタ等、部外者の改良で結果を出されたら、自分達の手柄にはならないから、元に戻そうとしてるだけなのか…」

「ふん！何とでも思うが良いわ、ガキが！

兎に角、この教室は、我々が作った、コイツの性能を試すのには、絶好の実験場なんだよ（ドガツ）AJAPAH!!」

「今、何だった？ゴラ、!？」

開発者が台詞を言い終わる前に、響の前蹴りが炸裂した。

そして倒れた開発者の首を掴み上げ、無理矢理に起こす響。

「AHHHHH…?」

「実験場だ？そんなんで、俺等の授業、ぶっ潰してくれたんか？あ、あん!？」

バキイ！

「ぐびいー!」

更に右の正拳を鳩尾に打ち込み、

「取り敢えず、昨日の授業邪魔された怨み28人分（×2時限）、受け取れ!…:な?」

何気に、とんでもない事を、指の関節をパキパキと鳴らしながら言う響に、責任者である主任開発者が叫ぶ。

「お前等、さつきから何をしている!？」

さつきと このガキを取り押さえろ!!」



「うう…」「かはあ…」

「取り押さえろ!!…は、どうした? (笑)」

当然と言うべきか、この4人が響を取り押さえるというのは無理な話だった。

逆に響に授業を潰された28人×2時限分の制裁とやらを喰らう事になる。

「吉良つちさん…原因の一因である私が言うのも何ですが、流石にコレは、やり過ぎではないかと…?」

どん引く表情のAI少女。

「いや、まだ殺つてないよ。」

再び顔を、床に這いつくばっている開発者達に向ける響。

「おい、オッサン、先に言っとくがな、この律の魔改造はオッサン達のt

「え? 私つて、本当に魔改造だったんですか?」

「律…お願い…少し黙つてて。」

えーと、何処まで話が進んだ?…律の改良は、オッサン達の為でもあるんだぜ?」

「は? 一体、どういう事だ?」

「簡単な話だ。」

アンタ等が置いたいった【自律思考固定砲台】の無差別射撃の巻き添えを喰いたくないって理由で、俺等が授業をボイコットしたら どうなると思う?」

生徒が居ないんじや、殺せんせーも、この教室に留まる理由は無いからな、来年の3月まで、何処かに姿を消すだろうぜ？

使えないガラクタを置いたせいで、ターゲット標的を行方知れずにしてしまった日にや、お前等
 どんだけ責任追求されるかな？

当然、地球滅亡の責任もお前等が全て、被る事になるだろうね。

ついでに言えば、アレで俺達生徒が巻き添え喰らって怪我してた日にや、お前等が確
 実に あのタコに殺されてるぜ？

殺せんせーは生徒に危害を加える者には、容赦ないからな。

さつきも言ったが、今の律は、お前等が作ったポンコツ欠陥品とは、次元が違う位な
 立派な戦力なんだ。

余計な事はしないで、さつきと消えろ。」

「ガラクタ…ポンコツ…欠陥品…orz」

「あー、律？大丈夫だよ、今は そうは思っていないからね？

機械がorzるって、どうかと思うよ？」

『『今は』って、転校初日は やっぱり、そう思っていたんですね…？』

「待て、落っ着け、律！」

徐々に沈んでいく律の表情を見て、寺坂に続き、『二次元の女の子を泣かした男・2号』

になるのを回避するのに、地味に必死な響。

「そ、それならー！」

ここで開発者の主任が立ち上がり、口を開いた。

「少年、では、これならどうだ？」

この自律思考固定砲台は我々が元に戻す。

そして3月までに、コイツがヤツを殺せた

ら、君達E組の諸君には500：いや、1000億円ほど払おうではないか！

だから君達は、この教室に留まっついてはくれないか？」

「おお、ナイスなアイデアだ！」

「それが良い！」「そうしよう!!」

主任の言葉に便乗する技術スタッフ達。

だが、それは響にとつて、『グーで顔を殴ってくれ』と同意語でしかなかった。

「巫山戯るのも大概にしろよ？」

1度、死なないと分からないか？

てゆーかテメー等、1回死んでこい!!」



「生命反応0…」

吉良つちさん、まさか本当に4人共、殺してしまうとは…」

床に転がっている4人の開発スタッフ達を解析する律。

「大丈夫だって、まだ『完全に死んではない』からさ！おら、起きろ！」

ゲシツ!! x 4

そう言うのと、床に落ちている、4体の「死体」の腹部に蹴りを入れる響。

「「「ぐは…」」」

これにより、開発者達は目を覚まし…

「「「ひ、ひいいいいいい!!」」」

「ん？どうした？」

まるで黄泉比良坂の奈落の底に向かう、亡者の葬列にでも加わっていたかのような怯え

方だな？」

「「「ひ、ひええええええい!!」」」

▼▼▼

今、教室に居るのは、響と律の『2人』だけである。

「吉良つちさん、やはり解析不能です。」

マスター達は、どうやって生き返ったのでしょうか？」

「ん、東洋の神秘？」

「良いかい律？世の中には未だ、科学では説明出来ない事が、沢山あるんだよ？」

「はあ…」

まさか、積戸気冥界波で死の世界に一時的に飛ばした等と話せる筈はなく、響は東洋の神秘という便利な言葉で無理矢理に誤魔化す響。

「まあ、あんな目（笑）に遭ったから、二度と律に手を出したりはしないだろう？」

「はい…」

「この事は一応、殺せんせーには言っておいた方が良いよな。」

明日の朝、俺から話しとくわ。

じゃ、俺は帰るから。」

「吉良つちさん、最後に1つだけ…」

「ん？」

「吉良つちさんは、マスターが私を初期化しに来るのを、分かっていたのですか？」

「まあ…ね。少なくとも1週間以内には行動起こすって踏んでいたから、暫くの間、張るつもりでいた。」

まさか、初日の今日に来るのは出来過ぎだったってだけさ。」



「…とゆう、事がありました。」

「にゆ…すいませんねえ、吉良君…。」

次の日の朝、響は事前に殺せんせーに夜にあった事をメールで伝えた上で、その事について話す為、普段より少しだけ早く登校していた。

「開発者の介入については、先生、完全に見落としてました。」

しかし律さん、あなたが開発者に対して、初期化を拒否する様な対応を見せたとは…。「ああ、正直それは、俺も驚いたよ。」

「殺せんせーに計985点の魔改造（泣）を施された結果、私個人は『協調性』が暗殺に絶対必要不可欠な要素と判断し、他にも追加された機能を削除・撤去するのは有益ではないと、意見しただけなつもりなのですが…。」

「…素晴らしい！つまり律さん、あなたは『自らの意思』で、開発者に対して『NO』を言ったという事ですな！。」

「はい！私の意思で産みの親に逆らいました。」

少女は満面の笑みを浮かべて話す。

「殺せんせー、こういう行動を、反抗期、と言うのですよね？」

律は悪い子なのでしょうか？」

この律の質問に殺せんせーは、顔に大きな○を浮かべて、

「とんでもない…中学3年生らしく、大いに結構です。」

…そう言うのだった。

そして、そういう話をしてる内に

「おはようございます…」

普段の登校時刻となっていた。

「おつはよー♪」

「おはよーございます。」

「おはようございます」

教室に入ってきたのは倉橋、岡野、矢田。

「あ、おはようございます！」

倉橋さん、岡野さん、矢田さん！」

「律っちゃん、おは〜♪」

ホームルーム前、女子生徒を中心に、E組の殆どの生徒が律の周りに集まっている。

ジャキッ！

「「「「「え？」」」」」」

そんな中、いきなり、律の本体側面の扉が展開され、4本のアームが飛び出す。

そして、その各アームは、色とりどり咲き乱れた花束を持っていた。

師弟の時間

今、E組教室ではイリーナが用意してきた教材(??)のVTRを流しながら、実践的、英会話の授業中。

「分かったでしょ?」

このサトルとシロネのエロトークの中、難しい単語は1コも無いわ。

日常会話なんて、どこの国でも、そんなもんよ。」

モニターには蒼黒い髪の少年が、艶んだ顔をした、白髪の少女が露骨な言葉で、それでいて無邪気に?言い寄るのを、呆れた顔で論しながら躲している場面が流れていた。

「周りに1人はいるでしょ?」

「マジすげえ」とか「マジ パネエ」だけで会話を成立させる奴。

その「マジ」に当たるのが、あんた達も御存知の『realy』。

…木村、言ってみなさい?」

「…り…りありー」

この木村の発音に

「はいダメー!」

「LとRがゴチャゴチャよ！」

イリーナは両手の人差し指でXハッを作り、ダメ出しする。

「兎に角、LとRは発音の区別がつく様になつときなさい。

外国人わたしとしては通じはするけど、やはり少し違和感があるわ。」

・ ビッチ先生、らしからぬ まともな内容に、思わず真剣に聞き入る生徒達。

「言語同士で相性の悪い発音は必ずある。

例えば、テレビとかでも外人の話す日本語は、『た』行が『しゃ』行になっていたりする時があるでしょ？

日本人のLとRは、私にとって そんな感じよ。」

更に続くイリーナ先生の御教授。

「相性が悪い物は逃げずに克服する!!」

これから先、発音は常にチェックしてるから、LとRを間違えたら…」

ここでイリーナは、今までの真面目な教師の顔から、妖しくも人を惹きつける艶やかな表情に豹変し、

「公開デイトピキスの刑よおん…♡」

人差し指を唇に当て、色香を放ちながら言うのであった。

ぞくつ…!!

戦慄する生徒達。

特に身に覚えのある渚、響、矢田の震えっぷりは、ハンパではなかった。

「じゃあ、そんな訳で…はい、次ソノミ、言ってみよーっ！」

「え、？ええ!？」

急に振られてテンパる櫻瀬園美。

「(今日の生贄は櫻瀬さんか…)」

クラス全員が見守る中、

「れあるいい…」

これに対してイリーナは、凄く嬉しそうな笑顔をして腕を交差し、

「はい、ダメー!」

この時 E組の生徒達はイリーナの背後に、絶叫しながら両腕でXバッを作る、太ったキ

リストが見えたと云う。

「いやああああああっっ!!」

そして教室内には、絹を引き裂いた様な少女の悲鳴が木霊した。

ぐったり…

約20秒後、櫻瀬は顔を赤らめて惚けた表情で、ぐったりと椅子にも垂れ掛けてい

た。

「ちよ…律う、正直に言うかな…?♪」

「カあ〜ルマあ〜~~~~つ!!」



放課後。

「しつかし卑猥だよな〜、ビッチ先生の授業ってさ〜?」

「ん。下ネタ多いし…」

「アレ、中学生に見せても善いやツか?」

帰り道、今日の英語の授業について語る生徒達。

「…でも、分かり易いのも、確かだぜ。」

二次創さく…じゃなくって、海外ドラマは良い教材って云うぞ?」

「ん?吉良?」

響の台詞に、僅かな違和を感じたのは磯貝。

「シロネたん…ハアハア…」

「止めんか!この変態終末期が!!」

ビシイ!!

「うぎぢや!?!」

教材VTRに登場した少女に発情していた岡島の脳天に、岡野の踵落としが炸裂した。

「潜入暗殺が専門だから話術も上手いし、間に挟む経験談も聞いてて飽きないよね?」
「うう…」

岡野の言葉に何かを思い出した様に、急に黙り込むのは矢田桃花。

「たださ…」

「ただ?」

「正解しても、どっちみち公開デープキスされてるよね?吉良君?」

「やかましい!ありやマジに痴女だ!!」

》》》》

「あゝったく、もう!!」

面倒いわ、授業なんて!!」

教員室に入った途端、疲れた顔を見せ、やってられないとばかりに椅子に座り込むイリーナ。

そんな彼女に対し鳥間は、

「…その割には、生徒の受けは良いぞ?」

生徒達に興味を持たせる技術に長け、内容は兎も角…経験を活かした実践的授業は見

事だと思うが？

お前が来たのは生徒達にとって、あらゆる意味でプラスになっている筈だ。

…ん？どうした？」

「カラスマ…あんたが其処まで私を誉めるなんて…もしかして、惚・れ・た？」

「評価すべきは評価する。それだけだ。」

イリーナの含みある口調にも、何事も無かった様に答える堅物・烏間。

「…ふ、ふんっ!!」

そんなの、何の自慢にもなりやしないわ。

殺し屋よ、私は！殺し屋!!

あのタコを殺す為に、この学校にいるの！

そ・し・て！その肝心のタコわ!!」

「ヌルフフフフ…いや、絶景絶景♪」

其処にはイリーナの机の上に正座して、真上から胸の谷間を景色に見立てる茶人…優雅に お茶を飲んでいるピンク色のタコがいた。

イリーナがナイフを持って切りつけるが、このタコに刃は届かない。

「焦るな、割り切れ、そして慣れろ。」

そういう暗殺対象（ターゲット）だ、ソレは。

腰を据えて、じつくりと機会を窺う為に、俺達は教師になったんだ。」
烏間が諭すが、

「Son of a Bitch!

やってらんないわ!!」

イリーナはナイフを放り投げて部屋を出て行った。

「…随分と気が立ってますねえ？」

もしかして、女性の日ですか？」

その様を見て、このタコは言うのだが、

此処は皆で言うべきだろう…。

『全て、お前のせいだ!!』…と。



イリーナは今、E組教室の隣、作業実験室に来ていた。

窓際に立ち、1人思う。

…こんな場所で、これ以上、足止め食ってる訳にはいかない。

殺し屋の業界で名を上げて、のし上がるのは これからなのに…

今回の仕事は、最大のチャンス。

なのに、アイデアが纏まらない…

一体、どうやったら、あのモンスターを…

(ビーン…)

え…!?

そこまで考えいたイリーナの身体が突然、宙に浮く。

ワイヤートラップ。

何者かが放った、ワイヤーの輪っかに首を捉えられ、その儘天井近くまで持ち上げられるイリーナ。

咄嗟にワイヤーと首の間に指を入れ込み、頸動脈を圧迫されるのだけは防ぐ。

「驚いたよイリーナ…」

教師をやつてる、お前を見て…」

「せ…師匠?」

そこに居たのは、東欧諸国の言語を低い声で話す初老の男。

その鋭い目つき、トラップの扱い、そして何よりも、イリーナに師匠と呼ばれた事から、裏に生きる人間である事は間違いないでなかつた。

「子供相手に楽しく授業に、生徒達と親しげな朝と帰りの挨拶…」

まるで…お笑い芸人のショーを見ている様だったぞ…。」

男は影を含めた目つきで不敵に微笑む。

「Hey, What are You doing? (おい、何をしている?)」

其処に現れたのは烏間。

「Get down. (下ろせ)」

It isn't trap to set to woman. (女に仕掛ける技じゃないだろう)」

「…心配ない。」

ワイヤーに対する防御位は教えている。」

烏間の英語に対し、東欧の言葉で応じる男は、ナイフ(タコ専に非ず)を取り出すとイリーナを吊り上げているワイヤーを断ち切った。

ドサッ

「ケホッ…ケホッ…」

床に落ちるイリーナ。

「(東欧諸国の言語か…?) 何者だ?

せめて英語だと助かるのだが?」

「…これは失礼、日本語で大丈夫だ。」

別に怪しい者ではない。」

この鳥間の英語に対し、男は今度は日本語で答える。

しかしながら、いきなりイリーナにワイヤートラップで殺人未遂をしでかす辺り、怪しき100割なのは否めない。

「私は この…イリーナ・イエラビッチを この国の政府に斡旋した者…と言えば、お分
かりだろうか？」

「… 殺し屋・ロヴロ!!」

「Ex actly」

殺し屋ロヴロ…嘗ては腕利きの暗殺者として（裏の）世界的に知られていたが、現在は引退。

後進の暗殺者を育てる傍らで、その斡旋で財を成している。

暗殺者の様な存在に全く縁の無い、今の日本政府には貴重な人脈であった。

「Mr. カラスマ、殺せんせーとやらは、今何処にいる？」

「奴なら…入間市に饅頭を買いに行くとか言っただけで行った。

奴にしたなら、大した距離じゃない、じきに戻るだろう。」

「ふ…噂通りな怪物だな？」

口元を俄かに緩めたロヴロは、イリーナに目を向けると

「来て良かった。答が出たよ。」

「師匠？」
せんせい

「今すぐ撤回しろイリーナ。」

「この仕事は お前では無理だ。」

「…!!」

イリーナの顔が曇る。

「…随分と簡単に決めるな？」

彼女は あんたが推薦したのだろうか？」

「実際に足を運んで現場を見てみたら、状況が大きく変わっていた。」

もはやコイツは、この仕事に適任ではなくなったと言う事だ。」

烏間の問い掛けに対し、その理由を説明するロヴロ。

「確かにイリーナは、正体を隠した潜入暗殺なら、その才能は比類ない。」

「…だが、一度素性が割れてしまえば、一山幾らレベルの殺し屋に過ぎん。」

そう言うのと、先ほど迄は影を含めながらも、笑みを浮かべたロヴロの顔が修羅の如き豹変、

「挙げ句、見苦しく居座り教師の真似事…」

俺は こんな事をさせる為に、お前を教えた心算は無いぞ？」

鋭い眼光で自分の弟子を睨み付ける。

それに対しイリーナは、負けじと険しい表情で

「そんな…必ず殺れます師匠!!」

私の力なら…」

力強く言い返すが、

「ほう?ならば…」

シュツ…

「がっ…!?!」

「こういう動きが お前に出来るか?」

ロヴロは一瞬にしてイリーナの背後に回り、瞬時に左腕を極ると同時に首筋に指を押し当てる。

「…速い!!」

その速さは、烏間が驚く程。

腕を極め、頸動脈に親指を押し付けた儘、ロヴロは話し続ける。

「この教室の仕事は適任者に任せろ。」

2人の転校生暗殺者の残る1人が、実戦テストで驚異的な能力を示し、投入準備を終えたそうだ。」

「…!!」

「相性の良し悪しは誰にでもある。

今日、お前は発音について教えていたが…

この教室こそが お前にとって…LとRではないのかね？」

「半分正しく、半分は違いますねえ。」

「!?」

神出鬼没…

其処には顔を青とオレンジの2色に縦に割り、それぞれにXと○のマークを浮かべた殺せんせーがいた。

いきなり現れた殺せんせーは、触手でロヴロの額とイリーナの鼻を掴んで引き離す。

因みにイリーナは所謂、鼻フック状態だ。

「何しに来た、このウルトラクイズ!」

「にゆる…非道い呼び方ですねえ…?」

いい加減、殺せんせーと呼んで下さい。」

鳥間の、自身の呼び方に物申す殺せんせー。

しかし、この場は鳥間なりの精一杯なユーモアを褒めてやるべきだろう。

そして、殺せんせーは言う。

「確かに彼女は暗殺者としては、恐るるに
足りません。クソです。ウン〇です。」

「Shit!! 誰がウン〇だ、誰が!?!」

イリーナが このウン〇発言に、額に血管を浮かべ、目を吊り上げて大声で怒鳴る。
だが殺せんせーは それをスルーして

「…ですが、彼女という暗殺者こそ、この教室には適任なのです。」

「…!?!」

「…ほう?」

「タコ…?」

この台詞に3人の表情が3様が変わる。

「殺り比べてみたら判りますよ。」

彼女と貴方、どちらが優れた暗殺者か…」

どちらが より優れた暗殺者かを決める勝負が、その暗殺対象仕切りターゲットの下、始まるの
だった。

「ルールは簡単。」

イリーナ先生とロヴロ氏…

烏間先生を先に殺した方の勝ち!」

「はあ!？」

声を上げ、「何それ？」な表情をする鳥間とイリーナ。

そして、無言で同様な顔をするロヴロ。

「ちよつと待て!!」

何で俺がターゲットにされるんだ？」

無関係な筈が、勝手に巻き込まれた形の鳥間が異を唱える。

「鳥間先生なら、公正な標的ターゲットになるからですよ。」

第一、私を標的ターゲットにした処で、誰も殺せないじゃあないですかあ？」

「(く：確かに このタコが標的(ターゲット)だと、イリーナに有利に動きかねん…。」

「刺し⇄おっぱいとか、普通にやりそうな気がするし、イリーナも それに乗つかる可能性は凄く大だ…。」

この縞々のタコの言葉に納得する鳥間。

「にゅ？鳥間先生、今凄く失礼な事を考えていませんか？」

そんな訳で…

◇ルール◇

・使用するのは、対せんせーナイフ

・先に このナイフを鳥間に当てた方の勝ち

・互いの暗殺の妨害は禁止

・生徒の授業の邪魔となると即失格

・期間は明日の8:40~17:00の間

※鳥間特別シークレットルール※

・もしも鳥間が制限時間内の2人の暗殺から逃げ切った場合、殺せんせーは鳥間の前で1秒間、何があつても動かず、その間は殺りたい放題とする

・但し、共謀して手を抜くのを防ぐという意味で、イリーナとロヴロにはこのルールは秘密としておく

・どちらかが この特別ルールを知った時点で、このルールは無効とする

「…成る程、要するに模擬暗殺か。」

良かろう…余興としては、面白そうだ。」

びよよよん…

特殊ゴム素材のナイフを撓らせたロヴロは、鳥間にニヤリと笑いかけ、

「…イリーナ、この男に刃を当てる事等、お前には無理だ。」

次にイリーナに顔を向ける。

「お前の持つ暗殺技術の全ては、この俺が教えた事だ。」

お前に可能な事、不可能な事…俺は全て、知っている。」

「……………」

無言で俯くイリーナに対し、ロヴロは言葉を続ける。

「お前には、この暗殺ごっこで、それを思い知らせ、この仕事から大人しく降りて貰う事にしよう。」

更にロヴロは持っていた対せんせーナイフを殺せんせーに向け、

「そして、誰も殺せないという殺せんせー…貴様を殺すに適した刺客…もう一度選び直して送ってやるさ…」

そう言うと、部屋を出て行った。

「…私を、庇ったつもり？」

ロヴロが部屋を出た後、今度はイリーナが殺せんせーに噛み付く。

「どうせ、師匠（センセイ）が選ぶ新手の暗殺者より、私の方があしらいやすいと考えてるんでしょ?!」

「にゆる…いや、そんなつもりは…」

「冗談じゃない!そうは行くもんですか!!」

カラスマもタコも、絶対に私が殺ってやるわ!!」

どんどんどんっ…

そう言いながら、大股で派手に床を踏みつけ大きな足音を立てながら、イリーナも部屋を出く。

「ま、まあ、そんな訳で、鳥間先生も よろしくお願いします。」

「ふん…あの特別ルールが無かったら、こんな茶番には付き合わん処だったぞ…！」

▼▼

「…と、二云うわけだ。」

迷惑な話だが、君達の授業に、決して影響は与えない事になっている。

普段通りに過ごしてくれ。」

「…(鳥間先生も大変だなあ…)」

次の日の朝、ホームルームで鳥間が事情を説明すると、生徒達は声に出さずとも、内心で氣遣う。

▼▼

そして その日の2時限目、体育の授業。

「狙ってる…」

「狙ってるよね…」

ナイフの素振りをしながら、それぞれ呟くE組の面々。

「…(何か狙ってるぞ!!)」

視線の先には、鋭い目をした初老の男、忍者みないな格好をしたタコ、そして……
ハアハア……

如何にも「私、男に飢えてます〜!」……な感じで、顔を赤らめ、荒い吐息でナイフを舐めている、何だか目がイツちやっっている感じの金髪の美女がいた。

3人とも、一応は忍んでいる心算なのだろうが、それぞれが……特にタコと金髪が、全っ然、忍んでなく、それに伴いキチンと忍んでいた初老の男も、存在が明らかになると、どうしても、その存在感が逆に一気に溢れ出してしまふ。

キーンコーンカーンコーン……

そして体育の授業が終わり、

「カラスマ先生〜♡」

鳥間に駆け寄るイリーナ。

「おつかれさまでしたあ〜♡」

喉、渴いたでしよ?

はい、冷たい飲み物!!」

「「「「「……………」」」」」」

満面な笑みを浮かべ、無数のハートマークと光キラキラなエフェクトを撒き散らし、水筒から麦茶をコップに注いで渡そうとするが、

「筋弛緩剤か…」

ぎく!!

バレバレである。

鳥間には勿論、生徒達にすら、バレバレである。

「やってられるか」とばかりに鳥間は立ち去って行つた。

「ふん、このバカ弟子が…」

その様子を見て、呆れ顔で、やはり立ち去る口ウロ。

「ビッチ先生…」

「流石に そんなのじゃ、俺達だつて騙せないつて…」

凹んでいるイリーナに、磯貝と千葉が声を掛ける。

「仕方ないでしょ!」

顔見知りにも色仕掛けとかつて、どーやっても不自然になるわよ!!」

逆ギレするイリーナ。

「いや…だからね…」

「そもそも、色仕掛け自体が間違いつて言ーかさ…」

「黙れガキ! その生意気な口、そんなに塞いで欲しいのかい!?!」

「んんんんん!?!」

「い、磯貝君!？」

「んんん~~~~~!??」

「…千葉っ!?!」

ジャキ…

「死ね!このクソビッチ!!」

「わっ?!イケメグと凜香ちゃんがキレた?」

「ヤバい、2人を止めろ!!」

ワーワーワーギャーギャーギャーギャー…

グラランドは一時、修羅場と化した…。

》》》

3時限目と4時限目の間の休憩時間中の教員室。

カタカタカタカタ…

鳥間はパソコン相手に無言で書類作成。

そして正面の席に座るイリーナは、何を考えているか、無言で俯いてるだけだった。

いや、一応は机の下の手にはナイフを逆手で持ち、鳥間の隙を穿っている。

…しかしながら、鳥間に そんな物は微塵も有る訳が無い。

「……………」

そして そんな2人を やはり無言で見ている黄色いタコ。

ガラッ

「!!!?」

其処にロヴロが勢いよく扉を開け、急襲を仕掛けてきた。

「師匠?^{センセイ} まさか、正面から!!」

ガタ…

「…?!」

烏間は反射的に椅子を引き、これを躲そうとするが、予め床板に仕込んでおいた細工が、キャスターを止めてしまう。

…警戒している手練を仕留める時…二重三重の小細工は寧ろ不要。

求められるのは、シンプル…卓越した技の精度とスピード。

少しの何かで、ほんの一瞬、反応を遅らせるだけで良い…。

手練同士の闘いでは、その一瞬こそが命取りになる!!

…そう考えているロヴロは、烏間が動かない椅子に注意を向けた、正しく その一瞬の隙を突き、机に飛び乗り、標的の首筋目掛けてナイフで切りつけるが、あっさりと手

首をキャッチされ、その手を その儘、机の天板に叩きつけられる。

次の瞬間、強烈なアツパーブローがロヴロの顎にクリーンヒット…する前に寸止めで終わらせる鳥間。

後に殺せんせーは語る。

「あの時の鳥間先生は、実に活き活きとした、怖い顔で笑っておられました。」
…と。

「熟練とは言つても、年老いて引退した殺し屋が、先日まで精鋭部隊に居た人間を、随分と簡単に殺せると思つた物だな？」

刃を向けてきた男に、まるで、どちらが殺し屋か判らない様な爬虫類の如く冷たい視線を浴びせる鳥間。

「(…強い…!!)」

驚愕するロヴロ。

そして、

師匠^{センセイ}でも駄目なんて…本当に こんな化け物、私が今日中に殺れるの!?

改めて、同僚の実力を思い知るイリーナ。

鳥間は床に落ちている、ロヴロが持っていたナイフを拾うと、イリーナと殺せんせーのいる方向に向けて、

「解っているだろうな？」

「もしも今日、殺れなかつたら……」

「凄く、凄く、怖い顔で微笑んだ。」

「（「。〇。L）ひ……ひいいい……!!」

ナイフを向けられた2人が恐怖に慄く。

「負けないで、イリーナ先生！頑張つて!!」

「……何でアンタがビビってんのよ？」

改めて鳥間は殺せんせーに顔を向け、そう言うと、微かに微笑んで教員室を出て行く。

「（こいつ等からの暗殺を今日1日、俺が躲せば……お前は褒美に俺の前で1秒動かない約束だったよな？」

「1秒あれば、俺のナイフは5回は刺すぞ？」

「……楽しみだな。」

それを見て、だからだと汗を掻く殺せんせー。

殺せんせーは確かに見た。

燻し銀でリーゼントな鳥間のナイフが、自分の顔面、顎、鳩尾、両脇腹の5ヶ所を雷光の迸る中、瞬時に見開きで貫いている映像を。

「……ふつ、相手の戦力を見誤った上に、この体たらく……歳は取りたくないもんだ。」

そうやって黒皮の手袋を外したロヴロが見せた手首は真つ赤に腫れ上がっている。

「^{センセイ}師匠…手を…?」

どうやら骨折している様だった。

「これでは…今日の残り時間で あの男は殺れないな…。」

「にゅやっ!!」

ロヴロの発言に殺せんせーが、困った表情で驚く。

「そんな、諦めないでロヴロさん！」

諦めたら、そこで試合終了ですよ!!

まだまだチャンスは沢山ありますから！」

マツハで安○先生のコスプレに着替えて、ロヴロを叱咤激励する殺せんせー。

「…???」

その余りの必死っぷりを、不思議に思う顔で見つめるイリーナ。

「例えば殺せんせー、これだけ密着していても、俺では お前は殺せないだろう…。」

自分の真後ろに立ち、肩を揉み、御機嫌を取ってる殺せんせーには言う。

それは経験で解る物。

戦力差を見極め、退く時は素直に退くのも優れた殺し屋の条件の1つ。

イリーナにしても同じ事。

殺る前に判る。相性が悪過ぎる。

イリーナの得意分野である『お色気』に、絶対的耐性がある、それで あの男を殺るのは不可能だ…と。

「ふう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「どうやら この勝負、引き分けだな。」

深い溜め息と一緒にロヴロは言った。

「…そうですか。」

貴方が諦めたのは よくく分かりました。

ですが、あれこれ予測する前に…」

いつの間にか、何時もの式服に着替えた殺せんせーは

ポン…

「イリーナ先生を最後まで見て下さい。」

イリーナの肩を叩き、話す。

「経験が有ろうが無かろうが…結局は殺せた者が、優れた殺し屋なんですよ？」

「この殺せんせーの言葉に

「ふん…好きにしろ…」

ロヴロは そう言うのと、部屋を出て行った。

退室時にロヴロが閉めた扉を少しの間、見ていたイリーナは殺せんせーに顔を向け、
「アンタは…本気で思ってる訳？」

私がカラスマにナイフを当てれるって…」

「勿論です。」

殺せんせーは応える。

「イリーナ先生、貴女が師匠の元で、何を教わったかは、私は知りません。

…ですが、教室こくで何を頑張つて来たかは、よく知ってるつもりですよ？」

「アンタ…」

「貴女の力を見せてあげてください。

烏間先生に、師匠に…」

そして何よりも、生徒達に!!」

殺せんせーは そう言うのと、ハンカチで包んだ対せんせーナイフを差し出す。

ばしっ…

「…フーン！言われるまでもないわ…。

見ていなさい!!」

イリーナは まるで奪うかの様にナイフを受け取った。

▼▼▼
昼休み。

皆が和気藹々と、ランチタイムを楽しんでいる、そんな中、

「ん？渚君、吉良っち、こっちこっち♪」

窓際でパンを食べていたカルマが、渚と響を手招きする。

「??」

呼ばれた2人と、他に数人の生徒がカルマの所に行つてみると、赤髪の少年は、ちよ
いちよいと外を指差す。

その先には木にも垂れ掛ける様に座り、ハンバーガーを食べている烏間が居た。

「…あ、烏間先生、よく彼処で ご飯食べてるよね。」

ザツザツ…

その烏間に近づく女が1人。

イリーナ・イエラビッチ。

「へえ…？見ろよ、明らかに殺る気漫々だぜ、ビッチ先生。」

暗殺教室に席を置く者なら一目で分かる、尋常でない馬鹿正直な殺気を解き放つて烏
間に近づくイリーナ。

烏間も当然、『それ』には気付く。

「ちよつと いいかしら、カラスマ？」

その顔も午前中の暗殺を試みた時に見せた笑顔とは違う、冷酷な暗殺者のそれだ。
「…何だ？ 模擬暗殺でも、これ以上は手加減しないぞ。」

烏間も それは承知。

「……………」

そして、その様子を校舎の影から伺う殺せんせーとロヴロ。

「ナイフを持ってますね。」

「正面から殺る気か？ …バカ弟子が。」

そもそも あいつには、高度な戦闘技術は教えていない。」

何故なら訓練された動きは、寧ろ暗殺対象ターゲットを警戒させる。

【女】を使った暗殺スタイルには、無用の長物だ…とロヴロは語る。

「…素人程度なら、正面から殺れるが、あの男には、それが通じないのは承知の筈。
だから…」

スル…

イリーナが身に着けている白の上着を脱ぎながら、烏間に話し掛ける。

「ねーえ…いいでしょ、カラスマ？」

無造作に地面に放られた上着の下は、胸元が開いた袖無しの黒いインナーシャツ。

裾を捲り、臍も丸出してセクシーなポーズと言葉で烏間に近づく。

並の男なら、この時点で堕ちるだろうが、100パーと理解している烏間は眉一つ動かさずに、顔をしかめて見ているだけだ。

「やはり……だから、結局は色仕掛けに頼る他にない。

これでは 先程と同じ、只の道化だ。」

ロヴロが厳しい口調で言い放つ。

ざわざわ…

何時の間にか、教室内の生徒達も窓側に集まり、このイリーナと烏間の やり取りを見守っている。

その際、空気を読まず、不適切な発言をした男子生徒1人が、複数人の女子生徒にべられたのは、また別の話。

「私は教室こくに、どうしても残りたいの、解るでしょ?」

イリーナは そう言うのと、ウインクしながら、烏間が背を預けている木の後ろ側に回り込む。

「見返りは とつてもイ・イ・コ・ト♡

あなたが今まで受けた事無い、極上のサービスよ?」

この耳元の囁きに、烏間の目は既に冷めていた。

所詮は この程度か、ナイフを奪って終わりだな…そう頭の中で呟いた烏間は、
「…分かった、殺れよ。」

何処にでも当てるが良いさ。」

投げやりに言う。

「うふ…嬉しいわ…。」

じゃ…、そつちに行くわね。」

ザツ…

妖しく微笑んだ金髪の美女が、木を一周する様に、暗殺対象ターゲットの横に並んだ。その時、

ビインツ！

先程 脱ぎ捨てたイリーナの上着が素早く地を這い、烏間の足を掬う。

座った儘 一回転し、背中から地面に倒れる烏間。

ワイヤートラップ。

予め上着に仕込んでいたワイヤーを、木を軸にして引つ張る事で、獲物の足を刈る。

これにはロヴロも目を見開いて驚く。

本来なら本命である、得意分野の色仕掛けを敢えて囿にしたという、自分が教えていない、その殺り方を。

ロヴロが驚いている間にも、イリーナは動いていた。

倒れ込んだ鳥間が体制を整え直す前に、ダツシユ、腹の上に飛び乗り、マウントポジションを捕る。

「殺もった!!」

透かさず両手でしつかとナイフを握り締め、鳥間の胸元を刺しに行くが、

ガシツ…

「…く…危なかつた…!!」

そのナイフを持った手は寸での処で、先のロヴロの急襲の時にも見せなかつた焦りの表情を浮かべた鳥間の両手でキャッチされてしまう。

こうなると、後は力比べしかないのだが、それだと勝ち目が全く無い、イリーナが執つた次の行動は…

「カラスマ…」

無邪気無垢な表情で

「私、どうしてもカラスマを殺りたいの…

ダメ…?」

潤んだ瞳で訴えかけた。

「えい、アホか！お前は？」

何処の世界に、殺させろと縋りつく暗殺者がいる!? 諦めが悪い!!」

その やり取りは前日、イリーナが授業に持ち出した教材VTRに登場した、蒼髪少年と白髪少女の会話を彷彿させる物だった。

はああ~~~~~

呆れ顔で深く、長い溜め息を吐いた烏間はイリーナの手を放すと

「もういい…諦めが悪い奴に、これ以上付き合いきれん!!」

ぐによ…

イリーナの手を持ったナイフが、烏間の胸元に落ちて撓った。

「(所詮は口約束…こんな つまらん賭けで、大人しく奴が殺られてくれるとは、とても

思えん…)」

最後まで諦めずに試合終了させなかった、イリーナの勝利が決まった。

「「「おおおおおお!!」」」

「「「当たった!」」」

「「「凄い!!」」」

「「「ビッチ先生、残留決定だ!!」」」

2人を注目していた教室が沸き立つ。

そして、

「……ロヴロさん、昨日のイリーナ先生の授業は聞いていましたね？」

校舎の影から様子を見ていた2人。

「まずは苦手な発音から克服していくのが、彼女の流儀。」

実際、彼女が話す日本語は、驚く程流暢です。

外国語を覚えるのというは、挑戦と克服の繰り返しです。

10以上の国の言葉を克服した彼女は……未経験だった教師の仕事ですら、臆せず挑んで克服しました……。

そんな……挑戦と克服のエキスパートな彼女が……教室こくに来てから何もしてないと思いますか？」

そう言うと、殺せんせーは派手なチェック柄のバッグをロヴロに差し出す。

「……これは!!」

その中には薄汚れたジャージに、ワイヤーやロープ、フック等が詰まっていた。

「彼女は、私を殺すのに必要な技術を自分なりに考え、外国語と同じ様に挑戦と克服をしているのです。」

貴方なら、このバッグを見るだけで……彼女の見えない努力が見える筈です。」

「……………」。

確かにロヴロの脳裏には、目の前の獲物ターゲットを仮想したダミー人形を、ワイヤーで如何に仕留めようかと、ブーたれながらもシミュレーション特訓している弟子の光景がハッキリと浮かんでいた。

「苦手な分野でも、一途に挑み、克服していく彼女の姿…。」

生徒達が それを見て挑戦を学べば、それは1人1人の暗殺者としてのレベル向上に繋がるのです。

…だから、私を殺したいならば、彼女は この教室に必要なのです。」

「……………」

》》》

「はあ…あのタコも見てたでしょうね…。」

まさか、カラスマに使う事になるとは…

1度 見せた殺り方が通用するとは思えないから、また1から策の練り直しだわ…。」
イリーナにとって、勝利の代償は、彼女なりに大きかった様だ。

しかし、そう言いながらも安堵の息を吐きながら、校舎に戻ろうとする彼女の前に、ロヴロが姿を見せる。

「師匠…。」

神妙な顔になるイリーナにロヴロは

「出来の悪いバカ弟子だ。」

先生でもやってた方が、まだマシだ。」

「師匠……？」

「必ず殺れよ、イリーナ！」

「……!!はい！勿論です、師匠!!」

師匠の激励に、会心の笑顔で応えるイリーナ。

「フッ……」

ロヴロの見せた その微笑んだ顔は、弟子の成長と成功を願う、師匠の『それ』に他ならなかった。

転校生の時間・2時限目

その日は朝から雨だった。

渚の机に集まり喋っている響達。

話題の中心は、今日から やってくるといふ転校生についてだ。

「烏間先生からの一斉メールだからな、ぶつちやけ殺し屋だろ？」

「律は何か知らないの？」

「そーですね……」

渚の机の上に置かれたスマホ。

その画面の中の律が喋り出した。

モバイル律。

E組メンバーとの情報共有を円滑にする為に、全員のケータイに（勝手に）自身の端末をダウンロードしてみたという。

そんな画面の中の律は現在、外の天気に合わせて、雨の降る街並みの画面背景、制服の上にカエルな雨合羽を着込み、ピンクの地に青の水玉模様の傘を差している感じだ。

律曰わく……

「「「ビビり過ぎだろ!!」「」」」

生徒達の突っ込みの中、

「ははは…驚かせて済まなかったね。

私は転校生じゃないよ。」

先程の鳩を袖の中から出した籠に仕舞いながら、白装束は

「私は保護者さ…。まあ、この格好だし、シロと呼んでくれて結構だよ。」

「そうですか、初めましてシロさん、それで…肝心の転校生は？」

天井から降りた殺せんせーがシロに尋ねる。

「初めまして殺せんせー。」

あの子は性格とかが色々と特殊な子でね、

私が直に紹介しようかと思ひまして…」

「…怪しい…凄く怪しい…!」

「…言うな。」

廊下では外国語教師と体育教師が様子を見ていた。

「それで…席は、あの後ろの空きですか、殺せんせー?」

「はい、そうなりますね。」

シロガの寺坂竜馬と赤羽業の間の、誰も座っていない机を指差して、担任に確認を取る。

「では呼びましょう。」

「おい、イトナ!!入っておいで!!」

ドクン…ドクン…

一体、どんな奴だ?

クラスの誰もが、そう思いながら、教室前側の扉に注目した、その時、

ドツゴオツ!!

「?????」

教室後側の壁、掲示板を破壊して『彼』が入ってきた。

そして、その儘、教室後側の空いている席に着く。

(((ドアから入れっ!!!)))

昨日に続き、クラスの心が1つになった。

『俺は…勝った…』

この教室の壁よりT S U E !!事が証明された。

それでいい…それだけでいい…』

血走った目で呟く転校生。

「何だか面倒臭そうな人ですねえ……？」

「そ、そうだね……」

律の言葉に少し思う事があるのだが、発言自体は間違っていない為、とりあえず同意したのは、彼女の席の両隣である響とカルマである。

担任の殺せんせーもリアクションに困り、笑顔と真顔のハーフ&ハーフな中途半端な顔になっている。

「堀部イトナだ。」

名前で呼んであげて下さい。」

シロが改めて『彼』を紹介する。

「あ、それから私は多少過保護でね、暫くの間は、彼の事を此処で見守らせて貰いますよ。」

堂々と同伴宣言するシロ。

「へ……で、イトナ君？」

早速、隣の席のカルマが話し掛ける。

「派手に壁を破って入ってきたけど、どんな武器を使ったの？」

「ゴム素材の対せんせー武器じゃ、壁なんて破れっこ無いよね？」

「……………」

このカルマの質問には答えず、只、血走った目で睨みつける堀部イトナ。
きよろきよろ…

更には教室内を見渡すと、この転校生は席を離れ、響の前に立つ。
そして、

「お前が…お前が ああの赤い髪より、多分、このクラスで一番強い。」

「へええ…?!」

この言葉に過敏に反応するカルマ。

しかし、イトナは そんなカルマを無視して

「でも、安心しろ。」

なでなでなでなで…

響の頭を撫でながら、

「お前は俺より弱いから、俺は お前を殺さない。」

響に対して言うのだった。

なでなでなでなでなでなで…

ぷちっ…!!!

「あ、っあん…!!!?」

バチイッ!

頭の上の手を思いつきり払い飛ばし、席を立ち上がる響。

その顔は『渚自爆テロ』の際に、寺坂を虐殺した時（注・殺つてません）に見せた、完全にキレた時のそれだった。

「!!?」
「!!ヤバい!皆!!」

「!!」
「!!お、応っ!!」
「!!」

磯貝の呼び掛けで、即座に2人の間に割つて入る男子生徒達。

「あわわわわわ…ふ、2人共、ぼ、暴力は、いけません!!」

本来ならば、真つ先に止めるべき筈の担任は、テンパつて役に立たない。

そんな中、

「皆、落つ着け、もう大丈夫だ。」

「吉良…」

響は皆を下がらせた後、

ゴツツ…

「よーし、どつちが強いか、ハッキリさせようじゃねーか!」

両拳を撃ち合わせた後、ファイティングポーズを取る。

「全然、大丈夫じゃねえ!!」

突っ込むクラスメート達。

「悪いな、俺は こう見えて（前世込みで、もう直ぐ24歳）、結構ガキなんだ。」

『…ふん、良いだろう。外に出ろ。』

堀部イトナも応戦の態度を示すが

「イトナ?」

『!!』

此処で初めて、今まで黙っていた、イトナの保護者であるシロが口を挟んだ。

「そんな、自分と同年代の子供相手にムキになるな。」

今のお前は、既に世界最強の『人間』なんだからな?」

『そうだった…俺は…最強だ…』

俺が…殺したいと思うのは…俺より強いかも知れない奴だけだ…』

イトナは そう言うのと、教室前側に進み、

『この教室の中で それは殺せんせー、あんただけだ。』

担任に宣戦布告するイトナに対し、

「強い弱いとは、ケンカの話ですか?」

力比べでは、先生と同じ次元には立てませんよ?イトナ君?」

その担任は顔を縞模様にして軽く流す。

『立てるや…』

イトナは真つ直ぐに、殺せんせーの目を見て言う。

『だって俺達…血を分けた…兄弟…なんだから…』

「「「「「はああ!?!」」」」」

イトナの台詞に、驚きを隠せない表情のE組の面々。

「「「「「きつ!?!」」」」」

生徒達の脳裏に、宇宙服を着た、天バと金髪の青年が浮かぶ。

「「「「「きつ!?!」」」」」

続いて、胸に7つの傷を持つ、2人の男の姿が浮かび（1人は黒いヘルメット着用）、

「「「「「きつ!?!」」」」」

更には、金髪を三つ編みにした、背の低い少年と、大柄な全身鎧が浮かんで

「「「「「きつ!?!」」」」」

そして、額に傷のある熱血少年と、鎖を振り回す美少年の姿が浮かんだ。

「「「「「兄弟いつ?!」」」」」

兎に角、E組の面々は驚いた。

そんな生徒達は無視してイトナは殺せんせーを睨みつけ、

『負けたら死刑な？ 兄さん。』

兄弟同士、小細工は要らない。

お前を殺して、俺の強さを証明する。

時は放課後…この教室で勝負だ。』

暗殺の日時と場所を指定。

『今日が あんたの最後の授業だ。』

こいつ等に お別れでも言っておけ…』

そう言うといトナは、最初に教室に入る時に破壊した壁の前まで進み、響を指差し、
『お前、俺が兄さんを殺した後で良いなら相手になつてやる…。』

兄さんを殺した後でも、お前がビビってなく、まだ戦える気があるならな…。』

「…では、とりあえず失礼するよ。」

シロと共に、壁の穴から去って行った。

その直後、

「ちよつと、兄弟つて、一体どーゆー事なのよ？ 殺せんせー!!」

「そもそも、人とタコで、全然違うじゃねーか!!」

「いやいやいやいや!!」

生徒達に追求され、しどろもどろな殺せんせー。

「いや、先生だって、びつくりですから！」

お父さん お母さん、いつの間に?…って心境ですよ!？」

「「「親、いるのかよ!?!」」」」



放課後。

殺せんせーとイトナ、2人を囲む様に机が並べられた教室。

「机の…:リング…!？」

「ああ、まるで試合だ。」

「こんな暗殺は初めてだ。」

烏間とイリーナも戸惑いを隠せない。

『リング』の対角線に位置するコーナーで対峙する2人。

イトナのセコンドの如く寄り添うシロが、口を開いた。

「殺せんせー、ただの暗殺は、もう飽きてるでしょ？」

此処は1つ、ルールを決めないかい？」

「ルール…:ですか？」

「リングアウトは即死刑!!どうかかな？」

「このシロの提案に

「はあ……?何よ それ?」

「負けたって、誰が守るつてのよ?」

「そんなルール?!」

「いや……少なくとも、殺せんせーなら……」

「吉良つち?」

「皆の前で決めたルールを破れば……それで『先生』としての信用が落ちる……」

「殺せんせーには意外と効くんだよな……この手の縛りは。」

「カルマ……吉良つち……」

中村の疑問に解説ポジな2人が説明する。

「……良いでしょう。」

その提案、受けましょう。

ただし、イトナ君、観客に危害を与えた場合も負けですからね?」

コク……

「……………」

イトナは無言で頷く。

「では、始めますか。」

シロが右手を上にする。

斬り落とされた腕を抑えながら、

「何処で其れを手に入れたっ？」

その触手を!？」

殺せんせーはその身体を一瞬にして黒く変色させ、イトナを、そしてシロを睨みつける。

「君に言ったりする義理も義務も無いね、殺せんせー。だが、理解したろ？」

両親（おや）も、育ちも違う。

しかし……この子と君は、紛れもなく兄弟なんだよ。」

「……どうやらシロさん、貴方にも話を聞かなきやいけない様です。」

そう言いながら、殺せんせーは斬られた腕を再生し、身体も普段の黄色に戻す。

「無理だね？君は死ぬのだから。」

カッ：

シロが殺せんせーに向けた左手の袖の中から光が放たれる。

!？」

動きが止まる殺せんせー。

「この圧力光線を至近距離で浴びせると、君の細胞はダイラタンシー現象により、一瞬だが全身が硬直する。」

シロの左手首には、特集光線を放つ、小型の装置が仕込まれていた。
「全部、知っているんだよ。」

君の弱点は全部ね。」

カッ…

シロは右手でサムズダウンしながら、再度、左手から圧力光線を放つ。

「うっ…!!」

「死ね…兄さん!!」

それと同時に殺せんせーに、無数の触手が襲ってきた。

ドドドドドツ…!!

イトナの放つ、触手の槍のラッシュが殺せんせーの身体を幾度となく貫き、勝負あつたかに見えた。

「うお…」

「殺つたの?」

「…いや、上だ。」

寺坂が天井を指差した先に、殺せんせーは居た。

「脱皮か…」

イトナが攻撃を仕掛けていたのは、エスケープした後に残された脱け殻だった。

「そう言えば、そんな手もあったねえ…」

ざわつく観客。

「マジか？」

「もう奥の手の脱皮、使わせた!？」

イトナの猛攻は続く。

シロ曰わく、脱皮や再生は、見た目以上にエネルギー消費が激しい。

常人から見れば、速過ぎるのは変わらないが、そのスピードは明らかに低下し、それは触手同士の戦いでは、影響は大きい。

また、触手の扱いは精神状態に大きく左右される。

想定外である触手による攻撃、そしてダメージによる動揺、その気持ちを立て直す暇も無い狭いリング…

「今現在、どちらが優勢か…生徒諸君にも一目瞭然だろうねえ？」

「お、おい…」

「これマジに殺っちゃうんでないの？」

防戦一方の殺せんせーを見て、生徒達が口々に呟く。

カッ…

更には過保護な保護者の献身的サポートである圧力光線を浴び、またも身体が止まる殺せんせー。

其処に跳躍したイトナが頭部から生えた、全ての触手を一本に束ね、空中から『兄』の脳天目掛け、強烈な一撃を狙う。

ザザンツ

だが、これは、直撃するより一瞬速く、殺せんせーの硬直が解けた為、辛うじて脚の触手を2本失うだけに留まった。

「ふっふっふ…だがしかし、また再生しなくてはならないねえ…」

更にスピードが落ち、殺り易くなったよ。」

余裕の発言のシロ。

そして、

『安心したよ、兄さん…』

俺は、お前よりTSUEEEEEEEEEEEEE!!』

目を血走らせたイトナが叫ぶ。

「「「「「……………」」」」」

複雑な心境になるE組の面々。

殺せんせーが追い詰められている…

後、もう少し…イトナが殺せんせーを殺せば、地球は救われる!!

…なのに、何故、自分は こんなにも、悔しがつているんだろ…?

後出しジャンケンのように、次から次と出てきた殺せんせーの弱点…

本なら其れは、自分達が この教室で見つけたかった…。

E組（じぶんたち）が…殺したかった…!!

気がつけば、何人かの生徒が俯きながら、対せんせーナイフを握り締めていた。

「此処まで追い込まれたのは初めてです。

一見愚直な試合形式の暗殺ですが、実に周到に計算されている…。

貴方達に聞きたい事は山ほどありますが…まずは、この試合に勝たねば いけないみ

たいですねえ…?」

勝利宣言とも取れる、殺せんせーの発言。

「…勝てる心算でいるのかい?」

負けダコの遠吠えだね。」

やれやれ…と、オーバーアクションで言い返すシロ。

「シロさん…この暗殺方法を計画したのは貴方でしょうが…計算し忘れてる事がありませんよ?」

「…そんなの無いね。」

私の性能計算は、プツワアーフェクツツ!!…なのだからね…。殺れ!イトナ!!」

シロが そう言いながら、圧力光線を放とうと、左手を殺せんせーに向けた。その時

…

バシイツ!!

「「「「「吉良?」」」」」

「「「吉良つち!」」」

「ヒビキ?!」

「「「「「吉良君!」」」」」

「吉良つちさん?」

「やっちまったぜ…」

其処には、シロの左手を大きく蹴り上げた響が居た。

それにより、放たれた光線は天井を照らす。

教室内の人間が、響を普段の呼び名で叫ぶ中、本人は某・チエーンソーを持った、神殺しの戦士の様な台詞を呟く。

「痛う…何の心算かね?」

シロが響に問い詰めるが

「いや、コレは試合である限り、やっぱりフェアじゃないとね…って思ってる…」

セコンドの介入は無いわぁー。」

やや、気まずく答える響。

これは、クラスメートの心情を察した以上に、聖闘士としての、真剣勝負を汚す行為は赦せないという信条による、本能的な行動だった。

そして、結果的にシロのアシストを回避した殺せんせーは、真上から仕掛けるイトナの攻撃を躲し、

ドギヤツ…

その触手は床を破壊すると同時に、

「おやおや？落とし物を踏んづけてしまった様ですなぁ？」

ドロオツ…

「!!?」

…ドロドロに溶けていた。

イトナが踏んづけた落とし物…

それは、床に置かれた沢山の対せんせーナイフ。

「ええ？」

「ええ？」

「えええつ?!?」

「「「何時の間に!?!」」」

実は、生徒が取り出したナイフを、何時の間にかハンカチ越しに掏っていた殺せんせー。

バサツ

間髪入れず、先程の脱皮の脱け殻でイトナを包み込み、袋詰めにして持ち上げる。「同じ触手なら…:対せんせーナイフが効くのも同じ。

触手を失うと、動揺するのも同じですね。

…でもね、先生の方が、ホンの ちよつとだけ老獪ですよ？

あ、杉野君、神崎さん、その窓を開けて下さい!!」

「は、はい!」

ガラ:

指名された2人が窓を開けた瞬間、

ブンツ…!!

殺せんせーはイトナを脱け殻ごと、そこから外に放り投げた。

ドサツ…:ゴロゴロ…:

地面に転がるイトナ。

脱け殻を内からビリビリと破り、呆然としているイトナに

「先生の脱け殻で包んでいたから、ダメージは無い筈です。」

だが、君の足はリングの外に着いている。

先生の勝ちですねえ。

ルールに照らせば、君は死刑。

もう、二度と先生を殺れませんか？

ついでに もう一つだけ…兄より優れた弟なんて、存在しないんですよ？」

完全に人を舐めきったドヤ顔で、縞々模様のタコは言い放った。

殺せんせーのリングアウト勝ちⅡイトナのリングアウト負けによる死刑が確定した。

「生き返りたいのなら、皆と一緒に、このクラスで学びなさい。」

性能計算では そう簡単に計れない物…それは経験の差です。

君より少しだけ長く生き…少しだけ知識が多い。

先生が先生になったのはね、経験（それ）を君達に伝えたいからです。

この教室で先生の経験を盗まなければ…君は私に勝てませんよ？」

イトナを論す殺せんせー。

…しかし、

『勝てない…？俺が…弱い？』

うがあああああああああつ!!』
怒りで目を真っ赤に充血させたイトナの頭部から、黒い、触手が再生された。

バキツ…バキバキ…!!

暴走した触手が、周囲の木を斬り崩す。

「え？黒い触手!？」

「ヤバい、完全にキレてるぞ、アイツ!!」

「うわ、こっち来たつ!!」

シユタ…

自身が投げ出された窓から飛び込み、教室に戻ってきたイトナは、怒りの眼差しで殺せんせーを睨みつける。

『俺は…強い…』

この触手で…誰よりも強くなった…

誰よりも誰よりも誰よりも誰よりもつ!!』

「……………」

『うがああつ!!』

イトナは叫ぶと、殺せんせーに飛び掛かる。

バスッ…

そんなイトナを撃ち抜く弾丸。

撃たれたイトナは意識を失い、その場に倒れ崩れる。

どうやら、麻酔弾の類の様だ。

「すみませんね、殺せんせー」。

どうも この子は…まだまだ登校出来る精神状態じゃなかった様だ。」

撃つたのはシロ。

倒れているイトナを肩で担ぐと

「転校初日でアレですが…暫く休学させて貰います。」

シロは そう言つて立ち去ろうとするが、

「待ちなさい!」

担任として、その子は放っておけません。一度E組(ここ)に入ったからには、私が責任を持って、卒業するまで面倒を見ます。

それにシロさん…貴方にも聞きたい事が沢山あります。」

殺せんせーが呼び止める。

「嫌だね、帰るよ。」

私は話す事は何もない。

それとも、力づくで止めてみるかい？」

聞く耳持たぬシロに、止むを得まいとばかり、殺せんせーは触手を伸ばし、その肩を掴むが、その瞬間、触手はドロオツと溶け落ちる。

「対せんせー繊維…君は私に触手一本、触れる事は出来ないよ。」

肩の上の、溶けた せんせー細胞を振り払いながら、シロは話す。

「そんなに心配せずとも、直ぐに復学させるよ、殺せんせー。」

3月まで時間は無いからね。

その間の勉強の方は、責任持って、私が家庭教師を務めるから心配無く。」

「ちよつと待てよ…」

「それは虫が好すぎるんじゃないく？♪」

シロが出ようとする。例の穴を塞ぐ、2人の生徒。

「リングアウトは即死刑つしよ？」

「もう、そいつに、次は無い筈だぜ？」

響とカルマである。

「ほう？まるで君達は、イトナを殺したい言い種だね？」

「別に？汚くて卑怯な大人の、見苦しい言い訳に興味があるだけさ♪」

「ほれ？言い訳はりーあつぷ!! (笑)」

このカルマと響の挑発にシロは

「あのタコと律儀に守る必要のある約束なんか、在る訳がないだろう？」

何しろ、アレは、地球を破壊せんとするモンスターなんだよ？」

悪びれずも無く答えた。

「それより、吉良君…だったね？」

あの時の君の邪魔さえ無ければ、それで世界が救われたかも知れないというのに、そのチャンスを用意にしたという自覚は有るのかい？」

「…知るかよ、バーカ！」

「もう、良いだろ？失礼するよ…。」



イトナを抱えて下山するシロが呟く。

…このイトナも まだまだ成長真つ盛り。

調整を焦る必要は無い。

奴の性格上…3月まで、学校（あそこ）から逃げ出す事も無い…

しかし あのクラス…

ふふふ…まさか、あの子が居たとはねえ…

ふっふっふっふ……実に、実に面白いよ……



「……………」

シロとイトナが去る様子を、例の穴から見ながら、考え込む響。

「吉良君？」

そんな響に、渚達が声を掛ける。

「渚……」

「吉良っち？もしかして、あのシロが言ってた事を気にしてるの？」

「……………」

中村の問い掛けに、静かに頷く響。

「…実は、余計な真似をしたかも……ってのは、確かにある。」

ぶっっちゃけ、只の自己満足、俺自身の持つ「勝負」ってヤツに対する拘りだけで動いただけだし……

もしかして、最大のチャンスを潰してしまったかm（バシイッ!!）痛っ!？」

「吉良……お前って、もしかして、1周回って馬鹿ってヤツか？」

そう言ったのは、丸めたグラビア雑誌を手でパンパン叩きながら、呆れた顔をしてい

る岡島大河。

「岡島……？」

「あのな、クラスの皆……少なくとも俺は、余計な事してくれたなんて、これっぽっちも思っただいぜ？」

寧ろ、「よくやった！」みたいな？」

「……本当に要らない真似って思っていたなら、あの場で全員が非難轟々な大ブーイングを浴びせていたよ。」

吉良君、考え過ぎだよ……」

岡島の後に、原も言葉が続けた。

そしてクラスの殆どが、「気にするな」という顔で響を見ている。

「皆……サンキュ……」

軽く笑って応じる響。

（大丈夫だ……3月、いよいよって時は、俺が小宇宙全開させてケリ着けるからさ……）

「さ、皆、もう良いだろ？」

机、元に戻そうぜ！」

締めたのは磯貝悠馬だった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「にゆく、はずかしい はずかしい…」

生徒達がリングにしていた机を元通りに並べている中、いち早く戻した教卓の席に着き、赤くした顔を両手で被っている殺せんせー。

「何してるの、殺せんせー？」

「さあ…さつきから、アレだけど…？」

「にゆく、シリアスな展開に加担したのが恥ずかしいのです。

先生、どっちかって言うと、ギャグキャラなのに…」

「『『『『自覚あるんだ!』』』』」

「くつくつくつく…」

カツコ良く怒ってたよね〜？

、 何処で其れを手に入れたっ？、

、 その触手を!?! ……つてね？」

「いやああああっ!」

言わないで狭間さん!!

改めて自分で聞くと、逃げ出したい!!」

狭間綺羅々の再現に、更に赤くなり、テンパる殺せんせー。

すると、

「何処で其れを手に入れたっ?」

「「「「その触手を!」」」」」

「にゅやーっ!!止くめくてくっ!!!」

プチ凹みモードから立ち直った響がリピートし、更にカルマや中村達が後に続いた。

「つかみ所の無い天然キャラで売ってたのに、あんな真面目な顔を見せたらキャラが崩れるう…」

「自分のキャラ、計算してたのかよ…」

「腹立つな…」

「…でも、驚いたわ。」

此処でイリーナが口を出す。

「あのイトナって子、まさか触手を出すなんてね…。」

「カラスマ、あんたも知らなかったの?」

「…。」

イリーナの問い掛けに、烏間は無言で首を縦に振った。

「ねえ、殺せんせー、説明してよ?」

「あの2人との関係を…」

生徒達が担任に詰め寄る。

「先生の正体、いっつも適当に　はぐらかされてたけどさ…あんなの見たら、流石に聞か
ずにはいられないぜ?」

「……………」

「そうだよ、私達、生徒だよ?」

「先生の事、よく知る権利、ある筈だよ?」

その顔、その目は真剣そのもの。

「…仕方ありません。」

真実を話さなくてはなりませんねえ…」

その目を前に、意を決する殺せんせー。

「実は…実は先生は…」

ゴク…

息を飲み込み、注目する生徒達。

「実は先生は…人工的に造り出された生物だったんです!!」

「……………」

その事実、一瞬、黙り込む生徒達。

そして、

「……ですよねー？……で？」

「にゅやっ!! 反応薄っ!!」

自分で何ですが、これって結構、衝撃的告白じゃないですか？

此処は皆して、「な、何だってーっ!!」って驚く場面じゃあないんですか!?!」
教え子達の余りのリアクションの無さに、少しばかり不満気な殺せんせー。

「いや、自然界にマツハ20のタコとか、普通にいないし……」

「宇宙人でもないなら、それ位しか考えられないよね？」

「それで、あのイトナは弟って言うって事はだ……」

「先生の後に造られたって、簡単に想像出来るよね？」

（察しがよろし過ぎる!!）

何て恐ろしい子達!!）

生徒達の分析力に戦慄する殺せんせー。

「殺せんせー……」

渚が教卓の前に立った。

「知りたいのは、その先だよ、殺せんせー。」

どうして さつき、あんなに怒ったの？

イトナ君の触手を見て……

殺せんせーは どういう理由で生まれてきて、何を思つてE組（ここ）に来たの？」
「渚……」「渚君……」

誰もが疑問に思つていた事……

響だけは事前に教えて貰つて知つていた事だが、初めて生徒の1人が皆の代表として、はつきりと言葉にして質問した。

「……………」

数秒の沈黙の後、口を開く殺せんせー。

「残念ですが、今それを話した所で、はつきり言つて無意味です。」

先生が地球を爆破すれば……皆さんが何を知らうが、全て塵芥になりますからねえ……」

「……………」

絶句する生徒達。

「逆に、もし君達が地球を救えば、君達は後で幾らでも、真実を知る機会が得る事が出来ます。」

「せんせー……」

「此処まで言えば、もう解るでしょう？」

知りたいならば行動は只一っ！

……殺してみなさい。

暗殺者（アサシン）と暗殺対象（ターゲット）…。

それが、先生と君達を結ぶ絆の筈です。

先生の中の大事な答えを探すなら…君達は暗殺で それを見つけれないのです。」

そう言うと、殺せんせーは踵を返して

「それでは今日は ここまで。また明日！」

扉の前で立ち止まると、

「はずかしい はずかしい…」

また思い出したかの様に、赤らめた顔を両手で被い、教室を出て行った。

「……………」



校庭の角で、暗殺訓練の設備であろう、鳥間の指揮の下、彼の部下である鵜飼と鶴田の2人が雲梯の様な器具を作っている。

監督を勤める鳥間もそうだが、この様な大工仕事を黒スーツ着用の儘で作業するのは如何なる物か…

しかし、それをつつ込める人間は この場には居なかった。

「烏間先生！」

そんな烏間を呼ぶ声。

「…君達？どうした、そんな大人数で？」

クラス委員の磯貝と片岡を先頭に、クラス殆どの生徒が烏間の前に集まった。

「あの…もつと教えてくれませんか？」

暗殺の技術を…」

「…今以上にか？」

「今までさ…放つとけば、きっと誰か殺ってくれると、何処か他人事だった…。」

「だけど…」

「ああ、今回のイトナを見て思ったんだ。

「誰でもない…俺等の手で殺りたいって！」

「もしも今後、強力な殺し屋に先越されたら、俺等、何の為に頑張ってたのか、分からないくなるし…」

「だから…限られた時間、殺れる限り殺りたいんです。私達の担任を！」

「自分達で殺して…自分達の手で答えを見つけ出したい!!」

自分達の思いを、決意を述べる生徒達。

「……（意識が1つ、変わったか…皆、良い目をしている。）」

一瞬だが、僅かに烏間の顔が緩んだ。

鵜飼と鶴田も、その様を作業の手を止めて満足気に見ている。

「…分かった！」

では希望者は今日より、放課後に追加訓練を行う。

より厳しくなるから、覚悟しとけよ!!」

「「「「「はいっ!!!」」」」」

烏間の言葉に、良い返事で応える生徒達。

「では早速…」

烏間は山の巨木の枝に垂らしてあるロープを指差し、

「新設した垂直ロープ20m昇降…始めっ!!」

「「「「「厳しッ!!」」」」」

生徒達の指導を開始するのだった。

後に生徒達が、

「あの時の烏間先生は、凄く、凄く黒（やさし）い笑顔で指導してくれました。」

…と、当時の様を零したりするのは、また別の話だった。

球技大会の時間

梅雨が明けた。

「アウトドアの季節だなく〜！」

どっか野外で遊ばね？」

旧校舎の山を下り、校門に向かう響、渚、カルマ、杉野。

「ん、何しよつか？」

杉野の言葉に渚が乗じる。

「じゃ、釣りは？」

「お、いいな！今って何が釣れる？」

カルマの案に、竿を振るポーズをしながら響が聞くと、

「吉良っち、夏は Yankke が旬なんだ。」

渚君を餌にカツアゲを釣って、逆に金を巻き上げよう♪」

くいつと竿を引くポーズを取りながら、カルマが答えた。

これを聞いた渚が、ヤンキーに旬とかあるのかと突っ込む前に

「よ〜っし、渚！」

「はい?」

響は渚の肩に腕を回し、

「早速、バカ共が屯ってる、駅前コンビニに行こーぜ!

欲しいアルバムがあるんだ♪」

「やっぱし…」



「ん? おうい! 杉野じゃないか!」

「進藤…」

校内の野球グラウンドの脇を通っていると、練習していた野球部員の一人に呼び止められた杉野。

声を掛けられたからには、無視というのもアレなので、響達と一緒にフェンスに近寄っていく。

「久しぶりだな〜。」

「偶には顔出せよ〜!」

「はは…バツ悪いし、縁起悪いだろ?」

「何言ってるんだよ、オメーわ!!」

、E組の杉野に対し、フレンドリーに話し掛ける野球部員達。

「どうやら彼等は、少なくとも元同僚の杉野に対しては、差別意識は持つてないみたいだった。」

その様子を何気に緩んだ、そして少し驚いた顔で見る響達。

「今度の球技大会、お前が投げるの？」

「お？まあ、ウチのクラス、経験者が俺だけだからなく。そうなるんじゃないか？」

「よし、予告ホームランだ。」

「今からっ!?進藤、早えーよ!!」

「ははは…楽しみにしてるぜ。」

久しい面々と会話が弾む杉野。

そんな中…

「お前等、そんな奴等と駄弁つてないで、さっさと練習しろ!!」

進藤、お前もキャプテンなら、その辺の自覚を持てよ！」

「楯木…」

1人の野球部員が口を挟む。

「杉野、お前も少し声を掛けられたからって、E組如きが調子に乗って俺達と会話してんなよ。」

「てゆーか直ぐに消えてくれないか？」

俺達はお前等と違って、毎日遊んでられる訳じゃないんだからな！」

「……………」

「ほほう…!?!」

響とカルマの目の色が変わる。

「お、おい、楫木、止めろって！」

それを察してか、他の部員が楫木という部員を止めに入るが、

「何を止めると？教えているだけだろ？」

俺達は勉強部活、こいつ等とは違って、両方に真剣に取り組まなきゃいけないから、毎日ヘトヘトなんだってな!!」

この楫木の言っている事は正論かも知れないが、文句を言っている。その顔は、練習の邪魔をされたという憤りの表情ではなく、一般の本校舎生徒と同じく、ENDのE組を見下している。それであり、それ故の発言であるのは明らかだった。

「止せって！」

モブな野球部員が止めに入るが、この楫木の杉野を始めとする、E組に対する口撃は止まらない。

「ふん、進学校での部活との両立…」

する必要のない、選ばれられなかった人間には分からだろがな!!」

「ほう…?!?」

「ちよ…カルマ、吉良、抑えろ!!」

ヤバイ空気を感じた杉野と渚が、慌てて抑えに入るが、

「へーえ、凄いなええ?」

「まるで、「俺達、選ばれた人間ですう♪」って感じだな?」

今まで黙っていた、E組最凶な2人が、ついに口を開いた。

「うん、そうだよ?」

しかし、臆する事なく言葉を続ける楯木。

「気に入らないか?」

だったら、来週、このグラウンドで教えてやるよ。

人の上に立つ選ばれた人間と、そうでない人間、この歳で開いてしまつたら大きな

差つてヤツをn「もう、いい!練習に戻るぞ!!」

余りに見かねた進藤が、楯木をマウンドに引つ張つて行つた。

「離せ進藤!まだ全部、言い終わってないんだぞ!」

「……………」

「どうやら楯木は、やはり単に、E組相手にイヤミを言いたいだけな様であつた。

「すまん、杉野…」

「いや、アイツは昔から、あんなだし…」

「…じゃ、俺等も練習に戻るわ。」

「おう、じゃあな。」

杉野達と野球部員、グラウンドと校門に、それぞれ向かって行った。

「杉野！」

「？」

「ここで、一人の部員が杉野を呼び止める。

「球技大会、監督（てらい）が煩いからな、悪いが勝負は本気を出させて貰うぜ！」

「おう、当然だ!!」

野球部の言葉に、杉野は拳を前に突き出して応えた。



次の日の、帰りのホームルーム。

「ヌルフッフッフ…」

クラス対抗球技大会ですか…？

いやいや、健康な心身をスポーツで養う、大いに結構！」

球技大会の知らせのプリントを見て、感心する殺せんせー。

「…しかし、トーナメント表に、E組が無いのは どうしてです？」

「E組は本戦にはエントリーされないんだよ、殺せんせー。」

「Iチーム余るって素敵な理由でね。」

殺せんせーの疑問に、三村と中村が答える。

「その代わり…大会のメのエキシビションに出なきやなんない。」

「エキシビション?」

「要は見せ物だよ。」

クラス委員の片岡メグが、イマイチ把握出来ていない担任に説明する。

「全校生徒が見てる前で、男子は野球部、女子はバスケット部の選抜メンバーと戦わされるの。」

「ふむふむ…」

「一般生徒の為の大会だから、部の連中は本戦には出られないからね…。」

だから、皆に力を示す場を設けたって訳。

トーナメントで負けたクラスも、E組がボコボコにされるのを見て、スッキリ終われるし、「E組に落ちたら、こんな恥掻きますよ♪(笑)」って警告にもなるって感じ?」

「なるほど…い・つ・も・の…ヤツですか…」

「そ〜♪」
やや引き顔の担任と、その様な試合に引つ張り出される割には、楽しそうな顔をして

いるクラス委員。

「でも心配ないよ、殺せんせー。

暗殺で基礎体力ついてるし。

良い試合して、全校生徒を盛り『下』げてやるんだよねー♪皆？」

「「「「「おう!!」」」」」

統率力(リーダーシップ)抜群なクラス委員の やや影を帯びた笑顔での呼び掛けに、女子達は同様な顔をし、拳を天に向けて呼応する。

そんな女子達の士気が上がる中、

「悪いが俺等、晒し者とか勘弁だぜ。」

「お前等だけで、テキトーやってくれ。」

「じゃ、帰るぜ。」

寺坂、吉田、村松は教室を出て行った。

「…つたく、アイツ等!」

「放っておけよ磯貝、始める前から諦めて試合終了してる奴等なんか、最初から居ない方がマシだぜ?」

「吉良あ…」

寺坂達と同じ位、もしかしたら それ以上に響の、毒、に呆れる磯貝。

「まあまあ、…でだ、野球となりや、頼れるのは杉野だけど、何か勝てる秘策つて ねーの?」

前原が杉野に話を振る。

「……………」

神妙な顔になる杉野。

「…正直、厳しいさ。」

最低でも3年間、野球してるアイツ等と、ほとんど素人同然なE組（おれたち）…

勝ち負け以前の問題だよ…。」

「おいおい、杉野お〜…」

「それにさ、かなり強いんだぜ？」

ウチの野球部ってさ…

主将の進藤は超中学級のスラッガー、そしてピッチャーの楯木は「あ、昨日の嫌々つな奴ね?」…そうそう、俺からエースの座を奪ったヤツなんだけどさ…アイツも豪速球で、それぞれが高校からも注目されているんだ。」

「マジか…!!」

「人間って不公平だよな、勉強もスポーツも一流とかってさ…だけどさ、皆…」

「杉野?」

「だけど勝ちたいんだ。」

善戦でなくて勝ちたい!!

好きな野球で負けたくない。

野球部追い出されてE組（ここ）に来て、寧ろ その思いが強くなった。

…E組（おまえら）とチーム組んで、一緒に勝ちたい!!」

「杉野…」「杉野君…」

「…まあでも、そんなの無理だよな、殺せんせいいい!?」

其処には、杉野の言葉に生徒達が注目している隙に、マツハで野球のユニフォームを着て、わくわく顔なタコがいた。

「おっ……おう…殺せんせいも野球したいのは、よく伝わった。」

「ヌルフフフフ…」

先生、一度で良いから、スポ根な熱血コーチをやってみたかったです。

殴ったりは出来ないの、卓袱台返しで代用しようと思ってます。」

「…「用意良過ぎだろ!!」…」

その手には、きつちりと「卓袱台返しセット」を持つていた。

「今の杉野君みたいに、最近の君達は目的意識を はつきり口にする様になりました。

殺りたい…勝ちたい…」

どの様な困難な目標に対しても、揺らぐ事無く…退かず、媚びず、省みず!!」

「いや、無理に使わなくて良いから…」

「…おっほん! その心意気に応えて!」

この殺監督が勝てる作戦とトレーニングを授けましょう!!」



「そういう訳で烏間先生、この1週間は、放課後は野球とバスケの練習をしたいのですが…」

烏間に、球技大会までは放課後の暗殺特訓を休みたいと申し出る生徒達。

「いや、君達の殺る気と やる気は理解しているつもりだ。」

それにだ、あのタコも俺に相談に来たよ。

野球、バスケットと暗殺を両立させる様なトレーニングメニューは無いかってね。」

「殺せんせー…」

「だから、男子の野球の練習に関しては、俺も少し、口を出させて貰う。」

「女子は?」

「園川に頼んだ。」

「よろしくね。」

烏間の部下の1人で唯一の女性である園川雀(25:独身)が1歩前に出る。

「え、園川さん？」「雀さんが？」

「彼女は中学高校での部活経験者だ。

力になってくれるだろう。」

「「「「「おおく!!」」」」」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ：

「…じゃあ園川、女子の方は頼んだぞ。

それでは男子は早速、グラウンドに集合！

強豪と云われている この学校の野球部が どれだけ厳しいかは知らんが、俺の方が

もつと厳しい自信はあるぞ!!」

「「「「「うっわ…凄く嬉しいけど、ちっとも嬉しくねーっ!!」」」」」

この時の烏間の顔は、凄く活き活きとした黒（よ）い笑顔だったと言う…。

「「「「「おおう…」」」」」

大型ディスプレイの映像には、ピッチングマシンから放たれるボールを悉く、遙か彼方に打ち飛ばす進藤の姿が映し出されていた。

その映像だけで、とりあえず意気消沈するE組男子陣。

「キャプテンの四番、進藤一孝。

去年の都大会でも、打率5割の数字を叩き出した、超中学級スラッガーですね。」

「マジか…」

「凄えな、あの球も、かなり速いぜ？」

「よし、杉野！コイツは敬遠だ〜♪」

「打ち取りてえ〜!!」

中村の意見を軽く否する杉野。

「続いては、ピッチャーの楫木厚です。」

バシッ!!

ズバァン!!

ズドン!!

ビッシィ!!

「「「「「うっわああ〜…」」」」」

野球部エースピッチャー、楫木厚の投球練習の映像を見て、男女問わず、ドン引くE組の面々。

「楫木の球速はMAX140. 5km.

持ち球はストレートとカーブのみ。

練習試合も9割方ストレートでした。」

「あの豪速球なら中学レベルじゃ、ストレート一本で勝てるんだよな、これが。」

竹林の解説に、杉野が補足する。

「試合終了の お知らせ♪」

「「「「諦めるのかよっ!」「」」」

中村の一言に男子が突っ込む。

「この2人が目立ち過ぎていますが、他のレギュラー達も、決して油断出来る様な選手ではありません。」

「…まあ、対策は今から考えよう。」

次はバスケ部だな。」

「はい、奥田ちゃんと律、解説お願い!」

「は、はい!」

「お任せを♪」

180超えの身長も、決して飾りではありません!!」
スモールフォワードの熊耳朱緒、シューターの潘驛爛々…律の解説は続く。

「最後に、この4人をコートでフルに活かす司令塔、ポイントガード、バスケット部キャプテンの掛布ランディバー、身長168^{センチ}！」

スタメンの中では唯一、身長170^{センチ}を割っていますが、小柄な分、スピードは随一

！
パスセンスは勿論、時には自ら敵陣に切り込み、その儘決めるのも当たり前な選手です！

如何に彼女にボールを触れさせないのが課題でしょう。」

「「「……………」」」

ノリノリな律の解説が終了、想定以上の相手戦力に、言葉を失う女子達。因みに冴えまくる律の説明の前に、奥田は喋る隙を与えて貰えなかった。

「しかし、ありや、マジにヤバいな…」

「ああ、掛布は兎も角、残りの4人が…」

「うむ…冗談抜きにパねえ…」

「…確かに。」

この女子バスケット部の映像を、一緒に見ていた男子達が眩き合う。

「やっぱり、男子から見ても脅威的？」

茅野が問うと、

「ああ、脅威的ってゆーか、胸が胸囲的？」

兎に角ヤバくて、パねえ…」

「ん。ん。ん。」

びしい…

「うっぎやああ!!」

男子を代表して答えた岡島の言葉に、女子達の殺気が瞬時に限界突破、イングラムに KG9、デリンジャーにコルガバが、その場に居た男子達に浴びせられた。

「あんなのは飾りよ！」

エロい人には解らないのよ!!」

地雷を踏んだ男子達が阿鼻叫喚の悲鳴を上げる中、小柄な緑色の髪の少女が涙目ながら、夜叉の様な形相で叫ぶのだった。



放課後。

「はい、茅野さん！また3歩歩いたわ!!」

訓。

其処では

ブオン!!

「速え〜!!」

「あんなの打てる訳が無え〜!!」

殺投手（ピッチャー）が300kmの球を投げ!!

スパア!

「はい、アウトですねえ…」

木村君、もう少し、速く走らないと。」

「マツハで捕球送球するな!!」

殺内野手が分身で鉄壁の守備を敷き!!

更には殺捕手（キャッチャー）が囁き戦術で打者の集中力を掻き乱す!!

「吉良君、昨日は また夜遅くまで、彼女サンと楽しげに話してましたね〜?」

あの会話、甘党の先生が、ブラックコーヒーを飲んでしまう程でしたよ〜?」

…ぷちっ!!

「うらあ!死ね、このタコ!!」

「そろそろ、監督のマツハ野球にも慣れた所で、次のステップに進みましょう。」

「「「「次のステップ?」」」」」

「はい。皆さんは朝、ピッチャー楳木君の投球の映像は見ましたね?」

「ん。カーブもだけど、とりあえずストリートがパなかった。」

「その通り。聞く話では、かなりプライドの高い生徒だそうですから、まさか君達、E組相手に変化球を投げるといふ選択は無いでしょう。」

すなわち、ストリートさえ見極めてしまえば、こつちのもんです。」

「それが出来りゃ…」

「大丈夫ですよ、前原君、これからの練習は、投手が楳木君と全く同じフォームと球種…
そして楳木君と『全く同じ超スローボール』で投げますから。」

「「「「「!!!」」」」」」

「さっきまでの殺投手の球を見た後では、彼の球なんか、止まって見えるでしょうねえ
?」

「「「「「あ…」」」」」」

「そうですね…先ずは、確実にバント出来るレベルまで到達して貰いましょう!」

「「「「「「!!!」」」」」」

殺投手の仮想・楳木の打撃練習が終わった次は、特別コーチの烏間による、鬼ノック

で練習は締め括られる。

「よし、今日は終了だ。」

「」「」「ありがとうございました！」

お疲れ様でしたー!!」「」「」

「悪い杉野、渚、もう少しだけ良いか？」

「吉良……?」「吉良君？」



そして、球技大会の日を迎えた!!

バスケットの時間

「うががががが…!!」

「茅野っち、落ち着け!!」

本校舎エリアの体育館。

球技大会エキシビジョンマッチ、女子バスケットボール部 vs E組女子の試合が始まろうとしていたが…

所謂、巨乳揃いのバスケットスタメン（1名除く）に対し、E組スタメンの約1名が、まるで親の敵の如く尋常でない殺気を発散、チームメイトが必死に宥めていた。

其処に

「そんなに いきり立っても無駄よ？」

「!!!?」

公式戦用の緑色のユニフォームを着た、女子バスケット部主将の掛布ランディバーが前に出る。

「持つ者と持たざる者の違い、あんた達にハッキリと教えてあげるわ。」

「!!!あゝっあゝあゝ!!」

そして この、完璧に人を見下した一言に、E組女子が素直に反応。

「な、何よ？アナタだって大した事ないってゆーか、あたしより持つてないじゃないのよ!!」

「はああ!!?」

更には、E組の約1名が違う方向に向けられたベクトルの怒りの発言に、その意味を察し、尚且つ自身にとって禁忌だったのか、過剰に反応する掛布。

バチイツ!!

…この時、選手、見学の生徒や教師を問わず、体育館に居た者全てが、コート我真ん中、両者の頭上で虎と兔が火花迸る、一触即発な睨み合いを繰り広げるのを見た。

「か、茅野さん、落ち着いて!」

「ふがーっ!」

「ちよ…掛布、落ち着きなさい?!」

「黙れ、駄肉!!」

両者、各々のチームメイトに引き離されながら、

「あんなのは飾りよ!

エロい人には解らないのよ!!」

…ハモったのだった。

「……………」

ツカツカツカツカ：

その後、各々が仲間に「もう大丈夫」と言つて、抑えられた体を離してもらい、コート中央まで歩み寄り、再び相見えた両者は

ガシイ！！

「残念ね…貴女とは…」

「友達でいられたかも知れないわね…」

互いが黒い笑みを浮かべながら、手をガツシリと握り合つた。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「やれやれ…」

E組サイドのベンチでイリーナが呆れながら呟く中、やはりベンチに座っている奥田愛美が手に持つスマホから、

「やつぱり むぬーに言われると、ひんぬーもキレるんですねえ？」

…と、小さな声が流れたのだが、余りに小さな音声故に、誰一人、『彼女』の呟きに気付く者は居なかつた。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

鷹村守璃と片岡メグのジャンプボールで試合が始まる。

パシイッ!!

やはり13センチの身長差は大きく、この空中戦を制したのは鷹村。

ボールをキャッチした掛布の

「速攻!!」

の掛け声と同時にE組エリアに攻め入る女子バスケ部。

ドリブルで中央突破を試みる掛布。

止めに入った矢田桃花を横の動きで躲そうとするが、

「なっ!?!」

それにしつかりと、掛布が『持たない物』を大きく揺らしながら、反応して喰らい

付いている『持っている』矢田。

「ちいっ!!」

シュ…

二重の意味で舌打ちした掛布は、抜けないならばと熊耳朱緒にパス、ボールを受けた熊耳は、そのままゴール前まで切り込み、レイアップを決める。

「「「「きゃあ〜あ!!」」」」

試合開始早々、あつと言う間のバスケ部の先取点に沸き立つ館内。

そして早速、力を誇示出来たとドヤ顔なバスケ部だが、

素人集団と侮り、基本のマンツーマンマークを無視した『兎に角、ボールを手にした奴を人数で、圧する』という、どちらが素人か判らない試合運び。

重ねて言うが、慣れないラン＆ガンで、普段の試合以上に走り込んでいる故、当然、相応の体力の消耗消費。

身長差で、ジャンプボールやりバウンドを獲れても、そのアドバンテージが有つても、本格的に？バスケツトボールの特訓をし始めたのは1週間前という素人集団に完全優位に試合運び出来ない。

女子バスケット部陣営は苛立ち、焦る。

しかし、「どうして こうなった？」の答えは、無駄に高すぎるプライドが邪魔して導き出せる筈が無かった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「何だか向こうさん、荒れてるねえ〜？」

スポーツドリンク片手に、タオルで汗を拭きながら中村莉桜が呟く。
「く〜く〜…第2ピリオド終わって、あたし等相手に1ゴール差…」

向こうからすれば、屈辱だろ〜？」

中村の言葉に、狭間綺羅々が、やはりタオルで汗を拭きながら応える。

「よ〜し皆、館内を盛り『下』げるのは ほぼ達成出来たし、此処まで来たら、もう勝つ

ラスト、第3ピリオド開始前、普通の試合で2点差というなら、どちらが勝つか、分からない展開で沸きに沸き上がる観客席だが、地味などよめきしか上がらない。

自分達はENDのE組がバスケ部に無残に蹂躪されるのを見に来た筈なのに：

それで気持ちをスカツとさせる筈なのに：

そんなスツキリしない気分では試合は行われていた。

バスケ部は開始時のジャンプボールを制し、点差を4と広げるが、また茅野の低空サイドスローから、倉橋陽菜乃が外からシュートを決めて1点差、更に直後、櫻瀬園美が掛布からステール、チームリーダー片岡が内からのシュートを放ち逆転。

審判の明らかにホームタウンデイズジョン丸出しなジャッジの中、実は とうの昔に諦めさせて試合終了となる点差になっていても おかしくない試合運びでゲームは進んでいた。

当然、不公平なジャッジは想定内。

彼女達はキレル事無く、その不満をプラスに変えて試合を進める。

これは試合開始前に、一応は監督のポジションでベンチに着いたイリーナの「キレたら負け」の一言に、それこそ「おまゆう」とばかりにキレかけ、その直後にクールダウン出来たのが、試合中に かなり効果があった。



「うおりやつ!!」

「きゃっ!?!」

残り時間30秒を割った時点で同点、此処で獅子雄がディフェンスの片岡と速水を突き飛ばし、豪快なダンクを放つ。

端から見れば、明らかにオフエンスファウルなのだが、審判は見て見ぬ振り。

「「「「「きゃあああ!!」」」」」

終わり良ければ全て善し、此処ぞとばかりに盛り上がる見学の生徒達。

女子バスケット部の2点リード。

しかし…

「まだ、これからよー」

素早くボールを拾った茅野が、そしてE組の面々が走る。

「戻れ…これを防いだら、終わりだ!!」

掛布の声に、バスケット部も素早く戻り、ディフェンスを敷く。

E組はゴール下に片岡、神崎、原、そして外に速水が位置を取る。

「あの、どちビのパスは もう いいから!」

獅子雄、潘驒、速水に着け!

残りの中の3人をマンツーマンだ!!」

「「おうっ!!」」

E組得点の殆どの要となった、茅野の低空パスは棄て、それを受け取った者を潰す、最低でも足止めする戦略。

…しかし、

「くす…。」

…だ、そうですよ？茅野さん？」

「茅野ちゃん、最後、美味しいね〜♪」

試合終了5秒前、神崎有希子と原寿美鈴が呟く中、茅野カエデは明るく微笑むと、この試合、自身初めてとなるシュートを2ポイントエリアの外側から放った。

野球の時間

『試合終了ー!! 2対1ー!』

野球3年生の部はA組が優勝です!!』

体育館で女子バスケ部対E組の試合の決着が着いた頃、野球グラウンドでは球技大会トーナメント本戦が終了、A組がB組を下し、優勝を決める。

「クッソ! A組強えー!!」

「勉強だけでなく運動もAランクですか?」

「あー、そうですね?」

「勝ちたかったよな〜…」

トーナメント1回戦でD組をコールドで破るも、決勝でA組に敗れたB組の生徒達がボヤク。

「そんな中、

『全学年の本戦トーナメントは終了です。

それでは最後に…皆さん お待ちかね!

E組vs野球部選抜の余興試合(エキシビジョンマッチ)を行います!!』

球技大会のメの試合の開始がアナウンスされた。

「クツソー、B組め：俺等ボコったんだから、A組もフルボッコしろってんだ。それか、フルボッコで負ければ、良かったのに…」

「A組対C組も、5―4の良い勝負だったしな…」

「ちつ、俺等だけコールドかよ…」

何だか、俺等が ぶつちぎりて一番弱いみてーじゃねーかよ…
「言うな！アレ見てスツキリしようぜ？」

俺達より弱い奴等が もっと恥ずかしい目に遭うのを見てよ…



パスッ！ バシッ！ ズバア！ ビシッ！…

グラウンドには一足先に公式試合用のユニフォームで現れた野球部が、パフォーマンスのつもりか、ウォーミングアップを始める。

「おー、気合い入ってるねえ〜？♪」

「ま、野球部としちゃ、全校生徒に良いトコ見せるチャンスだしな。」

「いや、試合用のユニフォームって、やり過ぎだろ、おい？」

「俺達相手じゃ、コールドは当たり前。」

最低でも圧勝は義務だからな。」

「監督が煩いから、手は抜かないって言ってたよね…」

「ああ、情け容赦無く、本気で畳み掛けて来るだろうぜ…」

E組の面々が野球部を見ながら、そんなやり取りをしていると、1人の野球部員が近づいて来た。

「楯木…?」

「ふん…逃げずに この場に来た事だけは、誉めてやるよ。」

「ほおう?」

この楯木の安い挑発に、敢えて喰い付いてみせるE組最凶コンビ。

「わっ、何?ちよ…放せよ!」

それに対し、すかさず2人を取り押さえるE組の面々。

「楯木、あまりコイツ等を挑発するな!!」

杉野が言うが、そんなの お構い無しに楯木は言い続ける。

「良いか…学力と体力を兼ね備えたエリートだけが、選ばれた者として人の上に立てる

…それが、文武両道だ。

お前等は どちらも無い選ばれざる者達だ。

そんな奴等が表舞台(グラウンド)に残っているのは許されない。

E組(おまえら) 全員、二度と表を歩けない試合にしてやるよ…。」

「「「「「………!!!」」」」」

言いたいだけ言うのと、楯木は野球部の元に戻って行った。

「何なんだ？アイツは？」

「アイツは……あーゆー奴なんだ……」

楯木の後ろ姿を見ながら、半ば呆れ顔で話すE組の面々。

「まあ好いよ、試合で潰すから♪」

「打席で『てがすべったー!!（棒）』ってバット投げるとかね♪」

「違うだろ、カルマ!!」

試合に勝って凹ませるって意味だよな!?

そーだろ、吉良?!

頼むから、そーと言ってくれ!!」

揉め事を嫌う磯貝の必死の訴えに響は

ポン…

「…おお、その手があつたか♪？」

「「「「うをおおゐい!?!」」」」」

何かを思いついたかの様に掌を叩く、響の冗談か本気（マジ）か判らない発言に、皆が突っ込んだ。

そこに、

「皆さ〜ん、女子バスケの試合、終わりました〜。77対76で…」

渚のスマホに律が（勝手に）アクセス、女子バスケの結果報告にやって着た。

「…E組の勝利で〜す!!」

画面の中、湘〇高校バスケット部、赤のユニフォーム（14）を着てバスケットボールを脇に持ち、Vサインする律。

「「「「「おおお〜っ!!」」」」」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ：

良い報せに、沸き立つ響達。

「こりゃ、俺達も負けられないな!!」

「はい、女子の皆さんも今、こっちに向かっていますよ!」

「仕方ない…此処は いっちよ、俺等のカッケエー所、見せてやるか!!」

「…だな!!」



「野球部〜♪」

「泣かすなよ〜（笑）」

見学の生徒達が声援を飛ばす中、ホームベース前に整列する野球部とE組男子。

この試合、俺は形だけの お飾りだ。

1つの軍に複数の指揮官が居ても、それは混乱の元だからな。

指揮はヤツに一任しているから、そのつもりでいてくれ。」

「「「「「はい!!」」」」」

「おい、見ろよ、あれ…」

そんな中、早速 殺ボールが顔色を変えてサインを出す。

①山吹色↓②群青色↓③赤茶色

「渚君、通訳〜♪」

「えーと…」

渚がサイン一覧を記したメモ帳を見ながら

「山吹色↓群青色↓赤茶色…」

ん〜、『殺る気で勝て』…つてさ。」

「はは…確かに。俺等には もっとデカイ目標（ターゲット）がいるからな。」

ぼん…

「奴等程度、簡単に捻らなきや、あのタコは殺れないよな?なあ、キャプテン?」

杉野の背中を軽く叩きながら、響が言う。

「よっしゃあ!サクツと殺ってくるか!!」

「ああ、ちょうど今からさ……。」

ワーワーワーワー……

『1回表、E組の攻撃……』

1番センター、木村君……』

「お、お、やだねえ……」

「どアウェイで先頭かよ〜?」

「まあ、木村君がE組（ウチ）じゃ、一番足が速いから……」

「木村さん、頑張ってください!」

スマホの中、青○高校野球部のユニフォームに着替えた律がエールを送る。

参考までに、背番号は『18』である。

ずどん!!

「ふん……雑魚が!」

楯木の第1球が唸りを挙げた。

『これは凄い!』

ピッチャー楯木君、流石の剛球!!

E組1番、木村棒立ち!

この たった1球投げただけで野球部の勝ちムードの中、殺ボールがバッターボックスの木村にサインを出す。

①青↓②橙↓③緑

「…りよ〜かい！」

小さく頷く木村。

コオン…

楯木の投げた、第2球を、的確にバントで転がす木村。

野手は誰がボールを取るかで一瞬迷った為、E組一の瞬足・木村は楽々セーフとなる。

「ちいつ、小賢しい！」

「楯木、気にするな。」

如何にも素人の考える事だ。

警戒しとけばバントなんざ問題無い。」

『2番、キャッチャー、潮田君…』

打席に入った渚に、殺ボールからサインが出る。

①サツカー柄↓②迷彩柄↓③星条旗

「…は〜い！」

コツツ…

『潮田、三塁線に強いバントお!』

前に出てきたサード、脇を抜かれた!!

こ…これでノーアウト、1塁2塁…!』

ざわざわ…

「…おい、大丈夫か?」

「なんか、変な流れになってきたぞ?」

ざわつく見学者達。

「又ルッフッフ…」

強豪と云えど、まだまだ中学生。

当然、プロ並みなバント処理には至ってませんねえ?」

殺ボールは余裕の表情。

何…だと…?」

想定外の展開動揺する楯木。

これは、ベンチの監督も然り。

コイツ等、何故バントが、こんなに出来る?

素人目には簡単に見えるだろうが…

楯木クラスの速球を狙った場所に転がすなんて、素人には
ましてや、あの杉野の遅球では練習台にもなるまいに!!
まず無理だ…

「…なくんて、思ってる頃だろね〜?♪」

「ところが こっちは…」

響が親指で殺ボールを指差し、

「アレ相手に練習してたんだからな!」

殺投手のMAX300kmの速球、

殺内野手の鉄壁の布陣、

そして殺捕手の囁き戦術…

練習の効果は確実に出ていた。

そして、3番・磯貝も難なくバントを決め、

『ま…満塁いー!?!』

ちよ…調子でも悪いのでしょか楯木君!!』

4番・杉野がバッターボックスに入った。

①地球↓②木星↓③三日月

「おっけ…!」

殺ボールのサインに領くと、杉野はバントの構えを取る。

既に暗殺者となっている、杉野の面構えに楢木は戦慄する。

何なんだ、コイツ等は!?

今まで こんな敵（チーム）とは対戦した事が無いぞ…?

何だ、あの目は？

あの獲物を狙う様な躊躇無い目…

俺が今、やってるのは本当に野球なのか？

まるで、四方から銃とナイフで狙われている錯覚に陥る楢木。

「…落ち着け、これ以上バントなんか させてたまるか…」

此処でキャッチャーからカーブ要求のサインが来るが、楢木は首を横に振る。

「巫山戯るな…E組如きに変化球なんか投げられるかよ!!」

「わっ?!」

捕手との意思疎通、球種やコースも決まらない儘、勝手に内角への直球を楢木は投げ
る。

そして其の瞬間、杉野はバントの構えから、バットを長く持ち替え、

「バスターだ?!」

カキイン…!!

楯木の球をジャストミート、

『う、打ったあーあつ?!』

打球は深々と外野を抜ける!!』

木村が、渚が、磯貝が、次々とホームベースを踏む。

『ま、まじかよ…?』

杉野、走者一掃のスリーベース!!

い、E組3点先制ー!!』

3塁の上で飛び跳ねながら、会心のガッツポーズをする杉野。

そして恨めしそうに睨みつける楯木に対し、拳を向け相手の顔を見据える。

楯木…お前、文武両道とか言ってたよな?

確かに武力で俺は、お前には敵わねー…

けど…例えば弱者でも、狙いすました一撃で、巨大な武を仕留める事が出来る!!

そう、俺達は今、E組（みんな）で…そーゆー暗殺（べんきよう）してるんだよ!!

杉野の目は、そう語っていた。

「やっただぜ杉野!!」

「流石はキャプテン!」

「よし、杉野お！ご褒美に神崎がデートしてやるってよ!!」

「え？ちよ、ちよつと、中村さん!？」

先制点に、沸きに沸くE組ベンチ。

そして、

「よし、じゃ、殺ってくる。」

「よし、殺ってこい、吉良つち!!」

響が打席に向かった。

『ゴ…5番、セカンド、きさら…くん…』

「何で俺のコールん時に限って、テンション下げてるかな？差別？」

ブウン…ブウン…!!

如何にも『打ちますよ♪』と言いたげなフルスイングをしながら、打席に立った響。

① 縞馬↓② 虎↓③ ラブラドール

「…(笑) らくじゃ。」

殺ボールのサインに苦笑しながら、バットを構える響。

因みに このサインの意味は『好きに殺れ』だったりした。

カキイイイン…

「な…!？」

響はサインに従い早速、動揺している楯木の初球をフルスイング。

「「「「うおおおつ!!」」」」

「「吉良ー!!」」

「吉良君、凄いい!!」

「「吉良っちーっ!!」」

鋭く、勢い良く飛ぶ打球は、レフトのポールぎりぎり内側に消えて行った。

「ファール!」

しかし、審判（副審塁審含む）はこの打球をファールとコール。

「「「「はああ!」」」」

当然、E組ベンチは黙っていない。

「巫山戯るな!!」

「どー見たって内だったじゃない!」

「「眼下行けーっ!!」」

そんなE組ベンチに響は掌を差し出し、「気にするな」の意思表示。

くるくるとバットを軽く回し、

「さあ、次、逝ってみよー!」

再び打撃の姿勢を取った。

「吉良……」

「吉良君……」

「まあまあ、本人が『大丈夫』と言ってるんだから、問題無いっしょ〜♪」

「カルマ……」

こんな時にも携帯ゲームを弄りながら冷静に、皆を宥めるカルマ。

「クソっ……!!」

収まらないのは楯木。

審判の『お情け』でファールにして貰ったが、野球部全員、楯木を含め、先の打球が文句なくホームランなのは理解していた。

野球部関係者で、当然な裁定と受け取っているのは、顧問の寺井だけである。

キャッチャーが敬遠を求めるが、楯木は首を横に振る。

「E組のカスだぞ!!」

逃げる様な真似が出来るかよ!」

ならば、一球だけ外に流す指示も、楯木はそれを拒否。

「うるせー! 捕手(おまえ)は俺が投げた球、黙って受けてりや良ーんだよ、ボケ!!」

「なっ…!?!」

「「楯木…!?!」」

その暴言に、驚くチームメイト。

そして楯木は、また、勝手に投球モーションに入る。

「E組のカスの分際で、俺から打ってんじゃねーよ!!」

「!!?!」

ガツシヤア…

「「「「「吉良あつ!?!」」」」」

「「「「「吉良君!!」」」」」

その球は、一直線に顔面に向かってきたのだが、響は持ち前の反応速度で後方、背中から倒れ込む形で躲す。

この暴投はキャッチャーも受ける事は出来ず、バックネットに直撃、その隙に杉野がホームイン、E組に4点目が入った。

だが、これで収まらないのがE組ベンチ。

普通ならば、乱闘も辞さぬと集団で抗議にグラウンドに乗り出す処なのだが、

「巫山戯るにも程があるぞ!!」

「「「烏間先生、落ち着いて!!」」」

嘗て3つの球団で監督を勤め、その何れも優勝へと導いた、あの『闘将』が搦り憑いたかの如くな怒りの形相で真っ先に飛び出そうとした烏間を、生徒達は止めるのに必死だった。

「こーなつたら仕方ない、陽菜、『乙女のちゅー』で黙らせる!」

「ええ〜っ!? そんなの まだ早いし、心の準備、出来てないよ〜?」

∴結局は何事もなく起き上がった響が、先の疑惑裁定同様に『大丈夫だ』のアピールでベンチを鎮めたのだが。

『いやいや、凄く惜しかった!』

もう少しで顔面直げkひええっ!』

放送席で うっかり本音をマイク越に漏らしてしまった荒木に、響は鬼の様な形相で睨みつけ、そしてバットを向けた。

『殺る』『絶対に殺る』『兎に角殺る』

『とりあえず殺る』『死ぬまで殺る』∴のアピールである。

『あわわ∴不適切な発言がありました!!』

いや、ごめんなさい吉良君、すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません!!』

その殺し屋の様な冷酷な表情とポーズに畏れを為し、必死に謝るアナウンサー・荒木。

「あちやく、こりや、回避不可な死亡フラグが立ちましたね〜♪?」

そう言いながら、ケタケタ笑うカルマの背後には、バナナの皮とカレーライスが踊るのが見えたとか見えなかったとか…

「ちい…あんな球、投げといて、帽子取って頭下げるのも無しか…」

E組だからって、巫山戯過ぎてねーか?」

「…すまん。」

「お前が言っても仕方無ーよ。」

響の愚痴に、キャッチャーが慌てて代わりに謝るが、意味は無しと斬り捨てる。

「あのヤローが直接、謝らなk…!!」

響は見た…というより、無駄に良い視力の御陰でハッキリと見えた。

楯木がマウンドで、下種な含み笑いをし、その顔を歪ませているのを。

(あのヤロー、ワザとか…!!)

俺だったから避けられたが、普通に大怪我、下手すりゃ死人が出てたぞ!!)

ぷち…

見事にキレた。

中学生相手に大人気ない(前世込みで24歳になりました)なんて発想は、如何に子供とは云え、平気で人を殺せる行動に出れる輩には持ち合わせてない。

少年法？何ですか、それ？

既に響に迷いは無くなった。

「またもやキャッチャーの指示を無視して楯木の投げる豪速球、ストライクギリギリ、更なる挑発的な内角高めの球を」

「カキン!! ドガッ!!!」

「うぎゃああああああつ!!」

「!!」か、楯木!?!」

フルスイングして、楯木の右肩に正確に撃ち当てたのだった。

「うわあああああああ…」

打球直撃の激痛で、捕球処ではない楯木、慌ててキャッチャーがフォローに走るが、その時、響は既に2塁ベースを踏んでいた。

「念の為に聞くが…」

「事故なんかでなく、ワザと狙って、確実に仕留めたとでも言って欲しいのか？」

「仮にワザとじゃないと言え、お前等は信じて納得するのか？」

「だから、敢えて言ってるよ、ノーコメントだと。」

「お前等が勝手に都合良く判断しろ。」

「俺をヒールにしたいなら、好きにすれば良いさ、何しろ俺は、本校舎(そっち)じゃ」

超々・危険人物らしいからな…今更、痛くも痒くも無ーよ。」

「うっ…」

2塁のベースカバーに入った進藤の問い掛けを途中で遮り、響は一方的に言い放つ。
(実際、小宇宙全開で正確に撃ち崩したんだけどな…?)

まあ、殺されなかっただけ、有り難いと思つて欲しいね…)

「うう…」

未だ肩を押さえ、うずくまった儘、立ち上がれない楯木。

「おい、担架だ!」

結局 楯木は、1つのアウトも穫れず、担架で運ばれて退場となった。

馬鹿な…

何で俺の球が こうも簡単に見切られた…

此処は、屑を生贄に、全校生徒に俺の実力を見せつける場所じゃなかったのか?

選ばれた俺が、何故こんな屈辱を…!?

クソっ!クソっ!クソッソッ!!

惨めに担架で運ばれる楢木の顔は、先程 響に向けた悪意故による顔以上に、屈辱で歪んでいた。

因みに この後 彼が、病院で医師から野球人として、死刑宣告に等しい診断結果を受け、深い絶望で顔を更に歪ませる事になるのは、また別の話。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「馬鹿な…楢木が…!？」

野球部ベンチでは、顧問の寺井が、色々な意味で予想外な展開に驚愕、そして動揺していた。

不味い…これ以上、不様を晒す訳には…

この儘だと、儂は理事長に…

「顔色が優れませんね、寺井先生？」

何処か お体の具合が悪いのでは？」

「はああっ!？」

其処に現れたのは、桐ヶ丘学園理事長・浅野學峯。

今、最も遭いたくなかった人物の登場に、寺井の顔が青ざめ曳き吊る。

「！！！！！！！！！！」

「！！！！！！！！！！」

「！！」

その言葉に、野球部員、見学の生徒達、E組の面々が、そして殺ボール…殺せんせーが息を飲み驚く。

「審判、タイムです。」

「理事長先生…？」

寺井が担架で運ばれて行く中、全く事態が掴めない、進藤を始めとする野球部員達。

浅野は そんな彼等に、

「何、少しだけ…教育を施すだけだよ？」

そう言うと、自らマウンドに足を運び、野手全員を呼び寄せた。

浅野學峯は こう考えている。

此処でE組（かれら）を勝たせてはいけない。

彼の目には、少しずつ自信が漲りつつある。

全ては あの怪物が影で引いた糸だろうが…それでは駄目だ。

『やればできる』と思わせてはいけない。

常に、下を向いて生きていて貰わねば…

秀でるべきでない者達が秀でるとなると…この櫛ヶ丘（わたし）の教育理念が乱れてしまうのでね！

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

『え、今、入った情報によりますと…』

グラウンドにアナウンスが流れる。

『野球部顧問の寺井先生は試合前から重病で…部員達も先生が心配で試合処ではなかったとの事…』

それを見かねた理事長先生が、急遽 指揮を執られるそうです！』

「お、1回表からラスボスの登場かと思えば…」

「捏造乙々（笑）」

「過保護過ぎでね？（笑）」

「んな小細工しないと、E組如きに勝てない野球部…（泣）」

アナウンスの後に、理事長の行動を賞賛する声や、改めて野球部への応援の声が上がる中、E組は余裕で呆れていた。

さあ、作業の手順を教えよう…」

柵ヶ丘学園の支配者、浅野學峯の指示という銘の洗脳が始まった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

理事長・浅野がグラウンドから下がり、試合再開となる。

そして負傷退場したエース・楯木の代わりに、マウンドに立ったのは…

「え？進藤!？」

「杉野、アイツ、投げれるのかよ?」

「ああ、アイツも元々は、ピッチャーだったんだ。

只、楯木がピッチャーとして ずば抜けてたからな、レギュラー確保の為、アイツは

もう一つの才能であるスラッガーとしての実力を集中強化する事を選んだんだ。」

「成る程…」

「まあ、いいさ…あの楯木より、投手としては下なんだろう?」

「千葉?」

「とりあえず、俺が様子を見てくる。」

そう言うと、次のバッターである、千葉はヘルメットを被り、バットを持つと、打席

に向かって行った。

「げ…???」

バッターボックスに入った、千葉の前髪に隠れた両目が点になる。

『これは…?』

E組千葉が打席に入ったと同時に野手全員が…外野手も本来の守備位置を捨て、内野に集結したあー!!

こんな極端な前進守備、見た事がない!!』

それを見たE組ベンチは

「バントしかないって見抜かれてるね…」

「…つても、あれって、あの至近距離ってアリなのかよ?」

この岡島の疑問に答えたのは竹林。

「ルール上は、フェアゾーンなら、何処を守っても自由なのさ。」

もつとも、審判が駄目と判断すれば別だけど、残念ながら、審判の先生は本校舎(あつち)の人間だ。

期待するだけ無駄だよね。」



進藤の第1球が内角低めに決まる。

「当てるのは大丈夫だけど…」

とりあえず1球目を様子見とした千葉は、殺ボールの方向を見て、

(…だけど、冗談じゃないぞ!?)

こんな内野、バントなんかじゃ、どーにもならねーよ!どーすんだよ殺監督?

指示(サイン)くれ、サイン!!)

①無表情↓②冷や汗↓③顔を両手で覆い、

「又ル…ど、どうしましょう…?」

「打つ手無しかい!!」

結局、バントしか攻撃の手段がなかった6番・千葉、7番・菅谷、8番・前原は鉄壁の内野陣の前に凡打に終わり、響は残塁、チェンジとなる。

そして1回裏、

「うわっ!?!」

杉野の変化球が冴える。

しかし、その間も

「さあ、進藤君、繰り返して言ってみようか、『俺は強い』」

「…俺は強い」

「良いよ、『力で捻じ伏せる』」

「…力で捻じ伏せる」

「そう、『そして踏み潰す!』」

「…そして…踏み…潰すう!!」

理事長・浅野による、進藤の魔改造が着々と行われていた。

野球部の先頭バッター、続く2番バッターを変化球を駆使して三振に仕留めた杉野、そして3番バッターが打席に着いた時、

「カルマ君、カルマ君…」

「?」

シヨートを守るカルマの足元、地面から殺監督が顔を出してきた。

「いきなり出てくんなよ…踏みよ?」

「今の内に伝令です。」

次の回、先頭バッターは君です。

ちよつと挑発して揺さぶってみましょう。」

「へく、どんな?」

「ヌルフフフ…それは…」

カアン…

「…成る程ね、了く解♪」

パシツ…

そう言いながら、カルマは自分の頭上に打ち上がった打球をキャッチ、3アウトチェンジとした。

そして、2回の表、野球部は相変わらずの鉄壁なバントシフトを敷く。

「……………」

この回、E組の先頭バッターのカルマは、打席に着かず、その布陣を見据える。

「どうした？早く打席に入りなさい！」

審判が打席に着く様に促すと、

「ねえ、これってさあ、ズルくないの？理事長先生？」

カルマが仕掛ける。

「ほう……？」

「こんだけ邪魔な位置で守ってるのにさ、

審判の先生とか、何にも注意しないの。」

一般生徒（おまえら）も おかしいとか、思ったりしない訳？」

挑発はカルマの真骨頂、最高にバカにした顔をバックネット裏の見学席に向け、「ああ、そうか、お前等ってバカだから、守備位置とか理解してないんだよね？」

この言葉に一瞬、黙り込む見学の生徒達だが、次の瞬間、

「小さい事でガタガタ言うな、E組!!」

「たかだかエキシビションで守備にクレームつけてんじゃねーよ！」

「文句があるなら、バットで結果、出してみろや!!」

ブーブーBOOブーブーBOOブーブーBOO…!!

逆ギレ丸出しなブーイングを乱舞させる。

カルマは やれやれだぜ…なオーバーアクションで仕方なく打席に立つが、やはり鉄壁の守備陣の前に成す術も無く、

「監督、ダメっぽいよ?♪」

ベンチに戻ると、此方に移動していた殺監督に話し掛ける。

しかし、殺監督は

「いや、今ので良いんですよ、カルマ君。」

口に出して、言葉にして、はつきりと抗議することに意味があつたんですから。」

満足な表情で答えた。

打順は先頭に戻るが、木村、渚も やはり、極端な前進守備に手も足も出さず、この回は三者凡退となる。

そして2回裏…

カアアアアン!!

「「「「「あ、ああ…」」」」」

いくら吉良でも、あれは…」

「ん…吉良君なら多分、大丈夫…かも？」

「渚君？」

E組男子が進藤の変化球に驚愕している中、ネクストサークルから響がバッターボックスに入った。

杉野以上の長打を警戒しての後方寄りな守備体制の中、進藤は第1球を投げた。

バスツ…

「…!!」

「ストライーク!!」

響は迫るボールに狙いを定めてバットを振るが、そのボールはバットに当たる瞬間、嘲笑う様に軌道を変え、下に落ちる。

「吉良…」

ベンチに戻った杉野が響を じつと見る。

「杉野く、どうなんだよ、吉良たちは？」

カルマが杉野に意見を求めた。

「ああ、殺監督や烏間先生の特訓の後、一度、打撃練習に付き合わされたけどさ…」

此処で杉野は深く溜め息を吐く。

「ははは…正直、凹んだよ…」

俺のカーブもスライダーも あのヤロー…」

進藤が第2球を投げた。

初球と同じスピード、同じ軌道、そして同じ回転で、再びバットで空を斬らさんと響に迫る。

響は それにタイミングを合わせ、深く踏み込み、バットを大きく振る。

「進藤、1球目で分かったよ…」

杉野のスライダーのが、よっほど鋭い。

そして、何より…」

それと同時に杉野は呟いた。

「…あのヤロー、どんな球も2球目には悉く、ぶっ飛ばしやがった！（泣）」

「聖闘士に同じ技（たま）は通用しない!!」

カキイイイン!!

確実に真芯を捉えた打球は、先の進藤以上の高さでセンター頭上を超えていった。

「「うおおお!!吉良っつ!!」」

「「「「吉良くっん!!」」」」

「「吉良つちく!!」」

「吉良つちさくん♪」

文句の突けようのない、響のホームランに やんややんやなE組ベンチ。

バシバシバシバシガンガンガンガン…

「痛い痛い、ちよ…マジ痛いから!!」

そして、ゆつくりとダイヤモンドを一周して戻ってきた響に、手洗い歓迎をするクラスメート達。

「止め…痛いっつってんだろ!ごら あ!!」

「うげーっ!」

「なあ、今の内に、皆に話しておきたいってか、聞いてみたいんけどさ…」

岡島を吊り天井固め（ロメロ・スヘシャル）で極めながら、響が話す。

「「「「「……………」」」」」」

「面白そうじゃん♪」

吉良つち、俺は乗るぜ。」

「確かに面白いな。」

「俺そういうの、密かに好きだぜ!」

「…決まりかな？」

「奴等、こつち見てるしな。」

「全く…吉良君は悪巧みさせたら、カルマ君以上ですね。」

「「「「いーじゃん♪」

「「「「やっちやえ殺つちやえ〜!!」

「吉良、俺も乗る！」

「乗るから、早く放してくらつうぎやーっ!!」

響が持ち掛けた、竹林が言う処の「悪巧み」とやらに、とりあえずバッターボックスに向かい、この場に居なかつた千葉以外、男女全員が賛同。（後で千葉も同調する）

その千葉も、響のホームランの動揺を全く見せない進藤の投球と、野球部の超前進守備の前に散る。

3回表が終わった時点で5対2、E組が3点リードの状況で、その裏、最後の攻防が始まる。



「橋本君…」

「バッターボックスに立とうとする一番バッターに理事長が話し掛ける。」

「『お手本』を見せてあげなさい。」

『おおつとー！一番・橋本君、これはバントの構えだー!!』
理事長・浅野學峯は冷たく微笑む。

見てますか、殺せんせー？

其方に多少のイレギュラーが居るとは云え、小細工を駆使して勝とうとする弱者と、
其れを絶対的な力で容易く捻じ伏せる圧倒的強者…

人は、どちら側になりたいと思えますか？

其れを教えるのが、私の教育ですよ。

ありがとう、殺せんせー。

私の教育に協力してくれて…

お礼に、『善い勝ち方』と云う物を教えてあげましょう。



コンッ

『あーつと、クリーンナップの3番打者・佐竹もバント！

野球部が1回表、E組が繰り出したバント地獄の お返しだ!!

同じ小技なら、野球部の方が当然ながら、遙かに上!』

「うゝむ…バント処理の練習も、しておくべきだったか…」

「ヌル…野球部がE組（われわれ）にバントを仕掛けるのは想定外でしたからね…」
ベンチで顔を暗くする鳥間と殺監督。

『バントのみでノーアウト満塁!』

1 回表のE組の攻撃と、全く同じだ!

しかし、違う点が1つ!

この場面で打席に立つのは…我が校が誇るスーパースター!!

野球部主将、進藤お…一孝あぁーっ!!

野球部、逆転サヨナラのチャアーンス!!』

「俺は…強い…力で捻じ伏せる…」

そして…踏み潰す…俺は強…い…力で…」

テンション最高潮なアナウンスの中、何やらブツブツと譚言の様に言いながら、バツターボックスに入る進藤。

浅野は それを満足気な表情で見送る。

普通なら…野球部が素人相手にバント等、見てる者も納得はしないだろう。

だ・が、君達が先に やった事で、大義名分が出来た。

『お手本を見せる』というね。

小技でも『強い』という印象を与えて、そして確実に勝つ。

殺せんせー、これが正しい強者の勝ち方というヤツですよ？

最終回の『この場面』を演出する為…1回表から彼を洗脳（きょういく）して来た!!

そして終幕（ファイナル）は、バントみたいな小技ではない…。

主役である強者の一振り（スイング）だ!!

「…踏み潰す…踏み潰してやる…杉野!!」

「…!!」

理事長の魔改造を施され、鬼神の如きな形相の進藤が、杉野を睨む。

『さくあ、これで終わるか、終わってしまうのか？』

進藤と杉野、元々は野球部で競い合った2人ですが、今の2人の立場は真逆！

片や野球部主将のスーパースター！

そして片や、ENDのE組!!

ピッチャー杉野、絶体絶命のピンチ!

今日の運命も、E組らしく、敗北かあ?』

「カ〜ル〜マ君?」

アナウンスが好き勝手言っている中、カルマの足元に、再び殺監督が顔を出す。

「…踏むよ?」

「にゆや?ちよつと待って!」

さっきの挑発が活きる時ですよ?」

「…!!…成る程ね。」

殺監督の意図を理解したカルマは

「吉良つち〜、監督から伝令〜。」

「…!!マジかよ!?!(笑)」

響に殺監督の作戦を伝えた。

『…この前進守備は!?!』

カルマと響が、先の野球部に負けず劣らずな、バッターの目の前まで近付く前進守備を執る。

「明らかにバッターの集中を乱す位置で守ってるって、自覚はあるけどさ〜♪」

「さつき、そっちがやった時、審判はスルーだったよな?」

「文句は無いよね、理・事・長・先・生？」

「……………」（笑）」

この2人の挑発に浅野は苦笑。

成る程ね…

さつき、赤羽君が私にクレームを漬けたのは、この同じ行為をやり返しても、誰にも文句を言わせない布石でしたか…

確かに明確に打撃妨害と見なされるのは、守備側がバットに触れた時のみ…。

前進守備が集中を乱す妨害行為と見なすかは、審判の裁量だが、さつきのクレームを認めなかった以上、今回も黙認するしかない。

それは、見学の生徒達も然り。

全く、よく考えたよ…小賢しい程にね!!

「御自由に。」

選ばれた者はE組（きみたち）と違い、守備位置で心を乱さない。」

文句を言いたくても言えない、審判や見学者達が そんな顔をしている中、浅野學峯は涼しげな顔で言つてのける。

無駄だよ…

その進藤一孝の集中力は、私の『教育』で極限まで高まっている。君達の小細工は打ち砕かれ、弱者を更に醜く曝すだけだよ？

「へく？言つたねえ？」

…顔から そんな思考を読み取ったか、カルマは悪戯めいた顔で、

「じゃあ、遠慮なく♪」

「「「なっ…!?!」」」

『ち、近い!!』

響と共に、バッターボックスから一步の距離まで歩み寄った。

『ぜ…前進処か、これはゼロ距離守備!!』

振れば確実にバットが当たる距離で守っています!?!』

「…はいいい？」

思わず目が、点になってしまふ進藤。

「ははは…進藤、悪い…。」

そんな位置で守られた日にや、流石に どんなに集中しても冷めちゃうわな…」

これには杉野も苦笑い。

「気にせず打ちなよ、スーパースター♪」

「ピッチャーの球は邪魔しないぜ？」

「し、正気か、お前等？」

「ふふ…下らんハツタリだよ、進藤君。」

集中力が失せた進藤に浅野が声を掛ける。

「構わずバットを振りなさい。」

例え骨が砕けても、打撃妨害を取られるのは、彼等の方だ。」

「ま、マジかよ、あの理事長!？」

背後から禍々しい【何か】を沸き出させながらの理事長の冷徹な発言に、進藤はやや引き気味となる。

そして、杉野の第1球。

（巫山戯た真似しやがって…）

大きく振ってビビらせりや、退くに決まってる!!）

ブウン!!

進藤のフルスイング。

しかし、それを響とカルマは殆ど動かず、最小限の動きで躲す。

「す、ストライーク!!」

「ヌルフフフ…」

マツハ20の私への暗殺で鍛えられ上げられた胴体視力!

あの2人の度胸と胴体視力、そして性格の悪さはE組でもトップクラス!!

バットを躲すだけなら、バントよりも簡単ですよお?」

「あは…駄目駄目♪」

そんな遅いスイングじゃあさ♪」

「次は…殺る気で殺ってみろよ?」

動揺する進藤にカルマと響が、更に顔を近づけて言い放つ。

進藤が助けを求めるかの様に、ベンチに居る理事長を見てみると、その顔は「構わないから、殺りなさい」とばかりに微笑んでいる。

(じ、冗談じゃないぞ、殺すとか!?)

理事長もコイツ等も、一体何なんだよ?

俺は この先、高校大学、そしてプロを目指して野球やってんだぞ!

こんな余興じみた試合で、手を汚せる訳がないだろ?

自己責任とか、そーゆー問題じゃないだろうが!!)

進藤は殺し屋でもなければ、戦士でもない。

勝つ気はあるが、殺る気は無い。

あくまでも、只のスポーツマン、選手に過ぎない。

倒せても、殺すのは実行不能。

この時点で進藤は、体は恐怖でガチガチ、頭も真っ白で、理事長の戦略に心身共に、着いていけなくなっていた。

進藤の目が、目の前の8人の野手、そして後ろに座っている捕手の渚、この9人を黒いフード付きのローブを纏った死神と錯覚させる。

その死神（すぎの）が、まるで自分の命を刈り取るかの様に投げた球を、

「う……うわあああ……」

コンッ

『な……進藤君、腰が引けたスイングう!?』

ガチガチの身体で辛うじてバットに当てた打球は、ホームベースの上をバウンド、

ガシ…

「渚!!」

「!」

その球を響が素手でキャッチし、そのまま捕手の渚に渡す。

渚がボールを受けたミットでホームベースをタッチ、

「三塁ランナー、アウト!」

「渚君、サード!!」

すかさず渚がサード・磯貝に送球。

「しまっ…」

余りの事態に固まっていた二塁ランナーが慌ててダッシュするが、既に遅く、

「二塁ランナー、アウト！」

「磯貝、一塁（こっち）だ！」

進藤、へたり込んでるから、焦らなくて良いぞ!!」

ファーストの菅谷が、捕球の構えを取り、叫ぶ。

「了解!!」

ヒュッ…パシィッ!

「うおっ!!」

磯貝の送球は、構えた菅谷のグラブ目掛け、レーザービームの如く一直線。

全く体を動かしていない菅谷のグラブの中に、綺麗にスッポリ収まった。

受けた菅谷が吃驚である。

「凄い! 磯貝君のボールが凄過ぎる!!」

「うっとり?」

「カッコ良い…かも…」

「ぴゅーん!…だよ! ぴゅーん!!」

その送球に、「イケメンだ!!」……になっちゃおうE組女子（…及び、一部本校舎女生徒）。
そして、その光景を見て、

「……誰が、あんなにカッコ良く決めろと言った、このイケメン!!」「……」
憤慨するE組男子（笑）。

『ととと……トリプルプレー!?!?!』

げ、ゲームセット……!!

ななな……何と！E組が、E組が野球部に勝ってしまったあ!!』

「きゃー、やった!!」

「勝ったー!!」

「男子かつけー!!」

大はしやぎのE組女子。



「ちっ……」

影で試合を見ていた寺坂達は、複雑な表情を浮かべ、その場を立ち去る。

「……………」

そして、監督代行を勤めた、理事長・浅野學峯も、無言でその席を立つ。

不満、文句たらたらでグラウンドを後にする生徒達。
彼等は気づいてはいない。

試合の裏の…2人の教育者の数々の戦略、駆け引きの
ぶつかり合いがあつた事を。

「…皆、教室に帰ろう。」

グラウンドの真ん中で男女問わず、ハイタッチを交わすE組の生徒達の様を面白くな
さげに見ていた、A組・浅野学秀の一言で、その場から去ろうとするA組の生徒達。

「おい、待てよ、A組ー、浅野お!!」

「!？」

その浅野達を響が呼び止めた。

生徒の立場で、学校行事を色々と取り仕切る生徒会長・浅野学秀が、勝手な真似は出来ないと言おうとした時、口を挟む男。

梶ヶ丘学園理事長・浅野学峯である。

「いや、実に良いじゃないか、事実上の優勝決定戦。」

そうは思わないのかい、浅野『君』？」

「く……」

「吉良君、試合は決定だ。」

君は皆に伝えてきなさい。」

「……っす。」

理事長の言葉に響は返事をする、クラスメートの元に戻って行った。

「何のつもりですか、『理事長先生』？」

「浅野『君』、見なさい、この場の生徒達の盛り上がり。解らないのかい？」

彼等は皆、君達に、いや、君に期待しているのだよ？」

「……………」

「君ならE組を叩きのめしてくれる……」

彼等は そう思っているんだ。

君はE組勝利という望んでいない結末が招いた、皆のフラストレーションを解消させ

ようと云う気は無いのかね？

『A組』の生徒として、そして、生徒会長として？」

「…分かりました。」

浅野学秀が そう応えようと、理事長は会心の笑顔で、

「そうか！判ってくれたか！

ならば、私が監督とし

「結構です!!」

僕達だけで、彼等を倒します!!」

自ら監督を買って出ようとするのを、拒まれてしまう。

「…ほお？君に出来るのかい？」

「やってみせます。」

「よし、分かった、君に任せよう！」

しかし、この事だけは、忘れずに覚えていてくれよ？

E組は常に『ENDのE組』でなくてはならないという事を…。

解ってるよね…浅野『君』？」

最初から、監督役を拒まれるのは解っていた様な顔をしている理事長は、A組のトツ
プに改めて、E組の意義を伝え、今度こそ、グラウンドから去って行く。



「プレイボール！」

審判の号令で試合開始。

「よし、1番は僕が行こう。」

「浅野君…」

いきなり流れを呼び込む心算か、トーナメントでは4番を打っていた浅野が先頭バッターとして打席に着く。

「いきなり浅野かよ…」

カキン!!

「!!」

まるで当たり前の如く、杉野の初球をライト前に運ぶ浅野。

うおおおおおおおおおおお!!

いきなりノーアウトで出塁したランナーに、今度こそはE組が無残に敗れる、そんな場面が見たい見学者達が期待を込めて、沸き上る。

A組なら、浅野なら、何とかしてくれる…

しかし、

「吉良くつちー！」

「おうー…三村!!」

「うっしやー！」

続く2番バッター・小山を杉野がショートゴロに仕留め、カルマから響、そしてこの試合、菅谷に代わり、ファーストに入った三村に繋いでダブルプレーとする。

更には

「ナイスピッチ、杉野！」

「サンキュー！」

3番バッター・榊原を、杉野が変化球を駆使して三球三振に打ち取り、A組の初回の攻撃を、あつと言う間に終わらせる。

そして その裏…

「き、君、キチンと立ちたまえ！」

「はああ?! ストライクゾーンにボールが来るなら、ちゃんと構えますよ！」

バット持つてるだけマシでしょうが!!」

「うぐ…」

木村、岡島、杉野が次いで出塁、野球部との試合の実績で、皆に4番を推された響が

打席に入るが、前の試合を見たA組は満塁にも拘わらず、キャッチャーがホームベースから大きく離れての敬遠策を執る。

それに対し響は、抗議の意味か、バッターボックスに座り込み、審判から注意を受けると、正論な？反論で黙らせ、結果、1塁へ進む。

押し出しにより、E組が先取点を得た。

「どうなつてんだよ……」

「A組、何やつてんだよ……？」

「相手はE組だぜ？」

響の敬遠押し出しによる先取点、それに観客席がどよめく中、E組の猛攻は止まる事はない。

続く磯貝、カルマ、前原、三村、渚……

スタメン9人全員が次々とヒットやファールボールで出塁、打者一巡する。

そして1回裏、未だノーアウト満塁でスコアは0―9、E組がコールド勝ちに王手を掛けた時点で、4番・響に打順が廻つて来た。

「吉良君、美味しい〜!!」

「さて、A組は どう出る？」

次は敬遠でも、そのまま押し出しでコールドだぜ？」

「見てみなよ、見学の連中の盛り『下』がり様…まるで、お通夜だねえ?♪」
「『『南く無く♪(笑)』』』』」

すつかり、勝ちムードなE組ベンチ。

しかし響は、

「よし、竹林、代打だ。」

「え?」

「『ええ?』」

「『『えええ〜っ!?!』』」

指名された竹林本人を含め、皆が驚いた。

「吉良君、何で僕が…」

しかも、こんな大事な場面で…?」

「いや、竹林だけ まだ、全然に試合に出てないだろ?」

あの鬼特訓、一緒に受けたんだ、1打席くらい出とくべきだろ?」

「吉良…」

「吉良君…」

「…そうだな、吉良君の言う通りだ。」

竹林君、君は いつも最後には倒れていたが、それでも練習中は ちゃんと喰い付い

ていたんだ、その成果を見せてきなさい。」

「烏間先生……」

響の言葉に、烏間が更に後押しする。

「竹林、決めてこいよ！」

「竹ちん、頑張れ〜！」

「心配するな、別にアウトでも、誰も文句言わねーよ。」

例えトリプルでも、次、杉野が抑え、その後に1点獲ったら終わりなんだ。」

「吉良君も言ったろ？」

あの特訓を受けた僕達、皆が試合に参加するのに、それに意味があるんだよ。」

「そーそー♪寺坂（アイツ）等除いてね♪」

アイツ等、今頃絶対に「俺も出てれば良かった」みたいな、悔しそうな顔してるよ〜

「?♪」

「皆……」

烏間に続き、クラスメートの後押しにも、まだ自分が出てても良いのか?…と、躊躇う

竹林。

「あゝ、もう!!」

そんな煮え切らない竹林に、中村がスマホを差し出す。

「竹林さん、頑張って下さい♪」

その画面には、優しい笑顔でエールを送る、メイドさんな美少女が居た。

「……………」

それを見て黙り込む竹林。

「ふっ…中村さんも律も、そんな見え見えな安い手で、僕が乗るとでも思っているのかい？」

「竹林…?」

「良いよ、敢えて、敢えてだよ？」

その手に乗ってやるよ！

吉良君、バットとヘルメットを！

さあ、はりーあつぷ!!」

「お…応う…」

(((((コ…コイツ、ちよれー!!))))(((((

~~~~~

「良いか、竹林…向こうは絶対、お前はバントで来ると思っているだろう。」

…だから、思いっきり振ってやれ！」

「ん。分かったよ。」



「吉良（あのヤロー）が出ないのは、ラッキーと思わないとな。」

「アイツは外野に飛ばす力は持ってない。」

三振狙いでも良いが、恐らくヤツはバントを仕掛けてくるだろう。

此処は確実にダブルプレー、出来ればトリプルで片付けよう。」

「分かったよ、浅野。」

ピッチャーは浅野の言葉に頷くと、第1球を投げる。

「ストライク!!」

僅かに外側に外れた様な気もするが、審判はストライクをコール。

しかし竹林は「今更でしょ?」と抗議の素振りもせず、

「うん、殺投手の、妄想・楯木の球よりは、全然遅い。」

ボールをよく見ていけば、打てる!」

改めてバットを強く握り締め、目の前のピッチャーに集中。

続く第2球、

「今だっ!!」

竹林はバットを力の限り、フルスイングする。

コン…

しかし、元々の運動神経の無さが災いしてか、振り遅れた打球は、セカンドの真上に

高く打ち上げてしまう。

「クッソ!!」

珍しく、その感情を表に出す竹林。

セカンドの榊原がボールをキャッチ、

「ふう、やっとワンナウトか…」

漸く取れた1つのアウトに安堵の溜め息を零した。その時、

「蓮! ホームだっ!!」

「ええ?」

ファーストの浅野が榊原に向かって叫ぶが、既に遅く、

「げ…ゲームセット!!」

10-0、E組のコールド勝ち!

『ななな…何と云う事だー!!』

セカンド榊原がフライを捕球したと同時に、3塁ランナー木村がタッチアップ!

10点目が入り、コールドが成立してしまったー!!』

「え…?」

何が起きたか、分かってない竹林に

ボン…

「ナイス犠打！」

木村は肩を叩き、ニカッと笑いかける。

「「「うおおお！竹林い！！」」」

「うわあっ!？」

同時に、ベンチのE組男子達が走り込み、

「このヤロー、マジに やりやがった！」

「おま、何を呆けてんだよ？」

お前のバットが試合を決めたんだぞ？」

ベシベシベシベシパンパンパン：「ちよつと、痛いよ!？」

先の響同様に、チームメイトから手荒い歓迎を受ける竹林。

「「「竹林を舐め過ぎて、油断するから、足元掬われるんだよ、バーカ!!」」」

岡島、前原、三村、菅谷がA組、そして本校舎の生徒達を挑発し、

「たくけくばくやくしく!!」

響が竹林をヘッドロックに捕らえる。

「痛い痛い、吉良君、痛いってば!!」

しかし その顔は、どう見ても笑っている様にしか見えなかった。

## 球技大会……それからの時間

球技大会は無事に？終わった。

その日の放課後、教室の後ろ側の隅で、拳銃を持った少女達に囲まれて、正座している男が3人。

「……さて、どうして、こーゆー状況になったかは、理解してるわよね？」

片岡メグが、問い詰める。

「「いえ……全然……。」」

どうして こうなった……？

響はマジに考えている。

隣で一緒に正座している、チャラ男とエロ坊主は どーせまた、女子に対して何かやらかしたのだろうと、想像は難しくない。

が、少なくとも自分は女子を敵に回すような言動には、全く心当たりがない心算である。

「ふーん、じゃ、コレを聞いても、同じ事が言えるかしら？……律！」

「はー！」





は、気のせいだろう。

「…成る程、あのく片岡さん？」

俺はコイツ等と違つて、純粹に反省会やら試合観戦な意味合いで、映像記録を頼んだだけなんだけど？」

「ふん？ 律、どーなの？」

「はい、吉良つちさんは確かに、特に誰かを…とか、体の何処を重点的に…とかは言つてませんでした。」

「ん、そうね、吉良君は無罪かな？」

「まあ、勘弁してやるか？」

「…許してやらない事もない。」

「よし、吉良つちは解放してやろう。」

「何？ 冤罪なのに、その言い方？」

結局、響に限つては、他意は無かつたとされ、その場から解放された。

「吉良ー!!この裏切り者ー!!」

残されたチャラ男とエロ坊主が、文句を浴びせるが、

「いや、お前等は自業自得だろ？」

寧ろ、俺が お前等の とぼつちり受けた感あるし？」

「うう…」

そう言うのと、微妙に痺れた足で教室の扉の前まで行き、ガラ…

扉を開けると、残された男達に振り返り、

「何よりも俺、彼女いるし♪（笑）」

一言、言い残し、鳥間指導の放課後訓練に合流すべく、教室を去って行った。

「ちつくしよー!!リア充、爆裂しろ!!」

ジャキ…

「「言いたい事は、言い終わった?」」

「ひええええうっ!!」

その後、この2人には女子達による、煩惱退散の為の矯正が施された。

因みに後日、律が記録していた女子バスケの試合をクラスの生徒殆ど全員で見た際、何人かの男子が「おっぱいパねえー!!」とか言っつてしまい、その日の放課後、また女子達に正座させられ、改めて矯正される事になるのだが、その中に響が ちゃっかりと入っていたのは、また別の話である。



響が女子のOHANASHIから解放された後、前原と岡島がべられていた頃の本校

舎・理事長室。

「やはり、私が指揮を執った方が善いのではなかったのかい、浅野『君』？」

其処には理事長・浅野學峯に呼び出された、3—Aの實質上トップにして生徒会長、そして理事長の息子である浅野学秀が居た。

ツカツカツカ：

「まあ、あの試合を認めた私にも落ち度があると言えば、あるかも知れないけどね……

ま・さ・か、一回コールドになるとは思ってもみなかつたよ？」

「……………っ!!」

玉座と言つても良いような、高級な役員用チェアを立ち、呼び出した生徒の目の前に立つと身を低く屈め、下から獲物を狙う爬虫類の様な目で冷たく言い放つ理事長。

「……申し訳……ありません……。」

「E組が本校舎の生徒に……しかもトップであるA組に圧勝……。」

これで彼等は更なる自信を付け、本校舎の生徒達も、徐々にだが彼等への認識を変えていく。

それだけなら まだ良いが、END（終わり）の象徴であるE組に対して劣等感を感じ、それはイコール、自身の自信……別に洒落てはいないよ？

自信を失う事に繋がりがかねない。

絶対に在つてはならない事だ。

さ・て……この失態は、如何にして清算する心算かい？あ・さ・の・『君』？」

その光景、会話は教育者と生徒ではなく、ましてや親子の其れでもない。

まるで、悪の組織の首領と、策を練つた挙げ句に策に溺れ、主役（ヒーロー）を打ち損じた敵幹部の様である。

「……次の期末テストで結果を出します。

A組全員で、E組よりも……正直、吉良や赤羽に対抗出来るのは自分だけでしょうが、僕が2人を押し退けた上で総合で、A組がE組よりも上位に立ちます。」

「君に出来るのかい？」

……と言うより、総合云々な勝つて当たり前な話でなく、今、君が名を挙げた2人に、何人の生徒が上に立てるかが重要だと思ふけどね？

極端な話、E組の最低順位の生徒より、皆が上位に着くなんて、当然な話だ。

逆に、E組の最低順位者より下の人間がA組に居たりしたら、それは問題だよね？

それこそ、A組最低順位の生徒より上に、E組の生徒が何人居る事になるか……

其処じゃないかい？

せめて、件の2人以外は、全員が全員を抑え付けて欲しいよね。」

「僕が、皆を底上げしてみせます。」

「ふふ……期待してるよ、浅野『君』。」

今回は君の御手並み拝見の為、私は余計な介入は敢えて、しないでおくとするよ。」

「介入……？……今回？」

浅野学秀が過敏に反応するが、

「おっと、口が滑ったか。」

でも、君が知る必要は無い事だよ。

もう、退つて良いよ、浅野『君』。」

期末テスト、期待してるよ……。」

「……………!!」

再び、恐らくは特注で作られた高級な役員用デスクに着いた理事長・浅野學峯は冷たく応えるのだった。

「……失礼します!!」

浅野学秀は理事長室を退室する。

そして、

「お待たせしましたね、高東先生……」

「……………は、はい……」

理事長は浅野学秀と一緒に呼び出していた、女子バスケット部の顧問教諭とのOHANA

S H I を始めるのだった。



「ん？速水さん…？」

それは、放課後の特訓が終わり、下山している時の事。

倉橋、矢田と一緒に歩いている速水、そして その少し後ろを渚、カルマ、杉野と歩いていた響がある事に気づき、言った台詞。

「速水さん、髪型変えてる？」

響の此の台詞に、

「あっ!!」

「本当だ〜♪」

「気付かなかった…」

すぐ後ろを歩いていて、今頃、気付いたのかと、女子2人に突っ込まれる男子4人。

昨日までは、軽くウエーブの掛かっていた髪を下ろしていた速水凜香が、その髪を二つ括りに結っていた。

曰わく、〇〇―〇と被るのが、何となく嫌だとか。

本人が聞いたら、「どーゆー意味だ!!」と、額から血管剥き出しで、目を飛び出して突っ込んでしまいそんな理由である。







何故、彼処までして勝ちに行つた？

結果を出して、俺達より強いと言いたかつたのか？」

真剣な表情の進藤の問い掛けに、杉野は少し困つた顔で、

「ん、渚は、俺の変化球の練習に、何時も付き合つてくれた。

カルマや吉良の反射神経…皆のバントの上達ぶりとか、凄かつたら？

吉良のバツティングも。」

「杉野…？」

「でもさ、結果出さなきゃ、上手く其れが伝わらない。

何より、E組（ウチ）は負けず嫌いばつかで、負け前提で試合に臨む様な奴は、男子

も女子も居なくてさ…（一部除いて）

まあ、何が言いたいかつてと要するに…」

其処まで言うとは、杉野は照れくさい顔で、

「ちよつとだけ、自慢したかつたんだ。

昔のチームメイトに、今の俺のクラスメートの事をな。」

笑いながら話すのだった。

「ふう…それだけの為かよ…」

まあ、確かに大した奴等だったよ。」

そんな杉野に、少しだけ、呆れるように笑いながら進藤は応えた。

「…でも、分かってるさ、野球選手としては、お前のが俺より全然強え。

これで、俺がお前に勝ったなんて、これぼっちも思ってたねーよ。」

「ふっ…」

それを聞いたら進藤は、顔を引き締めながらも不敵に笑い、

「杉野、高校で決着だ！」

「応よ!!」

2人はフェンス越しに拳を合わせ、約束しあうのだった。

そして、練習に戻る進藤の後ろ姿を見ながら、杉野は小さく呟く。

「高校までに、地球が在ればな…」

## スイーツの時間

「せえいやああっ!!」

シユツ

響の正拳突きが烏間に放たれるが

「甘いー!」

烏間は難なく躲す。

「おおう!」

「あれも躲すかー!!」

「烏間先生、マジ人外!」

体育の時間、2人の模擬戦を見守る生徒達も、思わず唸る。

対せんせー繊維で編まれた、『対せんせーグローブ』を両手に嵌めた響が、再び構えを取る。

「ならば!!うっつりやつ!」

左右の正拳を弾幕の如く連打する響。

だが、これも烏間は涼しい顔で、全てを紙一重で捌いていく。

ニタア…

「!?」

ピシッ

「!!」

響が意味深な笑みを浮かべると同時に、烏間の肩口に拳でなく、手刀による突きがヒットした。

今までの『拳』の攻撃はフェイク…

まだまだの余裕からか、その全てをワザとギリギリで躲していた烏間は、不意に拳から手刀に切り替えた響の攻撃を、約10センチほんの指の長さ分ではあるが、『武器』のリーチが延びた分、避けきる事が出来なかった。

「うっしやあつ!!」

「「「「おおうっ!!」」」」

会心のガッツポーズを取る響と大歓声を上げるE組生徒達。

「ふく、やっぱ俺、ナイフより徒手（コレ）だな。」

特注のグローブを見ながら呟く響。

「良し！吉良君は加点3点!!次っ！」

「はいー！」

その掛け声に今度は、磯貝と前原が対せんせーナイフを手にして、烏間に向かっていった。



「吉良、やったな！」

「まあな…でも、次は通じない。」

「まだまだ、こんなんじや駄目だ。」

卒業までに、（小宇宙無しで）絶対に あの人に勝つてやる!!」

「吉良…お前、目標違つてね？」

この杉野の問い掛けに

「烏間先生に勝つ事だろ？」

「迷わず惑わず答える響。」

「「「「「いやいや、目標（ターゲット）、

あくまでもアレだから!!」「「「「「」

「又ルッフッフッフ…」

そんな響に対し、E組一同は砂場でサグラダ・ファミリアを完成させている、黄色いタコを指差し突つ込むのだった。



「!!」

バシっ!!

「うわああああああっ!!」

「な、渚!」

杉野と2人掛かりで烏間に攻め込んでいた渚が、大きく弾き飛ばされた。

「あ痛たたたた…」

小柄軽量故に、派手に地面を転がった渚は頭をさすりながら起き上がる。

不意に感じた、得体の知れない殺気?の様な物…

それを感じ、反射的に自身に迫る攻撃を、思わず普段より強く払いのけた烏間。

「…大丈夫か?」

「すまない、少し強く防ぎ過ぎた。」

「あ、平気です。」

少しやり過ぎたかと思ひ、やや慌てて駆けつけた烏間に、渚は問題無しをアピール。

「バーカ、ちゃんと見てないからだよ。」

「うう〜…」

笑いながら話す杉野に、凹む渚。

「……………」

しかし、その様を最初から砂場から見ていた響と担任教師は、はつきりと感じ取っていた。

鳥間でさえ、ほんの違和感程度にしか気付かなかつた、渚の中の「何か」を。

「隙あり！」

「ヌルフ！甘いです!!」

そんな響は殺せんせーの注意が渚に向けられた隙を突き、砂の大聖堂を踏み潰そうと足を出す、殺せんせーも これを死守。

以前の大阪城の悲劇を繰り返す心算は微塵も無かつた。

…が、

ドドドドド…バサア…

「にゅやーっ!!」

突如、無数の対せんせーナイフが大聖堂の真上から降り注ぎ、そのスペインの象徴を模した砂のオブジェは瓦解する。

ナイフを放つたのはカルマ。

皆から対せんせーナイフを借り受け、腕いっぱい抱えたナイフを、サグラダ・ファミリアの真上に放り投げたのだつた。

(うつわく、スピカねーちゃんのアストライア、思い出したよろー！)

前世(むかし)、実の姉の様に慕っていた黄金聖闘士が得意としていた、広域殲滅を前提とした技。

パチイン…

それを思い出しながら、響はナイフを放り投げたカルマとハイタッチを交す。

「あ…ああああ…」

数秒前までは大聖堂だった砂の山を、まるでこの世の終わりが来たかの様な絶望の眼差しで見つめる殺せんせー。

「……非っ道え……これは流石に非道過ぎる……!!」

そのorzっぷり、余りのショックで担任教師が自殺するのではないかと、本気で心配する生徒達。

まあ、それはイコール、地球が救われるのだから、寧ろウエルカムなのだが。

キーンコーンコーンコーン…

「よし、今日の体育は終了!」

「……」

「……」

「マジに人間じゃねーぜ、あの先生も!」







りだ。

2人掛かりなら、俺にナイフを当てる回数が増えてきた。

女子では、元体操部で意表を突いた動きが出来る岡野さんと、男子並みの体格（リーチ）と運動量を持つ片岡さん。

総合的に能力が高いのは吉良君と赤羽君。

吉良君は空手の有段者なだけはある、特注のグローブを嵌めた徒手での攻撃は、決して侮れないのが分かった。

残念なのは彼とコンビを組める力量の生徒が居ない事だ。

赤羽君もクラス全体的には、頭一つ飛び抜けているが、それでも吉良君と比べると見劣りしてしまう。

もしも彼と同等な生徒が　もう1人居て、2人掛かりで仕掛けられたら、正直、常に勝てるかどうか分からない。

そして潮田君。

小柄故に多少、スピードがあるだけで、御世辞にも特化した身体技能がある訳でもない温厚な生徒。

…な筈だが、授業中に感じた違和が気のせいと思えないのは何故だ？

あの時に感じた、得体の知れない気配、感覚は、一体何だったのだろうか…？



「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

秘密兵器だった暗殺転校生も、活かし切れていない。

暗殺者の手引きと生徒達の訓練……

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「……だ・が、現状はどうだ？」

「よっ、鳥間！久しぶりだな！」

翌日、鳥間が教員室の扉を開くと、そこにはジャージを着た、やや太り気味な男がここにかな顔で話し掛けてきた。

「鷹岡……お前だったのか……!？」



その日の4時限目の体育の授業が終わった時、校庭に、長身でやや立派な腹周りをした男が沢山の荷物を抱えてやってきた。

「鷹岡明だ!!」

ま、今の説明の様に、今日から鳥間のサポートとして此処で働く事になった!

皆、よろしくな!」

その新任教師は にこやかにE組の生徒達に話し掛けた。

それを鳥間は複雑な表情で見ている。

どさ…

鷹岡は早速、持ってきた荷物を開くと

「嘘! 『ラ・マヒストラル』のプリン〜!!」

それを見た瞬間に茅野カエデの両目が?ハートマークになり、

「こっちは『モンキキ』のモンブラン!」

「見て、こっちは…」

数々のスイーツに、他の女生徒達も目を輝かす。

「有名な店なの?」

「うん、それなりにね…」

スイーツの店やブランド等は、余り良く知らない響が渚に聞いていた。

「ほれ、男子（おまえら）も、こつち来て食え食え！」

キヤツキヤ言っている女子をやや呆れ顔で見っていた男子生徒を、笑いながら手招きする鷹岡。

「良いんすか？これって高いっしょ？」

「おう、俺の財布を喰らい尽くすつもりで遠慮無く食え！」

前原の言葉に鷹岡は、やや照れながら応える。

「モノで釣つてるとか思わないでくれよ？」

お前達と早く仲良くなりたいだけだ。」

そう言うのと鷹岡は地面に腰を降ろして胡座を掻き、

「それには…やっぱ皆で囲んでメシ食うのが一番だろ？」

自らもケーキを食べながら、言葉が続けた。

「…に、しても鷹岡先生、よくこんなスイーツのブランドを知ってますね？」

「まあ…ぶつちやけ砂糖ラブなんだよ。」

倉橋の質問に対し、顔を赤らめててへペろで答える鷹岡に、

「デカい図体して可愛いな…」

そう言ったのは中村。

そして

「おう、殺せんせーも食え！」

ま、いずれは殺るけどな！はっはっは!!」

そう言つて、涎を垂らして触手（ゆび）を咥え、その光景を羨ましそうに見ていた黄色いタコにも、鷹岡はケーキを渡す。

「同じ同僚なのに、烏間先生とは随分違うツスね。」

「何だか近所の おいちゃんみたい。」

「おいちゃん？ははは！良いじゃないか！」

でも、どーせなら父ちゃんと呼べ！」

同じ教室で同じ目標に進み歩んでいるんだ、俺達は家族同然だろ？」

がしっ…

そう言うのと鷹岡は笑いながら、近くに座っていた杉野と神崎の肩に手を回し抱き寄せ

る。  
その際に一瞬だが、杉野の顔が照れながらも曇ったのは、また別の話。  
「…ところで、お前は食べないのか？」

美味いぞ？」

「え？俺？」



鷹岡はスポーツドリンクしか手にしていない、響に声を掛ける。

「いや、すいません、俺、ケーキとか甘い物は、ちよつと……」

人差し指で こめかみをポリポリと掻きながら、若干 罰が悪そうな顔をして響は答えた。

「へへ、吉良君、甘いのがダメなんだ？」

「そう言えば吉良君で、いっつもコーヒーマもブラックだよな？」

「或いはゴーヤ・オレ。」

「京都の時も、皆で甘いコーヒーマ飲んでた時も、一人だけ抹茶だったし。」

「まあ……な……」

気まずそうな顔になる響。

「きーちゃん、何か理由でもあるの？」

昔、ケーキを一杯食べ過ぎて、お腹壊したとか？」

「……………」

更に気まずい顔になる響。

「吉良……だったか？」

これはもう、素直に何があつたか言う空気じゃないか？

まあ、無理にとは言わんがな？」

鷹岡が にこやかに問い詰める。

「はあ……実は……」

やれやれな溜め息を零し、響は言うのだった。

「実は地元（あっち）に居る彼女がパテシエ志望でさ、中1ん時に、一度に大量の手作りケーキを ドーン！と出されてな……いや、美味しいのは美味かったけどね？」

ただ、マジに量が多すぎて、それ以来、ケーキとかクリームとか、甘い物は……」

「……………」

それを聞き、黙り込む一同。

そして、

「……おい皆、こういう奴には こういう時、何て言えば良いか、知ってるか？」

「はい、知ってます。」

鷹岡の問い掛けに、岡島が血の涙を流しながら、代表して答えた。

「じゃ、いくぞ、セーのっ!!」

『『『リア充、爆裂しろ!!』』』』



そんな様子を校舎の中から見ている鳥間に園川が話し掛ける。

「…本部長からの通達です。

烏間さんは今後、外部からの暗殺者の手引きに専念して欲しいと…

生徒の訓練は、全て鷹岡さんに一任させるとの事です。」

「!!」

不安気な顔をして、園川は話し続ける。

「同じ防衛省の者としては、生徒達が心配です。

あの人は…極めて危険な異常者ですから…」



ガラ…

「烏間、ちよつと良いか?」

「ん?」

その日の放課後の自主訓練を終わらせ、教員室に戻ってきた烏間に、鷹岡が声を掛けてきた。

「お前の訓練（やりかた）な…

3ヶ月で あれじゃ遅過ぎる。

軍隊なら、あのレベル、1ヶ月だぞ?」

明らかに、烏間の指導育成に不満な顔を出して言う鷹岡。

それに対して鳥間は

「職業軍人と一緒にするな。」

彼らは あくまでも、中学生だぞ？

あれ以上は学業に支障が出る。」

…と、反論。

しかし、

「はあく…地球の未来が掛かっているのに、何を悠長な事を…」

鷹岡はオーバーアクションを取りながら、それを否定する。

「いいか鳥間？」

教育に最も必要なのは熱意だ。

教官自らが体当たりで、教え子に熱く接するんだ。

そうすれば、多少なりハードな訓練でも、その熱意に生徒達は応えてくれるもんなんだよ。俺が証明してやる。

楽しみにして待つてろ…。

じゃ、今日は、お疲れ！」

ガラ…

そう言うのと鷹岡は、教員室を出ていった。

「ヌルフフフフ…」

「何ともスイーツな考えの先生ですねぇ？」

「そのスイーツで籠絡されている お前が言うな。」

机一杯に置かれたケーキやプリンを、御機嫌な顔で食べながら発言している殺せんせーに、烏間は呆れ顔で突っ込んだ。

「オホン…まあ、体育に関しては、アナタ方が譲らないので任せています。

ですから、担当の交代に対しては、兎や角は言う心算は有りませんが…

でもね、烏間先生、E組の体育教師は貴方しかいないと思うんですがねぇ？」

それだけ言うと、殺せんせーは窓を開け、

ヒュン…ッ

何処かに飛んで行った。

「…ねえ、カラスマ、アンタは これで良いと思っっているの？」

何かワザとらしいのよ、あの大男。」

「教官としては、俺より遥かに優れていたと聞いている…。」

「カラスマ…」

プロ暗殺者の直感だろうか、やはり鷹岡を怪しく見ているイリーナの指摘にも、烏間は過去の教官としての実績の事を口にするだけだった。



次の日の朝。

「今日から体育、鷹岡先生らしいな。」

「どー思う？」

「私は鳥間先生のが良いな。」

ホームルーム前、教室に入ってきた生徒達は、今日の1時限目からの体育を指導する鷹岡、そして今まで訓練を見ていた鳥間について話していた。

「実際さ、鳥間先生って、何考えてるか分かんないトコあるからな。」

「うーん……いつも厳しい顔してるし、メシや軽い遊びも、誘えば偶に付き合ってくれる程度だし……」

案外、ずっと楽しい訓練かもよ?」

「楽しい……ね……?」

「吉良?」「吉良君?」「きーちゃん?」

響の その懐疑的、否定的な発言に、その場の皆が注目する。

「俺自身が結構、体育会系な環境で育ってきたから言えるけどさ、フレンドリーと楽しい訓練は両立しないと思う。」

大体にして、俺達の訓練の目的、忘れてないか？

バドミントンみたいな遊び感覚前提なヤツなら兎も角、楽しく感じられる訓練とやらで、それが果たせるとは、少なくとも俺は思えないよ。」

「吉良…」「きーちゃん…」

響の言葉に、皆が改めて考え込み、

「大体、楽しい訓練なんかじゃ、何時まで経っても（小宇宙無しで）烏間先生に勝てる気がしねー！」

「……そっちかよ!?」「……」

響の言葉に、皆が盛大に突っ込んだ。



「よーし！皆、揃ってるか？」

「数名サボってます…」

この日の一時限目の体育。

鷹岡の初授業となるが、カルマと寺坂組の3人、計4人の姿は校庭にはなかった。

「仕方ねーな…」

ポツと出の俺に、まだ少し抵抗があるんだろうなあ…まあ、直に馴染むだろう…」

苦笑いする鷹岡。

「ま、いいか！

訓練は ちよつと厳しくなると思うが、終わったら また美味しいモン食わせてやる！  
サボった奴等が授業出てりや良かったって、後悔するくらいにな！」

鷹岡はサムズアツプしながら微笑む。

「そんな事言つて、実は自分が食べたいだけじゃないの？」

中村の問い掛けにも、自分の腹を持ち上げ揺らしながら、

「まーな、御陰様で、この横幅だぜ！！」

どどっ！！

てへぺろ顔で笑いを取りにいく鷹岡。

「ふっ…そりや駄目駄目だ。」

「吉良君…？」

この時、口を挟んだのは響。

「やはり男子たる者、この俺の様に…」

そう言つて、体操着の上着を捲り上げようとした時、

「「いちいち脱がんで良いっ！！」」

ガン！！x3

「あじゃばー！！」





教員室に烏間の部下である鶴田が、焦った表情で入ってきた。

「どうした？」

「これを……」

鶴田は1枚の紙を渡す。

「!!?」

それを見た烏間の表情は、一気に険しくなった。



「さて、早速だが訓練内容の一新に伴い、E組の時間割も少しだけ変更させて貰った。」

「……変更？」

「とりあえず、これを皆に回してくれ。」

そう言つて鷹岡は、時間割が書かれた用紙を配る。

「……………はあ!」

その新しい時間割を見た生徒達は驚きの声を上げる。

新しい時間割：1日10時限、夜9時まで、その1日の授業の7割が体育（訓練）となっていた。

「地球の危機だ。この位、当然だろう？」

理事長にも『全てを任せる』と許可は取つてあるぜ？」

「尻尾を見せたな、狸が…!!」

さも平然と言つてのける鷹岡に、響が小さく呟く。

「このプログラムをこなせば、お前達の能力は飛躍的に向上、間違ひ無く、殺せんせーを殺る事が出来r」「ちよ、待つてくれ、こんなの　どー考えても出来る訳無ーよ!!」

「あ!?!」

この無茶振りな時間割に、前原が待つたを掛けたが、

ズン!!

次の瞬間、前原の腹に鷹岡の膝が突き刺さった。

「ぐは…っ」

「その台詞は違うぞ? 『出来ない』じゃない、『やる』だ。」

表情を崩さず、にこやかに鷹岡は言う。

「前原!」

「大丈夫か!?!」

うずくまつている前原を、磯貝達が抱え起こし、鷹岡を睨みつけるが当の本人は「昨日、言つたる?」

俺達は家族で、俺は父ちゃんだつて。」

それが日常の如く、表情を変える事無く、涼しげに言い放つた。



「ん? どうした?

まだ文句ある奴がいるのか?」

その本性を露わにした、笑う暴君は、最も怯えてる様子の奥村の前に立ち、  
「どーなんだ? 文句あるのか? ん?」

にこやかに問い質す。

「いえ…ありません…」

「そうか! 父ちゃん、嬉しいぞ!!」

ポン…

鷹岡は そう言つて、頭を軽く撫ると、

「お前は?」

次に その隣にいた、神崎有希子の前に立つ。

「!?!」

「!!」

「お前も勿論、父ちゃんに ついてきてくれるよな?」 「はい、あの…」

しかし、膝を震わせながらも神崎は

「私は嫌です。」

「烏間先生の授業を希望します。」

最高の笑顔で言つてのけた。

しかし、これは鷹岡に対しては、悪手以外の何物でもない。

数秒の沈黙の後、暴君の右手が神崎の頬を目掛け、降り注ぐのだった。

バチィッ!!

しかし、その暴力は神崎には届かず。

「」「杉野!!」「」

「」「吉良君!!」「」

杉野が神崎を庇い、自身が身代わりになるかの様に前に立ち塞がり、更に その前に  
出た響が、鷹岡の右手首をガツチリと受け止め、掴んだのだった。

「ナイスだ、杉野!」

「お前もな…サンキュ…」

「成る程…お前達の考えは分かった。」

鷹岡は掴まれている手首を振り払うと、響と杉野を睨み付ける。

「しかし…お前達は まだ、分かってない様だな、俺の授業に「はい」以外は無いんだよ。」

「あ、あ!!」

その言葉に過剰に反応する響。

鷹岡はニヤリと笑い、

「何だ？文句があるなら、拳と拳で語り合うか？」

そう言いながら、ボクシングのファイティングポーズの構えを取る。

「実は父ちゃん、そっちの方が得意だぞ!!」

余裕の笑みを浮かべる鷹岡。

そして、その直後…

「上等だ！殺ってやるぜ！このデヴ!!」

バサア…

「!!!!!!!!!!!!きやあああああああああゝっ（?!）!!」

女子達の悲鳴と歓声と同時に、響の体操着の上着が宙を舞った。

## 才能の時間

「2人共 止めろ!!」

「烏間……」 「烏間先生……」

響と鷹岡、一触即発な中に烏間が駆け付け、割って入った。

「ふん……」 「ちっ……」

残念そうな顔でボクサー流の構えを解く鷹岡と、やはり不服そうに舌打ちし、投げ捨てた体操着を拾って、再び袖を通す響。

「「「ちいいっ……!!」」」

そして その様を見て、凄く残念そうに舌打ちする数名の女子。

「前原君、大丈夫か?」

「へ……平気です……」

鷹岡の膝蹴りを喰った前原を気遣い、

「吉良君、杉野君も、よくやったな。」

「いや……俺は……」

「前原ん時の御陰で、コイツの本性が判ったすから。」



だから、俺も杉野も予め動けたんですよ。」  
神崎を助けに入った2人に、労いの言葉を掛けた。

「どういう心算だ、鷹岡？」

「勿論、手加減はしてるさ。」

俺の大事な家族だ、当然だろ。」

「答えになってない！」

そして烏間は暴力行為について問い質すが、少なくとも、その「暴力」は普通の事だと言わんばかりの鷹岡。

「いいえ。」

そんな鷹岡の肩に、黒い触手が乗る。

「彼等はアナタの家族じゃない。」

「この私の生徒です。」

「「「殺…せん…せー?」」」

、黒い触手は弩怒りの証し。

それを知っている生徒達は、信頼出来る担任の登場にも、安堵より、この後に訪れかねない惨状への不安が勝る。

「ふん、何が文句あるのか、化け物？」

・ 黒色、の事は鷹岡自身も知っている筈。

しかし、それに動じる事も無く、地球をも破壊しうる超生物に平然と言り返す。「体育は教科担当となつた俺に一任されている筈だ。

そ・し・て、今の『罰』も、立派に教育の範疇だ。

短期間で、お前を殺せる暗殺者を育てるんだ、厳しくなるのは当然だろう？

それとも何か？

多少、教育観が違うだけで、貴様に危害も加えてない人間を攻撃する気か？」

自分に間違いは無いと信じて疑わない鷹岡は、自信の表情で殺せんせーに言い寄る。

「攻撃はしませんよ、ただ、私も今は教育者です。

故に、教育者として、あなたを否定するだけです。」

「何だと!？」

「とりあえず、あなたは先程、前原君や、未遂に終わりましたが、神崎さんへの暴力行為を『罰』と言いましたが、あれは罰ではない、只の暴力です。

最近、偶にニュースでも話題になりますが、近頃は子供、保護者、そして教師も、その区別が出来ていない。

自分の立場を勘違いして、生徒を肉体的、または精神的に安易に傷つける教師…

自分の、自分の子供のした事を棚に上げ、やれ暴力だと一方的に騒ぐ子供や保護者…

その何れもが、善悪、罰と暴力の区別が、その加減が付いていません。我々教師は、子供達を教え育てる者、断じて壊す者ではない。

今、私が生徒達を守るという口実で、アナタの言う処の、化け物の力を以てしてこの場でアナタを始末するのは確かに簡単です。

しかし、それは、私もアナタと同類となり、それはアナタを認める事に繋がりますので、そんな真似はしません。

だから、もう一度言います、鷹岡先生。

私は教育者として、あなたを認めない。」

「『殺せんせー』」

いつの間にか、普段の黄色い身体に戻っていた担任教師の言葉を聴き入る生徒達。

そして、

「鷹岡…俺も今回だけは、あくまでも「教育者」として、このタコに同意だ。

お前の生徒を壊しかねない、こんな巫山戯た時間割の様なやり方を認める訳にはいかない。この教室の副担任としてな。

これ以上、生徒達に手荒くする心算なら…そんなに暴れたいなら、俺が相手をしてやる。」

「『『『鳥間先生…』』』』」

自分達の盾になると公言した烏間の言葉に、彼の自分達に対する認識が、自分達が思っていた其れと違っていた事に気付く生徒達。

「ふ……ん……」

完全アウェイな雰囲気でも鷹岡は余裕の表情を崩さない。

寧ろ、この展開を予測し、待っていたかの様だった。

「烏間、これは教育だ。」

だから、暴力で お前とやり合う気は無い。

やるなら、あくまでも教師としてだ。」

「どういう意味だ？」

「お前が、お前の今迄のやり方が正しいと証明すれば良いんだよ。」

そういうと鷹岡は、懐から対せんせーナイフを取り出す。

「そこで、こいつだ。」

「…ナイフ？」

「烏間、お前が育てた中から一人、一推しの生徒を選べ。」

「！」

「そいつが俺と戦い、一太刀でもナイフを当てる事が出来たら…お前の教育が俺より優れていて、正しかったと認めてやる。」

その時は お前に訓練を全て任せ、この学校から出てつてやる！  
男に二言は無い！」

ドン！

自らの胸板を力強く叩きながら、鷹岡は言い切った。

一度でも当てられたら：

生徒達の顔が、一気に明るくなる。

既に俺が出ると言わんばかり、杉野は手首をストレッチし始め、木村、三村はナイフを手に取り構える。

磯貝、前原も、その面構えから「殺る気」が伺える。

そんな雰囲気の中、鷹岡は

「但し勿論、俺が勝てば、その後は一切口出し無用だ。そして武器は……」

用意していた鞆から

「コイツを使う。」

「……ほ、本物？」

「相手が化け物でなくて人間（オレ）なんだ。

使う武器（エモノ）もモノホンじゃないとなあ？」

本物のコマンドナイフを取り出したのだった。

「止せ！彼等は人間（ヒト）を殺す訓練も用意もしていない！！

本物を持った処で、体が竦んで動ける訳がない！」

鳥間の言う通り、生徒達は先程までの、「二太刀なら…」の空気が一変、その顔は動揺し、身体は硬直しているのが一目瞭然だった。

「心配するな。

寸止めでも当たり前にしてやるよ。

俺は素手だし、これ以上無いハンデだろ？」

本物の凶器が放つに恐怖と殺気の前に、生徒達の「殺る気」が完全に喪われたを判つていて、いや、解っているからこそ、初めからそれが狙いな鷹岡は言葉が続ける。

「さあ、一人選べよ鳥間あー！

嫌なら無条件で俺に服従だ！

生徒を見捨てるか、それとも生贄として差し出すか！

どっちも酷い教師だよな、お前は！！

ひゃっはー！！」

ザクツ：

今迄の上辺だけのフレンドリーな笑顔も既に消え失せ、本性であろう、狂った笑顔を表に出した鷹岡は、手にしたナイフを鳥間の足元に投げた。



「皆、先に聞いて欲しい。」

俺は、君達に地球を救う暗殺任務を依頼した側として、君達とはプロ同士だと思っ  
ている。

そしてプロとして君達に払うべき最低限の報酬は、ごく当たり前な中学生としての生  
活を保証すべきだと思っっている。

だから、これから渡す、このナイフを無理に受け取る必要は無い。

その時は、俺が鷹岡に頼んで：「報酬」を維持して貰う様に努力する。」

「……」「鳥間先生……」「……」

「くつくく……土下座でもすりや、考えてやらん事もないぜ、鳥間あ？」

……で、結局、誰を指名するんだ？」

「……………」

鷹岡の台詞に対して鳥間は、1人の生徒の前に立ち、ナイフを差し出した。

「選ばなくてはならないなら君だ、渚君……」

やる気はあるか？」

「……!？」

「「なっ……」」

「「……」」「……」





そりゃ、この場で押し付ける様な発言は間違ってるのは分かるよ!

でも、実力的にカルマ君が居ない今、こういう時は吉良君じゃないの?」

「茅野ちゃん……」

泣きそうな顔で響に話し掛ける茅野。

「でも、烏間先生も本当に、どうして渚なんかを……」

「渚だからさ……」

「……え?」

岡野の疑問に響が応えると、周囲にいた生徒達が驚きの声を上げた。

「もし、烏間先生が渚以外の、他の誰かを指名したら、その時は俺が横槍を入れて名乗り出たさ。」

渚だったから、俺は何も言わなかった。

まっ見てな、勝負は あつとゆうー間だぜ?」

「吉良君……」「吉良つち……」「渚……」

~~~~~

響が茅野達と話している頃、渚は烏間から、この「戦い」のアドバイスを受けていた。「いいか渚君、ナイフを当てるか、寸止めすれば君の勝ち。」

君を素手で制圧すれば鷹岡の勝ち。

それが奴の決めたルールだ。」

「…はい。」

「しかし、この勝負、君と奴の最大の違いは武器の有無じゃない。」

「…？」

「鷹岡にとつて、この勝負は「戦闘」だ。

見せしめが目的だからな。

二度と皆に逆らおうとする気無くす為にも、奴は攻防共に、自分の強さを見せ付ける必要性がある。

奴は君に暫くの間、好きに攻撃させてくるだろう。

無論、本物のナイフを持って身体が竦み、まともに攻撃出来る筈がない…そう考えているだろうからな。

それを踏まえて、自分の戦闘技術を誇示した上で、じわじわと廻りにくるだろう。」

「はい…」



「…つまり、烏間先生が俺を指名しなかったのは きっと その辺さ。

俺なら躊躇無く、マジに殺りかねんとも思ったんだらうよ。」

「何だか、凄く納得出来るんですが…」

鳥間の、渚へのアドバースと同時進行していた響の解説に、少しか引く茅野達。「あのデヴ、マジにチキンな狸だぜ。」

ガチの凶器の重圧に負けて戦意喪失、戦えなくなった素人を潰すのが大好きなだけの、そーゆー奴にしか、マトモに相手が出来ない、DSでメタボなチキンの卑怯者。」
何気に口が悪い響。

「話を戻すぜ、あのヤローが「戦闘」なのに対して、渚は「暗殺」。

別に「俺TSUEEE」をする必要は無く、ただ一回、当てれば良いのさ。」

「其処が、渚君の勝機？」

「いぐざくとりーだぜ、倉橋ちゃん。」

好き勝手出来る、反撃の来ない序盤のターンがチャンスな訳さ。

もう一度言うぜ？

勝負は あつという間に終わるって…。

渚（アイツ）を信じて見てろよ、面白いモンが見れるぜ？」

「吉良君…」「きーちゃん…」「吉良…」

「……………渚…」

~~~~~

「おい、何時迄話し込んでるつもりだ？

何言っても どーせ無駄なんだ、さっさと始めようぜ？」

鳥間の長いアドバイスに、業を煮やした鷹岡が勝負を急かす。

「ああ、今、伝えたい事は伝え終えた！」

そんな鷹岡の催促に鳥間はアドバイスは終わったと言い、

「よし、勝ってこい、渚君!!」

「はいー！」

自分の信じた生徒を、戦地に送り出すのだった。



「さあ来い!!」

もう隠す事無く、いや、隠す必要が無くなった下衆な含み笑いを全面に曝け出した鷹

岡が構える。

それに呼応する様に、渚もナイフの先端を前に向け、構えを取った。

公開処刑…

渚の全ての攻撃を躲けた上で、いたぶり尽くす。

そうする事で、生徒達に圧倒的な暴力（ちから）を見せ付ける事で、生徒全員が自分に恐怖し、自分の訓練（きょういく）に従う様になる。

それが、鷹岡の描いた構図。

対する渚は烏間から聞かされたアドバイスを思い浮かべる。

そうだ：

別に戦って勝たなくても良いんだ：

く殺せば：殺れば、僕の勝ちなんだく

烏間のアドバイスの意味を完全に理解した渚は、鷹岡に「つこり微笑むと、殺意も殺気も無く、普通に：まるで通学路を歩くが如く、普通に近付いた。」

余りの自然体、余りの殺意の無さからか、鷹岡は目の前に戦う相手が近付いているのに、まるで反応が出来ない。

ポス：

そうしている内に、構えていた拳が、渚の胸元に軽く触れた。

0 (ゼロ) 距離。

その瞬間、今迄微笑んでいた渚の顔が、冷たく無表情に豹変。

それと同時に鷹岡の喉元掛け、ナイフを勢い良く振り翳す。

その刃から突然放たれた殺気に触れ、ナイフが喉を切り裂く直前になり、鷹岡は初め

て自分が殺されかけている事に気付く。

焦り、動揺、恐怖…

鷹岡はその殺意の一撃を後ろのめりに辛うじて躲すが、下卑た表情は体勢と一緒に崩れた。

その瞬間、渚は次の動きに入る。

後方に偏っていた身体の重心を、服を引っ張る事で地に転ばせ、更に確実に仕留めんと背後に回り込み…

ピタッ…

「捕まえた…♪」

ナイフの峰を、鷹岡の首筋に押し当てたのだった。

「あッ…が…」

鷹岡は何が起きたのか解らず、半錯乱状態でマトモに声が出せない。

優れた教官は、集団の中の個々の実力を瞬時に見抜くと云う…。

渚を単なる雑魚と見下していた鷹岡と、渚の可能性を見いだした烏間の、教官としての優劣が決まった瞬間でもあった。

この結果に対し、殺せんせーと響のドヤ顔な2人を除き、その場に居る者 全てが、余りの予想外過ぎる出来事に目を見開き、驚きの表情と共に、声が出せないでいた。

それは烏間も例外ではなかった。

何て事だ…

俺の予想を遥かに上回った!!

普通の学校生活では、絶対に発掘される事の無い才能!

自爆テロの時の、殺気を隠して標的(ターゲット)に近づく才能…

あの全校集会が終わった後の時に見せた、殺気で相手を怯ませる才能…

そして、『本番』に物怖じしない才能!!

あの時、俺が訓練で感じた違和感は、やはり気のせいではなかった…?

あれが、もしも訓練でなく、本物の暗殺だったら!?

戦闘でも、ましてや暴力の才能でもない…

あの彼の『暗殺』の才能!!

これは…咲かせても良い才能なのか!?

烏間が新たな迷いを思い浮かべながらの長い沈黙状態の中、渚が不安気に口を開く。

「も、もしかして…

峰打ちはノーカンでしたか?」





渚の元に、生徒達が駆け付ける。

「やったな！渚!!」

「ホツとしたよ、もくっ!」

「全くだ…茅野ちゃんなんてさあ、泣きながら俺に（ガンツ）い、痛いっ!」

「な、泣いてなんかいない!」

モデルMSZ-006専用ライフルを手にして、必死に否定する茅野。

「あ痛たたた…ま、大したヤツだぜ。」

よくもまあ、マジなナイフ、彼処まで派手に振れたよな。」

頭を押さえながら、響は言葉を繋げた。

「うん…烏間先生が渡してくれたナイフだから…かな?」

「渚…?」

「烏間先生の目ってさ…」

「ん?」

「あんなに真っ直ぐ目を見て話してくれる人は、家族にも居ないし…」

立场上、僕等に隠し事も まだ沢山あるだろうし、結果、今回は僕が勝てたけど、何

で僕を選んだのかも、まだ よく解らないし…

けど、烏間先生が渡すナイフなら、信頼出来る気がしたんだ…。」

「……………」。

びしっ！

「痛っ!?!」

渚の頭の上に手刀が落ちた。

「何するの、吉良君!?!」

「いや、カッコ付け過ぎだから?」

「理不尽!!」

「サンキュな、渚!!」

ガシッ

前原が、渚の肩に腕を回し、組み付く。

「今の暗殺、スカッと したわ!!」

「前原君…」

皆が渚に「よくやった」と話し掛けてくる。

「…に、しても、笑顔でナイフ突き付けといて「捕まえた♪」って…渚くんは意外と野獣

(ケモノ)なんだねえ?」

「違…上手くいって安心しただけだよ!」

中村も渚の胸元を肘で突つつきながら、弄(ほめ)る。





心も体も全部残らず　へし折ってやる!!」

顔中に血管を浮き上がらせ、血走った目をした鷹岡が吠える。

「男に二言は無かつたんじゃね?」

「あ、あ!」

そんな状況で、臆する事無く、火にガソリンを注ぐ男が1人。

吉良響。

「確かに、渚は　もう勝てないだろうよ。

でも、一発勝負だった筈だぜ?」

今のがガチだったら油断だろうがマグレだろうが、今迄は首筋ぶしゅーっ!…で終

わってた。

お前に次を謳う資格は無ーよ。

それでも、どーしても納得いかないってのなら、次、第2ラウンドは俺が相手してや

るよ。」

ピクピクピクピク…

「糞餓鬼があ…」

更に顔に血管を浮かべ、怒りの形相となる鷹岡。

「…と、岡島が申しております。」

「をおおおゑる!？」

名を挙げられた生徒が思わず、声を裏返して突っ込んだ。

「何でえ…折角今回は、「岡島の時間」にしてやろうと思つたのに…

ねえ? そうは思わないかい?」

「そんな優しき、要らねー!」

てか、お前は誰に向かつて言っている!？」

「うわ…吉良君がメタつた!」

響と岡島の やり取りに、思わずボブカットの女生徒が口を出す。

ニヨキ…バサツ…

「ま、冗談は さて置き、どーする?」

俺的には、「お情け&泣き(笑)」の第2ラウンド、受けてやっても構わないぜ?

元々は、俺と お前が戦る筈だったしな?」

頭からは角、背中からは蝙蝠の羽根を出す如く、完全に舐めた顔で響は挑発を続け、先程、鷹岡がナイフを取り出した鞆の所まで歩みを進める。

ガサゴソ…

「ふん…御丁寧な事つた…。

何が父ちゃんだ…。





「いや…だから、その親子とか家族とかの設定は、もーいーから…。」

「この前の兄弟設定（イトナ）といい、これは防衛省の趣味なのか？」

「いや、それは断じて違うぞ!!」

響の発言に、烏間が口を挟む。

「もう良いだろうが、餓鬼！

さっさと始めるぞ!!」

「おいおい、其処は「そろそろ始めさせて戴けませんか？」の間違いだろ？」

「…この糞餓鬼があつ!!」

ぶん…!!

「おわつと!!」

安い挑発に乗ってしまった鷹岡の、響目掛けて振り下ろされた大振りな拳による一撃がゴング代わりとなり、第2ラウンドが始まった。

「どうした？早くナイフを構えろ!!」

「別に、決着はナイフの攻撃限定なだけで、こつちの攻撃はナイフオンリーな訳じゃないと解釈したんだけどね？」

響はナイフをホルダーに収納した儘、空手の構えで鷹岡の拳や蹴りを、悉く躲し、

ズガアッ!!

「ごっ…?!」

「俺がナイフを抜く時、それは確実に当てられる隙が出来た時だ。」

鷹岡の顔面狙いの大振りな拳を避け、カウンター気味にリバーブローの左正拳を突き刺す。

コイツ、神崎さんを助けた時にパワーは兎も角、スピードは大した事はないと踏んでいたが…やはり、この程度か？

いざという時は、本当にマジになる心算だったが…

こりゃ小宇宙（コスモ）使うまでもないな！

「拳の攻撃もアリだったら、今ので勝負着いてたな？」

余裕の笑みを浮かべ、更なる挑発をする。

「き…貴様…!!」

「マジナイフ持たせりや、「え？下手すりや死ぬやん？俺、刑務所行きやん!」とか考え、畏縮するとも思ったか？

残念だが俺は、そんなに甘くない。

ついでに言えば、そんな相手にしか喧嘩吹っ掛けられないチキンな卑怯者なんぞ、俺の敵じゃねーよ。」

「な、な、な…」

見事な迄に凶星を射抜かれ、鷹岡は それを顔に出してしまふ。

「この餓鬼いーぶつ殺してやる!!」

完全に頭に血が登った鷹岡は、力任せの大振りな攻撃を、響に向けて繰り出す。完全に冷静に対処され、悉く反撃を受けてしまふ。

「がああああつ!!」

「ふんっ!!」

ドゴツ

鷹岡の攻撃を避け、響は隙だらけの脇腹に、再度リバーブローを見舞う。

残念だったな…俺の場合、仮に最初からナイフ持っていたとしても、臆する事無く、ぶつ刺していたぜ。

烏間先生、あの渚の指名は、そういう意味では正解だったよ（笑）。

何しろ俺は、前世（むかし）、女神（アテナ）が、教皇が、聖域が、そして俺自身が…如何に邪悪認定したと者は云え、数多くの命を文字通り、あの世に送ってきた!

弱いヤツ相手に お遊びな半殺しの経験なだけのお前と、マジに命を…魂を狩ってきた俺としては、戦いに対する殺る気の…本気の度合いが違うんだよ！

見せてやるから受けてみるよ…

さっきの渚以上の…本当に命を奪ってきた者の、本物の本気の殺気をな!!

「うがああつー！」

ガシッ！

またも大振りな拳を振り下ろしてきた腕を、響は両手で掴み、受け止め、

「どっせい!!」

その勢いの儘、即座に自分の身体を反転させ、背負い投げに転じた。

ズシィッ!!

鷹岡の巨体が大きく弧を描き、背中から地面に墜ちる。

「おおう、一本!!」

「凄い！」

「きーちゃん!!」「吉良あ！」

「リアル柔抑く剛を制すだ!!」

響が初めて見せた大技に、湧き上がる生徒達。

ドサ：

間髪入れず、響は馬乗りの大勢に入り、遂に左脇のナイフを抜いた。

その次の瞬間、身体全体から迸る程の強力な殺気を、鷹岡に向けて放ち、

「殺（と）つたあ!!」

「ひええいつ!?!」

それを肌で感じ、恐怖に引き攣り歪んだ顔の眉間目掛けて、突き刺さんとばかりにナイフを勢い良く振り落とすのだった。

グニャ…

「何てな…♪」

しかし、そのナイフは鷹岡の眉間に突き刺さる事はなく、大きく撓る。

響が左脇のホルダーに仕込んでいたナイフは実は、特殊ゴム素材の対せんせーナイフだった。

「」「」「ですよね〜：」「」「」

色々な意味合いで、安心する生徒達。

「ほいよつと…」

そして改めて、右脇のホルダーに収めていた、本物のナイフの峯を、先程からの殺意で、完全に身体が硬直している鷹岡の額の上に乗せた。

そして、鷹岡の腹の上から降りると、

「ウイー————っ!!」

右腕を高々と上げ、ロングホーンサインを決めるのだった。

「「「ウイー————っ!!」」」

それに対し、やはりロングホーンサインで響に応えるE組の面々。

関係ない話だが、実はアレ、『y o u t h (若い)』が正しい発音らしい。

因みに鷹岡は、先程からの響の殺意に触れた恐怖からか、意識はあるが、身体は硬直した儘だった。

何だかんだ言って、流石は黄金聖闘士の本気の殺気、恐るべしと云った処か。

むわ…

「ん…?」

渚の戦いに続き、再び訪れた完全勝利の空気の中、響の鼻が、異様な臭いを嗅ぎ取った。

「……………まぢですか?」

臭いの元を辿ってみると、其処は鷹岡の下腹部。

ズボンから湯気を立ち上がらせ、派手な染みを作り、周辺の地面を濡らしていた。

「「「「うっわあ…」」」」

「『『『『無いわあ…』』』』」

そして それに気付いた生徒達も、次々とドン引いていく。

「うがああああつ!!」

「『『『『?!』』』』」

此処で鷹岡が憤怒の顔を浮かべて立ち上がった。

「巫山戯やがって、この餓鬼!!」

人を散々、挑発しといて冷静さを失わせないと勝てないのか!？」

少なくとも、その挑発に乗った大人の言う台詞ではない。

しかしながら、再び その場に緊張感を齎すには十分な迫力だ。

「黙れ、失禁男。」

どどっ!!

…が、響の一言が大爆笑を喚び、それは打ち消される。

「納得いかないなら、もー回するか？」

次は本気（マジ）に小宇宙（ほんき）出すぜ？」

パキ。パキ…

拳を鳴らしながら、響が前に出る。

「吉良君、待って…」

「渚……？」

そんな響を渚が止めて、鷹岡の前に出た。

「もう、止めませんか？」

ハッキリしたじやないですか、もう、これから鷹岡先生が誰と戦い、いくら勝ち続けようと、もう誰も鷹岡先生を先生と認めはしません……。」

渚は鷹岡の目を見て、ハッキリ言い切る。

「僕等の『担任』は殺せんせーで、僕等の『教官』は烏間先生です。

これはもう、絶対に譲れません。

無理矢理に父親を押し付けける鷹岡先生より、プロに徹する烏間先生の方が、僕は温かく感じます。」

「ヌルフフフフ……」

……だ、そうですよ……？」

「お前は黙れ。」

渚の言葉を聞いていた、半分涙目な縞々模様のタコが、烏間に話し掛ける。

「先生をしていて、一番嬉しい瞬間は……」

迷いながら自分が与えた教えに、生徒がハッキリと答えを出してくれた時です。



そして鳥間先生、生徒がハッキリ出した答えには、先生もハッキリ応えてやらないといけませんよねえ？」

「ああ、そうだな…。」

~~~~~

「…僕等を本気で鍛えようとしてくれたのは、感謝してます。

でも…ごめんなさい。

この教室から出て行って下さい。」

最後に一礼しながら、渚は伝えたい事を言い終えた。

ピクピクピク…

またもや顔中に血管を浮かび上がらせ、今にも渚に襲い掛かろうという表情の鷹岡。

ザザツ…

「「「「「「……………」」」」」」

「皆…っ」

それに対し、渚を庇うかの様に、前に立つE組の面々。

ピクピクピクピクピクピク…

「黙っ…て聞いてりゃ…餓鬼の分際で…」

親に向かって、何て口だ！何て態度だ!?!」

完全にキレて、鷹岡は目の前の生徒達に襲い掛かってきた。

「「「「!!!?」」」」

バキィツ!!

しかし、鷹岡の暴力が生徒に届くより先に、烏間が前に立ちはだかり、強烈なアツパーカッツを鷹岡の顎に炸裂させた。

烏間はダメージが深く、立ち上がれない鷹岡を後目に生徒達に顔を向け、

「皆…今回は俺の身内が、迷惑を掛け、すまなかつた。」

後の事は心配しなくていい。

俺一人で君達の教官を務められる様、上と交渉する。

いざとなれば、銃でも何でも使って、許可を貰ってみせるさ。」

「「「「「烏間先生!!」」」」」

烏間の期待の言葉に、生徒達の顔は明るくなる。

「交渉の必要はありませんよ?。」

「理事長…!?!」

そんな中、水を注すような声。

声の主は、桐ヶ丘学園理事長、浅野學峯。

「い、何時の間に…!?!」

「鷹岡先生が、鞘から本物のナイフを取り出す前くらいですかね？」
「…御用件は？」

殺せんせーの質問に対し、浅野は未だ立ち上がれない鷹岡に、につこり微笑みかけ、言う。

「経営者として…様子を見に来ました。」

新任先生の手腕に興味があつたのでね。」

「…!？」

この言葉に、烏間と殺せんせーの頭に不安が過ぎる。

この理事長の教育理念からすれば、E組の消耗は大歓迎な筈。

ならば、鷹岡の続投起用も十分、有り得るからだ。

理事長が鷹岡に話し掛ける。

「鷹岡先生…結論から言えば、あなたの授業は非常に つまらない。」

「!？」

「確かに時には、教育に恐怖も必要かも知れませんが。」

事実、一流の教育者は恐怖を巧みに使いこなします。」

「……………」

烏間の顔が険しくなる。

「…が、暴力でしか恐怖を与える事が出来ないなら、その教師は三流以下です。

ましてや、生徒に その暴力で屈し、更には生徒の恐怖の前に失禁までしてしまうと
なると…解りますか、鷹岡先生…？」

既に、あなたの恐怖（じゅぎょう）は、説得力を完全に失っているんですよ？

そして、その様な教師は、柗ヶ丘（ウチ）には不要です。」

そう言う浅野は、スーツのポケットから紙とペンを取り出し、何やらサラサラと書き込んでいく。

「!？」

そして その紙を四つ折りにすると、未だ倒れている鷹岡の口に突っ込む。

解雇通知…それは白紙に即興で書き込んで作った物でなく、正式な書類だった。

理事長の認印も、きちんと押されている。

常日頃から数枚程度、持ち歩いているのか、それとも鷹岡の力量と この展開を見越した上で、予め用意していたのか…

いずれにせよ、鷹岡のクビが、この場で決定した。

そして理事長は烏間に顔向け、

「柗ヶ丘（ウチ）の教師の任命権は防衛省（あなたがた）には無い。

全ては私の支配下だという事を、お忘れないう様に…」

「マンモス哀れなヤツ…」

響と不破が、意図せずに感想をハモリ、ハイタッチをかわしたのも、また別の話。



放課後。

「へへ、そんな事があつたんだ〜？

俺もサボらずに授業、出てりや良かったかな〜？♪」

「カルマ君、面倒そうな授業は、すぐサボるから…」

「だつてさ〜、あのデブ、何となく嫌だつたし〜♪」

「そ〜！無駄口叩かない!!」

「す、すいませ〜ん!」

放課後訓練の最中、渚とカルマが話していると、烏間から注意が飛んできた。

「やれやれだな…」

「ヌルフフフフ…」

まあまあ、今日は、あれだけの事があつたのですから…」

「ふん…」

やや呆れな烏間と、それをフォローする殺せんせー。

「おい、タコ…」

「ヌル？」

「お前は渚君の持つ才能には、気付いているのか？」

「ヌルフ…殺し屋の才能…ですか？」

「…仮に彼が、「将来は殺し屋になりたい」と言ったら、お前なら どうする？
迷わずに育てるのか？」

「ヌルフ…」

「これはまた、答えに困る質問を…」

「そうですねえ、迷う処ですが、私なら…」



「よし、今日は終了だ！」

「「「「ありがとうございます」」」」

「「「「お疲れ様でしたー」」」」この日の放課後の暗殺特訓も終了。

「「「「烏間先生？」」」」

「ん？」

中村を筆頭に、数人の女子生徒が烏間に話し掛ける。

「今回はさ、生徒の努力で無事に体育教師に返り咲けた訳だし……」

「何か臨時報酬くらい、あっても良いんじゃないかな？……って。」

「そーそー♪」

鷹岡先生、そーゆーのだけは、充実してたよね？そーゆーのだけは。」

集るハイエナ女子。

だが、実際に努力したと言つて良いのは、渚と響だけである。

しかし、

「……フン」

やはり、そう来たか……

この展開を予想していた烏間は、そんな不敵な笑みを浮かべ、

「残念だが、俺はスイーツとかは知らん。」

財布は出すから、街で好きな物を食べ。」

そう言つて財布を出す。

「「「いやっほおーい!!」「」」」

歓喜の声を上げる生徒達。

その後、何処の店に入るか少し揉めたのだが、今日の実質MVPの渚と響のリクエス

トにより、マ○ドに決まった。

「いや…だから俺、甘い物嫌いだし。」



「又ルフフフフフ…」

それじゃ皆さん、行きましようか！」

「「え？殺せんせーも来るの？」」

「又ル？」

「又ル？…じゃねーよ、今回、何もやってねーじゃんよ？」

「大体、国家機密が無闇に外に出ようとするなよ。」

「にゅや!？」

「全くね、何もしてないのに、厚かましいわよ、このタコ！

こんなの放つといて、皆、行きましょ!!」

此処でイリーナが音頭を取るが、

「「「「「いやいや、ビッチ先生、アンタも何もしてない！

てゆーか、今回あの場に居なかつたじゃない!？」」」」」

生徒達から総突っ込みされる。

「ムキーっ!!」

カラスマと一緒に駆け付けたわよ!!」

「ふむふむ、『前回の前書き』から察すれば、確かに吉良君が?脱ぎ脱ぎ?してた時点で居たみたいだけど…」

「不破さん?」

「でも結局は、何もしてないよね?」

「殺せんせー同様に。」

「いやいや、先生は烏間先生に、教師という仕事の やり甲斐を知って貰おうと思い、静観をですね…」

「い…以下同文!!」

必死なタコ&ビツチ。

「烏間先生、あんなの放つといて行くよ♪」

「ああ、机の上を片付けしてくるから、少し待っていてくれ。」

「「「「は〜い!!」」」」」

生徒達の返事を背に、教員室に向かう烏間。



「やり甲斐…か…」

机の上の書類等を整理しながら烏間は、先程の殺せんせーの言葉を思い出していた。

プールの時間

みーん みーん みーん：

「暑、っぢ〜…」

夏!! 季節は夏真っ盛りである!!

そんな中、天然冷暖房完備の旧校舎、E組の面々は

「地獄だぜ…」

今日日、エアコンの無い教室ってよ…」

ON・OFFが利かない暖房が効いた教室内で、最っ高に だれきっていた。

そんな生徒達に担任教師は

「皆さん、だらしない！」

温暖湿潤気候の この国で、暑が夏いのは当然の事ですよ!!」

「…………お前が言うな！」

後、面白くないわ!!……………」

このタコ、どろどろに溶けてんじゃね?…と云う位に一番だらけていた上、余りにも下らな過ぎる台詞を放った為、総突っ込みを受けていた。

「因みに先生、授業が終わったらオーストラリアに避難します。」

「「「「汚え!!」」」」」

「ねえ律さん、あなたは体内にエアコンとか、装備されてn：キャアーーあつ!!」

奥田愛美が自身の後ろの席の自律思考固定砲台：律に冷房機能は付いてないのかと聞こうと、顔を後ろに向けた時、

「き、き、吉良さん、何で脱いでるんですかーっ!？」

「ん、暑いから?」

必然的に その隣に座っている、上半身真ツパな響も視界に入り、まるで夜道で露出狂の変質者にも出くわした、乙女のような悲鳴を上げたのだった。

そして その奥田の叫びで、教室の皆が響に注目する。

「お前、一番後ろで目立たないからって、ズリいぞ!」

「櫻瀬さんも止めなさいよ!」

「ええ、だつてえ……?」

隣の席で、響の鍛え絞られた肉体に目をキラキラと輝かせている櫻瀬園美は、所謂『脱ぎ吉良』肯定推進派だった。

((特等席、代われし!))

そして、『隠れ』を含む、他の肯定派女子が心の中で眩く。

その後、響は岡野と片岡に銃を突き付けられ、渋々とカッターを着込む。

「「「「ちいつ!!」」」」

因みに律には、本体冷却機能は備わっているが、屋内用のクーラーやヒーターは完備されていないとか。

「にゆる…」

皆さん、一応今、授業中なんです…」



「でも、今日からプール開きよね?」

「んん! 体育の時間が待ち遠しいよ〜♪」

「きーちゃんも楽しみだよね?」

誰に責められる事無く服、脱げるから♪」

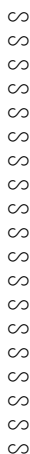
「応よ…:…って、何を言わせる!?!」

授業の間の休み時間、今日から学校のプールが授業で解禁される事を話していたが…

「いや…:…そのプールが、E組(おれら)にや地獄らしいぜ?」

「何か知ってるのか、木村?」

「うむ!」



あんた何で、水着なのよ？」

「夏だから…ですか？」

大型液晶ディスプレイの中の美少女は、常夏の島の海岸を背景に水着を…

しかも、学校指定のスクール水着ではなく、オレンジ色のビキニを着用していた。

誰の設定（しゅみ）かは知らないが、その矢田以上イリーナ未満な身体でのビキニは、その場にいる、男子全ての身を屈ませるには十分な破壊力だった。

「何故、水着を着てる？」の質問にも、このAI少女はきよとんとした顔で画面上に数個の？（クエスチョンマーク）のエフェクトを浮かべ、質問の意義が解らない感じだった。

「勿論、授業中は制服に着替えますよ♪」

「…てゆるか律く、あんたの胸、何だか大きくなってるない？」

岡野が訪ねる。

確かに、殺せんせーから魔改造を施された初日に比べると、現状の水着姿となって、皆が初めて気付いたのだが、明らかにバストのサイズが増している。

「はい、改良された日から毎日リミっずつ、大きくしてました！只今成長期ですよ♪」

胸を持ち上げながら、笑顔で答える律。

つまり転向後、バージョンアップした日から数えると、約5ヶ月程度アップしている計

算になる。

「「うぷっ…!?」」

これで岡島を始め、数人の男子が鼻を押さえて教室を飛び出す。

「とりあえずイリーナ先生よりも、1枚大きくなったら、ストップさせようと思っ
ています♪」

(((((あ…あざとい!!))))))

「「こら、律〜！その羨まけしからん駄肉、少し分けろ〜!!」」

「う〜、あたしも〜!!」

「きやつ?!中村さん岡野さん茅野さん?」

そんな律の本体タッチパネルに、中村、岡野、茅野の3人が ふざけ半分に責め入ってきた。

「「うりうりうりうり〜♪」」

「きやつ…ふ…3人共、や、止め…ん…」

「ちよ…3人共、止めなさいよ〜(笑)」

磯貝の両目を後ろから両手で覆ってる片岡が、苦笑しながら一応、口先だけが止めるに入る。

「きゃん…本当に、ら、らめえ〜…」

「何で俺は、あの時 教室を飛び出してたんだけ!?」

事を知り、泣くほど悔しがった岡島が、やはり女子達に修正されるのだった。



5時限目。

「…そんな訳だから、殺せんせー、本校舎まで運んでくれよ。」

木村からデスマーチの話を聞いた響達は、既に自らの足でプールに向かう気概は失せていた。

「んもー、しょうがないなあ、きさら太君は…」

そんな響のお願いに、「某・猫を自称する青い狸」の様な配色に体の色を変えた、やれやれな表情の殺せんせー。

「…しかし、何でもかんでも先生のスピードを当てにするもんじゃ、ありません!!」

いくらマツハ20でも、出来ない事は沢山あるんですから!」

「「「「ですよねー…」」」」

机に うなだれながら応える生徒達。

パタン…

「まあ、皆さんの気持ちも分かります。」

教卓の上で開いていた、物理の教科書を閉じると、

「仕方ありません。

皆さん、水着に着替えて下さい。」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「裏山に小さな沢があるますよね？」

少し、涼みましよう。」



裏山の沢。

…と言っても、本当に足首まであるかないかの深さの、水掛け遊びが出来る程度の囁かな物である。

その沢を目指し、水着に着替えた生徒達の先頭を歩く殺せんせー。

「さて、皆さん…さつき先生は言いましたよね？」

マツハ20でも出来ない事は沢山ある…と。

その1つとして、君達をプールに連れて行く事がありました。

残念ですが、それには1日掛かりました。」

「1日って…そんな大袈裟な…」

笑いながら磯貝が話す。

「本校舎なんて、歩いて20分あれば…」

これに菅谷が続く。

「てゆーか、何で過去形なの〜?♪」

カルマの問い掛けに殺せんせーは立ち止まり、振り返ると目を光らせた。

「にゆる?」

誰が何時、本校舎に行く…と?」

そう言うタコの後ろの茂みの奥からは水が流れる音と、水の反射する光が見えたのだった。

「!!!!!!?!」

光に向かってダツシユする生徒達。

そして、

「!!!!!!、これは!?!」

「ヌルッフッフフ…」

何しろ小さな沢でしたので、水を溜めるのに20時間掛かりました。」

何という事でしょう。

あの小さな沢を塞ぎ止めた事により、其処には立派なプールが在りました。

日光の差し込み具合等も考慮した、景観選びから間取り迄、自然を活かした緻密な設

計。

25呎の競泳コースは4本設置され、自由に遊泳出来るスペースもバッチリ確保。プールサイドにはビーチベンチも置かれています。

更にシーズンオフには水を抜けば元通り。

水位を調整する事によって、魚を飼い、その生態観察も出来てしまいます。

殺匠（たくみ）の技術により、その沢は たった一晩で、立派なプールに、その姿を変えたのでした。

「ま、まちですか…?」

「凄い…」

「ヌルフフフフ…」

製作に1日、移動に1分…

後は1秒あれば、飛び込めますよ。」

生徒達は その興奮を隠せず、羽織っていたジャージを脱いで水着姿となると…

『『『『ひゃつはっー!!』』』』

ザッポオオン…!!

我先にとプールに飛び込んでいった。



ザバン…

「ううおつりやああああつ!!」

「負けない!」

早速4つの競泳コースで響、磯貝、前原、そして片岡が競い合い、

「渚…あんた、本当に男だったの…ね…」

「改めて!?!」

「…まあ、仕方ない。」

中村が真実を目の当たりにし、

「楽しいけど、やっぱ少し憂鬱だな…」

泳ぐの苦手だし、水着は身体のラインが はっきり出ちゃうし…」

「心配するな茅野。」

その体をレアだジャステイスだと言ってる人間も少なくn(ゴンツ!!)ぐらぶろっ!?)

プールサイドで自身の身体のコンプレックスに少し凹み気味な茅野を、盗撮カメラで獲物(ターゲット)を探しながらフオローする岡島の顔面に、ビーチボールが直撃する。

そして、他の面々も それぞれが楽しんでた、そんな中…

ピーッピッピ!!

響き渡る笛の音。

「木村君！プールサイドを走っちゃいけません！転んだら危ないですよ!!」

「あ…す、すんません…。」

監視椅子から生徒達を見守っている殺せんせーである。

ピーッピ!!

「原さんに中村さん！潜水は ほどほどに！」

長く潜られると、先生、溺れたかと心配してしまいます!!」

「はーい…。」

ピッピ!!

「岡島君のカメラ没収！」

ピッピ!!

「狭間さんも、こんな所にまで来て、本なんか読んでないで泳ぎなさい！」

ピー!!

「律さん、改造スクール水着の着用は校則違反ですよ!!」

ピッピッピッピッピッピッピッ!!

「吉良君！間違っても、下を脱いでは駄目ですからね!!」

「脱がねーよっ!!」

(((((ちいっ!!))))))

ピピピ！ピッ！ピピー！ピーッピ！ピー！

事有る毎に鳴る、殺監視員の笛。

「「「小煩え……」」」

興醒めする生徒達。

「いるよねー、自分が作ったフィールドの中だと、王様気分になっちゃう人って……」

「おう……有り難いの、有り難みが薄れるよな……岡島は仕方ないにしても……」

「又ルッフッフ……」

皆さんにはマナーを守り、整然と遊んで欲しい物です。」

厳し過ぎるマナー指導による生徒達の大顰蹙など、何処吹く風な殺監視員。

「堅い事、言わないでよ、殺せんせー！」

「水掛けちゃえ!!」

「それっ!!」

バシヤツ

そんな堅物殺監視員に向け、倉橋と櫻瀬が水を手で掬い掛けると、

「いやんっ!?!」

♪ピュ~~~~♪

「…いい、いや、別に今日は、泳ぐ気分じゃないだけだしー？」

水中だと、触手が ふやけて動けなくなるとか、そんな無いしー？」

誤魔化すかの様に口笛を吹くが、勝手に自爆するのだった。

「吉良つち、渚君、これって…」

「ああ…」

「かなり、使える…かも…?」

殺せんせーは泳げない…

クラスの大半が、それが かなり有効な暗殺につかえる弱点だと直感したのだった。



「しかし、水中戦となると…」

「やっぱしイケメグ?」

放課後の教室、数人の生徒達が、『殺せんせーは泳げない』という弱点について話して
る過程で、その有力アタッカーとして片岡メグの名前が挙がった。

「ん。元・水泳部のエースだし?」

「さっきのレース、磯貝君、吉良君、前原君を抑えての1位は、痺れて憧れた!!」

「「悪かったな!!」」

「任されたわ…って言いたいけど…」

「ああ、片岡さんにだけ任せるのも、男子的にはアレだよね〜♪」

「ヌルフフフフ…」

「「「わっ、吃驚した!」「」」」

皆が話している中、何処から現れたのか、いきなり殺せんせーが姿を見せる。

「ふむ…放課後も作戦会議とは感心です。

そんな感心な君達に、ポーナス情報を教えましょう。

察しの通り、先生は泳げません。

先生の身体は水を吸収し易い体質で、全身に水を含むと、身体が膨張し、殆ど身動きが取れなくなるでしょう。

弱点としては、最大級の1つですね。」

「……………(1つ…ね。)」

「しかし、先生は それさえ大して警戒してはいません。

落ちない自信はありますし、如何に水中でも、片岡さん1人くらいなら、どうにか出来る自信があります。」

「「「……………」」」

「あはは…だったら皆で、フクロにするだけだよ?♪」

「その通りですカルマ君。」

ですから…皆さんも自力を信じ、皆さんで泳ぎを鍛えて下さい。
その為に、あのプールを作ったんです。」

「「「「…はいっ!!」」」」」

「よし、茅野ちゃんは特別（スペシャル）特訓フルコースだな。」

「ええっ!?!」

こうして…夏のE組に、専用プールがオープンした。

しかし翌日、そのプールは何者かによって、無惨に荒らされていた。

くだらない時間

「滅つ茶苦茶じゃねーか…」

「ゴミまで…酷いよ…」

誰がこんな事を…」

何者かにプールが荒らされた。

その日の朝、教室に入るなりの岡島の報せで皆がE組専用プールに駆けつけてみると、コースロープは無惨にも引き千切られ、ベンチも粉々に砕かれ、更には何処からか持ち込まれたのか、ジュースの缶やペットボトル等のゴミが投げ捨てられている。

「あつ、見てよ！ピッチ先生がセクシー水着を御披露目する機会を逃して、放心状態になつてるよ?!」

茅野が指差した先には、恐らくは健全な男子中学生には、不健全過ぎる位に露出度が高いであろう水着の上に、バスタオルを巻いたイリーナが、呆けた顔で立ち尽くしている。

「畜生!! 一体誰が、こんな余計な真似をしたんだ!?!」

その様を見た岡島と前原の2人が、泣きながら心の底から叫ぶ。

勿論、彼等は後から女子達に修正（物理）されるのだが、それは別の話。

「あーっ！きーちゃんもorzつてるよ〜!？」

そして倉橋の指先には、やはり水着を…もとい、己の鍛え絞らた肉体を披露する機会を喪い、両膝両掌を地に着け、がつくりと項垂れている響の姿があり、

(((((ちいつ！一体 何処の何奴が、こんな余計な真似を!?!万死!!))))

その様を見た一部の女子が、心の中で叫ぶのだった。

「あーあー…こりやたいへんだー（棒）」

「まーいんじゃね？（棒）」

「おう、プールとかめんどいしー（棒）」

「!!!!!!?!!!!!!」

にやけた顔をしての白々しい棒読み口調な寺坂、村松、吉田の言葉に反応するE組の面々。

「……………」

そんな3人を渚が見つめる。

「…んだよ渚？」

何、見てんだよ。」

寺坂が笑いながら渚の前に立ち、

ぐい…

「まさか…俺等の仕業とか疑ってんのか？

ぐだらねーぞ、その考え…。」

胸ぐらを掴み睨みつけるが、

くい…

「痛ててて…テメー、何しやがる?!」

その腕を響が掴むと、逆に背中側に回して極めに入る。

「まさかでなく、お前等が犯人なんだろう？

こんな くだらん事しかしたのはよ？」

「違うつつつてんだろーが!!」

痛えんだよ、離せよ!」

「…で、どーなんだ？」

寺坂を無視し、村松と吉田に顔を向けて聞いてみるが、

「……………」

「沈黙は肯と取るぞ…うわつと?!」

「吉良君、そんな くだらない犯人探し等、やらなくてもよろしい。」

寺坂の腕を極めている、響の腕を振り解く黄色い触手。

両の触手一杯に、ノコギリ、ノミ、木槌に火バサミ等々、様々な工具を持った殺せんせーである。

しゅばっ

その道具と幾本もの触手を駆使し、あつと言う間にプールを修繕する殺せんせー。

「はい、マッハで元通り!!」

いつも通り、遊んで大丈夫ですよ。」

「「「「「はーい♪」」」」」

「よっし、早速…」

「「だから、此処で脱ぐな！

今から授業だ!!」」

ガンツ!!

「ぐはあっ!!」

響の顔面に、誰かが（多分、岡野）が投げたトカレフが直撃した。

「「「き、吉良ーっ!?!」」」

（（（（（ちいいっ!!）））））

「「……………」」

その平和な？やり取りを見て、複雑な顔を浮かべる寺坂達。



「は？寺坂の様子が変？」

昼休み、渚の机を囲み、昼食を取りながら駄弁る響達。

「…うん…元々あの3人って、勉強も暗殺も積極的じゃなかったけど、特に寺坂君が苛立ってるってゆうか…」

プールを壊したのも多分、主犯は寺坂君だろうし…」

「放つとけ放つとけ…」

ずっとイジメッコで通してきたアイツ的には、面白くねーんだろよ？」

「ジャイオンかよ!？」

「ん、殺して善い教室なんてさあ…」

俺は楽しまない方が、勿体ないとは思うんだけどね？あ、美味しい♪」

「え、マジ？どれどれ♪」

「じゃ、僕も…」

「カ…カルマ、吉良、渚あゝ！

人のオカズ、盗るなーっ!!」

この日の杉野の弁当のメイン、豚カツは最凶コンビ+αの手により全滅した。

ガラガラ…

「やあ、皆さん。」

「殺せんせー…何?それ…?」



「なあ寺坂よお…

ちよつと考え方変えねーか?」

校舎外の林で、村松が寺坂に話し掛ける。

「お前の誘いで一緒にプール、壊したけどよ、あのタコには何の嫌がらせにもなつてねー。

クラスの連中と距離置いたって俺等にやもう、何のメリットも無えーよ?」

「……………」

何かを考える顔で黙り込む寺坂。

「るせーよ、この裏切り者が…」

「はあ!?!」

「テメー、この前、あのタコの放課後ヌルヌル、受けてたろーが!!」
「あ…」

『殺せんせーの　これで安心!!模試直前放課後ヌルヌル強化学習!』

E組では全国共通模試に先駆け、殺せんせーが主催した希望者参加型の特別授業が放課後に行われていた。

E組内で参加しなかったのは2人だけで、これを受講していた村松は、見事に好成績を得ていた。

「ヌルヌルなんてバックレよーって、3人で決めてたろーが!?!」

村松の襟元を掴み、追求する寺坂。

「いや、お前…ヌルヌルするのとヌルヌルしないのじゃ、大違いでな…」

「ヌルヌルうるせーよ!!」

ドン!!

そう言うのと寺坂は　その儘、村松の体を後方の木に押し付ける。

「痛えな、何しやがる?!」

「るせー!」

成績目当てに日和りやがって、糞が!!」

背中を押さえて睨みつける村松を無視しながら、不機嫌な顔を撒き散らし、寺坂は校舎に入る。



「うお!? マジかよ殺せんせー?」

「ヌルフフフフフ…」

この前、君が雑誌で見てたヤツです。

プール修理の祭に出た廃材で作ってみました。」

「ん?」

廊下を歩いていると聞き覚えのある声、教室内の会話から聞こえてくる。

ガラガラ…

「はあ…!?!」

教室の扉を開けると、其処には木材を中心にして作られた、大型レーシングバイクの模型に跨がっているタコがいた。

「凄えよ、まるで本物じゃねーか!」

その高クオリティーな造型に感動しているのは吉田である。

「…何してんだ…おまえ…?」

「あ…寺坂…」

ふるふると体を震わせながら声を掛けてきた寺坂に、バツの悪そうな顔の吉田が応える。

「じ、実はよ…この前、コイツとバイクの話で盛り上がったよ…」

ウチの学校、こーゆーの興味ある奴って、あんま居ねーから…」

「又ルフフフフ…」

先生は大人な上に、漢の中の漢。

この手の趣味も、一通り齧ってます。」

レーシングスーツにフルフェイスのヘルメットで身を固めたタコが得意気に言う。

「知ってますか？」

このバイクの最高速度、時速300kmらしいですよ。

先生も一度、本物に乗ってみたいです。」

この言葉に

「アホか、その儘 跨がって飛びや、そっちゃんが速えだろが！」

どっ!!

この吉田の突っ込みがクラス内で大いにウケる。

その時、

バキィッ!

「(。O。L) にゅやーっ?!?」

その雰囲気を楽しとしない、寺坂の蹴りがバイクを破壊した。

「はあああ…な、何て事を…」

その残骸の一部を手に取り、号泣する殺せんせー。

ぶーぶーぶーぶーぶーぶーぶーぶー!!

「何やってんだよ寺坂!」

「謝りなさいよ!」

「大人な上に、漢の中の漢な殺せんせー、泣いてるよ!」

教室内に起こる大ブーイング。

「全く、こりや非道えよな…」

「ん、悪魔でも こんな非道い事、やんないと思うよ?♪」

「(お前達が言うか!)(?)」

過去、殺せんせー作の大阪城やサグラダ・ファミリアを無慈悲に破壊した経験を持つ2人が、棚上げなのか忘れていいのか、或いは自分達は別枠にしているのか、普通な呆れ顔で言ってるのける。

「五月蠅えんだよ、テメー等、虫か?」

「だつたら…」

その手を嫌そうに払い退ける。

「気持ち悪いんだよ、テメーも！」

このモンスターに洗脳（あやつ）られて、仲好し子好しなE組（テメー等）もな!!」

「「「「「「……………」」」」」」

その発言に沈黙する教室。

「何が、そんなに嫌なんだか…」

「あ!？」

沈黙の中、響が口を開く。

「だったら殺りや良いじゃん？」

折角 暗殺（それ）が、赦されている教室なんだぜ？」

「…んだと吉良あ!？」

テメー、ケンカ売ってるんか？

上等だよ、大体テメーは、E組（こっち）に来た時から…」

寺坂が響に詰め寄るが、

ガシィッ

「だーかーらー、ケンカするなら、口より先に、手を出せよ？」

そう言いながら、顔面にアイアンクローをキメる響。

「…!?」

バシッ

「くっだらねーっ!!」

その手を払い退けると、寺坂は教室を出て行き、その日は戻って来なかった。

「やれやれだな…」

「協力って単語を知らないのかねえ?」



…E組。

ウチの教室（クラス）は大したクラスだ。

成績最下層の掃き溜めと言われながら、中間試験じゃ、本校舎側の妨害があつたにも拘わらず、平均点を大きく上げた。

球技大会じゃ、暗殺を通じて培った力で、男女共に、それぞれの部活の奴等に勝つちまった。

本当に大したクラスだ。

…だから、この教室（クラス）は居心地が悪い。

はっ!

地球が大ピンチ？

暗殺の為の自分磨き？

落ち零れからの脱出？

ぶっちゃけ、そんなの どーでもいー。

その日その日を楽しんで適当に生きていられりや、それで良いんだ。

放課後の訓練も終わり、誰も居ない筈の校舎裏のE組専用プール。

その水源の上流の沢で、一斗缶に入った何かの薬剤を流し込んでいる、3つの人影。

「御苦労さん。」

はい、約束の10万円。」

「……おう。」

「……………」

白頭巾に白装束の人物が、1人の男に現金を渡す。

それを その男は、もう1人の人物が無言で自分を凝視しているのを無視して、満足気を受け取る。

「ふふ……次も頼むよ、寺坂君……」

「おうよ……。」

だから……だから俺は、こつち側のが、居心地が良いんだよ……



「何しろ、あのタコは鼻が利くからねえ……

外部の者が動けば、直ぐに察知する。

だから寺坂君？

君の様な内側の人間に頼んだのさ……

イトナの能力を、フルに活かす事が出来る舞台作りを……ね。」

「……………」

白装束の人物……シロが、もう1人の人物……イトナを見ながら話す。

「寺坂君、私には、君の気持ちがよく解る心算だよ？」

あのタコに苛つく余り、君はクラスで孤立を深めている。

だからこそ、私は君に声を掛けて協力を頼んだんだよ。

大丈夫。

私の計画通りに君が動いてくれたら……直ぐに あのタコを殺して、奴が来る前のE組に戻るんだ。

その上、普通の中学生では考えられない額の臨時収入も貰える…。

悪い話ではないだろ？」

「へっ……っつて、何だ、お前!？」

シロの言葉に、渡された金を見て、満更でもない笑みを浮かべる寺坂に、イトナが顔を近付ける。

「お前…あのキラとか云う奴より弱い。」

「はあ!？」

「馬力も体格も、アイツより有るのにだ…

何故か解るか？」

「あ!？」

「お前の目にはビジョンが無い。」

勝利への意志も手段も情熱も殺る気も、何もかもが一切無い。」

冷めた顔で言い放つイトナ。

「藁葺きの家の中で、のほほんと餌を喰う事しか考えてない豚は、豚を喰い殺すビジョンを持つ狼には絶対に勝てない…。

狼は生きろ、豚は死ね…。」

それだけ言うと、イトナは一足先に、その場を去って行く。

「相も変わらず、何なんだ、アイツわ!？」

まさか、脳味噌も触手で出来てるんじゃないやねーだろうな!？」

「ごめん、私の躰が行き届いてなくて。」怒り心頭の寺原に、それを宥めるシロ。

その儘シロは、寺坂の機嫌を取る様に肩を持ち、

「仲良くしてくれ。」

我々は戦略的パートナーだ。

クラスで浮いている、今の君なら不自然な行動も自然に出来る。

我々の作戦を実行するのに適任なんだ。」

「フン…俺も帰るぜ…」

山を降りていく寺坂を見ながら、シロは独り呟く。

「待っている、○○○○○○…」

決着は…明日の放課後だ…!!」

流れる時間



昼休み。

ぐすつぐすつ…

「そー言えば、昨日の試合、見た？」

「いや、途中までは見てたんだけどき、何時の間にか寝落ちしてたよ。」

一応、録画してあるし、ニュースで結果は知ってるけどな。」

ぐすつぐすつ…

「茅野っち、具合どう？」

「あ、うん…もう平気かも…？」

ぐすつぐすつ…

「杉野…？唐揚げ、美味そうじゃん？」

ガバッ！

「吉い良あ〜!!」

「体全体で、弁当箱ガードするなし…」

「はは……まあ、仕方無い……」

ぐすつぐすつ……

「……で、ビッチ先生、昨日の朝って、どんな水着、着込んでいたんですかあ？」

「ああ、自撮りした画像あるけど見る？」

ガサガサ……

「うっ……わああ………」

ぐすつぐすつ……

「……って、アンタ、さつきから！」

何なのよ、意味も無く涙流して!？」

休み時間、食事中の誰もが気になっていた事……。

何故だか泣きながら大量の菓子パンを食べている殺せんせー。

最初は皆、敢えて無視していたが、何時迄経つても泣き止む気配が無い この黄色い

タコに対し、我慢しきれなくなったのか、イリーナが ついに突っ込んだ。

「いやいや……これは鼻なので涙でなくて、鼻水です。目はこつち。」

「……………紛らわしい！」

てか、汚いわ!!「……………」

余計な解説で、更に皆から総突っ込みされる殺せんせー。

「どうも昨日の夕方辺りから、体の調子が少し変です。夏風邪ですかねえ？」

涙…もとい、鼻水を零しながら呟く。

ガラ：

そんな教室に、如何にも不機嫌そうな顔をした寺坂が入ってくる。

「おおく寺坂君!! 今日ほ　もう、学校に来てくれないかと心配でした!」

そんな寺坂を、感激の余り号泣するが如く、大量の鼻水を出しながら、寺坂の両肩をガシツと掴んで出迎える殺せんせー。

寺坂は　その顔に、思わず目が飛び出す位の驚きの表情を見せる。

身長差故に、次第に顔が殺せんせーの分泌物まみれになる寺坂の顔。

「昨日の殺虫剤の事なら御心配なく!!」

もう皆さんも気にしてませんよね? ね?」

泣きながら（違）皆に訴えかける様な顔をして、許しを求める担任教師。

「お、おう…涙でグチャグチャになってる寺坂の顔のが気になる…」

『涙』と云う言葉を使うのは、先の会話に居合わせておらず、真実を知らない? 寺坂に対する武士の情けか…

「あれから昨日一日考えてみましたが、やはり本人と、じっくり話すべきと思いました。何か悩みがあるのなら、後で聞かせて貰えませんか?」

「……………」

親身に話す担任教師の顔を無言で睨み付ける問題児は、その担任の身に着けている三日月マークのネクタイで顔を拭くと、

「おい、タコ…」

そろそろ本気でブツ殺してやるよ。

水が弱点らしーな？

放課後、プール来いや！」

暗殺宣言である。

「テメー等も全員手伝え！

俺が このタコを水ん中に叩き落としてやつからよ!!」

「「……………」」

「「はあ?!」」

「「……………」」

その呼び掛けに ある者は口に出し、またある者は無言で、「コイツ、何言っちゃつてんの？」な顔をする。

「おい、勝手言つてんなよ、○。ヤイア「誰がジャイオンだ!?!」

「お前だよ、オ・マ・エ!」

「あ、あ!？」

そんな皆を、響が 代表するかの様に諫めようとするが、呼び方がアレだった為か、なかなか会話が進まない。

「あゝ、吉良、ちよつと下がって!!」

「ぬお!？」

そこに口を挟むのは磯貝悠真。

響を押しつけた学級委員が、寺坂に話し掛ける。

「…寺坂、お前、ずっと皆の暗殺には協力して来なかつたよな？」

それを いきなり お前なんかに命令されてだ、皆が皆、ハイやります…と言うとも思っているのか?」

「どんな策かは知らねーが、いきなり協力求めてんだ、どーせ お前1人じゃ、どーにも出来ないんだろ?」

とりあえず皆に頭下げて、どんな作戦か話した上で「お願いします」って言うてみるよっ。」

これに前原も言葉を続ける。

更には渚が

「寺坂君…本気で殺るつもりなの?」

心配そうに聞いてくる。

「ああ!?!…つたり前じゃねーか。」

「だったら ちゃんと皆に、前原君が言った様に、具体的にどんな計画かを話さないと…
1回失敗したら、同じ手は通じないんだよ?」

「具体的な計画って、そりゃ お前…」

……………

此処で寺坂の口が止まる。

「……………?」

「五月蠅えよ、弱くて群れるばっかで、本気で殺るビジョンも無え奴等な癖によ!

俺はテメー等とは違うんだ。

楽しんで上手く殺るビジョンを持っているんだよ!!」

「おい、寺坂…!」

その台詞の何処かが琴線に触れる部分があったのか、磯貝と前原が突っかかろうとするが、響が其れを制する。

「けッ!別に嫌なの無理して来なくてもいいんだぜ?」

そんな時や俺が、賞金100億独り占めだ!」

ピシヤッ

そう言うと、寺坂は教室から出て行った。

「何なんだよ、アイツわ……」

「正直、もう付いてけねーわ。」

昨日までは同じ『派閥』だった、吉田と村松も三行半な発言を放つ。

「私、行くかな〜い!♪」

「同じく。」

「俺も今回はパスな。」

「以下同文!」

クラスの皆も、寺坂の策とやらを共にする者は誰も居ない様だ。

「吉良君やカルマ君は、どー思う?」

「失敗にゴーヤ・オレー本!」

「ん〜、何だかアイツの言葉、違和感があったんだよね〜?それよりも……」

「それよりも?」

「「アイツがビジョンで単語を知っていたのに驚きだ!」」

「そっち!?!」

放課後はプールで遊ぶ予定だったが、暗殺の舞台に使われるのでは仕方無い。

烏間も数日前から防衛省に入り浸りで、放課後の特訓もないから、久しぶりに早く帰

るかと、皆が言っていると、

「皆さん、行ってみましようよお〜?」

顔中から大量の…最早、鼻水だか粘液だか解らない分泌物を出しまくりに殺せんせーが訴えかけた。

「折角、やっと寺坂君が私を殺る気になってくれたんです。

皆で協力して暗殺して、気持ち良く仲直りしましょう。」

「「「「「いやいや、まず、アンタが気持ち悪いから!!」「」「」「」

ドロドロドロドロ…

分泌された粘液で、まるで顔が溶けた様になり、B級SFホラー映画に出てくる怪物の如く、不気味さが200割増しになったタコに、生徒達は突っ込んだ。



そして放課後のプール。

「よーし、そうだ!」

そんな感じでプール全体に散らばっとけ!」

拳銃を片手に寺坂が指示を出す。

「何なの?あの偉っそうな態度?」

タコが…

コレは銃なんかでなく、イトナに合図を送る発信機なんだよ。

E組（あいつら）が準備（スタンバ）った時点で引き金を引いて知らせる…。

そしたら、この近くに潜んでいる筈のイトナが駆け付けてテメーを水に落とす。

後は…集団で滅多刺しよ!!

ス…

寺坂が銃口を殺せんせーに向ける。

「覚悟は良いな？ モンスタ―？」

「ええ、勿論。鼻水も止まっていますし。」

「俺はテメーが嫌いだ。」

目の前に現れた時からな。

消えて欲しくて、しようがなかった。」

「はい、知っています。」

暗殺（コレ）の後、2人で ゆっくりじっくり話し合いましたよう。」

寺坂の言葉も、大人の余裕か、編模様のタコは軽く受け流す。

「舐めやがって…」

…来いや、イトナ!!

カチツ…

ドツゴオオワツ!!

「え?」

寺坂が その引き金を引いた瞬間、それに呼応したかの様に、プールの水門が派手な音と共に爆発した。

「「うわわっ!」」

「「きゃあああっ!」」

水門の破壊により、放流される水と一緒に勢い良く流される生徒達。

「皆さん!」

その生徒達を触手を駆使して水から掬い上げ、救出しようとする殺せんせー。

「な…嘘だろ?」

コレ、こんな事するスイッチって聞いてねーぞ!」

自分のやった事を理解したのか、今にも泣きそうな顔で、手にした銃を見ながら、寺

7と8人は死ぬよ？

水に入って助けなきやね？殺せんせー？」

その様子を影から見ながら、白頭巾の下で、邪な笑みを浮かべる男が1人いた。
「マツハで助ける…。」

それでは、生徒の体が耐えられない。

氣遣つて助けてる間に、奴の触手は どんどん水を吸つていく。
「少しの水なら、粘液で防げるぞ？」

ヌルン…

頭から伸びる触手の先端から、粘液を出したイトナが言う。

「そうだよイトナ。」

周囲の水を粘液で煮凝りみたいに固めれば、浸透圧を調整出来る。

だが、昨日、彼が巻いたスプレー缶…

あれは奴…触手生物にだけ効く薬剤だね、今頃は花粉症の時の涙や鼻水の症状の如く、粘液を出し尽くしてる筈さ。

即ち水を防ぐ手段は無い。

生徒全員を助けてる頃は、奴の触手は膨れ上がり、自慢のスピードを失っているよ。」

「兄さん…」



「何だ、こりゃ?」

「水、無くなってるじゃん?」

響達に着いた時には、プールの面影は無く、本来の姿である沢が ちよろちよると流れていた。

「おい、大丈夫か!」

「おう、千葉か…」

「…何があつたのよ、これ!?!」

「分かんないよお…いきなり水門が爆発したと思つたら、皆、勢い良く流されて…」

「…で、殺せんせーが俺達を…」

千葉達が近くに居た、岡島や不破達に話を聞こうとするが、本人も何が起きたのかわからない様子だ。

グイツ!!

「おい、寺坂!

お前一体、どんな計画立ててたんだよ!」

茫然と立ち尽くしている寺坂に対し、響とカルマが襟元を持ち上げ問い詰める。

「俺は…何もしてねえぞ…」

「はあ!!」

「話が違げーだろ？」

拳銃（コレ）、イトナを呼ぶサインって言ってたじゃねーかよお…？」

「イトナ…!!」

「……!!」

…成る程ねえ…。

つまり、これは寺坂が立てた計画でなく、あの2人に見事に騙され操られてた…って

訳ね？」

「な…俺は悪くないぞ、カルマ、吉良あ!!」

こんな計画やらせる奴が悪いんだよ!!

そうだろ！なっ？」

青ざめて引き攣った笑い顔を作り、自分には責任が無いと必死に訴える寺坂。

「皆が流されてつたのだから、全部奴等が仕組んだ事で、俺は悪く…」

バキィツ!!

言い終わる前に、カルマの右拳が寺坂の顔面を撃ち抜いた。

「ふう……」

殴った本人も少し痛かったのか、拳を押さえながら赤髪の少年は話す。
「あのタコがマツハ20で良かったよね？」

……でなきや お前、今頃大量殺人の実行犯にされてる処だよ？」

「まだ解ってないのか？」

流されてんのは皆でなくて、テメー自身なんだよ！」

「……!!」

更に続く響の台詞に、完全に黙り込んでしまう寺坂。

「吉良つち、俺達も皆の所に！」

「応よ……」

……で、寺坂、お前は どーすんだ？

他人（ひと）のせいにするヒマがあるなら、自分の頭で何したいか何すべきか、考え
てみるよ？

じゃ、俺等は もう行くぜ……」

そう言い残し、響とカルマは去って行く。

「俺は……」

その2人の後ろ姿を見ながら、独り残った大柄な少年は俯きながら呟いた。



「うおおっ!?落ちるう!!」

「吉田君、待つてて下さい!!」

そう言いながら、流される吉田を滝に落ちるギリギリで救出した殺せんせー。

「ふう…何とか全員、無事に救出する事が出来ました。

しかし、この爆破…一体、誰が…?」

シユル…

その時、滝の下から伸びてきた一本の白い触手が、殺せんせーの脚を掴む。

「触手!?ま、まさか…!」

バツシヤアーン!!

白い触手は その儘、殺せんせーの身体を下流の滝壺に叩き付ける。

「はい、計画通り。」

久しぶりだね、殺せんせー?」

「兄さん…決着を着けよう…!」

「あ、アナタ達は…!!?」

殺せんせーの前に、黒幕であるシロとイトナが姿を見せる。

「……………!!」

「気付いてるかも知れないが、一応、言っておこう。

君が吸ったのは、ただの水じゃあない。

昨日の夜に、あの坊やにプール上流から混入させた、触手の動きを弱める薬剤が入っているのだよ。

ついでに言えば、昨日の彼のスプレー缶も そうなんだけどね…

前にも増して積み重ねた数々の計算。

そして、更に触手強化したイトナ…。

ま・さ・に、プツワアーフェクツツ!!!

ふふふ…さあ、イトナ！殺しの時間だ。」

ヒュンヒュンヒュン…

頭から生える触手を鞭の様に撓らせ、無表情だが その瞳にだけ強烈な殺意を込めた少年が、迫りながら口を開く。

「…俺と兄さん、どっちが TSUEEEEE!!か、改めて決めよう…!!」

寺坂の時間



俺は、自分が強いと思っていた。

碌にケンカもした事も無いが、図体と声がデカいっただけで、大概の事は有利に運んだ。

クラス内の弱そうな奴をターゲットにして支配下に置く。

小学校じゃ、それだけで一定の地位を保つ事が出来た。

偶々、勉強も出来る方だったので、私立の進学校に行く事にした。

余り深く考えず、何時もの調子で楽勝と考えていた。

しかし、この学校じゃ、その考えは間違ってたと、直ぐに知らされた。

そう：周りには、俺みたいに先を考えていない奴なんか、誰一人居なかった。

特別強化クラスE組。

成績が悪い奴等を1つの教室に集めて、集中的に学力アップを図らせる。

聞こえは良いが、実は単に、他の奴等の当て馬目的で作られた、差別される為だけに存在するクラス、通称・ENDのE組。

このクラスにだけは入りたくない…

それも理由にはあるだろうが、他の奴等は少なくとも、大学進学くらいは既に見据えて必死に勉強している。

小学校の勉強が出来てたからって理由なだけで、この学校に来た奴なんて、俺くらいだった。

入学時は小学校と同じノリで、どんなに粹がっても、それは最初だけ。

このE組というシステムの前には、デカイ図体とデカイ声、それから繰り出す暴力に圧力…

そんな安っぽい俺の武器は、この学校じゃ、何の役にも立たない事が解った。

そして其れは、この先も一生同じなのだ…。

此処の奴等みたいに先を見て、努力してる連中が社会に出た時に、俺みたいな無計画な奴を支配するんだーと。

…で、その落ち零れのE組に落ち、周りは俺と同じ様な目的の無い連中だと、以前みたいに楽に暮らせると思っていたら、それも違っていった。

3年になった途端、いきなり月を壊したとか言う化け物が担任として現れ、クラスにデカイ目的を与えやがった。

結果、このクラスでも取り残された俺は、やはり目的があり計算高い奴に、良い様に

あの程度の水、そこまでハンデになつたりするの？」

2人の戦いを岩場の上から見守る生徒達。

「ありや、水だけのせいじゃねー……」

「寺坂……!」

そこに現れたのは寺坂。

「力を出せねーのは、お前等を助けたからだよ、見てみる、タコの頭上。」

「……!?!」

寺坂の指差した先には、吉田、村松、そして岩場に生えた木の枝に、抱きつく様にながみついてゐる原がいた。

その場所は触手の射程圏内。

「原達の安全も考えながらだから、あのタコは尚の事、集中出来ない。」

シロのヤローなら、そこまで計算してゐるんだろうよ。」

「呑気に解説してゐる場合かよ、寺坂!」

「原さん達、マジで危ないじゃない!!」

「お前、まさか……今回の事、全部奴等に操られてたのか!?!」

「……………」

寺坂に言い寄る磯貝を、この場は敢えて無言で傍観する響とカルマ。

そして寺坂は

「フン…」

開き直った様な得意気な顔で言い放つ。

「あー、そのとーりさー！

目的もビジョンも無え短絡的な奴はよ、頭の良い奴に操られる運命なんだよ!!」

ガシツ

「寺坂！お前っ!!」

「「前原、止せ!!」」

その言葉に前原が寺坂のシャツの胸元を掴み上げ、拳を振り上げようとする処を磯貝達が止めに入る。

パシツ…

「でもよ…」

前原の手を払いのけた寺坂は、

「それならそれで、操られる相手は自分で選んでえ…。

アイツ等はずもう、沢山だ。

賞金持って行かれんのも、やっぱし気に食わねえ!」

「寺坂君…」

今迄、誰にも見せた事もない、真剣な顔で言うのだった。

「だから…カルマ、吉良あ!!」

テメー等が俺を操ってみろ!!

テメー等の その悪魔みたいな脳味噌使って、俺に作戦与えてみろや!

完璧に実行して、あいつ等、助け出してやるよ!」

ずっと黙って、その場を見ていた響とカルマに向かって吠える。

「へ?」「俺達?」

いきなりの御指名に面食らう2人。

しかし、直ぐに その顔に悪い笑みを浮かべた2人は

「別に俺は構わねーけどよ…」

「寺坂、本当に…良いの?」

ニヨキ…。パサツ…。

「死ぬかもよ?俺等の作戦?♪」

角と羽根と尻尾を生やし、嬉しそうに言うのだった。

(((((最悪の組み合わせだ!!))))))

この時、E組の面々は2人の背後に、○素系漂白剤と○性洗剤の巨大なボトルが、『混ぜるな、危険!』の文字と一緒に小躍りしてるイメージを確かに見る。

だが寺坂は それに動じず、

「ケツ、上等だよ……此方とら、実績持ちの実行犯だぜ？」
自信に満ちた顔で応える。

「……ん……だったら……そうだね……」

ぼん……

早速、何かを思いついた様に掌をぼんと叩いたカルマが話し出す。

「よし、原さんは助けずに放つところう!!」

「『『『『『はあ!!』』』』』」

会心の笑顔と共に出了 その言葉に、心底呆れ返る顔を見せるE組の面々。

「おい、カルマ……ふざけてんのか?」

未だ角を生やしているカルマに寺坂が詰め寄り、更に これには「まあ、冗談だろ……」
と思いつつ、響も

「原（おかあ）さんが一番危ないんだろが!!」

太ましくて身動き取れないし!!」

「へヴィーだから枝も折れそうだ!!」

2人で大声で怒鳴る様に突っ込んだ。

「くつくく…冗談だよ、吉良っちい…」

苦笑しながらカルマは寺坂を指差し、

「…寺坂、お前、昨日と同じシャツ着てるよね？」

ほら？ 同じトコに染みあるしい？」

「あん!？」

「げっ、マジかよ!？」

おい寺坂、冬なら兎も角、夏場は毎日着替えるよ、そー言えば少し、汗臭いぞ？」

「「「「「ううっ…!!」」」」」

響の言葉に、女子達が寺坂に対し、まるで汚物を見る様にどん引く。

「吉良あつ!!今 カンケーあるのか!？」

今 言う事か?それ!!」

「さあ?」

必死な寺坂に響は、まるで渚に次ぐ、新しい玩具が出来た様な顔ではぐらかす。

「はっはは…ズボラだよねー」。

お前、やっぱし悪巧みとか向かねーわ。」

「あ、あん!？」

その様子を見て、ケラケラ笑いながらカルマが話を進める。

「でもな、頭はバカでも体力と実行力は持つてるから、お前を軸に作戦立てるのって、面白いだぜ？」

俺を信じて動きなよ？

絶対に悪い様にはしないからさ？」

「…バカは余計だ。」

いーから早く指示よこせ、このヤロー。」



ぷつくううう…

その頃、殺せんせーは足元の触手も水を吸い、限界まで？膨らみ、更に動きを鈍らせていた。

それでもイトナの猛攻を受けてもクリーンヒットだけは避けていたのだが、それも限界に近かった。

イトナが『生徒』である以上、『教師』である殺せんせーは手を出せない…

それを承知で、イトナは、そしてシロは攻撃を緩める心算は無い。

「そろそろトドメだ、イトナ。」

先ずは邪魔な触手を全て斬り落とし、その上で『心臓』を貫くんだ。」

首切りのポーズと共に、イトナにシロが指示を出した、その時、

「おい、シロ!!イトナ!!」

「!!」

寺坂が2人が戦っている水際まで降り立ち待ったを掛ける。

「何だ、寺坂君か。」

「近くに來たら危ないよ?」

「…るっせえよ…。」

「テメーよくも、俺を騙しやがったな!?!」

嘲笑う口調のシロに、寺坂は怒りの形相で睨みつける。

「おお、怖い怖い(笑)。」

「まあ、そう怒るなよ、

ちよつとだけ、クラスメートを巻き込んだだけじゃないか。

「E組で浮いてた君には丁度良いだろ?」

「うるせえ!テメー等は許さねえ!!」

自分のした事に、何の罪悪感も反省も後悔も皆無な態度のシロに、寺坂は更に怒りを増す。

「ザブツ」

そして水に入り、イトナの正面に立つと、

やっぱし悪巧みさせたら、カルマは俺より上だぜ…。」

「吉良つち、気付いた？」

「まあな…。」

「カルマ、吉良君、一体どーゆー事よ？」

皆に分かる様に説明!!」

岡野が2人に解説を要請。

「ふう…いいかい岡野さん？」

あのシロは、別に俺達生徒を殺すのが目的じゃないんだ。

生きてるからこそ、殺せんせーの集中を削げるって訳。」

「ああ、その通り。」

だから原（おかあ）さんも、見た目は超危険だけど、イトナの標的になる事はない筈

さ。」

「それに…例えば下に落ちたとしても、殺せんせーは生徒を見捨てたりしないのは、俺が身

を以て知っているし。」

だから、寺坂（アイツ）にも言つといた…。」

ドッ!!

「うがっ…!?!」

カルマが其処まで喋った時、イトナの横殴りの触手が、寺坂の腹部を構えていたカッターシャツの上から直撃する。

「「「「寺坂!!」」」」

「大丈夫だって♪」

「気絶する程度の触手は喰らうけど…」

「へへ…っ!!」

「逆に言えば、パワーもスピードも、その程度だって事。」

「だから…根性出して、死ぬ気で喰らいつけて言つてやった♪」

「へっ…痛えじゃねーかよ、イトナあ!!」

ギユウツ

明らかに痩せ我慢な笑みを浮かべながらも、寺坂は盾代わりになっていたシャツで包む様に、イトナの触手を捕まえる。

「はっはっは…寺坂君、痛いのが我慢して、よく頑張った!感動したよ。」

「ではイトナ、ご褒美に もう1発くれてやりなさい。」

「くれぐれも、背後のタコには気をつけながらn「くしゅん!」…はい?」

「くしゅん!くしゅん!くしゅん…」

その異変は急に起きた。

「?????」
 イトナが まるで花粉症にでもなったかの様に、急に くしゃみを連発し、顔からは
 涙や鼻水を滝の様に流し始めた。

「カルマ君、これは…?」

「寺坂のシャツね…昨日から着替えてないって事は、あの昨日のスプレー…」

アレの成分を至近距離でモロ、たっぷり浴びたシャツって事。

それって、殺せんせーの粘液ダダ漏れにした成分つしょ?

だったら、それに直に触手が触れたイトナだって、タダで済む筈がない。」

ダラダラ…

カルマの解説通り、イトナの触手も、大量の粘液が垂れ流し状態となる。

スチャ…

「…で、イトナに一瞬でも隙を作れば、見ての通り…」

「「「「おおく!」」」」

イトナがくしゃみに苦しんでいる隙に、殺せんせーは枝にしがみついていた原を お
 姫様抱っこして救出していた。

それを見た寺坂は腹を押さえながらニヤリと笑うと、まだ岩場の上に居る吉田と村松

に向かい、

「おい、お前等なら、其つから飛び降りれるだろ!!」

「はあ!?!」

バシヤアツ!

「水だよ水!!派手なヤツ頼むぜ!!」

水面を力強く叩きつけ、大きな水しぶきを立ててアピール。

「やれやれ……」

「そーゆー事かよ……」

その意味を察した2人は

びよん……

「「しやーねーなあ……」」

その場から水面目掛けてダイブする。

「ま、マズい!!」

それを見たシロが焦りの声を出す。

「そう、殺せんせーと弱点が同じなら……」

それと同時にカルマのサインで、

「「「「ひゃっはーっ!!」」」」

吉田と村松に続き、次々とイトナの傍の水面に次々と飛び込むE組の面々。

「同じ事を やり返せば良い訳って事♪」

ザッパァッン!!

全方位から派手な水しぶきがイトナを包み込む。

ズズズ：

水を吸収し、見る見る内に膨らむイトナの触手。

「まだまだ!」

バシヤアッ

其処に追い討ちとばかりに寺坂が両手で掬った水をイトナに浴びせる。

「おら! お前等も、見てないで手伝え!」

「だから、何なんだよ、お前は!」

「偉っそうに!!」

「ガキ大将!」

「我が儘!」

「自己中!」

「このジャイアン!」

「ブタゴリラ!!」

「小○元太！」

「秋道チョ○ジ!!」

「鷹岡モドキ!!」

「ちよつと待て!今、鷹岡モドキって言ったの、誰だーっ!？」

「バツシャーン!!」

寺坂の呼び掛けに、呆れながら文句たらたらで、それでも僅かに苦笑し、それに応じる様に、イトナに水を集団で浴びせかけるE組の生徒達。

ズズズズズズ…

更に大量の水を吸収したイトナの触手は、先の殺せんせーの其れよりも肥大化、その重さからか、ダラリと垂れ下がる。

「かなり水、吸っちゃったねー?」

あの薬剤入り?の水を♪

その触手、傍目には今は もう使い物にならないっぽいのは気のせい?」

「……………」
頭巾の下で焦りの表情を浮かべるシロ。

「さて、どうする?」

今回、あんたの作戦のお陰で皆、死にかけてるし、まさか、タダで帰れるとか思っ

ないよね?」

「……………」

「早く謝らないと、更に全力で水遊び続けさせて貰うよ?」

カルマの台詞に耳を傾けた後、イトナに対し、水を掛ける体制で準備万端のE組の面々を岩場から見下ろすシロ。

「…してやられたな。」

丁寧に積み上げた心算の戦略が…たかが中学生の作戦と実行で滅茶苦茶にされてしまふとはね…。

仕方無い、今日の処は退くとしよう。

帰るよ、イトナ?」

シロはイトナに撤退を呼び掛けるが、

「うがあっ!!」

既に触手は殆ど役立たずな筈なのに、イトナの目からは殺気が消える事はなく、その目は退く心算は無いと言っている。

「イトナ!聞こえないのか!」

今日は退くぞ!!」

怒鳴る様にイトナを呼ぶシロだが、

「カルマも言ったる？」

「タダで帰れると思ってるなよ、白装束？」

「バキイツ!!」

「うぎいつ?!」

シロの脇腹に、突如として現れた響のミドルキックが炸裂した。

逃走の時間

「吉良…だったか!？」

き、貴様、何時の間に…?」

片膝を着き脇腹を押さえ、その頭巾の下は恐らく、苦痛に歪めた表情であろうシロ。

余裕が無くなったのか、人を小馬鹿にした様な、何時もの穏やかな口調でなく、自分を「君」付けでなく呼び捨てにするシロに対して響は

「簡単さ。皆がイトナ目掛けてダイブしてた時、俺だけ逆サイドから お前の方に回り込んでいた。

…それに、お前が気付かなかっただけの話だよ、バカ!

凸(、▽、) びしっ!

御機嫌な犬が尻尾を振るが如く、背中に生えた羽根をパタパタ羽ばたかせながら、邪悪な笑みを浮かべた少年は中指を立て、所謂 O u c k i n ポーズで挑発。

「イトナあ!! コイツを今直ぐ殺れ!」

これが本性なのか、ヒステリックな感情丸出しな怒声で、イトナに響への攻撃を命令するシロ。

「うわがあっ!!」

それを聞いたイトナは大量の水を浴びた事により、ぶくぶくに膨れ上がった触手を響に向けるが、

「させませんよ!」

バチッ!

正面に回り込んだ殺せんせーが、やはり肥大化した触手で それを弾く。

「せいやあ!!」

ビシッ バシッ ドスツ!

「…っ!?」

同じタイミングで響がシロに拗ねを狙った下段蹴りから顔面への上段蹴り、そして右の脇腹目掛け、左正拳を放ち、

「チェストオオツ!!」

ズゴオツ!!

トドメとばかりに右の正拳を鳩尾に突き刺した。

「…かはっ!?」

打たれた腹を押さえ、両膝を着くシロ。

「意外とタフだな?だが、終わりだ…」

本人は気絶させる心算だったのだろうか、未だに苦しんではいるが、意識を保っているシロに少しだけ驚きながらも、最期通告を言い渡す。

あの白装束、何処そのRPG宜しく防御力高いつてヤツ？

そう思いながらも、

「行くぜ！鳥間先生直伝!!（嘘&笑）…」

改めてトドメの一撃を放とうとした時、

「舐めるな、ガキがあ!!」

ピスッ

響に向けられた白装束の右袖の中から、数本のダーツが飛び出した。

トス…ポト…

しかし そのダーツは、羽織ったいたジャージの上から響の胸元にヒットはするが、身体に突き刺さる事なく地面に落ちる。

「ふう…ビビらせやがって…」

響は その落ちたダーツの一本を拾うと

びよよよん…

その先端を指先で弾き撓らせる。

「人間（オレ）に対せんせーダーツなんか、意味ないだろが？…マジにテンパってる？」
特殊素材製のダーツを投げ捨て、呆れた表情な響。

「イトオナアアツ!!」

「ううがああつ!」

殆ど冷静さを失ったシロの再度の呼び掛けに、イトナは響を狙って触手を動かそうとするが、肥大した触手のスピードは、既に常人がギリギリ見切れるかどうかの域まで激減していた。

「ヌルフ!」

パシイッ

それを難なく裁く殺せんせーの触手。

「クソがあ!」

しかし、それでも尚、触手を動かそうとするイトナ。

それを見た生徒達は、瞬時にアイコンタクトで意思疎通。

「一二殺せんせー、ゴメン!!」

ブワッシャアアーン!!

「にゅやーっ!!」「うぐっ!!」

殺せんせー共々、イトナに大量の水を浴びせたのだった。

「にゆる…皆さん、非道いですう…」

「いや、…なんか、ゴメン。」

触手に留まらず、頭も倍程度の大きさに迄膨らんだ殺せんせーに、近くに立っていた菅谷が代表して謝る。

そして、

バシャ…

「う…がああ…!!」

そして、元の何倍にも膨れ上がった触手の重さに頭が支えきれなくなったのか、イトナが うつ伏せに倒れ込んだ。

それでも必死に触手を操ろうとするが、触手自体が自重を持って余しているのか、或いはイトナの精神力が至っていないのか、その触手は少しガタガタと動く程度までに能力が落ちている。

「……………ちいつ！この役立たずがつ!!」

そう言うとしロは懐からソフトボール程度の球体を取り出すと、地面に叩きつける。

BON!!

「な…煙玉!?ケホッ!」

瞬く間に周囲に立ち込める、濃く深い白い煙。

「殺せんせー、そして吉良君及び、E組の諸君。」

今回は本当に潮時の様だから、これで失礼させて貰うよ。

それとイトナ、キミでは そのモンスターを殺せない事は分かった。

そんな役立たずを何時までも飼う程、我々も裕福ではないのでね、キミは もう自由だ、好きに生きなさい。

尤も、私のメンテ無しでは あと何日、まともに生きられるか、怪しいがね？」
「!!？」

煙の中、この場を回避出来る事から余裕を取り戻したのか、何時もの丁寧な口調からの台詞を言い終えると同時に、シロは姿を消す。

タタツ……!

「逃がすかよ!!」

しかし、響は直ぐに煙を掻き分け、

「「「吉良!」」」

「きーちゃん!!」

「吉良さん?」

「「「吉良君?」」」

先生の技術で、細胞を切り離せなくてもいいですが、その前にイトナ「うぐああつ!!」
「「「「「「?!?」」」」」」

殺せんせーが話している途中、イトナが苦しむ様に叫び声を上げる。

そして突如、頭から生えた数本の触手の内の一本が　どす黒く変色する。

「何故だ、何故、勝てない…!?!」

殺せんせーを睨みつけたイトナは、その一本の黒い触手を天高く掲げる。

「これは…ま、マズい！」

皆さん下がってください!!」

殺せんせーが生徒達に叫ぶと同時に急降下する黒い触手。

ズシヤアアツ!!

「ヌル?!」

「「「「「え?!」」」」」

「「「「「な…?」」」」」

しかし、この『憤怒』を意味する黒い触手が襲ったのは、『兄』でも『クラスメート』

でもなく、

「自分の触手を…斬った…!?!」

変色した以外の白い触手。

イトナは一本の黒い触手だけを残し、それ以外、自身の『力』の象徴な筈の触手全てを自ら斬り落としたのだった。

「うぐあああ…」

黒い触手を支えに、立ち上がるイトナ。

一時的に力を一本の触手に集中させ、そうする事で邪魔な重りでしかない、他の触手を捨てる事で身軽さを得たかの様だ。

「ツ…!!」

そして憎悪に満ちた顔を殺せんせーに向けると

「うっがあああああああああああつ!!」

ドヒュツ…

断末魔とも受け取れる様な雄叫びを上げながら、西の空に向かい飛び去って行った。



一方その頃…

「ハア、ハア…」

山道を走りながら降りるシロ。

どうしてこうなった…？

何故、この俺が こんなにも無様に逃げなければならない？

俺の策略はプツワアーフエクツツ!!

…だった筈。

なのに、何故だ？

そうだ、イトナだ。

あの役立たずが俺の作戦を十全に こなしてさえいれば、今頃は あのモンスターを始末していた筈。

そして寺坂…アイツも あの程度の事でキレて、邪魔しやがって…

あれさえ無ければ…

いや、何よりも…あの吉良というガキ…!

アイツさえ居なければ…!!

あくまでも他人（ひと）のせい。

自身の考えた作戦の穴を認めたくないのか、本当に気付いていないのか、そう思いながらシロは逃げる様に山を下る。

シユタ…

「はい、ケードロ終了の時間だ。」

「!?」

そんなシロの前に、突然、頭上真上から降り立つ響。

「貴様…どうやって!!」

「ふう…あの煙人中、どっちの道に逃げたか捜すの、苦勞したぜ（結局は小宇宙に頼っちゃった）。

あつ、上から現れたんは、只のフリーランニングだ、気にするな。

間違つても忍者じゃねーぞ?」

「ヒイイ!!」

怯え声のシロが響に右掌を翳す。

「また、ゴムダーツか?」

そんなの効かねーって…!!」

ばんっ!

シロの右袖の中から、硝煙が登る。

「デメエ…マジチャカかよ…!!」

瞬時に過去の、幾千の戦いの中で得られた『勘』で何かを察し、反射的に右掌の正面から身体を避け、大事に至らずに済んだが、まさかの実銃の使用に、この時、響の頭の中で何かが弾ける。

「うらあ!!」

バキイツ!

頭巾越しに顔面に正拳を放つ響。

そのパワーでシロが被っている頭巾が吹き飛び、その素顔が露わとなる。

頭巾に隠されていた素顔：その左目が義眼となつている男が睨みながら、再び右袖に仕込まれた銃口を響に向けようとするが、響は それより速く距離を詰めると その右腕をがっしり掴み、

「遅いー!」

ボキイツ!!

「ぎゃああああ!!」

何の躊躇も無く、その腕をへし折る。

「どうせ、殺せんせーの事情で まともに警察には突き出せないんだ…。

大量殺人未遂の爆破テロの犯人として、別に この場で殺つても問題無いよな?」

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイっ!」

本物の、本気の殺気を身体全体から撒き散らし始めた響に対し、それを肌で感じたシロが余りの恐怖に顔を歪め、その場にへたれ込む。

腰を抜かし、後退りするシロを無理矢理に引き起こすと、響は その眼を冷たく、且

「おう、目が覚めたか？」

マジに死んだかと思って心配してたぜ！」

自分で冥界送りにしたのを惚けた口調で誤魔化す様に、シロの顔を覗き込む響。

今回は「まるで、黄泉比良坂の亡者の葬列にでも…」の台詞を言う気は無い様だ。

「ヒイヒイいーく、来るな!!」

そんな響に腰砕け状態の儘、齒をガチガチと震わせながら、恐怖に脅える表情を見せるシロ。

それでも懐に手を伸ばし、

BON!!

「ケホッ!またかよ!!」

またも煙玉を炸裂させたシロは、響が怯んだその隙に立ち上がると、再び下山し走り始める。

「なんちゆうスピードだ…」

もしかして あれが、普段は封印されている70割ってヤツか?」

火事場のクソ力…とでも云うべきなのか、その逃げ足は、響を驚かせる程の速さ。

響も小宇宙全開すれば、簡単に捕まえる事は可能だが、敢えてそれはしない。

先程のアップーに上乘せして放った冥界波にしても、本当に殺す気は無く、直ぐに現

山の麓が近くなり、そう云う風に考えるシロ：否、柳沢。

尤も響は、E組生徒でも例外的に本校舎に自由に出入りが出来る事を、柳沢は知らない。

だが、響もやはり、本校舎に逃げられる前に捕まえた考えである。

超々・危険人物として本校舎の生徒から認識されている響としては、柳沢の様な怪しい格好の人物と、本校舎で立ち回る様な目立ち過ぎる行動は避けたい処だ。

兎に角、麓を抜けたら自分の勝ちと信じて疑わない柳沢の前方に、山道の逃走を阻む様に立ち塞がる人影。

「なんだ、アイツは…？」

「へ？ビッチ先生…？」

それは、イリーナであった。

自分に向かって、山道を駆け降りてくる柳沢と響に対し、妖しい視線で見つめるイリーナ。

その姿を確認した柳沢が、逃げ足を更に加速する。

あの女を抑えて人質にすれば、確実に逃げられる…

…とても思ったのか、イリーナを目掛け、一直線に走るのだが、

ビィン…

!!?」

突如、柳沢は宙に浮く。

「ビッチ先生!」

「ハァーイ♪ビビキ!」

逆さ吊り宙吊り状態となった柳沢をスルーして、イリーナに駆け寄る響。

「成る程…何だか姿が見えないと思っていたら、こんな仕込みしてたのか…」

ワイヤートラップ。

イリーナが仕掛けた罠に、柳沢は足を捕らえ、その儘、木の枝に逆さ吊りになっていく。

『女』である自分を餌に、寄せられて来た賊を、見事に捕らえた形である。

「ふふ…生徒（ガキ）達は、あのタコが何とかしてくるって、信じてたからね。

だったら私は、まずはカラスマに連絡した後は、賊の逃亡を防ぐ準備を…ってね。」

「さ、流石はプロですか?その辺りは…

それで、烏間先生は?」

「既にスズメ達と一緒に、此方に向かっているわ。」

「…だったらコイツは…」

「そうだビッチ先生、まだワイヤーって余ってる？」

「宙吊りの儘、手足、縛っておこう。」

「OK、それと、口も塞いどかないとね♪」

「へ？もしかして、デープキスで？」

「ガン!! 「痛いっ!!」」

「んな訳ねーだろ!!」

「あたしだって選り好みくらい するわよ!!」

「とりあえずヒくビキ？あなたの その生意気な口、塞ぐ必要がありそうね!」

XXその頃、イトナが去った後の殺せんせーと

E組生徒は…

「イトナが少し、気になるけど…」

「とりあえずは、一安心して感じ？」

「又ルフ…」

「安堵と不安を混ぜ合わせた様な複雑な表情をしていた。」

「それでも、殺せんせー以外は安堵の度合いが多い。」

「そんな中、」

「そー言えば寺坂君?」

「あん?」

原が寺坂に話し掛ける。

「さつき私の事、散々言つてたよね?

太ましいだとか、ヘヴィーだとか?」

殺気を込めた笑顔で寺坂に迫る原。

「い、いや、あれはだな、状況を客観的に分析してな…つて、ちよつと待て、太ましいは

俺じゃない、吉良だ!!

あのヤロー、まだ戻つてないのか?」

「問答無用!!」

その余りの迫力に焦り顔で後退しながら、響を捜す寺坂。

「ああ、あ、寺坂つて、本っ当に無神経だよね?」

そんなんだから、あんな奴等の掌でコロコロ転がされんだよ♪」

その様子を見て、岩場の上からカルマが煽る様に笑う。

「はあ?!うるせーぞカルマ!!」

テメーも1人だけ、高い場所から見てるじゃねーよ!!」

「え?何々?上司に向かつて何なの?」

その口の利き方々？」

「だ・れ・が・上司だ!？」

あんな触手を生身で受けさせるなんざ、そんなイカレたブラック上司、何処の世界に居るんだバカヤロー!!」

「んん、此処に居るしっ♪」

「ドヤ顔してんじやねーっ!!」

「|||||.....」

そのやり取りを呆れ顔で見るE組の面々。

「大体テメーはサボり魔の癖に、いっつも美味しい場面だけは きっちり持って行きやがって!!」

この寺坂の怒りの不満爆発発言に

「あー、それ、実は私も思ってた。」

「え……?」

「…寺坂、よく言った。」

「この機会に たっぷりと泥水、飲ませようかね?」

「え? ええ?」

片岡、速水、そして中村が便乗。

「ねえ茅野ちゃん？何で岡島はカルマに、OLAP（正調パロ・スペシャル）やられてんの？」

「色々あつたのよ…」

「？」

少しぐったりした顔の響が、凄く御機嫌顔のイリーナと一緒に戻ってきた時、何故かカルマが岡島に、プロレス技を仕掛けていた。

「じゃ、寺坂が原（おかあ）さんにボカボカ殴られてんのは？」

「それは…巻き添えが嫌なら、聞かない方が良いよ…」

渚が目を逸らしながら応える。

「??」

「…ってゆーか、何だか寺坂、皆に馴染んでね？」

皆と水の中で笑いながらじゃれ合い、巫山戯合ってる寺坂を見て渚に尋ねると、

「まあ、それも色々…ね。」

「ふん？」

渚と茅野が、少しだけ嬉しそうに言う。

それを聞いた響も、何気に納得したかの様に口元を緩めた。

「ヌルフッフフ…」

寺坂君は正直、高い所に立って計画を練るのには向いていません。

彼の長所は現場でこそ活かされます。」

「殺せんせー?」

わだかまりが溶けた寺坂達を微笑ましく見ていた響達に、殺せんせーが話し掛ける。
「体力と行動力で自身も、そして現場の皆も輝かせる。」

実行部隊として、成長が とても楽しみな暗殺者（アサシン）です。」

「ま、その辺りは俺とカルマに任せろよ。」

飛びつきりな作戦考えて、実行させてやるからよ♪」

「はは…なるべく…ソフトなヤツね…」

殺せんせーの寺坂評を聞き、凄く嬉しそうな顔で応える響に、渚は少しだけ引いた顔で、お願いするのだった。

ばっさーん!!

「うわっ!」

そんな渚と響に大量の水が降り掛かる。

掛けてきたのは当然、カルマ、寺坂を始めとしたE組の面々。

因みに茅野は、響を盾にするが如く回り込んで、難を逃れていた。

「まあ、殺せんせーも堪えてるみたいだから、必要以上には言わないけどさ…甘さは自身だけでなく、周囲も滅ぼす事だつてあるつてのを覚えておいた方が良いぜ？」

「じゃ、俺も今日は帰るよ。」

「はい…気をつけて…」

誰も居なくなつた教員室。

その部屋の窓から三日月を見上げながら、1人呟く殺せんせー。

「吉良君、それでも先生は、皆を救いたいのですよ…。」

「そう、イトナ君を含めて皆です…。」

破壊の時間

朝の教室。

ホームルーム前、E組の皆：寺坂を含む面々は、律の前に集まっていた。

…と、言っても、別に律の新コースの御披露目とか、そんなではない。

「これってさあ…」

「やっぱりイトナの仕業？」

昨夜、柵ヶ丘市内の携帯電話ショップをターゲットとされたと思われる、襲撃事件が多発。

その全てが略奪された形式はなく、単に店舗を破壊された物だった。

昨日から流れる関連ニュースを律に頼み、編集した画像を見ていた生徒達は呟く。

「この見事な破壊っぷり、触手でも使わなきや出来ないよね？」

昨日の騒動の後、結局イトナは姿を眩ませた儘だった。

当然、防衛省も彼を捜索開始しているが、まだ、見つけれられない。

「…でもよ、どーして携帯ショップなんだよ？」

「ああ、それなんだけどさ…律、用意出来てる？」

「はい、吉良つちさん♪」

ニュース画面を切り替え、普段の等身大の制服姿をした律が、液晶画面左上にサブ画面を表情して説明を始める。

「昨日の夜、吉良つちさんに頼まれて、イトナさんの事を調べてみたんですが…」

「「？」」

サブ画面に表示されたのは、「堀部電子製作所」という町工場のホームページ。

「世界的にスマホの部品を提供していた町工場でしたが、去年、負債を抱えて倒産、その時、社長夫婦は息子を残して雲隠れしています。」

「その息子ってゆうのが…」

「イトナ君…なの？」

「多分、間違いないだろ。」

「工場社長の息子・堀部系成も、親戚に引き取られていた筈が、現在は行方知れずとなっ
ています。」

「親戚に引き取られ、その後にはどんな事があったかは知らないけど、その家から飛び出して やさぐれてる時に、シロに拾われたって考えるのが妥当だろうね。」

「ついでに負債の理由なんだけど、簡単に言えば、この工場の技術を、ほれ、例の○国の企業に、スタッフごと金で持っていかれて、工場が機能しなくなっただけなのに、真相

らしいぜ。」

「もしかして、少し前にニュースになってた、あれ…?」

「ああ、自分の国の技術じや、爆弾（笑）しか作れないもんだから、金に物言わせて日本（ウチ）からパクったってヤツな。」

「結局の所、大企業の力に潰されたって訳か…」

「力…ね…。」

ガラ…

「少し早いが…皆、揃ってるか?」

「皆さん、おはようございます。」

「烏間先生?…と、殺せんせー…」

そういう会話をしていると、まだホームルーム開始を知らせる予鈴は鳴っていないのだが、教室の扉が開き、烏間と殺せんせーが入ってきた。



「皆にも報告しておく。」

シロ…柳沢は、現在 拘束中だ。

当然だが、表に出す訳にはいかないので、どういう処分にするかは、上で検討中だ。

尤もヤツは今、右腕と肋が数本が折れていて、顎と両膝も砕かれた状態だからな…

暫くの間は病院だ。」

皆を席に着かせた後、烏間が あの後、の経緯を話す。

「吉良つちく？」

「殺り過ぎた自覚も無ければ、反省も後悔もしていない。」

ジト目のカルマを、軽く受け流す響。

因みにイリーナのトラップに掛かった柳沢は あの後、逃亡防止の意味を込められ、響に両膝と喉を破壊されていた。

「中学生とは思えない、容赦の無さだったわ……」とは、一緒にいたイリーナの弁。

烏間の説明は続く。

「それから堀部イトナは……まだ見つかっていない。」

「そのイトナなんですけど……」

「はい、先生も、ニュースは見ました。」

曰わく、使い慣れている殺せんせー本人は画像を見て、すぐに分かったが、皆の言う通り、あの破壊は触手による物と見て、間違いないとの事。

律の調べたイトナの身元の判明と合わせ、何故、携帯ショップを狙ったのかも納得。力や強さ、勝利に固執する理由も、察したとの事。

「他人が努力して形を作った後に全部、横から持っていくって……卑怯だよ……」

「でも それって、その企業もシロも同じって気付いてないの？」

「努力した挙げ句、理不尽に力に潰されたからこそ…力のある側を選んだって考えなのかもな…」

「そんな事は、どうでも良いんです…」

「殺せんせー?」

イトナは自分みたいな、全身が触手細胞の生物とは違う。

人間の肉体に後から触手細胞を植えられた者は、毎日の様に適合処置(メンテナンス)をしなければ、神経を触手に蝕まれ、地獄の様な激痛と拒絶反応に苛まれる。

柳沢に梯子を外された今、どう暴走するか分からない。

兎に角、この細胞は人間に移植するには危険過ぎるとの事。

「いずれにせよ、イトナ君は先生が、担任として止めます。」

彼を探して保護しなければ、それこそシロの…柳沢の言う通り、生命に関わりますから。」

「…でもよ、助ける義理あるのかよ、殺せんせー?」

「つい昨日まで、商売敵だったみたいなの奴だぜ?」

「担任って言っても、形だけじゃん?」

今まで…というか、昨日の今日な事もあり、E組の生徒達は、イトナを救うのを余り

善しとする顔をしない。

「…それでも、先生は担任です。」

『どんな時でも自分の生徒を見捨てたりはしない、絶対に この触手（て）を離したりはしない』…先生は先生になる時、そう誓ったんです。」

「「「「せんせー…」」」」」



その日の夜。

北栲ヶ丘駅前アーケードの街路樹の上に潜む、数人の少年少女。

「やれやれ、昨日も言った気がするけど、ウチのクラス、甘いヤツ多過ぎ。」

「そう言いながら、きっちりとお前も同行してるじゃないか?」

「…吉良っち、ツンデレ?」

「いや、速水さんにだけは、それ言われたくないし。」

「ぶーっ!!」

「…岡島、笑い過ぎ。後でめる。」

「何故っ!?!」

響、磯貝、岡島、速水、不破。

この5人は携帯ショップ、d o k o d e m o北栲ヶ丘駅前店を見張っていた。

イトナの発見、保護、説得を目的に、律が挙げた、市内でまだ襲撃されていない携帯ショップを、E組が手分けして見張る事になったのだ。

♪ ㄩ ㄩ ㄩ ㄩ ♪

「「「「「」」」」」

そんな中、磯貝の携帯が鳴る。

「……………」

片岡さんからメールだ。

東口の a h — u h (アーウー) だそうだ。急ごう！」

鷹岡が去った後、鳥間の訓練プログラムに追加されたフリーランニング。

その成果を遺憾なく発揮するが如く、木々を飛び移って移動する5人。

「うわわっ!？」

因みに この時、木から飛び出した数人の人影に、警備に就いていた2人の警官が驚きの余り、思わず銃を抜こうとしたのは、また別の話である。



時は少しだけ戻る。

片岡、カルマ、寺坂、木村、千葉、岡野の6人が張っていた、a h — u h ショップ。

既に営業時刻は過ぎ、閉められたシャツターの前には、2人の警察官が立っている。「ねえ、昨日の事件の事もあつてさ、警官が入り口に張り付いてるのは分かるけど、あれって意味あるのかな？」

「あの触手（イトナ）に掛かれれば瞬殺だろうけどさ、見張りがいるだけで、襲撃されない可能性だってあるからね〜♪」

岡野の疑問に、自分の考えを話すカルマ。

その時：

ドガシヤアツ!!

「「「「「ええっ?!」」」」」

何の前触れも無く、突如として店の前に現れたと思うと、黒い触手を操り、シャツターを破壊するイトナ。

いきなりの登場に、驚くカルマ達。

その頭には数本の黒い触手が蠢く。

先日、自らが斬り落とした触手も再生された様だ。

警備していた警官は、触手が繰り出す事により生まれる、音速の衝撃波をともに受けて気を失っていた。

そしてイトナは、その儘 中に入り、店内を破壊していく。

「…つたく、役に立たねー見張りだな！」

「いや、おねんねしてくれるのは、好都合っしょ？♪」

あつと言う間に嬲された警官を見てボヤきながら、

「イトナあ!!」

怒鳴りながら、店内に入る寺坂達。

その店内では、フラフラになりながらも、店の中を一通り破壊したイトナがいた。

「ハア、ハア…勝ちたい…勝てる強さが欲しい…俺は…TSUEEE…EEE…」

触手も未だ黒くはあるが、力を使い果たした様に枯れ細り、ダラリと垂れている。

体全身から汗を流し、顔は青ざめ、頭痛目眩に苦しむ様に頭を抑えながら、謔言の様

に強さに拘る台詞を口にするイトナ。

「イトナ…?」

店内に入ってきた、寺坂達を睨み付けるとイトナは、

「何だ…? 貴様等？」

…兄さ…んは何処…だ…?」

次は…負け…な…」

バタ…

「「い、イトナあつ?!」」

彼の、あの『力』への執着を消さないと…

その理由は、彼の実家の事情で何となくは察しましたが、それなら尚の事、イトナ君が触手の力を必要としている内は、触手も彼に癒着した儘、離れたりはしません。」

「……………」

「タコ…」

「何処かで彼が、力に対する考え方を変えない限りは…。」

そして、そのきっかけを作る事が出来るのは我々ではない、そう、彼等だけです。」

E組の担任教師は、教員室から、生徒達が集まっているであろう保健室の方向を向くと、小さく呟いた。

適当な時間

「……知らない天井だ。」

「……ケツ！ネタに走ってボケる余裕があるなら、大丈夫みたいだな！」

「寺坂、お前なあ……」

「イトナ、気分は どうだい？」

その日、放課後訓練が終わった後、数人の生徒が保健室に様子を見に行つた（寺坂皆勤賞継続中）その時、イトナは目を覚ました。

結局 約24時間、眠り通しだったイトナ。

目を開けた後の、その第一声を聞いた寺坂は、思わず呆れ顔で悪態を吐く。

それを諫める前原に、そして何事も無かつた様に、自然体で声を掛ける磯貝。

「……………」

「おい、黙り決め込んでないで、何か喋ったらどうだ？」

「……兄さんは何処だ？」

「兄さん？ああ、殺せんせーなら、教員室に……って、イトナ？」

ガタ……

イトナが起きたと聞き、次々と保健室に入ってくるE組の面々。

「あゝっ!!イトナ君、良かったっ!!」

目が覚めましたか? 気分はどうですか?

何処か体の具合が悪いとか無いですか?

頭痛や目眩や吐き気とか大丈夫ですか?」

そして、過保護なまでに心配性なタコもやってきた。

「…兄さん…気分…? 最悪に決まってる。

だか…ら…スツキリさせる…為…俺と此処で戦…え…」

獲物(ターゲット)の登場に立ち上がったは良いが、今にもまた倒れそうなフラフラ

なイトナが、虚ろな目で殺せんせーを睨む。

「殺せんせー…と呼んでくれませんか?」

私は君の担任ですから。」

「五月…蠅い…今度こそ…勝つ…」

勝負…し…ろ…!!」

「勝負するのは構いません。

しかし、君がいま、最優先にするべき事は心身の回復ですよ?

とりあえず、昨日から何も食べてないですよね?

先に校庭で、バーベキューでもしながら、先生の殺し方を皆で話し合ってみたらどうですか？」

「バーベキュー…?」

グウ…

その言葉に反応するように、イトナの腹が音を発てる。

「そのタコ、しつこいよ〜♪」

一度 担任になったら、地獄の果てまで教えに来るから。」

「ヌルフッフフ…当然ですよ？」

目の前に生徒がいるなら…教えたくなくなるのが先生っていう生き物なのですから。

ささっ、それよりも、皆でバーベキューしましょう。

イトナ君が その気なら、マツハで食材買いに行つてきますよ!」

「黙れ…誰が、敵の施しなんか…!!」

グツグウ…

しかし、イトナの腹は、口とは真逆の反応を示す。

「意地張つてんじやねーよイトナ…」

テメーにや散々してやられたがよ、全部 水に流してやつから、大人しく こつちに
来いや。」

「うる……や……」

バタ……

そして、それでも手を差し伸べる寺坂の呼び掛けも虚しく、再びイトナは意識を失い、倒れてしまう。

「これって……もしかして……」

「空腹で倒れたんじゃないの？」

「疲労と併せてピークだったんだらう？」

「……にしても、意地っ張りだよね？」

「触手です……」

「殺せんせー？」

「触手は意志の強さで動かす物です。」

そして、それに伴い、触手が逆に宿主の意志を強く、悪く言えば、意地っ張り、頑固者へと誘導する事もあります。」

「……「今じゃん!!」……」

「はい、イトナ君に力や強さ……勝利へと言つても良い執着がある限りは、触手細胞は強く癒着し、決して離れる事は無いでしょう。」

そうこうしている間に、肉体は強い負荷を受け続けて衰弱してゆき、最後は触手諸共、

蒸発して死んでしまう……」

「その前に、餓死しそうなんですけど……」

「兎に角、彼の力への執着を消さないと、どうにもなりません。その執着の源を……」

「おい、執着の源ってアレだろ？」

テメーの家の会社が大企業に潰されて、その結果、親に捨てられたって……

ついでに言えば、学校で その事で集団でバカにされたかで、キレてケンカになったが、返り討ちにでも なったんじゃないかね？

それで、誰にも負けない力が欲しいって、触手に手え出したってオチだろ？」

「寺坂……お前、もう少し、ソフトに言えないのかよ？」

「知るかよ！ 結論から言や、それでグレただけって話だろーが、くっだらねー！」

「寺坂君……」

「皆、それぞれ悩みってな、あんだろ。」

重い軽いの違いは、あるだろーがよ。

……けどよ、んな苦労とか悩みとか、考え方次第で、割と どーでもよくなったりするもんなんだよ……

おい村松、吉田、狭間！」

「「「あ……」」」

寺坂は村松達を呼びながら、イトナの腕を自分の肩に回して抱え起こす。そして、皆に向かって言うのだった。

「俺等にコイツの面倒、見させろや。」

それで死んだら、其処までだよ。」



『ごらん系成。』

この小さな町工場から、世界中に部品を提供しているんだ。ウチにしか作れない技術なんだ。

勉強を重ねた腕利きの職人と研究を重ねた製造器機。

近道は無いんだぞ。

日々勉強の繰り返し。

誠実にコツコツやっていけば、どんな大企業とも勝負が出来る。

誠実に努力を続けた人だけが、強くなれるんだ。』

そんな言葉は、嘘、まやかしだった：

結局、金（チカラ）で技術を盗（うばわ）れた。

圧倒的な力の前には、勉強も誠実も意味が無い。

力がある者、強い者は、力無き者が、それなりに大きくなるのを、黙って待てば良いだけだ。

力を行使して、後から奪えば簡単だから。

力があれば、誰にも邪魔はされない。

力があれば、誰にも負けない…。

だから俺は、そちら側になる為に、触手（チカラ）を求めた…。



「…はっ!!」

「よう、目が覚めたか?」

「お前…」

「おはよう。」

「吉良、もう夜だつて…」

寺坂と村松がイトナの腕を、それぞれの肩に回して下山している途中で、イトナは目を覚ました。

「お前等…俺を何処に連れて行く気だ…」

「駅前のマク〇。腹、減つてるだろ?」

心配しなくても、金は出してやるよ。」

「良いんだよ、細かい事は!!」

「…てゆーか犯人、やっぱり、お前達だったのか…」

今更だが、呆れ顔で言う磯貝。

「…でも、寺坂君、大丈夫なのかな？」

何か、作戦が…」

「渚、アイツも思う所があるんだよ…」

「吉良君？」

「あの爆破な、少しでも、アレの清算しようと必死なんだよ。」

「でも、アレについては、皆、もう…」

「アイツが納得してないんだろうよ…」

折角その気になってるんだ、挽回の機会を邪魔するのは、野暮つてもんだぜ？」

「吉良君…」

「ふくん？其処まで解ってるなら、吉良君も寺坂達に着いて行ってよ？」

「片岡さん？」

響と渚の会話に、片岡が入ってきた。

「言ってる事は解るけど、それでも寺坂がバカやり過ぎない為の監視は必要でしょ？」

「…で、寺坂、とりあえず これから、どーすんだ？」

「おう…」

イトナを抱え、先頭を歩く寺坂と村松の少し後ろを歩いている吉田が尋ねると、寺坂は立ち止まると、後方を向き、

「お前等…これから どーすんべ？」

「…はあああ?」

何とも間の抜けた笑い顔で、逆に意見を求めるのだった。

「質問に質問で返すな!!」

「何も考えてなかったのかよ!」

「ホントツツト、無計画だな、テメーわ!!」

「呆れた…」

「うるせー!5人も居れば、何かアイデア浮かぶだろーが!!」

あまりの行き当たりばったり感に、非難轟々な響達と、それに逆ギレする寺坂。
「とりあえず、何か食わせようぜ。」

俺も普通に腹、空いてきたわ。」

「…だな。」

「だったら村松ん家は？」

「村松ん家？」

狭間の言葉にオウム返しで聞く響。

「ああ、吉良は知らなかったか。」

俺ん家、ラーメン屋だよ…。」

「へへ、ラーメン、良いじゃん♪」

コイツも一杯食べたなら、気も多少は楽になるかもな？」

「バカヤロ、それ、何の罰ゲームだ!？」

あの不味いラーメン食わせた日にや、逆に更にキレて、それこそ また触手で店を破

壊しかねんぞ?。」

これに寺坂がストップを掛ける。

「あ、!?!…まあ、可能性はあるわな…。」

この寺坂の発言に村松は、一瞬キレるが、次の瞬間には同意する。

「おいおい、自分ん家デイスられてんだからよ、そこはキレるよ?。」

「いや、ぶつちやけ仕方無一よ。」

「村松?。」

「親父、俺が散々レシピ改良しろって言うてるのに、全つ然聞きやしねー。」

「どうやら村松は、自分の家の店に、不満がある様だった。

「それじゃ駅前のマク○、行かないか？」

あの店、今の時間帯なら可愛い店員さんが居るんだぜ♪

ツインテでさ、茅野ちゃん並の背丈に矢田さんレベル：下手すりゃ それ以上なのを持つててよ、まぢ、スペシャルビッグ○ツク、2プリーズ！どーん！！…みたいなの？」

「よし、レッツゴー!!」

「はあ…バカばっか…」

胸元で、両手で何かを持ち上げるポーズをしながらの響の提案に、ノリノリで応じる寺坂達を見て、溜め息を吐く狭間は、決して間違つてはいないだろう。

そして、今に至る。



「何だ？これ…？」

「くくく…修羅場つてるわねえ？♪」

響達が件のマ○ドに入った時、店内では見た目20歳位の男性店員と、同年代なOL風の女性客が、痴情の纏れか、カウンター越に何やら言い争っていた。

それを あわわわ状態で見ている、アルバイトだろうか、若い女性店員が1人。

「あ…いらっしやいませ〜♪」

「この野郎……人の奢りだからって、何の躊躇いも無くスペシャルのセット、頼みやがって……もう少し美味そうに食え！」

「……で、あの お姉さん、どうだった？」

続いて、響が接客してくれた、アルバイト店員について話を振る。

「……アレは、尋常ではないな。」

でも、悪くはない。」

『アレ』……女性店員の何の事、何処の事を言ってるのか、どの様に尋常ではないのかは察して下さいなのだが、兎に角、満更でもないイトナ。

そして、

「お前等は どーよ？」

響が寺坂達に同様に振ると、

「「吉良！お前、嫌な奴だと思ってたけど、実は凄く良い奴だったんだな!!」」

ガシッ

「はあく……」

寺坂達は、感動しながら、響に対する認識を改めたかの様な発言と共に、がっしりとシエイクハンド。

4月の渚の自爆テロ以来、彼等の間で かなり深くなっていた溝が埋まった瞬間だっ

「まあ、敷地内だから大丈夫だよ。

2人乗りは、どーだか知らないけど？」

「吉田（アイツ）、偶にサーキットにも行ってるらしいぜ。」

その様子を見守る4人。

更に店の外、フェンス越しには片岡達5人が見守っている。

「どだ？ テンション上がったか？」

「…悪くない。」

ハンドルを握る吉田の問いに、まずまずの反応を見せるイトナ。

「はっ！ それなら もっと上げてやるぜ!!」

しっかり掴まってるよー！」

ブオオツ！

バイクがトラックの直線からコーナーに差し掛かった時、

「必殺！ 高速ブレーキターン!!」

キイイツ！

「「おおっ!!」」

自身が必殺と銘打っただけの事がある、豪快なターンが見事に決まるが、

「「あぁーっ!?!」」

その勢いで、後部座席のイトナが振り落とされる。

幸いにも地面に激突する事はなく、コース脇の茂みに突っ込み、大事には至らなかった。

「あのお馬鹿！あんた達もボオツと見てないで、早く助け出してきなさい!!」

シヨックで暴走したら どーすんのよ!？」

「いや、あの程度なら平気じゃね?」

わーわーぎやーぎやー…

兎に角、バカ騒ぎな寺坂達。

(((((…)))))) それを見て、片岡達は完全に言葉を失う。

「計画性、まるで無いわね…」

「うん、ただ遊んでるだけな気が…」

「ま、アイツ等って基本的にバカだから仕方ないよ。」

「なんか、吉良君も一緒にノリノリになってるし…」

「で、でも、狭間さん頭良いから、狭間さんなら、きつと何とかしてくれる筈!」

「くくく…シロに復讐したいんでしょ?」

しかし、そんな茅野が推しの狭間は、偶々自分の鞆に入れていた、復讐をテーマにした、ダークでブラックな有名長編小説を薦めようとするのだった。

「これ読んで暗い感情、高めなさい？」

「重いわ!」「暗いんだよ!」「難しい!!」

ブーイングな寺坂達。

「あら?心の闇は大事にしなきゃ駄目でしょう?」

「もういい!吉良!!お前、何かないか?」

ダメだ　こりゃ…:そう思った寺坂は、最後の砦?である響にアイデアを求めるが、うゝむ、近くの空手か柔道かの道場に放り込んで鍛えて貰うか?

やはり健全な精神は、健全な肉体に宿るからn「お前、実は脳筋だろ!?!」

「誰がアルギエバさんだ!?!」

「誰だ、それ?」

脳筋と言われて、思わず前世(むかし)の仲間だった聖闘士の名前を出す響。

「もつと、こう…:簡単にアガるヤツってないのかよ!?!…:って、イトナ?」

「う…:うがあ…:!!?」

この時、イトナの様子が急変。

「何かヤベえ、プルプルしてんぞ?」

「少し巫山戯け過ぎたか?」

「…違うわ。これは…」

バリイッ!

再びイトナの触手が暴走を始める。

対せんせー素材のバンダナをダメージを受けるのを承知で無理矢理に引き裂き、蠢く黒い触手。

「マズいですー!」

空から様子を見守っていた殺せんせーが急降下。

「寺坂!」「イトナ君!」「吉良っち!」

外で様子を見ていた渚達5人も、敷地内に駆け付ける。

「寺坂君、皆、下がって!!」

殺せんせーが前に立ち、寺坂達に退くように促すが、

「下がるのはオメーだ、このタコ!」

「にゅっ?!」

担任を押しつけ、更に前に出る寺坂。

「そーそー、この先はガキの時間、大人は引っ込んでろつての!!」

そして、響。

「寺坂君、吉良君…?」

「俺は…普段から適当にやってる、お前等とは違うんだ…」

今すぐ、アイツを…兄さんを殺して、勝利を…!!」

前に出た2人に対し、イトナは目を血走らせ、睨みながら話す。

「おう、イトナ…俺も、つい この前までは そう考えてたぜ。」

あのタコ、今日にでも ぶっ殺してやりてーつてな。

…でもよ、少なくとも今のテーマにや、今すぐ奴を殺るなんて無理だ。」

「もつと楽に考えてみようぜ?」

無理なビジョンなんか捨ててよ?」

寺坂と響は真剣な、且つ力を抜くと、笑みを浮かべた顔で話し掛けるが、
「黙れ!!お前等に俺の、何が分かる!」

ブンツ!!

そんな言葉にも、聞く耳を持たない2本の黒い触手が2人に襲い掛かる。

ガシイツ x 2!!

「うっ!!」

その鞭の様に撓りながら、横殴りで襲ってきた触手を、2人は揃って腹、両腕、脚を使ってガツチリと、顔を歪めながらも受け止める。

「2回目だし、やっぱし前より弱ってるからな、捕まえ易いわ。」

吐きそうな位、痛てーけどな！」

「刺突なら、地味に危なかつたけどな？」

明らかに痛いのを我慢して、強がりの笑いを見せる2人。

「それに、片岡さんや岡野さんが投げる拳銃のが、もつと痛てーしな！」

「…だ、そうだよ、片岡さくん？♪」

「あ、あれは あの露出狂が悪いの!!」

角と羽根を生やして茶化すカルマに、片岡は顔を赤くして必死に弁解する。

尚、拳銃（エアガン）という武器は、本来は弾を込めて撃つ武器であり、顔を目掛けて投げる様な、投擲武器等では断じてない。

因みにだが、響は今回、小宇宙を使つてのガードはしてはいない。

只の人間である、寺坂が生身で受けようとしたという、負けず嫌いな物もあるが、瞬時に必要無しと判断したのである。

仮に必要があつたなら、小宇宙全開で、寺坂と一緒にダメージを防いでいただろう。

「吐きそうって言や、村松ん家のラーメン思い出したぜ。」

「ほっとけ!!…なあ、イトナ…」

寺坂に突っ込みを入れた村松が、その儘イトナに話し出す。

「あのタコな、前に店（いえ）の事を話したら、俺に経営の勉強、奨めてきたんだぜ？」

今は不味いラーメンでも、何時か俺が店を継ぐ時、新しい味と経営手腕で勝負しろってよ…。」

「それ、俺も同じ様な事を言われたわ。」

い・つ・か・絶対に関に立つってよ。」

吉田が続けて話す。

「イトナよお…。」

ゴンッ

「痛てっ!？」

「テメー、1度2度負けた位でグレてんじゃねー!？」

い・つ・か・勝てたら、それで良いじゃねーかよ!!」

そう言いながら、拳骨を落とす寺坂。

「いつか…?」

「おう、あのタコ殺すつてのもな、別に今じゃなくて良いんだよ。

1000回失敗しようが10000回失敗しようが、3月までに たった1回殺れたら、それだけで俺達の勝ちだ。」

「親の工場だったか？」

その時の賞金で買い戻したら良いだろ？

そしたら、親も戻ってくるさ。」

響も、諭す様な顔で語る。

そんな響達に、イトナは自信無さげな顔で俯き話す。

「…考えられないし、耐えられない。」

その、勝利のビジョンが出来る迄：俺は一体、何をして過ごせば良いんだ？」

「「「はあ?」「」」」

イトナの台詞に、この日、最高の呆れ&引き顔を見せる響達。

くつくく…うぷぷ…

ぎゃあーっはっはっはっはっはっはっは!!

そして次の瞬間には、大爆笑。

「な…何が可笑しい?」

「そ、そりやあ、オマエ…」

「何をするってよ…」

「？」

「今日みたいに、皆で適当にバカやって過ごすに決まってるんだろが！

その為にE組（おれたち）が居るんだよ!!」

「え…?」

寺坂の言葉を聞いたイトナの目が変わる。

「さっきみたく、何か食いながらよ、『あのお姉さんのおっぱいパねえ!!』とか駄弁つてみたり…」

「バイク乗ったりしてな!」

「皆でプリン食べてみたりい♪」

「スポーツとかな!」

「皆で渚君を弄ってみたりね♪」

「カルマ君…それは違うと思うよ…。」

然り気に会話に参加している渚達。

「あはは…冗談だよ、渚君♪」

「ホントに…?」

笑うカルマにジト目の渚。

「見てみなよ、渚君、茅野ちゃん。」

「え？」

そんな渚と茅野の腕を引っ張り、イトナや寺坂達と少し距離を開けると、カルマは2人に小声で話す。

「寺坂つてさ、基本バカだから、あーゆー適当な事を平気で言えるんだよね？」

「カルマ君…？」

「でもね、あーゆーバカの適当な一言つてさ、こーゆー時に凄く力、抜いてくれるんだぜ？」

カルマの言う通り、イトナの顔から険が取れ、触手も力が抜けた様にダラリと垂れ下がりがり、その色も黒から白に変わる。

「俺は…焦っていたのか…？」

「…じゃね？」

イトナの眩きに、笑みを浮かべながら応える寺坂。

「イトナ君…」

「兄さん？」

改めて殺せんせーがイトナの前に立った。

「バンドナ、似合ってるぞ♪」

「…気に入った。」

「おっは〜♪」

「…おはー」

久しぶりのイトナの『登校』に、顔を合わせる度に声を掛けるクラスメート達。

既に昨夜の件は、その場に居合わせていなかった生徒にも、渚達がメールで報せていたので皆、事情は知っていた。

「お、イトナ！今朝買ったグラビア、一緒に見るか？」

「見せろ。」

ガンツ!! x2

「痛い!」

「いきなり変態（あく）の道に引きずり込もうとするな！この変態終末期が!!」

「イトナ君も！安易に変態（あっち）側に行ったりしない!!」

~~~~~

「ヌルフフフフ…」

おはようございます、イトナ君。

気分はどうですか？」

「最悪だ。力を失ったんだから。

でも…」

ホームルームが始まる少し前に、教室に入ってきた殺せんせーの呼び掛けに、イトナは応える。

「…弱くなつた気はしない。

だから、いつか…必ず殺すぞ…

殺せんせー。」

首狩りポーズからのサムズダウンで意思表示したイトナは教室後方、寺坂の隣の自分の席に着く。

『問題児・堀部イトナ』が正式にE組に加入した。



放課後。

「寺坂、腹が減つたが金が無い。

昨日のマ○ドで また奢れ。」

「はあ?」

…因みに寺坂組にも加入した。



## 戦闘車輛の時間

教室には、2台の木製学童机を向かい合わせに置き、その席に着いている、バンダナを巻いた少年と黄色いタコがいた。

シユパツ

突然、少年の手にした特殊素材のナイフが黄色いタコに向けて放たれる。

「あ、そういうのは、まだ良いですから。

はい、これ、次のテストね。」

「ぐぬぬぬ…」

堀部イトナが本当の意味で、E組の生徒として登校してきた。

この日の放課後、彼は殺せんせーとのマンツーマンで、現時点での学力確認の意味を含めた、特別補修を受けていた。

暗殺対象（ターゲツト）が手を伸ばせばナイフが届く位置にいる…。隙あらば、そしてあわよくば殺ってしまうと機会を窺っていた…。という訳でなく、単に補修が嫌で、さっさと教室から逃げ出したいという思考故の暗殺行為だが、このイトナがナイフを持った手首は、あっさりと黄色い触手に絡め止められてしまう。





「おい、何か的ないか？的！」

「空き缶があるだろ？」

シュツシュツシュツ…カカカアン！

「「「「「おおうっ!!」」」」」

砲台から撃たれたBB弾は、狙った空き缶に見事に命中（ヒット）。

「ひゅー♪」

「凄いな…走る時も弾撃つ時も、殆ど音がしないってよ…」

「使えるな、これ！」

「イトナ君、解説！」

「…電子制御を多用する事で、ギアの駆動音を抑えている。

カメラはスマホを流用、銃の照準と連動して、コントローラに画像を送るんだ。」

「スパイみたいだな？」「かけー！」

「でもよ、これ…」

「吉良？」

「安くはないだろ、いくら掛かった？」

「…さあ？」

「「「「「はっ？」」」」」

「請求書は全て、防衛庁に回す様になっているから、俺は値段は知らない。」  
(((烏間先生、南無!)))

この時、E組の面々の頭の中には、請求書を見ながら、苦虫を口の中一杯に含んで噛み締めている様な烏間の顔が浮かんだ。

「ま、まあ、早速、教員室に向かわせてみようぜ……」

「あ、そうだな……イトナ?」

必要経費を全て、防衛庁に押し付けたと普通に言うイトナに対して、やや引きし、脳裏に浮かんだ烏間のビジョンを振り払おうと、気分転換の意味合いを込めて、早速、殺せんせー暗殺を勧める磯貝達。

それには皆が合意し、このラジコン戦闘車輛を教員室に進めるが、教員室には誰も居ない。

「不在かよ……」

「また、明日だな。」

結局この日は、これで解散となった。

尤も寺坂を始め何人かの男子は、その儘ラジコンを操作して、夜まで遊んでいたのだが、それは別の話。





事がある。」

「イトナ？」

鬼女達から解放されたイトナが、皆を呼び集める。

「奴を殺る際の、狙うべき理想の一点。」

柳沢から聞いた、あのタコの急所だ。」

「急所？そんなのがあるの？」

「おい、まさかとは思うが、それって〇んたm「言うなー!!」（ガン!!）あべしっ!!」

「……岡島ーっ?!」

顔面と云わず体中に、無数の拳銃（エアガン）が投げつけられ、岡島は倒れた。

「…続けていいか？」

そこにヒットさせれば、一発で絶命出来るそうだ。」

「イトナあ、勿体ぶらずに言えよ？」

「…位置は、ネクタイの真下。」

丁度、あの三日月マークの真下だ。」

「それって…」



その頃、教員室では、

「又ルフッフッフ…」

イトナ君が加わり、私の心臓（きゆうしよ）の事も、恐らくはバレたでしょうねえ…。  
ますます、暗殺が楽しくなりました。」

「弱点が知らせた割には、嬉しそうですね？」

「はい、生徒達に戦略の幅が広がるのは、先生として、単純に喜ばしい事です。」

「彼は…触手の無い彼は どうなんだ？」

「2日に渡り、補修と小テストで学力を試してみましたが、思っていた以上に学力は高い！

確かに学校に通っていないなかった分の遅れは否めません。

正直、1学期は厳しいですが、2学期には皆に追いつけるでしょう。」

「意外ね…触手を振り回すイメージしか無いせいかな、そこまで頭イイなんて感じられないわ？」

「…それは恐らく、その触手のせいです。」

殆どのエネルギーを触手に吸い取られる為に、人間としての能力、特に理性的な面は、著しく低下していた筈。

それに彼は暗殺に関しては、本来は近接武器を使った肉弾戦でなく、射撃、或いはメカ等の特殊な武器を使うのが専門だと思われませんか。」



「成る程な…ハア…」

そんな会話がされていた。

「あら、カラスマ、何なの その紙？」

…請求書？」



休み時間、屋外を走行する、ラジコン戦闘車輛が、  
ガン！

校庭の角の木に激突した。

「あー、このヘタクソ！」

吉良、貸せ！俺が動かす！」

「バカヤロー前原、次は俺だ！」

次は自分だとばかりに、コントローラを取り合う男子達。

「やっぱりお前達は無理だ。」

【糸成壱號】、壊される前に、これより撤収する。」

「「「「「はああ?!」んだと固羅あ、イイトナあ!!」(笑)「「「「「」

「無愛想だからさ、クラスに馴染めるかな?とか思ってたけどさ…」

「心配無用みたいね。」

「やっぱり男子つてき、メカとか好きだなんだよね〜？」

皆のツボ、がつつり掴んでるじゃない？」

「んん。漸くメンバー勢揃い。」

これからが本格的暗殺スタートだ。」

そんなイトナの周りに出来た人ばかりを、女子達も微笑ましく見ていた。



あの時、触手が俺の頭の中に直接、聞いてきたんだ。

『どうなりたい？』

だから「強くなりたい」と答えたら、それしか考えられなくなって…ただ、朦朧として、戦って戦って戦い抜いて、それで勝つ事しか、頭に浮かばなくなった。

『最初は細い糸で良いんだ。

徐々に紡いで強く成れ。

それが「糸成」…お前の名前に込めた願いだ。』

何故、忘れていたのかな？

自分のルーツ…

最初からコイツ等と此処で、此処からバカやりながら、始めれば良かったんだよな？



「「ば、化けモンだーっ?!」」

それは、放課後訓練の後、プール付近まで遠征していた【糸成壺號】が、教室へ帰還中の事だった。

突如、背後から襲ってきたのはニホンカワウソ（絶滅種）。

「逃げろ！」

【糸成壺號】は逃げ出した！

しかし、回り込まれてしまった！

「撃て！撃つんだ!!」

【糸成壺號】の攻撃！

ミス！

ダメージを与えられない!!

「銃のパワーが全然足りねー！」

改造強化の必要があるぞー！」

「てゆーかさあ、このカワウソ、何だか凄く怒ってない〜?」

「「「え、えっ?!」」」

…それから少しして、コントローラの画面映像は途絶えた。



ガラ…

「お…お…」

教室に入ってきたのは、木村と響。

「あつ、どうだった？」

「いや、それがさあ…」

「あつたのは あつたんだけど、ほれ…」

「」「」「うあつちや…」「」「」

ボロ…

響が皆の前に出したのは、無残にも破壊、大破した「糸成壱號」だった。

「まさか、カワウソに襲われるとはな…」

「しかし、火力不足もだが、お陰で他にも、改良点は色々と見えてきた。

とりあえず、ドライバーと狙撃手（ガンナー）は分担させるべきだ。」

「…だ、そうだけ、千葉？」

「お…お…」

他にも、段差に強い足回りに、学校の景色に紛れる車体の迷彩塗装…

視野角の広いレンズに録画機能…

皆が意見を言い合った。

「皆、この【糸成老號】は結果、失敗作となった。

…だが、これからだ。

これから紡いで強くする。

寺坂も、バカ面で俺に言った。」

「はあ?!」

「1000回10000回失敗しても構わない。

最後に殺れたら、それで良いってな。」

「お前、偶には言い事 言うんだな?」

「ケツ…るっせーよ…。」

「最後には必ず殺す。

…だから、これから宜しくな、お前等。」

「おう、お前もな、イトナ。」

イトナの言葉に、皆を代表するかの様に磯貝が、イケメンな笑顔で応える。

「とりあえず、当面の目標は3月までに、【糸成】シリーズで女子全員のスカートの  
中を  
偵察コンプリートだ!!」

「「「「「お〜う!!」」」」」」

暗殺とメカとエロ……この3つの要素で、E組男子が、今 正に一枚岩となった瞬間だった。

しかし、その時、

「「「「「ほほう……?」」」」」

「「「「「え、っ……?!」」」」」

男子達が恐る恐る、声が出た方向に振り向くと、そこに居たのは片岡、岡野、中村、速水、矢田、倉橋の6人。

「なっ?!お前等、帰ったんじゃないのかよ?」

「教員室でビッチ先生と、少し お話してたのよ!」

「「「「「な、何だってー!!」」」」」

「……で、教室の横を通った瞬間、岡島のアホな発言が聞こえたって訳。」

「律、あのバカ丸出しな掛け声、誰が言ったか、正確に割り出せる?」

「はい!既に終わらせてます!!」

磯貝さん、千葉さん、渚さん、カルマさん以外の全員です!!」

この名前を聞いた瞬間、何故かホツとした表情を浮かべたのは片岡と速水。

逆に、岡野は夜叉の形相を浮かべる。

「「「「「り、律うっつ?!」」」」」

「えっちい人は、嫌いです♪」

「よし、お前等、とりあえず正座な？」

少し、OHANASHIしようにぜ？」

「返事は「YES」か「はい」の2択ね？」

「拒否権は無いよ？」

「「「「「はい……(泣)「「「「」

その後、律の挙げた4人以外の男子は、片岡達と夜の遅くまで、OHANASHIしたとか、されたとか。

そして……

「かくやのちゃん？」

「……………」。

更には翌日から数日間、女子達に口を聞いてもらえなかったのだった。

「「「男子、サイテー!!」」」

「あはは……まあ、仕方無いよね……。」

## 図書室の時間

櫛ヶ丘中学校では成績が全てである！

そんな成績絶対主義の この学校の、1学期の総仕上げ、決戦の場が…!!

「……期末テストです!!」

教室内、50体分身で個別指導している殺せんせーが力説する。

「殺せんせー、また今回も全員50位以内を目標にするんですか?」

「いえいえ、確かに皆さん、この1学期の間に基礎がガツチリ出来てきました。

この分なら、期末テストの成績はジャンプアップが期待出来ますが…」

「期待出来ませんが?」

「先生、あの時は総合点ばかり気にしていました。

ですが今回は…この暗殺教室にピッタリの目標を設定しました!」

「……ほほう…?」

生徒達の目が変わる。

「にゅやー!」

「……なっ?!」







「ん？奥田さん、珍しく気合い入ってんじやん？」

下山中、カルマが奥田に話し掛ける。

「はい！理科なら大得意ですから！」

理科ならトップ狙えます！」

「成る程、触手ね？」

「やつと、皆さんの役に立てるかも！」

「…だよね。」

気合い入りまくりな奥田愛美。

「それに、1教科限定なら上位ランカーって結構いるし、皆、かなり本気でトップ狙ってるよね？」

「全く、殺せんせーは…乗せるのが本当に上手いよね…。」

「総合は、吉良とカルマに任せて良いんだよね？」

「おいおい、他力本願だなく？」

まあ、良いけどね？」

「あと、心配なのは…」

「理事長の、妨害…？」

「…ですよねー？」



「E組の成績を落とす為ならば……手段選ばず何でもする……」

私の事を、そう思っていますか？」

「いいえ……でも、横の堅物が、貴方を疑った聞かないんですの。」

「……………」

その頃、烏間とイリーナは理事長室を訪ねていた。

「別に、中間テストの時に、急な範囲変更をE組にだけ知らせなかつたりとか、彼等の試験中、教室に宛てがった試験官に、明らかな嫌がらせの妨害を指示したりとか、また今回の期末テストでも、そういうのをやらかすとか危惧してる訳ではありませんし、まさか、E組如きに 其処迄しないと、本校舎の生徒は勝てないの？……とか思っている訳でもありませんわ？」

明らかに思っているイリーナ。

「前科アリで信用無しですか……」

（嫌がらせというのは、私は本当に関係無いですけどね……）

まあ、仕方ありませんね。

釘を刺しに御苦勞ですが、御安心を。

今回は、本当に私は何もする心算はありませんし、「今回？」ははは……手厳しい。

それに……私の学校は、生徒の自主性も育てています。

最終的に成績を決めるのは学校ではなく、あくまで生徒自身ですから……。」

「自主性……ですなぁ？」

~~~~~

「何だか、含みある言い方だったわね？」

「ああ、そうだな。……だが、前回みたいな不正ギリギリな小細工は無さそうだな。」
理事長を退室し、廊下を歩きながら会話する、鳥間とイリーナ。

「ま、今回は、成績が直接に暗殺と関係するみたいだし、私も一肌脱ごうかしら？」

「ほう……？」

「保健体育なら任せなさい！」

何ならカラスマ、その会議室で予行演習してみる？」

そう言いながら、鳥間の腕を引っ張り、会議室に連れ込もうとするイリーナだが、
ゴン！「痛いっ?!」

当然ながら次の瞬間には、鳥間の拳骨が頭に落ちた。

「使用中の表示になってるだろうが！」

……ていうか、外国語は何処に行った？

外国語は？」

「そりゃーオメー、生徒会長権限か、理事長（ばば）の威光を使ったかに決まってるだろーが。」

「坊やだからね〜?」

「必死なんだよ、アイツ等も。」

「吉良君?」

「中間でトップを俺、カルマにも4位を持っていかれたからな。」

奴等からすりゃ、E組がトップは勿論、自分達の上位に座るのが赦せないんだろ。

ついでに言えば、この前の野球の事も、まだ根に持つてるんじゃないの?」

…小さなプライドさ。」

「ついでに言えば、あの理事長にさ、中間テストや、あの野球の後に、『ガクシユウクン、これは一体、どういう事だい?』とか、OHANASHIされてたんじゃないの〜?♪」

A組が行っている、会議室での、お勉強会とやらには、全然興味も驚異も全く示さないE組の面々。

「こつちは、なんつっても、音速タコのマンツーマンだからな!」

あつ、寺坂はIon3だったか?」

「やかましいわっ!!」

それは決して慢心や自惚れでなく、自身の自信なのだろう。

「おおい、渚、茅野さん、2人は放課後空いてないかい?」

「磯貝君?」

授業が終わると同時に、磯貝が渚達に声を掛けてきた。

「何かあるの?」

「いや、予定無いなら、図書室で勉強会どーよ?…って思ってたさ。

ウチの学校、学習書の揃いは半端じゃないからさ、普通に入っても席は一杯だろ?

しかも、E組（おれたち）は、普通には図書室には入れない。」

「…うん。」

「そ…こ…で…これだ!!」

「おお!そ、それはもしかして、予約券!」

「ああ、期末を狙って、ずっと前から予約しといたんだ。

E組は基本、後回しにされるから、俺達にとっちゃ、プラチナチケットだぜ。」

「全部で6人か…」

「磯貝君、あたし達で、いいの?」

「ああ、構わないぜ?」

「あたし、行く!」

「僕も！」

この時点で とりあえず、磯貝、渚、茅野、奥田の4人が行く事になり、

「吉良君と千葉君は？」

渚が すぐ隣で将棋を打っている、響と千葉に声を掛けると、

「俺は…いいや。」

と、千葉。

そして、

「実は俺、中間テストの時のアレで、図書館って自由に入れるんだ。(テストの時間参照)」

そう応えたのは響。

「え？そんなの？」

「まあな。でも、図書室なんかの出入りは俺個人の権利で、E組(みんな)との同行までは流石に認められなかったんだ。」

ほれ、俺って、本校舎(あっち)じゃ何故か、危険物扱いされてるじゃん？

そんな俺が、ぼっちで図書室に行っても悲しいから、活用しないで黙っていた。」

「そうだったんだ…」

「ああ、だから俺は、そのチケットとは別枠で一緒するわ。」

…てか磯貝、お前、何故に片岡さんを誘わない？」

「ええ!？」

「それ、あたしも不思議に思ってた。」

「いや、実は真つ先に声を掛けたけどさ、今日は家の用事があるって言われて…
凄く暗い顔で話す磯貝。」

(な、何か、ゴメン!!)

それを見た響と茅野は心の中で、心の底から謝るのだった。

結局 図書室には、先の4人に中村と神崎が加わる事になった。

「じゃ、行こうか。」

「あ、先に行つて、俺の椅子、キープしていてくれよ。」

この一局、終わらせたら俺も行くよ。」

「分かった。時間、決まってるから成る可く早くな?」



「理事長先生、期末テストに先駆け、A組成績の底上げに着手しました。」

「これで宜しいでしょうか?」

「浅野君、必要なのは、経過でなく結果だよ?」

報告なら、結果が出た後で構わない。」

「……………!!」

理事長室で交わされる会話は、相も変わらず、実の親子のそれではない。

「E組が他を上回ってはならない。

あらゆる面でね。解ってるのかい？

それは、私の理念に反する。

まあ、この前みたいな不様は晒す事はないと、期待しているからね。

あ・さ・の・く・ん・？」

「…失礼します!!」

浅野学秀が退室した後、1人残った理事長、浅野學峯は笑みを浮かべながら呟く。

「ふふ…今回は あちら側の先生達との事もあるし、私は本当に、何の手も出さず、お手

並み拝見と行かせて貰うよ？

合格ラインは…総合1位は勿論の事、トップ50をA組が独占する事かな…。

それが君に出来るかい？浅野、君、？」



「あゝ、やっぱり勉強は環境だわ〜♪」

Eアコンが適度に効いた図書室で、中村莉桜が呟く。

「まあ、否定はしないけど……」

図書室で参考書を積み上げ、試験に備えて勉強している渚達。

「おや？ E組の皆さんじゃないですか！」

「「「「「!!!」」」」」

「勿体ない。」

君達に、この図書室は、豚に真珠じゃないのかな？」

其処に声を掛けてきたのは、A組の荒木、榊原、小山……そして前日、中間テスト明けからの停学が解け、この日、久しぶりに登校してきた瀬尾だった。

「うわっ……5英傑かよ……」

明ら様に嫌々な顔をする中村。

「おら どけ、この雑魚！」

そこ、俺達が座るから さっさと帰れ。」

瀬尾が まるで犬を追い払う様な仕草で退席を強いるが

「ここは俺達が ちゃんと予約して取った席だ。」

磯貝も退かない。

「ぎしししし……君達は、本当に記憶力が無いんだなあ？」

絶対成績至上主義の この学校じゃ、E組はA組には逆らえないの！解る？」

気味の悪い笑い方で、小山が言うが、

「逆らえます！」

その台詞に抗うのは奥田愛美。

「はあ？」

「私達、次のテストで全科目1位を狙ってるんです！」

そしたら大きな顔、させませんから！」

「な……口答えすんな、このメガネが！」

「まあ小山、面白いじゃないか。」

じゃ、こういうのはどうだい？」

ここで荒木が会話に入る。

「俺達A組と君達E組……」

5教科で より多く学年トップを取ったクラスが、負けたクラスに どんな事でも命

令出来る……」

負ける気など皆無なのだろう、自信満々に言い放つ荒木。

「「「「「……………」」」」」」

それを聞き、黙り込む磯貝達。

「どうした？急に黙り込んで、もしかしてビビったのか？」

自信があるのは口だけか？

何か言ってみろよ、この雑魚が！」

瀬尾が嗤いながら煽る。

ゴツゴツ…

「ぎししし…何なら、コッチは命賭けても構わないぜ〜？」

奥田の頭を叩きながら、小山も瀬尾の台詞に便乗するが、

ガシ…

「いいぜ…その賭け、乗った!!」

…つてか、きつしよい笑いしながら女子の頭、コンコン叩いてんなよ？

こ…の・ワカメガネ？」

後ろから小山の手を掴み止めると同時に、

ゴンっ!!

「ぎゃあっ?!」

そのワカメ頭に強烈強力な拳骨を撃ち込む男が1人。

「吉良さん？」 「「吉良君？」」

「吉良！」 「吉良っち！」

「よっ、お待ち！」

「「「き、吉良あつ?!」「」」

吉良響だった。

ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

超々・危険人物の いきなりの登場に、静かにすべき図書室が瞬時に ざわめき立つ。そんな光景を見た中村が、誰に聞かれる事なく、ポツリと呟いた。

「死亡フラグが立ちました!!」

命令の時間

死亡フラグ：

一般的には小説やコミック、アニメや映画等で、近い未来に登場キャラクターの死亡を予感させる伏線の事を指す。

王道パターンとして、戦争物で出撃前に、「俺、この戦いが終わったら、故郷に帰って、恋人と結婚するんだ」等とリア充自慢したり、推理物で、蝶ネクタイをしたメガネのチビと知り合ったり、やはり推理物で、主役より先に、「分かった！犯人はアイツだ！」と、その人物が背後に居るのに気付かず、口走る（しかも、具体的に名前を言わない）とか、急に優しくなるヤ○ザとか、北斗七星の脇に光る、小さな星が見えたりするとか…等がある。

超々・危険人物が背後から登場したにも拘わらず、その存在に気づく事なく、その人物の友人達に対して調子に乗り、大柄な態度を取ると言う行動は、正しく其れと云つても間違い無いだろう。

「おらっ!!」

ドゴツ

「ぎゃん!？」

拳骨では終わらず、続けて小山の鳩尾に響の鋭い前蹴りが突き刺さる。

「「「きゃああああああつ!?!」「」」

超々危険人物登場早々、更なるヴァイオレンスな展開に、騒然となる図書館。

「う……が……」

響は そんな状況に御構い無く、腹を押さえて蹲っている小山の頭を鷲掴みして無理矢理に引き起こし、顔の眼鏡を外すと、

「おい、その刈り上げ、持ってる。」

「うわっ!？」

榊原に投げ渡す。

「な?女の子に暴力は無いよ・な!!」

ボギイツ!

「ほげえっ!？」

そう言うとうと今度は、顔面の真ん中に、思い切り正拳を打ち込む響。更に次なる一撃を放とうとした瞬間、

「や、止める、やり過ぎだろ!？」

見かねた荒木が止めに入るが、

「ううう…」

「文句は無いよな？」

この成績至上主義のこの学校じゃ、暫定的にこの俺が、一番の正義だぜ？
外じゃ兎も角、敷地内じゃ、俺は成績下位者には何でもアリだよな？

カルマの停学ん時の背景が、見事な迄に前例を作ってるから、今更 誤魔化しは利かないぞ？」

カルマの停学理由：

前年度の3月、当時の成績トップだった3年生徒を中心とした数人の生徒が、E組生徒を集団リンチしていた所を、カルマが割って入った件。

「え？イジメを止めて、何が悪いの？」

その声は認められず、結果から見れば、発端となった集団リンチについては触れる事は無く、成績優秀な生徒に怪我を負わせたというカルマだけが、停学処分という形になったのだった。

「あの実例があるからな、俺は お咎め無しだ、心配するな。ところで、瀬尾？」

「な、何だよ？」

「お前、何で こんな所に居る？」

お前、一応はA組在籍だが、待遇はE組同等な筈だぜ？

勝手に図書室、入ってんなよ・な!!」

バキイッ

「うげっ!!」

そう言うと、今度は瀬尾の顔に喧嘩キックを炸裂させると、

「勘違いして、偉そーにしてんなよ？」

失せろ、この雑魚が。」

冷たく言い放った。

「待て、瀬尾は、僕達が誘ったんだ!」

「知るかよ…『俺はE組と同等な待遇だから…』の一言で、断つてれば済む話だ。

それをせず、誘われたからって、ノコノコやってきたコイツが悪い。…だろ?」

バキイッ!!

「かっ!?!」

榊原の擁護も一蹴、更に瀬尾の腹に蹴りを入れる響。

「オラ! さつさと出ていけや、固羅?!」

まるで『物』を見るかのような、冷たい視線を向けて響は言葉を続ける。

「クツツが…!!」

そんな響に瀬尾は、積年の怨みを持つ敵を見るかのように睨みつけると、

「オラ、どけっ!!」

周りの生徒に八つ当たりするかの様に、図書室を後にした。

「あでおくす♪」

そんな瀬尾を、ハンカチを振りながら見送ったのは、響と中村莉桜である。

そして、

「き、吉良、お前、さっきの言葉、忘れるなよ!?!」

「あ?さっきの言葉?」

全身が襤褸々々になった、荒木が響に問い詰める。

「勝負、受けるって話だよ!」

それに榊原が追随する。

「ああ、あれね、別に良いけど…

…てか、良い…:だろ?…:よね?」

そう言うと、響は「もしかして俺、やつちやつた?」…:みたいな罰の悪い表情を浮かべ、磯貝達の様子を伺うが、

「はあ…:もう良いよ…:」

やれやれな呆れ顔で溜め息を吐いた磯貝も、勝負を了承する意志を見せる。

「どーせ あたし等、そんな賭けとか関係無く、完勝する気だったしね♪」

そんな磯貝とは対照的に、ノリノリな姿勢を見せているのは中村。

「あはは…仕方無いよね…」

残る渚達も、引き攣った顔で、乾いた笑い声を飛ばす。

「…てゆーか、お前等、あんな賭け持ち出すなんて、俺やカルマの存在、忘れてね？」

どーせ最初、俺がいないからって調子に乗ってたんだろ？」

「くっ…」

正しく、その通り、完全に凶星を射抜かれ、何も言葉を返せない荒木。

更には

ヒュン…

「ひうえっ?!」

小山の眼前に、いきなり響の拳が現れる。

「特に、命賭けるなんて、軽はずみに言うもんじゃないな…」

(俺達、暗殺教室の生徒にはな…)

先程とは違いって寸止め狙い故に、勢い余って本当に顔面を殴るといふ展開を避ける為、敢えて小宇宙を燃烧させる事で集中力を高め、正確にナノ単位で拳を止めた響が言

う。

「英語数学が出来ても、そっち方面で頭良くないと、お受験はクリア出来ても社会じゃ役立たずだぜ？」

そんな事も解らないの？バカなの？

死ぬの？てゆうか、死ぬ？」

「「なっ…!?!」」

余りの挑発に、顔を真っ赤にする小山達。

「じよ…上等だよ、受けるんだな、この勝負!!」

「死ぬよりキツつい命令してやるう!!」

「こ…後悔するなよ！」

捨て台詞を吐いて、図書室から去って行く荒木達。

「「ばいび〜♪」」

そんな3人を、響、中村、茅野がハンカチを振りながら、見送るのだった。

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわ…

5英傑（浅野除く）が去った後も、未だに騒動が収まらない図書館。

そんなざわつく生徒達に、響が目を向けると、

「ひっ?!」

その場所本来の姿である様に、瞬時に静まり返る図書館。

その直後、響は皆に顔を向け、背筋を真っ直ぐ伸ばして直立すると、

「お騒がせしました。」

上半身をきっちり45°に傾け、謝罪した後に着席。

「さて、勉強勉強♪」

その後は何事も無かったかの様に、参考書を開き、試験に備えるのだった。

「……………」

当然、そんな響達に物申せる勇者は既に図書室には居らず、更には利用予約時間が過ぎても退席しないのを戒める事が出来る猛者は図書委員を含めて居る筈もなく、結局E組の7人は、閉館時間まで有意義な時間を過ごしたのであった。

念の為：響と中村の2人以外は、かなり遠慮がち&恐縮しまくりだった事を、付け加えておく。

そして、この図書館の騒動は、その場にいた生徒達により拡散し、たちまち全校生徒の知る所となった。



ゴッツ!!

「痛ひ…（泣）」

「気持ちに分かるが、やり過ぎだ!!」

翌日、騒ぎを聞いた烏間から、普通に説教され、まるでギャグマンガみたいなきなタンコブを、頭にリアルに作った響の姿があったという。

「久しぶりに見ました…」

「烏間さんの、殺人拳骨…」

その様子を見て、鶴田、鵜飼、園川の3人が我が身を抱くように震え、戦慄したのは、また別の話である。



「瀬尾…君達がE組と賭けをしたって噂、完全に校内に広まつてるよ。」

5教科トップを より多く取れたら勝ち…

負けたクラスに どんな事でも命令出来るってね？」

「わ、悪い、浅野…下らん賭けとは思ったけどよ…E組（やつら）が つつかかって来るから、つい…」

最初に磯貝達に ちよつかいを出したのは、当然だが瀬尾達。

それを誤魔化す様に、自分達の頭である、浅野に必死な言い訳。

しかし、浅野は そんな事は見抜いているのだが、

「…ま、別に良いよ、そっちのが、A組（ほくたち）にも緊張感が出る。」
ほっ…

その言葉に、自分達の嘘がバレてるのも気付かず、安心の表情を浮かべる瀬尾達。
「ただし、ルールは明確にした方が良いだろうね。」

勝った後でゴネられるのも面倒だし。

…そうだ、こうしよう。

勝った方が下せる命令は『1つ』だけ。

その命令は、テスト後に発表する。

E組に伝えておいてくれ。」

「1つだけ？ちと物足りなくないか？」

「負けたリスクを考えたのか、浅野？」

「ふっ…」

瀬尾の言葉に、浅野はノートパソコンを開くと、高速ブラインドタッチで何やら打ち込み始め、

「僕達の命令は、『この協定書に同意する。』…この『1つ』だけさ。」

パソコン画面にて作成された、協定書を見せるのだった。

「「「「「はあ!?!」「」」」」」

瀬尾達だけでなく、周りにて、さり気やかに会話に聞き耳を立てていた生徒達も、それを見て目を丸くする。

その協定書には、約50項目以上に渡る、E組がA組に対する従属を強要する内容だった。

「ぎしししーこりや傑作だ！

奴隷じゃないか！」

「これ全部、今の一瞬で閃いたのか？」

恐ろしいな……」

「ははは……自分も自分が怖いよ。」

そう言うと浅野は席から立つと、教室内の皆に呼び掛ける。

「皆、僕が、これを通して言いたいのは、やるからには真剣勝負だつて事だ。

どんな相手にも、本気を出して向き合う！」

それが、このA組に席を置いた、僕達の義務なんだ！」

「「「「「おう!!」」」」」」

浅野の言葉に、A組の生徒達が呼応する。

A組の生徒達は、皆 理解している。

彼が並べる言葉は全て奇麗事だ。

爽やかな顔と奇麗事の裏に、腹黒い戦略と支配欲がある。

それは、十分に解っている。

…だが、実力とカリスマがある奴は、その奇麗事を正義に出来る。

浅野を信じ、付いていけば、必ず勝てる!!

それは正に理事会の息子であり、3年のA（エース）が集まったA組の、その中の絶
対的エース!!

コイツより強い生徒なんて、櫛ヶ丘（ここ）に居る訳がない!…と。



「ふああ…」

「こちらカルマ君…真面目に勉強しなさい！」

君なら充分、総合トップが狙えるでしょうに!!」

どこか集中力が抜けているカルマを注意する殺せんせーだが、

「大丈夫だよ、誰かさんの教え方が優秀だからね。」

今の俺なら、浅野君にも吉良つちにも勝てるよ。」

余裕の態度を見せるカルマ。

「けどさあ誰かさん？」

あんた最近、「トップ取れ」とか「良い点取れ」とか…何だかフツーな先生みたいな安

くて つまんない事しか言っていないよね？」

「にゅ……………」

殺せんせーは そんなカルマに、顔には出さないが、僅かな不安を感じるのだった。



「…で、どーすんの？例の命令ってヤツ。

あのA組が出した条件…何か裏で企んだる様な気がしてならないんだけど？」

「考え過ぎだぜカルマ、このE組が これ以上失うモンなんてあるか？」

「勝ったら何でもーつかあ♪

学食の使用権とか欲しいな〜♪」

そんな岡島と倉橋の発言に対し、

「エロ大王も倉橋ちゃんも甘いよ。」

響がダメ出しする。

「きーちゃん？」

「だ、誰がエロ大王だ!？」

「…逆に考えるんだ、もし俺達がA組だったら、E組に何を命令するかを…」

「きーちゃん…」

「スルー？」

「吉良……」 「吉良君……」

響の発言に、少し前までは、勝利景品について軽く考え、ワイワイ話していた皆が、一気に黙り込む。

「皆、基本的に良いヤツばかりだからね、奴等の発想は出来ないさ。」

多分、アイツ等は……

「アイツ等は……？」

「……おっと、今は言わないでおくよ。」

が た つ ……

勿体ぶった発言に、思わずコケてしまうE組の面々。

「磯貝……と片岡さん？」

「な、何だい……吉良？」 「吉良君？」

「悪いけど2人が一応、皆の要望を考えて纏めておいてくれるかい？」

「ああ、分かったけど……」

「吉良君は どうすんの？」

「俺は俺で……クツクツクツク……」

「……」「笑い方が黒い!!」「……」

皆から総突っ込みされる響。

「カルマに中村ちゃ〜ん？」

2人なら、もう俺の考え、察してるだろ？

俺にアイデアの協力、頼むよ。」

「はいよ♪」「了〜解♪」

響から指名された2人は、響同様な黒い笑みを顔に浮かべ、響に付いて教室を出ていった。

((((E組・悪の3巨頭だ!!)))

残された生徒達は、某コミックに登場する、漆黒の甲冑を着込んだ悪役の姿を3人に重ねた。

さしずめ、飛竜の響、迦楼羅のカルマ、鷲獅獸の莉桜と云った所か。

∴響は蟹座の黄金聖闘士である。



期末試験前日の放課後。

響と浅野学秀は理事長室に居た。

勝負の噂を聞いた理事長が、前の日に、メールによる呼び出しをしていたのだ。

「やあ、よく来たね、2人とも。」

「どうも、コレが例のブツですよ。」

理事長の歓迎の言葉に対し、響は封筒を差し出した。

「……………」

浅野学秀も、響に続き、封筒を前に出す。

この封筒の中身：それはA組とE組、この2組の勝負が付いた時に施行される罰ゲーム…

すなわち、互いが勝者が敗者に与える『命令』が記された書面だった。

趣味なのか暇なのか、それとも、これも業務の1つと判断したのか、いつの間にか当事者達も知らぬ儘、理事長が両者の間に入り、審判を行う運びになっていた。

「…では、試験の結果が出た後、またこの部屋で逢いましょう。」

にこやかに話す理事長。

「…では、失礼します。」

「…待てよ。」

3人が2つの封筒に、封印を意味するサインを書き込んだ後、もう用は無いとばかりに退室しようとした浅野学秀を、響が呼び止める。

「…何だ、吉良？」

「試験が始まる前に、言つとかなきゃいけないと思つてな…」

「何がだ？」

「お前等が出す命令とやら、それが中間の時、瀬尾から失われた権利の復活とかなら無効だぜ？」

「何だと!？」

「あれは、あくまでも、俺と奴個人の問題だ、クラス間の争い事で、どーこーする問題じゃない。

その封筒の中身が其れなら、今直ぐに書き直せ。」

「くっ…分かった。

瀬尾の事は、外しておく。」

その台詞を聞いた響の目が、鋭く光った。

「成る程ね、『複数の案件、全てを承諾しろ』…それがお前等が出す、『1つ』の命令って訳か。」

「なっ…!!？」

「お前、実はチョロいだろ？」

一瞬、動揺の顔を浮かべた浅野に響は悪魔の様な嗤い顔を見せた後、

「理事長先生、書面書き直しの必要は無いですね。

浅野本人が瀬尾の件は無効と認めましたし、万が一、俺達が負けた時も、瀬尾の件は消せば良いだけですから。

…では、俺は失礼します。」

浅野理事長にも念押しした後、響は浅野より先に退室した。

「…君は帰らないのかい、浅野君？」



そして試験当日。

本校舎に宛てがわれた、試験用の教室に向かうE組の面々。

「どう、渚？ちやくんと仕上がってる？」

「ん…まあ、ヤマが当たれば…」

バチーン！

「痛っ?!」

「男ならシヤンとしなさい！」

英語なら あんたも上、狙えんだから！」

少し自信無さ気な渚に、中村が発破を掛ける。

「うう…痛いよ、中村さん…」

たまらず お尻を押さえる渚。



「楽しみだなあ〜♪」

「お、応…よろしくな、律。」

そんな『偽』律を見て、数人の男子がヒソヒソ話し合う。

「いや、鳥間先生、ぐっじよぶだよ！」

「超美少女!!」

「しかも本物に負けず劣らず、パねえ!!」

「いや、アレって、既にピッチ先生を超えてないか?」

…何の話をしているかは、敢えて察して下さい…としか、言わないでおこう。

「隣の席、誰よ?」

「菅谷。」

「よし、菅谷は後でべよう。」「」

「何でだよ!?!」

この会話に参加していた男子が、後で女子達にべられるのだが、それは別の話。



キーンコーンコーンコーン…

チャイムが鳴り、そして期末テストが始まった。

その時、教室は闘技場（コロシウム）に、筆記具は槍と太刀に、そして答案用紙は異

形の【問スター】へと、その姿を変えた…。

期末の時間　　〈1学期〉

試験：例えると、本来ならば、机の上で自分自身と答案用紙の一騎打ち。

その結果（スコア）で、他者との優劣を競うのが普通な筈。

しかし、前回の中間試験の時もそうだったが、今回は1つの闘技場（フィールド）内で幾人が敵味方関係無く入り乱れ、それぞれの答案用紙（あいて）を倒す感覚にあった。



1日目

1時限目：国語

「いきなり大物かよ!?!」

目の前に現れた、皮膚はなく、筋肉繊維剥き出しな容姿をした、巨人の如き問1が襲い掛かる。

響は太刀を構え、迫る問1（きよじん）に突進、振り下ろされる敵の攻撃を掻い潜り、擦れ違い座間、壱の竹唐、弍の袈裟斬り、参の左薙、肆の左切上、伍の風逆、陸の右切上、漆の右薙、捌の逆袈裟、玖の刺突…

ザツ…

「磯貝…?」

その問30の前に、今度は磯貝悠馬が立つ。

「はは…会議の重要度の象徴だし、一応覚えておいて、正解だった!」

「なっ…!?!」

「え? コイツ、答え知ってるの?」…と言いたそうな驚きな顔している荒木の前で、構えた磯貝の体全体が金色に光り輝き、更には右手が真っ赤に燃え上がる。

「覇アっ!!」

「くはあっ?!」

その燃える拳から放たれた光弾は、問30の胸元に命中、『驚』の文字を刻み、吹き飛ばした。

「…見事!!」

立ち上がった問30は、胸を押さええながら満足気な笑みを浮かべると再び倒れ、立ち上がる事はなかった。

「磯貝、貴様…:社会問題で この俺を出し抜くとは…!?!」

「偶々だよ…:ちよつと興味あつて調べてただけさ…:」

「く…:くそ…:」

ガタツ：

それだけ聞くと、荒木も再び崩れ落ちた。

それを見た磯貝は、

(まさか、担任に現地(アフリカ)まで連れてかれたなんて、言えないよな…)

…と、内心で呟くのだった。



4時限目：保健体育

所謂、ビキニアーマーを着込んだ女戦士の軍勢を、岡島大河が迎え撃つ。

「うりゃー！」

「きゃ!?」「ひえっ?!」「ちよ…!?!」

その攻撃を悉く躲すと同時に、スケベ面丸出しで、その女戦士達の鎧の上からとは云え、胸部に尻部に、セクハラ全開なボディタッチを実行していく岡島。

「「おのれえ…この変態終末期!!」」

怒りの形相で剣を構え、目の前の女の敵に襲い掛かる女戦士だが、岡島は臆する事なく、不適な笑みを浮かべると、右手を頭上高く掲げ、

パチン!!

親指で中指を弾き、高い音を響かせた。

テストは良い…

一夜漬けで得た知識など、大人になったら殆ど忘れてしまうだろう…。

だが、それでいい。

同じルールの中で、力を磨き、脳味噌を広げて結果を競い合う。

…その、結果から得る経験こそ、宝物なのです。



5時限目：理科

「ぎっしりぎっしり!!」

理科は暗記いいいいイ!!

記憶の業火で敵の鎧を一枚一枚剥いでいくううう!!」

小山夏彦が持つ杖の先から吹き出る炎が、西洋風の甲冑を着込んだ騎士の装甲を次々と剥がしていく。

そんな小山の前に、全身に豪華な装飾が施された真紅の鎧を身に纏った戦士…ラスト問題・問25が立ち塞がる。

「な、何なんだ、コイツは?!」

しかし、小山の放つ炎は真紅の鎧を焼き尽くすには到らない。

「ば、馬鹿な…きちんと暗記した筈…」

何故、俺の攻撃が効かないいいいいイ!？」

「本当の理科って、暗記だけじゃ駄目なんですよ?」

「はあ!？」

その声の主は奥田愛美。

「単純に、その単語や式を覚えていても、その言葉の意味を理科してないと、駄目なんです。」

そう言つて、手に持った杖を振りかざすと、そこから化学式の様な長い文字列が具現化し、奥田の周りを旋回する。

「テラ・ヴィクトリア・フォー…」

そして何か小さく呟くと、化学式は赤い騎士に向かつて飛んでいき、蛇の様に纏わり憑き、体全体の動きを封じ込める。

その直後、騎士の足元に、魔法陣が出現。

そして その魔法陣の真上、天高くから墮ちるのは、球形を象つた黒き光。

身動きが取れない赤の騎士は、頭上から降り注ぐ黒光の球の直撃を、まともに受けてしてしまう。

パカアツ…

その瞬間、小山が崩せなかった装甲が、あっさりと剥げ落ちる。

そして素顔が露わになった強面の男は、着込んでいた赤い鎧とは対照的な真っ青な顔に急変、まるで栓をするように両手で尻部を押さえ、慌てた表情で闘技場から走って出て行ったのだった。

「な・な・な…」

何が起こったのか、まるで理解出来てない小山の横で、

「くす…間に合うと良い…ですわね♪」

お下げ髪の少女は、少しだけ顔を赤らめると眼鏡を妖しく光らせ、黒い笑みを浮かべるのだった。



1学期 期末テスト、1日目、終了…

期末の時間 ～1学期～②



2日目

1時限目：音楽

名高い作曲家を描いた肖像画の群れ：

問1～5が、高速で飛び交いながら、茅野カエデの周りを囲む。

肖像画の目が左右に不気味に動き、茅野をロックオンすると、次は口が開き、甲高い歌声を響かせる。

その質量を持った音の弾丸を茅野は素早く避け、手に持っていた黒い表紙のノートを開くと、肖像画の群れを刮目し：

L u d w i g v a n ※ e e t h o v e n

P i o t r I l y i c h ※ c h a i k o v s k y

F r a n z P e t e r ※ c h u b e r t

J o h a n n S e b a s t i a n ※ a c h

一瞬、そう思ったが、考えたら負けと思い、頭を切り替える三村。

「毎晩、校舎でエアギター、練習した甲斐があつたね〜?♪」

「はあ!?!な、何で知ってるんだよ?!」

顔を赤くし、思いつ切り焦る三村に倉橋は

「え〜、クラスの皆、知ってるよ?」

「一番最初の情報源は殺せんせー。」

…と、あつけらかんと答える。

ガクツ…

両手両膝を着き、頭垂れる三村。

そして、

「…んでえ、皆に広めたのは、きーちゃんだよ。」

「き、き、き…吉良あーつ!!」

更なる情報に、三村の叫びが場内に木霊したのだった。



2 時 限 目 : 美 術

「あー、もう! 本来なら得意分野なんですけどつ?!」

古代ギリシヤの彫刻を連想させる、動く彫像を前に、菅谷創介は予想外の苦戦をして
いた。

今迄のテストも そうだが、些か集中力が欠けている菅谷。

その理由と云うのが……

「雷よお!!」

バチイツ……ごごーん!!

何時の間にか桃色のカツラを取り捨て、ポニーテールに結った、長い黒髪を露わにし
て、敵に雷撃を放ち、次々と撃破（テイク）している偽律であった。

「あらあらあら？もう、お終いですの？」

もう少しだけ、頑張つて頂きたい物ですわあ♪」

「……………」

初日の一時限目、国語の時から、自身の直ぐ隣で、凄く嬉しそうでいて物足りなさを
思わせる、艶めかしい表情で、問題（てき）を片付けている替え玉律。

これが仮に喪女さんだったりしたら、別に其処まで気にもならなかっただろうが、大
人な雰囲気も併せて持っている美少女さん（しかも きよぬー）が お色気全開の弩S
全開で無双されているのだから、気になって気になって仕方がないと云った感じの菅
谷。

『俺が集中出来ないのは どう考えても律（偽）が悪い』とでも思っているのか。
「えーい、集中しろ集中しろ集中しろ！」

切り替える切り替える切り替える!!」

しかしながら、この儘で良い訳がないのは解りきつてる菅谷は、邪念を棄て祓わんと、目を瞑り、頭を振り回す。

そして再び目を見開くと、何か覚悟を決めた様な面構えで、目の前の動く彫像を手に持った鎚で粉碎。

新手として現れた、無数の向日葵に向け、立ち向かっていくのだった。



4 時 限 目 : 英 語

「くっそー！何時にも増して、パねえぞ、この英語！」

中高一貫の進学校では、中3から高校の範囲を教え習う事も、さほど珍しくはない。特に柵ヶ丘で、それが はつきりと出ているのが、英語・数学・理科である。

鋭い爪と牙、そして重い尻尾を素早く操り、更には口から炎と吹雪の息吹（ブレス）を吐き、背中には蝙蝠の様な羽根、頭部には無数の角を生やした、蜥蜴にも似た強力且つ巨大な魔物…竜（ドラゴン）。

ドラゴンの反撃の爪を受けてしまう。

「…バカな？何故、倒れない？」

満点解答の見本だぞ!？」

「単語お直訳したの、並べ変えて文章作りや良ってモンじゃねーよ、ターコ!!」

「吉良あ?!」

B O M B !!

茫然としている瀬尾に悪態を吐きながら前に立ち、肩に担いだ6連ミサイル砲を一斉発射させる響。

ずしいん…

「な…何だ…と…!？」

崩れ落ちるドラゴン。

その攻撃は結果、凶悪な竜を仕留めるのに充分な物だった。

ずどおん… ばったーん… どさあつ…

「はあ!？」

更に、瀬尾の目の前で、中村莉桜、不破優月、そして渚が、各々の獲物（問題）を撃ち倒していく。

「満点解答!?!E組如きが…だとオ?!」

「知ってる、優等生？」

吉良つちも言ったけどね、こーゆー和訳はねえ、只単に直訳すりや良いって訳じやないのよ？」

「問題文、小説から引用されてるのに気が付かなかった？」

原作に添った言い回しでないと、減点されるよ？」

中村と不破が、自分なりに感じた出題者の意図を説明する。

事実、今回の英語の試験は問題文が有名小説から引用されており、普段の生徒の読書量や、臨機応変さも採点基準に加えられていた。

「…てゆーか、瀬尾よお…」

更に響が言葉が続ける。

「お前、2年の時も、アメリカ帰り自慢してたけどよ、ぶつちやけ発音、てんでダメダメだぜ？」

バラエティーで○○地方の方言に訳されるアクセントだ。

あれじゃ多分、最初の発音問題も、撃沈してるだろな？」

「何イ？」

「英語自慢したいなら、せめて中村ちゃんみたく、英国仕込みでないと…（笑）」

「ふっ…止せよ、吉良つち…照れるぜ…」

「いや…照れるて人は、其処でドヤ顔なんてしないから…」

ドヤ顔の中村に、ジト目で突っ込んだのは渚である。

「くっ…俺に勝つた位で、良い気になるなよ、吉良！」

何故なら「次の お前の台詞は、『俺は5英傑の中では一番の雑魚！5英傑に入れたのが不思議な位だな!!』…と言う。」

「違えーよ！」

不破の横入りの台詞に、顔を真っ赤にして怒鳴る瀬尾だが、

「あゝ、瀬尾、瀬尾？」

「あゝ、あ!？」

更に響が割って入る。

「どーでも良いが、放つといて良ーのか？あれ？」

「へ？」

スオオオオオオお…

響が親指を指し示す先には先程、瀬尾が倒し損ねた問題（ドラゴン）が、大きく息を吸い込んでいた。

「う…うわあああああああゝつ!？」

「「南く無く…（チーン）」」

ドラゴンの吐く、灼熱の炎の吐息（プレス）が、瀬尾（のみ）を直撃した。



「へへ、歳は、本当に、同じ年なんだ？」

「ええ。本当の学校の試験は、明日からなの。」

父から詳しい事情は聞かされてないけど、結果的には今回の事は、私自身も成績アツプに繋がってるから…」

「ところで…ねえ、律？ウチの男で、誰か気になったの、居る？」

「え？」

「あんた、男子の間じゃ、かーなーり、評判良いわよ？」

「え？そうですわね、私的には…」

昼休み時間、律（偽）を中心に女子トークが盛ってる中、響達は5時限目の事を話していた。

「後は数学だけだね…」

「どーよ、カルマ？」

「ははは…吉良つちもだけどき、皆、目の色変えて、力み過ぎじゃない？♪」

「おう、余裕だな？」

「まあね…『勝ち』って、そーゆうんじゃないと思うんだよね…。」

通常運転でサラツと勝つからこそ、完全勝利なんだ。」

「カルマ?」

「見てなよ…。」

正しい勝ち方…A組（やつら）を、浅野を生贄に、皆に教えてやるよ。」

「カルマ君…」



5時限目：数学

「シャババババ!!」

頭に2本の巨大な角を生やした、単眼の武神・問1が暴れまわる。

「最初っから こんな難問かよ!」

「いきなり時間を削らせる気だな?」

皆、コイツは後回しだ!

出来る問題から片付けよう!!」

機貝が皆に指示を飛ばすが、それを無視するかの如く、寺坂龍馬が問1に立ち向かって行く。

「止せ寺坂!無理するな!!」

磯貝が制止を呼び掛けるが、

「大丈夫だ！コイツはなあ…ヤマが大当たりなんだよ!!」

そう言うのと寺坂は敵の首を自分の右肩に抱え上げてホールドし、更に両腿を両手で掴んで大きくジャンプ、

「うーりやあつ!!」

そして自らも尻餅を搗く形で地面に勢い良く落ちる。

ドンツ!!

首折り、背骨折り、そして股裂きの3つの技が一度に決まり、問1は二度と立ちあがる事はなかった。

「…言つたろ?大当たりだつてよ!!」

「…やるな、寺坂!!」

そんな寺坂に頼もしさを感じた響も、

「俺も、サクつといきますか!!」

目の前の問1を見据えるのだった。

~~~~~

「何?この、如何にもラスボスですつて感じの風体は?」

響の前に、ラスト問題・問20が降臨した。





























完全に凶星だったのか、その台詞の前に、一気に顔を赤くするカルマ。  
ペしペし…

「今回のテストで、先生の触手を破壊する権利を得たのは、吉良君、磯貝君、奥田さん、中村さんの4名。

吉良君に至っては、2教科トップと総合で計3本、破壊する権利を得ました。

暗殺においても賭けにおいても、君は今回、何の戦力にもなれなかった。」

カルマの頭を軽く、軽く、おちよくる様に叩きながら話す殺せんせー。

「解りますか？」

殺るべき時に殺るべき事を殺れない者は、この暗殺教室では存在感を無くします。

はつきり言つて、モブです。」

くりくり…

「刃を研ぐのを怠つた君は、暗殺者ではない…錆びたナイフを自慢気に掲げる只の子様です。」

更に輪を掛けて おちよくるが如く、縞模様のタコは触手（ゆび）でカルマの頭の天辺を、くりくりと捏ねる。

額に青筋を浮かべるも、担任の言葉に自分でも納得、自覚するを得ないカルマは、顔を赤らめ、目に僅かながらの涙を浮かべながらも、何も言い返せないでいた。

「…!!」

ぱしっ

それでも我慢の限界に来たのか、自分の頭を弄る触手を振り払い、逃げる様に校舎にカルマは向かっていく。

「ちよつとタコ、いいの？」

あそこまで言ったりして？」

今迄の やりとりを、少し離れた場所から伺っていたイリーナが、殺せんせーに近づき、心配そうに話し掛ける。

「ご心配なく。立ち直りが早い方向に、挫折させました。」

そんなイリーナに対し、校舎に向かう生徒の背中を見ながら、担任教師は心配無用と応え、話を続ける。

「彼は多くの才能に恵まれている。」

しかし力有る者は、得てして未熟者です。

本気を出す前に勝ち続けてしまう為、本当の勝負を知らずに育つ危険がある。

私が そうでした…。」

「タコ?」

「大きな才能は…負ける悔しさを早めに知れば、大きく伸びます。」

テストとは敗北の意味を、強弱の意味を……正しく教えるチャンスなのです。」  
其処まで言うと、殺せんせーは、校舎に視線を移す。

成功と挫折を、勝利と敗北を、今一杯に吸い込みなさい、生徒達よ！

勝つとは何か、負けるとは何なのか……

力の意味を！今!!

……それは私が最後まで気付けなかった、とても大事な事なのですから……



「さて皆さん、大変素晴らしい結果に終わりました。

5教科プラス、総合点の6項目で全てにおき、E組がトップを獲る事ができました。

触手6本奪取、おめでとうございます。」

「……………」

帰りのホームルーム、改めてテストの結果を報告する殺せんせー。

そして、それを、蚊帳の外な冷めた顔で見ているカルマ。

「それでは、暗殺を始めましょう。

触手破壊の権利を得た4人は、どうぞ6本、ご自由に。」

早速、勝利特典を使った暗殺を勧める、縞模様のタコ。

ヌルフフフフ…

ま、正直な話、触手6本程度なら失っても、まだまだ余裕なんですよね？  
10教科プラス総合の、最大トータル11本とか言わずに良かったです。

…そんな事を余裕丸出しな縞模様なタコが考えている時、  
「おい待てや、タコ、触手破壊の本数、間違っているぞ？」

寺坂が口を出す。

ザツ…

そして教壇の前に立つ、寺坂、村松、吉田、狭間、そしてイトナの5人。

「…？何を言ってるのですか寺坂君？」

6本でしょ？

総合の吉良君に、国・社・理・英・数の5教科を合わせ「はあ？アホか？

5教科つつつたから…国・社・理・英…

あと『家』…だろーが!!」

どん!!

教壇の上には、100点満点の家庭科の答案用紙が5枚、叩きつけられた。

「か・か・か…家庭科あ~~~~~!!?」

一気に青冷めた顔になる殺せんせー。

「ちよ…ちよつと待って!!」

家庭科のテストなんて、あくまでも ついででしょ? ついで!!

何故こんなのにだけ、本気出して100点取ってるんですか、君達はっ!?」

「…誰も、どの教科とは言っていない。

そうだろ、吉良?」

「…ですよね〜♪」

イトナの振りに、あっさりと自分の勝ち得た数学の権利を、家庭科に譲渡する意向を

示す響。

「ちよつと待ってよ!」

そこに、更に原が口を出す。

「原（おかあ）さん?」

「ずかずかずかずか…」

「殺せんせーの前まで やってきた原は、

どん!!

自身の家庭科の満点の答案を教壇の上に差し出した。

「家庭科100点、6人っつ!？」

まつ、待つて!!△@・▽≡∂…」

更に真つ青な顔になり、テンパる殺せんせー。

「カ〜ル〜マ?何か言つてやれよ?♪」

「…!!」

其処に響が、消沈気味だったカルマに発破を掛けると、

「…ねえ、ついどころか、家庭科さんに失礼じゃないの?殺せんせー?

5教科の中じゃ、最強と言われる家庭科さん…いや、家庭科様に…さ?」

水を得た魚の如く、顔に活気を取り戻したカルマが声を大にして、追い討ちの発言。

「そーだ!5教科最強の家庭科様で、触手6本!!」

「そーだぜ殺せんせー、約束守れよ!!」

「合計で何本だ?え〜つと…」

「11本だよ!」

「ひいひいっ!じゅ…11本〜っ!?!」

11本!! 11本!! 11本!! 11本!! 11本!! …

教室内に、11本コールが沸き起こる。



に技術でイトナが学年単独トップを勝ち得ており、響と浅野とで引き分けとなった国語以外を見た所でも、A組とE組の勝負はE組の完全勝利となっていた。

「それと殺せんせー、これは皆で相談したんですが…」

そんな中、磯貝がテンパってるタコに話を持ち掛ける。

「この暗殺に…今回の賭けの、『戦利品』も使わせてもらいます。」

「はい?」



「やあ、2人共、よく来たね。」

「……。」

「くいつす。」

そして放課後。

理事長室には、理事長・浅野學峯から呼び出しを受けた響と浅野学秀がいた。





※A組生徒は1週間に一度、「芸」を覚え披露する事。

補足：其の際、E組生徒から、一定の評価が得られなかった場合、その芸披露は無かつた事とされ、翌日に再披露する事

(中略)

※全校集会等、全校生徒、或いは全同学年が集まる集会がある場合、E組生徒の最初の1人目が、その場に来る前に整列して待機しておく事

※校内売店でのパン、ジュース等、授業必需品以外の購入禁止、並びに自動販売機の使用禁止。

及び、校内への昼食目的以外の飲食物の持ち込み禁止

補足：他組生徒等からの譲り受けも、不認とする。

※E組生徒に学食、及び図書館の使用権利譲渡。

それに伴い、学食、図書館の使用禁止

※教室内の空調機器の使用禁止

※本校舎エレベーターの使用禁止

補足：足を怪我した等の場合、松葉杖や他の生徒のアシストを得た上で、階段を使用する事

尚これは、過去に足を怪我したE組生徒の待遇の実例に基づく物である。

※土日祭日、及び夏休み等の長期休暇には、E組の花壇や栽培している作物の畑等の水巻きや手入れをする。

補足：当日、誰が作業に来るかを前日の朝までに、E組のクラス委員に事前にメール等で報告しておく事。

尚、想定外のトラブル等に備え、責任者として一応、E組生徒が最低1人は立ち会う事とする。

作業終了した時は、その同行している責任者に報告、作業終了の了承を得た上で解散とする。

E組内で誰1人、立ち会える生徒が居なかった場合に限り、その日の作業は無しとする。

※『沖縄夏期特別講習』の受講権利の譲渡

※：以上の事柄が実行されてないと判断、または確認された場合、その場、或いは後日に其の者よりも成績上位者が物理的矯正を行う事とする。

補足：該当者が女生徒の場合、違反者1人につき、男子生徒が1人〜最大で20人が身代わりとして受ける場合も有り得る。

※：尚、此の実施期間は、此の書面が開封、内容が確認、此の同意書にA組代表者が調印した瞬間より、来年3月の卒業式終了までとする



浅野の訴えをガン無視の響は理事長に、A組が、浅野がE組に対して、命令する予定だった事柄を書き記された書面が入っている封筒の差し出しを申し出る。

「ちよ、ちよつと待って下さい、理事長先生！」

「どうぞ、吉良君。」

浅野学秀の待ったを、華麗にスルーした理事長は、にこやかな顔で、響に封を渡す。

「待て、吉良！」

パサ：

今度は響に待ったを掛けるが、当の本人は、どこ吹く風とばかりに封を開け、中の文面をまじまじと見つめる。

「はあ……」

響は大きく溜め息を吐くと、

「浅野お……お前、こんなん要求するつもりでいて、こっちが同じ事を言ってきたら、「巫山戯るな」……かあ？」

「う……」

呆れ顔&ジト目……そして、何やら可哀想な者を見る様な眼差しで、浅野の顔を見て言う。

浅野達A組が出していた命令書……その書面には、事前に無効とされているが、中間テ

スト終了の後に施行されている、瀬尾の待遇改善の他、「『さん』呼びの強要」「校門に整列しての朝の挨拶の要請」「週1の芸の披露」「A組がするべき作業の丸投げ押し付け」：等々、響達が書き込んだ内容と殆ど変わらない文面が書き込まれていたのだった。

因みに今回の瀬尾の成績は、総合で51位であり、自力で待遇復帰の権利は得られなかった。

「ガチで説得力、無いんですけど…」

何処の○○党だ？」

響は浅野の後ろに、例えるなら…他党に世襲は認めないと言いつつ、自党には推進している、或いは自身が世襲な某・国会議員が巨大なブーメランを投げている様を見るのだった。

「お前さあ、今更、逃げられはしないぞ？」

男らしく、ここにサインしろよ？」

…と、響は協定書と一緒に、ズボンのポケットから、ペンと朱肉、そしてポケットティッシュを浅野に突き付ける。

「お前、もしも そっちが勝つてたなら、問答無用で俺にサインさせるつもりだったよな？」

「くっ…」

E組如きが…それを明ら様に顔に出し、屈辱に顔を歪める浅野に、理事長が声を掛ける。

「浅野…君、助け船が必要かい？」

「!?」

その言葉を発した顔は、響と浅野、どちらに對してなのか分からない、いや、見方によつては両方對して言っている様に受け取れる位、嫌味のように、明るく爽やかな笑顔だった。

「浅野君、既に今回の賭けの事は、学校中に広まっているんだ。」

普通に考えると、A組として、学内に示しを付ける意味でも、E組の要求は簡単に逃げたり断つたりは、出来ないよ？

どうする？私が理事長権限を乱用して、学校として、庇ってあげようか？」

正直、少なくとも自分からは、そんな気は更々無い理事長が、自分の息子…いや、敗北者クラスのトップの生徒に皮肉と嫌味を込めた、優しい笑顔で尋ねてみる。

「理事長先生…たさ「浅野、次のお前の台詞は『パパ、助けて〜!!（泣）』と言う。」

「!!」

浅野学秀が自分の父親、いや、学校内の最高権力者に何かを言おうとした時、響が

その言葉を遮った。

その次の瞬間、

「貸せ、吉良！」

「ぬわっ!？」

浅野は顔を赤くして、響の持っていた協定書とペン、そして朱肉を奪う様に引き獲ると、即座に署名欄にサイン、そして拇印を押す。

「ほら吉良、これで良いだろ！」

僕達A組は、どんな勝負でも、例え、それに敗れたとしても、姑息な手を使ったりして、その罰から逃げたりはしない!!」

「…巫山戯るなとか、自分達が要求してた内容は棚で、散々ゴネていた癖に、よく言うぜ  
」

「くっ…」

「理事長先生、文句は無いですよね？」

最高に凹んだ浅野学秀の顔を見た響は最高に満足気な下種顔をお返し代わりに見せると、表情を普段通りに戻し、理事長に今回の賭けの成立の確認を取る。

「ああ、勿論だとも。」

最終的には生徒同士のやり取りを尊重するよ。



ただ、1つだけ…」

「はい?」

「項目の中に、「教室の空調機器の使用禁止」とあるよね?」

生徒達は仕方無いにしろ、授業の為に教室に入る先生達の事を考えたら、これは外しても良いのではないかい?」

この理事長の問い掛けにも、

「1人の先生がA組で教鞭を取るのも、多くて3日に2回、1日1時間でしょ?」

ウチの担任の先生達は、毎日1日中、この夏、暖房の利いた部屋で、ドロドロになりながらも、俺達に好成绩取らせてくれる様に頑張ってくれましたよ?」

まるで、それを予測していたかの様に、実例を併せた受け応えをするのだった。

事実、担任の殺せんせーや屋外での体育専門の烏間は兎も角、イリーナでさえ、この夏は暑さでブーたれながら、授業の内容的はアレにしても、一応は真剣に取り組んでいた。

更には教員室には、一応、エアコンは完備されているのだが、1人の堅物教師が、「生徒達も頑張っているから」と言って、エアコン使用禁止に断固反対の姿勢を取る、黄色いタコと金髪ビッチを鬼ですら土下座するかの形相で睨み付け、使用を自粛していたのである。

「そんな風に言われるとね…」

分かったよ、3年担当の先生方には、私から話しておくよ。」

「ありがとうございます。」

よろしく願います。」

結果としては、Eの要望が全て通った形となり、

「それでは、失礼します。」

響と浅野は、理事長室を退室した。



バキィッ!

理事長の扉を閉めたと同時に、響の右拳が浅野の頬を撃ち抜いた。

「な?何をするんだ?吉良!」

ドゴッ!

更には腹に前蹴りを放つ響。

「浅野お?何、呼び捨てしてんだ?」

これ、読んだだろ?お前がサインした瞬間から、効力を発揮してるんだぜ、コレ?」

そう言つて、ピラピラと響は協定書を見せる。

「な?違反者には、その場で物理的矯正も有りつてなってるよな?」

何か文句あるか？」

「ううっ……」

理事長室でのやり取りで、最初は浅野がかなりゴネて、それなりの時間が既に過ぎていた為、廊下には誰も居ない。

それ故に響も躊躇無く、行動に出る事が出来ていた。

…いや、響なら そうでなくても、平気で手を出していたか…。

更に言えば、浅野達A組が出そうとしていた命令の内容を知ったからなのか、既に情け、容赦、手加減という発想は無かった。

尤も、まだ小宇宙を使わないだけ、多少の慈悲は有るのだろうか…

「…す、すいませんでし…た…」

吉良…さん…」

ゴゴオツ！

浅野が喋り終えた瞬間、までも炸裂する、響の拳。

「吉良…さん…て、何なんだ？」

その『間』…わ？」

何だかマンモス哀れな奴の域に達しそうな浅野に、情け容赦無い指摘をする響。

「とりあえず、今後は気をつける事だな…」

あつ、それから、お前のクラス全員に伝えとけよ？

明日から毎日、校門で整列つてな。

連絡が着かなかつたとかの言い訳は、俺には通じんからな？」

「~~~~~っ!!」

そこまで言うとは、響は本校舎を去って行くのだった。



「!!!おはようございませす!!!」

翌日の朝、E組の生徒が校門を通る度に、他のクラス、他の学年の生徒達も注目している中、元気に笑顔で朝の挨拶をする、3年A組の生徒達。

くつくつく…

うぷぷぷぷぷ…

ぎゃあーっはっはっはっはっは!!!

その様を見て、腹を押さえて涙を流し、A組生徒を指差しながら大笑いしているのは響、寺坂、吉田、村松の4人。

「マジかよ、コイツ等！」

「ガチやってるし!!」





今更な気もするが、響はギリシヤ語はペラペラである。

「ま、そういう事だ、じゃあな。」

其処まで言うのと、響は再び山を指して行った。

良かった！

吉良が味方で、本当に良かった！

吉良君！少し前まで敵視してて、本つ当くにゴメンナサイ！！

…心の中で、心底思っている、寺坂達と一緒に。

その後方では、また誰かE組の生徒が登校してきたのだろう、A組生徒達による、元気な「おはようございます」の声が聞こえてくるのだった。



「くっす…」

「あ、吉良あ…流石にアレは、無いんじゃないのか？」

「磯貝…?」

教室に入った途端、磯貝にアレ…即ち、A組の皆さんが朝も早よから、E組の生徒に挨拶する為にスタンプしていた件について、流石にやり過ぎだと、やや呆れ&どん引いた顔で声を掛けてきた。

片岡に倉橋、三村に千葉達：響よりも先に登校していた他の面々も、同様な芳しくな  
いと言いた気な顔をしてる。

「だいたい吉良君、例の命令って、『沖繩の権利、寄越せ』じゃなかったの？」

片岡が問い掛ける。

そう、響、カルマ、中村の3人以外で話し合った結果、期末テストの勝負の勝利特典  
でA組にする命令は、A組生徒が権利を得た『沖繩夏期特別講習』の譲渡な筈：そう思っ  
ている片岡達に、

「大丈夫、沖繩も忘れずに、きっちり盛り込んでるって♪」

響は浅野のサインが書き記してある、件の協定書を見せる。

「「「はあ!」」」

そう言いながら、響から渡された協定書をまじまじと読む片岡達。

「「「「……………」」」」

そして、読み終えた後…

「「「「あ・あ・あ・あ……………」」」」

「あ?」

「悪魔か!お前等わ!?!」

「てゆーか、『1つだけ願いを叶えてやろう』で『じゃあ、100回言う事聞け』を本当



に実行する人、初めて見たわよ!!」

「しかも、あらゆる抜け穴を潰す如く、此処まで事細かに!!」

「カルマと中村で、こんなの考えてたのかよ!マジに最悪な3人だな!!」

「きーちゃん…流石に　これは、非道いと思うよ?」

流石にコレは…と、改めて、この協定書の内容を考えた3人に、ラダマンティス、ア  
イアコス、ミーノスの、冥王ハーデスが率いる冥闘士・冥界3巨頭の姿を重ねるE組の  
面々。

…しつこい様だが、きーちゃんは蟹座の黄金聖闘士、寧ろデツちゃんである。  
善かれと思つて作つた筈が、意外と不評な協定書。

orz…非難轟々を集中で浴びせられ、打ち拉がれる響。

「いや、お前等こそ、言い過ぎだろ?」

そんな響をフオローするのは寺坂。

「寺坂あゝつ!! (泣)」

ガシツ!!

「おう、よしよし! (笑)」

そして　そんな寺坂の胸元に、やはりオーバーアクションな泣き真似で飛び込む響。

そして　やはりオーバーアクションで、子供をあやす様な真似をする寺坂。

そして、その後、

「…お前等さあ、コレ見た後でも同じ事、言える?」

「「「「は?」」」」

そう言つて響は、浅野の作成した書面を磯貝に手渡す。

「「「「……………」」」」

その、協定書・浅野版を無言で まじまじと読む磯貝達。

そして、

「「「何じゃあ、こりやあゝ!?!」」」

声を荒げる磯貝達。

「吉良と同じレベルかよ!!」

「何か嫌だ!その言い方!!?」

「いや、まだ吉良君のが可愛いよ!」

「この給仕つて何よ!?!」

「「吉良、正直すまんかった!!」」

浅野版を見て、その余りな内容に怒りの声や、響版が、如何に優しかったかを実感、先程まで持っていた、A組に対する憐れみや罪悪感を消し飛ばし、響にゴメンナサイする磯貝達。

「しかし、「さん」付けは兎も角、整列して挨拶や芸の披露って、よくも此処まで被ったわよね〜?」

「ああ、アイツが複数の案件にを一纏めにして、イエスと言わせようとしてるのは、実は何となく読めてたんだ。

だから こつちもって、カルマと中村ちゃんに、アイデアのアシストを頼んだって訳だよ。」

因みに響曰わく、芸披露は中村のアイデアだとか。

「終業式の終わった後、早速アイツ等には漫才してもらおうようになってるよ。

浅野がボケ役で。」

「「「「ぶーーーーーっ!!」」」」

何やら浅野がボケる場面を想像したのか、その場の一同が一度に吹き出した。

「おっはよーさーん♪」「やあ♪」

そこに中村とカルマが教室に入ってくる。

「あつ、吉良つち〜、あれ、傑作だったね〜♪」

「んん。マジ、受けたよね〜♪」

吉良つちじゃないけどさ、笑い過ぎて、腹筋が割れると思つたよ〜♪」

…この2人は最初から、憐れみや罪悪感等は、欠片も持ち合わせていない様だ。



「そーいや最初の頃の、ゴークル着用してた設定って、何処に行つたんだろぅな？」

「吉良君!?! それ、私ですら言うの、我慢してるのよ?!」

朝の出欠確認が終わった後、教室内に散らばった対せんせーBB弾を拾い集めながら、響が呟き、それに不破が過敏に反応する。

「又ルフ…」

いや、今日も皆さん、遅刻無く全員出席、素晴らしいです…。」

掃除が終わわり、改めて朝のホームルームが始まるのだが、聊か元気が無い殺せんせー。

「殺せんせー、何だか元氣無いね？」

「はい、例の賭けですが、まさか、あんな要求をしていたとは…」

担任も、あのA組を校門前に整列させて挨拶させるなんて命令は想定外だった様で、更には自分の教え子があの様な人外な要求をしていたのは、少なからずショックを受けていたみたいだった。

…パサ

そんな殺せんせーが立つ教壇の上に、A組が要求していた命令書が置かれる。

「こゆ…」

参考までに、今の時点でE組生徒全員は、響達が作成した協定書は勿論、A組：浅野の作っていた書面も目を通していた。

響、カルマ、中村の3人は自分達が作った命令書の内容は誰にも教えておらず、単に沖縄講習をゲットしただけと思っていた生徒達は、いきなり朝、校門前でA組一同に挨拶されて面喰らい、多少の罪悪感を持った者も決して少なくはなかったのだが、響が公開した、浅野版協定書を見た瞬間に、それは皆、影も形も無く消し失せていた。

「もしもE組が負けてたらアレ、俺達がやらされてたんだよ？」

その時には殺せんせー、A組の連中や理事長にクレーム付けてたの？」

「そりゃ、殺せんせー的には、人を育てるって立場の教師としてさ、察する事も出来るけど、これは最後は理事長が容認しての決着だけど、根はガキの争いなんだから、大人は引っ込んでいて欲しいよね。」

「にゅ……」

確かに自分の教え子が、仮にあの状況に置かれた場合、自分では何も出来ない事を自覚している黄色いタコは、それ以上はどんな戒めな言葉も、少なくともあの書面を作り、実践しようとしていた者達相手への配慮の言葉は、目の前の生徒達には詭弁にしかならない、感じられないのを理解したのか、何も言えずにいた。

改行「へー、そんな事があったのか？」

「ああ、彼処で俺が煽らなかつたら、賭けの存在自体が無くなっていたかもな。」

昼休み、前日の理事長室でのやり取りを話している響達。

「もし仮にさ、賭けが無くなっていたら、どうなっていたらうね？」

「さあ？少なくとも俺達は現状の儘でね？」

あつちは、賭けの事や結果は全校生徒に知れ渡ってるし、浅野が理事長に、「パパ助けて」って泣きついたのが、校内に知れるだけで終わったんじゃないの？」

「それ、「だけ」って言うのか？」

「浅野一人が校内に「一見、無敵な振りしてるけど実は、パパ様に負んぶに抱っこな御坊ちゃん」の認定されるだけで、他のA組の奴等は殆ど何も無いだろ？」

「あー。」

響の考えに、何となくだが納得する千葉。

「それでも最初は、それ、やろうとしてたからな。」

今も言ったけど、俺が煽らなかつたら、どーなっていたか（笑）。」

「ははは…」

結果、あの煽りが、E組的にはフラインプレーになっていたのだが、響には、その自覚が無かった。

「最終的には俺や、何よりも あの人に、自分が無能と認めるのを拒んだ結果だよ。

自分1人が 恥を背負ってりや、それで済んだのに、結果、クラスメートを巻き添えにしたんだ。小さなプライドの為にさ。」

「…成る程な。」

尚、この件について、烏間も敢えて何も言わず、イリーナに至っては、「勝負だから仕方無い」と、寧ろ肯の姿勢を表に示し、勝ちを得た生徒達を評価していた。

そして数日後、1学期終業式の日が やって来た。

## 終業の時間

「しまった…穴だった…」

「抜けてるよねえ…」

終業式の為、山の上の旧校舎から、本校舎に向かっているE組の面々。

全校生徒が集まる学校の集会行事では、E組生徒は事前に、真つ先に、その場に集合して整列、待機する事が義務づけられている。

期末テストの賭けにより、A組の生徒達は、そのE組よりも先に、整列待機しなければいけなくなったのだが…

「おう、『E組より先に』でなく、『E組の代わりに』って、しとくべきだったぜ。」  
それで、E組の事前集合待機の義務が無くなる訳では無かった。

「しかし珍しいな、カルマが、きちんと集会、出るとはな〜？」

「だつてさ、今回はフケると、逃げてるみたいだからね。」

磯貝の話し掛けに、ややふてくされた感じに応えるカルマ。

そんな会話をしながら、彼等は山を下りていく。





「くす…それにしても、今回は本当に、生徒（ガキ）達に してやられたわね？  
特に、あの問題児共に。」

「…ええ。」

旧校舎の教室で話しているのはイリーナと殺せんせーである。

A組との5教科勝負…いや、殺せんせーとの触手破壊権利を賭けた5教科勝負の一角に、寺坂達が まさかの家庭科を持ち出し主張した事。

そして、見事に触手6本破壊権利獲得という結果を出した事。

実質、寺坂達の主張は詭弁すれすれだったと言っても過言ではないし、担任としてはやはり、本来の5教科に力を注いで欲しかったのが本音だろう。

「しかし…それは それで、私は嬉しい。」

それでも、殺せんせーの顔は暗くはない。

家庭科の…5教科以外のテストは受験に関係が無い分、重要度が低い。

それに従い、出される問題も、教科担当教師の好みで自由に出题される傾向がある。

…と、なると、殺せんせーの授業しか受けてないE組生徒からすれば、本来の5教科よりも、高得点や学年トップ獲得は難しい部分があったのも事実である。

「だからこそ、相当研究したのでしょうか。」

私に一杯食わせる為に、ありとあらゆる出題傾向を…

盲点を突く自由な発想に、一刺しの為の集中心力…

この暗殺教室に相応しい生徒達です。」

「……………」

嬉しそうに語る殺せんせーに、イリーナも その顔に笑みを浮かべる。

イリーナにしても、自分の生徒には変わりなく、彼等の成長は嬉しいのだろう。

「ところで…」

「にゅ?」

「何で私等、終業式、旧校舎（ここ）で留守番なのかしら?」

「だって、烏間先生が『あの顔』で、来るなって脅すから…」

「タコが いるからだわ。」

「違いますー。」

ビッチが いるからですうー!」

「むきー!何ですってーっ!」



「あつ、皆さん、この前ぶりですう。」

「あ、どうも、律（偽）さん…。」

山を下りたE組の面々を麓で迎えたのは、期末テストの際に律の代わりとして試験を受けた、『替え玉』律だった。

「律（偽）も、終業式に参加するの？」

「本当の学校も、今日で1学期、終わりじゃないの？」

「はい♪」

「はいって…」

「律が機械とバレない為に必要な工作だ、皆、自然体で いてくれ。」

「烏間先生…?」

驚く生徒達に、烏間が説明する。

「彼女は、俺の直属の上司の娘さんだ。」

口は堅いし、余計な詮索もしない。

何より、律（本物）の授業で、本来の学校の試験も好成绩を出せたから、本人は勿論、上司も御機嫌だ。」

「はあ…それは何より…。」

そう言ってきたのは菅谷。

「俺、テストの時、ずっと彼女の隣で、殆ど集中出来なかったからクラスで最下位になっ

ちまったよ……」

そういう菅谷だが、それでも総合の成績で、192人中91番と、半分より上位の成績を治めていた。

すなわち、3年の半数以上が、ENDの象徴である、E組生徒より成績が下位という事になる。



「あつ、マジに並んでるし〜♪」

「言ってやるな! (笑)」

「|||||」………!!「|||||」

E組生徒達が終業式が行われる体育館に顔を出すと、浅野を筆頭とするA組生徒が既に整列して待機していた。

最初は弄りに出たカルマを睨むA組の面々だが、響の

「あ、っあん!」

睨み返しに、怯えた顔を隠す様に、下を向いてしまう。

その様を見たクラスメートは思った。

(((((やっぱり悪魔だ!!))))))



「…えー、ですから、夏休みと言っても、決して怠けず、E組の様にならない様…」  
 終業式は恙無く進み、校長が何時もの如く、E組を弄る発言をしても、ウケは良くはない。

普通なら大爆笑が起きる体育館も、水を打った様な静けさに包まれる。

何しろ成績至上主義の櫛ヶ丘で、3年の半分以上がE組よりも学力的に劣ると云う結果に加え、何よりも夏休み前に、E組（エンド）がA組（エース）に対し、下克上を成立させたみたいな物だから。

更には言えば、超々・危険人物・響の存在が3年だけでなく、この前の図書館での騒ぎで、全校生徒の間で完璧に認知されているのだ。

此の場で笑うイコール、『死亡フラグが立ちました!』になってしまうと、当事者がどう思っているかとは別に勝手に思い込み、黙りを決め込んでいる。

そんな中、普段は自信無さ気に俯いていたE組生徒達も、今日は堂々と前を向いて立っていた。



「…いい加減にしろっ!」

バシィッ

「ありがとうございますーございましたーっ!!」



夏休みの間、じっくりとネタ、煮詰めてくれや。じゃあな（爆）。  
 「くっ…」

屈辱に顔を歪める浅野達を背に、響達は山を登っていく。

仮に自分達が、まだ響と同レベルな人外な命令でなく、良心的人道的な要求を示していた上で、E組の要求にクレームをつけていたら…或いは浅野が理事長（ちちおや）に泣きついていたら…まだ、この結末は回避出来たかも知れなかったが、既に浅野にその発想は無く、次の復讐、逆襲の場面を頭の中に構築しながら、旧校舎を目指すE組を、響を睨みつけていた。

「次に何か仕掛けるとしたら、中間テストか、その前の体育祭辺りかな？」

既に響に、それすら読まれてるのも知らずに。



「ま…あんなシケた国内旅行なんぞ、E組に くれてやるよ。」

「ああ、ドーセウチは、ヨーロッパ行くしな。」

「僕の家も、フランスさ。」

「俺ん家なんk 「巫山戯てんなよ…」

「「「はひひ…!?!」」」

「皆が皆、海外に行けるなんて思ってんなよ、ゴラ、ア!!」

「あ、いや……」

「肝心な時に勝負に勝てなくて、何が5英傑よ！括弧お笑い（笑）だわ!!」  
「き、君達、少し、落ち着かないか？」

桐ヶ丘中学校の特別夏期講習、沖縄離島リゾート2泊3日!!

……と言つても、講習とは名ばかり、勉強のスケジュールは組まれておらず、完全な観光旅行である。

本来ならば、成績最優秀クラスであるA組に、夏休みに与えられる特典だったが、その権利をE組に賭けによって強奪された形になったA組の教室は荒れていた。

「だいたい、荒木、お前が吉良や赤羽の存在忘れて調子こいて、勝負とか言い出したらしいじゃねーか!」

「いや……それは……」

「だいたい、E組の花壇の手入れとかも やらされるつてのに、テメー等だけ海外かよ?!」

「ローテーションは5英傑関とか係無く、平等に組んでるからね!!」

「いや、俺等が若干、多いだろ?」

「5英傑（おまえら）優先に名前入れたから当たり前だろうが!!」



「だいたい瀬尾！一番の元凶は お前じゃねーか！」

「は？何で、俺が「お前が2年の時、吉良に手え上げたのが、そもその始まりだろうーが！！」う…」

「吉良（アイツ）がA組（コッチ）に居たら、普通に圧勝してたんじゃねーのか？」

非難轟々に、たじたじの瀬尾達。

「…黙っててくれないかな？」

そんな中、浅野が静止を呼び掛ける。

「お前が あんな無茶ぶりな命令突き付けたから、向こうの要求も吞まざる得なくなつたんだろーが!!」

「大義名分与えてんじゃねーよ！」

「普段から偉つそうにしてんだから、きちつと仕事すべき時は仕事しろ!!」

「だいたい お前なら、理事長先生に お願いで、勝負を無かつた事に出来て「黙っている」と、言っている!!」

「「「「ひっ…!!?」」」」

それは火に油…となりかけたが、1人の禁忌となる発言からの、更なる静止により、漸く静かになるA組教室。

「負け犬に口無しだ。」

次に僕がリードを引くまで、お座りして待つてろ。」

(お前だって、負け犬だろうが…)

そう思いながらも、先に出した迫力の前に、完全に黙り込むA組の生徒達。

その浅野の、どす黒い「何か」を撒き散らす雰囲気と、凄まじい復讐心を帯びた眼の前に。

E組、吉良…この借りは必ず返す。

次の… ……で、確実に潰す!!



「さて、これより夏休みに入る訳ですが、皆さんには、メインイベントがありますねえ。」

1学期最後のホームルームが始まった。

「君達の希望だと、触手破壊の権利はこの教室で使わず、沖縄の合宿中に行使用するとう事でしたね。」

そう、触手破壊の権利を、十分に活用する為にE組の起てた暗殺計画…

それはA組より奪取した沖縄夏期講習時に組み込んだ作戦に併用する事だった。

「触手11本の大サービスでも決して満足せず、四方を先生の弱点である水で囲まれた

この島も使い、万全に貪欲に命を狙おうとする…  
担任教師は頭を掻きながら、

「素直に認めましょう。」

君達は悔れない生徒になった。」

照れ臭そうに笑いながら言う。

自分達を認めてくれた発言に、生徒達も笑みが零れる。

「では皆さん、夏休みも！」

1学期で培った基礎を存分に生かし…

沢山遊び沢山学び、そして、沢山殺しましょう!!」

「「「「「はい!!」」」」」

「それでは、暗殺教室、基礎の1学期、

これにて終業!!」

「起立！」

ガタツ x 30

「気を付け！礼！」

「「「「「「お疲れ様でした！さようなら！」」」」」」

## 閑話・聖戦の時間②



遙か昔のギリシヤ、アテネ。

一般の者には、決して その存在を知られる事のない、聖域（サンクチュアリ）と呼ばれる地。

戦の女神、アテナを長とする聖闘士と呼ばれる少年達が活動の拠点としてある場所がある。

その聖域の中にある、夜空に輝く黄道12星座を概念とした12宮と呼ばれる宮殿の内の1つ、獅子宮にて、黄金に輝く鎧を纏った青年と、空色の鎧を装着した少年：

この2人が、約20人程度の漆黒の鎧を身に着けた男達と対峙していた。



黄金の鎧の青年が一步踏み出し、漆黒の集団に声を投げる。

「冥闘士（スペクター）共よ！

既に三巨頭は倒れ、決着は着いたも同じ！

命が惜しければ、早々に聖域を立ち去れ！

間違っても、この先の処女宮に向かうという考えは棄てるのだな…

てゆうか、マジ帰れ!

特に今、処女宮に向向いたら、間違い無く死ぬるぞ!!」

(な…アルギエバ、何、ガクブルで言ってるんだよ?)

僅かに膝が笑っている、獅子座の黄金聖闘士アルギエバに対し、空色の鎧の少年、天馬星座(ペガサス)の青銅聖闘士、飛矢(ヒューヤ)が冥闘士に聞こえない様にヒソヒソ声で囁いた。

年上、そして格上と言うか、実質上司である黄金聖闘士に対して、青銅聖闘士が呼び捨てタメ口なのは問題ないのか?

…そう思わなくもないが、付き合いが長いのか、そーゆう奴と諦めているのか、或いは後でめると思っているのか、気にする素振りを見せないアルギエバは

(先程、巨蟹宮でアセルスの小宇宙が消えたのは分かっているな?)

(え? ああ…残念だけど、アセルスは…)

(それが問題なのだ!)

この先に居る乙女座のスピカは所謂シヨト…もとい、アセルスを実の弟みたいに可愛がっていてな…)

(あぁーっ、察し…)

(と、兎に角だ、今、あの女が戦闘しよう物なら、聖域が普通に壊滅しかねんぞ?!)  
(そのレベルかよっ!?)

(うむ!! 故に、退いてくれたらラッキー、それが駄目なら、何としてでも、この獅子宮で終わらせる必要があるのだ!!)

解ったか?

(ら、らじゃ…)

「お前達、先程から何を、ヒソヒソと喋っているのだ?」

プシャアッ!

「!!」

アルギエバ達の前に、冥闘士の1人が前に出ると同時に、その纏った冥衣から放たれた「糸」の様な物質が2人の聖闘士の身体に巻き付き、拘束する。

「私は地縛星アラクネのデルネ…」

「げ…」

染めた様な紅色の長い髪、目尻と唇には毒々しい紫、そして頬に薄い桃色の化粧を施した、筋骨隆々な男が名乗り出た。

余りにも…所謂、アレ、な容姿に、思わず、どん引くアルギエバと飛矢。

その態度に、デルネと名乗った冥闘士は顛に血管を浮かべ、2人を睨みつける。

「何だ、貴様等！」

その態度は？その顔は！？

何が言いたいのだ！」

それに対して

「そのケバいい化粧にドン引きしてんだよ！」

察しろ！このカマ野郎！！」

「はあ、あ！？」

このアルギエバの発言で、更に顔中に血管を浮き上がらせ、その身が写る鏡を割ってしまふほど、表情を歪ませるデルネ。

「バ、バカヤロー！」

アルギエバ、何、地雷踏んでんだよ！？

この脳筋聖闘士！！」

今から間違い無く殺し合いをするであろう敵にとは云え、間違い無く攻撃力アップするであろう禁句を普通に言ってしまう脳筋（アルギエバ）に対し、蜘蛛糸で拘束された儘、突っ込む飛矢。

「んだと、ゴラァア！？」

テメー、青銅（ブロンズ）の癖に、何だ、その口の聞き方は！？

あのカマの前にめるぞ、あ、あ!?

「るっせー、ハゲ!!」

「俺はハゲじゃねー!!」

これは剃っているだけだ!

「「「「「……………」」」」」」

飛矢の余りの言い様にカチンときたのか、そして、売り言葉に買い言葉、脳筋以上に『ハゲ』という単語が余程、琴線に触れたのか、目の前の多数の敵をガン無視して、口喧嘩を始める2人。

「ハゲ言う奴が、禿なんじゃー!!」

「俺、ふっさふさだもーん!」

あ、脳味噌筋肉だから、分からない?」

ぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶちぶち!!

自らの『糸』に縛られた儘、自分を無視して、御子様レベルで言い争う2人に、顔中に浮かんだ血管がキレルデルネ。

「き、貴様等ー!私を無視するなー!!」

喰らえ! B A S T A R — d e — I T T E T S U !!」

「うわわあーっ!!?」



デルネがまるで、目の前に在る〔何か〕をひっくり返すが如く、両腕を大きく下から上へ上げるアクションを取ると、その衝撃波でアルギエバと飛矢は上空高く、吹き飛ばされる。

グシャア!!

そして、身体を糸で拘束されている2人は、受け身を取る事も儘ならず、頭から垂直に石畳の上に落下してしまった。

「う……」「痛つつ……」

「おい、この2匹は、私が片付ける。」

お前達は先に進め。」

「う……うむ……」

別にデルネが今、攻め込んでいる冥闘士の上官という訳ではないのだが、

ベロリ……

舌舐めずりしながら、血塗れで鬼気迫る、それでいて妖しく微笑む顔で凄まれ、思わず退け反り返事をしてしまった残りの冥闘士達は、倒れている若い2人の聖闘士に少しだけ憐れみの目を向け、次の宮、処女宮を目指して獅子宮を走り抜けて行った。

「やっばっ!!」

黄金の鎧を纏ったスキンヘッドの青年が焦り叫び、

「聖域終了のお知らせ…?」

空色の鎧を纏った少年が口を曳き吊らせながら、ボソツと呟く。

「おい飛矢、このカマは俺が倒す!!」

お前は直ぐ、残りの奴等を追え!

何としても奴等をスピカと会わせる前に、事を済ませるぞ!!」

「お、応!」

そう言うと2人は

「はああああああああつ!!」

ポウツ!!

内なる小宇宙を燃やし、あつと言う間に自身を縛っていた『糸』を焼き尽くす。

「じゃ、この場は任せたぜ!」

飛矢は先に進んで行った冥闘士達を追い、獅子宮の奥へと駆け抜けて行った。

「ま、待て、小僧!」

デルネが止めようとするが、

「待つのはお前だぜ?」

お前の相手は俺だ、このカマ野郎!」

「ちい…何故、貴様が此の場に残るのだ?」

普通、此処は格下の青銅に此の場を任せ、貴様が多人数で向かって行つた者共を追うべきではないのか？」

「んな、どーだつて良一部分に、やけに拘るな…う…!!」

あ…まさか、さっきの舌舐めずりは、そーゆー意味だったのか…

カマの上にシヨタつて最悪だな…」

ドン引き&呆れ顔なアルギエバ。

「え〜い、黙れ！」

私は断じて、カマでもなければ、シヨタでも ぬわあ〜い!!

もう一度喰らえ、そして死ね!

B A S T A R | d e | I T T E T S U !!

自覚しながら認めたくはないのか、そして禁忌の言葉だったのか、顔を紅潮させ、修羅の如き形相のデルネが再び、アルギエバの体を天高く吹き飛ばす。

クルリ…スタツ

「な…何い!?!」

しかし、アルギエバは空中で回転しながら体勢を整え、難なく着地。

「ふっ…、あの『糸』とやらで体を封じられてないなら、この程度は訳はないさ。

そして何より、聖闘士に一度見せた技は通用しない!

更に言うならな…いや…何でもない…」

「?」

話している途中で、まるでイヤな事を思い出した様に、やや青ざめた顔を逸らすアルギエバ。

実はデルネが放った『BASTARD—ITTETSU』という技は、代々の教皇にのみ伝えられるという、『Brats—Don't—Get—Flurried』という技と、威力こそ格段に違えど、モーションを含め、殆ど同じ技であった。

因みに この技は「聖闘士に同じ技はく」が通用しない、見切り不可な技である。

そして現代の教皇は先代獅子座…つまりはアルギエバの師であり、彼は修行時代から数え、何かしらの理由…主に無茶ぶりの修行の文句に対する制裁で、何度となく喰らっていた。

故に、この系統の技には耐性が付いていたのだった。

「ち…嫌な事を思い出しちまったぜ…」

まあ良い！今度は俺の番（ターン）だ！

轟け俺の小宇宙！唸れ雷光!!」

「な…この小宇宙は…?!」

バチバチバチ…

アルギエバの右拳が極大な雷光を帯びる。

「ひ、ひえ……っ！」

その余りの強大な小宇宙に、生命の危険を感じた冥闘士は来た道を戻り、巨蟹宮の方向に逃げようとするが、

「逃がさん!!」

「ひっ!?!」

黄金の獅子は文字通り光速で回り込み、咆哮を上げる。

「ライトニング・ボルト!!」

雷光を纏った右拳の一撃は、デルネの胸元に直撃。

「うぎゃああああくっ!!」

冥衣の破片を撒き散らしながら吹き飛ばされたデルネは道沿いの石柱に激突、その儘、二度と起き上がる事はなかった。

「ふう……また一撃必殺（ワンパン）か……。」

デルネの死体を見ながら、少し物足りなさそうな顔で呟いたアルギエバは、

「よし、飛矢を追い掛けるか……」

早く残りを片付けないとな……!」

そう言う顔を引き締め、飛矢を……処女宮

に向かった残りの冥闘士達を追うべく、獅子宮を後にするのだった。



獅子宮から処女宮へと続く、石煉瓦が敷き詰められた道を走り進む冥闘士達。  
そこに

「待て、貴様等！」

「!!」

この侵入者達を追ってきた飛矢が待ったを掛ける。

「ぬ？ 聖闘士の小僧？」

「おお！ 無事だったのか?!」

「良かった、良かった！」

「へ？」

冥闘士達は目の前の少年が、所謂、アレ、な同胞に、殺られて犯られたか、若しくは犯られて殺られたか：そう勝手に思い込み、敵とは言え不憚に思っていたのだが、少なくとも『あつち方面』の餌食には、なっていない様子を見て、敵云々でなく、あくまでも一介の男として、安堵の顔を見せる。

そして、その敵とは思えない、如何にも心配、危惧していた事が払拭されたかの様な、

裏の無い優しい笑みに、思わず戸惑う飛矢。

「ふう…それじゃ、安心した処で、とりあえず死ぬ!!」

「「「ひゃっはー!!」」」

「な…何なんだよ? テメー等わ?!」

そして冥闘士達は男子として一安心した後は、それは其れ  
これは此れとばかり、改めて敵である飛矢に対し、数人が遅い掛かる。改

「ディープ・フレグランズ!」

「デス・メツセンジャー!」

「ワームズ・バインド!」

「ビッグ・ナツクル!」

「ローリング・ボンバー・ストーン!」

「スタンド・バイ・ミー!」

冥闘士が放つ数々の技を

「遅いんだよ!」

飛矢は悉く躲すと

「Shooting・Star—Pegasus!!」

「「「ぐげやーっ!!」」」

自身の必殺技を放った。

光速に届きつつある、無数の拳の弾幕。

ある者は直接その拳を受け、そして ある者は その拳圧、衝撃波を浴び、襲ったきた者達と共に、その場の約半数の冥闘士が飛矢に纏めて倒された。

「どうだ！青銅と違って舐めるな!!」

何としてでも、この冥闘士達を処女宮に向かわせるのだけは、阻止したい飛矢。

今、この先に控えている乙女座のスピカが戦闘しよう物なら、自身が実の弟の様に可愛がっていた、蟹座のアセルスの敵と言わんばかりに、この聖域ごと、この侵入者を滅ぼしかねない。

彼女が所謂シヨ○コンである事は先程、アルギエバに教えられる前から、実は噂で聞いていた。

飛矢は それを、この先の処女宮から立ち込める、尋常ならぬ小宇宙で確信。

そして その小宇宙は、今 正に聖域終了の知らせを告げようと鳴り響かんとしている鐘でもあった。

「お前等も この小宇宙、気付いてるだろ？」

さっさと聖域から立ち去れ!!

この儘では、お前等も只では済まんぞ!!」



飛矢の必死の訴えも、

「ふっ…聖域が滅びかねん程の小宇宙か…

願ったり叶ったりではないか、小僧！」

「な…!?!」

我が身が滅んでも、聖域が共に滅ぶなら一向に構わぬと言い放つ冥闘士に、言葉を失う飛矢。

「心配せずともハーデス様が地上を手にした暁には、我等はハーデス様の御力によって復活する！」

だから、ペガサス！

安心して冥界に堕ちるが良いわ！

この天撃星タロスのジャガーノートの拳によってな！」

ジャガーノートと名乗った冥闘士が両拳を振り上げる。

「ヒート・ハンマー！」

「ちっ！」

両拳から繰り出される衝撃波を辛うじて飛矢が後方へ跳んで躲した瞬間、

ボウ!!

処女宮の方角から、巨大な鳥を象った炎が飛来して来た。

「ぎゃあ!」

その火の鳥は、通りざまに2人の冥闘士を焼き払うと、飛矢の前に降り立つ。直に その炎が消えていき、その中から

「よ、飛矢、生きてるか?」

「て、テツガあ!」

灼銅色の鎧を纏った少年、鳳凰星座の…何故か顔面がフルボッコなテツガが姿を現した。

飛矢は正直、「お前が生きてるか?」と言いたい気持ちを抑え、

「お前、どうして此処に?」

処女宮に配置されてた筈じゃあ…」

飛矢は突然 現れたテツガに問い質すも、

「はいはい、良ーから下がった下がった。」

空（うえ） 見てみ?この位置は危ねーぞ?」

「はあ!」

スルーされ、更には後退を強いられる。

そして言われた儘、ふと夜空を見上げると、日は既に沈んでいると云うのに、雲の切れ間から、金色の光が差し込み始めた。

「テツガ、あれって、もしかして…？」

「そーゆー事った。下がれ、な？」

「お、おう…」

何が起きているか、何が起きるか理解した飛矢は、テツガと共に後方に大きく跳び、冥闘士達と距離を置く。

「聖闘士共、逃げる気か!？」

ジャガーノートが叫んだ。その直後、天から済んだソプラノの声が響き渡る。

『…アストレイア・ジャツジメント!!』

「「「「うぎやあつ!!」」」」

その声と同時に、天空から幾千幾万の光の剣が雨の様に降り注ぎ、ジャガーノートを始めとした、その場に残っていた冥闘士達は一瞬で全滅した。



「うっわあ…」

「これは…」

「見事な迄に…」

「分断されてますね…」

「ふん…あの技は、そもそも、広域殲滅を目的とした技だ。」

それを、この程度で済ませただから、兎や角謂われる筋合いはないぞ?」

「聖域途中で放つなっつってんだよ!!」

聖域に攻めて来た冥闘士が全滅した跡を、アルギエバ、飛矢、テツガ、そして巨蟹宮から駆け付けて来た柄杓星座（ディパー）のムソウが、やや引いた顔で見下ろす中、その技を放った本人は、まるで他人事の様言う。

黄金の鎧を纏い、そして黄金の仮面を被った、白金色の長い髪を靡かせる少女…乙女座（ヴァルゴ）のスピカ。

彼女が放った技により、巨蟹宮と獅子宮を繋ぐ道中の一部が完全に破壊され、深き谷の如く分断されていた。

「どうするんですかね、これ?」

「そりゃあオメー、民間の工事業者とか呼ぶ訳にや、いかねーだろ?」

修復作業が雑兵の皆さんの仕事になるのは明らかだった。

「そんな事より、そこの柄杓星座!!」

「は、はいっ!?!」

スピカがムソウに、やや威圧的に話し掛け、その余りの迫力に、ムソウは少しばかり

脅えがちに返事をする。

「アセルスの亡骸は どうした？」

「はい？」

ガシツ!!

「あたたたたた!?」

「あの子は どうしたと聞いている!」

即答しないムソウの頭を鷲掴みにし、その儘 握り潰さんと力を込めて追求するスピカ。

仮面で判らないが、かなり必死な顔をしているのだけは伺える。

「あ、あの時は まだ、緊急時だったので、とりあえず巨蟹宮の奥の間に、寝かせてありますう……!」

「そうか……分かった……」

そう言つて、ムソウから手を離すと、スピカは獅子宮……いや、巨蟹宮へと歩を進め始める。

「おい、お前……つて、ああ、聞くまでもないわな……。」

「ふん……あの子は私が処女宮へ連れて帰り、この私が弔う。何か問題があるか？」

「いえ……行つてらっしゃい……」

その迫力に生命の危険を感じたアルギエバは弱冠たじろぎながら、特に止める理由も無い故に、その場を立ち去る少女を見送った。

「吃驚しました…。」

この場で（アツチの意味で）穫って喰われるかと思いましたが…。」

（シヨタなのは）有名だからね…。」

「いや、あれで あの師匠（おんな）、一途な処もあるからな、そつちの心配は余り無いんだが…。」

「ああ…後家確定だな、こりゃ…。」

「いやいや、後家って…。」

「そーいや少し前、「素顔見せて、一緒に お風呂も入ったりしたから、其れ即ち、既成事実成立も同然よ♪」とか、ドヤ顔っぽい口調で言ってたよな…。」

いや、素顔見た訳じゃないけどね…。」

「あ、あの女（ひと）は9歳相手に、一体 何をやってるんですか!？」

このムソウの言葉に、

「「シヨタだから仕方ない。」」

「成る程…。」



「おいおい、少し静か過ぎん（ガンー）痛っ!!」

冥闘士の侵攻を退けてから数時間後、既に戦いにより命を落とした牡羊座、牡牛座、蟹座の3人、そして現在、聖域不在の双子座を除く、黄金聖闘士：8人が教皇の間に集結していた。

「皆、揃った様だな。」

金銀の装飾が施された法衣を纏い、竜の飾りが付いた兜を目深に被った男が部屋の奥から姿を見せた。

現在の聖域を女神（アテナ）の代行として統べる、教皇ログナーである。

「教皇……」

「師匠（ジジイ）……」

教皇を刮目する黄金聖闘士達。

「牡羊座（アリエス）のシエラタン、牡牛座（タウラス）のフォーナ、そして蟹座（キャンサー）のアセルスは残念な事になった。

……が、アルギエバにスピカよ、結果、お前達の手により、処女宮の手前で敵を全て倒



せたのは良い報せである。

御苦労だったな。」

教皇の劳いの言葉に

「止せよ、師匠。

奴等を殺つたのは、殆どがアセルスや青銅（ブロンズ）の小僧（ガキンチヨ）共だぜ？

俺は殆ど何も してねーよ。

…あ、それから、何処かの誰かによる、聖域破壊活動の巻き添えになった冥闘士も、そこそこ居たよな？」

「…ふんー！」

アルギエバは自分は微々たる足る程しか動いてながらと言いながら、ジト目で隣に立っている女聖闘士に毒を吐き、その女聖闘士は それを無視。

「ホーホツホツホ…」

それにしてもアルギエバさん、随分と お顔が大変な事になっていきますねえ？」

蠍座の聖闘士が、顔面フルボッコになっているアルギエバを不気味に嗤いながら弄る。

そして、

「鍛練が足りぬ証拠だ。」

山羊座の聖闘士が呆れ顔で両断。

「るっせー!!」

この傷は冥闘士にやられたんでなく、全部、其処のシヨタ女にやられ(ガン!!)あ  
じやばー!!」

アルギエバの言い訳が終わる前に、スピカの一撃が またも顔面に炸裂し、その場に  
倒れる。

「ふんっ!!」

「あゝ、続けて良いかの?」

教皇ログナーが話を続ける。

「先程、内偵を進めていた、双子座のタバサより念話(テレパシー)で報告があり、ハー  
デスの地上での拠点が判明した。」

「「「「「!!」」」」」」

8人全員が神妙な顔になり、無言で教皇を見る。

「マジかよ…」

「ついに…」

「決戦の時が…」

その重大な発表に、各々が胸の内を眩く。

そして その時、

「ふっ…：そう言う事だ。」

「「「「「「「!?」」」」」」」

突然 何処からか女の声が出たかと思えば、いきなり目の前の空間に『穴』が開き、その中から黄金の鎧を身に包み、やはり黄金の仮面で顔を隠した人物と、その形状は全く同じだが、漆黒に煌めく…冥衣や暗黒聖衣とは また違う輝きを放つ鎧を着込んだ黒髪の少年が現れた。

2人は教皇の前で膝を付き、

「教皇、双子座（ジエミニ）のタバサ、そして影陰双子座（シャドージエミニ）のレック  
ス、只今戻りました。」

「ふむ…：御苦労だったな。」

よし、では改めて話を続けるぞ。」

双子座の2人も、既に居合わせた黄金聖闘士の列に並び立ち、教皇の話に耳を傾ける。  
「今代の冥王ハーデスの地上での拠点は、イラクは、デイカール！」

今までは後手に甘んじていたが、それも終わり、これより先は、我等の方から討つて  
出る！



「今の貴方は、ダメージを抜く事だけを考えていれば、それで良い。」  
 「いえね、マジに冥闘士に受けたダメージって、殆ど無いんですよ？」

この怪我、全部 隣のシヨタおん n (バキッ!) のわっ!?

見た目、14歳位の蒼のニツト帽を被った銀髪の少女にアルギエバは必死に弁解する途中で、隣に立っていた白金色の髪の仮面を付けた少女に殴られる。

「まーまー、アンタは大人しく、聖域で留守番してろって事だろ！」

それを飛矢が笑いを堪えた顔で言う。

「アテナ…：そろそろ参りましょう。」

「ふむ。アルギエバ、貴方は しっかりと療養していなさい。」

乙女座の聖闘士からアテナと呼ばれた少女は、教皇と数人の聖闘士と共に、双児宮に向かうべく、獅子宮を後にした。



「アテナ、教皇、総攻撃に選ばれた聖闘士、全員、この双児宮に揃いました。」

打倒ハーデスの為に教皇ログナーが選抜した青銅(ブロンズ)、白銀(シルバー)、そして黄金(ゴールド)…：聖域を基として世界中に散らばっていた、約2/3の聖闘士が今、双児宮に集い、双子座のタバサが其れを報告する。

「うむ！其れでは聖域は、冥王との決着を付けるべく、今より此処に居る者達にて、貴奴

の居城に総攻撃を仕掛ける!!」

『『『『『うおおお!!』』』』』

教皇の言葉に呼応する聖闘士達。

「では、行くぞ、レックス！」

「うむー」

タバサの呼び掛けで、彼女の双子の弟、レックスが小宇宙を発動、その差し出した掌の前の空間に、巨大な『穴』が開き、双子座の姉弟を筆頭に教皇、アテナ、そして其の場の聖闘士達が次々と『穴』に飛び込んで行く。

その行き先はハーデスの地上での居城。

この時の戦いで、聖域側：アテナと聖闘士達は、その時代の冥王ハーデスを討ち、僅か数1000年の間ではあるが封印に成功、地上に束の間の平和を勝ち取るのだった。

そして、その事を蟹座のアセルス：

吉良響が知るののは、彼の時間軸で、15歳の3月の話である。

## &lt;br&gt;夏休み

## 吉良家の時間

ダムダムダム…

「吉良つち、やるう！」

「そりや…どーも!!」

「2人とも、頑張れ〜♪」

夏休み初日…その日の午前中、校庭のバスケットゴール下では、矢田が応援する中、響とカルマのコート半分を使った1on1が繰り広げられていた。

負けた方が、矢田と一緒にアイスクリームを奢るといふ罰ゲームの下、かなりマジに争う2人。

響のステイール狙いをフェイントで躲したカルマが、ジャンプシュートを決める。

「ちいっ…」

「よっし！次、吉良つちを抑えたら俺の勝ちだね〜♪」

「…るせー！早くボール、寄越しやがれ！」

ダム…スタート地点で一度、ボールを突いた響は

「正直……この手だけは使いたくなかったのだが……」

目の前で構えるカルマ、そして その先にあるゴールを見据えると、精神を……そして小宇宙を集中させ、

「……シュツ！」

「あぁっ!?!」「ズルい!!」

その場で超ロングショットを放ち、

パス……

「うっしゅあ!!」

そのボールは見事にゴールを撃ち抜いた。

「いや、今のは無しっしょー!?!」

「少しでも卑怯だと思っしょー?」

クレームを付ける2人に、

「いや、ラストなんだから、想定しない方が悪い!」

お前は○ツチーか……

不意撃ちのロングショットは兎も角、中学生相手に小宇宙を使つての精神集中は どう考えても卑怯だとは思っしょー……

当然、小宇宙の燃焼は この2人が それに気付く事もなく、だったら もう一回、正





張る日には、響やカルマ、磯貝に寺坂等、その二つ名に萎縮しない面子を その日の立ち会い役に割り当てていた。

想像して欲しい。

仮に、瀬尾や小山辺りが来る日に、立ち会いが渚と奥田のペアだったりしたら：

後日、響により物理的に地獄を見せられ、更には一時的に地獄（よもつひらさか）を視せられる事など お構い無く、まともに作業をする訳：と言うか、それこそ渚達に作業押し付けたりするパターンは容易に頭に浮かぶだろう。

想像して欲しい。

仮に、榊原が出る日に、神崎を立ち会いのシフトに割り当てたりしたら：

まあ：作業そっちのけになるなんて、説明不要であろう。

尤も その時には後日、響の矯正（物理）が間違い無く炸裂するだろうが：

そういう訳で基本的には、浅野が出る日には、その唯一の上位者ポジションである響が出る様に割り当てられていた。

尤も浅野に関しては、出向いたからには例え不満顔全開だろうが、きちんと作業だけはするだろうと、ある意味、響は信頼していたのだが。

更にはカルマも、

「それなら俺も出てる方が、嫌がらせになるっしょ？♪」

…と、普段なら、花壇の手入れなんて絶対にやらない様なサボリ魔が、積極的に協力する運びとなっていた。

参考までにA組には、その日にE組の誰が立ち会うか等は、一切教えていない。

ついでに言えば、榊原の出番の日には、見張りは男子だけのシフトで組んである。

気になるのは、A組生徒に旧校舎を徘徊する黄色いタコを見られる危険性だが、そのタコは沖縄旅行当日の朝まで、

「先生、日本の夏は暑いから、エベレストに避難します。」

…らしい。

また、その際に

「「「汚ねえ!!」」」」

…と、当然の如く、生徒達から大ブーイングが起きたのは、別の話。  
 ~~~~~

「ん〜、ま、良いだろ…。

浅野と…ゴメン、名前知らない君、今日は帰っていいぜ。」

「おつ疲れさ〜ん♪」

「…では、失礼します…。」

「それと、三村と木村な。」

更に響が補足した。



「此処が吉良の家だよ。」

「う……わあ……」

翌日の朝9：00頃。

既に何度か お邪魔した事のある磯貝の案内で、吉良家に到着した片岡、速水、矢田の女子3人。

所謂、豪邸とまでは往かないが、その一般住宅へ吉良家へ豪邸……な、住居を見て、言葉を失ってしまう。

分かり易く?例えると……一般住宅⇒茅野、吉良家⇒矢田、豪邸⇒イリーナと置き換えてみたら、ある程度はイメージ出来るだろうか……

家と彼女達の何を置き換えるかは、まあ、察して下さいと言う事で。

「はは……やっぱり最初は驚くよね?」



「よっ、磯貝、案内ご苦労さん。」

待ってたぜ。さあ、上がって上がって。」

そして この時も、響の母親である、霊感体質の吉良詩織が（…時期的に腹の中に響が宿った頃と重なるが、それ迄は欠片も無かった霊感が急に覚醒）、この家を見た瞬間に「5人居るし！」と直感し、家族に この物件は止めておこうと言おうとした時に、

はえ？急に気配が完璧に消えた？何故？

…となり、結局は「うん、大丈夫。居ない居ない。」と言ってしまふ。

そして響を含む家族全員が この頃には既に、彼女の霊感に關しては ある程度の信用信賴が有ったので、その一言で この住まいの購入が決まったのだった。

勿論その裏には、やはり その、『家に憑（す）んでいる5人』の存在に気づいた誰かさんが、即座に無理矢理に成仏させたという経緯が在ったのだが、その事を当人以外は誰も知らないというのは、また別の話。

~~~~~

AM11:30頃。

「さて…もう直ぐ昼飯だけど、どうする？

昨日、大勢来るって言ったら、母さんから昼飯代って、とりあえず諭吉さん貰ってるけど、ラーメンかピザか頼む？」

「じゃ、ラーメン」「ピザ！」「」

「OK、じゃ、適当に選んでよ。」

そう言つて、木村の声を遮つた女子ズに、メニューが載つたピザ屋の広告を渡す響。

「……………」

「ま、仕方無いだろ？」

「レディーファーストだよ。」

そんな響に、ジト目で何か言いた気な木村と三村に、何かを諭す様に話すのは、千葉と磯貝である。



「ん？ 沢山来てるな？」

「こんにちは。」

「あ、煌兄、おかえりー…と、香純さん、いらつしやい。」

PM2:00頃、リビングに顔を出してきたのは、高校生位で目つきが悪い…もとい、鋭い面構えの眼鏡を掛けた男と、やはり高校生位の1人の少女。

吉良家の長男、つまり響の兄の吉良煌介と、その彼女、水沢香純であった。

「……………」

「皆で宿題か…。ま、頑張れや。」



そう言って、彼女と一緒に、2階の自室に行こうとする煌介だが、

「あゝ、響、ちよつとちよつと…」

「？」

途中、響をリビングの外に手招きする。

「お前も中学生だし…てか、晴華ちゃんとかいるし、解ってると思うが…

死にたくないなら、少なくとも1時間は2階、登るなよ？」

そう言って、凄んだ顔で、響の顔の前に掌を差し出すと、グシャツと何かを握り潰す様なポーズを見せる煌介。

「ら…らじゃ…でも煌兄、俺と晴華、煌兄と香純さんとは違って、ソコまで至ってないか

r…あゝっ、ギブギブ!!」

廊下で顔を赤くした香純の横、煌介のアイアンクローが響に炸裂した。

その後、煌介と香純は2階へ、響はリビングに戻っていく。

~~~~~

「何だか吉良の兄ちゃん、凄く怖そうなんですけど…」

「おう、少なくとも空手ルール（小宇宙無し）じゃ、瞬殺される自信があるぜ。」

涙目で頭を抑えながら、響は応える。

「ノールールだったら？」

「瞬殺という表現すら生温い、刹那で潰されるぜ。」

「「「「お兄さんに殺せんせー、殺って貰おうよ!!」「「「「

「国家機密!!」

そういう やり取りの中、響達は予定していた所まで、宿題を終わらせる。



そして、夕方の櫛ヶ丘駅。

響はバッグに数日分の着替えを詰め、某県（じもと）に向かうのだった。

山と海の間

「見てよ、いっぱい いるよ〜!」

「「おおっ!!」」

その日の朝、渚達は旧校舎裏山で、昆虫採集に励んでいた。

今回の誘い役、生き物大好き倉橋、街育ちで こういう遊びの機会が無かった杉野、それに付き合う形の渚、そして…

「ひゃっはー! 大鍛形 (オオクワ) ゲットだぜ!」

「コイツをネットオクで捌いて、沖縄でキレイな水着の姉ちゃん相手に遊ぶ、軍資金にしてやるぜ!」

…な、安定のチャラ男&エロ大王。

「あゝ、ダメダメ、オオクワガタってさ、かなり前から人工繁殖で大量に出回っててさ、かーなーり、値崩れしてるよ〜?」

「何とおーっ!?!」

浮かれる2人に、現実を教える倉橋。

「高級デイナー代が…」

「ご休憩場所の予算が…」

Orzる下種な2人。

「コイツ等が今日、付いてきた理由って、それだったのか…」

「旅の目的、忘れてるよね…」

~~~~~

「やあ。」

「どーよ？採れてる？」

「あ、磯貝君に菅やん♪」

昆虫採集組に声を掛けてきたのは、今日のA組の作業立ち会いだった磯貝と菅谷。

この日のA組の当番2人を帰した後、磯貝はその儘 渚達と合流、菅谷は一声掛けると、私用があるからと言って帰宅した。

事前に倉橋が約20ヶ所に渡り、仕掛けて置いたトラップ（ストツキングに果物と酒をぶっ込み、数日発酵させた感じなヤツ）に集まっている虫を回収、彼女の見立てで、1人当たり約・700—（シャキーン！）の稼ぎとなる成果を得られた。

「これじゃ、あつと言う間だな…」

「まあ、良いじゃんよ。」

「…でも、やっぱ、何か良いよな、こーゆーのって。」

「杉野？」

「言つたら？俺、街育ちだから、こーゆー機会が無かつたって。」

「あー…」

「分つかるー♪」

緑に、自然に囲まれての隔離教室…彼等にとつては忌むべき場所な筈が、何時の間にか居心地良く感じられる様になつていた。

「でも、俺は やっぱ山より海だよなー。」

「俺もー。」

「お前等は水着の姉ちゃんが居たら、山でもOKなんだろうが…？」

「応よ!!」

杉野の突つ込みにも ぶれない2人。

「あ、海つて言えば、吉良、某県（じもと）の海で泳いでる頃だろうな。」

「何っ!？」

そして、磯貝の何気ない台詞に喰い憑く前原と岡島。

「二昨日、アイツン家で片岡さん達と一緒に勉強してる時に話したんだけどさ、その日の夕方には、地元（アツチ）の親戚の家に向かった筈だからね。

…で、向こうで泳ぐって言つた。」

「何…だと…」

あの、パツキン彼女とかあーっ!？」

「まあ、多分…」

「2人つきりでかあーっ!？」

「いや…其処迄は…」

「赦…さん…」

「杉野も?」

「「チツクシヨオオーッ!リア充、爆裂しろーっ!!」」

男達の慟哭の叫び声が、山に響き渡った。



その頃…

「…ツクシヨ（バシイッ）のわあっ?!」

「ひ、響、大丈夫?」

「お…応…誰か悪口、言ってるな!」

浅野達か?それとも、岡島と前原か?」

某県の浜辺で、某・哲学する柔術家の肉体を目指しているかのような少年の顔面にビーチボールが直撃、そんな彼に、白のビキニを着た、白金色の長い髪の少女が慌てて駆け

付けたりしたのは、別の話である。

## 魔力の時間

「…!?!」

7月末日の夜、桐ヶ丘市に帰り、自室で残った宿題と格闘していた響は、その尋常ではない『魔力』を感じ取った。

今の世に「吉良響」として生を受けて15年、初めての事である。

いや、正確には今迄も…というか、つい最近に何度か、ほんの一瞬だけ巨大な魔力が溢れたと思っては、直ぐに消えるのを感じる事はあったが、今回みたいに長時間、その存在を明らかにするが如く、魔力が湧き上がるのを感じるのは、紛れもなく初めての事だった。

何だ…?!何か、凄えヤバい予感がする…!!

「ちよつと響、こんな時間、何処に行くつもりなの?!」

「ゴメン、急用が出来た!!」

「響!?!」



母親の呼び掛けも　そこそこに、家を飛び出す響。

周囲の己に対する視線の有無を確認すると、その身を一筋の光と変え、その魔力が現れた場を目指し、飛んで行った。



魔力が溢れ出る場所…その場は都内の中心、都庁の屋上。

ドンっ!!

「あ痛たたた…魔力結界か？」

俺の瞬間移動を弾くって、かなりの存在だな…一体、何者なんだ!？」

びた…

見えない壁に手を当て眩く響。

本当は魔力が沸き立つ、その場まで直接　飛ぶ心算だったが、遙か手前で何人をも阻むかの様に敷かれた魔法障壁に、某テレビ局の正面玄関に、強行突撃するワゴン車の様に派手に激突、跳ね返されてしまったのだった。

「仕方ないね…」

そう言つて、右拳に小宇宙を溜めた響は結界に向かって拳一閃、その衝撃により、一瞬　生じた『隙間』を潜り、

「…さて、急ぎますか。」



既に それなりに顔馴染みな2人、魔力結界内に居るといふ事で、互いに互いを只者ではないと察する両者。

しかし、やはり互いに その素性は知られたくないのを察したのだろう、必要以上の詮索は、この場ではしない両者。

とりあえず、今尚、目の前のビルの屋上で溢れかえっている、強大な魔力を感じ、何事かと思ひ、この場に來た事を話す響。

そして、このマ○ド店員：真奥貞夫が言うには、魔力も そうだが、件のビルの屋上に、バイト先の後輩が何者かに捕らえられたらしいと言う。

「えっ?もしかして、おっP:でなくて、佐々木さんつすか?」

コクン…

響の問いに、無言で首を縦に振る真奥。

マク○アルバイト店員・佐々木千穂(16) …

彼女は その、尋常ではない其れ(b yイトナ) 故に、E組男子の間にも、かなりのフアンが居たりした。

「とりあえず、急ぎましよう。」

「ああ…」

改めて2人で魔力の元を目指そうとした、その時、

「この先には進ませんで、魔王!!」

「!?!」

空から女の声が聞こえたかと思えば、その声の主と思われる黒髪和服の大和撫子な外見の少女が、巨大なハンマーを振り翳し、空から降ってきた。

どっごおくん!!

「うわつとお!!?」

その天空からの強力過ぎる…地面に巨大なクレーターを作る程の強力なハンマーの一撃は2人には躲され、真奥の自転車を破壊するだけに留まった。

しかし、

「あ、あゝつ?!俺のデュラハン号ゝつ!?!」

「ま、まおーさん?」

その一撃は、真奥に精神的ダメージを与えるには十分だった様で、

「鈴乃おゝ!?!」

お前、何て事してくれちゃってんのお?

デュラハン号に何か、怨みでも有るのお?

新しい自転車と防犯登録料と、粗大ゴミに出す有料チケット代、弁償しなさいよお!?!」

「まおーさん、落ち着いて!」

子供の様に大泣き……正しく号泣という表現がピッタリな泣き顔で、知り合いなのか、鈴乃という その女の名前を呼びながら、完全に大破、再起不能となった己の愛車について問い詰める。

響は、本当は自分の自転車に「デユラハン号とネーミングする事に対し、「何それ？何処の厨2？」……と突っ込みたいのだが、とりあえず そういう空気じゃないのを察知、子供をあやす様に真奥を宥める。

その後、真奥と鈴乃は響そっちのけで言い争いを始める。

響からすれば、聞き覚えの無い、知らない地名や組織名らしき単語が次々と出てくる 会話の内容から察するに、どうやら この2人は遠い地で組織レベルの殺し合い……戦争を繰り広げていたが、この櫛ヶ丘市では良き隣人という、何とも微妙な間柄らしい。

そして、2人の間に何があったかは知る処では無いが、兎に角 再び合間見える運び となつたらしい。

どうやら、例の巨大な魔力にも関係がある様だ。

そして真奥としては極力、衝突は避けたかった様だが、ついに観念し、覚悟を決めた顔をする。

「仕方無い……。少し、待ってろ。」

「な……。何をしているのだ？ 貴様は?!」

そう言うと真奥は着ている服を脱ぎだし、鈴乃は顔中を真っ赤に染め、顔を背ける。  
「莫迦者、は、早く服を着ろお!!」

一体、何を考えているのだ?!

赤面全開で目を閉じ、そして着物の袖で顔を覆い、本気で恥ずかしかっている鈴乃。  
「ふ…働いてない貴様には解るまい…」

脱いだ服を丁寧に畳み、歩道に置いた真奥は、未だ顔を背けている鈴乃に話す。

「いやーかあ、よく聞け?」

マ〇〇〇ルドの制服は貸与制でなあ、通常業務に関係ない理由で破損させてしまった場合、買取弁償しないといけないんだよ!!

魔王城（わがや）には、そんな経済的余裕は無い!!」

「…まあーさーん、セコいよ〜?」

真顔で力説する真奥に、響がジト目で突っ込む。

「いや、セコくない!」

吉良君! 君も、社会人になれば判る!!」

「あゝ、さよですか…」

「え? 何? 何なの? その顔!!」

「いや、…にしても、パンツ一丁にソックスにスニーカーは無いですよ、せめて、ズボン

は履きましうよ?

それじゃ、変質者ですよ? 露出狂ですよ?

そうですよねえ、お姉さん……えと……鈴乃さん……でしたっけ?」

そう言つて、鈴乃に同意を求める響。

「全くだ、その少年の言う通り……い、いやあああああああ……っ!!!」

ガク……

それに応えようと、鈴乃は声を掛けられた響の方に顔を向けたが、その瞬間、その鍛え絞られた上半身（おとこのはだか）が視界に入り、絹を引き裂いたような乙女の悲鳴を上げると同時に倒れ込み、その儘 気絶してしまふ。

「鈴乃?」「お姉さん!?!」

パンツ一丁の真奥と、ズボンは履いているが、やはり上半身真ツパの響が、気を失つた鈴乃に駆け寄る。

真奥との やり取りの間に、何時の間にか着ていたTシャツを脱いでいた響。

その上半身露わになつた響の、某・哲学する柔術家を目指しているかの様な肉体を目にした鈴乃。

それは男の身体に免疫の無い、初（うぶ）な鈴乃にとつて、己の耐性を遥かに凌駕、オーバークイルとなつていた様だつた。

「さあ、吉良君、先を急ごう！」

「え？良いんですか？この人？」

「大丈夫だ！死にはしない!!」

「……………」



タンタンタンタンタンタン…

「くっそ！何でエレベーターが使えないんだよ!？」

「ん、夜間節電？」

「経費節減か！それなら仕方無い!!」

「納得するんですかっ?」

都庁内部に侵入、非常階段を登り、屋上を目指す2人。

「なあ、吉良君…」

「はい?」

「さっきの鈴乃との会話、聞いてたろ？」

君なら あれだけで、俺が只者では無いのを通り越して、人間では無いのも気付いてると思うのだが…」



「あー、今更まおーさんが、別世界の魔王って言われてもねー、マク○の店内で、元カノさんと修羅場つてるイメージしか無いですからねー。ピンと来ないすね。」

「もしかして、恵美の事を言ってるのか？」

「アレは元カノじゃない!!」

「それに俺、その人の正邪の見極めには、それなりに自信がありますからねー。」

まおーさんは悪人には見えないすよ？

さっきの お姉さんもだけど。

寧ろ、あの魔力の方に、悪意を感じますけどね?」

「スルー?…てか、良い笑顔で そーゆー事 言うの、止めてくれる?」



「ちよ…アンタ、何しようとしてんのよ!?!」

「恵美さんに何するんですかー!?!」

「この変態!」「痴漢!!」

「腐れ外道!!」「下種!」

「覗き魔!!」「ストーカー!」

「セクハラ!」「下着ドロ!!」

「…なっ?!そんな事は やっていなーい!!」



捕らわれていた2人の少女達は、この場に駆け付けると信じていた人物の登場に、喜びと驚きの表情を浮かべ、

「きゃあああああああああつ?!」

その救世主の出で立ちに、まるで夜道で露出狂の変質者にでも出くわした様な、乙女の悲鳴を上げる。

「な、何て格好してるんですかあ!？」

「よ、寄るな、この、変質者!!」

「ちよ…助けにきたのに、その言い方は ちよつと酷くない?」

千穂と、マ○ド店内で何時も真奥と修羅場ってる?OL…遊佐恵美の言葉に軽く凹む真奥。

「まおーさーん…だーかーら、下着姿はアウトって言ったじゃないですかあ?」

「え?吉良君も?」

「ども〜♪」

因みに響は、先程 脱いだTシャツを、きちんと着直している。

「ふうん?本当に来たんだ、魔王?」

背に翼を持つ、天使の様な姿をした少年が まるで、この展開を初めから予想していたかの様に話し掛けてきた。

「悪いかよ？サリエル？」

「クス…それに そつちは…聖闘士だね？」

「!?」

真奥にサリエルと呼ばれた少年…天使の続く言葉に、響は驚きの表情を隠せない。

「あつはつはつは！これは傑作だ!!」

魔王は勇者だけでなく、聖闘士とも仲良しなのかい？」

「聖闘士…だと…?」「聖闘士って…?」

「その事は後で話しますよ。」

…つて、勇者!?元カノさんが？」

「違う!!」

「…てゆうーか、お前、どつかで見た事あると思ったら、駅前のおんたの お子ちやま店長

じゃねーか!」

「なっ?!お子ちやまとは、失礼なっ?!」

そう、天使サリエルは真奥が勤める、マ○○ナルド柵ヶ丘駅前通り店の、道路を挟んで正面に先日 店舗をオープンした、○ンタツキー・○ライドチキンの店長として、街に潜んでいたのだった。

「知ってるか お前、ウチのクラスの女子に評判、凄く悪りーぞ?」

グラサン趣味悪いし、香水キツイし、喋り方もキザったらしくてキモいし（…中略…）  
やたらと手を握ってきて鳥肌物でキモいしとか、そりゃもう色々々と…な。

あ、グラサンは、そのオレンジパンダを隠す為か？」

「うるさいうるさいうるさい!!」

「「釘〇さん？」」

「違う!!」

「??」

まるでコンビニに設置してある、防犯カラーボールの直撃を受けたかの様に、右目の周りを大きくオレンジ色にペイントしているサリエルの台詞に、響、真奥、千穂がとある人物の名を思い浮かべハモらせ、それを見た恵美は『?』な表情を浮かべる。

「…処で吉良君、聞き捨てならない事が1つあるのだが？」

「はい？」

「どーしてあの人、○ンタの店長だって知ってるんですかあ?!!」

「う…」

響に、真奥と千穂が問い詰める。

「いや、この前のオープンの時、クラスメートと一緒に誘われて…」

でも、それ以来、クラスの皆も行っていないですよ、だってあの店長、キモいから…」

まるで裏切り者、或いは浮気者と言いた気な顔の2人に、必死に言い訳する響。

「え〜い貴様等！僕を無視するな〜っ!!」

それから僕は、断じてキモくなくいい！」

ドドドドドッ

完全に蚊帳の外にされていたサリエルが、響達に向かって無数の魔力の光弾を放つ。

「うおっ?!」「ちーちゃん!!」

「きゃっ?!?真奥さん?!」

それを響は左側に、真奥は千穂を抱きかかえ、右方向にそれぞれ跳んで避ける。

更に響は、その儘、恵美に向かって走り、

「大丈夫すつか、元カノさん?」

助けるのが まおーさんじゃなくって、すいませんねー…て、と…!!」

パキイ…

彼女を拘束していた魔力の枷を、自らの小宇宙で破壊。

「だから、元カノじゃないっ!!」

その際、真奥と恵美が、とある『竜を探す物語な超有名ゲームシリーズ第4弾』を元にした二次小説の、赤毛で槍使いな転生系主人公と、その恋人ポジションの踊り子の様

な、息ピッタリなハモリで否定したのは、余談である。

## 天使の時間

「ま……まあ、礼は言つとくわ。えーと……」

「あ、俺は吉良響。中3つす。」

俺の事は皆、吉良つちとか きーちゃんとか呼んでるから、それで良いですよ。」

……そう呼んでるのは、現状では まだ極一部である。

「……ありがとうね、吉良君。」

それから、私は遊佐、遊佐恵美よ。

あの男の元カノなんて、失礼な呼び方は止めて欲しいわ。」

「……了く解。……で、遊佐さん？」

「何？」

「前、胸元、開いてますけど……」

「え、っ?!」

先程まで拘束されている時に、サリエルに何をされそうになったのか、恵美のブラウスは上3つのボタンが外されており、その下の薄紫色のシルクの布地が僅だが見えていた。





締める千穂。

「…本っ当に腐れ外道の下種ね!!」

「神の使いである天使とは思えねーな?」

「恵美!吉…良君?」

其処に、千穂を守る様に、真奥の左右に聖剣を携えた恵美と、そして両頬に赤紫色の紅葉を浮かべた、少し涙目の響が並び立つ。

「おいおい聖闘士?」

君は本気で魔王の味方をする心算かい?

君は神の戦士じゃないのか?」

「お前は此方側の人間だ」…そう言いた気なサリエルに響は

「生憎、俺が仕える神は、アテナだけだ。

聖書の神々じゃねーよ。

大体テメーの趣味で、無関係な佐々木さん拉致った時点で、テメーは死刑!…だ!!」

二丁拳銃をイメージした両手の人差し指を向けて、其方側に付くのを否定。

「それに、お前の立ち位置からして、まおーさん消そうってだけなら、別に文句は言わないg「いや、吉良君!其処は言えよ?!言おうよっ!!」…勇者である遊佐さんの聖剣の回収…それも、あんな強引な手段での、一体どーゆー理由だ?」

「無視い!？」

「本来ならば、聖剣ベターハーフ…それを生成する天銀は、天界の至宝。

人の手には余る物だからね…。」

「…与えておいて、やっぱり返せかよ?」「魔王と連む時点で、裏切り者と判断しても、おかしくはないだろ?」

その一片の悪びれも無い台詞に、響は不愉快な表情を隠さず表に出し、ちびつ子天使を睨む。

「まおーさんと遊佐さんの奇妙な関係は、此処に上がる迄に、粗方は聞いたよ。」

「吉良君…」「ほう…?」

「世界を席捲せんとする魔族の王と、其れを阻止せんとする、人類の希望の光!

しかし、組織としてでは無く、個人として対峙した その時、互いの立場を超えて惹かれ合う2人!」

「え?」「ちよつと待って…?」

「それでも、互いの宿命に殉じ、剣を交える2人!

嗚呼!此ぞ正しく、究極のロミオとジュリエット!!」

「だから違うって言ってるだろ!!」

最後には酔いしれた顔で右手は胸元へ、左手は大きく広げと、多少 芝居染みた響の

口説に、まとも息ピツタリで仲良く否定する2人。

「いい加減にしたまえ？」

僕は、茶番は好きでは無いのだよ！」

ビュン…

しかし此処で、まとも無視された形のサリエルの右眼から、紫色の光弾がレーザーの様に放たれる。

響は構わずに天使に特攻し、恵美は其の光弾を聖剣の力で弾く。

カインツ

「くっ…」

その瞬間、内に秘めた力が削られる様に、刀身が短く縮む聖剣。

「覇っ!!」

シュ…

そして響はサリエルに向かい、小宇宙を込めた掌打を放つが、それは間一髪で躲され、顛を掠るだけに終わってしまう。

ぼた…

「やるね、聖闘士！」

掠るだけとは云え、この僕の顔に傷を負わせるとは…」

そう言つて、顛から流れる血を手で拭つたサリエルは、  
「万死に値する！」

ビュンビュンビュンビュンビュンビュンツッ！

「おわっ!?!」

響目掛け、再び右眼から放たれる紫の光弾：【墮天の邪眼光】を乱打するが、響は其れを悉く躲し、更には、

「聖闘士に同じ技は、以下略!!」

ボゴオツ

「うげえ……」

懐に入り込み、ソバットを鳩尾にクリティカルさせる。

「くっそおーっ!!」

堪まらず翼を広げ、上空へエスケープするサリエル。

「あははははは！僕はねえ、月に近付けば近づく程、その力が増していくのだよ！

この巨大な満月の力を以て、聖闘士！

確実に斃してやるよ!!」

満月を背に、巨大な鎌を取り出すと、サリエルは響に向かい、急降下の突撃を仕掛ける。

ガシヤアツ

しかし、此も紙一重で躲す響。

「吉良君！」

真奥と恵美が加勢に入ろうとするが、

「下がって！」

響が其れを制止。

「聖闘士は基本、多対一の闘いを禁じている!!

それに遊佐さんと あの紫のチームは相性が悪いみたいだし、まおーさんは まおーさんで、既に魔力が殆ど すっからかんで役立たず「酷くない？」…兎に角2人は、佐々木さんガードしてて！」

「仕方無いわね…真奥！」

「ああ…ちーちゃん、こっち来て！」

「あ、はい…凄い…真奥さん、吉良君も、エンテ・イスラの人だったんですか？」

「いや…それは違うんだけどね…」

「？」

千穂の周りに、防護結界を張る真奥。

「少し派手に行くぜ！」

アクベンス・シユナイダー!!」

ヒユンヒユン…

「うぐっ…!!?」

左手の二本指から、無数の小宇宙の刃を乱舞させる響。

サリエルは、その全てを躲す事は出来ず、直撃は免れるもガードの上から数発はマトモに受けてしまう。

「どうする、お子ちゃま店長？」

今なら学校帰りに毎日、○ンタのファミリースト、ゴチしてくれるだけで勘弁してやるぜ?」

「な、舐めるなあっ!!」

僕は大天使・サリエル様だぞ!!」

再び翼を広げると、上空高く飛び、

「知っているぞ!!」

この世界には、聖衣が無い事くらい!

そんな完全に力を発揮出来ない、ましてや聖闘士と云えど、高が人間如き、僕が負ける筈がない!」

カッ：

焦り、怒り、自棄、自惚れ…反する其れ等が入り混じった表情から、今迄みたいな連打とは違う、魔力を最大限までに集中させ、破壊力を極限までに高めた墮天の邪眼光を放つ大天使。

響は それすら躲してしまいが、

ドツゴゴゴゴゴ：

直撃した都庁屋上の床は勿論、その下にある数フロアを完全破壊してしまう。

当然その残骸は地上まで落下し、その周辺も滅茶苦茶な壊滅状態になる。

「お前、何て事を!？」

人払いの结界張ってる中だろうから、巻き添えは居ないと思うが、建物破壊って、何を考えてるんだよ!？」

「はあ?何を言ってるんだい君は？」

この世界が どうなろうと、エンテ・イスラの住人である僕が、知った事か!!」

ぷち：

「あー、そーかよ…」

我関せずとばかり、誇らしげに言つてのけたサリエルだが、その台詞は響の前では悪手とは気付かなかつた。





している。

そんな中、サリエルに小宇宙込みの正拳を仕掛けようとする響だが、

「甘いぞ、人間！」

BWOOMB!!

「うおっ!!」「なっ!?!」「きゃっ!!」

サリエルの広範囲に及ぶ空間爆裂魔法による爆発で、被弾、吹き飛ばされる響達。

「けほっ!」「ゴホゴホ！」

爆発の煙で、周囲の視界が完全に遮断されてしまう。

そして、煙が晴れた時…

「ほほう…?」「ほえ？」

真っ先にサリエルの目に写ったのは、真奥と恵美がガードしていた筈の、佐々木千穂だった。

「今がチャツアーンズ！」

こっちに来い、佐々木千穂!!」

人質にする気満々で、千穂に飛び掛かるサリエル。

そんなサリエルに対して千穂は、慌て臆する事無く、小さく笑みを零すと、

「…鳥間先生、直伝…」

バキィッ!!

「あじやばーっ!!」

一度、身を屈めると、タイミングを合わせて立ち上がり様に、胸を縦に大きく揺らしながらの豪快なアッパーブローをお見舞いし、返り討ちにする。

「な、な…!?!」

片膝を着き、何が起きたのか理解出来ず、啞然としたサリエルに、追撃する様に千穂が…その姿が響に変わり、立てている膝を踏み台の如く駆け上がると、

「烏間先生直伝、パート2!!」

ドゴオツ!

「ぎゃぴりーん!!」

只できえ強烈過ぎる膝蹴りを、小宇宙と共に、顔面に打ち込んだ。

「な…ど…どうして?」

「説明しよう!」

完全にパニックになっているサリエルに、響が種明かしを始める。

「俺が最初に撃った掌打な、掠っただけで終わったと思ったんだろが、あれこそ、俺の裏技の1つである【幻夢拳】!!

幻覚を魅せたり記憶を操ったり、超絶卑怯技よ!!」

「な？バ、バカな?！」

響の説明に、驚きの表情を隠せないサリエル。

技の性質云々の恐ろしさでなく、精神に働きかけると云う類の技を、人間が天使である自分に対し、十全に仕掛けていた事に対してである。

「人間を舐めるなよ、固羅ア!!」

ブン…

動揺しているサリエルを狙い、続けて放った響の前蹴りは躲され、またも上空に逃げられる。

「クツソー！」

人間なんか人間なんか人間なんか!!

月の力を もっと吸収すれば…!!」

またもや不自然な迄に、妖しく光る満月を背に、その月の力とやらを得ようとするサリエルだが、

「あー、それな、実は家を飛び出した時から気になってたんだけど…

あれつて、まおーさんか遊佐さんの仕業ですか?」

響が月を指差しながら、真奥と恵美に話を振ってみると、

「いえ…私は…」

「さくてね…どつかの天使の犬のハゲが、擬似的に作ってたんじゃね？」

でも其れも、ウチの墮天使なニートを手伝わせようと誑かしたつもりが、逆に騙されていて、実は既に形だけの幻影でしたってオチだろ？」

「はい？」「なっ…!?」「え？」

パリン…

その時、まるでタイミングを計っていたかの様に、満月が その光で照らす夜空と共にガラスの様に割れ、其処には何時もの7割が蒸発した月が顔を出す。

「なっ…コレは…?」

破壊された三日月を初めて見て、狼狽えるサリエル。

「あー、お前、コッチ来て情報収集とか、全然してないだろ？」

この世界の月、3月から ずっと、あんなだぜ？」

「何だと…!?!」

「ついでに言えば、月の恩恵受けてたと思ってたのも、実はアレ、幻夢拳の効果な♪

尤も あの月でも、多少は月の力?とやらを、マジに吸収してたか どうかは知らないけどね?」

ふう…

ドヤ顔で説明する響だが、一呼吸すると表情を険しく一変させ、

「大体さつきからテメー、人間人間って喚いでるが、俺達　聖闘士はアテナの下、ハーデスやポセイドン…神々と闘う事を宿命付けられてるんだ!!

貴様の様な、神の”使い”でしかない、天使”如き”に、そう簡単に屈してたまるか!!」

「な、何だとお!?!」

「うおおおおおおおおおおお〜っ!!!」

雄叫びと共に、小宇宙を極限まで燃焼、高める。

「逆れ、俺の小宇宙!

逝ってこい、黄泉比良坂!!」

そして小宇宙を変換させた熾気を拳に纏わせ、目の前の敵に突進し…

「ひいつ!? く、来るなあっ!?!」

「積尸気い…冥界波あぁー…っ!!!」

カツ…!!

「うわあああああああぁあぁっ!!」

蟹座の黄金聖闘士の代名詞とも云える　その拳が、大天使サリエルにヒットした。







地面はゴツゴツとした固い岩場。

薄黒い靄に覆われた空に太陽は無く、靄の更に上方から、申し訳程度に確認出来る月の様な明かりと、何処行く当ても無い様に彷徨う青白い鬼火。

それだけが光源の死後の世界、冥界。

蟹座の黄金聖闘士の一撃を浴びたサリエルは、その死後の世界で亡者の列に加わる事無く、何かから逃げる様に、そして何かを探す様に走っていた。

何なんだ！此処は一体、何処なんだ!?

暗いし飛べないし魔力は使えないし…

何処かに出口はある筈だ！

くそ…あの聖闘士、元の世界に帰ったら、魔王や勇者共々、絶対に八つ裂きにしてやる…!!

コツン…バタン！

「い、痛い!!」

走っている途中、慣れない岩場に躓き、派手に転ぶサリエル。

膝を擦り剥いたが、出血は無い。

それ以前に先程から、かなりの時間、かなりの距離を走っている筈なのだが、渴きや疲労、痛みは確かに在るのだが、汗は全く掻いていない。

「くっ…何故この僕が、こんな目に…」

「業だろ？」

「!？」

愚痴を言っている天使が、不意に声が出た方向を振り返ってみると、其処には自分はこの場所に葬り込んだ本人が立っていた。

「聖闘士？何故、此処に!？」

此処は一体、何なんだ!？」

いや、そんな事は どうでも良い!!

早く僕を、元の世界に戻せ!」

そんなサリエルに対し、

「ふっ…此処は冥界！死後の世界だよ!!」

何故、此処に…って、そんなの決まっているだろう、サリエル！お前の息の根を、完全に確実に止める為だ!!」

完全に台詞が、何処かの悪役の様な響。

響は死者の列の最前ある、死火山の様な火口、そして其処に、自ら飛び込み落ちて往

く死者達を指差し、

「見ろ！あの火口（あな）を！」

あれこそが黄泉比良坂！

この世と あの世を真に繋ぐ道さ!!

サリエル！貴様が積尸氣に來た程度で死者の列に加わらないのは判っていた！

（むんず！）だからお前は、この俺自らが、あの穴に叩き落としてやるよ!!」

もう1回言うが、どう見ても、台詞と顔と行動が悪役の響。

生前（享年9歳）は もつと素直な、例えシヨタ女（16）の熱烈なアタックも、好意として素直に受け入れていた純粋な少年だった筈が、今生の世界に存在するカーズト制度の為か、蟹座を宿星に持つ この少年は、心根は確かに正義で在りながらも、その性格は適度に歪んでしまった様だ。

そして説明を終わらせた響は、恐怖に怯えた顔を浮かべる天使の首根つこを掴み引つ張り歩き出すと、

「ひいひい?!い、嫌だあゝつ!!」

その天使は 更に恐怖と絶望で顔を歪ませ、死刑執行人（マニゴールド）と化した響の手を無理矢理に振り解き、黄泉比良坂とは逆方向に逃げ走りだした。

嫌だ、僕は死にたくない!

そうだ、あの死者共の列の先頭が真の死の入口というなら、最後尾には、元の世界の出口が きつと在る筈だ!!

∴そう思いながら走る内、次第に当たりを彷徨う数体の鬼火が、サリエルに近づき、その身に纏わり憑く。

「な、何だよコレ? アツチに行け!」

うう…

あああゝ…

うゝ おおゝ…

そう言いながら振り払おうとするが、鬼火達は離れる素振りは見せず、それ処か、その形を生前の人の姿に変えると、苦しそうに呻き声を上げながら、手を足を体を、拘束するが如く、しがみついてきた。

「何なんだコイツ等!?! 僕から離れろよ!!」

「彼等は貴様達が今迄、不条理に命を奪ってきた者の魂じゃないのか?」

「せ、聖闘士!?!」

逃げたサリエルに迫いついた響が、疑問に答える。

「それにしても、驚いたよ。」

「な、何がだよ?」

「今、この場に、お前に手を掛けられた異世界の者達が居ると云う事は、この黄泉比良坂は全ての…少なくとも、複数の世界線を共有している事になる。」

「積尸氣を司る蟹座の聖闘士としても、これは新事実だ。」

「ん…と、何やら一人、納得する響。」

「待てよ、僕は こんな奴等、殺した覚えは全く無いぞ!」

「必死に関係を否定するサリエルだが、

「お前が直接でないにしろ、天界や その下にある教会辺りが、どうせ自分達に従わないってだけで、異端扱いして表で裏で、消してきた人達じゃないのか?」

「う…」

「心当たりが有るのか凶星だったのか、言葉を詰まらせてしまう。」

「これだから、他を一切認めない宗教関係ってクソなんだよ。」

「まあ、教会とか、聖書の神と違って、所詮は そんなモンだよな?」

「特に上の奴等なんざ、権威権力への依存、己の保身しか考えてない…」

「どおっつせ、テメーが こっちの世界に来た目的つても、まおーさん…魔王暗殺も

1つだろうが、ついでに勇者である遊佐さんも一緒に始末して、手柄を全部 教会の独

り占めにして、王制以上の立場を得ようとしたつてのが本音じゃね？」

「黙れえ!!」

憑いている死者を振り解き、響に拳を向けるサリエルだが、

「遅い!」

バキッ

逆にカウンターのハイキックを、まともに顔面に受け、腰を地に着けてしまう。

「くそつ、魔力が使えたら、こんな奴……」

「今頃 気づいたか？」

この冥界で、積尸気の使い手とバトるつて時点で、オメー、詰んでんだよ!!」

そう言う響は右手を上へ上げ、小宇宙を燃やし、

「不条理に命を奪われ、未だ失念の儘に彷徨うエンテ・イスラの民達よ!

貴方達の無念は、この俺が晴らす!

だから今、俺に力を貸してくれ!!」

先程まで、サリエルにしがみついていた霊達に訴えかける。

……

そうすると、人の姿をしていた死者達は、再び鬼の形火となり、響の上方に掲げられた右腕に集まっていく。

「なっ…?!これは…?」

響は その右腕…右拳を、既に腰が抜け、へたり込んでいるサリエルに向け、  
「行くぜ?覚悟は良いな?」

「う…うわああっ?!、た、助けて…」

「却…つ下!命乞いなら、テメーの神に してみる!!」

「おお…か、神よ、この、哀れな子羊を救い賜え…」

「積尸気い!転霊波ア〜っ!!」

ゴゴオオオオツ!!

「ぎゃつあああああ〜っ!!」

小宇宙と一体となった無数の死者の魂を、エネルギーと変えて、撃ち放つのだった。

この転霊波で吹き飛ばされたサリエルは、死者の葬列の中に突っ込み、その儘、黄泉比良坂への行進に加わる事になった。

「ふん…テメーの神は、マンモス哀れ過ぎて、救いようが無いだよ!」

そして、サリエルを撃った魂達は、死者の列には加わる事無く、鬼火の状態の儘、浮遊しながら直接、黄泉比良坂の穴に向かって行った。

「本当は、きちんと並ばないと駄目なんだけどね〜?」

まあ、きちつと成仏して、新しい生を受けるが良いさ…」

「ただいま〜♪…つて、あら?」

「「うわっ?!びっくりした!!」」

積尸気に向かった時と同様に、今度は効果音（おと）も無く、いきなり姿を現した響に驚く真奥達。

しかし響も多少、驚きの顔を見せる。

どうやら自身が積尸気に逝っている間に、現世側も少し動きがあった様で、凄くバツの悪そうな顔をした鈴乃、見た目は真奥と同年代な、銀髪の優男な青年、響と歳が変わらない風に見える、藍色の長い髪で片目を隠した少年、何故か、ロープで何重も身体を縛り付けられている、少し…いや、かなり頭が寂しい老人が、新たに其の場に居た。

「えと…まおーさん…ですか?」

「おうよー!」

しかし、一番 響が驚いたのは、真奥の姿であった。

自分より少し背が高く、体格も普通に鍛えている程度だった筈の真奥が、背は3対弱という、常人外れな長身となり、左右の側頭部からは正に悪魔と思わせる角をイメージでなくリアルに生やし、何よりも…

「まおーさん、かつけーっ!!」



どんなトレーニングしたら、そんな筋肉付くんすか?!

響からすれば、正に理想的な、鋼の筋肉の鎧を纏った肉体となっていたのだった。

ついでに言えば、サリエルが破壊した筈の建物等が全て、何事も無かった様に修復されていた。



「成る程…まおーさんが復元（なお）したって訳ですか。」

「応よ！でも御陰様で、折角貯まった魔力が、また すっからかんだぜ!!」

「魔王様…嬉しそうに言うのは、少し違うと思えますが…」

「芦屋く、別に良いじゃんかよ。」

真奥に芦屋と呼ばれた銀髪の青年が、遠慮気味に突っ込みを入れるが、それに対し、

『後悔していない（どやあ!）!』な顔の真奥。

「少年…」

「あ、鈴乃さん?」

そんな中、鈴乃が響に声を掛ける。

「その…すまなかつたな…」

「あ、いや…俺は別に…」

「あ、吉良君? 鈴乃とは、もう、色々和解したから! 君もっ! ねっ?」

会話が續かない2人の間に、恵美が割って入り、取り持った。

「まあ、俺は特に、気にしてないすから。」

どっちかかってと、鈴乃さんの被害者は、まおーさん…のチャリですからね。」

因みに そのチャリ…デユラハン号に関しては、鈴乃が新しい自転車に係る費用を全て負担する事で収まつたらしいが…

「まおーさん…セコいつすね…」

「セコくない!!」

「いや…理由は、ドーであれ、女性に集るって時点で人として、いや男として、どうかと思えますよ?」

…てか、破壊された建物と一緒に、デユラハン号も修理(なお)せば良かったじゃないですか?」

「あー、しまった!その手があつた!」

でも、魔力が もう無い!!」

orz…両の膝と掌を着き、頭を垂れると同時に、通常の姿に戻る真奥。  
参考までに この男、未だパンツ一丁、下着姿の儘である。



「改めて名乗らせて貰う。」

私は鎌月鈴乃と申す。鈴乃で構わん。」

「あ……こりや御丁寧に……」

じゃ、俺は吉良響。

皆、俺の事は、吉良つちとか きーちゃんって呼んでるから。」

……だから現在、その呼び方をしてるのは、カルマと一部の女子だけである。

「そうか……では、今度とも宜しく頼む、吉良つち殿！」

「じゃ、あたしも、今度から きーちゃんって、呼んでも良い？」 「是非とも!!」

千穂の言葉に、響は肯で即答する。

「初めまして。私は魔王さま……コホン、現在、真奥の同居人をしている芦屋と申します。

以後、お見知り置きを。

そしてコイツが……」

続けて芦屋が自己紹介をし、

「漆原です。よろしくね、きーちゃ（バキイツ!!）い、痛い!？」

更に続けて漆原と名乗った少年の顔面に、響の正拳が唸りを上げた。

「な、いきなり何すんだよ?!僕が一体、何したって言うんだよ!？」

「いや、何か、呼び方がムカついたら……」

「何だよ、それ!?何処のキレた中学生の台詞だよ!?佐々木千穂は良くて、僕は駄目なのか

よ?!それって差別じゃないか?大体、言い訳の前に、僕に謝るのが先じゃない?」  
「そんな事より、吉良つち殿…」鈴乃、そんな事って何だよ!」

「…黙れ、ニート。」「非道いつ!」

漆原の必死の問い詰めを、鈴乃が遮る。

「…サリエル…様…は、本当に死んでしまわれたのか?」

「ああ、冥界の死者の列に加わったのは、確認したからね。」

「それは…少し不味いかもね…?」

「…だな。」「…ですね。」「…うむ。」

「え?」

響の言葉に、難しい顔をする恵美達。

一応はサリエルは、エンテ・イスラでは聖教審議会を支配下とする神の使いである大天使。

今回の件は、例えサリエルと教会の一部の人間の独断行動だとしても、本当に殺してしまっただとしたら、今度はリアルに天界が動きかねないとの事。

「それじゃ、仕方ないですね…」

ドガッ!

「ぎゅびいつ!」

何時もの如く、死体に物理を喰らわせて、魂を呼び戻す響。

「「「う…わあ…」」」

そして、その行為にドン引きな真奥達。

因みにだが、実は魂を戻すのに、わざわざ死体を蹴ったりする必要性は無い。

「よう、サリエル、目覚めは どうだ?」

「…最悪だよ…って、ベル!?

まさか、君は裏切る心算かい?」

「…魔王と慣れ合うつもりは無いだけだ。

聖教審議会の私欲の為なら、此方の世界が どうなつても構わないという考えは、やはり私の中の正義が許せない。

サリエル様…私を裏切り者、異端として本部に報告したいなら、好きにするが良い。

その変わり、その時は過去、教会が私に課した裏の命の全てを公にする迄だ。」

「そ、そんな事をしたら、君も、「承知の上だ。」…ちい!」

「まあ、どっちにしても、今度、佐々木さんや遊佐さんや鈴乃さんに手え出したら、只じゃ済まさないぞ?」

ピシイ…

そう言って、舌打ちするサリエルの顛に、掌打を当てる響。

「聖闘士?! 貴様、一体何を…うわあっ?!

ごめんなさいいゴメンナサイごめんなさいいゴメンナサイごめんなさいいゴメンナサイ!!」  
それに対してサリエルは、文句を言おうとしたが、次の瞬間、いきなりDOGEEZA  
して謝りだした。

「吉良つち殿…一体、何をしたのだ?」

「ああ、幻夢拳の上位技の、幻夢魘瘡拳って言ってね、今回は俺達に対して、芳しくない感情や発想を抱いたら、ウチの副担任の先生がマジ睨みで凄む顔が、どアップで目の前に視える様にしておいた。」

「ごんだけ恐ろしい顔なのよ…」

「試してみます?」 「いえ、結構!!」

その後 響は、未だ縛られ、気絶しているオルバという神官にも、同効果を及ぼす幻夢魘瘡拳を撃ち込んだ後にサリエル共々、

「2度と来んな!!」

魔力0の真奥の代わりに、小宇宙を使って異世界の門（ゲート）を開き、その中に捨てる様に投げて追放する。

そして、

「佐々木さんも…ごめんね、痛くしないからね…」

「え？」

チヨン：

「……ん……………zzzz」

響が千穂の額に、軽く人差し指を当てると、その儘 眠ってしまふ。

「ちよ……吉良君、ちーちゃんに何したんだよ？」

「…俺が、特別な能力を持つってのは、余り知られたくないんで…」

俺は単に、騒動に巻き込まれたマク○常連の中学生で、サリエルは、まおーさんと遊佐さんが片付けたって事で。」

「まあ確かに、あんまり知り過ぎても…ってのもあるよな。」

「仕方ないわね…」

響の言葉に、一応は納得する真奥と恵美。

「それからサリエルは、2人が手を繋いで、踊る様な格闘術の乱舞で倒した風に記憶させ  
t 「止めろおおっ?!」

その内容に納得出来ず、待ったを掛ける2人が別の記憶刷り込みを要請するが、これを響は「脳に訴える技の重ね掛けは、精神衛生上に良くない」と言っ、黙らせる。

その後、目を覚ました千穂が、その埋め込まれた記憶により、

「何故、魔王が勇者とダブル○ーツしてるんですかあゝ!？」

敵同士なのに、お手々繋いでって、羨ましいじゃないですか!!」

「佐々木千穂、本音が出てるぞ?」

「漆原さんは黙ってて下さい!!」

…と、軽く修羅場るのは、別の話。

そうしている内に、東の空が明るくなってきた。

「ふう、長い夜だったな…」

「ええ、全くすね…」

「てゆうか、魔王?」

あんた、何時迄そんな格好でいるのよ?」「あ…」

「まおーさん、もう、結界も解かれてるから、マ○ドの制服、早く拾わないとマズいんじゃないですか?」

「あーっ、そうだった!」

制服、下に置いた儘だった!

てゆうかバイト、抜け出した儘だった!!」かーなり、狼狽える真奥は、

「吉良君!あの記憶を操る技、ウチの店長にも掛けてくれないかな?」

両手を合わせ、響に頼み込む。



「ん、スペシャルダブル〇ツクのセットで手を打ちましょう。」

「う…仕方無い…」

ニヨキ…パサツ…パタパタ…

「あ、佐々木さん達も、御一緒しませんか？」

「あはは…私は、遠慮しとくよ。」

「私は遠慮無く、いただくわ♪」

「うむ、馳走になろう。」

「鬼ーっ！悪魔ーっ!!」

…その時、真奥の眼には、響が悪魔以上に悪魔に視えたと言う。



その後、響はマク〇駅前店の入り口で、腕組みをし、素敵なスマイルを浮かべて待ち構えていた、何やら頭部に角の様な物が幻視出来る、マ〇ドの女性店長に、

「…ゴメンナサイ。」

ピシイ…

「…ん…成る程、変質者に追われていた　ちーちゃんを助けに行っていたのか…それなら仕方無い、な…。」

幻夢拳を施し、

「頂きま〜す♪」

「…(泣)」

何故か涙目な真奥を無視、マク○店内で恵美、鈴乃と3人で、美味しく朝食を取る。参考迄に、響は朝からスペシャルビッグマツ○のセット(Lサイズ)、恵美と鈴乃はアップルパイとミルクティーをオーダー。

そして…

「この大馬鹿者!!お前は一晚中、何処をほっつき歩いていた〜!?!」

ごんっ!!

「ギャーツス!!」

帰宅早々、響は父親から拳骨を貰うのだった。



パシッ…

そして響も、1人の男と実戦さながらな組手…模擬戦をしていた。

鋭く突き出した手刀の手首をキャッチされると、その腕を極められた儘、背後に周り込まれ、その手を放されたと思えば、脚を払われダウンを奪われる響。

チョン…

「うっ…」

そして次の瞬間には、逆に首筋に、特殊素材製のナイフを当てられていた。

「ま、参りました！完敗です！」

「いや、君の動き、凄く良かったぞ！」

高級ブランドのスーツを着崩し、口髭を貯えたイタリア系の男に、響が一礼した。

「あ、あのオッサン凄えー！」

「吉良が烏間先生以外に負けたの、初めて見たぜ!!」

その様子を見ていた杉野達も、感嘆の声を上げる。

「でもよ、あんな強いオッサンでも、結局は、あのタコを殺れなかったんだよな？」

「…ああ、残念ながら…」

「え？いや、その…スンマセン…（な、なんちゅー地獄耳だよ!?!）」

そして小声で喋ったつもりだった寺坂の呟きに、スーツの男が応える。





にすら辿り着かせて貰えない。

…とはロヴロの弁。

「つまり、1度使った殺し屋は、2度使うのは難しい上に、困った事態も重なってしまつてな…」

「困った事態ですか？」

ロヴロが言うには、残りの彼の手持ちで有望だった殺し屋数名が、何故か突然、連絡が着かなくなつたらしい。

「…という訳で、今現在、斡旋出来る暗殺者は0だ。

慣れ親しんだ君達に実行して貰うのがベストと判断した。

皆、よろしく頼むぞ…!」

「「「「「はい!!」」」」」

ロヴロの話し掛けに、E組生徒は良い返事で応えた。

「ところでMr. カラスマ、殺センサーは本当に今、日本には居ないのだな？」

「ああ、ヤツは予告通り、エベレストで避暑中だ。

今も部下が見張つてるから間違いない。」

「エクセレント！」

作戦の機密保持こそ、暗殺の要だ。」



「……………」

「にやや、さーさー、熱い内に どーぞ！」

「さーさー、遠慮なさらずに!!」

その頃、烏間の指示で殺せんせーを見張っていた烏間の部下の鶴田と鵜飼は、エベレストの斜面に器用に創られたカマクラの中で、監視対象である黄色いタコに鶏鍋を薦められていた。

「ふー、ふーっ、やはり、雪の中では鍋料理が一番ですよねー…ふーふーふー…」

「……………」

「……………」 「先に約束である、11本の触手を破壊し

た後、間髪入れずにグラス全員で攻撃して、殺せんせーを仕留める…か…」

機員が提出した【殺せんせー暗殺計画書】を、まじまじと読むロヴロ。

「ふむ、それは解るのだが、この一番最初の『精神攻撃』というのは、どういう意味かね？」

「まずは動揺させ、動きを落とします。」

殺気を伴わない攻撃には、殺せんせー、脆い部分がありますから。」



これを片岡が説明。

「弄るネタ、強請るネタって、結構あるんすよ？例えば…

(中略)

…とか、他にも色々ね。

先ずはコイツを使って追い込みます。」

「へっ!!グラス全員で、散々にイビリまくってやるぜ!」

更に前原と寺坂が補足。

「…なかなかの残酷な暗殺方法だな。」

これには、思わずロヴロも感心する。

「…で、要となる、トドメを刺す最後の射撃、正確なタイミングと精密な狙いが必要不可欠なのだが…」

「…不安かな？」

ウチのクラススの射撃能力は？」

「いや？寧ろ逆だ…」

烏間の問い掛けに、ロヴロは顎に手を添えて、口を緩める。

「特に…特に あの2人は素晴らしい。」

その視線の先には、千葉龍之介と速水凜香がいた。

空間計算に優れ、遠距離射撃で他のクラスメートの追隨を許さない狙撃手（スナイ

パー）の千葉。

手先の正確さと抜群の動体視力とのバランスで、動く標的を仕留める能力に特化している兵士（ソルジャー）である速水。

決して主張が強い性格ではなく、結果で語る、謂わば仕事人タイプな2人。

「ふーむ、本当に俺の教え子にしたい位の才能だ。」

無論、この2人だけでなく、4月からの特訓で、他の者達も、良いレベルに纏まっていた。

約4カ月程度で、それまでは全くの素人だった中学生を、この域まで育て上げた烏間

に、そして此処まで育った生徒達に、ロヴロは純粹に稱賛。

「人生の大半を暗殺に費やした者として…この計画、作戦に合格点を与えよう。」

彼等なら…彼等なら、充分に成し遂げる可能性がある！」

バババババババババババ…!!

パサツ…

クラス全員の一齐射撃で撃ち抜かれた的を見て、ロヴロは確信する。



「ロヴロさん？」

「ちよつと、良いですか？」

「…？」

休憩中、渚と響がロヴロに声を掛ける。

「何かね？」

「俺達が知ってるプロの殺し屋って、今のところ、ロヴロさんやビッチ先生に、レッドア

イさんマリオさん…」

「今、この場に来てくれている人しか知らないんですが…」

「…で、ロヴロさんが知ってる中で、この世で一番優秀な殺し屋って、一体どんな人物な

のかな…？…ってね？」

渚と響の質問に、目を細めるロヴロ。

ほう？よくよく見れば、素質がある…

オマケに…フツフツフ…

「ふむ…君達は興味があるのかな？

殺し屋の世界に…」

「い、いや、そんな訳じゃ…」

「た、単なる好奇心つすよ…」

彼方の世界の勧誘とも受け取れるロヴロの言葉に、慌てて否定する2人。

ふっ…

その様に笑みを零しながら、ロヴロは話し始める。

「そうだな…俺が斡旋する殺し屋の中に、『ソレ』は居ない。

最高の殺し屋…そう呼べるのは、この地球で たった1人だけだ。

この業界には よくある話だが、ソレの本名は誰も知らない。

いや、本名だけでない、顔も性別も年齢も国籍も、何もかもが不明の人物。

ただ一言の渾名で呼ばれている…

曰わく……死神、と……!!」

「死神……ですか？」

「君達からすれば、ベタな渾名だろう？」

だが、死を扱う我々の業界で、死神、たとえば、唯一絶対、奴を指すのだよ。」

「……………」

殺し屋の中でも、禁忌に近い存在なのだろう、ロヴロが その渾名を出した時点で、ロヴロの隣に居たイリーナの顔も、やや険しくなる。

「神出鬼没、冷酷無比……」

夥しい数の屍を積み上げ、死、そのものと呼ばれるに至った人物だ。」

タラ……

本人は気づいていないだろうが、響と渚の首筋に冷や汗が流れる。

「……この儘、君達が殺センセーを殺しあぐねているなら、奴は何時の日か きつと、その姿を現すだろう。」

いや、もしかしたら既に、その機会を窺っているかも知れないな……？」

「そ、そんな人が……!!」

「こりゃ、いよいよ以て、沖縄のチャンスは外せないな！」

パシイッ



ふーん！いーもんいーもん！

『必』ず『殺』る『技』なんて、今更 他人に教えて貰わなくんたって、沢山持つてるもん！

冥界波とか鬼蒼焰とか魂葬破とか転霊波とか…ブツブツ…」

やや力みがちな渚と、その場に一緒に居たのに、何故か自分は『必殺技』とやらを教えて貰えなかったと、子供の様に拗ねて、何やら小声でブツブツと言っている響。

そして数秒後…

「え？」「へ？」

「えっえええっ!?!」

其処には、渚の前で腰を落としている響がいた。

「い、今のは、一体…?」

何が起きたのかが理解出来ず、呆然とする響。

そして一番驚いているのは、技を仕掛けた渚である。

「どうだ？これが私の『必殺技』だ。」

「!!」



そして一週間後…

「「「いやっほーい!!」」」

「「「島だあくっ!」」」

東京からフェリーで6時間。

E組の面々は「殺せんせー沖縄暗殺計画」の舞台である、普久間島に到着した。



## 島の時間

「ようこそ、普久間島リゾートホテルへ。」

こちら、サービスのトロピカルドリンクで ございます。」

島に到着、ホテルにチェックインした後、早速 外に出向いたE組一同。

ベランダのテーブル席で寛いでいると、ホテルの従業員が、サービスのドリンクを運んできた。

「いやー、最っ高だな！」

渡されたドリンクを片手に、御機嫌顔になる響。

「景色全体が、鮮やかで明るいし！」

「ああ、水着の ちゃんねーも一杯居て、本当に御機嫌だぜ!!」

「…だな!!」

「お前等…何しに沖縄に来たと思ってるんだよ?」

「ナンパ!!」

呆れ顔の磯貝の問いに、決して ぶれる事無く平常な、岡島と前原。

「…律、悪いけど、片岡さんと岡野さん、此処に呼んできて。」



「そうだね!」

もう一度言う。

今回の暗殺沖縄旅行、初日の日中は、『基本的』には遊んで過ごす事になっている。

しかし、その裏、1つの班が殺せんせーを連れ回している間に、標的(ターゲット)に気付かれない様に、標的(ターゲット)が遊びに熱中している内に、計画書(プラン)通りに暗殺ができるかどうか、各々が綿密に現地をチェックして回っていた。



「殺せんせーは?」

「今は寺坂達と、海底洞窟を探検中さ。」

「こっちの様子は絶対に見えないよ。」

千葉龍之介の間に、岡島と菅野が答える。

「そうか…それなら今は、射撃スポット選び放題か。」

「…サクッと決めちゃいませよ。」

「…だな。」

それを聞くと千葉は速水凜香と共に、狙撃のベストポジションを探しに、島の奥に歩を進めて行く。

そんな2人を見た班のメンバーは呟く。

「渋い、渋過ぎる!」

「もはや、仕事人の域だわ…」

遊びに見せかけて、生徒達は、着々と決行の準備を進める。



「な…何なのよ、これ?」

ビーチから人っ子1人、居なくなってるじゃない?」

がらーん…

無人の海岸を見て、呆けた表情（かお）で呟くのは、フラワー・レイを繋ぎ結んだだけの様な露出度全開、セクシーを通り越して、まさしく痴女（ビッチ）にしか見えない水着を纏ったイリーナ。

少なくとも、表向きは中学生の引率をしている教師が身に着ける それではない。

「さつき一泳ぎして帰っていったのが、最後の一般人（きやく）だ。

このホテルと周辺一帯は、E組（われわれ）の貸し切りとなった。」

「むつきー!余計な事すんじゃないわよ!!」

どうして私の水着デビューは、いつつもこうなのよ!？」  
鳥間の説明に、イリーナがガチギレ。

「ねーえ、カーラースーマ、悩殺したいの、ねーえ、聞いているの?」

…かと思えば、ビーチのテーブルに着き、暗殺計画書を細かくチェックしている鳥間の後ろから甘える様に抱き付くイリーナ。

その様は仕事一辺倒な男と、それに構ってくれとせがむ、恋人か若妻の様だが…

ひよい…

「え? ちよ…カラスマ?」

な…何なの? いきなり大胆に…」

その余りのしつこさに観念したのか、或いは思う処でもあったのか、いきなりイリーナを軽々と、所謂お姫様抱っこで抱え上げる鳥間。

「何よお、積極的じゃない?」

まさか2人つきりだからって、この儘…」

ザッザッザッザッザッザッザッ…

まさかの不意打ちに、まるで恋する乙女のように頬を朱く染めるイリーナを抱きかかえた儘、鳥間は海辺の傍まで歩むと、

ぼーい

ザッパアアーツン!!

「ギヤーツス!?!」

まるでゴミを棄てるかの様に勢い良く、思いつき海に放り投げた。

「ちよ……いきなり何すんのよ!?!」

「イリーナ、お前に聞いておきたい。」

まさかの不意打ち?に、怒り心頭のイリーナだが、それを完全スルーの鳥間が、彼女に問い掛ける。

「以前、プロの殺し屋である お前は、こう言ったな……『仕事は計画（プラン）通りに進む事の方が少ない』……と。」

「……………!!」

その言葉に、ついさっきまでは南国の観光気取りだったイリーナの眼が、殺し屋のそれに鋭く豹変した。

「ええ、そうよ。計画書は見たわ。」

とても中学生（ガキ）が作ったとは思えない程の、緻密で丁寧な作戦だった……。師匠（センセイ）がGOサインを出したのも納得だわ。

でもね、あんだだけ複雑な計画だったら、必ず1つ2つ、何処かでズレる。」

海から上がり、濡れた髪を掻き分けながら、隠そうとせずには悪女の微笑みを全面に出した暗殺者は、言葉を続ける。

「ねえ、カ・ラ・ス・マ？」

この私が、本当に遊んでるだけに見える？

残念だけど、真剣に おこぼれを狙ってるのよ…

生徒（ガキ）達の計画がズレた時、その結果、私にチャンスが回ってきた時、その時を決して逃さない様にね…」



「いや〜遊んだ遊んだ。」

おかげで真っ黒に焼けました。」

「「「黒過ぎだろ!!」」」」

「歯まで黒く焼きやがって…」

「もう、表情が読み取れないよお…。」

貸し切りとなっている船上レストランでの夕食。

日が暮れるまで太陽の下、生徒と遊び回っていた殺せんせーは全身黒焦げ…決して比喩なんかではなく、まさにその表現がぴったりな程、消し炭の如く真っ黒に日焼けしていた。

「…つたく、どんだけ満喫してやがんだ、あのタコ？」

「こちらら遊ぶフリして準備すんの、大変だったつてのによ…」

「…言うな。今日、ヤツを殺せたら、明日は何も考えずに楽しめる。」

「そーだな。仕方無ーな、今回位は気合い入れて殺つてやるか！」

寺坂組がボヤク中、各々が気心の知れた者同士でテーブルに着くと、学級委員の2人が担任に、これからの予定の説明を始めた。

「とりあえずは、これから、夜の海を堪能しながら、皆で ゆっくりとディナーを楽しみましょう。」

「メイスイベントは、その後です。」

「…な、成る程ねえ…」

先ずは、たっぷりと船で酔わせて弱らせようと云う算段ですか。」

「当然です。これも、暗殺の基本の1つですからね。」

「又ルツフフフフ…」

正しい。実に、正しい！」

その段取りを純粹に賞賛する殺せんせー。

「ですが、そう上手く行きますかね〜？」

暗殺を前に、気合いの入りまくりな先生にとって、船酔いなんか、恐れるに足



「「「「「黒いわ!!」」」」」」

恐らくは殺意を抱かせる程のドヤ顔をしているのであろうが、そのあまりの黒さ故に、それすら判別が不可となった黒せんせーに、クラス全員から突っ込みが入る。

「にゅ…そんなに黒いですか?」

「表情処か、前も後も判んないわよ。」

「ややこしい。」

「にゅる…それは困りましたね…」

当人は 其処迄は気にしていなかった…寧ろ、その見事な迄の焼け具合に満足していたのだが、生徒達の反応で、漸く少しだけ悩みだす黒せんせー。

「殺せんせー、脱皮したら、元通りになるんじゃないの?」

「おー、それです! 吉良君、ナイス!!」

響の発言に、その手があったと、笑みを浮かべる殺せんせー。

しかし、生徒達には表情が読み取れない。

「ヌルフフフフ…」

皆さんも忘れていましたね?

先生には脱皮があるという事を。

黒い皮を脱ぎ捨てれば…」

ピピシッ……

其処まで言うとうと、黒せんせーの身体に亀裂が走り、  
ぱっ

「はい、このとーり！」

マツハ20での早着替えで黒い衣を取り去った、黄色いタコが現れた。

「あ、月1の脱皮だ。」

「又ルツフフフフ…脱皮には、こーんな使い道もあるんですよ。」

本来はヤバい時の奥の手ですが…」

「…でつすよね〜♪」

「え？」

……………。

したり顔な殺せんせーだが、次の瞬間、まるでデイ○様の『世界（ザ・ワールド）』が  
発動したかの様に、自身の時を止めてしまう。

「あつ…ああ、あ〜っ!!」

そして時が再び動き出したと同時に、「やっちゃまったなあ!!」…とばかりに顔を覆って



今度こそ…今度こそ、殺せんせーに、自分達の刃を届かせるんだ…!!

その時、クラス全員の心も、1つの強固な岩となっていた。



「にゅ…やああ…」

「あれ、暗殺前に気合い入りまくりで、船酔いなんか恐れるに足りないんじゃないやなかったの…?♪」

「あはは…結局、酔ってるし。」

その真球の如きな頭が、ぐったりと寝れせ細り、青冷めた顔をして、杖を立てて歩く殺せんせー。

「さあて、殺せんせー、メシの後は、いよいよメインイベントだ。」

「会場は、こつちだぜ。」

食事も終わり、海から島に戻ったE組一同が橋を渡って向かっているのは、暗殺の舞台である、ホテルの離れにある…海上に突出している水上パーティールーム。

「此処なら…」

「逃げ場は在りません…!」



「さあ、席に着きなよ、殺せんせー。」

「楽しい暗殺、先ずは…楽しい映画の鑑賞から始めようぜ！」

南国をイメージした木造の建物の中は、多人数掛けのベンチが規則的に置かれた大部屋。

そして その奥中央には、ワイド画面のモニターテレビ。

そんな部屋に入った殺せんせーを待っていたのは、三村航輝と岡島大河だった。

「先ずは、三村君達が編集した動画を見て楽しんで貰い、その後、テストで触手破壊の権利を持った吉良君達が触手を撃ち抜き、それを合図に、皆で一斉に攻撃…暗殺を始めます。」

片岡の説明に、

「因みに俺は総合と国語で計2本、触手の破壊権利を持つてるけど、国語の方は…」  
ジャキ…

「その破壊の権利を、神崎さんに譲渡してるから。」

しとやかな笑顔で銃を構える神崎有希子の方向を見ながら、響が付け加える。

「それで良いですね、殺せんせー?」

「ヌルフフフ…上等！」

「三村、岡島、セッティングごころーさんだったな。」

ぼん…

菅谷が船上ディナー返上で動画編集していた2人を労う。

「はいコレ、適当に盛って帰ってきてるからさ、後で2人で食べなよ。」

「サンキュ、原。」

「ふむ…」

そんな やり取りの中、殺せんせーは現場の状況を確認していた。

この小屋は、周囲を海で囲まれている。

壁や窓には、対せんせー物質を仕込んでいる可能性から、脱出はリスクが高い。

…と、なると、これは小屋の中で避けきるしか方法は無いみたいですねえ？



スト…

「準備は良いですか？」

最前列、モニターの正面のベンチに腰を降ろすと、



ナレーション：三村航輝

律（自律思考固定砲台）



『これは、桐ヶ丘中学校に在籍している、1人の教諭の日常である…。』

三村のナレーションから、動画がスタートした。

その語り口調とBGMの選曲、カット割りのセンスに、つつい動画に魅入ってしまった殺せんせー。

しかし、それでも周囲の注意は怠らない。

ヌルフフフフ…

後ろの暗がり、しきりに何人も小屋を出入りしていますねえ。

位置と人数を、明確にさせない為なのでしょうが…しかし、甘い！

『あの2人』の匂いが既に、此処に無いのは解っていますよ？

四方を海に囲まれている小屋ですが、ホテルに続く橋の1方向…その方向の窓から…E組きつての狙撃手（スナイパー）、千葉君と速水さんの匂いができてますよ？





『…続いて御覧頂きたいのは、この場面である。

刮目せよ！我々の担任の、教師にあるまじき、この恥ずべき姿を!!（♪どーん!♪）  
 モニターには、旧校舍裏山で、無数のエロ本をニヤニヤとした締まりの無い顔で読み  
 ふけている、黄色いタコの姿が映し出しだされた。

「……………」

夕食前、脱皮した時の様に、フリーズする黄色いタコ。

「にゅやあああ（「。〇。L）ああああ!!?」

そして、再び時が動き出したと同時に、一気に顔を紅くして、羞恥心からの悲鳴を上げるのだった。

『有り得ない…これでも教師なのだ。』

因みに最近のマイブームは、巨乳婦警シリーズ。

全て、このタコが、1人で集めたエロ本である。…逮捕されてしまえ!!』

ニヤニヤニヤニヤニヤニヤ…

「な…違つ…てゆーか、何時の間に!?!」

絶対零度の様な冷たい視線で微笑んでいる教え子達に、必死に弁解しようとするエロ  
 タコ教師。

しかし、律を軸とした、E組調査隊のこの黄色いタコの恥ずかしいレポートは、これだけで終わらない。

女性限定のスーツバイキングに、女装して並ぶも、その異形故に一発バレでスタツフにより強制退場させられる場面や、夜道、一人歩きしているEカツプ美女の背後に突如として現れ、不気味な笑い声を聞かせて消え去る場面、休み時間中に狂った様にグラビアを見入る場面、そのグラビアアイドルに向けて「手ブラじゃ生緩い。私に触手ブラをさせて下さい！」…と要望ハガキを書き込みしている場面等々等々…

編集チームよる、無慈悲な暴露は更に続いていき、  
『まだまだ、恥ずかしい場面は沢山ありますよ〜♪』

これから約1時間、殺せんせーの恥ずかしい映像を楽しんで下さいね♪  
テレビ画面の中、ピンクブロンドの少女が微笑みながら話すのだった。

「あ、あと1時間ん〜っ!」

## 決行の時間

（1時間後…）

「…死んだ…もう先生、死にました…」

あんなの知られたら、もう生きていけません…」

自身の恥ずかしい動画の前に、精神的に滅入ってしまった、完全にグロッキーな殺せんせー。

その、岡島と律を中心に、多数の協力者の撮影（盗撮）から編集された、殺せんせーの恥ずかしい場面を纏められた動画も、佳境に入っていく。

『…でもお、殺せんせーって、恥ずかしい姿だけでなく、偶にはカッコ良く決める時もありますよね？』

「…にゅ!!」

ガバツ…

カッコ良く決める時もある…

このテレビ画面の中の、律のナレーションに素早く反応した殺せんは気力を振り絞

り、姿勢を正して画面に注目する。

そして画面には黒いタコが映り、

『何処で其れを手に入れたっ？』

その触手を!？」

それは、イトナと初めて戦った時の教室の場面。

イトナの触手を初めて目の当たりにした時の、怒りを露わにした時の映像だった。

「にゅやー!?!止ーめーてー!!」

普段からギャグキャラを自称している黄色いタコにとつて このシリアス場面は、先程迄のエロダコっぷりを暴露された時以上の精神的ダメージを受けてしまう。

そのナレーションから、多少はフォローしてくれるのかと期待していた油断から、尚更のダメージだ。

このダメ押しの一撃によって、殺せんせーのMP（メンタルポイント）は殆ど0（ゼロ）になってしまふ。

そして、画面には『Fin』の文字が映ると同時に

『さく、約1時間に渡って、秘蔵映像に お付き合い頂きましたが…何か お気づきでないですか、殺せんせー?♪』

「…???」

殺せんせーの凄く恥ずかしい動画…その映像の中の律の最後の言葉に、朦朧としていた意識を僅かに立ち直らせた時、殺せんせーは漸く気が付いた。

チャプン…チャプン…

何時の間にか床が浸水、脚に該当する触手が ぷつくりと膨らんでいる事に。

な…？何時の間に床全体に海水が…!?

そんな馬鹿な？

誰も水なんか流す気配は無かったのに…

…ま、まさか、満潮!!?

ガタガタツ…

「俺達、まだ何もしてないぜ？」

「誰かが昼間に、この小屋の支柱、短くしてたんじゃね？」

明らかに動揺を隠せない殺せんせーを前に、一緒に動画鑑賞をしていた、触手破壊の権利を得た11人を含めた、室内に居る生徒全員…総勢14人が立ち上がる。

「船に酔って…」

「恥ずかしい映像でテンパって…」

「そして海水たっぷり吸って！」

「かーなーり、動きが鈍ってるよね？」

ジャキツ…

「さあて、此つからが本番だ。」

「約束だ、避けんなよ、タコ！」

11人が殺せんせーを囲み、銃口を向ける。

…本つ当に、やりますね、皆さん。

だが、今回の暗殺の要な筈の、千葉君と速水さんの居る方向は分かっています。

其方の向きさえ、注意していれば…!!

本気の冷や汗を垂らしながらも、それでも冷静に現状分析からの余裕と自信を持つ殺せんせー。

「皆、行くぞ…3、2、1…Fire!!」

パパパパンツ…!!

「く…っ」

磯貝の合図の下、11人が11本の触手を破壊し、それと同時に

パカアツ!

小屋の4面の壁が、藁葺きの屋根毎、四方に倒散。  
ザザンツ！

更に事前に海中に忍んでいたカルマ他9人が、水圧で空を飛ぶマリンスポーツ器具、フライボードを着用で現れた。

彼等は標的（ターゲット）の頭上：真上で円陣を組む事で、水圧の檻を作り出す。

しかしE組の策略は、まだ終わらない。

渚、茅野、倉橋、櫻瀬がモーターポンプで吸引している海水をパワーホースで放水、フライボードによる水圧の檻の更に外側に、巨大な水のアーチを展開。

ザパアツ！！

そして、完全防水加工処理が施された律：自律思考固定砲台の本体が海中から、2連ショットガンを左右の側面パネルから3門ずつ、計12の銃口を構えた状態で現れた。

「これより射撃を開始します。

標準…殺せんせーの周囲全周1周！」

このシユノーケルを装備した海女さんスタイルの少女の言葉を合図に、

パパパパパパパパパパパパパパパ…

最初から小屋に残っていた生徒達と律による、一斉射撃が始まった。

触手破壊役の11人と、片岡が、竹林が、不破も訓練時のレッドアイのアドバイスに

従い、あぐらからの体勢でM-4ライフルを、この4月からの訓練で、各々が最も相性が良いとした、得意の銃を射ち放つ。

殺せんせーは急激な環境の変化に弱い。

木の小屋から水の檻へ!!

弱った触手を混乱させる事で、反応速度を更に落とす!

そして、殺せんせーは『当たる』攻撃には凄く敏感だ。

…だ・か・ら、一斉射撃では、敢えて先生は狙わない。

弾幕を張る事で退路を塞いでからの…

トドメの2人!!

ザパ…

そして最後に、銃を携えた千葉と速水が、海の中から姿を現す。

殺せんせーが、この暗殺開始から注意を向けていた方向…

その先の陸の上に在るのは、2人が日中に着用する事により、当人の匂いを染み込ませた衣服を着せた人形(ダミー)。

実は本物の2人は、ずっと水中で、その時を伺っていた。





その次の瞬間、殺せんせーの全身が、眩い閃光と共に弾け飛んだ。



「おわ〜っ!!」「うぷっ…?!」

弾幕の射撃を撃ち続けていた響達が、

「うはあっ…!?!」「きゃっ…!!」

水圧の檻を形成していたカルマ達が、爆発の衝撃に吹き飛ばされ、海面に投げ出された。

「や…」

「殺ったか?」

「殺ったのか!?!」

シュウウ…

つい先程迄、殺せんせーが「居た」場所から僅かに起つ煙を見ながら、生徒達は口々に呟く。

今迄の暗殺とは、明らかに違っていた。

殺せんせーが爆発し、その後には何も残って無い。

ぞく…

確かに殺った手応えを、全員が身体全体に鳥肌と共に感じている。

「油断するな！」

奴には再生能力もあるのを忘れるな!!」

「メグ、アンタが中心になって、水面を見張りなさい！」

「は、はい!!」

その状況下、直ぐに鳥間とイリーナが次の指示を出し、

「皆、最後、殺せんせーが立っていた場所を中心に周囲を見渡して！」

「「「「「応っ!!」」」」」

即座に対応するE組の面々。

対せんせー弾の弾幕の檻と水圧の檻。

この2つの檻で、逃げ場は何処にも無かった筈…

そう思っている生徒達は水面に何か…例えば、死体が浮かび上がって来ないか等、何らかの異変の有無に注意を向ける。

ブク…

「あつ…」

ブクブク…

「…お？」

その異変が起きたのは、そんな直後の事。

ブクブクブクブク…

周囲を警戒していた渚の目の前で、突如として浮かび上がった泡。

チャキ…

銃を持っていた者は其れを構え、全員が、その泡に注目する。

プカア

「ふう…」

「……………」

その瞬間、浮かび上がって来た其れ…

彼等が見たのは、殺せんせーの顔が入ったオレンジ色の球を、透明な球体で包んでい  
る…

「…何アレ…!?」

名状し難きボールの様な物だった。

カインカイン!!

!!?」

生徒達が其れを見て固まっている時、対せんせーBB弾が陸の方向から飛んできた。しかし、そのオレンジと透明の球体は、その弾を弾き返す。

「チィ…ッ!!」

撃つたのはイリーナ。

この後、誰もが何が何だか理解出来ない状況の中、謎の?球体が喋り出した。

「又ルツフフフフ…」

これぞ!先生の奥の奥の手!!

『殺せんせー完全防御形態』でーっす!!」

「「完全防御形態い!」「」」

何ソレ…?顔を引き攣らしながらも、ハモらせるE組生徒。

「説明しよう!『殺せんせー完全防御形態』とは!」

更に状況理解が追いつけなくなった生徒達に対し、オレンジ色の球体は語り出す。

「この外側の透明な部分には、高密度凝縮された、エネルギー結晶体です。

先生の肉体を思いつ切り小さく縮め、それによって生じた余分となったエネルギー

で、肉体の周囲をガツチリと固めます。

この形態になった先生は、ま・さ・に・無敵!!

水も！先程の様に、対せんせー物質も!!

無〜駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!

あらゆる全ての攻撃を、この結晶の壁が跳ね返してしまいます!!」

「そ、そんな…じゃ、ずっと その形態でいたら、殺せないじゃない?」

「ところが そう上手くはいきません。

このエネルギー結晶は、24時間経てば自然崩壊します。

その瞬間、先生は身体を膨らませ、エネルギーを吸収して元の身体に戻る訳です。

裏を返せば…結晶崩壊するまでの丸1日、先生は全く身動きが取れません。」

「……………」

「最も恐るべきは、その間に高速ロケットに詰め込まれ…遙か宇宙の彼方にでも棄てられる事ですがあ、その辺りは抜かりなく調査済みです。

24時間以内に、それが可能なロケットは現在、この地球の何処にも存在しない!」  
縞模様の球体が、ドヤ顔で言い切った。



「巫山戯んなよ…」

寺坂が この直径約20センチ弱のボールとなった殺せんせーを鷲掴みにすると、ガン！ガン！

「何が無敵だ、コラ！」

何とかすりや、壊せんだろ、んなモン!!」

そう言いながら、スパナで何度も殴打するが、

「ヌルフッフフ…」

だ〜から、無駄無駄無駄ですう〜♪

核兵器でも、傷1つ付きませんよ〜？」

「この、腐れタコがあっ!!」

全くと言って良い程、効果は無い。

「へ〜？そつかく、弱点無しじゃ、打つ手無いよね〜♪」

そう言うとかルマは、寺坂から受け取った殺ボールを小屋の床だった部分に置いて固定すると、スマホの画面を殺せんせーに向ける。

「にゅややーッ!!」

その画面には、先程迄 上映されていた、殺せんせーの恥ずかしい動画の1カット、地面一面に敷かれたエロ本の山の上で正座して、ニヤニヤしながら一心不乱にエロ本を読みふけている、ピンク色のタコの画像が表示されていた。







## 小宇宙（コスモ）の時間

E組生徒達による、「殺せんせー沖縄暗殺計画」は失敗に終わった。

皆が、防衛省の烏間でさえ、想定の外だった『殺せんせー完全防衛形態』。

発動させた後は、暫く身動き出来ないという欠点も計算に入れての、今回の暗殺回避は、まだ中学生である彼等の心を折るには、十分に足りる物だった。

彼等の殆どが失意に包まれ、ホテルに戻る中、未だ其の場に残っている2人…否、3人。

「……………」。

千葉、速水、律であった。

尤も、律に関しては、自身の移動手段はモバイル律としての電子機器内移動しか持っていないだけなのだが。

「…律、今回の記録、録れてる?」

「はい。可能な限りのハイスピード撮影で、今回の暗殺の一部始終を。」

「そ…」

「……………」。

俺さ…撃った瞬間、分かっちゃったよ。

『ミスった』『この弾じゃ殺れない』ってさ…。」

「断定は出来ません。」

あの形態に移行するのに必要な、正確な時間は不明確です。しかし…」

P i P i P i…

「千葉さんの射撃が、あと0.5秒早いか、速水さんの射撃が、あと30㍎程、殺せんせーに近かったなら、弾の存在に気付かれる前に殺せていた可能性が、確かに50㍎程存在します。」

律は、高速演算での結果を話す。

「……………」

2人とも自信はあった。

リハーサルは勿論、本番より不安定な足場での練習も欠かさず、そして それでも外す事も無くなっていた。

しかし、『今(ここ)しか無い!!』…という大事な瞬間、絶対に外してはいけないという重圧(プレッシャー)の前に…

「いざ、あの瞬間…で、なった時、指先が一瞬硬直して視界も狭くなった。」

「…私も」

とぼとぼ……

「…はあ…こんなにも、練習と違うなんてね…」

「全く…だ…」

そして2人も項垂れながら、ホテルを指し、暗殺の舞台を後にした。



「…いや、しつかし、疲れたわ…」

「おう…もう、何もする気力無えよ…」

誰からか召集を受けた訳ではない、しかし全員が一度、ホテルの自室に戻り着替えた後にロビーに集まると、テーブル席に腰掛けてぐったりしていた。

「ンなんだよテメー等、1回外しただけで凹みやがってよ…」

何時もの失敗の内の1つとカウント出来ねーのかよ!?

こんなの、1000回10000回の失敗の内の1つに過ぎねーだろうがよ!」

「…寺坂、お前って本当に偶には良い事言うよな?」

「100年…いや、1000年に1回な。」

「喧しいわ!!」

今日に限って…いや、今日だからこそ、普段以上に悔しいのだが、それを承知で、そ



「……………」。

皆、とりあえず、今日は お疲れさん。」

磯貝が皆に話し出す前、片岡と2人で、寺坂達と話している響に、皆を自分に注目する様に呼び掛けて欲しいと頼んでいた。

自分自身が まだ吹っ切れてない心境で、弱々しく声を掛けた処で、聞き入る者は そう居ないだろう。

ならば、少なくとも、見た感じは落ち込んでいる素振りを見せていない、クラスのムードメーカーの1人である響に、最初に呼び掛けて貰うのがベター、その後は学級委員として、皆をフォローしていこうと云う判断だった。

しかし、その時に響と一緒にのテーブル席に居た寺坂が、その役目を買って出る。

その大声も さることながら、何時も通りの荒っぽい口調は結果、皆の注目を集めるのに成功した。

「…その、何て言ったら良いか…」

兎に角、何時までも引きずってないでさ、気持ち、切り替えて行こう！な？」

「……………」。

(((((お前もな)))

そんな言葉を言う磯貝を見た、クラス全員の心が一致する。

自分自身も最高に凹んでいるのに、それを無理矢理に奮い立たせて明るい表情を作つて、皆に元気を出させる様に努める磯貝。

E組の全員が知っている。

本人は その発言が、クラスの纏め役である学級委員だから、その使命感、責任感からの行動だと言うだろう。

自分自身が そう思っており、信じて疑ってないだろう。

しかし、それは違う。

元々 磯貝は学級委員とか関係無く、『そーゆーヤツ』なのだ。

そんなヤツだからこそ、皆は、彼に対して こう思うのだ。

『イケメンだ!!』…と。

「…確かに、何時までも落ち込んでいても、しやーないよな?」

「ん…殺れるだけは殺つたんだし、明日は1日中、遊んでやるんだい!!」

「そーそー、明日こそ水着の ちゃんねーをじっくり鑑賞するんだ!」

どんなに疲れてても、全力で鼻血出してやるぞ(ガンツ!!) い、痛いっ!?





ヨロツ

「え…!？」

だが その次の瞬間、バランスを崩して その場に倒れ込んでしまう。

「おいおい、中村ちゃん、大丈夫かよ？」

「うゝ、吉良つちゝ、肩を貸しちゃくれんかねえ…？」

ちいゝとも体が動かんくなつたんよ…」

「中村ちゃん…!？つて、ひどい熱…!!」

急に顔色が悪くなり、異常とも云える程の高熱を出す中村に、響の顔も険しくなる。

しかし、異変を起こしたのは、中村だけではなかった。

「いや、もう想像しただけで、鼻血ぶ…」

ポトポト…

「え…え、え…？」

「お、岡島あ!!」

岡島も突然、決して多少の卑猥な妄想程度で出る訳がない、尋常ではない鼻血を流し始める。

中村と岡島だけではない、症状は人それぞれだが、クラスの1/3が、突如として身体に異常を来した様に倒れ、蹲りだした。



電話の向こうの人物は言う。

生徒達の不調の原因は、人工的に作り出したウイルス。

感染力こそ低いが、一度感染したら最後、潜伏期間や初期症状に個人差はあるが、1週間で全身の細胞がグズグズになって死に至る。

治療薬（ワクチン）も独自開発（オリジナル）の一種のみで、現在は自分達の手元に在る物だけと言う。

『…渡すのが面倒だから、其方が直接、取りに来てくれないか？』

場所は…其処から山頂を見てみな…』

鳥間が言われた通り、山頂を見る。

「…あの、ホテルか？」

『その通り。手土産を忘れるなよ？』

100億の賞金首をな…!!』

「…!!」

『クツクツク…その様子じゃあ、クラスの半分近くがウイルスに感染したみたいだねえ？ククク、結構結構♪』

「もう一度聞く…お前は一体…」

『俺か？俺は、お前等同様、賞金100億を狙っている者だよお…』

良いか？治療薬（ワクチン）は今、爆弾付きのトランクに入れている。

俺達の機嫌を損ねたりしたら、スイッチ一つでボンツ!!…感染者は助からない。』

「念入りだな…」

『元々、その袋に入っているタコが動ける状態を想定しての計画だ。』

動けないなら尚更、此方の思い通りだ。』

「……………」

この展開に、鳥間が手に持つビニール袋の中の殺せんせーも、慎重な顔になる。

『山頂に有る、「普久間殿上ホテル」の最上階だ。』

今から1時間以内に、その賞金首を…

そうだな…今、動ける生徒の中で、最も背が低い男女2人に持って来させろ。

先生…アンタは腕が立ちそうで、危険だからねえ…クツククク…』

「……」

電話の向こうの声に、ふと鳥間が渚と茅野に目を向けると、倒れていた者達を介抱していた2人と丁度 目が合ってしまう。

当然、電話の会話を知る筈の無い2人は、何か在ったのか？…と不安…と云うよりかは不思議な表情。

電話の向こう側の人物は説明を続ける。

既にホテルのフロントには連絡済み。

素直に取引に応じたら、賞金首と薬の交換は直ぐに済む。

しかし、外部と連絡を取ったり、少しでも約束の1時間を遅れたら、即座に治療薬（ワクチン）は爆破、破壊する…と。

『クツククク…君達には礼を言うよ。』

よくぞ、ソイツを行動不能まで追い込んでくれた…。

どうやら天は、俺達の味方の様だ。』

「おい、ちよつと待て」 P u、ツーツーツーツー…

此処で、烏間と謎の脅迫人物との通話は終了した。



「ふ…巫山戯けやがって…こんな時に第三者の介入かよ…!？」

響は1人、自分達の暗殺計画で殺せんせーをあと一步まで追い詰めた、ホテルの離れの小屋跡の近くに居た。

顔は生気を失ったかの様に青ざめ、身を抱くように蹲り、ガタガタと身体全体を震わせる響。

中村達が倒れた後、響も自身の体調に違和を感じていた。

鳥間が誰かとスマホで会話を始めた時、その時の表情から何気に察した響は内なる小宇宙（コスモ）を最大に燃焼、己の聴覚を最大限に高め、通話を聴き盗る事で、他の生徒達より一足先に事態を把握。

「ま・さ・か、俺もつかよっ…!」

自分も そのウイルスとやらに感染したのは明らか…

その会話途中、皆に悟らない様にロビーから離れて距離を置いていたのだった。

そして、鳥間と謎の脅迫者との会話が終わった後、響は口元を大きく吊り上げる。

ウイルスだったら…どーにか出来る!!

そう心の中で呟くと、響は再度、小宇宙（コスモ）を燃焼させ、その小宇宙から創り出した燐気を身体に纏わり憑かせると、

「…積尸気…鬼蒼焰!!」

それを触媒とした蒼い焰（ほのお）を其の身に包ませ、更には其れを自分の体内に取り込んでいく。

「うがああああああ…!!」

積尸気鬼蒼焰…本来ならば、積尸気冥界波で敵の体から引き抜いた魂を燃やし尽く

す、蟹座の黄金聖闘士の技。

その蒼い焰が響の身体の中で暴れまわる。

その自分の技を、自ら体内で受ける事で、ウイルスの活性以上に苦しむ響。

「ハア……ハア……」

そして暫くすると、呼吸は未だ荒いが、次第に健全な血色を取り戻していく。

響は この蒼い焰を己の体内で燃やす事で自身の体温を、常人ならば命を落としかねないレベルまで、急激に上昇させる事により、その熱でウイルスを完全に消滅させたのだった。

「ふう……日本の厚生省も、さっさと発熱剤を認可すべきだよな？」

ウイルスは消えたが、それでも自身が己に放ったとは云え、聖闘士の技を受け、多少のダメージの残る身体。

一言呟くと、響は そんな身体を奮い立てながらも、クラスメートの集まりに然りげ無く戻って行つた。



「……と、二云う訳だ。」

ウイルスに感染された者達を、その場で横にさせた上で、皆に事情を包み隠さず烏間は説明する。

「…酷え…一体 誰なんすか、こんな事する奴は!？」

「前原君、じつとしていて!!」

「……………」

『誰がやった?』の問い掛けにも、烏間は黙る事しか出来ない。

「烏間さん!!」

其処に彼の部下の1人、園川雀が駆け付ける。

「…やはり駄目でした。」

政府として、あのホテルに宿泊者を問い合わせても、『プライバシー』と『個人情報』の一点張りで…」

「…やはり、か。」

「ぬ?やはり…?」

園川の報告に、顔を顰める烏間。

以前から、この島の黒い噂は烏間も多少なりは耳にしていた。

普久間島…通称『伏魔島』の名で警視庁からもマークされている島。

島内の殆どのリゾートホテルは真つ当な経営をしているが、件の山頂のホテルだけは、話が違う。

南海の孤島と云う地理も手伝い、国内外のマフィア勢力や、其れ等と繋がる財界人が



出入りしていると云う。

ホテルスタツフだけでなく、其れ等の人物が連れて来た私兵の嚴重な警備の下に、違法な商談やドラッグパーティーを連夜開いているとの情報も有る。

「…政府のお偉いさんともパイプが在り、警察も迂闊に手が出せんだ。」  
「成る程、そんなホテルがコツチの味方なんて、する訳ないし。」

冷めた口調で納得するカルマ。

「どーすんすか!？」

この儘じゃ、皆 死んじまう!!

俺達この島、殺しに来たんであり、殺されに来た訳じゃねーよ!!」

「吉田君、落ち着こ？」

そんな簡単に死なない 死なない…。

元氣な皆で じっくりと対策 考えてよ。」

「おう…悪い、原…」

冷静さを欠いた吉田を原が宥めた。

「…でもよ、素直に言う事お聞くのも危険過ぎるぜ。」

「ああ、何しろ一番小っちゃいの2人、御指名だからな。」

「寺坂? 吉良…?」

ビシイ!!

「あ・の、ちんちくりん共だぞ!!

人質増やして どーするよ!？」

「も、もう少し…」

「ソフトな言い方って無いの?」

寺坂、響の両名に指差された ちんちく r…渚と茅野がジト目で突っ込む。

その突っ込みを無視、そして要求を全て無視で、直ぐにヘリコプターを呼び、都会の病院に運ぶ事を推す寺坂に、竹林が異を唱える。

「もしも本当に人工的に作った未知のウイルスなら、対応出来るワクチンは、どんな大病院にも置いていない。」

対症療法で応急処置をしている間に、急いで取り引きに行つた方が懸命だと、氷を詰めた袋を横になつてゐる狭間の額に乗せながら、竹林は話す。

打つ手無し…

殺せんせーが動けるならば、手の打ちようは、まだ有つた。

いや、とうの昔にマツハで山頂ホテルに赴き、ワクチンを持って帰つて来ていたであらう。

此の度の暗殺が下手に良い処まで行つた御陰で、24時間は完全防御形態で身動きが



山頂に建つホテルの裏側は、岩肌が剥き出しになった険しく高い崖。

現場に来た生徒達は、山頂を見上げ、口々に「高い」と呟く。

そんな中、ホテルのコンピュータに侵入（アクセス）して、建物の内部図面と警備配置図を入手した律が、某・怪盗美人3姉妹の様な出で立ちで説明を始める。

正面玄関と敷地一帯には、大量の警備が置かれており、フロントを通らずにホテルに入るのは、まず不可能。

ただし、現在地の崖を登った先に有るホテル裏手の通用口。

普通に考えて侵入不可能な地形の為、警備が配置されていない、この通用口が、唯一侵入可能なホテルへの入口である…と。

「成る程ね…そーゆー事か…」

「ヌルフッフ…吉良君、判りましたか？」

その通り、敵の意の儘になりたくないならば、手段は1つ！

今、此の場に居る動ける生徒全員で此処から侵入し、最上階を奇襲、治療薬（ワクチン）を強奪する!!」

「「「「「「………っ!!」」」」」」

「く〜」

この一言で、生徒達の顔の色が変わる。

だが、それは決して恐怖や不安の顔ではなく、新たな選択肢を得た、殺る気漲る顔。「待ちなさいよ、アンタ達！」

揃いも揃って、「おお、その手があつたか！（ポンッ！）」……みたいな顔、してんじやないわよ!!」

そんな生徒達に、馬鹿な考えは止せとばかりに、イリーナが突つ込みを入れる。「確かに危険過ぎる。」

あの手慣れた脅迫手口……敵は明らかにプロの者だぞ。」  
烏間も殺せんせーの案には、消極的な姿勢を見せる。

「はい、しかも私は皆さんの安全を守れない。」

大人しく私を渡すのが、ベストなのかも知れません。」

「「「「「……………」」」」」

「どうしますか？ 全ては君達と……指揮官である、烏間先生次第です。」

「無理に決まつてるでしょ！」

「この崖、御覧なさい!!」

こんなの、ホテルに辿り着く前に、転落死確実じゃないの!」

烏間に決断を促す殺せんせーに、代わりとばかりにイリーナが反対的な姿勢を示す。

「大体アンタ達、こんな崖、登れる訳？」

この続くイリーナの問い掛けに、

「いや、まあ……」

「崖だけなら……ねえ……？」

「ああ、楽勝だけど……」

「そーでしょー？……つて、へ……？」

そう言うと、其の場に居る生徒達は皆、涼しい顔で崖を駆け登り始める。

「何時もの訓練に比べたら……な？」

「……ですよー♪」

この光景に、口をあんぐり開けて驚いているイリーナ。

そして烏間にとつても、これは予想の外の出来事だったらしく、啞然としている。

「烏間先生、俺達、崖は兎も角、未知のエリアで未知の敵と戦う訓練はしていないから、

難しいだろうけど、きつちりと指揮、お願いしますよ。」

「烏間先生……見ての通りです。」

彼等は最早、只の生徒ではない。

今のアナタの元には、17人の特殊精鋭部隊が居るのですよ？」

崖の約1／3を登った磯貝が、改めて烏間に指揮を呼び掛け、それに追隨する様に殺せんせーが、やはり改めて決断を促す。

「巫山戯た真似しやがった奴等に…キツチリと落とし前、着けてやるからよ!!」  
更には指揮を急かす様に、寺坂も吼えた。

「さあ…時間は無いですよ?」

殺せんせーの言葉に、烏間は数秒、目を閉じる。

「注目!!」

目標、山頂ホテル最上階!」

「「「「「「!!」」」」」」」

そして再び その眼が開いた時、其処には迷いの色は完全に消えていた。

「隠密潜入から奇襲への連続ミッション、ハンドサインや連携については、訓練時の物を、其の儘に使用する!!」

何時も違うのは、標的（ターゲット）のみ!」

その烏間の顔を見て、生徒達も改めて気を引き締める。

「各自、40秒でマップを頭に叩き込め!!」

19:50（ヒトキューゴーマル）…

任務開始（ミッションスタート）!!」





## イリーナの時間

「又〜ルフフ〜フ〜♪」

「キヤー！揺れる揺れる!!」

ちよつとカラスマ、もつと静かに登れないの!？」

「……（怒）」

「やれやれだな……」

ウチの先生、動けるの3人中、たった1人かよ……」

鼻歌交じりな完全防御形態の殺せんせー。

……が入れられた、手提げ紐の付いたビニール袋を持つイリーナ。

……を背負った烏間が、颯めつ面で崖をよじ登る。

「……てゆーかさあ、ビッチ先生、何で着いて来てる訳？」

「……さあ？」

「しかも、あ〜んな格好で……」

「た、確かに……（笑）」

「うがーっ!!」

「茅野ちゃん、少し落ち着なよ〜?」

「気持ち解るけど (ガンツ!) ふぎやつ!」

「カ、カルマっ!」

場所を選ばない暗殺を可能にする為には、基礎となる筋力とバランス感覚が必要不可欠だと、訓練の一環として、以前から学校の裏山で実施していた崖登り(クライミング)。

その成果なのか、先程迄イリーナが「絶対に無理!」と言っていた崖も、此の場の生徒達は難無く登りきっていた。

その後、崖を登っている鳥間に負ぶられ、大きく開いた胸元を、これ見よがしと強調するかの様な紅(あか)のワンピースドレスを身に着けたイリーナの事を、上から見下ろしながら話すのだった。

「成る程…フライボードを普通に使いこなしていたのも、そのバランス感覚を養った成果ですか。」

「思わず感心な殺せんせー。」

「むきーっ!! そんなの どーでも良いから早く登んなさいよ!

いい加減、掴まる腕が疲れてきたわ!

無駄に筋肉が付いたら どーすんのよ?!」

「……………(怒)(怒)」



離を歩かなくてはならない。

「テレビ局みたいな構造だな？」

律から送られたデータ：スマホ画面に表示された、ホテルの内部マップを見た千葉が  
呟く。

「千葉君、どーゆー意味？」

「テレビ局つてさ、テロリストなんかには占拠されにくい様、複雑な設計に なってるらしい。」

「こりゃ、悪い宿泊客が愛用する訳だ…」

その説明に、菅谷も納得。

「よし、時間が無い、行くぞ。」

状況に応じて指示をだすから、決して見逃さない様に。」

カチャ：

鳥間が扉を開き、建物内部に。

そして生徒達も、足音を殺して後に続く。

ついにE組チームによる侵入ミッション今が、本格的にスタートした。



裏口からの短い廊下を歩いた先にある扉、それを開けばロビーに繋がる。僅かに開けたドアから中を伺った鳥間の目に映ったのは、多数の一般？客と、それに負けない位の人数の、燕尾服を着たホテルスタッフ、そして黒スーツを着た警備員らしき男達。

「チイ……」

思わず生徒達に気付かれない程の、静かな舌打ちをする鳥間。

このロビーを抜けなければ、上には行けない。

当然、警備のチェックも、最も厳しいエリアだろう……。

目的の非常階段は、すぐ傍だが、予想以上に警備が多い。

生徒全員が、誰の目にも触れずに通過するのは、まず無理だ。

人数を絞って潜入……いや、駄目だ！

敵も複数の可能性が高い。

例え今の彼等でも、2人3人では、危険過ぎる。

俺1人では、作戦の選択肢が更に狭まれてしまう……どうする？

……侵入早々、最大の難関だ。



ロビーに入った瞬間、千鳥足で歩き始めるイリーナ。

「「「おお……♪」」」

金の髪と紅のドレス。

その互いを美しく引き立て合う目立つ容姿は、直ぐに一般客やスタッフ達の目に止まる。

どん……

「あんっ?」「うおっ!」

そんなスタッフの一人に目を付けると、然り気無く、よろめく様にその男の胸元に肩を軽くぶつけ、

「あ……ごめんなさいいつ、部屋の お酒で悪酔いしちゃったみたい……」

顔を まるで本当に酒に酔ったかの様に赤らめウインクしながら微笑みかけ、金髪の美女は黒スーツの男に謝る。

「あ……お……お気にならさず お客様……」

……ずつきゅーん!!

そのイリーナの仕草がクリティカルヒットしたのか、ぶつかられた男は僅かに顔を赤くすると隠す事無く鼻の下を伸ばし、謝られる処か、「寧ろ、ありがとう!」と礼を言いた気な、下卑た顔で応対。

「来週、あのピアノを弾かせて頂くの。

少し早入りして、観光してたの。」

そう言つて、イリーナはロビー奥のピアノを指差す。

「ああ、ピアノリストの方でしたか。」

全く疑う気配の無い黒スーツに、イリーナは一瞬、黒い笑みを零し、

「酔い覚ましついでにね、ピアノの調律をチエックしておきたいのだけど、よろしくて？」

そう言つと、答えを聞く前にピアノの前の椅子に座る。

「ちよつとだけ、弾かせて下さいね？」

そして目の前のスタッフだけでなく、その一連のやり取りを見いてて、いや、ロビーに入った時から、何気なく自身に視線を浴びせていた他のスタッフ達も、手招きして呼び寄せたイリーナは、

「貴方達も聴いて欲しいわ。」

そして、審査を。」

「審査…ですか？」

「そう…私の事、よく審査して。」





「それにしても、凄えな、ビッチ先生。」「ん。ピアノ弾けるなんて、一言も言つてなかったよね。」

「あの間を駆け抜ける間、私達も、ついつい目を奪われて、アツチに顔、向けちゃつてたしね。」

「ああ、不覚にも、『何て綺麗な先生なんだ』つて思つてしまったぜ。

ちいつ、あの痴女相手に…黒歴史だ。」

「吉良あ、お前なあ…（笑）」

褒めてるのかデイスつてるのか分からない響に、磯貝が苦笑する。

「普段の態度から、彼女を甘く見るな。」

「烏間先生?」

そんな生徒達に、烏間がフォロー。

優れた殺し屋程、万（よろず）に通ず。

イリーナ程のクラスとなると、潜入暗殺に役立つ技能なら、何でも身に付けていて当然だと。

「良いか、忘れるな…」

普段から君達に会話術（コミュニケーション）を教えているのは、世界でも1、2を競う、トップクラスの色仕掛け（ハニートラップ）の達人だと云う事を…。」

「「「「は、はい！」」」」」

生徒達は、改めてプロの大人の技術の威力を知る。

「う…む…悔しいけどカッコ良い…。」

巨乳なのに惚れざるを得ない…。」

「巨乳を憎む茅野つちが心を開いた!!」

「又ルッフフ…私が動けなくても、全く心配無いですねえ。」

「ん…、寧ろ、要らない子?♪」

「にゅやーっ!?!」

殺せんせーは動けなくても、プロ揃いのE組の先生は頼もしい。

これならイケる!

其の場に居る生徒達が、素直に思った。

…だが、彼等は此の後 直ぐに、思い知る事となる。

先に待ち構える敵も また、手強いプロの大人だと云う事を…

## 鳥間の時間

「う〜…愛美しい…ゴメンね…」

「いい、いえ、気にしないで…」

自分の額に氷嚢を乗せてくれた奥田に対し、寝ている櫻瀬が申し訳無さそうに呟く。  
「皆、酷い熱だ。」

奥田さん、脳にダメージが行かない様、兎に角 頭だけは冷やしておこう。」  
「は、ー…」

鳥間指揮の元、動ける生徒達が脅迫犯の待つ、山頂ホテルへ突入をしていた頃、海の傍の宿泊ホテルでは、竹林と奥田が、ウイルスで倒れた者達を看病していた。

風通しの良い、砂浜の直ぐ傍のペランダに、フロントから借りた毛布を丸めて枕代わりにして横になつてゐる櫻瀬達を見ながら、奥田が竹林に問う。

「あの…これだけ強いウイルスなら、島中に広がったりは…?」

「犯人も『感染力は低い』と言つていたそうだから、多分、それは無いね。」

恐らくは、食べ物か何かにウイルスを仕込まれたと考えるのが妥当だ。」

奥田の不安に対して、竹林は自分なりの見解を話す。

「だから、空気感染みたいに、無差別に彼方此方にウイルスが撒き散る心配は無いと思う。」

「…それは、アッチに行つた皆にも伝えたんだけど…」

E組だけを狙つて、盛られたウイルス…

一体 誰が？何時？どうやって？

奥田は その顔から、不安の表情を消す事は無かつた。



「…さて、君等に なるべく普段着の儘で来て貰つたのにも、理由はある。」

非常階段を上り、ホテル2Fまで到達したE組チーム。

生徒達に鳥間が説明を始める。

「入口の厳しいチェックを抜けさえすれば、此処からは客のフリが出来る。」

「客つすか？」

悪い奴等が泊まる様なホテルでしょ？」

「中学生の団体客なんて居るの？」

「ああ、聞いた限りじゃ結構いる。」

芸能人や金持ち連中のボンボンがな。」

生徒達の質問に、烏間は洗い顔をしながら答える。

「金持ち……」「ボンボン……」

烏間が言うには、王様の様に甘やかされて育った子供達は、あどけない顔の内から、この様な場所で酒にタバコ、更にはドラッグ、果ては不純異性交遊等々等々……様々な悪い遊びを覚え、その手を染めると云う。

「その通り。」

だから君達も、そんな輩になりきり……世の中を舐めてる感じで歩いてみましょう。」

「ふくん、舐めてる感じねえ？」

それって結構、難しくね？♪」

「お前は、普段の自然体で大丈夫だ！」

既に緑とオレンジの縞模様で舐めた顔をしている殺ボールのアドバイスで、

「ひゃっはー!!」

「ケケケケ……」

「ニヤガガー!!」

「おおーっほっほっほ!!」

……一部、『素』の儘の者を含め、らしい顔付きで廊下を闊歩していくE組チーム。



「気がするね。」

「仮に何かあっても、先頭には烏間先生が、後ろには磯貝と吉良っちが居るし、直ぐに知らせしてくれるさ♪」

そう話しているのは、渚とカルマ。



「へっ！楽勝じゃねーかよー！」

「時間無いんだ、さっさと進もうぜ!!」

ホテル3Fの中広間に入った時、今迄何事も無く、慣れてきたのか嘗めたのか、寺坂と吉田が、先頭の烏間を追い抜き、前に走り出た。

寺坂と吉田が走り向かう：此方から見たら、中広場の出口側から、チエツク柄のシャツにハーフパンツという如何にも宿泊客然とした身形の、1人の中年男が歩いてきた。

「〜♪」

片手をズボンのポケットに突っ込み、口笛を吹きながら やってくる男。

「…!!」

何かを思い出したのか、その男の顔を見て、不破が叫ぶ。

「寺坂君、吉田君！そいつ、危ない!!」

「あ？」



その後は一瞬だった。

不破の声にダツシユした鳥間が、前を走る寺坂と吉田の上着の襟口を手に取り後方に投げる。

それと同時に、その前方の男はチェック柄のシャツの下に着ていたアンダーの首縁を、まるでマスクをする様に口元まで引き上げると、ズボンに忍ばせていた小型銃の様な武器を微笑みながら、鳥間に向ける。

ボシユツ…

「!?」

派手な銃声は鳴らない。

「ガスか!?」

男が手にしていた武器は銃器の類ではなく、何らかのガスを噴出するスプレーの様な物。

鳥間は身体全身に、そのガスを浴びるも、素早く男の持つスプレーを狙って蹴りを放ち、見事その武器を弾き飛ばす。

「チイツ…!!」

バツ…

互いにバックステップを踏み、距離を空ける両者。

「…何故、分かった？」

男は口と鼻を覆っていたマスクを下げ、ニヤリと嗤いながら、不破に話し掛ける。  
「殺気を感じさせず、すれ違い様に殺る。」

…俺の十八番（オハコ）だったんだけどな、オカッパちゃん？」

「…ボブだよ。」

『オカッパ』という単語に、地味に反論する不破。

「だって おじさん、昼間、ホテルでサービストリンク配つてた人だよね？」

「…あつ!!」

そして続け様に放つた言葉に、数人の少年少女も、あの時の従業員が目の中の男だった事に気付き、驚きの声を上げる。

「おいおい？ 断定するにや、まだまだ証拠が弱過ぎるぜ？」

ドリンクでなくとも…ウイルスを盛る機会なんざ沢山ある筈だぜ？」

男は嗤いながら、自分が『あの時のスタッフ』だと云う事は否定しなくも、その時のドリンクにウイルスを盛った事は否定する様な台詞を放つ。

「皆が感染したのは飲食物に入ったウイルスから…竹林君は そう言ってた。」

それに対してボブカットの少女は、まるで推理小説のクライマックスである謎解き場面の如く、人差し指を立ててコツコツと周囲を歩き出し、自分の推論を話し始める。

「クラス全員が同じ物を口にしたのは、あの時のドリンクと、船上でのディナーの時だけ……」

でも そのディナーを、映像編集をしていて、後から原さんからの差し入れという形で、約1時間遅れて食べてた三村君と岡島君も、同じタイミングでダウンしてる事から、感染源は昼間のドリンクに絞られる。

∴ (故に) ……」

そこまで話すと不破優月は、人差し指を一度、天井高く掲げた後、その手をゆっくりと降ろし、

ビシィツ!!

「犯人は、お前だ!!」

某・大食い女子高生探偵の お得意のポーズを、「やりきった!!」と云う満足気な会心の笑顔と共に決めるのだった。

「うぬ……」

不破の その名推理? に男は一瞬、顔を歪める。

「不破ちゃん、凄え!」

「なんだか本物の探偵みたい!」

「ふっふっふ……」

そこに痺れろっ!! 憧れろお!!」

響達が探偵少女を持ち上げる中、

ガクツ：

「「「!!」」」」

「「「烏間先生!」」」」

烏間が険しい顔をして膝を着き、床に伏せた。

「毒物使い…そ、そうか…貴様が『スモッグ』だな…!!?」

烏間は倒れた儘、男を睨み付ける。

「くつくつくつく…」

「その嗤いは肯と判断しますよ?」

烏間の問い掛けに、肯定も否定もせず、含みを持たせて嗤うだけの男に、殺せんせーが断定。

「ふっ…ロヴロに依頼承諾の返事をする前に、今回のボスから、政府以上の報酬額を提示されたのでね…」

殺し屋スモッグ。

本来なら、ロヴロの仲介で、殺せんせー暗殺に着任する筈だった殺し屋の1人。

しかし、そのオフアールを出した後、正式な答えを受け取る前に、突如として連絡が途絶えた一人であった。

「…もしや、『ガストロ』と『グリップ』も…か？」

「…さあてね？」

それにしても先生、アンタ、本当に凄いなえ…」

「何…!？」

「アンタが浴びたガスは、俺様特性の屋内専用麻酔ガス…少しでも吸えば、象ですら瞬時に気絶（オト）し、外気に触れば直ぐに分解して証拠も残らない優れ物だ。

それを正面からマトモに喰らい、未だ意識を保つてるとはねえ…くつくく…」

苦笑しながら男…スモッグは話す。

「生徒達に盛ったウィルスの開発者も、あなたですね？」

無駄に感染を広げない…実に取り向きで、実用的だ。」

「さあ？ただ…お前等に取り引の意志が無い事だけは、良く解った。」

続く殺せんせーの質問もはぐらかすと、スモッグは踵を返し、

「交渉決裂か…ボスに報告だな…」

その場を去ろうとする。

しかし…

ザザツ…

「!!?」

中広場の全ての出口を、生徒達が即座に塞ぐ。

広間に置いてあるテーブルを、花台を、壺を…そして壁に飾られている斧槍を手に取り、目の前の殺し屋に対して、必要ならば交戦と云った姿勢を見せる。

「へえ…やるねえ…!?!」

その手際良さに、スモッグは純粹に感心。

その時、

「敵と遭遇した場合…速やかに退路を塞いで連絡を断つ…」

「!?!?!」

「彼等には、そう指示していた…!!」

フラ…

そう言いながら、フラフラとした足取りながら烏間は立ち上がり、

「貴様は…俺達を見た時に、攻撃せずに報告に戻るべきだった…!」

生徒達の満点を与えても良い迅速な行動に笑みを見せた後、ファイティングポーズを

構える。

「ふくん…まだ、動けるとは、驚いた。

だが……」

スモッグは再び、アンダーシャツの首縁を鼻先まで引き上げマスクにすると、「所詮、他は御子様の群れ……」

お前が死ねば、統制が取れずに逃げ出すだろうよ。」

今迄の嗤い顔から一変、冷酷な殺し屋の本性と云ったも良い、鋭く吊り上がった目付きとなり、烏間同様に、自己流なのだろう、戦闘……否、暗殺の構えを取る。

数秒間の睨み合い。

E組生徒が見守る中、麻酔ガスの影響なのだろう、目も虚ろな烏間が、微かに よろめく。

プロの殺し屋が、その僅かな隙を見逃す筈が無く、ズボンのポケットに忍ばせていた、もう一つのガス噴出機を手にすると、ダッシュして間合いを詰める。

どうやら この麻酔ガスは、外気に触れたら直ぐに分解する性質上、飛び道具の様な遠距離での攻撃は不可能、至近距離で放たないと効果を得られない様だ。

グワツシャアッ!!

だが、如何に手負いと云えど、烏間相手に接近戦を挑んだのは、結末からすれば失敗だった。

「「「烏間先生!!」」」

「「「吉良君!」」」 「「「吉良!!」」」 ガスを噴出するボタンを押すよりも速く、烏間の強烈過ぎる膝蹴り、シャイニング・ウィザードと…スモッグのダッシュのタイミングに合わせ、その背後に駆け寄っていた響の延髄斬りが、同時に炸裂したのだった。

因みに この時、響は小宇宙を使って気配を消しており、その様を視覚で認識出来ていた生徒や烏間は兎も角、死角に位置されていたスモッグには、その存在を確認出来る術は無かった。

馬鹿な…お前…何故、動ける…!?!?

自分に攻撃を仕掛けた2人に目を向け、スモッグは失おうとしている意識の中、頭の中で呟いた。

ドサ…

「「「「烏間先生!!」」」」

そして烏間も、遂に其の場に崩れる様に倒れ込んだ。



## カルマの時間

「…よつと。」

遭遇した殺し屋の退路を防ぐ際に、手にしていた家具（ぶき）を片付けるE組の面々。鳥間と響のコンビネーションにより倒れ、気絶しているスモッグを、寺坂達が持参していた布テープで簀巻き状態に拘束、テーブルの下に隠す。

「しっかし片岡さん、いざって時は　その壺、本当に鈍器にしたの？」

「え？」

「その壺、高そうだよね？」

もしもマジに、それを凶器にして割ったりした時は、一体　誰が弁償する事になってたんだろね〜？♪」

「え？ええっ?!」

スモッグの退路を塞いだ際、広間に飾られてあった、如何にも御宝芸術品と云う感のある壺を、手にして構えていた片岡。

その壺を元の場所に戻している時に、その件について響とカルマに不意に弄られ、若

干 狼狽えてしまう。

「…頭の上、凜とした顔で「こっち来たら殴るわよ」とばかりに高く構えた画面（えづら）、怖い位に似合ってた。

流石はイケメグ。」

更には其処に、速水も便乗。

「お願い凜香…言わないで…（泣）」

あの時の勇姿（笑）、片岡本人も多少の自覚はあつた様だ。

「「そこに痺れるう！ 憧れるうっ!!」」

「うっさい!!（怒）」

片岡達が、そんな やり取りをしていた中、

「烏間先生、大丈夫ですか？」

「…駄目だ、普通に歩く振りをするだけで精一杯だ。」

まともに戦闘が出来る状態まで、30分で回復出来るかどうか、分からん…」

ガクガクガク…

膝が喘い、まともに立つ事すら儘ならず、磯貝に肩を借りて体を支えられる烏間が、普段の彼からは想像出来ない様な、『らしくない』弱音を漏らす。

「いやいや、象を倒すってゆうーガス浴びて歩けるのが、間違ってるって…」  
 「ん。鳥間先生も、充分に人外だよね…」

しかし、その『弱さ』を見ても、生徒達の鳥間の評価は墜ちる処か逆に、その非常識振りに敬意を評する。



「……………」

無言の儘、先へと歩くE組の面々。

現在地は3F。

目標である10Fは、まだまだ先。

しかし、この時点でイリーナは自分達を先に進める為に1Fで別れ、鳥間も実質、戦闘不能（リタイア）。

担任のタコに至っては、今回は最初から戦力外。

イリーナ、スモッグ、鳥間…

此処までの短い道中に、経験と知識を持ち合わせた大人（プロ）の技量を、敵味方問わずに垣間見てきた生徒達。

『自分達の力量だけで、勝てるのか…!?』

この先にも、そんな技量（スキル）を持ったプロが必ず待ち構えている筈…。

頼るべき指導者が不在の中、約数名を除いては、この先の展開に不安が勝り、その重圧で心が折れそうになっていた。

「大丈夫ですよ。」

「……殺せんせー……?」

そんな心情を察してか、殺せんせーが重苦しい空気の中、口を開いた。

「大丈夫、普段の体育で君達が学んだ事を、しっかりとやっていたら、そうそう恐れる敵は居ない。」

寧ろ、これは本当の『夏休み』をする、最高の機会と受け取るべきです。」

「……は? 『夏休み』?」

夏休み……此処で何故、その言葉が出るのか解らず、『?』な顔をする生徒達。

「先生と生徒とは、決して馴れ合いの関係では、ありません。」

そして夏休みとは、その先生の保護が及ばない場所で、自律性を養う舞台でもあるのです。

大丈夫、君達なら、クリア出来ます。

この【暗殺夏休み】を!!」

この殺せんせーの教師としての特徴に、体育だけは容赦が無いという一面がある。



セミロングの金髪の、目付きの鋭い男。

ガラスの壁に背中を預け、見た目30歳前後、明らかに外国人である。その男は静かに佇んでいた。

「……………」。

「…おいおい、滅つ茶苦茶、堂々と立ってやがるぜ?」

無言で不動の男を見ながら、小声で話す生徒達。

「あ、あの雰囲気ってさ…」

「…ん。いい加減、私達でも見分けが付く様になったわよね。」

「そんな目利き、要らないよ〜!」

男が隠す事無く、身体から放つ異様で独特の存在感。

それは どう見ても、「殺る」側の人間の『それ』だった。

狭くて見通しの良い展望通路では、奇襲も出来ず、数の利も活かせない。

(ちい…せめて、実弾の銃が有れば…)

烏間が、そう考えていた。その時…

ビシッ!!

「「「「「!!」」」」」

男の手が触れていたガラスが、まるで銃弾を撃ち込まれたかの如く、大きく放射状にヒビ割れた。

「…つまらぬ!!」

パラ…

男がガラスから手を離すと、その掌の中から、小さなガラスの破片が零れ落ちる。

「足音を聞く限り…『手強い』と感じられる者が1人も居らぬ。」

精鋭部隊出身の引率教師も居る筈なのぬ…だ。」

そう言う男は、通路の陰に隠れている生徒達の方に顔を向け指差し、

「どうやら、スモッグのガスにでも、やられた様だぬ。」

半ば相打ちぬと云った処かぬ。

そんな所に隠れていても、仕方無いぬ。

さあ、出て来いぬ。」

姿を見せるとばかり、チョイチョイと指で招く。

ぞろっ…

「おい…手で窓にヒビ入れたぞ?」

「な……んちゅー握力だよ?」

そのアピールに観念したのか、男の前に姿を見せる、緊張した面持ちのE組の面々。ガラスを掌……握力だけで壊す事で見せ付けられた、男の戦闘力に驚愕する生徒達。だが、実は今の時点で、彼等は別の事柄で戦慄していた。心の中で、彼等は一言一句、全く同じ事を考え眩く。

い、いや、そんな事より……

怖くて誰も、言えないけど……

つまり、その……何だ……

「ね、おじさん、ぬ、多くね?」

……!!!?

い、言った……!!!

カルマ、言った……!!!

良かった!カルマが居てくれて、本っ当くに良かった!!



…そうなのである。

この男、話す語尾に、やたらと「ぬ」を付けていたのであった。

そして、それを言っている殺し屋に臆する事無く、遠慮無しの平常運転、涼しい顔で指摘するカルマ。

「ぬ？」

一瞬、戸惑いの表情を、男は見せる。

「…ぬ」を付けると、サムライっぽくなると小耳に挟んだぬ。

カッコ良さそうだから、試してみたぬのだが…」

どうやら、残念な外国人な様だ。

「ん、それも確かに待つぽいけどさ…」

「ぬぬ？」

そんな中に、口を出す男が一人。

吉良響である。

「どーせ侍目指すならさ、語尾に「ぬ」よりも、『候(そうろう)』だぜ？」

「(き)、吉良あーっ！っ！！」

嘘、教えてんなーっ！！(き)(き)(き)(き)

この余計過ぎる一言に、カルマを除く、皆が心の中で突っ込んだ。

「そ、そうなぬか？少年よ。

それは良い事を聞いたぬ…で候。

…ならば、今後は、ぬに『候』を組み込んでいくで候。」

ポツキポキ…

指の関節をポキポキと鳴らしながら、響の出鱈目話？を真に受け、早速喋り方を変えた男は、不敵に笑いながら話す。

「素手…それが、アナタの暗殺の道具ですか…」

「ふ…こう見えて、需要があるで候。

特に身体検査に引っかかるぬ利点は、かなり大きいで候。」

男は殺せんせーに、自分の武器である掌を向けて話し続ける。

「獲物に近付き様、擦れ違い様の一瞬に頸椎を一捻りぬ。

その気になれば、頭蓋骨も簡単に握り潰せるで候。」

ぞくり…

掌を ゆっくりと閉じ、何かをグシャリと握り潰すかの様なりアクションと共に言うその台詞に、数人の生徒が鳥肌を立てる。



は、心底ガツカリな表情を浮かべる。

「ふう……」

そして、グリップは溜め息を一つ吐き、

「雑魚ばかり、1人で殺るのも面倒で候。

ボスと仲間呼んで、皆殺しするで候。」

「「「「なっ……!?!?」」」」

P i p i …

懐からガラケーを取り出しす。

しかし、

「ねえ、おじさんぬ?」

ビキイツ!!

その手にしたガラケーは、発信される前に、何の前振り無しにカルマが振りかざした観葉植物の鉢に弾かれ、外壁のガラスに叩き付けられると、そのガラス毎ボロボロに破壊された。

「プロの殺し屋つつつても、意外と普通なんだね〜?♪

ガラスや頭蓋骨なら、俺だって ほら?

簡単に割れるよ?」

「……………」

そうやって、先程グリップが作ったよりも、はるかに大きな放射状のヒビを見せつけるカルマ。

「…てゆーか、速攻で仲間呼んじゃうってさ、もしかして厨坊とタイマン張るのも怖い人？♪」

この何時もの人を おちよくっているかの様な笑みを浮かべるカルマの台詞…直訳すれば、「タイマン張ろうぜ♪」である。

「！！！！」

クラスメートもカルマの無法っぷりには慣れていた心算の筈だった。

つい先程の「ぬ」の指摘なら まだしも、まさかのプロの殺し屋相手に これには、流石に驚いてしまう。

「止せ、赤羽君、無謀だ「ストロップ！鳥間先生。」

「な、何を…」

そしてカルマを止めようとした鳥間を、殺せんせーが更に止めに入る。

「顎が引けています。」

「…!?!」

「以前の彼なら、余裕全開で顎を突き出して、相手を見下す構えをしていました。」



一度捕まったら、それだけでThe・End。

一見、明らかに無理ゲーだが、立場が逆なだけで、実は普段から、その無理ゲーをしていたカルマ。

グリップの息を吐かせぬ連続攻撃を赤髪の少年は、その何れも冷静に対処し、紙一重で躲すか捌くかをしていた。

「すっげ…カルマの野郎、全部避けてやがるぜ…」

「烏間先生…それに、吉良君の防御テクニク…」

「…でつすよね〜？」

殺せんせーの解説に、響も頷く。

暗殺者にとって、防御技術の優先度は低く、授業で教えられてはいなかった。

しかし そんな中、カルマは授業の中の模擬戦…烏間が生徒のナイフを避ける動き、特に、響と烏間の攻防を、他の生徒が単なる自分達よりレベルの高い手合いとしか観てない中、しっかりと目で視て盗み、身に付けていた。

「…吉良君もだが、赤羽君も このE組の中では、やはり戦闘の才能が頭一つ飛び抜けているな…」

「才能って…俺、何年も掛けての練習の上で、漸く得たテクなんだぜ？」





そんなカルマの心情を読み取ったか、グリップの手と足が止まる。

「…どうしたぬ？ 攻撃してこぬば、永久に この先には進めないで候。」

「どうだかな？♪」

グリップの問い掛けに、カルマは何時もの涼し気な顔で応える。

「俺がアンタを足止め、引きつけるだけ引きつけといて、その隙に皆が一気に抜ける一手

もアリかと思っただけど？」

「う…ぬ…」

一気に顔を険しくするグリップ。

ボキボキ…

「…安心してよ。」

そんなセコい真似は しない。」

拳を鳴らしながら、カルマは そう言うど

「今度は俺から行くよ。」

アンタに合わせて正々堂々…。

素手のタイムマンで決着を着けてやるよ。」

「あ・の・ヤ・ロ…」

「吉良、抑えろ！」

響が烏間との模擬戦の際に時折見せる、空手の構えを取る。

「皆も…特に吉良つち？手出しは一切、無用だよ？まあ、見てなよ…」

この おじさんぬ、「あつ」と言う間に片付けてやるからさよ。」

「「「カルマ…」」」

「「カルマ君…」」

「ま、不味いわ…」

カルマ君の、他人を見下す あの態度…

『運氣』が激減するフラグだわ…」

「不破ちゃん？」

カルマの余裕な発言に、様々な意味合いで、慎重な顔になるE組の面々。

「良い顔で候…少年戦士ぬ。」

貴様となら やれそうぬ。

暗殺稼業では決して味わう事が出来ない、フェアな真剣勝負がな！」

「ん…じゃ、闘ろうか…!!」

そう言うのと、互いに数歩 後退して一定の距離を空ける両者。

ダツ…

先に動いたのはカルマ。

「…!!」

カルマ！飛び蹴り系の技はNGだ!!

着地した瞬間に捕まるぞ!!」

「…OK!!吉良つち!」

その動きから、何を仕掛けるのか先読みした響がアドバイス。

バキッ

「ぐぬう…!?!」

そして最初は、本当に飛び蹴りを狙っていたカルマが、その助言に従い、ローキックに移行。

やはり飛び蹴りが来ると読んでいたグリップは、反応が やや遅れ、拗ねに下段蹴りのヒットを許してしまう。

ビシイッ!!

そして間髪入れず、同じ箇所を狙った、連続のローキック。

「くっ…」

この攻めが予想以上に効いたのか、グリップは距離を空けると片膝を着き、蹴りを受けた拗ねを庇うかの様に抑える。

「チャンス!」

ダツ…

その隙を逃がさない様、カルマはダツシユで距離を縮める。

「烏間先生直伝!! (嘘)

シャイニング・ウイザード…

(ブツシユツ…) え?」

「な…?」「カルマ!」「カルマ君!」

片膝を着いているグリップに対し、カルマが狙ったのは、烏間がスモッグを倒した時に繰り出した、強烈な膝蹴り。

だが、その膝がグリップに届く前に、その手に密かに忍ばせていた、小型ガス銃…

スモッグが烏間に使用したのと同種の麻酔ガスが、カルマの身体全体を包み込んだ。

ふら…

「一丁上がりで候。」

ガシツ

朦朧とした顔で、床に倒れ伏せようとするカルマの頭を掴み、グリップはダウンを許さない。

「長引きそうだったためぬ、スモッグの麻酔ガスを試してみる事にしたで候。」

「き…汚え…!んなモン隠し持つといて、何がフェアな真剣勝負なんだよ!」

グイ…

「俺は一度も、素手だけだとは、言っではいないで候。」

吉田の台詞にも、グリッパは悪びれる事もなく、カルマの頭部を掴み直すと 自分の頭よりも高く持ち上げ、

「良いか、『拘る事に拘り過ぎない』。」

それもまた、この仕事を長くやっていく秘訣で候。」

E組の生徒達に勝ち誇った顔を向けて、口説を始める。

「ふっ…至近距離からのガス噴射。

予期していなければ、絶対に防げないでそうr（ブシュッ）…な…に…ぬ…!?!」

そう言いながら、再びカルマの方に顔を向けた瞬間、グリッパの顔面をガス噴射が襲う。

何が起きたのか解らない顔で、カルマの頭から手を離し、体勢を崩すグリッパ。

ニヨキ…パサ…

「いや、奇遇だねえ？」

2人共、同じ事を考えてたなんてさ♪」

口元をハンカチで覆い、「悪魔の笑み（デビルスマイル）」を零すカルマ。

その手には、ガス噴射の小型銃があった。

ガクガクガクガク…

「ば…馬鹿ぬ？何故、お前がソイツを持っていて候…？」

身体をガクガクと震わせながら、まるで何か、信じられない物を見た様な顔をするグリップ。

鳥間も そうだったが、象すら一瞬で倒す筈の麻酔ガスの直撃を本当に浴びても尚、意識を失う処か、満身創痍ながらグリップは倒れない。

「しかも…何故、お前は俺のガスを吸ってないで候…！」

半ば、パニック状態のグリップは

「ぬぬぬぬううう!!」

ベルトのバックルに仕込んでいた小型ナイフを取り出し、カルマに飛び掛かるが、麻酔ガスの影響で、既に常人より僅かに早く動ける程度の攻撃は、暗殺教室の生徒には容易く見切られ、

ミシッ

逆に脇固めの体勢に捕らえられてしまう。

「お〜い、寺坂あ、吉良つちい…」

何みてんだよ？早く早くう♪

ガムテと人数使わないと、こんな化けモンなんか勝てないって！」

「へーへー…」「やれやれだぜ…」  
はあ…

名指しされた2人は呆れ顔で溜め息一つ零すと  
チヨイチヨイ…

「そもそも、オメーが素手でタイマンの約束なんてよ…」  
ダダダダッ

「一番無いよな!」

他の皆にもハンドサインで合図し、

ずずんっ

「ふぎやつ!!」

一斉にグリップの背中に飛び乗り、完全に身動き取れなくする。

「おい、ガムテガムテ!」

「ほれよ!!」

「皆、縛る時も、気を緩めるな…」

ソイツの怪力は、麻痺してても要注意だ。

特に掌は掴まれるから、絶対に触れない様に!」





「当然っしょよ？♪『素手以外』の全部の攻撃を警戒してたよ。」  
爽やかな笑顔で答えた。

「おじさんぬが素手のバトルをしたかったつてのは本心だろうけど、あの状況で素手に固執し続ける様じゃ、それはプロじゃないし。」

「……………」

自分達を止める為なら、手段は選ばない…

自分も同じ立場なら、そうしていた…

カルマはグリップに、自分が考えてたいた事を明かすと、目の前で腰を降ろし、  
「アンタのプロフェッショナル意識を信じてたんだよ。」

信じたからこそ、警戒出来た。」

暗殺者としては格上であり、先輩である この男に、敬意を持った顔を見せる。

「…大した奴で候、少年戦士よ。」

負けはしたが、楽しい時間だったぬ。」

その顔を見た暗殺者は、最後に多少の泥が憑いたが、目の前の少年との普段から望んでいた真剣勝負を過ごした瞬間を思い出し、満足の顔を見せるのだった。

大きな敗北を知らなかった少年は、期末テストで初めて敗者となった時、身を以て

知った。

『敗者も自分と同じく、色々と考えて生きている』…と。

それに気付いた者は必然的に、勝負の場で、相手を見くびらない様になる。

敵は一体、何を考えているか、何を狙っているのか…

敵の能力や事情を きちんと見る様になる。

「…そうして敵に対し、敬意を持って警戒出来る人の事を…戦場では『隙が無い』と言うのですよ。

1度の敗北（チャンス）を、見事に受け入れ糧として、実に大きく成長した。

彼は将来、きつと大物になりますよ。」

「ん…。カルマ君、ちよつと変わったと思うよ、良い感じに。」

完全防衛形態の殺せんせーの、改められたカルマ評に、その殺ボールを手に持った、渚が頷いた。

グリップと何やら話しているカルマ。

明らかに人として、一回り成長した、そんなカルマを暖かい目で見つめる殺せんせーと渚だったが…

「え？何言つての？

楽しくなるの、これからじゃん？」



「寺坂あ、鞆の中の鼻フック取って♪」

「応…って、何で こんなの有んだよ？」

ガシッ…

身動きが取れないのを良い事に、フックで鼻の穴を大きく広げられ、固定された処、グリップに辛苦な薬味の詰まったチューブを持って近づく2人の男。

言わずもがな、E組最凶コンビである。

「さあ、おじさんぬ…」

「今こそ、プロの意地を見せる時だぜwww…で候！」

「よ、止すぬ！止めるで候おっ!!」

必死のグリップの訴えにも、2人の少年は、「あゝ、聞こえんな？」とばかりに、左右の鼻の穴に それぞれ、チューブを突き刺すと、

「せーっの!!」

ぐっじゅうっ!!

「ぬもがああああああああああ…!!」

ガラス張りの回廊に、阿鼻叫喚の悲鳴が響き渡った。

その様を見て、ある者はドン引き、ある者は苦笑、ある者は大笑い、そして ある者は、まるで自分が その責め苦を受けているかの如く、鼻を被い隠す。

「殺せんせー、カルマ君、特に何も変わってなくない？」  
「…ええ。」

「将来が思いやられますよ、あの2人…」

## 武器の時間

グリップを退け、ホテル7Fまで辿り着いたE組チーム。

この潜入ミッションも、終盤に差し掛かった。

「皆さん、この7Fからは、VIPフロア。」

ホテルの者だけに警備を任せず、客個人が雇った見張りを置ける様ですね。」

律の解説通り、どう見てもホテルのスタッフではない……てゆーか、どー見てもカタギじゃない、強面屈強な男が2人、上階に上がる階段の前に、見張りの様に立ちはだかる。

「そんで早速、階段の前に見張りかよ?」

「何なの?あの筋肉達磨達?」

「超・強そうなんですけど?」

彼等からは死角に位置する曲がり角の陰から、様子を窺う生徒達。

「私達を脅してる奴の一味?」

それとも、無関係な悪い人?が雇った警備員の人かしら?」

「関係無えよ、どっちみち、倒さなきゃ通れねーのは一緒だろがよ。」

矢田の疑問も、そんなの意味無しと、寺坂が切り捨てる。

「その通りです、寺坂君。」

そして倒すなら……君の鞆の中に仕舞つてある武器なんか、打つて付けですねぇ。」

「……ケツ、透視能力でもあんのかよ、このタコわっ!!」

「全てお見通しですよ……」と言わんばかりのドヤ顔の殺せんせーに、少しだけ悔しそうな顔を見せる寺坂。

「……大丈夫なのか？」

あの2人が一般客の私兵なら兎も角、もしも敵の部下だとしたら、一瞬で同時に仕留めないで連絡されるぞ。」

「任せろつて……おい、木村!」

「ん?」

そして烏間の心配も寺坂は事無げに流し、木村を呼び付ける。

「お前1人なら、奴等が敵だとしても、直ぐにE組（おれたち）とは思われねーだろ。」

ちよつと此処迄 連れて来いや。」

「俺が? どーやつて?」

「知るか! 何かテキトーに怒らせる事でも言や良ーんだよ。」

「お・ん……?」

どんな事を言えば良いんだ? ……と悩み考える木村に、





「……………」

何やら覚悟を決めた顔をした木村が、見た目ヤ○ザ100割の男達の前で、その顔を  
一変、砕け崩した表情で口を開く。

「あ…あ…あつれえ〜？脳味噌君が居ないぞお〜？」

「ああ…コイツ等は頭の中迄、筋肉だ。」

更に此にイトナが追随。

2人は見張りに対して、小馬鹿にした様な顔で其処迄言うと同を返し、

「人の形、してんじゃねーよ…」

「この豚肉共が！」

更に言葉が続けて、仲間の待つ方向に歩き出した。

「……………」

2人の男の時が数秒間程、凍結。

そして時が再び動き出したと同時に…

ダダダダダダ…

「(怒)お(怒)い(怒)ガ(怒)キ(怒)…」

「(怒)待(怒)て(怒)コ(怒)ラ(怒)!!」



「電撃だっちゃ♪」

スマホ画面の中の、虎縞ビキニな鬼娘のコスプレ少女の眩きと共に、  
バチバチイッ!!

「うげえっ!!」

強力な電流が2人の男に浴びせられ、其の儘 気絶させてしまう。

「ス…スタンガン…?」

スタンガン。

一般的には使用する対象を電気ショックで気絶、麻痺、無力化させる為の非殺傷携行型兵器。

「お前…そんなモン…」

「…応、タコに電気が効くか、試そうと思って買ってたんだよ。」

こんな形で御披露目になるとは、思わなかったぜ。」

「買った…って…」

「高かったでしょ?それ?」

「あゝ、気にすんな。」

少し前、ちよつとした臨時収入があつたんだよ。」

シロ…柳沢が仕組んだ、プール破壊の片棒を継いだ際に得た報酬。

余り思い出したくない事なのか、寺坂は言葉を濁す。

「ヌルフフフフ…」

非常に良い武器です、寺坂君。

…で・す・が・その2人の胸元を探ってみてください。」

「は?」

ゴソツ…

言われた儘、倒れた男の懷に、手を入れる寺坂。

「その膨らみから察するに…」

「ん?」

「もっと良い武器が…手に入る筈ですよ?」

「はああっ!」

ずっしりと重い、黒光りする鉄の塊…

普段、自分達が扱っているオモチャとは、全く違う存在感…

「「「「ほ…本物…!!」「」」」」

寺坂の その手には、本物の拳銃が握られていた。

「銃刀法違反だよ!」

「いや、茅野ちゃん?今更だからね?」

そして、もう一人の男の懐からも、同様に拳銃を抜き取り、計2丁の拳銃を入手したE組チーム。

「千葉君、速水さん…」

その銃は君達が持っていないさい。」

「!!」

殺せんせーの突然の指名に、普段以上に黙り込んでしまう2人。

「……………」

「まだ、鳥間先生は精密な射撃が出来る所まで回復していません。」

今、この中で最も『ソレ』を正しく扱えるのは、君達2人です。」

「…でも、いきなり「た・だ・し!!」…!?!」

戸惑う速水の台詞を遮った殺せんせーが、言葉が続ける。

「先生は殺す事を許しません。」

君達の腕前で、ソレを使えば、敵を傷つけずに倒す方法は、幾らでも有る筈です。」

ドクン…

「俺達が…本物の銃を!?!」

「…私達、ついさつき、エアガンで失敗したばかりなのよ?」

このホテルに来る前に決行された、「殺せんせー暗殺計画」の時以上のプレッシャーが2人に遅い被さる。

「…さあ、行きますよ？」

そんな2人の重圧を承知で、先を促す殺せんせーが言う。

…ホテルの様子を見る限り、敵は大人数で陣取っている気配は無い。

雇った殺し屋も、残るはせいぜい1人か2人程度！…だと。

「「「「「………！！」」」」」

目的地迄、あと僅か…

その言葉に、更に高まる緊張感を身体全体に宿らせ、生徒達は8Fに繋がる階段を上って行った。

## 命中（ヒット）の時間



「行くぜ！鳥間先生直伝!!」

そう叫びながら、響は左手に巻き付けた鞭を引っ張り、8F到達早々に襲って来た、蜷（カメレオン）と名乗る、鞭使いの殺し屋を自分の間合いに引き寄せ、

「廬山○龍覇!!」

バキイッ!

「どびびびびーっ!?!」

…と、『別に小宇宙（コスモ）を込めた訳でもない、只単に強烈過ぎる、生身のアッパーカット』を炸裂させた。

尚、一応は拳保護の意味で、対せんせーグローブは着用している。

「よっしー! 簧巻きだ、簧巻き!!」

そのアッパーにより失神K.Oとなった男を寺坂達が布テープで雁字搦め、身動きが取れない様にする。

そんな中、

「ちつくしよー、買ったばかりなのに…」

殺し屋との戦闘の途中で、床に脱ぎ捨てていたアロハとTシャツを拾いながら、ボヤク響。

島に到着早々、ホテルのショップに置いてあり、そのデザインを一目見て気に入り、即購入したアロハとTシャツ。

所々が敵の鞭によって、ズタズタに斬り裂かれているアロハとTシャツ。

「ちい…やっぱ、今からでも、黄泉比良坂に叩き墮としてやろうか…」

何気に とんでもない台詞を小声でブツブツと言いながら、orzった顔で渋々と、流石に何時迄も上半身真つパな訳にはいかないと、そのボロボロのシャツに響は袖を通す。

チツ：

その際に数名の女子が、普通の人間では聴き取れない程の、小さな舌打ちを洩らすのは、最早 日常。

「…いや、俺は今のアップーも、直接教えた覚えは無いのだが…鷹岡の時のアレを、視て盗んでいたのか？」

やはり吉良君の戦闘センスは、このクラスでもNo.1だな…。



…と、言うか、俺は別に、自分の持ち技に名前なんか付けていないのだが…？」

響が口走った「烏間先生直伝」の言葉に対して、そして「廬○昇龍覇」と云う銘について、真面目に考察する烏間。

まあ、「直伝」云々については、事実、烏間の動きを視て体得した。それであり、響が烏間を尊敬してる故の発言。

更に一応、技の名前の元ネタを説明するならば、とある御伽噺に登場する、「脱いだら強い露出狂」が得意とする技である。



「くっ…ガキがあ…」

烏間が本当に、ドーでも良い事を、真剣に考察している中、布テープでの簀巻き状態で身動きの取れない蜷（カメレオン）が、E組の面々を、響を睨み付ける。

そんな殺し屋に対し、アロハとTシャツの件で、未だ怒り収まらぬ響は

ニヨキ…：パサパサ…

「カルマあー、さっさきの わさび&からしって、まだある？」

「あるよ〜♪」

（）（）（）あ、悪魔だ！

コイツ等、本当に悪魔だ!!( )( )( )( ) ドン引くクラスメートの視線を余所に、無慈悲な  
 粛清を執行するのだった。



ホテル8Fは そのフロアが丸ごと、イベント用のコンサートホールになっていた。

9Fに続く階段を指し、最短ルートとしてホールを中央突破しようとした時、

「…誰か、このホールに やって来ます!!」

自分達が目指していたホール出口の方向から、何者かが近付いてくると言う殺せんせーの言葉に、烏間の指示によって、散り散りに座席の陰に隠れるE組の面々。

そして それから少し後、殺せんせーの言葉通り、ホールのステージ上に、1人の男  
 が姿を現した。



「…全部で17人か。」

呼吸も若い…殆どが10代半ば…」

「「「「…!!」」」」

髪の毛を まるで、海胆か剣山かの様に逆立て、ブランド品であろうサマースーツを  
 ノーネクタイで着崩し着こなしている男。

そのステージ上に立つ男が、息を殺して客席に潜む心算のE組の面々の人数や特徴を

言い当てた。

「はっはっは……こりや驚いた!!」

ウイルスに やられなかった、動けるヤツ全員で乗り込んで来たってか？」

ばあん!! ガシャン…

「……!?!」

そう言いながら男は、顔を、身体を前に向けた儘、自分の背後にあるスタンドライトの1つを、拳銃で撃ち抜く。

ホールに木霊する銃声。

殺せんせーや響達の弄りからの、半ギレ状態なイリーナによる、所謂ツツコミ的なソレなら今迄に数度、聞いた事はあった。

しかし、実質、初めて『生』で聴く事になる、本物の殺気混じりの銃声に、一部の生徒が顔を蒼くする。

「先、言つとくぞ〜?」

このホールは完全防音で、この銃はモノホンだ〜。

お前等全員、撃ち殺す迄、誰も助けに来ねえって事だ。」

クルクル…

「お前等、流石に人殺しの準備なんざ、出来てねーだろ?」

素直に「参った」して、ボスにゴメンナサイしろや!!」

ばん!!ガシャーン…!!

「…!?」

トリガーガードに指を入れて、クルクルと銃を回しながら降伏を薦める男の後ろ、先程、男が撃ち抜いたライトの隣に設置しているスタンド式のライトが、客席から放たれた銃弾によって、破壊された。

「……………!!」

「…外した!? 銃を狙ったのに…!!」

殺せんせーから渡された本物の拳銃。

その銃を撃った速水凜香が、またしてもミスに、無念の表情を浮かべる。

その様を見た、もう1人の（本物の）拳銃を手に持っている千葉龍之介は、この場での追撃はベターとせず、様子見に徹する事となる。

驚いたのはステージに立つ殺し屋である。

な? 実弾…だとお!?

しかも、今の発砲音は、ボスの手下の拳銃を奪ってるってか!!

用意してた作戦とは思えんぞ!

俺との遭遇を察知し、急遽、奪った銃での迎撃態勢を整えてたのか!!

.....。

…最初は超生物を殺る任務だった。

ロヴロの仲介で、政府からのオファーにOKする直前、同内容の仕事を政府以上の額での依頼があったから、そっちに着いた。

…な筈だったのが、何時の間にか、ガキンチョ共のお守りと来たもんだ。

味の悪い仕事になってきたと思っていたが、暗殺の訓練を受けた中学生…ねえ…  
くつくつく…良ーじゃないか…

「意外と美味しい仕事じゃねえかよ!!」

カチツ…

口を緩めた男がステージ上の全ての照明のスイッチを入れ、

カッ…

幾多の眩い照明が、ステージ上を照らす。

その光は生徒達が潜む客席側からすれば、逆光となりステージが見辛くなり、

「これじゃあ…」

「…きちんと狙えない!!」

座席の裏から銃を構え、機会を窺っていた千葉と速水が、静かに呟いた。  
ばあんっ!! ガインッ

「へ!？」

「「「「「!？」」」」」」

直後、速水の頭の真横を、男が撃った弾丸が通り過ぎた。

「うっそ、ウソよっ……嘘でしょ?」

ステージから、自分を狙い、20秒にも満たない座席の隙間を正確に射ち抜いてきたプロの技量に、何時ものツンツンとした顔を引き攣らせ、驚きと戸惑いの色を隠せない速水。

「あく、俺は、一度撃ってきた敵の位置は絶対に忘れねえ。

お前さん、もう 其処から一步も動かささないぜ?」

そんな速水に、客席に身を隠しているE組の面々に向け、殺し屋の男が話し出した。

「お前さん達が、さっきまで会った奴等は最初（ハナ）からの暗殺専門だがよ、この俺は元傭兵、軍人上がりだ。

この程度の多対一の戦闘なんざ、何度も経験（や）ってんだ。

その経験の中、敵の位置や大まかな情報を把握する術なんかは身に付けてる!

…今時、テメー等 中学生（アマチュア）に遅れを取ってたまるかよおっ!!」

「「「「.....」」」」

威嚇染みた大声で話す殺し屋。

「...で・だ、お前さん達、当然、もう一丁の銃も奪つてるんだよなあ？」

2丁の銃を、1人の子供が持つとは思えない...

ならば、もう1人の所持者を特定する為にもと、牽制の意味を込めて、尚更、全員を足止めさせようとする殺し屋だが、

「速水さんは、その儘待機！」

「！」

「な？」

ホールに殺せんせーの声が響いた。

「今、君迄撃たなかったのは賢明です、千葉君！」

君は まだ、敵に位置を知られていない！

先生が敵を見ながら指揮しますから...此処ぞと言う時まで待つんです!!」

「おいおい...何処から喋つて...」

.....

突然の殺せんせーの声に、キョロキョロと辺りを見渡し、声の出所を捜していた殺し屋だが、その所在を知った瞬間、固まってしまう。

ニヤニヤ…

何しろ自分の真正面、客席最前列ど真ん中に、ニヤニヤとドヤ顔を浮かべる、緑と橙の縞模様の球体が、其処に在ったのだから。

「…な、何、かぶりつきで見てやがんだ、テメー!!」

ばんばんばんばん!!

余りにも大胆不敵過ぎる殺せんせーに、怒りと驚きの顔で、思わず手にしている拳銃の残りの弾丸を撃ち放つが、その全てをキインと、金属がぶつかり合う様な甲高い音を立て弾かれてしまう。

「ヌルフッフ…無敵無駄無駄無駄あつ!!」

これこそが、完全無敵形態の本領発揮と言うヤツです。

今の私は、ロンズデーライトよりも硬いですよお?」

したり顔の殺せんせー。

…その座席の裏には、この殺ボールを座席に置いた烏間が、凄く複雑な表情を浮かべていた。

「本職（プロ）のあなたに、貴方が言う所のアマチュアが挑むんですから、この位の視覚ハンデ位、くれても良いんじゃないですか?…ガストロさん?」

「何だ、俺の事、知ってたのかよ…?!」



ガストロ口：

自分の名前を呼ばれた殺し屋：ガストロ口が殺せんせーに問う。

「ロヴロさんから聴いていた、連絡不通になった、本来ならこの沖繩に同行していたかも知れない3人の殺し屋さんの名前は聴いていましたから。

既にグリップさんとスモッグさんが、敵として現れたのだから、最後の1人、ガストロさんも同様にして現れる：

貴方が その殺し屋と想定するのは、当然でしょう？」

「ふう…成る程ね。」

殺せんせーの解説に、思わず納得の顔なガストロ口。

「私としては、さっきの蜷（カメレオン）さんが、最後の1人だったら良かったんですけどねえ…」

「あんな3流（ザコ）と俺を、間違えてんじやねえ!!」

どうやら先程、響が倒した蜷（カメレオン）と云う殺し屋は、ガストロ口からすれば、大した腕前ではないらしく、自分と間違われた事に、本当に嫌な顔をして怒鳴り散らした。

カチャ…

「…でだ、超生物、その状態（ナリ）で、どーやって指揮を執る心算なんだ？あ!？」

回転式（リボルバー）の弾倉に、新たに銃弾を込めながら、新たに問い質すガストロ。  
「ヌルフフフフフ…」

では、木村君、5列左へダツシユ!!」

シユツ…

「!？」

殺せんせーの指示に、木村が素早く動く。

「寺坂君は左、吉田君は右に、それぞれ3列！」

ババツ

続いて寺坂と吉田が動く。

「なっ…？」

まさかの揺さぶりに、戸惑いの顔を見せるガストロ。

殺せんせーの指示は、尚も続く。

「死角が出来た！」

この隙に茅野さんは2列前進!!」

「カルマ君と不破さん、同時に右8！」

「磯貝君、左に5!!」

ダツ… ヒユツ… バツ… シユツ…

その指示に沿って移動を繰り返すE組の面々。

「シャツフルだとお!？」

ややこしい真似しやがって!」

生徒達の動きに合わせて、首を左右に振るガストロ。

その顔は、明らかに揺さぶりを嫌がっている。

…だが、分かってないな。

指示すればする毎に、ガキ共の名前と位置を、俺に知らせる事に なるんだぜ、超生物?」

たった10数人程度、あつと言う間に覚えちまうぜ!!

しかしながら、幾多の修羅場を体験したプロの殺し屋は、直ぐに冷静さを取り戻す。

事実、既に動く様に指揮を出した生徒の名前と位置は、完全に頭にインプットされていた。

しかし、

「出席番号14番! 右に1つ動いて準備しつつ、その場で待機!」

「え?」

「4番と23番はイスの間から、標的（ターゲット）を撮影！」

「律さんを通し、ステージの様子を千葉君と速水さんに伝達！」

「殺せんせーが、名前以外の本人、或いはE組の生徒でしか、事前に調べてない限りは分からない呼び方で、指示を飛ばす方向にシフトチェンジ。」

「完全に面食らってしまうガストロ。」

「ポニーテールは左前列へ前進!!」

「バイク屋さん、左前に2列前進！」

「学級委員の2人、各自1列前進の後、左に4列！」

「バンダナ少年、右斜め前に1列移動！」

「な……な……待てよ、おい……?!」

折角 生徒の名前と位置は覚えたと云うのに、それを活かさない殺せんせーの指示の前に、ガストロは再び冷静さを欠き、少しばかりテンパってしまう。

「期末試験ラストの日、竹林君イチオシのメイド喫茶に興味本位で同行してみたら、想像以上に良くて、一緒に行つてた寺坂君共々、ちよつとハマりそうで怖かった人！」

「3歩進んで2歩下がる!!」

「な、何で知つてんだ、テメー!!」

「このタコ！然り気に俺まで一緒に曝露つてんじゃねー!!」

「てゆーか1列前進で良いだろ!!」

顔を真っ赤にした2人の怒声が響くが、これは序章に過ぎなかった。

「本校舎2年の女生徒にラブレターを貰って困った顔をしてた女子!

1列前列の後、右に2列!!」

「な…!?!」

「近所のオバチャンに何時も小動物扱いされている人!2列前進!」

「うう…」

あの恥ずかしい動画の異種返しの心算か次々と、何故か知ってる生徒達のプライベートの曝露を、指示に盛り込みだしたのだった。

「某県の彼女さんと、齒の浮くような甘いトークを毎晩の様に展開している人、2列前進の後に右に4列!」

「放つとけ!!」

「倉橋さんと猫カフェに行つて、子猫に頬ずり、思いつきり顔がデレた普段はツンデレな人!!…は、その場で待機!」

「…待機なら、わざわざ言わなくても良いじゃないの!?!」

「街中で、小学生と間違えられて、補導されそうになった人!」

2列前進の後、左に5列！」

「うがーっ!!」

「期末テスト、自信満々だったけど、結果散々、涙目で凹んでいた人は3列前進！」

「ちよ…それ、今 言うの？殺すよ？」

「終業式の日、駅前のマ〇ドで、巨乳な店員さんに鼻の下を伸ばしていた3人！

攪乱の為に大きな音を立てて！」

「や、止めろーっ!!」

「…後で、殺す!!」

ガンガンガンガン…

多少の…生徒達からすれば とんでもない、おふぎけを混ぜながらも、適確な指示を出す殺せんせー。

…尚、響と寺坂に対しての弄りが、他の生徒に比べて、比較的多かったのは、偶然である(?)。

「う…うおお…?!」

その指示の前、殺せんせーの思惑通り、ガストロは既に、誰が何処に移動しているのか、何処に誰が居るのか、全く分からなくなってきた。



未だに、殺せんせー暗殺のミスを引き摺っている2人の緊張とプレッシャーは、既に天元突破していた。

「…と、その前に、表情を表に出さない仕事人な2人に、アドバイスを。」

「?。」

そんな2人の心境を当然な如く察してか、殺せんせーは話し始める。

「君達2人は今、此の上無く緊張していますね?」

先生への狙撃を外した事で、自分達の腕を疑問視している。」

「……。」

「…普段から弱音や言い訳を口にしない君達は、「アイツなら大丈夫」「アイツなら何とかしてくれる」と、勝手な信用信頼を押し付けられる事も有ったでしょう。」

「……………」

「…思えば今回の先生暗殺計画、そして今の先生の指示による、トドメ役の抜擢も、そうなのでしょうね。」

「「「「「「「「」」」」」」」」

この時、この殺せんせーの言葉が、他の生徒達の心にも重くのし掛かる。

確かに、クラスのNo. 1、2の銃の遣い手だと云う事で、無意識の内、2人に過剰な期待を込めていた感は否めない。





あの席…出席番号14番だったか…

アイツだけ、準備待機とやらから1人だけ全然動いてねえ…

そのクセ、呼吸は…何を企んでやがる？

やたら荒いぜ？

…当然、他の場所も警戒はするが、あの近辺だつきや、出た瞬間に仕留められる様、狙いを付けておく!!

そう考え、ガストロは狙撃手・千葉と思われる人物が潜んでいる席に、特にマークを強める。

「では、行きますよ…!」

「千葉さん、分析の結果、狙うのは『あのポイント』です。」

「OK、律!」

律の指示に、千葉の前髪に隠れた目が鋭く光った時、

「出席番号14番!立って狙撃!!」

殺せんせーの号令の下、客席から1つの銃をステージに向けて構えた人影が現れた。

「ビーン!」

ばん!

その瞬間、コンサートホール鳴り響いた銃声。

予感的中!!……と笑みを浮かべたガストロが放った弾丸が、寸分の狂いもなく、事前にマークしていた席から現れた人影の頭部、眉間の部分を撃ち抜いた。

……が、

「に、人形う!?!」

ガストロが『千葉』と置いていた其れは、7Fで倒した見張りの男の服やカーテン、対せんせーエアガン等で作られた人形だった。

「ふう〜、音立てずに作るのって、大変だったぜ!」

人形の影で、『出席番号14番』菅谷創介が小さく呟く。

B A N G !

「な……!?!」

直後、菅谷とは左右逆サイドに忍んでいた千葉が、座席を盾に見立て、ステージに向けて発砲。

完全に虚を突かれ、一瞬、動揺の顔を見せるガストロだったが、

「ひゃは……当たってねーし……」

自分の身が無事なのを認識して、

「残念だったな!

これで2人目も居場所が…」

ガツゴオンツ  
!!!!

「うげえっ!？」

千葉に銃口を向けたと同時に、ステージ天井に吊られていた照明のフレームが、勢い良く降りてきて、ガストロの背中を打ち付ける。

「…照明の吊り金具を狙った…だと?」

ガストロの目に写ったのは、千葉が狙ったと思われる、ステージの天井、照明を吊すワイヤーを抑える金具が撃ち抜かれ、破壊された痕。

2本のワイヤーによって天井下、ステージ上空で支えられていた照明は、その内一本の抑えが失う事により宙ぶらりん。

その自重に耐えきれず、振り子の様に勢い良くステージに降下、その軌道上に居たガストロに直撃したのだった。

それは、その結果を導いた律の計算、そして確実に指示されたポイントを狙い通りに命中（ヒット）させた、千葉の勝利だった。

「が…キい…」

推定200キロオーバーの照明の直撃を、背中から後頭部に受け、意識が飛びそうなガストロ。

それでも最後の抵抗とばかりに、銃口を千葉に向ける。

BANG!!

「!?」

しかし、その銃は、また別方向から跳んで来た、銃弾によつて弾かれる。

「ふう〜つ…やつと、当たったあ…」

そう言っているのは、硝煙が上る銃を構え、安堵の溜め息を零す速水。

バタ…

この後、撃つ手を失い、目を虚ろにしたガストロが床に崩れ落ちるのに、時間は掛からなかった。

ダダツ…

「よっしゃ!!」

「ソッコー簀巻きだぜ!!」

直後、業務用布テープを手にした寺坂達がステージに駆け上り、ガストロを拘束。

「千葉、ナイスだったぞ!」

「ああ…サンキュ!」

磯貝が千葉を労えば、

「凜香あ〜つ!!凜香凜香凜香あ〜!!」

「ちよ…不破っ!」

速水は大泣きの不破に、思いつきり抱きつかれる。

「全く…肝を冷やしたぞ…。」

よくも まあ、こんな危険な戦いをやらせたもんだな?」

1つの戦いが終わった後の、安心の笑顔を見せる生徒達を見て、烏間が殺せんせーに話し掛ける。

「ヌルフフフフ…烏間先生、どんな人間にも、殻を破り、大きく成長する機会が何度かあります。」

「……………」

殺せんせーは言う。

しかし、1人だけでは決して、そのチャンスを活かし切れない。

集中力を引き出す強敵、経験に分かつ事の出来る仲間にも恵まれなければ…と。

「だからこそ私は…それを用意出来る教師でありたい。」

生徒の成長の瞬間を見逃さず、高い壁を、良い仲間を…その時に直ぐ、揃えてあげたいのです。」

「はあ…何て教育だ…。」

呆れながらも、生徒達の顔を見て納得してしまう烏間。

特に：互いの勝利を呼んだ健闘を讃え合うかの様に、本物の銃を手にした儘、曲げた腕をガシツと重ねる千葉龍之介と速水凜香の顔を見て。

「やったな！」

「…うん!!」

命懸けの撃ち合いをしたばかりだにも係わらず、2人のはにかみながらの笑顔は、戦う前よりも、むしろ中学生だった。

## 黒幕の時間

9 F.

きゅっ？

「おおっう…大分、体が動く様になってきたな…」

…そう言いながら、廊下に立っている見張りに背後から近付き、チョークスリーパーを極め、瞬殺してる（殺ってません）のは烏間である。

はわわわ…（L。O。L）…

いや、顔怖い顔怖い顔怖いから!!

額に血管を浮かべ、自分の不甲斐無さに自分自身が許せないような顔で呟く烏間に、生徒達は声には出さないが、揃って心で突っ込むと同時に、「良かった！この人が味方で、本当に良かった!!」と、暫定最強人類に恐怖に顔を蒼く引き攣つらせながら、心底思う。

しかし烏間は、



「漸く50パーと云った処か…」

(((人外!烏間先生、マジ人外!!)))

平然と言つてのけ、更に生徒達を驚愕させる。

「吉良つちく、今の烏間先生だったら、吉良つちなら勝てるんじゃないの?♪」

烏間の50パー発言を聞き、何気なく響に話を振ってみるカルマ。

それに対して響は、

「応、既に頭ん中でイメージバトルやってみただけだな…」

「「ほう?…で、結果は?」」

「地面に大の字な俺の首筋に、凄く怖(よ)い笑みを浮かべてる あの人が、自分の左膝に右足を置いて、更に その上に右肘を押し当てた状態での、左脛が喰い込んでいたよ

…」

「「「「「……………」」」」」

…と、複雑な表情で切り返すのだった。

「吉良つち…聞いた俺が、悪かったよ…」

「…てか、50パーで既に、俺達の倍以上強えし…」

「1500万パワーくらい ありそうね!」

「不破さん?」



姿を確認した生徒達や烏間が、口々に呟く。

「皆さん、宜しいですか？」

「殺せんせー？」

「あのボスについて、少しだけ、分かってきた事があります。」

「！！！！？」

皆が、渚の手に持たれた、殺せんせーに注目する。

「黒幕の人物…彼は、殺し屋ではない。」

殺し屋の、正しい使い方を分かっていません。」

「おいタコ、殺し屋に『正しい』使い方と違って、あるのかよ？」

正論？で突っ込んだのは寺坂である。

「…元々、彼等は「無視かよっ!？」

そんな寺坂をスルーして、殺せんせーは話し続けた。

「…コホン、元々 彼等は先生を殺す為に雇われた殺し屋だったのでしようが、先生がこんな姿になり、警戒の必要が薄れたので、見張りや防衛の役に回したのでしよう。」

「私達からすれば、1人1人出会したのはラッキーだった訳ね。」

「その通りです、岡野さん。」

…しかし、それは殺し屋本来の仕事ではありません。  
彼等の能力は、フルに発揮すれば恐るべき物です。」

「確かに、さっきの銃撃戦も、戦術で勝った様なもんだ。」

「…ん、ん。」

「ああ、アイツ…狙った的は、1発足りとも外さなかったぜ…。」

殺せんせーの言葉に、千葉、速水、菅谷が同意した。

「カルマ君と戦った相手も然りです。」

敵が廊下で見張るのでなく、例えば日常、学校の帰り道で背後から忍び寄られたら…あの握力に瞬殺されているでしょう。」

「…でつすよね〜♪」

口調は何時もの如く、おどけているが、顔はその場面を頭に浮かべたのか、慎重な面持ちになるカルマ。

「…最初の毒ガス使いも、不破の一言が無かったら、寺坂と吉田は死んでいた。」

「いや、殺すなよ!?!」

続くイトナの一言に、勝手に殺された2人が突っ込む。

…確かに、あの時にスモッグが使用したガスは、麻痺と気絶を目的とした物であり、殺傷効果は薄いのだが。

「あの、鞭使いの人も……？」

「いや渚、ありや雑魚だ。」

「吉良君？」

「拳銃やガス銃、素手にナイフなら兎も角、あんな持ち運び的にも目立つ得物、隠密活動なんかも難そうだし、ライフルみたいに遠距離からの攻撃なんか出来る訳でなし、使える場面なんて限られてるんじゃないの？」

大体、鞭なんか使おう殺し屋って、マジに居たのが驚きだぜ。マンガかよ!？」  
更には自分が斃した相手を、散々にこき下ろし、斬り捨てる響。

「吉良つちく？まだ、アロハ　ズタズタにされたの、根に持つてるのく？」  
「当ったり前だ!!」

「皆、時間が無いから、お喋りは　そこまでだ。」

ヤツは我々が、エレベーターで来ると思っていた筈だ。

だが、交渉期限までに動きが無ければ、流石に警戒を強めてくるだろう。  
個々に役割を指示する。

先ずは磯貝君……」

「はい……」

鳥間は、各個人に　この先、何をすべきかを話し出した。



最上階へ上がる階段を、静かに、且つスピーディーに進むE組チーム。

鳥間は当初、最上階へはカードキーが必要な為、窓からの侵入を考えていた。

しかし、先程倒した見張りの男から、そのカードキーを入手。

これは、首謀者の人物が、階段ルートの侵入者を、大して警戒していなかった証拠だった。



最上階の部屋の前、カードキーをドアに設置されているセキュリティに通して解錠し、遂にラストフロアとでも呼ぶべき室内に侵入するE組の面々。

その部屋は広さはあるが、遮蔽物が多く、今のこの生徒達なら、最大限に気配を消せば、かなり近くまで忍び寄る事も可能。

鳥間のハンドサインに頷き、生徒達は動き始めた。

それは『ナンバ』と呼ばれる歩法。

左右の手と足を一緒に前に出す事で、胴を捻ったり軸がぶれる無駄を無くす事で、衣擦れや靴の音を抑えられる歩法であった。

「ヌルフフフ…どおりで最近、背後から忍び寄るのが上手くなってきた訳です。」

鳥間の指導もあってだろうが、嘗ては忍者も使っていたと云われる歩法を習得した生



さあ、焦ったマヌケ顔を見せて貰うぜ!!

苦しんでる皆の前で謝らせてやるんだ!!

必ず  
!!!!

「痒い……」  
それぞれが思う中、首謀者に近付き、正に今、取り押さえようとした。その時、

不意の首謀者の眩きに、スタンガンを手にしていた寺坂が、徒手の構えを取っていた片岡が、殺ボールを鈍器にしようとしていた響が……皆の動きが止まった。

拳銃を身構えていた烏間も然りである。

ボリボリ……

「思い出すと、痒くなるんだ……。」





「鷹岡あつ!!」

首謀者の名前を呼んだ。

カタ：

すると首謀者の男は ゆっくりと椅子を回転させ、振り返る。

その男は、確かに以前、E組に体育教諭としてやって来た、防衛省の鷹岡明だった。

「悪い子達だ。

恩師に会いに来るのに裏口からとはな：

父ちゃん、そんな風に教えた覚えは無いぞ？」

顔中には、恐らくは自らが付けたのであるう、無数の引つ掻き傷。

完全に正気を失ったかの様な、殺意に満ちた眼。

「仕方無い。今から、補習の時間だ。」

その狂気に満ち溢れた顔で、鷹岡は そう言い放つのだった。

「とりあえず、屋上へ行くか：

歓迎の用意がしてあるんだ。」

椅子から立つと、起爆リモコンの1つを拾い、

「拒否権は無いぞオ？」

何しろ お前等のクラスは今…

俺の慈悲で生かされてるんだからなあ？」

「「「「「………!!」」」」」

ボタンを押す仕草を見せながら、歪んだ嗤い顔で話す鷹岡に、一同は従う他になかった。

## 暴走の時間

「気でも違つか、鷹岡！」

防衛省から金を盗み出し、我々が起用する予定だった殺し屋を奪う様に雇い、更には生徒達をウイルスで脅す、この凶行…!!」

「おいおいおい？俺は至極、まともだぜ！」

これは、地球が救える計画なんだぜえ…」

「…？」

ホテル屋上にある、ヘリポートに上った鷹岡と烏間率いるE組チーム。

やや怒気を含んだ烏間の問い掛けに、鷹岡は涼やかに応える。

「計画じゃな、茅野…だったか？」

その小さい女…

そいつを使う予定だった。」

「え…？」「茅野を？」

「ああ、そうさ…」

下の部屋、バスルームの浴槽にはな、対せんせー弾を たつぷり入れてあるんだ。

それに、その賞金首と一緒に入って貰い…

その上から、セメントで生き埋めだ!!

対せんせー弾に触れずに元に戻るなら、辺りを爆裂しなきやあいけない。

…そう、茅野(ガキ)ごとな!!

生徒思いの優しい優しい殺せんせーなら…そんな酷い真似はしないだろ？

大人しく溶けてくれると思った訳よ!」

(((((あ…悪魔…))))))

その狂った発想に生徒達は、ある者は吐き気を催し、ある者は鳥肌を起てる。

「元氣な奴等、全員で乗り込んで来たと分かった時は、確かに一瞬焦ったが、やる事は大きく変わらん。

お前等を何人 生かすかは…」

鷹岡は、自分の後方に置いた、ウィルスのワクチンを入れてあるスーツケースに取り付けてある爆弾を指差し、更には その起爆スイッチのリモコンを見せつけ、

「俺の…機嫌次第だからなあ…!」

再び歪ん嗤い顔を見せる。

「……………」

許されると思うのか? そんな真似が!?!」

「殺せ……んせー?!」

渚が手にしている透明の球体、その中心部の”黒い”物体が低い声を発した。  
「…黙れ、モンスター。」

これでも人道的な方さ。

お前等が俺にした…非・人道的な仕打ちに比べたらなあっ!!」

「「「「「はあ!?!」」」」」

鷹岡の言葉に、全くの心当たりが無い、生徒達の声が重なった。

ボリボリボリボリ!

「貴様等の 御陰で、俺の上からの評価はダダ下がりだ。」

省内からの屈辱の目線、卑怯な手段で突きつけられたナイフ!

それを思い出す度、頭ん中が痒くなって、夜も眠れないんだよオ!!」

そう言つて、己の傷だらけの顔を、派手に引つ掻く鷹岡。

瘡蓋が剥がれ、そこから また、血が滲み出る。

「ハア、ハア…落とした評価は、結果で返す。」

受けた屈辱は、其れ以上の屈辱で返す。」

一頻り、顔を掻き回し、漸く落ち着いた鷹岡が言葉を続けた。

「特に潮田渚あ! 吉良響い!!」

俺の未来を汚した お前等2人だけは、絶対に赦さん!!」

「…!!」

名指しされた2人が、緊張させている顔を、更に引き締める。

「成る程ね、背の低い生徒を指定してたのは、渚がターゲットだったからか…  
完璧な逆恨みじゃね?」

「吉良…君…?」

そして一歩、前に進み出る響。

「そもそも（ぼんぼん…）この体格差で勝って、本気に嬉しいってか?

先ずは、俺を指名するのが普通でね?」

「う…頭、叩かないでくれる…?」

「あ、悪いwww」

そう言いながら響は、鷹岡の前で戦闘姿勢（ファイティングポーズ）を見せた。

「…チツ、てゆるか吉良あ?」

何でテメー、此の場に居んだ?

スモッグにテメーだけは、確実にウィルス盛つとけって言っておいたんだが…

あのヤロー、誰かと間違えやがったか?」

「……………!!」

(…成る程ね、計画の質から、渚と茅野ちゃんは意図的に外した以外は、完全に無差別ランダムと想っていたけど、俺は俺で、指定ターゲットだった訳だ。

ん?あの時 一緒にテーブルに居た岡島と前原って、もしかして、俺の巻き添え?

2人共、何かゴメン。

…んで、やっぱり一緒だった磯貝は…日頃の行いかよ!?この、イケメンヤロー!!)

「さあ…ね? 偶々、俺の体ん中には、天然の抗体が有ったんじゃないかね?」

まさか、体内のウイルスを聖闘士の技で焼き尽くしたとは言えず、おどけた顔で誤魔化す響。

「…てゆーか それってさあ、渚君は兎も角、吉良つちにはガチで勝てない…って言うてんのと同意じゃなくい?」

これにカルマが言葉が続ける。

「クツクク…吉良(コイツ)の場合はな、単にボコボコにするより、自分自身は何も出来ない中で、仲間が傷付く…自分の無力さを味わわせる展開の方が、応える…そう思っただけだ。」



カルマの挑発とも受け取れる発言にも乗る事無く、自身の考え方を話す鷹岡。

「う、ん…確かに、俺的には、そっちのが地味にダメージ有るかも…」

その言葉に響は苦笑しながら呟き、

「…でも俺は今、此の場に居る。」

だから…さあ、来いよ。

別にマジバトルになったとしても、俺には勝てるんだろ？

それとも やっぱ怖いのか？寺坂2号？」

改めて構える。

「何なんだ、それわっ!?吉良テメー、何、全方位に攻撃してやがるんだ?!」

そして その台詞に1号が突っ込んだ。

「(ボソ…) 吉良君、君も、余りヤツを挑発するな。」

機嫌を損ねたりして、怒りに任せてあのボタンを押されでもしたら、取り返しが付かなくなるぞ…!」

そして烏間も響の隣に移動し、耳元で挑発は控える様に注意するが、

「まだ、大丈夫ですよ、烏間先生。」

この状況、あれは云わば、アイツの切り札です。

感情の儘にボタン押した瞬間、こつちが黙る必要が無くなる位、分かっている筈。それに…」

「?」

響も何か含みを残しながらも、自分なりに分析した考えを伝える。

「ふん…まあ、良い。」

チビの前に、吉良あ、望み通り、お前をポコポコにしてやるよ…!

おら!ヘリポートに上がれ!

1vs1で勝負だ!!」

「…へいへい。」

ワクチンが入っているであろう、爆弾の付いたスーツケースを手にした鷹岡に続き、ズボンのポケットに両手を入れた響がタラップを登り、ヘリポートに立つ。

直後 鷹岡は、そのタラップを屋上床とヘリポートの間に有った『溝』に放り棄てる。

「これで誰も、上には登って来れねえ…」

受けた屈辱…倍返しにしてやる。

さつきも言ったが、俺の輝かしい未来を汚した落とし前、付けさせて貰う!!

…が、俺は心優しいからなあ、今なら土下座で勘弁してやらん事も無いぞ?」

「んな未来、最初から お前にゃ無ーよ。」

あの時に汚れたのは、お前の下半身だろ？

違うか？この、失禁男（笑）。」

「はあ!!？」

「な?」「へ?」「え?」「ま?？」

「「「「.....。」「」」」

どわあ〜っはっはっはははは!!

「き、き、き...貴っ様〜っ!!？」

明らかに嘘と判る鷹岡の言葉に、更なる悪態で返す響。

そして響の この台詞に、絶対に笑ってはいけない空気の中、鳥間以外、全員アウトとなる。

余程 壺だったのか、速水でさえ、目に涙を浮かべ、プークスクスになっっている。

笑えないのは顔を真っ赤にして、肩を震わせている鷹岡。

「本当に俺を怒らせたな！」

もう、後が どうなっても知るか！

とりあえず、ウィルスで苦しんでいる奴等だけは、ぶっ殺してやるよ！

テメー等の軽はずみな態度、死ぬ程 後悔しやがれ!!」

「！！」

禁忌に触れられ、完全にキレた鷹岡が、起爆リモコンを取り出した。

「止せ、鷹岡、早まるな！」

これを烏間が止める様に呼び掛けるが、

「ぎゃははは！ 怨むなら、テメーの口を怨むんだな！」

しかし鷹岡は、それを無視、

カチ…

ついに、起爆スイッチを押した。

「！！」

しかし、ケースは爆発する事無く、辺り一帯を静寂が包んだ。  
「な…？」

驚きの表情を浮かべているのは鷹岡。

「ば、馬鹿な！！」

カチ カチ カチ…

何度となく鷹岡はスイッチを押すが、一向に爆弾は作動しない。

「どうした？」

もしかして、火薬が湿気っていたか？

それとも そのリモコン、電池を入れ忘れたとかな、イージーなミスでも やらかしてんじゃね？」

「何だと?!」

響の言葉に、鷹岡は「そんな馬鹿な…」と思いながらもリモコンの裏側の蓋を開けてみると、確かに電池は入っていない。

「そんな…バカな…」

その、まさかの表情を浮かべる鷹岡を見て響は、「何故かズボンのポケットに入っている沢山のボタン電池」を弄りながら、笑みを浮かべ、そして次の瞬間…

ドガアッ!

「うぎぎっ!?!」

「さてと…この先は、俺のターンだ。

ハシゴはテメー自らが棄てているからな、誰も 此の場の上つて来れないぞ? (笑)」  
ハイキックを鷹岡の側頭部へと、ヒットさせたのだった。

「おらあつ!!」

バキィッ!

「ギャン!?!」

響のターンは まだ終わらない。

「テメー、皆に あれだけの目に遭わせておいて、簡単に死ねると思うなよ?」

倒れている鷹岡を無理矢理に起こすと、

「これは、前原の分!」

ズシッ!

「ぶっ…」

強烈な左のリバブローを撃ち込むと、

「そして これは、岡島の分!」

ドゴッ!…

「う(っ)い…」

続いて左の正拳を顔面に炸裂させる。

ボタボタと血を流す鼻を抑える鷹岡。

「神崎さんの分!」

「中村ちゃんの分!」

「櫻瀬さんの分！」

「倉橋ちゃんの方！」

「杉野の方！」

更には次々と、ウィルスで倒れているクラスメート達の名前を挙げながら、拳を、蹴りを繰り返して行く。

「三村の方！」

「原さんの分！」

「狭間さんの分！」

「村松の方！」

途中でダウンしても、無理矢理に引き起こし、決して攻撃の手を緩める事は無い。

「怒り…怒りが、吉良君の内側に眠っていた力を、呼び覚ましたみたいね…」

「不破さん？」

「こおおおおおおおお…」

更に響は、空手流の息吹で精神集中、力を溜める様な仕種を見せると、

（ラストは当然、この俺の方!!）

迸れ！俺の小宇宙（コスモ）!!）

心の中で叫び、

「逝って来い！黄泉比良坂!!」

DOGGOOOOOOOH!!

既に意識が半分飛び、フラフラな状態で立っているだけの無防備な状態の鷹岡に対し、オーバーキル過ぎるアツパーカットを炸裂させる。

グシャア!

吹き飛ばされ、ダウンする鷹岡。

「「「おおっ!!」」」

「「「吉っ良あつ!」」」

「「「吉良君!!」」」

「吉良っち〜!」

「吉良っちさん!!」

その派手な一撃に、クラスメート達は感嘆の声を上げ、響を賞賛。

「へっ……!」

ビシイッ!

響は そんな彼等に、照れくさそうにサムズアップで応えるのだった。



## 大人の時間

「なあ、俺って、どうやって降りたら良い訳？」

鷹岡を完全に下した響が、ヘリポートの上から、皆に呼び掛ける。

ヘリポート昇降の為の梯子階段は、鷹岡が戦闘前にヘリポート下部、拾いような無い、手の届かない位置に放り棄てている。

『普通』に考えたら、降りような無い状況だ。

「ぴょんって、飛び降りたら〜？♪」

「吉良君なら、簡単でしょ〜？」

「出来るかつ!!」

…勿論、実は響からすれば、普通に出来たりはするが、そんな常識外れな身体能力を披露する訳にはいかない。

因みに、ここで言う常識とは、E組の面々が今迄に目の当たりにした、烏間や、その他の殺し屋の身体能力が、基準である。

結局は、ロープを使い、タラップを引き上げる事に。

「おら、引つ張るぞ。」



「いやだなあ？人の顔を見て、そんなに怖がったりしないで下さいよお？

タ・カ・オ・カ・セ・ン・セ・イ・？」

優しく爽やかに微笑みかけるが、

「うわああ!?く、来るなあっ!!」

ズサササ…

腰が抜けて立ち上がれないのか、鷹岡は仰向けから上体を起こしただけの形で、目の前の少年から、逃げる様に後退り。

一応トドメ、刺しとくか…

そんな鷹岡を見て、頭の中で呟いた響は、何時かの時の様に、本物の殺気を全開放しながら、ヘリポート隅迄追い詰める。

そして、完全に戦意を失っている男に顔を近づけると、先程迄の にこやかな表情を一瞬に修羅の如く一変させて睨み付け、

「仮に、此の場に立ったのが俺でなく渚だったとしても、お前じゃ勝てなかつたよ…

それから…次は…リアルに…殺す!!」

「~~~~~!!?」





「俺も充分、回復した。」

この生徒達も、充分に強い。

互いに無駄な被害が出る様な事は、止めにしたいか？」

「ん、良、よ、お、お、♪」

「…?!」

自身の提案に、あつさりとした承する殺し屋に、逆に警戒をする鳥間だが、

「俺達の契約には『ボスの敵討ち』は含まれてないぬ…で候。」

「…そうか。」

グリップの言葉を聞き、納得な顔をして肩の力を抜く。

「それと、お前達の お友達に盛った薬だな…」

「[[!!]]」

スモッグが言うには…

鷹岡は最初から、取引に応じる事無く、生徒達の前で、ワクチンを爆破させる心算だった。

しかも、設定した交渉期限は60分。

ならば、わざわざ『殺す』ウイルスじゃなくとも、取引は出来る…

密かに自分達3人だけで話し合い、E組メンバーが沖縄入りした時には既に、この様

な結論に達していた。

宿泊先で倒れている生徒達が侵されているウイルスは、実は鷹岡指定の殺人ウイルスではなく、改良した食中毒菌で、あと数時間は猛威を振るうが、その後は急速に活性を失い、無毒化する…と。

「くつくつ…お前達に薬は必要無いってな、そーゆー意味さ。

俺は多種多様な毒を持っているからな。

今回も、お前達が命の危険を感じるにや、充分過ぎただろ？」

「うん…でも、それって…」

「あん？」

してやったりな、ドヤ顔のスモッグに、問い掛けたのは岡野。

「私達からすればラッキーな事だけど、鷹岡（アイツ）の命令に、背いた事にならない？」

一応は お金、貰ってるのに、そんな事しても良いの？」

「…だな。

その辺り、プロとして、どーよ？」

「あーほー。

プロが何でも、金で動くと思っていたら、大間違いだ。」

「あ…」「ほう…？」

その岡野と響の質問に対して、口を開いたのはガストロ口だった。

「当然、依頼人の意に沿うように、最善は尽くすが、今回は さつきも言った通り、ボスはハナから お前達との約束を守る心算は無く、皆殺しな予定だった。

例えば、素人の域を抜けているにしても、所詮はカタギなガキを、大量殺害した実行犯となるか、それとも命令違反がバレる事で、プロとしての評価を落とすか…

どちらが俺等の今後にリスクが高いか、冷静に秤に掛けただけさね。」

「……………」

この言葉に、少し思う所が有りながらも、生徒達は一応の納得をする。

「ま、そんな訳だ。

残念ながら、お前達、誰も死なねえよ。」

ポイツ：

そう言いながら、スモッグは、何やら錠剤の入ったガラスの小瓶を響に投げ渡す。

「これは…」

「俺様特性の栄養剤だよ。

あつちのホテルに戻ったら、寝込んでる連中に飲ませて、ゆっくり休ませてやりな。

明日の朝には、倒れる前より元気になる事、請け合いだぜ？」







それに、スモッグにグリップにガストロ？

アンタ達、あの連中相手に よく、全員生きていられたモンだわ？」

「やっぱり殺し屋の世界じゃ、有名なの？」

あの3人？」

「そりゃあ、もう…って、その3人、さっきから何やってんの？」

ヒビキも一緒にいたいけど…？」

「あゝ、あれは…」

「秘薬欲しいな〜？秘薬欲しいな〜？」

誰か恵んでくれたら、凄く嬉しいな〜？」

「断る。」

「やなこった。」

「やらぬ…で候。」

「あゝーっ!!?殺られたー!ーっ!!」

…どうやら、モン○ンプレイ中の様だ。

「ねゝ、おじさんぬう？」

「ぬ？」

その、モン○ンプレイ中のグリップ達に、カルマ、千葉、速水が話し掛ける。

「あの屋上の時、俺達は てつきり、リベンジを仕掛けてくるかと思っただけど…」

「…私達の事、殺したい程恨んでるんじゃないの？」

「くつくつく…」

「「??」」

速水達の問いに、3人の殺し屋は、揃って笑みを零した。

「殺したいのは やまやまだが、俺は生憎、私怨で人を殺した事は無いぬ…で候。」

「同じく…だな。」

「そーゆーのはな、3流が する事なんだぜ、お嬢ちゃん。」

「ぶぶぶ…お、お嬢ちゃん…wwww」

ジャキ…

「吉良…つち…?」

「すいません、何でも無いです…。」

片や壺、片や禁忌だったか、銃口を向ける速水に、響はホールドアップ。

「ふっ…だから俺達は、誰かが お前達を殺る依頼が来る日を待つておくさ…。」

「せいぜい、狙われる位の大物に なるぬ…で候。」

「ま、そーゆーこつた、ガキ共。」



「応よ！本当に あの薬が効いたのか、全く平気だぜ！」

「寧ろ、岡野の蹴りののが、まだダメージ残ってる位だぜ!!」

「もう、暗殺も終わってるし、今日は朝から晩まで…それこそ倒れる迄、遊んでやるんだい!!」

「水着の ちゃんねーが、俺達を呼んでいる!!」

「ビーチな、殺せんせーにトドメ刺す設備の工事で、立ち入り禁止だぞ?」

「な、何だつてー!?」

「あははは…」

朝食が済んだ後、早速 遊ぶ算段な響達。

しかし、自分達が宿泊しているビーチは、完全防御形態の殺せんせーを確実に（ダメモト）に始末するべく、巨大なコンクリートの柵を建造中。

関係者以外、立ち入り禁止となっていた。

それを知り、此の世の終わりな如く、orzる前原と岡島…と茅野。

「ヌルフフフ…何だか、先生のせいで、ゴメンナサイねえ…。」

「…全くだよ!!」

渚が手に持っている殺ボールは、右半分は真剣に申し訳無さそうに、左半分は嬉しそうに謝罪…真顔と緑&黄の縞模様的一半&一半な顔になっていた。

「何だよ!?!そのニヤけた顔わ!!」

「誠意が無い!」

ブーイング全開な生徒達。

「いや、どうせ先生は、もう直ぐ烏間先生に連れられて、コンクリートに埋められるから、遊べないしー?」

それで、君達も遊べないのは、ざまーみるなんて、少ししか、思っていないしー?」

「「「「「はあ!?!」」」」」





# ハーレムの時間

「ひゃっはー！」

やってきたぜー！沖縄本島!!」

「「いえーい!!」」

「ホント、ビックリしたよね〜♪」

「うん！」

「まさかのサプライズだよな〜！」



沖繩2日目の朝、朝食を終えて少し経った後、昨日の疲労も感じさせず、ホテルのロビーで駄弁っている生徒達の前にやってきたのは、  
「やっ、皆、おはよう。」

改めて昨日は、お疲れ様だったわね。」

「「「あ、園川さん、おはよーございまーす!」」」

鳥間の部下、園川雀（25・独身）。

「早速だけど、君達に話があるわ。

あ、大丈夫よ。

決して悪い話じゃないから。

実はね…」



「…まじつすか？」

「ええ、ウイルスのトラブルは予想外だったけど、昨日、暗殺失敗の直後、あの工事が決まったと同時に、烏間さんが君達の為に、ヘリを手配してくれていたの。

もうすぐ、この海岸に…」

ババババババ…

「…やってきたみたいね。

勿論、強制でなく希望者だけだけど、どうする？」

「「「行きます!!」」」

前日に決行された、『殺せんせー沖縄暗殺計画』。

結果は失敗に終わったが、このミッションで殺せんせーは「最終防御形態」となり、身動きが取れない状態に。

しかし、この時に烏間は直ぐ、次の策：『コンクリートの枢』計画を構想、上層部に暗殺結果の報告と共に打診、GOサインを貰っていた。

その工事に伴い、ホテル傍のビーチは使用不可に。

せっかくの沖繩バカンスを国の都合で生徒達を丸一日、何もする事無くホテルで缶詰めにさせる訳にもいかない。

更には暗殺そのものは失敗したが、殺せんせーの引き出しを新たに引き出した功績は、充分評価に値する。

…という事で、烏間は生徒達の為にヘリを別途手配、沖繩本島で充分に羽を伸ばして貰おうという、彼からすれば、かなり粋な計らいだった。

生徒達を乗せたヘリは沖繩基地に降り、其処からはやはり政府がチャーターしたバスで海岸へ移動。

冒頭の会話に至る。

…尚、結果的にサプライズになったのは、当初はあの夜、生徒達が落ち着いた頃を見計らって、烏間が話す予定だったのが、その前にウイルス騒動が起きてしまい、それ処ではなくなったからだった。

残念だが、あの鳥間が、其処まで気の利く筈が無い。

「そー言えばアレ、その儘にしてたけど、大丈夫だったかな？」

「うん…鳥間先生には伝えておいたから、心配無いと思うよ？」



その頃『アレ』は…

「おい、何をやっているんだ、お前は？」

「あの、今の私が、自分で、こんな状況を作れると思いますか？」

鳥間の前には、多量の海牛が、ねつとりと纏わり憑いている、名状し難きボールの様な物。

「…まあ良い。生き埋めの準備が出来たから、行くぞ。」

「ちよ…もつとマシな言い方、無いんですか？」

「……………」

鳥間は、その物言いを無視、無言で手にしていた手提げ紐付きのビニール袋に、この喋るボールを入れると、ビーチに向かい、歩を進めて行った。

「にゅやー！ちよつと待って鳥間先生！」

お願いだから、先に海牛（コレ）、取ってー！ー！ー！ー！！」



「…さっきのは、キーちゃん達が悪いと思うよ〜?」

自由行動…クラスの、それぞれが、気の知れた者同士でグループを組み、散り散りとなった訳だが、

「俺は別に、ハーレム王なんて目指してないんだが?」

何故か、倉橋、矢田、櫻瀬、不破、岡野のグループに組み込まれている響。

響自身は余り乗り気ではなかったのだが、前原と岡島に半ば無理矢理に連れられ、ナンプに繰り出そうとした処を、やはり無理矢理に引き抜かれた形である。

「いや、女子だけだと、変な輩がナンプしてきたりとか、面倒じゃない?」

「そんな訳で、ボディーガード、よろしく!」

…らしい。

「良いじゃないの、こんな美少女達を侍らせる事が出来るんだから。」

「『『『『『『『』』』』』』」

「心配しなくても、晴架たちには、黙っていてあげるから。」

そう言うのは岡野。

響の彼女である早乙女晴架とは、5月の連休、一緒に遊んだ時、連絡先を交換していい様である。

「ふん…美少女?」

それを自称するなら、せめて このレベルになってから言え。」  
「「「「……………」」」」

響はスマホの画面に、その晴架の写真を開いて見せるのだが、この女子達相手には、それは悪手だった。

「…ソノ、ヒナ、トーカ、ユヅ、殺れ！」

「「「「らじゃ！」」」」

「え？ええ？」

岡野の号令に、櫻瀬と倉橋が左右から腕を組み、不破は正面から腹部に抱きつき、矢田は後ろから、首から肩に、両手を回す。

先程の園川の件の様に、多少なりスケベな面は年相応に見られるが、恋愛事については本命（はるか）以外には、草食通り越して絶食男子認定されている響に対してだからこそ、安心して出来る芸当。

しかし端から見れば、女垂らし100割の構図の出来上がりである。  
カシャ…

透かさず それを、スマホに収める岡野。

「よし、早速 晴架つちに送ってやる。」

「ゴメンナサイまちゴメンナサイ。」





「ね、やつぱり きーちゃん居て、良かったでしょ？♪」

「…でも、あの程度なら、岡野さんでも瞬殺だろ？」

「良ーから早く、服着ろっ!!」

バシィッ!

「へぷっ!!」

色々な意味で顔を真っ赤にした岡野が、Tシャツを響の顔面目掛け投げつける。

「いやいや、どーせ直ぐに泳ぐんだから、もう良いっしょ？」

コクコクコクコク…

岡野以外の女子は、その台詞に首を縦に振って応えるのだった。

その後も…

「ううらあ! 犬神家ドライバーーーーっ!!」

「すけきよーーーーっ!!」

海辺だからこそ、使用可能な必殺技が炸裂したり。

「ふう…これで、何度目だ？」

遊泳中、ビーチバレーの最中と、既に何度となく、ナンパしてくる輩共を撃退していった響。

「100から先は、数えていない!」

「…あのさ、やつぱ男が俺1人だから、逆に あーゆーのが寄って来るんでない?」  
「スルーされた!?!」

事実、不破達女子…というよりか、寧ろ、多数の少女を1人で侍らせてる（様にしか見えない）響に対して、やつかみ半分で因縁を付け、あわよくば…と思っている者の方が大半だったりした。

それでも、その全体の半分以上は、響の その某・哲学する柔術家の様な、鍛え絞られた肉体を見て、危険を感じたのか、

「…ああ、っ!?!」

「「「……………?!」」」

一睨みだけで退散してくれていた。

だが、残りは自分達の人数の優位性だけで、己達と目の前の中学生（おとこ）との力量を計る事も無く退く事無く、力を行使するが、何れも約1分後には、媚びて省みて、結局は退散という結果になっていた。

「いや、君、凄く強いさ。」

「?!」

そんな響に、声を掛けてきたのは、無地の白いTシャツに短パンな出で立ち、

「「わ…イケメン…」」

整った顔立ちの、20代前半位の男。

「クス…彼がね、多勢に無勢みたいだから、助太刀するって言ってたけど、必要無かったみたいね？」

そして その隣には、麦藁帽に白のワンピース、少し赤身が混ざった長い茶髪の、男と同年代の女性が居た。

「あゝ、どーも…」

それに少し照れて、顚をポリポリと掻きながら、応える響。

「えゝ、新婚さんなんですか？」

「つい この前、籍を入れたばかりさー。」

「ちい、イケメンは常に、会った その時には売約済みか…」

この夫婦、我那覇真牛（がなはもうし）は現地人、麻奈は東京から仕事で赴任した際に、真牛に会って…という事だとか。

2人共に、地元の警備的な仕事に就いており、先程も地元チンピラが響達に絡み、人数的に不利な響の助太刀…もとい、喧嘩の仲裁に入ろうとした処、響が1人で片付けてしまう。

その見事な無双っぷりに、思わず声を掛けてしまったとか。



「じゃあね、理由は どうであれ、余り喧嘩は良くないさー。」

「じゃねー♪」

その後 響達は、この夫婦と少し話をして別れた後、偶々近くを通りかかった、

「…！おーい！」

「ん？吉良？」

ナンパに精を出していた、チャラ男とエロ坊主の2人と合流。

「…で、お前等、水着の ちゃんねー、どうだったよ？」

「るせー！成果ゼロだよ!!」

8人という、それなりな団体となり、行動する事に。

「ちよつと腹、減ってきたな〜？」

「もう直ぐ、お昼時だからね。」

「12時過ぎると、何処も店とか屋台とかは混むっぽいから、少し早いけど飯、食っちゃまうか？」

その後 一同は、海岸傍の屋台村で昼食。

昨日のホテルディナーのメニューには無かった、ソーキ蕎麦やゴーヤチャンプル等の、The・沖縄!…な料理を楽しむ事に。

その後、男3人は

「「苦っ!?!」」

ジュース屋台でゴーヤ100%なジュースを注文、予想外の苦さながら、意地と根性で飲み干したり、

「「美く味しい〜♪」」

女子達は その様を見て笑いながら、シークワーサーアイスを食べたり。

「「おじさん!言っちゃ何だけど、このジュース、売れてんの!?!」」

「ん〜、本来はパイナップルと混ぜて、更に大人は、炭酸と泡盛を混ぜて飲む様なモノだけだね。」

内地の観光客、特に学生さんは、面白がって生地で飲むさー。」

「「俺達かよ!!」」

沖縄あるあるを、身を以て体験したり。

~~~~~

「「きゃー~~~~~」」

「「うわ~~~~~」」

「魔物だー………っ!!」

「「「「「「!?」」」」」」

食事も済ませ、響達が再び遊ばんとばかりにビーチに繰り出そうとした時、そのビーチから、無数の悲鳴、助けを求める声が聞こえてきた。

助け声の中から聞こえてきた「魔物」という単語に、まさかとは思いつつ、若干の心当たりを感じた響達は、逃げ惑う観光客を避けながら、その逆方向を駆けていく。

そして、ビーチに着いた時：

「おらおら!ご陽気に海水浴なんかしてるんじゃないぞ、コラー!」

「きやはははは!!」

「は(ぎ)ーは(ぎ)ー!」

「「「きやあー………っ!!」」」

其処には、観光客相手に暴行を仕掛けている、

「…コスプレ?」

「○ヨツカーの皆さん?」

異形の集団が居たのだった。

琉神の時間

突如 海岸に現れ、海水浴に来た者達に襲い掛かってきた謎の集団。

「はー!!」

白いラインが入った黒覆面に黒い全身タイツの様なコスチュームが2人。

「きやははははー!」

獣を模した様な仮面を被った女が1人。

更には額部に『毒』の文字が刻まれた、フルフェイスのヘルメットに黒と紫の軽装鎧を着込んだ男が1人。

4人共に、「それ、何処の団体のちゃんぴよんベルトですか?」…と、聞きたくなる様な共通デザイン、大きく派手な造型なバックルのベルトを腰に巻いている。

「おーおー!」

そして そのフルフェイス?は、台詞に合わせ、口の造り部分が違和感無く、本当に喋っているかの様に動いていた。

「まさか、あれ素顔?」

…って、まさかのガチ魔物(モンスター)?」

「まっさかー?」

殺せんせーじゃあないし、そんなリアルなモンスターみたいなの、そんな簡単にあちこちに居る訳無いじゃん?」

「「「「んんんん。」」」」」

担任のタコの影響か、良くも悪くも、人外慣れしている響達。

海水浴客が逃げ惑う中、少し離れた場所から その異形の無法ぶりを眺め、様子を窺っていた。

「あーっ! 兄々(にいにい)も姉々(ねえねえ)も、何、ぼーっとしてるさー!」

さっさと逃げるさー!」

そんな響達に対して、早く逃げる様に促す現地人。

「ねえ、おじさくん、あれって一体何なの?」

「はあく…コレだから、内地の若い者は…」

見ての通り、魔物(マジモン)さー!」

「「「「まじむん?」」」」」

「そう、マジモンさー…って、コッチに来たさー! ひよえくくっ!!」

ダダッ…

倉橋の質問に、呆れる様に説明した現地人は、そのマジモンとやらの1体が、此方に

向かって来るのを見ると、響達そつちのけで、一目散に逃げ出すのだった。

「はーっ!」

「!!?」

そして黒覆面の1人が、響達に飛び掛かってきた。

「ひえええっ!」

ガシッ!

「吉良君?」「きーちゃん?」

その立ち位置的に、狙われた櫻瀬の前に響が立ち、そのダイブを受け止める。

…が、

くっ…巫山戯た見た目以上に…

コイツ、鷹岡より強い!…つてか、これは まさか、小宇宙(コスモ)?

いや違う、コレは、【魔氣】!

ちいつ!コイツ等、マジに【人に非らざる者】かよ!?

バキイ!

「はっ!?」

「不味い! 皆、退がってろ!!」

その受けた一撃の、内なる人外の力を感じた響は、小宇宙（コスモ）を込めた蹴りを黒覆面の腹に浴びせて吹っ飛ばした後、一緒に居合わせていた岡野、前原達をはじめ、その場に居る者達に逃げる様に告げるが、

「「お〜い、吉良〜?」」

「「「大丈夫か〜?」」」

「吉良つち〜?」

「「「「吉良君〜?」」」」

「吉良つちさ〜ん!」

一般人が全て逃げ出した後、同行していた者達を含め、やはり海に遊びに来ていたE組クラスメートは全員、全く動ず事無く逃げる事無く、この響と謎の黒覆面との対峙を、片手にジュースやアイスクリームを持つての見学をしていた。

「お前等なあ! 平和ボケ: : もとい、ヴァイオレンスな状況に慣れ過ぎだ!!」

: : 心の底から叫んだ響は、決して悪くないと思う。

分かってるの？コレは、特撮の撮影なんかじゃないのよ!!」

それに対し、響は大丈夫発言。

そして それに対し、ミカツチ：麻奈がコレは遊びじゃないと、叱りつける。

「分かってるよ…アレがガチ琉球のガチ魔物つてのは、魔氣も感じてるし。」

「え、？魔氣を感じたって、あなた…??」

「…俺は桐ヶ丘中学、3年E組の生徒だ…って言ったら、話を通じるかな？」

ついでに言えば、それとは別に、俺も結構、常人成らざるな能力（チカラ）、持つてる

と言えば、信じる？」

「… 暗殺教室の生徒!!」

しかし、この響の台詞を聞いて、

「本当に、戦力扱いして良いのかしら？」

…中学生？」

「当然!」

態度を一変軟化、共闘の姿勢を見せる。

念の為…響が【魔氣】を感じる事が出来たのは、暗殺教室は関係無く、あくまでも響が聖闘士としてである。

一緒に「戦う」「戦わない」の話し合いをしていたにも拘わらず、その「戦う相手」の存在を、完全に忘れていたマブヤー達。

「きー!? 何なのさ お前等!!」

ボクちゃんのこと、舐めてるでしょー?!」

3人揃つての「あ…」の一言で、それに気付いたハブクラージェンが怒（おこ）になつたとしても、それは悪くないだろう。

「だ、黙れハブクラージェン！」

そもそも貴様、戦う約束の時間に、3時間近くも遅れて来るとは何事だ!!」

「今更、何を言うかマブヤー！」

少し遅れる位、うちなータイムだろうが! 貴様、それでも「沖繩に生きる者（うちなーんちゅ）」か?」

「ええつ? 戦う時間や場所つて、予め打ち合わせしてるの?」

悪の軍団とヒーローが?!」

…つて、3時間遅れつて、少し処じやないと思うのですがつ?!」

まるで聞いた事が無い、正義の味方と悪の幹部の会話に、驚きを隠せない&突っ込まずには居られない響。

「因みに私達も、実は1時間半程遅刻してるわ…」

コツチも前も言ったでしよ!

私は仕事してるのよ!お・シ・ゴ・ト!!」

…このマンガーチユ、実はマブヤーにホの字なのだが、余りにも場違いな物言いに、麻奈は半ギレ顔になりつつ、正論で反論。

そして…

ガシッ

「大体 くつつき過ぎってのは、こういう状態の事を言うのよ!

それに、くつつき過ぎが何よ?

私達、つい この前、籍を入れたばかりなんですけどー!!♪ ベーっだ!」

「はいいいいいええ?!!」

マブヤーの腕に、自分の胸を押し当てる様子がっしりと しがみつくと、今度は私論で追い打ち。

「新婚舐めないでよー?

私達、こんな事や そんな事や あんな事だつて、毎晩やってんだからね!!」

「どどと、どんな事さーっ?!」

「どんな事つて、そりゃあアータ…

えへ…えへへへ…♪」

「麻奈く？少し、恥ずかしいさー…」

「…な、っ!？」

何を思い出したのか、顔を赤くして惚けている麻奈に、少しだけ照れている口調で注意するマブヤー。

その遣り取りで其れ等が全て事実と悟り、こんな事や そんな事や あんな事や どんな事だ？…な妄想に脳内を完全支配され、茹で蛸の如く、顔を真っ赤にしてしまうマブヤーチュ。

「……………(〃〃〃)……………」

…と、響。

「あ、中学生の前で言っちゃう台詞じゃなかった…かしら…?」

「ん、少しばかり、刺激が強過ぎたみたいさー。」

この後マブヤーチュは

「破廉恥ー!不潔ー!馬鹿ー!阿呆ー!ウン〇タレー!粗〇ンー!包〇ー!早〇ー!E

〇ー!!」

大泣きしながら、マブヤーに対して散々と悪態を吐き、

「絶対に諦めないんだから〜!」

見てなさいよ、略奪してやる〜!!」

ハブクラージェンと、黒の覆面と全身スーツの戦闘員が それぞれ、独特なファイティンポーズを構える。

「それでは コツチも改めて行くぞ！

ハブクラージェン!!」

ぶわあっ…!!

マブヤーが身体中から闘気を開放し、琉球空手風の構えを取り、

「はあっー!」

カアッ!

麻奈…ミカツチも身体から雷光を放ち、決めポーズ。

「覇あああ…!!」

響も小宇宙（コスモ）を燃焼させながら、息吹と共に、空手とは違う、独特な構えを繰り出していく。

その両腕が織り成す軌跡は、自身の守護星、夜空に ひっそりと光る蟹座を形成する7つの星を象つていき、最後に左右の手は蟹座の右脚と左爪の星位置、右手は天に、左手は地に向けた構えとなる。

そして響とマブヤーは それぞれの構えの儘、声を揃えて叫ぶのだった。

「たっぴらかす!!!!!!」

うちなーんちゅの時間

「ハブクラゲンは俺が相手をする！」

麻奈と吉良君は、残りの2人を頼む!!」

「了解！」

「初めの一触即発な空気から、少しばかりの緩い擦った揉んだで話が脱線していた末に、漸く始まった琉球魔物（マジムン）vs 御当地ヒーローズ with 響の戦闘。

「行っけえ！雷太鼓ファンネル!!」

ドシューウウウウ：

生まれも育ちも浅草だと云う、雷神ミカツチの背に有った6連の雷太鼓が、精神感応型遠隔操作機動砲台に変形し、縦横無尽に宙を駆け巡る。

「必いつ殺！」

【雷門（サンダーゲートおお）!!】

どおおん!!

「は（ぞ）おーっ!?!」

この東京御当地ヒーローが操るファンネルから撃ち放たれた雷撃が、戦闘員型マジム

ン、グーパー1号に直撃。

「せえいやああつ!!」

ドガツ

「はっつ!!」

続いて響が、同じく戦闘員型マジムンのグーパー2号に対し、胸元に小宇宙（コスモ）を込めた正拳突きで体勢を崩した後に捕縛。

体を上下逆さ向きにした形で、相手の頭を自分の肩の高さ迄持ち抱え上げると、

「犬神家ドライヴアーーーーーーっ!!」

どどん!!

「はっつ!!おおうっ!!?」

この日の午前中に、響に喧嘩を吹っ掛けてきたナンパ男に放った技の、小宇宙（コスモ）込みの超・本気ver. が炸裂。

頭から垂直に地面に墜とすと云う危険極まりない荒技で、グーパー2号は上半身が完全に、砂の中に埋まってしまう。

※※※※※※※※※※※※※※※※

※注意：ガチに危険ですので、※

※絶対に真似しないで下さい!!※

※※※※※※※※※※※※※※※※

「は〜おお〜…」

あつという間に倒されてしまう、グーパー1号2号。

「くわーっ?!ミカツチは兎も角、何なの?あの知らない人?!

滅つ茶苦茶、強いさー!!」

マブヤーとの戦闘中、視界に映った響の戦いぶりに、驚愕するハブクラージェン。

「余所見とは随分と余裕だな、ハブクラージェン!」

「あ…しまっ…」

そんなハブクラージェンに、マブヤー渾身の

「スーパー拳骨(メーゴースー)!!」

ドゴン!

「あぎやじゃびよオオオ!!」

コークスクリューブローが、アッパー気味にヒット。

きらーん…

天空高く迄ぶつ飛ばされた人影は太陽と重なり、一瞬見えなくなつたかと思えば、万有引力に従い落下。

ドシャーア!!

派手に頭から浜辺に、錐揉み降下したハブクラージェン。

先程のグーパー2号に次ぐ、す〇きよ2号の完成である。



「酷い…でーじ非道い…」

上体を砂から脱出させ、肩で息をしながら半泣きで呟くハブクラージェン。

だが、この人外なる者に待っていたのは、

「これでトドメだ！」

迸れ！俺の小宇宙（コスモ）！

逝ってこい黄泉比良坂!!」

「ひえっ!!」

…そう、『悪』に対して慈悲の欠片も持ち合わせていない、この男の追撃であった。

「喰らえ！積尸k「あー、待つさー？」

ステーン…どん！

「ふべらっ!!」

今 正にトドメを刺さんとダツシユした響だが、海パンの縁をマブヤーが後ろから掴まれ、勢いが殺された響は うつぶせ状態で倒れ込み、砂浜に顔面を痛打。

「痛て…な、何するんスカ？」

「今日は もう、その辺にしとくさー。」

「はああ!？」

鼻を押さえながら問い質す響に対して、マブヤーは これ以上の攻撃は止めと言う。

「甘いすよ、もーしさん。」

「こんな輩、庇う必要性、あるんですか？」

基本的には『邪悪？絶対殺すマン』な響からすれば、己の理解の外に在る申し出。

「そう言えば…今回のバトルも、事前に約束してたばいし、あの先に去って行った女について、『後でケア』が どーのこーの言ってたし…」

…もしかして、いつも決着が着いた後は、こうやって逃がしているんですか？

沖繩の御当地ヒーローとやらは、本当に殺る気が有るんですか？」

「……………」

緩い…正義を名乗る者としては、余りにも緩（ぬる）くて緩（ゆる）過ぎるマブヤーに対し、問い詰める響。

「…ほら、アンタ達は、今の内に消えちやいなさい？」

「んゝ、ごめんねゝ…」

「はははははははは…」

「な…!?」

そう言っている最中に、ミカツチがハブクラゲン達を逃がしてしまう。

元々はマブヤーのアシストとして沖縄に派遣されたと言っていた、本来は東京の御当地ヒーローである雷神ミカツチ。

まさか、そんな今迄は所謂 激戦区で活動していたであろう筈の彼女までもが、この様な甘い行動に出してしまうとは思わず、響は声を失い固まってしまう。

シユウウウウ…

「…最初は私もね、キミと同じ行動に出たんだよ？」

アイツ等にトドメ刺そうとした時、マブヤー…真牛君に止められたの。」

「…だったら!?!」

そんな響に、変身を解いたミカツチ…麻奈が懐かしそうに、笑顔で語り掛ける。

「東京でさ、アイツ等が この沖縄で何か悪さしたってニュース…そーゆーの、聞いた事ある?」

「……………」

「無いよね？」

それが、マブヤーの成果だよ?」

「しかし…!」

確かに、沖繩にてマジムンによる被害が出た等のニュースは、聞いた事がない…それでも納得の行かない響。

「…例えば、今迄が大丈夫だったからって、それが逃がして良い理由には ならない！

身に降りかかる火の粉は、振り払った程度では、直ぐに舞い戻って来るんだ！

2度と舞わない様、完全滅却しないと、何時か大火傷するに決まっている！

解るでしょ!?!その時になって後悔しても、何もかもが遅過ぎるんだ!!」

「……………」

響の言い分は完全に正しい。

正しいからこそ、麻奈は何も言わず、黙って聞き入っている。

「それでも…」

「もーしさん?」「真牛君…」

その時、何時の間にか、やはり琉神の変身を解除していたマブヤー…我那覇真牛が会話に加わってきた。

「それでも、マジムンも俺達と同じ、『沖繩に生きる者(うちなーんちゅ)』だから。

…だからよー。」

「うちなーんちゅ…?」



「まあ、沖繩の…『うちなーんちゅ』とやらには、その者達なりの考えや価値観が有るの
は理解しましたが、それに納得したり、賛同した訳では無いですからね。」

「ん、それで構わないさー。」

ウチはウチ、余所は余所さー。」

あの後、真牛との僅かながらの話し合いの末、クラス副担任と比べて その1/10
00程度な堅物思考を少しだけ和らげ、世の中には『うちなーんちゅ』の様な考え方も、
確かに存在する…ただし、自分は絶対に認めない…そういう結論に至った響。

「それじゃあ吉良君も、東京でのヒーロー活動、頑張るさー。」

「俺は…俺達は別に、ヒーローってカッコ良いヤツじゃないんですけどね…」

ま、頑張りは しますよ…頑張りは。」

自分達はヒーローでなく暗殺者。

それを茶を濁す様に、沖繩御当地ヒーローからの任務遂行へのエールだけは、照れな
がらも素直に受け取る響だが、

「へ？吉良君て、御当地ヒーローとかでないの？」

じゃ、あの時の、俺の魂（マブイ）の力とも、マジムンの魔氣とも違っていた、あの

【神氣】みたいな力って…

…キミって一体、何者さ？」

「ええーつと、俺は…」

その名称は知る筈もないが、響の燃やした小宇宙（コスモ）の波動は、きつちりと感じ取っており、その力から、てつきり自分達と同じ存在と思っていたが、それとは違うと言われた真牛は少しだけ驚愕。

その正体に興味を示す。

「も、真牛君？彼はね、私達とは別枠の…私達以上の、政府トップシークレット扱いな存在なの！」

だ・か・ら！余計な詮索は無し！ね？」

「ふむむ。」

しかし透かさず其処で、事情を…政府から殺せんせーやE組…即ち暗殺教室の存在は報らされている麻奈がフオロー。

「…ん、分かったさー。」

「納得 早っ?!」

「とりあえず、何でも受け入れるのが、うちなー精神らしいわよ…」



ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

マジムン撤退の後、再び海岸には徐々に観光客が戻って来ていた。

「「「お〜い、吉良〜！」」」

「吉良つち〜？生きてるか〜？」

「「「吉良君〜！」」」

その中には当然、E組の生徒の姿も。

カルマや渚、そしてマジムンとの戦闘になるまで一緒に遊んでいた、倉橋や岡島達が、こつちに向かつてきた。

「アイツ等…全員？戻ってきてるし…」

「すいません、俺、もう行かないと！」

「あ、ちよつと待って！」

吉良君…3月迄にキミは、キミ達は、アイツを殺れそうなの？」

「…!!!」

その別れ際、事情を知っている政府の人間としての、凜とした厳しい表情の麻奈の質問には、

「殺ってみせますよ。卒業の前に、ね！」

それじゃ！何時か また!!」

やはり、政府に依頼された暗殺者として、且つ中学生らしい明るい笑顔で答えると、響

は真牛と麻奈の2人に背を向けて、

「へーい!!」

手を振って自分を呼んでいる、クラスメートの本に走って行くのだった。

~~~~~

「ねえ吉良つち、あれから吉良つちって、どーしてたの?」

「いや、実はあの殺気? 至近距離で浴びたからさ、その場で腰、抜かしてよ……それで、見事に逃げ遅れたって訳。」

「きやはは♪きーちゃん、カツコ悪〜!」

「うるっせ!」

お陰さんで、地元ヒーローの戦闘、特別アリーナで観戦出来たよ!」

「……………」

そんなクラスメートと談笑する、響の後ろ姿を見て、麻奈は呟いた。

「雀先輩が話してた、生意気で元氣者な有望選手って、あのコの事よね?」

「…頑張れ…暗殺中学生…!♪」





『あのタコ（中略）暗殺計画!!』の責任者である烏間は、陽が登る前、作戦に必要な物資が島に届いた時から、不眠不休で工事の指揮をしていた。

「疲れてる素振り、全く見せてないし。」

「…凄いよね。」

「マジに人外だよ。」

「あと10年チョイで俺等、あんな超人になれるのか?」

「さーな…」

「無ゝ理! 無理無理無理無理無理!!」

絶ゝ対に無理!」

昨日のホテルで見せた一面に続く烏間の行動力、その完璧超人っぷりに、改めて感心、尊敬の念を抱く生徒達。

イリーナも然り。

普段は単なる、弄りがいがある恥女程度にしか見てなかったが、やはり昨日の一件で『凄い人』と認識せざるを得ない。

「昨日の殺し屋もさ、長年の経験でスゲー技術（スキル）身に付けてたり、仕事に対して、しっかりしたポリシー持ってたたり。」

「…かと思えば、鷹岡みたいに…」



皆、それぞれが皿に盛った料理を口にしながら、どちらに転ぶかは判らないが、結果が出る瞬間を待っていた。

どつどおーおん！！

「！！？」

そんな折り、突如として鳴り響いた轟音。

『柩』の上面には、巨大な穴。

周囲の海には、爆破で飛ばされた、大小のコンクリートの破片が降り注ぐ。

「爆発したわー！」「殺れたの？」

皆が そんな言葉を口にするが、『爆発』したという時点で、結果は察していた。

「ヌルッフ…」

今回は先生の不甲斐無さから、皆さんに苦労させてしまいました。」

「！！？」

「…ですが皆さん、敵と戦い、ウイルスと戦い、本当に よく頑張りました！」

皆が声がした方向に目を向ければ、其処には何時の間にか…本当に何時の間にか、麦藁にアロハシャツな格好で、バイキング会場に姿を見せている殺せんせー。

「~~~~~！！」

最初から食事に参加していたかの如く、自然体でシシカバブをかじりつく。その仕草を見て、物凄く複雑且つ、残念そうな顔を浮かべているのは烏間である。

「殺せんせー、おかえり〜♪」

「おはようございます？で良いのかな？」

「やっぱし先生は、触手が ないとね。」

そして烏間とは対照的に、笑顔で担任を迎える生徒達。

「はい、皆さん おはようございます。」

それでは、旅行の続きを楽しむと しましょうか。」

「続きつつつても、もう夜だぜ〜？」

「「「んんんん。」」」

「明日は朝飯食べて、帰るだけだしな。」

「はああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

何を言ってるのですか、君達わ？

夜だからこそ…：…なイベントが有るでは在りませんか！」

「夜って…」

「まさか…？」

「そう！昨日の見事な暗殺の お返しに！

先生、スッペシユワルなイベント、プロデュースしています!!」  
バサツ

そう言つて殺せんせーは、何処かの露出狂な如くアロハを脱ぎ捨てると、マツハで白装束に早着替え。

頭には三角巾を巻いている。

それは正しく良く言えば古風、悪く言えばベタな、日本古来の幽霊の様な出で立ち。

「ヌルヌルフフフフ……」

真夏の夜つてーと、やる事は もう、コレーつでしよ〜?」

そう言つた殺ゆーれーの触手(て)には、

※※※※※※※※※※※※※※※※

※ 夏休み旅行特別企画 ※

※ 納涼!! ※

※ ヌルヌル☆暗殺 ※

※ THE・肝試し!! ※

※※※※※※※※※※※※※※※※

※

ノ※



…と、書かれたプレートが。

「「はあ？」」

「「暗殺……」」

「「肝試しいい!?!」」

唐突な話の持ち掛けに、最初は『??』となる生徒達だが、

「ふくん？面白そうじゃん♪」

「まあ、定番ちや定番でさあね〜。」

「…だな。」

「やろやろ〜!」

「え〜?でも、何だか怖い嫌だな〜…」

「平気平気!」

次第にノリ気を出していく。

「よし、昨日の夜、動けなかった分の憂さ晴らしだぜ!」

「応よ!!」

「水着のちゃんねーアタック、全玉砕の憂さ晴らし…だろ? w w w」

「やかましいわ! (泣)」



「大丈夫かよ？ 中村ちゃん？」

「うゝ…まさか、其の場に来て、自覚してしまうとわ…」

一番最初に洞窟に足を踏み入れたのは、前に立ち、懐中電灯を持つ響と、その後ろを恐る恐る歩く中村のペア。

殺せんせーの肝試しの誘いに、当初はノリノリだったのだが、いざ現場に来て、初めて実は自分が怖い系が苦手だった事に気付く中村。

「俺は てつきり、中村ちゃんは『饅頭怖い』な部類と思つてたんだけどな〜？」

「あたしも それだと思つてた…つて、吉良たちは こんなの平気なん？」

「そりゃあ、俺はねえ…」

…積尸氣を操る黄金聖闘士が、幽霊怖いとか言っていたら、それこそ大笑いである。

ペン…ペンペン…ペン…

「!?!」

少し歩いた時、いきなり聞こえてきた弦楽器の音。

ポウツ…

「おっ?♪」

「ひえええっ!?!」

で、出たあー(。O。L)ーっ!!」

其処に現れたのは、古代琉球貴族の衣装を身に纏い、蛇味線を弾きながら、煙の様にいきなり姿を見せた殺せんせー。

思わず顔が椽○かぞお先生風タツチとなり、恐怖の悲鳴を上げたのは中村。

一方、幽霊系には絶対耐性を持つている上、最初から小宇宙（コスモ）全開、タコの存在を『気配』で分かっていた響は余裕の表情。

ペンペンペンペンペンペンペン…

『此処は、血塗られた悲劇の洞窟う…』

琉球…嘗ての沖繩で、戦に敗れた王族達が非業の死を遂げた場所…

未だ成仏叶わぬ数多の者達が、亡霊となりて、彷徨う洞窟じゃあ…』

「(ボソ…) まぢかな？」

「(ボソ…) いやいや、リアルっぼくする為の設定っしょ？」

そして響が、「何故に『愚零闘○多』のテーマ？…と疑問に思いながらも、この殺ぼーれーは話を続けていく。

『…故に、決して2人、離れぬ様に…』

1人になれば、途端、彷徨う魂に憑き殺されようぞおう…』

ぞく…!!

「ひえっ!？」

「ん？中村ちゃん？」

余りにもリアルな口調に、恐怖からか本能的に、響の腕に組み付く中村。

『ヌルフフフフ…』

そうそう、良いですよ、そんな感じ！

もつと こう、ぴったりと組っ付いっ…!!？」

その様を見て、『計画通り…!!』…と内心で ほくそ笑む殺ぼーれー。

しかし この時、殺ぼーれーは見てしまう。

脅える中村と、その隣で平然な顔をしている響の背後に、蒼く揺らめき燃ゆる、幾つもの宙に浮く炎の様な物体を。

そして その焰の中からは、次第に人の顔が浮かび上がり、琉球貴族のコスプレタコと目を合わせると、ニタア…と不気味な笑顔を見せる。

「にゅやー…（。O。L）ー…っ!？」

で、出たー…!!

本物（ガチモノ）、出たあー…あつ？」

ドシューン!!

その後、マツハで洞窟の奥に飛んで行く殺ぼーれー。

「な…何なの？アレ？」



仕様なベンチが置いてあったり、ポツキーゲーム特設ステージが設置されてあったり、ツイスターゲームが置いてあったり…



「つ・ま・り…吊り橋効果で、カップル成立を狙っていた…と。」

「悪いけどさ、ベタ過ぎだったよ？」

魂胆見え見え。御陰様で怖いので、全々部、吹き飛んじやったし。」

「うう…」

「言い訳があるってなら、一応は聞いてやるぞ？」

この生徒達の問い詰め、

「だ…だって、見たかったんだもん!!」

皆さんだって、お手々繋いで、初々しく照れてる2人とか見て、ニヤニヤしたいとは

思いませんか？ねえ？思うでしょ?！」

「「思わねーよ!!」」

「うっわ？泣きギレ入りやがったぜ!！」

「ゲスい大人だなあ…」

涙ながらに訴え、同意を求める殺せんせーだが、当然ながら賛同者は居る筈も無く、生

徒達は その様を見て、呆れドン引く。





「ん？皆、アレ見て…」

「「??」」

ふと、外を見た渚が指差した先には、低くした体で植木の陰に隠れ、何やら海側の様子を窺っている、数人の人影。

~~~~~

「何してるんですか？」

「「（ひにやあああつ!!?）」」

何事なのか解らず、とりあえず可能な限り気配を絶つた上で、件の人影に近づいた響達。

そして背後から声を掛けた渚に、その不意打ちに驚き、声を殺した声で悲鳴を上げたのは、イリーナ、中村、矢田…そして、

「(ボソ…) な、渚君！」

急に話し掛けないで下さいよ！

先生、ショック死したら、どーするんですか!？」

「(ボソ…) それは寧ろ、Welcomeだよ?♪」

「(ボソ…) にゅやや!？」

カルマ君、そんな、ヒドい！」

…殺せんせーの4人。

その後も、ヒソヒソ声で、会話する8人。

「(ボソ…) …で、何コソコソしてた訳？」

「(ボソ…) ふっ…アレ、見てみ♪？」

「「「?? ………………!!」」」

中村が指差した先を、男子4人も植木に身を隠して見てみると、其処には海岸にて何やら良い雰囲気です歩いている鳥間の部下…園川雀と鵜飼健一の2人が居た。

ニヨキ…パスツ…パタパタ…

全てを察し、悪魔な角と羽を生やすと、何も言わず、邪(よ)い笑顔でサムズアップする響とカルマ。

それに、中村とイリーナが同様なアクションで応える。

「しっかしさあ、あの2人がデキてたなんてね〜♪？」

「くでしょ？」

「確かに意外だよね？」

「応、俺もビックリだよ！」

「いや、意外と似合ってるね？」

員が正座。

大○部長クラスな怒り爆裂の園川に、散々と説教される羽目に。

「うう…だから僕は、止めとこうって言ったのに…(T|T)」

「何、一人で良い子ぶっているのよ!？」

「ノリノリで付いて来てたぢやねーか!!」

「(怒) DA (怒) MA (怒) RE (怒) !!」

「「は、はい!!」(「。O。L」)」

こうして、沖繩最後の夜は更けていき、翌日、E組一同は東京へ帰郷。

2泊3日の短くもあり、永くもあつた沖繩暗殺旅行は、幕を閉じるのだった。

浅野学秀を基とした五英傑を筆頭に、A組の全員が睨み付ける中、響達E組は嬉々とした顔で、山の上の旧校舎を目指し、登っていった。

「クッソ…吉良あ…」

お前さえ、潰せば…!!」



始業式も終えた この日は授業も無く、基本的に、部活動等がある生徒以外は下校となる。

そんな時間帯の柵ヶ丘中学校の本校舎会議室では、E組を除く3年生の授業を受け持つ教諭が、担任、教科担当問わず、全員が集まっていた。

「…ですから、エアコンの使用だけは、どうかして容認する方向には、やらないでしよるか?」

「教える側の、我々の集中力が欠くのが問題なのです。」

1学期の期末テスト、E組との『賭け』での制約の中の1つである、『A組教室の空調機使用禁止』について、会議にて、3年担当の教諭達から、この件についての話し合いが行われていた。

…まあ、要約すれば、「暑い!」という事である。

「…そもそも、E組如きとの約束なんかをA組生徒が、律儀に守る必要性が有るのですか？」

あんな賭け、全て無効にしてしまえば…」

「大野先生？」

A組担任の大野が、賭けの話自体を反故にしてしまう旨の発言をしようとした時に、それを止める様に、大野を呼ぶ声。

「り、理事長…」

櫛ヶ丘学園理事長、浅野學峯。

「A組とE組との、期末テストの結果如何で取り決められた その賭けは、私も立ち会い、最終的には、私が容認した物です。」

大野先生は、私が下した決断に、異を唱える…と？」

「…いい、いえ…その様な心算でわ…」

浅野の、絶対零度という比喩がピツタリな視線から送られる問い掛けに、大野は青ざめた顔をして、声を裏返ししながら応える。

「…皆さんに言っておきます。」

我々が教師の権限を振りかざし、E組（かれら）を黙らせるのは、確かに容易い。

しかし一度でも それをやってしまうと、今後は今回の様な賭け…勝負事は成立しな

くなってしまう。

彼等に『どうせ、自分達が負けた時は、教師に泣きつくんだよな?』という、大義名分を与えてしまう事になるのですよ?」

「「「……………」」」」

浅野の発言に、黙り込む教諭達。

「そもそもエアコンの件は、あなた方、先生達にも責任が有りますよ?」

「「「なっ…?!」」」

「そ、それは一体、どういう意味ですか?」

浅野理事長?」

教諭の1人が質問。

それに浅野は、冷たい笑を浮かべながら答える。

「だって、そうでしょう?」

あなた方の授業が至らなかつたばかりに、A組の皆は、E組の生徒に勝てなかつたのですから。

それこそ、空調の効いた快適な空間の中で勉強していた者達が、蒸し暑い教室で授業を受けていた生徒たちに、結果、成績で劣ってしまった。

それは、あなた方が教鞭を執る、授業内容に問題があつた…

：間違っていますか？

そして、E組にて授業を受け持っている先生方も　また、エアコンなんか無い劣悪な環境の中で授業を進め、結果を出した：

その点を、お忘れ無く。」

「~~~~~!!~~~~~」

数人程、其れに対し、物言いたい顔をしてはいるが、この理事長（おとこ）に逆らえる筈も無い。

「あなた方も、この櫛ヶ丘の教諭なら、その辺りの自覚は持つて頂きたい。

結果が出た後に文句を言う前に、文句を言う必要性が無い結果を作り出す方向に、尽力して下さい。

E組（かれら）も彼等なりに、努力だけは　している。

しかし、その努力を無惨に吹き飛ばす程の学力を、自分の教え子達に身に付けさせるのが、あなた方の使命ですよ？」

「~~~~~は、はい~~~~~」

少しばかり？強引な部分もあるが、E組が常に弱者で有ると同時に、本校舎勢は常に強者で在れ：

その信念に基く発言に、やはり教諭陣は肯で応えるしかなく、その返事に満足した浅

当然ながら小宇宙（コスモ）を燃やせば、如何にクラスメートからも『人外』と恐れられている鳥間にも、簡単に勝つ事は出来る。

いや、鳥間に限らず、音速20が売りな、担任のタコですら、仕留める事は容易い。しかしながら、4月に殺せんせーの事情を知った響は、E組に於ける超破壊生物暗殺計画に関しては、小宇宙（コスモ）の使用を禁止、あくまでも訓練を受けた中学生として、暗殺の活動するという制約を、自身に設けていた。

小宇宙（コスモ）を使用する事無く、一介の中学生として、クラスメートと協力し合い、殺せんせーを殺る。

地上の愛と正義と平和を守る、アテナの聖闘士としてではなく、あくまでもE組の一員として。

その為にも、決してクラスメートを信用していない訳では無いが、暗殺成功の可能性を少しでも高める為、自身の戦闘のレベルアップ：さしあたっては、ごく身近にて『最強』、そして『最恐』と呼ばれる男に、実戦的訓練を嘆願したのだった。

因みに その際、

「これは秘密の訓練だ！

オメー等は、とっとと帰れ！」

とばかりに、その様子を見学しようとした生徒達を、必死に先に帰そうとしたのは、ま

た別の話。

「皆々、帰ろぜ〜?」

吉良つちさく、負けるの見られるのが、嫌なんだつてさく♪」

「ケツ!それなら、仕方無えな! w w w」

「ほくら、陽菜も、もう帰るよ!」

「う〜、烏間先生が、きーちゃんをけちよんけちよんにするトコ、見たいのにい…」

そしてカルマ、正解(笑)。

尤も、訓練云々の他にも、単に1人の男として、自分の知る限りの『最強の男』に勝ちたいという、脳筋な戦闘的思考が否めないのも事実だが。

小宇宙(コスモ)を使わなければ、その戦闘能力は世間一般の常識の範疇で、チート中学生と云うレベルな響。

烏間以外にも、沖縄に向かう前の訓練にて、講師役に喚ばれた暗殺者にも模擬戦で及ばず。

東京に戻った後も、その後の訓練で、講師として再来日したグリップに、模擬戦にてカルマ共々、地を舐めさせられていた。

『素』ならば、まだ中学生に過ぎない響より強い存在は、『表』なら兎も角、『裏』の世界ならば、まだ、幾らでも居るのだ。

をしてもらった店員の、その尋常では無い体型（スタイル）について、思春期真っ只中の中学生な如く熱く語り合い、盛り上がりつつもするが、今は1人。

この様な店で、ぼつちでテーブル席に着く勇氣は無いのか、テイクアウトで注文する響。

「畏まりました。」

テリヤキマグ○バーガーのSセット、飲み物ゴーヤ・オレ、テイクアウトでオーダー入りました。」

7月末、ある事件が きっかけで、この店の店長代理と その元カノ共々に、それなりに仲良くなったバイト店員も、「何時もの」で普通に理解、店内奥にオーダー。

その時、

「響く〜ん!」

「?!」

店内で響の名前を呼ぶ声が。

その声の先に目をやると、市内で名門と謳われている女子校の制服を着た少女が、笑顔で手招きしていた。

「あ、やっぱし、店（こ）で食べます。」



テリヤキバーガーのセットが乗ったトレイを持ち、自分を呼んだ、女子高生他2名が座るテーブルに着く響。

「ども、香純さん。」

水沢香純。

響の兄の煌介の彼女である。

「ねえ香純、誰よ、このコ？」

「私の彼氏の弟君だよ。」

「あー、あの、目付きが悪い…」

「あの、メガネ○クザの…」

「目付き悪い言ーなあ!!」

あれわあ、鋭いって言うの!」

「いや、あれは どう見ても、暗殺者（ヒットマン）の それだったし。」

「若しくは殺人鬼。」

「ははは…」

香純が同席している友人達に、響を紹介するも、その際の『煌介は目付きが893』発言に、香純は怒（おこ）になり、あながち間違っではないかと思え、苦笑いするのは響。



その後、響と3人の女子高生は駅に。

「おい、お前…吉良響だな？」

「??？」

帰りの電車を待っている時に、駅のホームで、事件は起きた。

響に、「如何にもケンカ売ります」な顔付きをした、2人の男子高校生が話し掛けて来たのだ。

その制服から、桐ヶ丘学園の高等部の生徒だと分かる。

『いや、違うね。僕は吉良響の双子の弟の、吉良輝（ひかり）だ。いゃん♪』

「はああっ!!？」

間違い無く、厄介事を吹っ掛けられるのだけは即座に理解出来た響は、適当に誤魔化して切り抜けようとするも、

「巫山戯てんのか、テメー!!？」

双子の弟と云うのは、流石に無理が有り過ぎたのか、高が中学生如きにおちよくれたと判断した高校生の1人が、拳を振り上げてきた。

「おわつとお?!」

ガン!

「ぐわっ?!?」

「きゃああっ?!?」

…尤も それは、カウンターの正拳で簡単に往なされたのだが。

その いきなりの暴力的な光景を見て、香純の友人2人が、思わず悲鳴を上げ、

「…2人共、大丈夫よ。」

そんな2人に、動じていない香純が、心配無いとフォロー。

「うぐぐ…」

「はあ…」

ヴァイオレンスxヴァイオレンスな展開になるのは読めてたから、折角 穩便にスルーしようと思っていたのに…」

心底、「」(ハ、)「 やれやれだぜ」…な顔をして、ダウンしている男に言葉を掛ける響に対し、

「いーえ!絶対嘘よ!」

「キミ、ワザと言ってるよね!」

香純の友人AとBから、突っ込みを受けてしまうが、

「いや…響君、真剣に言ってるのよ…」

「嘘おっ?!?」

エスカレーター上がりのアンタ等なら、それを言えば、十分に理解出来ると思うが？
それにだ：悪いけど、この件は、あ・の・理事長先生公認だぜ？

文句が有るのなら、理事長先生に言えよ？

頭良い学校の、頭良いクラス出身だろ？

いきなり、暴力沙汰に出るって、ドーよ？」

それでも本人なりに、懸命にクールダウンして：傍から見たら、どう見ても挑発している様にしか思えないトークで：真剣に暴力沙汰を回避しようとする響だが、

「だ、黙れ！」

「テメー！中坊の分際で、年上に対して、何て口の使い方だ!!」

やはり、結果的に、その台詞は火に油。

2人の高校生は、完全に頭に血が上り、問答無用で同時に響に殴り掛かっていった。

響の弱点：話術がザル。



「う：：がが：：」

「だ・か・ら、弱つちい癖に、少しばかり先に生まれただけで、偉そうに言ってるなよ、

セ・ン・パ・イ？ w w w」

しかしながら、当然の如く、響に一般の高校生程度の拳が届く筈も無く、それぞれの攻撃を左脛と右膝でブロックすると、上、中、下…蹴りの連打で黙らせる。

「弱い！」「だっさ…」

「自分達から中学生1人に2人掛かりでケンカ売っておいて、それでも勝てない高校生…www」

その有様に、響の無双っぷりではなく、襲撃者のヘタレっぷりに、ドン引く香純達。
ダッ…

「…るっせーぞ、このブス共が！」

「キャッ!」

「香純さん!?!」「香純?!」

しかし その言葉に、男子高校生の1人が逆上、香純の下へダッシュすると、其の儘彼女を背後から取り押さえ捕まえる。

「ちよ…何すんのよ!?!」

「うるせーぞ、このブス！」

お前は、人質だよ！

おう、吉良あ！お前、解ってるよな？

抵抗したら、この女、どうなるか…

「まず、こっちの要求を飲んで貰う前に……」

「ああ、今の蹴りの礼を、させて貰わないとな……」

「さあて、抵抗したりするなよ？」

「反撃は勿論、躲したりブロックするのも無しだぜ？」

「さあ、楽しい楽しい、サンドバックの時間の始まりだぜい……！」

「……………。」

もう一人の男子高校生が、下卑な笑みを浮かべ、ゆつくりと響に距離を詰めてきた。

制裁の時間

「何してんのよ!?」「この卑怯者!!」

「中学生一人に、高校生が2人掛かりで、更に女を人質にする？」

「本当に情けないわね……?」

「る、るっせーっ！おい、構わねーから、そのガキ、殺っちまえ!!」

「お、おう……!」

「……………」

香純を盾にする事で、その友人達、そして当人からの蔑みを受けても、その暴挙を止める様子を見せない2人。

年下のガキに、舐められた儘では終われない。

兎に角、このガキをメないと、気が収まらない。

先程の僅かな乱闘で、その実力差だけは、理解分析は十分に出来ていた筈。

しかし、完全に頭に血が上り、結果にだけ執着する余り、その手段工程に迄、思考が及ばなくなっていた。

年上云々という小さなプライドに拘っているが為、外聞等の冷静な判断が……その行為

が、恥の上塗りになる等の判断が、出来なくなっていた故の行動だった。

「そんな訳だ、動くなよお、ガキい!!」

ぶん…

「きゃああああっ!!」

響の目の前に立った男が、右の拳を大きく振り翳し、それから成るであろう理不尽な暴力に対し、悲鳴を上げる2人の少女。

どん!

「ぎゃああああっ?!」

そしてホームに響く断末魔。

「…つて、え?!」

「な!?!」

「くす…」

「痛てててたたた!」

テメー、何しやがる!?!」

しかし その次の瞬間には、その振り下ろされた腕はガツチリと捉えられ、響の脇固めが きつちりと極まっていた。

その様に、ある者は想定外の展開に驚きの声を上げ、ある者は想定通り過ぎる展開に苦笑。

そして また ある者は、訳の解らない儘に腕に走る激痛…その原因である少年に、文句を飛ばす。

「痛ーんだよ！放せよコラ!!」

「…おい お前、今直ぐ、香純さん離せ。

でないと、コイツの腕、破壊するぞ。」

腕を極められ、痛がる男の声を完全スルー、香純を捕らえている男を睨み、自分の要求だけを突き付ける響。

しかし、

「はっ…やれるもんなら やってみろよ?」

そんな言葉はハツタリとしか思っていない この男、挑発じみた下卑な笑みを浮かべると、

むにゅ…

「きゃあああああつ?!」

「おほっ?結構あるじゃねーか?♪」

香純の胸に手を回し、これまた挑発するかの様な、鷲掴みからの揉み解し。

ち抜いた。

「おい固羅……テツメー、何を巫山戯た事、してくれちゃってんのお？」

お陰で死亡フラグ、立っちゃったじゃねーかよ？

どーしてくれる訳なの？これ？」

憤怒、恐怖、悲哀、絶望……

目に涙を溜めながら、有りと凡ゆる『負』の感情を混ぜ込ませにした様な凄まじい表情で、香純を捉えていた……今はダウンしている高校生を睨み付ける響。

「すす……すまなかつて（ゴガツ！）ぎゃん!!」

余りの迫力に、男は蹲った儘 謝ろうとするも、その謝罪の言葉を言い終わる前に、今

度は顎に、容赦の無い爪先蹴りが炸裂。

「あがが……」

「巫っ山戯んなよ このタコ! 『すまなかつた』で済む程、ウチの兄貴様は優しくねーんだよ!」

「あえ?!」

「へへ?」

何故に此処で『兄貴様』とやらが……?

数人が『?!』な表情を浮かべる中、泣きそうな、何やら訴えかける様な顔で、香純に

「か…勘弁してくれ…」

香純を捉えていた男から、身元を確認する意味で学生証を取り上げてみると、それは知っている名字。

改めて顔をよく見てみれば、兄なのか或いは従兄なのか、知っている人物に何処と無く似ていた。

「おい、黒幕君に伝えておけ…。」

お前、死亡フラグが立ったってな！」

ビリ…

学生証の、住所等が記載されているページを引き千切り、ポケットに入れた時に、丁度ホームの彼方から、乗車する予定の電車がやって来た。

最初に絡まれた時点で、ホーム全体に張っていた、小宇宙（コスモ）を使った『人払いの結界』を解除した後、

「……………」。

……………「……………」。

「……………！」

未だホームで蹲っている高校生2人に一言二言交わすと、響達は電車に乗り込んだ。



「えと…吉良君？」

「はい？」

「最後、アイツ等に、何を言ってたの？」

香純の友人Aが、響に質問してきた。

「大した事じゃあ無いですよ。」

あの乱闘について軽く、口止めしてた、だけですよお♪

高校生2人が中学生1人相手に一方的にケンカ売って、女を人質に捕っても勝てませんでした…こんな醜態、ケーサツ沙汰にしたけりや、勝手にしろってね。

コッチは正当防衛だし、黒幕君にも被害が及ぶよお？…ってね。」

「響君、その時は あたしも証人になってあげるよ。」

ついでに、猥褻罪の併せ業を突き付けてやるわ！」

「……………」

響の辞書には、『過剰防衛』という単語は載ってなかった。



カチャ…

「ただいま〜」

何を面白い事してるの〜?♪」

「カルマ…?」

其処に現れたのは、赤羽カルマ。

「……………」

ニヨキ…パサパサ…

目に写った面白場面を見て、悪魔モードになるカルマ。

とりあえず撮影しようと、ズボンからスマホを取り出した時に、

「カルマ、今回は んなバカッターみたいな真似は止めとけ…」

「ちよ…マジ?…つてか、ガチ!」

普段から連んでは悪巧みしてる顔でなく、その響の、遊びが一切無い顔で撮影を止められたカルマも、目の前の其れが余程の事だと察知し、

「じゃあ…俺、先に行ってるし♪」

シュ…

角と羽を素直に引っ込め、早々に、その場を後にする。

「ああ、後でな。」

カルマが見えなくなるまで見届けた後、響は未だに土下座した儘のA組一同に、再び目を向けると、

「おい、お前等、何時迄そーやってる訳？」

いい加減に頭、上げたら？

なあ？ああくらあくきいゝい？」

「ひいひい!!？」

1人を名指しして、土下座を解く様に、呼び掛けた。



バキイツ！

「かはあつ!？」

響の放った右の裏拳が、浅野の顔面を捉え、吹き飛ばし、

「「「きやあああつ!!」「」」

それを見たA組女子が、悲鳴をあげる。

「か…勘弁してくれ…」

ドガッ

「がっ…!!」

「はあ?『勘弁して下さい』…だろ?」

そんな悲鳴を無視、更には その口振りが気に召さなかったのか、倒れている相手に サッカーボールキックを飛ばす響。

「俺は昨日の夜な、そのバカの御陰様で、兄鬼にシバかれてるんだぜ？」

そんな一言二言で、済ませる心算か？」

響は既に襪襦襪になり、校門脇の壁に凭れ倒れている、『荒木鉄平だった物』を指差しながら話を続ける。

そう、昨日に絡んできた高校生の学生証には『荒木鋼壺』という名前が。

痩せた頬や、やや尖った顎：骨格を除けば、目鼻口のパーツは、荒木と同じと言って 良い造り。

昨日の黒幕が誰かは、明らかだった。

「勝手に土下座して、それで何でも許されると思ってるか？」

それとも さっきのカルマみたく、バカッター拡散誘導して、其れを出汁に、優位性を持つとうとしたか？」

「いえ…そんな心算じゃ…」

「念の為に聞くが、実は、お前の指示って事は、無いだろうな？」

「い、いや！それは、断じて違う!!」

流石に心外な問い掛けに、声を荒げて浅野は答える。

「あ、浅野君!!」「大丈夫!!」

響が去った後、数人の女子がハンカチを持ち、浅野に駆け寄った。

「あ、ありがとう……でも、大丈夫、平気だから……」

しかし浅野は、その施しを拒み、自らの懐から取り出したハンカチで口元を拭う。

「その……浅野、済まなかつた」「黙れ。」

「……………!?!」

そして、今回の元凶として、謝罪しようとした荒木の言葉を遮ると、

「僕はテストの後に、言ったよね？」

僕が指示を出す迄、大人しく『お座り』して『待て』……と。

それを一人で無視して、勝手に暴走した挙げ句、コレの様だ。

そもそも、吉良本人も言っていたけど、高校生たった2人程度で、アイツを力で屈伏

出来ると思っていたのか？」

「うう……」

父親・浅野學峯理事長には及ばない物の、それと同じ属性の、支配する者が持ち得る、

冷たい視線を荒木に向ける浅野学秀。

「荒木だけでない。」

君達にも、言っておく。

良いな、次に僕が指示を出す迄、勝手な真似はするな。

心配しなくても、僕は既に夏休みが始まる前から、E組を…吉良を倒す準備を進めているんだ。」

「「「「浅野…」」」」

「「「「浅野君…」」」」

そして、次の策は既に有る事を、自分の”駒”達に告げる浅野。

「だから、その時が来るまで、僕が『良し』と言う迄、大人しく待っている。」

そう言うと、浅野は制服に附いた汚れを払い除け、

「ひえっ!」

「浅野…君…?」

「あ、浅野…?」

…その見た者が脅える程の、屈辱を噛み締め、報復に燃えるその怒りに歪めた表情を隠す事無い儘、自身の教室へと歩を進めて行った。

「吉良…来週の体育祭…」

その時に お前だけは、確実に…潰す!!」

戦力の時間

ガラツ…

「……つす。」

「あ、吉良…」「吉良君…?」

「お前、何だか派手に 殺ってたよな…」

「あれ、何が あったのよ?」

「普通なら兎も角さ、とても あの場で声を掛けられる様な空気じゃなかったから、スルーしたけどさ…?」

「お…:応…」

教室に入った途端、校門前の立ち回りを見ていたクラスメート達から、質問責めに遭う響。

「ん、話せば長くなるが…」

「3行で説明しろ。」

「ええ、つ?」

1行目

昨日の帰り、駅で高校生に絡まれた。

2行目

それをソツコー返り討ち。

3行目

実は、それを仕向けたのは、A組の荒木。

「よっし！上手く纏める事が出来たぜ！

…まあ、そう云う訳だよ。」

「ちよつと待て。

こーゆー時は普通、オチとして、4行目を付け足す物だろ？」

「不破ちゃん？」

~~~~~

「成つる程ね〜♪

それで、恐らくは襲撃失敗、&バックが自分だつてバレた荒木が、「浅野、どうしよ〜？(泣)」って泣きついて、浅野が仕方無く、ラインかメールかでクラス全員に報せた上

での…」

「集団DOGEEZAR!!…って訳ね。www」

「それにしても、普通、ヒットマン刺し向けるって…其処迄するかあ?」

「アイツ等も 段選ばなくなつて…あ、これは最初からか…」

響から刺客云々と云う、粗方な話を聞かされ、苦笑失笑、或いは やや引きなクラス  
メート達。

「単に俺一人を狙うだけなら まだ良かったが、偶々一緒だった、アニキの彼女を人質に  
捕ったりしてな。」

マジ、一級死亡フラグ建築士だぜ。」

「吉良っちの お兄さんの彼女…」

「あ、あの怖そうな お兄さんの…」

「…あの、超美人な彼女さん?」

「なぬ?」「超美人だ?!」

以前、煌介と一緒に香純を見た事のある、速水と矢田と片岡、そして約2名が反応。

「メガネのチンピラだ…」「怖っ!!」

「綺麗な人…」「凄え!マジに可愛い!!」

更には律が、何処から情報を得たのか、顔写真の画像込みで、煌介と香純の2人を紹

介したりするのを、響がジト目で止めに入ったりしたのは、また別の話。

「おい、チャラ男とエロ坊主、今は そんな話、どーでも良ーんだ。

それで…だ、香純さん守りきれなかったただけで、俺も その、恐い怖い鬼いさんからシバかれて、ほれ！」

「…「うっわ…」…」

「…「ご愁傷様です…」…」

「…「本当にチンピラ…だ？」…」

前髪を掻き上げ、額の絆創膏を見せる響。

「絆創膏（コレ） 見るだけで、大体の想像は付くだろう？」

煌兄も、自分の彼女（おんな）をブス呼ばわりされたり、あんな真似（※…乳揉み）されて黙っている程、聖人君子じゃあない。

俺に刺客を送り込んだのとは別枠で、個人的復讐な意味合いで、兄弟（十もう一人）纏めて殺つちまうだろうよ。

既に荒木ん家の住所、割れてるし。」

「…「荒木、南無!!」…」



「それにしても、高校生2人を瞬殺かよ…」

お前も いよいよ以て、人外の域に到達してんじゃねーか?」

「はあ?この俺如きが人外?」

おい村松、世界中の人外の皆さんに謝れ。

とりあえず今直ぐ、鳥間先生に土下座してこい(笑)。

俺は一般中学生と比べたら、少しばかりチートなだけだよ。」

「チートなのは、自覚あるのね…」

「それでもコイツを確実に殺るには、少なくともプロレスラー5人位は、雇わないとな!

(爆)

「ああ、その時は謝るか抗戦するか、バカのフリして逃げるか…」

その場で3秒位、考えてやるよ(笑)。」

「戦うかもは、知れないんだ…」



「棒倒し?」

「ああ。」

荒木と浅野の惨殺(注:殺つてません)と、響のチートつ振りの話が一通り終わった後は、昨日の委員長会議にて話された大まかな事柄を、磯貝と片岡が皆に報告。

来週末に催される体育祭の話題に。



片や歴代のE組は、そんな兇悪な人選メンバーに女子を宛てがう訳には往かないと、男子生徒だけで応戦。

結果、人数差約2倍と云う、数の暴力の前に屈していたと云う。

「…成る程ね。」

しかし改めてだが、本ト、連中は糞だな。

前に瀬尾なんかにも言った事あるが、其処迄して、優越感に浸りたいのかねえ？

去年迄 外様だった俺から言わせりや、E組（オレたち）みたいな存在が居ないと安心出来ないなんて、余裕無さ過ぎだぜ？」

「吉良君…？」

自身がE組行きのキツカケとなった出来事を思い出しながら、やや不機嫌そうな顔になり、響は話す。

「まあ今年も、同じパターンなんだろうけどね〜？♪」

「ああ、多分そうだろうな。」

そして当然、こつちも女子は出したりは、しないよ。」

「それが普通だな。」「流石に…な…」

磯貝の「女子は出さない」の発言に、同意する男子一同。

ガラ…





「確かに、あのガタイは脅威だな……」

「あとは……C組に、やたら背の高くて目立ってる奴が居たよな……」

誰かアイツ、知ってるヤツって居る？」

「ああ、バスケット部の安堂だろ。」

「ん、まあその位かな？」

それなりに万能な奴等が集められるだろうけど、その他は所詮はモブ集団だろ？」

本校舎（あっち）側に、其処迄 体格とかパワーとか、規格外な奴なんか、もう居ないだろ？」

「そーだな。」

「……でも、何かしらの連携策みたいなのは、必要だよね？ 吉良っち参謀？」

「誰が参謀だ、誰が？（笑）」

……俺は どちらかと言えば、個人競技で好き勝手に場を掻き乱して無双したり、特定個人に指示したりが専門でね。

今回みたいな団体競技なんかで、一度に大勢に指揮するのは、実は苦手なんだ。

そーゆーのは寧ろ、お前や磯貝だろ？」

だから、今回は頼むぜ？ イケメン！」

「はは……努力は するよ。」





「…何か、問題や文句でも？」

「いい、いや、別に…」

其処迄するか…

そう思いながらも、浅野の一言で、黙り込む榊原達。

尤も引き顔なのは、榊原、瀬尾、小山の3人で、荒木は先に起きる惨劇をイメージしたのか、逆に見ている者が引く位に、不気味な程に、顔を綻ばせている。

明らかに、新年度時に予め組み込んであった留学生招聘ではなく、今回の棒倒しの為だけに、夏休み前に急遽、浅野が私的感情だけで、学校に打診して組み込んだ外人部隊  
招集。

「仕方ないだろ…あんな人道外れた様な、理不尽な『命令』を突き付けた、奴等（カレラ）が悪いのさ…」

怨むなら、あんな『命令』を思い浮かべた自分達と、それを容認した理事長先生を怨むべきだね。」

自分達が考案していた『命令』の内容を完全に棚で、澄ました啞い顔を見せる浅野。

「それに…皆だって、今のE組に、思う処が多々あるだろう？」

「……………」

浅野の問いに、無言となるA組の面々。

「うん。無理に喋る必要は無いです。」

でも…沈黙は、肯と受け取るよ？」

「「「「「「……………」」」」」」」

「良いかい？」

このイベントはチャンスなんだ。

A組（ぼくたち）とE組（かれら）の本来の立ち位置を、改めてハッキリさせる、ね。今回の勝負、いや、只勝つだけじゃない。

完全に彼等を叩き潰し、僕達A組…延いては本校舎の生徒達と、まともに目を合わせられなく程の、劣等感と恐怖心を植えてやるんだ。

それと、この棒倒しは学校内公式競技。

種目の性質上、多少の怪我は事故で済まされる。

そう、例えば…来月の中間試験の時期になっても、筆記具を持たなくなってる様な怪我をしてしまっても…ね。」

「「「「「……………!!」」」」」」

黒い笑みを零す浅野の真意を理解し、先程とは別の理由で、無言となるA組一同。

「其処迄…する心算かい？」

そして父親である理事長を思わせる その冷たい笑みに、榊原が やや引き顔で、ボ

ソリと眩くのだった。

「Hey、ガクシユウ。」

「リーヴ…」

そんな中、留学生の1人、リーヴ・メイプルが浅野に話し掛ける。

「7月、オマエからMailやLineでなく、直接の電話を受けた時は、流石にビックリしたZE。」

まさかオマエが、『どうやっても勝てない相手が居るから、力を貸して欲しい』って言うてくるとはな！

「ははは…言うなよ…」

「ふ…ガクシユウに勝てるという男、凄く興味が有るじゃないか！

ティツク、オマエも そう思うだろ？」

「ん、確かにGAKUCHINに勝てるって、余つ程だよね？」

このリーヴの呼び掛けで、ティツキー・パープルも、会話に参加する。

因みに この3人の やり取りは、全て英語である。

「JAPANでは、一度敗れた者が、再び勢いを取り戻す事を、『KENDOCHOURAI』と云うらしいな。

OK、ガクシユウ！オマエのKENDOCHOURAI、俺達が協力してやるぜ！」





「Thanks.」

「「「「「「.....」」」」」」

留学生招聘の件は、律が学校端末にアクセス、リサーチしていた事で教えられていたE組一同。

A組に偵察に向いていた、ラジコン車輛【糸成式號】が収録していた会話を聞き、そして律本体の液晶画面にて紹介された4人の留学生の容姿を見て、言葉を失ってしまった。

「はっはっはー！其処迄するかー？」

「いやいや、笑えねーって……」

「「「「「.....」」」」」」

単に本校舎勢なら、楽勝と踏んでいた雰囲気、一気に静まり返る教室。

「……てゆうか、来月の中間にまで影響が出る怪我って、どんだけだよ？」

「心配するなよ。」

どーせ、本命のターゲットは俺だろ？」

「吉良あく！随分と余裕だな？おい!？」

「……でも、あれってさく、『吉良つちにマトモにテストで勝負しても勝てません』って言うてるのと同じだよね〜？♪」

「応、事実上の敗北宣言だな。」

物理的に試験受けさせなくするって、御坊ちやま、一杯一杯になってるな？w」

「「た、確かに：wwww」」

しかし、響の一言で、その雰囲気もリセットされる。

「とりあえず、作戦の練り直しだね。」

~~~~~

ぼん！

「ん！良い策、思い付いた！」

何かを思い付いた様に掌を ぼん！…と叩き、皆の注目を集めるのはカルマ。

「ああ?!大丈夫かよ?」

今の お前の顔、最高に善からぬ事を考えてる顔だぜ?」

「ちよ…寺坂くあ?」

少しは信用してくれよ?♪」

~~~~~

…カルマの策を簡単に言えば、こんな感じだった。

①守りは寺坂、吉田、村松の3人で、残りは全員突撃する。



「ああ、それは分かるが……っ!」

「気付いたか?」

カルマの狙いは『競技の勝ち』でなく、折角 海外から強力助っ人呼んだにも拘わらず、その目論見をスカす……ってトコだよ。

必死になって根回し小細工してたのが、全部無駄になって、ざまあ!!……みたいな?

オマエ達が犠牲……って部分は、軽いジョークだろ。……だろ、カルマ?」

「……………」

「……いや、応えろよ!!」

カルマが考案したのは、あくまでも競技に於ける『勝ち』ではなく、浅野の本気(笑)を汲み、敢えて それを全て無駄骨にするが如くな、早々に試合放棄と受け取られても仕方無しな……嫌がらせを優先とした作戦。

『其れもアリだな(爆)』……という意見も出るには出た。

しかし結局は、やる気無しな底辺クラスから何時の頃からか、負けず嫌い集団と化していたE組が、最終的に それを選択する事も無く、

「皆……本校舎側と言うか、浅野は、あっさりと終わらせる戦略は執らない筈だ。

俺達全員を……少なくとも、吉良を潰す迄は、棒を倒す様な指示、作戦は無いと思っとうんだ。」



生徒の1人が、恐らくは彼の母国語が書かれてあるカンペを読みながら、  
「ツブシテクレ……!!」

3人で出し合ったのだろう、10数枚の一万円札を差し出した。

「……………(コクン)」

そして留学生は、無言で其れを受け取ると、小さく頷くのだった。

## 体育祭の時間

体育祭の日が やってきた。

「あ〜ん〜1位獲れなかつたよお〜!!」

女子徒競走にて、暗殺訓練の成果もあり、かなりの身体能力を得ている矢田だったが、順位は2位となる。

「ま、矢田さんは仕方無いちゃ、仕方無いよな。」

「…だよな。胸元に あれだけ、重量的にも空気抵抗的にも、ハンデ背負っていた（ガン!!）わばあ?」

「「「お、岡島あーっ!?」」」

「うがーっ!!」

「茅野ちゃん、落ち着いて!」

~~~~~

「凄えぜアイツ等!何の抵抗も無く、網の中を進んでやがる!!」

障害物競走の障害の1つ、ネット潜り。

茅野が その網の下、地面と接している胸部との間に何の抵抗も無く（涙）、素早く歩

伏前進で突き進む。

しかし、此処での快走も及ばず、結果は2位に。

「ふっ…」

そして1位を獲り、茅野に対して勝ち誇ったドヤ顔をしているのは、茅野以上の抵抗の無さで他者の追隨を許さず、先に綱を潜り抜けていた、バスケットボール部主将の掛布ランデ이버だった。

「く、悔しくなんて、無いんだからね!」

~~~~~

「前原く、お前、何やってんだよ?!」

「俺じゃない!岡野だ!!」

「…ふん!」

二人三脚に、E組代表として出場した、前原と岡野。

序盤は息の合った走りを見せ、トップに躍り出るのが、終盤に前原が突如として体制を崩して失速、ゴール時には3位となっていた。

「いきなり岡野が、脇腹に肘鉄打つからだよ!」

「どさまぎで お尻、触ろうとしたからでしょうが!この変態セクハラ男!!」

「はあ?誤解を招く発言は止めろ!」



腰に手を、回そうとしただけだし？」

「「「前原、お前が悪い！」」」

~~~~~

「あ……あの……ビッチ先生？」

「ん？渚、どーかしたの？」

借り物競争に出場していた渚が、イリーナに声を掛ける。

「その……僕の御題が、『ちてきな女性』だったから……」

「なぬ？知的な女性?!

なあぎさあ~~~~~!

あんた、分かっているじゃないの~~~~!!」

「う。ふ。ふ……?!ビ、ビッチ先生!?

苦ひいってば!!」

……渚が拾った御題の札には、『痴的な女性』と書かれていた。

そして渚がイリーナに話し掛けた際の、公開顔面圧迫刑が御題クリアの決め手に。

見事、1位を獲ったのだった。

「むっき~~~~~!!

何だか、納得イカないわ!」

「E組は、常にENDの象徴でなくてはいけない……この学校の理念に従っただけさ。

例え、A組（ボク）が勝てなかったとしても、E組（カレラ）を勝たせる訳には、い
かないんだよ。」

「お前……………!!」

それだけ言うと、浅野は改めて、A組サイドに歩を進めるのだった。

そして、体育祭の真のメの競技、本校舎選抜チームvsE組の、棒倒しが始まる…。

衝突の時間

「Hey, これは一体、どういう事だ？」

ガクシユウ？」

グラウンドのトラックヤードの内側、両端に用意された直径20センチ、長さ4呎の丸太。体育祭の真のメのイベントである、本校舎選抜チームとE組による、「棒倒し」の準備が整った。

しかし、その開始前、

「向こうは何故、俺達の半数程度しか居ないんだ？」

「あゝ、GAKUCHIN？」

俺も それ、少し気になってるし？」

本校舎サイドにて、E組陣営を見たリーヴ・メイプルとティツキー・パープルが、向こう側の参加人数について、浅野に問い掛けていた。

「気にするな。」

コレは本校舎（ボクたち）とE組との総力戦なのに、向こうが勝手に、女子を引っ込めているだけだろう。」

「WHAT?!」

浅野の発言に、声をハモらせる2人。

ぐい…

「うぐつ!?!」

「フ・ザ・ケ・ル・ナ!!」

オマエは場合によっては、俺達に女相手に手を上げさせようとしていたのか?!」

「うが…」

「あわわ…Leachin、少し落ち着こ!?!」

Cool down!ね?ね?」

その内容に怒りを露わにし、胸座を掴むと、その身長差を活かし浅野を高く持ち上げ締め上げ、更に問い詰めるリーヴ。

そして やはり最初はキレ気味だったが、完全に頭に血が登り、暴走したりリーヴを見て、少っだけ冷静さを取り戻したティツキーが宥めに入る。

「ハア…ハア…」

そして漸く地に下ろされ、胸元を抑えながら息をする浅野に

「んゝ、流石にコレは、無いわあゝ…」

冷めた、呆れかえる表情で、ティツキーが話し掛ける。

更には

「Hey, アンタ等は どうするんだ？」

まだ、この茶番に付き合う心算かい？」

リーヴが残る留学生……浅野が喚んだ助っ人2人にも、ボイコットを呼び掛けるが、

「……………?」……………。

「あゝ、英語、通じてないし〜?」

最初から、この3人が何を話していたのか分からず、そして今も何を言われたのか解らない、韓国人とブラジル人の2人はノーリアクション。

「Damn it!!」

もう良い!行くぞ、ティック!!」

「らじやあゝ。」

「ま、待つてくれ!」

そう言つて、グランドを去ろうとする2人に、

「分かった!」

此方も彼等に人数を合わせるから!」

リーヴのジャージの裾を掴んで、必死に呼び止める浅野。

パシイッ

「Down, touch Me!」

「I will twist & crush it?」

「っ…!?!」

しかし、その手を振り払い、まるで少し前迄の、本校舎の生徒達が、E組の生徒を見ているかの様な…否、それ以下の物を見るかの様な冷めた視線、低いドスの利いた声で浅野を黙らせる。

「オマエに勝っているヤツが居ると聞いたから、わざわざ海を越えて やって来たのだが、どうやらソイツが大したヤツでなく、オマエが大した事の無いヤツに、堕ち果てただけだったみたいだNA!」

「…だ、よね〜♪」

「アサノ、俺は本当にオマエのリベンジ…捲土重来に協力する心算だったんだ…」

しかし、オマエが今やろうとしているのは、恥の上塗りだ。」

「悪いね、アサノ〜?」

俺達、卑怯者の協力者なんかには、なりたくないし〜?

時には手段選ぼうも、悪いとは言わないけどさあ、本当に、コレは無いわあ〜…」

「じゃあな、アサノ…オマエとは2度と、関わる事は無いだろう。」

「あでお〜す!〜♪」

棒を支える要に、ブラジル人のレアオ・ミンタニア、攻撃部隊の先頭中心に韓国人のキム・ザンジウを敷いた布陣。

本来ならその後列に、カナダ人のリーヴと、アメリカ人のティツキーの部隊が並んでいたのだろう、その陣形を見たカルマと響が、笑いながら話す。

「磯貝の読み、的中だな…」

「はは…吉良に少しだけ、習ったのさ。」

どう攻めるかを考える前に、浅野なら、どういう戦略を組むか…ってね。

今回はあの助っ人外人参入のお陰で、逆に尚更読み易かったよ。

少なくとも最初は、コッチの小細工すら、力で跳ね返す様な、パワー全開な陣形を執って来ると思ってた。」

「…そ、そうか…でも磯貝、吉良を習うのは、程々にしとけ。」

「「「「ん、んんんん。」」」」」

「え?」「へ?」

響の戦術思考を参考にした…この発言に、やや顔を顰める、前原を始めとするE組一同。

「磯貝、お前だけは、ずっと真っ直（イケメン）でいるべきだ。」

「「「「ん、んんんん。」」」」」

「えええっ!？」

「待て、どーゆー意味だ？ 固羅?!」

「それじゃ、僕達も…」

「だね。当初の予定通り、と…♪」

「」「」「」応っ!」「」「」「」

そして寺坂を中心に皆が棒を支え、浅野同様、その上に棒に背を預ける形で、磯貝が立った。

「無視か——————————い!?!？」

Bannon!

そして遂に、競技開始を告げる、ピストルの音がグラウンドに鳴り響いた。



「おい、浅野…?」

「アイツ等…」

「!？」

E組が最初に執った戦略。

それは、一斉攻撃で来ると読んでいた、浅野の読みとは真逆の、

「E組、勝つ気があるのか？」

「攻めて来る奴、1人も居ないぞ?！」

開始の合図（ピストル）前、最初に全員で棒を支え、その上に司令塔の磯貝が立った儘から、誰1人動かさずの陣形だった。

「通称・完全防御形態…!!」

さあ、攻めて来い、浅野！」

緊張感を崩さない顔で、彼方の浅野を挑発する様に、見据える磯貝。

「（誘い出す心算かい？甘い！）

…攻撃部隊、計画（プラン）B！」

スウ…

その陣形を見た浅野が、無言で右手を前に出すと、掌を下に向けて横に小さく振る。

「……!!」

それを見たザンジウが、4人の生徒を引き連れ、E組陣地に突撃。

どどどど…

「あ、あのデヴ、凄えーっ?!」

その体格からは想像が付かない様な猛スピードで、一緒に攻めに来ている生徒を置き去り、殆ど単身で、E組が守る棒に特攻を仕掛けるザンジウ。

ダッ

「ちいつ!」「させねっての!」

「お、おい、お前等!!?」

それを見た岡島と前原が、飛び出して止めに入るが、

「……」

ザンジウは両腕を左右に大きく広げると、まるでダブルラリアットの様な、

ドスウツ!

「ギヤーツス!」「ドイヒーっ!」

腕でのタツクルで、2人を吹き飛ばす。

「げ!」「おいをゐ?」「まぢかよ?」

うおおおおおおおおおおお!!

『ななな、なんつーパワーだ!!』

韓国相撲・シムルの学生YOKODUNA、キム・ザンジウがタツクルで、E組の2人を客席迄、およそ10回は吹っ飛ばしたぞ!!』

見学者の歓声と、その展開に絶好調な荒木のアナウンスが、グラウンドに響く。

「かかか……こんな間近で、E組のフルボッコを拝めるなんてな。」

「惨殺劇(シヨータイム)、スタートってか?」

『な、何とおーっ!』

E組、ザンジウ達のタックルを躲したかと思えば、そこからの押さえ込み!』
 そして、

ずん…

「もがつ!!」「んぎぎぎ?!」

『更には、自軍の棒を自ら半分倒し、その棒の重みで、ガッチリ固めた…だとお?』『ちつくしょ!動けねー!』

「退けよ、お前!」「重いんだよ!」

身動き出来ない男子生徒が、文句たらたらの中、

「ふっ…これでE組、48の必殺陣形の1つ…」

【触手・風林火山『山の章』】!…な〜んてね!♪」

「はああ?!」「??」

悪魔の角と羽を生やした2人が、したり顔で解説?をする。

『は、これはキツい!』

E組まさかの突破り、【自軍棒倒し】で5人1度に雁字搦めに捕らえたあ!』

「…!!」

『一番下の位置、皆の下敷きの形になっているザンジウは、特にキツそうだ!!』

アナウンスの通り、作り顔でない、苦悶の表情を浮かべるザンジウ。

如何に学生YOKODUNAでも、味方4人+敵7人の体重を跳ね返せる程のパワーは、持ち合わせてはいなかった。

「これが、『チート』と『人外』との差なんだよな？」

そうだろ、”準”チート君？」

「……………??？」

「あ、日本語解らねーか…」

~~~~~

「…やかなか やってくれる！」

結果、此方の攻撃部隊を、自軍の棒を支える土台役に組み込んだ事になるが…」

そう呟いた浅野は、

「両翼部隊！計画（プラン）しだ！」

両サイドの5人編成部隊、計10人に指示。

ダダダッ…

『おっとお？本校舎サイド、両脇を固めていた2部隊が救援に！』

この“戦”も、いよいよ本格的な様相に なってきたぞ！」

「それでも…此方の有利は揺るがない！」未だ、余裕と自信の笑みを、崩す事は無かった。

## 戦術の時間

「…ふん！」

「Leachin、どうどう… (:D)」

「もうキレてねーよー！」

「いやー！まだキレてるね!!」

キミ、絶対にキレてるよね！（XD）」

「「「「「……………」」」」」

A組側の見学席。

敵意、殺気を撒き散らして周辺を黙らせながら観戦しているのは、浅野の考え方、価値観に反発、絶縁を宣言したりーヴと、それを宥める様な？ティツキー。

「ち…」

夏休み前、浅野からの電話を受け、助っ人要請に二つ返事で応じていたりーヴ。

その後、改めて防衛学校で行われた棒倒しのネット動画を見て、初めてその競技の存在を知り、その内容に興奮。

カナダの力自慢は自分も この素晴らしくエキサイティングな競技に参加出来ると

思い、且つ、海の向こうの万能な親友に勝っているという男との対峙に、この体育祭の日を待ちわびていたのだが、いざ当日に蓋を開けてみれば、それは悪趣味な、数に物を言わせた蹂躪劇の片棒を掴ませる様な内容だった。

しかも場合によっては、女も その相手にしなければならなかったと云う仕組み。

仮にE組側が、人数差を埋める為に女子を動員していれば、こんな危険な競技に女を巻き込む不埒な輩として、浅野との縁切りは、それとして、結果としては浅野の望み通りになるとは云え、E組男子に制裁を与えていただろう。

いずれにせよ、純粹に競技を楽しみにしていた：良く言えばスポーツマン、悪く言えば戦闘狂、或いは脳筋な男からすれば、自分を喚んだ人物に失望するには充分過ぎていた。

「…全く、其処迄キレてるならさあ、E組側（アッチ）に、押し掛けで助っ人参加すれば良かったのに〜？」

「That's right!

ちよつと、行つてくる！」

「いやいやいや！もう、遅いからね？」

~~~~~

この棒倒し、浅野の目的は、単なる種目での勝利ではない。

響を筆頭とする、E組……今回の場合、その男子全員を、物理的に確実に潰す事にあつた。

「吉良……この戦術合戦で、僕の方が貴様より優れている事を証明してやる！」

これを見ている全校生徒に、そして……」

そして、響との優劣をハッキリさせる心算でいた。

……のだが、今回の棒倒し、E組の司令塔は響ではなく、

「来たぜ！」「どうするよ？イケメン！」

「よし、攻撃部隊、出るぞ！」

作戦は【粘液】!! 中央突破だ！」

「「「「応っ!!」」」」

クラス委員長・磯貝悠馬であり、その指示の下、カルマ、杉野、木村、菅谷、村松、そして磯貝本人も飛び出した。

『おおっと、本校舎の精鋭とE組が、ここでニアミス！』

しかし互いに干渉は無く、互いが敵の本陣を直指す！」

グラウンド両脇から攻める、本校舎勢の2部隊と、それによつて空いた隙を突くように中央突破を試みる磯貝達。

彼等と、E組側に攻めに入っていた本校舎勢が横のラインに並ぶ。

しかしアナウンス通り、両軍は只すれ違うだけに終わつたかに見えた。

しかし この直後、互いが数分前進したタイムリングで、急ブレーキを掛ける本校舎勢。踵を返して、磯貝達を自軍防衛隊との挟み撃ちするかの様に、防衛に……いや磯貝達に突撃を仕掛けるのだった。

『引つ掛かったー!!』

E組、見事に引つ掛かったー!!

これが本校舎サイドのリーダー、生徒会長・浅野君の戦略の1つ!

両脇から突撃を仕掛ける事で、敢えて中央に道を作り、少人数を誘き出し、そしてそれを挟み撃ち、大人数で潰す……【偽装突撃・前後挟撃包囲網】だー……!!』

そして本当に心の底から嬉しそうな、荒木の実況が冴え渡る。

「そうだ……そして この包囲網の要は、柔術のスペシャリストのレアオ!

締め技に関節技!

先に他の連中が壁となる事で、逃げ道を塞ぎ、その上でレアオが1人ずつ、確実に重傷を与え、仕留める!

さあ、吉良……どうする?

何時迄も守備位置(そんなトコ)に立ってないで、早くクラスメートを助けに、前に出て来いよ?

その迫力に、慌てて逃げ惑うD組一同。

「場外なんてルール、無かったからね〜♪」

来いよ、木偶の坊？

このグラウンド、全てが戦場だよ？」

「…上等だ!!」

言葉は通じないも、その顔とハンドアクションで、言っている事を理解したレアオがカルマを追い掛け、他の防御部隊も磯貝達を追い掛け回し始めた。

キヤーキヤー!!

うわああ…! !

ひいひいひいえ! ?

『な…何とE組、客席に逃げ始めた!』

そして それを追う本校舎勢で、会場は大パニックだ!』

D組の席だけでなく、次第に その周辺の、椅子や見物者を器用に使い、巻き込み、追撃を躲す磯貝達。

「これがE組陣形…【粘液地獄】だ!!」

そして、

『うおっ!! 今度はE組の赤羽、そして留学生のレアオが、放送席（コッチ）に向かって来たあ!……つて、うわああ~~~~~っ!!』

ガッシャーン!!

『うっギャアあーッス!!』

『あ……ごめ〜ん♪』

『………………。カルマの謝罪の音がマイクに拾われ、グラウンドに流れるが、荒木の返事は無し。』

放送席破壊と共に、荒木、リタイア。

「アレ、ワザとだな……」

「応、絶対にワザとだ……」

「ん、ワザとだよね……」

「なあ、吉良あ……コレも、オメーの『計画通り!』……の内なのか?」

「いや、流石に其処迄は……」

でも、とりあえずカルマ、グツジョブだ!! (b^_^)



「うがーっ!!」

「あは♪怖い怖い♪」

「待、てや、固羅、ア!!」

「待てと言われて、素直に待つ奴が居るかよ!」

「ちいい!ちよこまかと!」

「それが売りなんでね!」

その後も見学席の中、追撃部隊の手を躲していく磯貝達。

どん!

「おわっ!」

杉野も、持ち前の身軽さを活かし、飛び込んで来た追っ手を、直ぐ傍に居た見学者の背後に回り込んで回避。

追っ手は見学者と衝突する。

「痛てて…コラっ、杉野ーっ!」

「テメー、見物人（ひと）を盾にすんなー!!」

「わ、悪い、新藤…」

自分の為に犠牲になった人物に一言謝ると、また杉野は その場から走り出した。



「へっ!! 渚、吉良、見てみるよ…!」

「ん…」

寺坂の一言で客席に目を向ける響達。

乱闘に巻き込まれている者達は、其れ処では無いのだが、現状で難を逃れ観戦している、全校生徒の目が変わり始めているのを、確かに感じる。

野球の時と同じく、棒倒しとは、とてもじゃないが言えない、この異形の棒倒しを目にして、「今度のE組は、一体どんな手を使って勝つのか?」…と云う、興味、好奇心の視線に。

「確かに観客ってな、白熱した好勝負も良いが、その反面、一方的な虐殺も好む。

でも、大方の予想を裏切る、大どんでん返しな展開つても、大好きなんだぜ。

…その辺り、解ってるのかい…? お坊っちゃん?」



「ねー、磯貝ー、そろそろじゃね〜?」

「ああー!」

地球の裏からの来訪者を掴み手を避けながらのカルマの呼び方に、磯貝が応え、

「よし皆! 逃げるのは終わりだ!!」

全員【音速】!!!!

「「「「…つしゃア!!」」」」

ダッ:

磯貝の掛け声と共に、客席にて縦横無尽に駆けていた6人は追っ手を振り切り、一斉に棒へ走り出す。

「しまっ…も、戻れ、皆!」

棒を支える者達を除き、その全てを磯貝達攻撃部隊の捕縛に割いていた浅野。

その捕縛隊を躲した磯貝達は、一気に本校舎サイドの懐に入り込み、

「これが俺達の作戦!」【E組風林火山】!!

疾き事…」

「「「「風の如し!!」」」」

ガガガッ

棒を支える者達を踏み台の様に駆け上がり、一斉に棒に向けて体当たりを体当たりを

浴びせ掛けた。

「どうだ!浅野!!」

「どんだけ人数差あろーがよ…」

「「ここに登っちゃえさえすれば、もう関係無いよね〜?」」

「ち…小賢しい！」

「ぐ…」「重…」「お、降りろ…」

E組6人+浅野の体重を支える事になった、本校舎守備隊の顔が苦痛に歪む。

「ふんがー！降りやがれ！このチビ!!」

ぐい…

「うわわおっ!?!」

此処で客席から戻って来たレアオが、棒の先端に登ろうとしていた木村を無理に引き剥がそうとするが、

ぐらぐらぐらん…

「う…ぐうっ」

「止めろ、レアオ！」

この高重心で無理矢理に引つ張ったりすると、棒まで倒れるぞ!!」

それにより、激しく揺れる棒。

その行為は寧ろ、E組の手助けに成り得る事だった。

「じゃ、打つ手無しかよ!?!」

「兎に角、支えるのに集中しろ！」

この場は僕が、片づく（ガン！）…!?」

レアオに指示している最中に、更なる衝撃で揺れる棒。

「へ…静かなる事、林の如く…」

「知り難きこと陰の如し…つてな！」

「お前等…!?!」

それは、岡島と前原。

序盤にザンジウに吹っ飛ばされ、其の儘、早々に戦線離脱（リタイア）だと思われていた2人による、体当たりからの よじ登り。

観客がグラウンドに注目している中、人知れず、密かにトラック外周を大周りし、本校舎陣営の真後ろの観衆に紛れ込み、奇襲の指示を待っていたのだった。

「生憎と、受け身は自信あったんでね！」

「普段、女子にシバかれてるのが、余つ程 痛かったしな!!」

しかし、E組の奇襲は まだ終わらない。

ダツ…

「侵掠（せ）める事、火の如し！」

どん！

守備隊の筈だった渚達、合計4人が本校舎サイドに突撃、棒に、そして浅野に しが

み憑き、

「な…!?このっ!」

完全に動きを抑えてしまう。

「おい、アイツ等って、デیفエンスなんじゃ…?」

「…じゃ、あつちの守りって…?」

えええっ?!」

競技している者、観戦している者の全てが、E組本陣に目を向けると、

「さ…3人ん…?」

「たった3人で、あの棒と人数を支えてる…だとおっ?!」

其処には、傾けた棒でザンジウ達先攻部隊を抑え込んでいる寺坂、竹林、そして響の

3人。

「どうなってんだよ?」

「3人相手に、動けないのかよ?!」

巨漢のザンジウを始めとする5人が、響達たった3人に完璧に抑えられている光景

に、違和を感じる観衆達。

「梃子の原理さ。」

「」「え?」「」

「梃子なのか…?」

「梃子だから、なのか?」

「梃子ならば仕方無い…のか?」

しかし、竹林の『梃子の原理』の一言で、皆、理解は出来ずも納得してしまう。

「ケツ! 『梃子』って言っちゃえば、大抵の奴等は『成る程』で終わらせてしまふよな」

! (笑)

「いや、少しは疑えよ!

ゆ〇、先生の理論かよ?!」

本来ならば歓迎すべき展開なのは解つてはいるが、それでも余りな御都合展開に、思わず突っ込んでしまう響。

「…で、お前等どーするよ?」

本当なら こんな体勢、直ぐに引つ繰り返して棒を倒すのも簡単な仕事だろうけど、出来ないんだよな?」

「何と言つても君達…いや、浅野君の目的は、単に棒を倒すのでは無く、僕達全員を、物理的に潰す事だからね。」

自分達だけで、勝手に終わらせる訳には いかないよね?」

「!!!?」

の後方、棒に目掛けて抛る磯貝。

「動く事…」

「…雷霆の如し!!」

勢い良く投げられたイトナは、標的（ターゲット）である棒に一直線、その先端部を体を預ける様に受け止めると、その勢いの儘、身を地面へ目掛けて倒れ込み、

バターン…

「!!!」

「!!!」

遂に、その棒を倒したのだった。

……………。

その直後、グラウンドを静寂が支配し、

「いやっほーうい!!」

「やったぜ!」

「イトナ〜!!」

「磯貝も、ナイススロー!」

「やったな……！」

「……当然だ。」

パシィン！

そして その数秒後、その場で沸きあがり、ハイタッチを交わすE組の面々。

「やったぜ〜い！」

「勝ったー！」

「「やったー！！」」

「イトナくん！」

「磯貝君〜！」

「「男子、かっこいいーっ！！」」

更にはハラハラしながら見学していた女子達も、グラウンドに駆け寄ってきた。

「おめでとう御座いますう〜！！」

茅野が手にしたスマホの画面内で、チアガールのコスプレをした少女も、嬉しそうに飛び跳ねている。

「…そして動かざる事、山の如し！

…つてね♪」

「ケッ！」

今回 俺等、完全に空気じゃねーか！」

「ははは…」

棒倒しは、E組の完全勝利で幕を閉じた。

「ぬわーっ!?!」

「うわああっ?!」

その時、E組陣地にて、棒の下敷きになっていたザンジウが、雄叫びと共に、その棒を撥ね除け立ち上がり、一緒に棒に押さえられていた4人の味方の生徒諸共、寺坂、竹林、響を撥ね飛ばす。

「ぎ、ザンジウ?」

「いきなり、何を…?」

余りに不意な出来事に、驚き戸惑う本校舎勢だが、

「あ…悪い…」

「おう、勝負着いてたのに、何時迄も押さえ付けてて、悪かったな。」

「全くですね。すいませんでした。」

響、寺坂、竹林は即座に状況分析、その怒りを察して謝罪。

「うがががー!」

ぶうん…

「へ?俺?待てよ!」

メインで棒を押し付けてたの、俺でなく、寺坂だぜ?」

「おいっ!!?」

「いや……すまない……」

そして小山から、全てを……荒木、瀬尾の3人で共謀して、ザンジウに金を渡し、響のヒットの依頼をしていた事を聞き出した浅野も、

「くっ……仕方無い……」

皆でザンジウを止めるぞ！

レアオ、キミも手伝ってくれ!!」

「……「あ……ああ……」……」

「……ヤレヤレだな。」

「小山、お前も来るんだ!」

「わわっ!?!」

内心は不本意ながら、ザンジウをストップさせる為に、周りの生徒達と共に、その番外乱闘の場に走り出した。

「……「吉良あ!」……」

「……「吉良君?」……」

「……「吉良つち!?!」……」

「……女子は、席に戻って!皆、行くぞ!!」

「……「お……応……!!」……」

カクン…

「……!?!」

その一撃だけでバランスを崩し、片膝を地に着けてしまうザンジウ。

「Stop! Zanjiiu!!」

「止めるんだ、ザンジウ!」

「吉良!」

このタイミングで、リーヴとティッキ、浅野達、そしてE組の面々のそれぞれが駆け付けるが、

「うがあ!」

「…!?!」

立ち上がったって、浅野やリーヴ達の静止の声に聞く耳持たず、尚も攻撃を続けるザンジウ。

「寺坂! 竹林! お前等も何故、止めようとしなんだよ?!」

「あの間に割って入れるか?!」

「普通に死ねますよ?」

「うう…」

この時 千葉が、すぐ傍で この巨漢の暴拳を止めようとせず、傍観していただけの寺坂と竹林人を問い質すが、これに対し、真つ当な正論？で切り返す2人。

「仕方無い！実力行使だね!!」

「Hey! Youも手伝ってくれ!!」

「…(コクン)」

そしてリーヴとティツキー、更には言葉は通じないも、その場の雰囲気で、何を言われたのか理解したレアオが、乱闘を続ける2人の間に割って入れろうとした時、

「うが…!!」

どん!

振り下ろされた張り手を、頭上のクロスガードで受け止めた響は、直後に両手で手首を掴むと腕を極め、その儘ザンジウの背後に回り込み、背中合わせの状態から、

「でええいいやあああつ!!!」

ズッシーン!!

「……………!!?」

変則の…従来、『一本』を取る為の、背中から地に着けるのではなく、体の前面、顔面に胸、腹部を地面に強打させる、変則の背負い投げを、決めて魅せたのだった。

「Wow! Japanese Judo h!!」

「?!!!」

その技の冴えに、感嘆の声をあげ、又は驚愕して言葉を詰まらせる留学生の3人。

「馬鹿な……」あの巨体を……

「あの、ザンジウを……」

「投げ飛ばした……だと?」

予想の遙か外の展開に、動揺する浅野達。

「まさに勝ってるし……」

「あー、やっぱりオマエ、チートでなくて、もう人外で良ーだろ?」

「ね?言つた通りっしょ?」

吉良つちなら、心配無用だつて♪」

「あ……う……ん……」

「あははは……」

そして、実は そんなに心配していなかった、E組の面々。

因みにザンジウは、響の投げ技で、身体前面全身を痛打、特に両膝、更には右の肩と肘を痛め、動くのも儘ならぬ状態となり、この乱闘騒ぎは終了した。

そして自力で歩けないザンジウは、一般の生徒や教諭の手では、担架等で運ぶのは難

しく、

「うゝ、重いしくい……!」

「Shit!少しはダイエツトしやがれ!」

結局は留学生達の肩を借りる事で、医務室迄退場となった。



「「せ、先輩っ!」」

「ん?」

一連の騒ぎも一段落し、体育祭も閉会、山の上の旧校舎に戻る途中、磯貝が1年の女子生徒に声を掛けられる。

「あ、あの……」

「凄く、」

「カッコ良かったです!」

「ああ、ありがとうね。」

「「~~~~~!!」」

磯貝が その呼び掛けに笑顔で応えると、無言で感無量な顔になる女生徒達。

「ちつ、これだからイケメンわ……!」

俺なんか今回のアレで、更に危険人物認定だぜ……つて、片岡さくん? 目から光が消

えてるヤ(ガン!!) たわばっ!？」

「「き、吉良—————っ!!?」」

しかし、そんな響にも、

「吉良先輩!」

「カツケーかったつす!」

「ばネエつす!!」

「お…応…アレ、危ないから、間違っても真似するなよ…」

一部、1年2年の男子生徒からは、カリスマな目で見られたりするが、

「いや…磯貝のと、何か違うし…」

少しだけ、納得が往かない様だった。

「「「「いや、オマエ、彼女居るし、別に良いだろーが!! (血涙)」」」」



「凄かったよな、E組…!」

「ああ、あのキマリになったスーパージャンプ、滅つ茶やペーし。」

「何と言つても、最後の投げだろ?」

「「ん、んんん!」」

ん。吉良君は、もう戻っても良いよ。

御苦労様だったね。」

「…では、失礼します。」

あの後、棒倒しの話をしてきた複数の1年2年の生徒とOHANASHIする事で、事態の概ねを把握していた浅野理事長。

響に対しては、最後に本人の口から、確認を取るだけで、特に注意する事も無く、退室させる。

「さ・て…」

「「「……………!!」」」

そして同室しており、未だ残っている4人に目を向ける浅野理事長。

浅野（息子）、荒木、小山、瀬尾の4人の顔に、緊張が走る。

「先ずは、キム・ザンジウ君だが、病院での検査の結果、彼の右腕は、もう一生、肩の高さから上には上がらないそうだ。」

「「「なっ…!?!」」」

「まあ、これは仕方無い事だよ。」

自業自得なんだからね。

あれは あの場合で、『何故だか知らないが』、いきなり暴れ出した、彼が悪い。

他に大した怪我人が居なかったのが、不幸中の……ってヤツだよ。」

「……」

含みの有る言い方に、黙り込む4人。

「当然、彼からも事情は聴いたけどね？」

瀬尾君？ 小山君？ 荒木君？」

「……」

結論からすれば、ザンジウは、あの何時でも撥ね返そうと思えば返せた押さえ込みにも、何時迄も耐えていなければならない状況に、普通にキレていて、尚且つ、この儘 響を無傷で終わらせたなら、受け取った金を荒木達に返さなければならぬと思つての暴走だったとか。

因みに……

「彼は『呉々も事故に見せかけて』と云うのは、聞いてないと言つていたが？」

恐らくは、君達の韓国語が、上手く伝わらなかつたのじゃないかな？」

「な……!？」

どうやら、一番大切な部分が伝わっていなかつた様だった。

「まあ、それは、大した問題じゃない。」

「……ええっ!？」

『大した問題じゃないのかよ…!』…という顔を4人が浮かべる中、

「問題なのは…解るだろ？」

浅野…君？」

「……………」

理事長曰わく、問題なのは、今回の棒倒しに於ける、浅野（息子）の“裏”の目的…即ち、E組男子を物理的に潰す事が、バレバレだった事。

それに気付かず、それを逆手に取った戦略を用いられ、結果、無惨に敗北した事。

それに伴い、本校舎生徒…特に、1年生2年生の、ENDの象徴である筈のE組に対する評価が変わってきている事。

「…その事が、私の…櫛ヶ丘の教育方針に背いているのは、理解出来てるよね？」

「……………」

「1学期、期末試験の結果が出た早々に、理事長の私に彼達…海外留学生招聘を呼び掛け…いや、泣きついてきて、その結果が…これかい？」

「……………っ!!」

この理事長の『泣きつく』…の言葉に、過剰に反応して、顔を歪ませる浅野学秀。

「…確かに、リーヴ君とティツキー君のドタキャンは計算外だったかも知れないが、それ

でも人数的にも火力的にも、圧倒的に有利だったんだ。

もしも それを十全に活かしていたら、それこそ一分も掛けずに、勝っていたんじゃないのかい？

その選択、発想が無かった時点で、君達の敗北は決まっていたのかも知れないね。」

「……………」

「それから…君達がザンジウ君に依頼していた、吉良君暗殺の件だが、一応は彼にも知らせて於くべきかな？

彼も何故、自分だけが執拗に襲われていたのか、不思議に思っていたし？」

「……………!!!」

「…冗談だよ。」

これ以上、学校としても、必要以上の暴力沙汰は避けたいしね。

そうだろう？ 荒木君？」

「な…な…?!?」

不意打ちに、動揺する荒木。

「いや、先日、高等部の方で、2人の生徒が殴り合いの大喧嘩をして、その両者が重傷を負ったと報告を受けてね。」

…で、その内の1人が、学年成績トップの生徒と云うから、何が有ったのかと、本人

直接にOHANASHIしてみたら…」

「いや…それは…その…」

「学力でも暴力でも劣る…」

どちらがE組なのか、判らないね。

しかも今回の件、浅野君は兎も角、そちらの3人に関しては、E組逝きの理由にするには充分過ぎるが…」

「………!!?」

「す、すいません、それだけは…!」

当人も反省していますし、今回だけは!」

思わず言葉を失う3人に、透かさず学秀がフォローに入る。

「まあ、今回の件は、中間テストを見越して故の事だろう?」

それに関してもね、多少の小細工は結構だが、私としては最終的には学力だけで、E組を抑えて欲しいと云うのが、本音だが?

もう吉良君には、純粋な学力では、勝てないと認めてるのかい?」

「…!!」

「君達…いや、君達に限らず、最近の本校舎の生徒は、緊張感や危機感が、不足し過ぎては、いないかい?」

「「「……………!!」」」

…この後も、穏やかな口調ながら、厳しく冷たくな理事長の話は、数10分に渡り、続いたと云う。

「それじゃあ浅野君、中間テスト、期待してるよ…」

交遊と亀裂の時間

理事長からの呼び出し。

体育祭での乱闘騒ぎの事情聴取を終え、旧校舎に戻るべく、響が山を登っていると、前方に2つの人影が。

「あゝ、地味にキツいし〜?」

「全くだな…。誰だよ、山登りしようなんて言い出したヤツわ?!」

「いや、キミだし!」

「……………」

それは浅野（坊ちゃんの方）が喚んだ留学生の、リーヴ・メイプルとティツキー・パープル。

「Hey, この先は、ウチのクラスしかないのだが、何か用かい?」

「?!」

その2人に響が後ろから、（当然、英語で）話し掛けると、

「OH, JudohMan!!」

「じゅ、じゅーどーまん〜?!」

がしっ!!

「へ?」

いきなり、それぞれが左右の手を掴むと、両の手でシェイクハンド。

~~~~~

『ああ、それなら大丈夫だ。』

既にヤツが、2人の気配を感知して、訓練は一時中止、今は偽装になるが、イリーナの外国語講習を行っている。』

「…了解です。」

聞いてみると、この留学生2人はあの棒倒し、人数的にも火力的にも、圧倒的に劣る戦力差を覆しての勝利に感動。

更には、あの浅野に常勝していると云う人物とも、色々と話してみたい…と、いう理由での訪問だとか。

担任の超生物の存在は無論、現在、行われているであろう、暗殺訓練も見せる訳には往かないと判断した響。

スマホで烏間に2人の来訪を伝えると、既に手は打つてあるとの事だった。

「Yoruのスープレックスも凄かったが、あの全体に指示を出していた、彼のリーダーシップは素晴らしかった。」



「Really?」

「Oh, It's Real Really.」

「んだとお、ゴラアツ!!」

「ん〜ぶぶぶ?!」

「…See?」

「Oh…」

「Don't Satisfy!!」

教室に入った瞬間、黒板の前に立っていたイリーナを見て、ガタイは大きくも、年齢は教室の皆と変わらないリーヴとティッキーが、その少なくとも見た目だけは美人な、若い女教師にテンション急上昇。

それを見て、透かさず誤解を解きに懸かる響…と、カルマ。

この論しに怒（おこ）になったイリーナが、制裁とばかり、響に『深い方のヤツ』をお見舞い。

しかし、これが逆に彼等に、響の『真・ビッチ発言』に、真実味を与える結果となってしまうのだった。

その後、

「YOUのリーダーシップ、本当に素晴らしかった!」

「あの指導力、アサノに何時も勝ってるってのも、納得だよね〜！」

「え？」

「そりゃあね〜♪」

「ウチ等のクラス自慢の、頼れるイケメンリーダーですから♪」

「え？ ええっ？」

浅野学秀に常勝している人物：と云う事になつてゐる磯貝に対し、まるで憧れのアーティストかアスリートと逢つたかの様なテンションで話す2人の外国人。

え？ 浅野に何時も勝つてる？ 俺が？ ……何やら勘違いしてゐる様なので、訂正しようとする磯貝だが、その前に約2名が、それを阻止：もとい、便乗する様に持ち上げる。

事前に2人の勘違いを、律を介して響から知らされていた、カルマと中村である。

(((((アイツ等、何を仕込んでんだよ!))))))

殺せんせーとイリーナの授業の成果で、完璧と迄往かなくも、カナダ人特有の早口な英語も聞き取り、ある程度の会話の内容は理解出来ていたE組の面々。

頭から角を生やし、背中で羽をパタつかせてゐる2人：否、3人を見て、心の中、心を1つにして突っ込みを入れるのだった。

(((((まあ、面白いから、黙っておくかwww))))))

…彼等も、結構大概である。









せていた男衆は悉く、このカナダの力自慢の前に敗れ去つて逝く。

「こつなつたら…」

「…最後の手段よ!!」

最終的に唯一、この男に土を着けたのは、倉橋と櫻瀬が半ば強引、腕を引つ張り連れ  
てきた、正しく最後の砦の表現が似合う男、只一人だった。

後にレビューは語る事になる。

「That Man is The Ogre!」

…と。



「じゃね〜♪」

「正直、日本には二度と来ない心算だったが、オマエ達と会う為なら、普通にアリだな!」  
「ああ、また逢おうぜ!」

こうして、不意の留学生E組来訪は、日―米―加の親睦良ろしく、何事とも無く、平  
和に終えるのだった。

「…ところで、吉良？」

「ん？」

「お前、俺の事、あの2人に一体どんな風に、吹き込んだんだ？」

「え、…？ いや…磯貝君？」

顔、顔が怖いよ〜？

イケメンが台無しだよ〜？」



次の日。

「リーヴ、ティツキー、ちよつと話したいんだが、良いか？」

「A、a?!」

教室に入る早々、不機嫌オーラを撒き散らし、席に着いた2人に話し掛けるのは、浅野学秀。

「…昨日の放課後、E組の連中に、会いに行ったそうだな？」

「…で？」

「…だから？」

「…彼等は校内の底辺に位置する（ぐいっ）いががつ!？」

「…誰が、底辺だと?」

「それなら その底辺とやらに、あんな卑怯な手段を使っても勝てないオマエって、一体何なの?」

「「「「きやあああああつ!!」」」」

喋り終える前に、胸座を掴み、その儘、持ち前の怪力を活かし、浅野の身体を高く持ち上げるリーヴ。

「オマエは『奴等は底辺の存在だから、関わるな』とでも言いたいのか?」

「うぐぐ…」

「あのさ、オマエなんか、俺達の行動、口出しされたくないし?」

…ってゆーかあ、あのクラス、皆、ナイスな連中だったし?」

少なくとも、オマエ等なんかよりは、ずっとね。」

教室に悲鳴が響く中、宙に浮いている浅野に話す2人。

「……………!!」

ガタツ…

その光景に、もう1人の留学生、レアオ・ミンタニアが仲裁に入ろうとするが、  
「邪魔しないでよね?」

I w i l l t w i s t & c r u s h i t ?」

ティツキーが立ちはだかり、掌を前に突き出すと、クシヤツと何かを握り潰す様なクシヨンを見せる。

「……。」

英語が殆ど解らないブラジル人も、その仕種で何を言ってるのか、大凡は理解。要らぬ衝突は好まないのか、無言で自席に戻って行く。

「瀬尾、アイツ等、何を言ってるんだよ?!」

「お前なら会話、聞き取れてたろ?」

「ああ……あの2人、どうやら昨日、E組の奴等と仲良くなったみたいで……」

「それで、浅野が奴等をデイスったら、キレたみたいだ……」

「何でアイツ等、E組なんかと?!」

「俺が知るかよ!」

他のクラスメートも、最初は浅野や瀬尾の通訳を介してフレンドリーに……特にティツキーに至っては、本当に互いに軽いノリで接していた。

しかし、体育祭の途中……正確には、棒倒しの始まる直前に突如 不機嫌モード全開となり、何人たりとも近寄り難いオーラを出している2人。

そんな2人に割って入ろうとする者は、この教室の中には居なかった。

「ハア……ハア……」

漸くリーヴのリフトアップから解放された浅野。

そんな浅野に、冷めた目で見える2人は、

「Rubbish!」「Scum!!」

「な…」

各々が蔑ずむ罵声を浴びせると、「もう、話す事は無い」とばかり、席に着く。

「浅野君!」「大丈夫?浅野君!」

何時かのデジャヴの様に、倒れている浅野に駆け寄る、数人の女子クラスメート。

それに対して、浅野は心配無用だと、立ち上がる。

そして自分が喚んだ筈の”駒”に刃向かわれ、怒りに顔を歪めるが、

「A`a? Whether the complaint?」

「…!!」

即座に怒声と共に睨み返され、その迫力に押し黙ってしまふ。

「な…何ば しょつとるとか?」

2人共、少し落つ着くばい!!」

それを見ていた瀬尾が、ついに堪らず、横から英語で口を挟むが、

「Hold your tongue!」

「You, re annoying!」

「ひいっ!?!」

その、余りも訛りの効いた英会話に、留学生の2人は逆に怒り倍増、大声で怒鳴られてしまい、体育祭の時と同じ様に、半泣き顔で退場となる。

「Huh! Chickens!」

何か、文句あるのか?それなら…」

そう言うとりーヴは着ていたシャツの袖を捲り、二の腕を露わにすると、机の上に肘を置き、

「Come on!」

この俺の右腕が聞いてやるよ!」

瀬尾、そして浅野達、A組の者達にチヨイチヨイ…と、人差し指で誘い招く。

明らかに、自身の専門分野である、腕相撲の誘いである。

「何をバカな…」

「チャンピオンなんだろ、アイツ?!」

「勝てる訳無いだろ…」

「それ、なんて無理ゲーだよ?」

やはり、その台詞の全てを理解出来た訳では無いが、そのジエスチャーで何を言っているのか悟ったA組の…特に男子達は、余計に尻込んでしまう。

「Hey, どうした? 誰も挑まないのか?」

誰も勝てたら…なんて一言も言っていないんだがな?」

「昨日のE組(かれら)は、いろんな意味で圧倒的に不利な条件でも、臆せずにおマエラに向かつて行つたよね?」

IsochinやKirachinには不利を強要させて高みの見物しといて、自分達が いざ、その位置に立つと、逃げちやう訳?」

「勝てない迄も、自分が正しいと信じる信念があれば、それなりに それは伝わるモンなんだがな…」

所詮、優位なポジションでしか、物事を進めない、何も持たないヘタレ共か…

アイツ達とは大違いだな。」

「な…?」「何だと!!?」

完全にE組よりも、下と捉える発言に、それを完全に聞き取れていた浅野と瀬尾が、過敏に反応。

「…んだば! やつちやるつてさあ!!」

「瀬尾!!」

やはりE組よりも下に見られるのは我慢ならなかつたか、腕力的に、浅野より勝る瀬尾が、顔を真っ赤にして、独特なアクセントの英会話でリーヴの手を取り挑み掛かろう



とするが、

「Ah? No, no.

Bring it all men!」

そのリーヴは、更なる要求…或いは挑発的な言葉。

「何ですとお?!!」

「リーヴ…それは、本気で言ってるのかい?」

リーヴの『クラス内の男子全員、1度に掛かって来いや!』の台詞に、「それは流石に、舐め過ぎじゃあないのか?」…と、ばかりに（一応は）英語堪能な2人は顔を顰めるが、それならば…と、最終的にはA組男子…2つ並べた机の上に肘を置ける、最大人数での変則的、ハンディキャップ・アームレスリングがスタートした。

「じゃ、行くよ? Ready Go!」

…どんつ!!!

そして…

「うう…」「そんな…」「て、手が…」

「Huh! You're not, My Match !!」

それは正しく瞬殺の表現が相応しい。

結果、瀬尾を始めとした数人の生徒が、手首や指、手の甲を傷め、長くて全治数週間

の負傷をする事になるのだった。

「……………」

スウ…

「ん?」「へえ?♪」

そして、数人の男子生徒が右手を押しえて もがいている中、レアオ・ミンタニアが無言で机に肘を置き、その右手をリーヴに差し出す。

「…別に、アサノのリベンジ…って訳じゃ、ないみたいだな?」

「今の Leachin の Musou 見て、単に腕が うずうずしてきたって顔、してるよ?♪」

「……………」

「H A H ! 面白い!! オマエ、最高だよ!

上等だ! 掛かって来いやっ!!

ティック! スタートの合図だ!!」

その無言の挑戦に、リーヴは笑顔で応え、

「ん。じゃ、行くよ?」

Ready…GO!!」

ガシイッ!!



## 署名の時間

9月末日。

「……吉良君？怒ったりしないから、正しく直に何をしたのか、話してみなさい？」

「ちよ……本当に知らないし……ってか、そのパターンで怒らない人って、見たことないしっ!!」

「おい吉良……本当に心当たり、無いのか？」

「お前1人だけでなくて、俺達学級委員も一緒に呼び出されるって、本当に唯事じゃないだろ？」

「磯貝……!!」

この日の放課後、響とE組のクラス委員である、磯貝悠馬と片岡メグは、浅野理事長からの呼び出しを受け、本校舎に向かうべく下山していた。

響は考える……

理事長自ら呼び出しする程の事……

一体、自分が何をしたのか……？

心当たりは全く無い……な、訳は無く、寧ろ心当たり有り過ぎて、一体どれの事やら……  
…体育祭の乱闘は既に、正当防衛が認められている筈。

今更、何か言われるとかな可能性は低い。

ならば、2学期早々に、荒木が差し向けたヒットマン（荒木兄）云々の件で、荒木と浅野を校門前でメた事か？

それも今更だ。

まさか、煌兄が、荒木兄弟を殺り過ぎて、そつちの方向から駅での乱闘劇に、足が着いたか？

いやいや、俺以上に残忍で狡猾でキレ者なあの男が、後々に尾を引く様な、中途半端な真似をする筈が無い。

大体あの男、誰の兄だと思っている？

この俺の鬼いたまだぞ？!

そもそも、そつち側の理由なら、浅野は兎も角、荒木兄弟だって、只では済まないだろう。

俺を学内で処分する前に、アイツ等揃ってケーサツ逝きだろ？

何しろ、桐ヶ丘の外の人間…香純さん巻き込んでるんだぞ？

荒木兄の連れが、香純さんの乳（推定D）、揉んでるんだぞ？









全員ではないが、BとD組、殆どの生徒が名前を書き込んだいる。

「お前が各教室の奴等に頼み込んで、無理矢理に名前、書かせたのか？」

「違うっ！彼等が自主的に、行つた物だ!!」

ほ、本当だぞー！」

響の問い掛けに、顔を真っ赤にして、ムキになつて否定する浅野（学）だが、

（頼んだな…）

（頼んだのかよ…）

（頼んだのね…）

その必死っぷりに、真相はどうであれ、口には出さずも3人は、心の中で同一の結論を出す。

「…成る程、それで、これだけの現状に対しての不満者が居るから、パパに頼んであの賭け、無効にして貰うから…：そう言いたいんだな？浅野は。」

「…なっ!？」

「吉良君、それは少しだけ、違うな。」

「理事長先生？」

何やら身に覚えの有る悪さがバレて、それで呼び出しを受けたとばかり思つて内心、少しだけガクブルだった響（…と、磯貝&片岡）。

しかし、どうやら、そうではなかったと、少しだけ安心した顔でパラパラと、その紙に連ねられている名前を見ながら、本当に面倒臭そうな呆れ口調、そして本当に、もう救い様の無い、まるで駄目な男を見るかの目で浅野（学）に話すが、そこに理事長が口を挟んだ。

「…仮に、私が、その心算なら、わざわざ君達を此処に呼ぶ事無く、明日の全校集会の時にでも、理事長の権限を乱用して、問答無用に無効を言い渡してるさ。」

今回は、こういう事があつたと、その報告と、それについて、どう思うか、それを直接聴こうと思つてね。」

「……………!?!」

（（そーゆーの、権限乱用って自覚は有るんだ!!））

…3人は心を1つにしなから、

「…どうって言われても…ねえ?」

「理事長先生が介入しないのなら、無視で良いっしょ?」

「う〜ん…」

「……………。」

理事長の対応が、何か想定外な様な、それでいて、何か求め訴えている様な目をして、浅野（学）を無視して、その場で現状維持の方向で話す、E組クラス委員2人とE

組最凶問題児。

「…そもそも この件は、E組（おれたち）とA組（こいつら）との、期末試験での結果による物だ。

俺的には、余所のクラスが関係無いのに口出しするなって感じなんだけどね。」

「う…う…ん…」

響の台詞に、未だ あの賭けの内容に対し、僅かばかりの遠慮の様な感情を持っている優等生な2人が返事を濁す。

「それでも、どうしてもって言うなら、単に要求するでなくて、今度の中間テストで勝負して…位は…ねえ？」

「よ、よし、それなら、今の待遇無効を掛けて、次の中間テストで また、僕達と勝負しろ！」

そして この一言に、浅野（学）が反応、喰って懸かるが、

「はああ?! お前、何ーんか勘違いしとりやせんか?」

「な…何がだよ?!」

響が それを、バツサリと斬り棄てる。

「そんな決定権が、お前みたいな負け犬に有るのか?」

「な…!?!」

「俺は あくまでも、この自分の名前書いた奴等に対して言っているものであり、別にお前等に言つてた訳じゃない。」

「ついでに俺は今、磯貝と片岡さんと話してたんだ、勝手に会話に参加してんなよ？」

「……!!」

ギリ…

奥歯を噛み締め、本当に親の仇でも見るかの様に、浅野（学）が響を睨み付ける。

…尤も、この男が、実際に理事長（おや）を討つたと云う人物と対峙した時に、今の様な目をするかどうかは、疑問符が附いたりするのだが。

「それに…だ、仮に中間で勝負するとして、次に お前等が負けた場合、何を払う？」

『賭け』つてな、片側が勝つた場合のコインを一方的に要求した処で、成立したりはしないぜ？」

「な……？」

「な……ぢや、無一よ。」

「当たり前な話じゃねーか。」

当然とばかり、冷たく言い放つ響。

この言葉に対して、浅野（坊）は退く事を知らず、

「分かった…。だったら吉良、お前は勝てば、何を望む心算だっ…!!」

言い返そうとするが、その台詞を言い終わる前に、慌てて口を押さえる。

しかし、それは、少し遅く、

「おいテメー、…何 呼び捨てしてんだ？」

ついでに お前って、何だ!？」

ガバツ

ガバツ

「す、すいませんスイマセンすいませんスイマセンすいませんスイマセンすいませんスイマセン!!」

「……………」

この いきなりのDOGENZAに、響は無言でズボンのポケットからスマホを取り出すが、

「止めなさい!」

透かさず磯貝と片岡が、バカッター阻止。

「ちっ…」

これに心底、残念そうな顔をした響は、目の前の土下座男に話し掛ける。

「おい浅野、其処迄言うなら、勝負受けてやらんでもないが、その代わり、勝敗の条件や、俺等が勝った場合の新たな命令事は、コッチで決めさせて貰うぜ?」



響が突き付けた命令の一部は、理事長がきちんとした理由付けで不認とし、響もその理由に納得。

更に もう一つ、『ある権利』をE組が、正確に言えば、響が得るといふ事が、理事長との間で決定となる。

2学期中間テストに於ける、E組 v s 本校舎3年の『賭け』が、学校自体としては非公式だが、理事長公認の下、行われる運びとなった。

「しかし、他のクラスの皆にも、何も話さないで勝手に……」

「前の時も、あの場に居た奴等だけで、他の皆には了解も取らず、勝手に決めてたぜ？」  
「だがっ!!」

響と理事長との話し合いの中、蚊帳の外になっていた浅野（笑）が それでも異議申し立てるが、

「浅野……君?」

「!?!」

その口を、理事長が止める。

「そもそも、今回の発端は、7月の期末試験が原因なのだから、君達からすれば、さつきも吉良君が言っていたが、また試験で決着を着けるべきではないのかい?」

しかも、吉良君が出してきた勝敗条件は……本人達の目の前で言うのも気が引けるが、





「…はい…失礼します…。」

ペコ…

小さく一礼すると、浅野（学）は理事長室を後にする。

「…さて、と。」

残った3人に、浅野理事長は話し掛ける。

「吉良君、これは君からすれば、計画通り…なのかな？」

「ええ…理事長先生が、あっさり勝負を認めてくれたのが、逆に少し不気味ですけどね。」

特に、E組（俺）の主張を、殆ど無条件に受け入れてくれる辺りが。」

「勘違いしては困るね。」

今回、君の示した勝負の条件が、私の理念に都合が良かった…それだけの事だよ。」

「「??」」

理事長・浅野學峯は こう考える。

E組の生徒達は、常に敗者でなければならぬ。

しかし それと同時に、本校舎側の生徒達は、常に強者でなければならぬ、…と。

「…私はね、今回の事は、生徒達に緊張感と奮起を促す、良い きっかけだと捉えているんだ。」

「「……………」」

「これで中間試験、浅野君が明日からにでも、E組（きみたち）に負けじと、A組だけでなく、BとD組、3年生全員の底上げに着手して行くだろう。

結果的に、それで、全体の学力レベルアップが図れるなら、それは学校経営者としては願ったりなんだよ。

…まあ、私が君達に言いたいのは、それだけだよ。

これ以上、君達だけに本音を言うのもフェアじゃないしね。

それじゃ、君達も下がって良いよ。

今日は、ご苦労さんだったね。」

途中から、ずっと無言で話を聞いているだけとなっていた響達に、退室を指示する浅野理事長。

「「はい…それでは失礼します。」」

カチャ…

そう言つて、3人が部屋を出ようと、ドアノブに手を掛けた時、

「あ、そうだ、吉良君？」

「はい？」

理事長が響を呼び止めた。

「…今回は偶々、当事者しか その場に居なかったらしいから良かったけど、駅のホームの様な、目立つ場所での派手な立ち振る舞いは余り芳しくないで、ほどほどにしておきなさい。」

「げほわああッ!!?」

「吉良あ?!」「き、吉良君!?!」

駅での乱闘劇、きつちりバレーテラ…

この理事長の にこやかな表情から放たれる、絶対零度を帯びた視線と台詞に響は、精神的に9998のダメージを受けるのだった。

## テストの時間 ～2学期・中間試験～

「巫山戯るなよ、浅野！」

「どーゆー事なのよ!？」

「テメー、勝手に巻き込んでんなよ!!」

「い、いや…すまない…」

「んな台詞で済む訳無ーだろーが!!」

10月1日。

月始めの全校集会が終わった後、一部を除いたB～D組の生徒がA組に、浅野に詰め掛ける。

理由は当然、今月中頃にある中間試験にて、本校舎勢vsE組による勝負：『賭け』が非公式ながら理事長公認の下、正式に行われる事になった件について。

「お前、署名書（アレ）出せば、後は自分で どーにかするっ言ってたじゃねーか!？」

「俺達には迷惑掛けないって言ーから、名前書いてやったんだぞ?!」

「話が違っちゃないのよ!!？」

「き、君達、少し落ち着きたm 「」「テメーは引っ込んでろ!!」「」 ひええっ!？」

その集団のキレツぷりに、榊原が宥めようとするが、結果、それは火にガソリン。

「大体、あの勝敗の条件わ何だ!？」

「あんなの、絶対に無理に決まってるじゃないのよ!!」

「いや…あれも、理事長先生が…」

「お前が直ぐ、パパに泣きついたりしてたら、こんな事には ならなかつたんじ無いのか

よ?!」

「な…何だどっ!!!??」

「…あ、あ?! 何、偉っそうに逆ギレしてんだ? テメー!!!!」

んな立場じゃ無ーだろーが!!」

「うう…」

響が提示した、勝敗条件。

それは、今回の中間試験、E組を含む3年生180人中、本校舎勢がランキング1位から150位までを独占出来るか否か…

つまり、E組内の誰か1人でも、別にトップな必要無く、本校舎生徒の誰か1人より上位成績の者が居るなら、単純に150位以内に入り込めるなら、それだけでE組側の勝利となる。

参考迄に、1学期期末テストでは、E組内での最下位の成績だった菅谷ですら、全体

の半分より上位のランキングだった。

「俺達以前にお前、吉良に勝てるのかよ!？」

お前、1学期、吉良に負けっぱなしじゃねーか!」

「な…?!」だ、黙r 「二」だから、逆ギレ出来る立場じゃ無ーだろ!!」 「二」 う…」

…にも拘わらず、この勝敗ルールが認められたのは、

「本校舎の皆が、E組より優れているのは当然な事だろう?」

E組より上位の成績を取る…簡単な事じゃないか…違うかい? 浅野君?」

学園の最高権利者が、この、自身の信念に基づいたからこそだった。

「…当然、僕は努力する…。」

だから、皆も頑張つて欲しい…勿論、僕も力は貸すから…」

「ケツ!お前が お前に勝つてる奴以上に、俺達を引き上げられるのかよ?」

「そんなの無理に決まつてるでしょ!!」

「ちいっ…」

「何で…こんな事に…」

そして、少ないとも1学期の中間、期末のテストでトップを取った響に勝てる訳がないと、完全に やる気を失っている生徒達。

それは戦う前から既に、諦めて試合終了な様相だった。



「不破ちゃん?!」

「それにしても…また勝手に…」

「今回は かなり、有利な条件だと云ってもな…磯貝、お前等が付いていながら…」

「いや、それについては、本当に面目無い…」

ジト目な木村と前原の発言に、教室の皆に平謝りする、クラス委員の2人。



カツカツ…

「いいか? コ・コ・わ! テストに出るからな。よおくおく、覚えとけよ!」

「……」

A組の教室。

黒板に、試験問題として出すと云う、『数式』を書き込んでいく数学教諭。

E組との中間試験に於ける勝負の話は、本校舎側の教諭にも、理事長からの報告により知れ渡っていた。

そして それは、教諭達からしても、単に生徒間の諍いで終わる話では無く。

本校舎生徒の敗北、それはイコール、自分達の教師としての能力を問う事になる…と、理事長から言われているのだ。

カツカツ…



「あと、『この問題』も その儘、テストに出すから、よく頭に詰め込んでおけ。」  
「「「「「……………」」」」」

この試験の結果が、自分達の教師としての評価に直結する…

故に、少しでも自分達の教え子が優位になる様、テスト問題その物を教えると云う、殆どカンニングに近い、おおよそ名門進学校としては有り得ない、考えられない授業が各教科、各教室で行われていた。

しかし、その教諭達の目論見も、あの男には通用しない。

この日、放課後に急遽 開かれた会議にて、

「3年生の5教科担当の先生方は、試験範囲を私に提出して下さい。」

今回の3年のテスト問題、私が全て作成します。」

「「「「……………」?!」」」」

「ん?何か、問題でも…?」



「ヌルフッフッフ…」

さあ、中間テストも秒読みです!

ラストスパート、行きますよ!!」

同時刻、E組教室でも、この日の放課後暗殺訓練は お休みで、高速多重分身を繰り

出しての黄色いタコが、マンツーマン、或いは1on3で、個別授業を進めていた。  
「にゅやー………っ?!?」

だから、吉良君、カルマ君、寺坂君、イトナ君、それと櫻瀬さんに中村さん!!  
勉強中の暗殺は駄目だって、何時も言ってるでしょっ!!!?」

「「「「…ちっ!」」」」



そして、中間試験当日が やってきた。

今回の試験、初日は数学、社会、国語。

そして2日目に、理解と英語と云う日程で行われる。

この時、試験会場である教室は闘技場（コロシアム）に、テスト用紙は異形の存在に  
姿を変え、筆記具（武器）を携えた生徒達に向かって、容赦無く襲い掛かる。

それは、本校舎もE組も関係無く、無慈悲に、残酷に…



【数学】

「くっ…見事だ…。この、拙者を…」

ガタッ…

「あく、しんどかった!」

寸檻樓になりながらも、三面六臂な魔神を連想させる問18、そして忍者風な出で立ちの、問19を辛くも攻略した響。

そんな響の前に、ラスト問題、問20が姿を現すが：

「はあ?この前の、期末の時のラスボスじゃねーか!」

姿を見せたのは、日輪をイメージしたマークを胸元に記した、白銀の全身鎧で身体を包んだ闘神：3本角の仮面から、鋭い眼光を浴びせる。その姿は、正に1学期期末試験の、数学ラスト問題。

「コイツなら、なんとか勝てる!」

また この前みたく、ア○○○ト・ス○ーク、お見舞いしてやるぜ!!」

油断でも余裕でもなく、あくまでも自信からの発言と共に、白銀の闘神に解答（こうげき）を仕掛ける響。

しかし闘神は、その仮面から出ている、髪の毛と同じ色の、黄金の剣を両腕から突出すると、身体を回転させながらの斬激で応戦。

ズシヤアツ!

「をわっ!」

その刃が、響の体を掠める。



そして その儘、試験終了を告げるチャイム（ゴング）が闘技場（きょうしつ）に鳴り響くのだった。

1 時 限 目 : 数 学 ・ 終 了

# テストの時間 ～2学期・中間試験～②



2学期中間試験、初日が終了した。

「……………」

満身創痍なのは響だけでなく、他の生徒達も同様。

数学に続く、社会、国語も、1学期期末試験とは、明らかにレベルが違い過ぎる問題（こうげき）に、満足の往かない結果に、疲弊していた。

解答（こうりやく）すべき馬上の漢を、その巨馬から降ろす事すら叶わず、巨大な蹄に踏み潰され、見た目は自分達より少し年上…と云う感じの、セーラー服を着た長い黒髪の少女？から、認識する気も失せる程の、夥しい数の技（スキル）を瞬時に連打で浴びせられ、誰もが悉く倒されていった。

しかし、それはE組だけでなく、本校舎勢…A組の生徒でさえも同様で、全ての問題をまともに解答する事は出来ず、

「ドヤ顔で『テストに出るからな』って、全然、話が違うじゃないか…」

「あの暗記は一体、何だったのよ…?」



解き方は解ってたんだけどね…ハア…」

「い、いや、大丈夫よ！

きーちゃんやカルマ君が無理なのなら、きつと浅野君達だつて出来てないから！…かも…？」

「そうですわ！今頃 向こう側も、お通夜みたいになってますわ、…きつと！

「Orzるつて、カルマさんや吉良つちさんのキャラじゃないですよ？」

「……………」

「ダメだ こりゃ。」…重傷ね。」

すつかり消沈モードな最凶コンビに、倉橋や律（本物&偽物）がフォローをするが、それで簡単に立ち直れる程、この男達はチョロくは無く、

「「「はあああ〜〜〜…」」」

E組2凶…もとい、2強の見事な凹みっぷりは、次第にクラス全体に染つて逝き、何時しか溜め息のハーモニーが、教室全体に響き渡るのだった。

「いや、本当に、アイツ等も同じ感じなら、凄く有り難いんだけど…」

「…ですすよね…」





2日目：1時限目【理科】

「ハア、ハア…」

いや、これ、マジにキツイっしょ…」

巨大な蛙の群、活き良く空を飛び交う野菜の集団、そして蜘蛛を模した様な、巨大な多脚式歩行機械兵器を苦戦しながらも攻略していったカルマ。

「吉良つちと奥田さん…それと、竹林以外は皆、あのクモに殺られてるかも…」  
そんなカルマの前に、次の…新手の問題が現れる。

「フハハハハハハ！」

吾が輩こそが、ラスト問題であーる!!」

それは、理科のラスト問題…白黒ハーフ&ハーフの仮面を被った、タキシード姿の長身の男。

「何なの？さっきのクモのが、手強そうじゃない？

…いや、それって、見た目だけだよな？

悪いけど俺は、そーゆーのに騙されたりはしないよ？」

チャリ…

それを見たカルマは、油断無い顔で、脇に携えていた小太刀を抜く。

「…ふむ？ 1学期期末試験、自信満々だった筈の結果が、自身の予想外に散々で担任教師に己の慢心を弄られ、思いつきり涙目になって凹んでいた小僧よ、あの状態から自力で立ち直っただけの事はあるな。」

油断の類は見受けられないか…」

「な…!?!」

カアア…

何処情報だよ?!…ほんの約3カ月前の、自身が一生封印していたかつた過去を遠慮無しに語られ、思い出したかのように顔を真っ赤にするカルマ。

「フハハハハハハハ!!」

良いぞ好いぞ！ 汝の その羞恥の悪感情、非常に美味である！」

「つ…この!!」

恐らくは仮面の裏で、殴りたくなる様な満面の笑みを浮かべているのであろう、このラスト問題を名乗る男に、カルマは怒りの表情を隠す事無く斬り掛かり、

「Bind（束縛）！」 「なぬっ!!」

…と、見せかけて、懐に忍ばせていたロープで、その身を拘束するのに成功させる。

「うぬぬっ…!!? 解けん…だと?!」

ニヨキ…パタパタ…



ヤいている。

「…昨日の3教科はイマイチだったけど、この理科は手応えパツチりだったね。」

改めて この、解答（たお）したラスト問題だった男が被っていた仮面を見据え、この場を去ろうとした その時、

「…と安心した処で、スカーラーっ!!」

シュンツ!

「え?」

ドガアツ

「うぐ…!?!」

その、白と黒の仮面が宙に浮いたかと思えば急襲、カルマの顔を覆い隠す様に直撃、その儘、張り憑いてしまう。

「と、取れない?!」

「フハハハハハハハハハハ!!」

その焦り、動揺からの悪感情、非常に美味である!

「な?! 口が、勝手に…!?!」

この後、カルマは意識を失い、その儘倒れてしまうのだった。



## 2 時限目【英語】

ヴォン…

刃の無い、柄だけの剣。

その柄の先端から白い光が湧き出で、刀身の形を創り出す。

「ハッの……」

斬!!

白を基調とした全身装甲を着込み、重火器を携えた兵士達を　この光剣で薙ぎ倒しているのは、A組・浅野学秀。

兵士単体の戦闘力自体は、其れ程の脅威でもないのだが、その数の多さに、顔に疲労の色を見せていた。

『コー……ホー……』

「……!!」

そんな浅野の前に、不気味な呼吸音と共に、黒い仮面に黒いヘルメット、黒い装甲の上に黒いマントと云う、全身黒尽くめな出で立ちの男が姿を見せる。

ヴォン…

「コー……ホー……」

やはり、刃の無い黒い柄から、紅い光の刀身を放出させ、人工的な呼吸音だけを鳴り

響かせて、無言で構える黒い男。

「本当に一体…」

一体、何がしたいんですか？アナタは!？」

この目の前の黒い男の姿に、この問題…今回のテスト全ての問題を作ったのであるう、理事長…つまりは自分の父親の姿を重ねた浅野が叫びながら斬り挑むが、

斬!!

この光の太刀筋を躲した黒い男は次の瞬間、反撃とばかりに浅野の両脚、そして左腕を紅い光刃で瞬く間に斬り落とした。

「うがああああああつ…!!?」

叫びながら、残った右手に持っていた光剣も手放し、地にうつ伏せの向きで倒れる浅野。

「……………。コ…ホ…」

ザツ…

その様を見た黒い男は、剣を納めると、既に浅野には興味を失せた様に背中を向けて立ち去って行く。

「ま、待て…!!」

両脚と片腕を失い、残った右腕だけで這う様に追おいながら呼び止めるも、その声は



理事長は、それ等を全て、自ら採点している真つ最中だった。

「いや、本校舎（コッチ）の先生方も、E組との勝負の話は知っているからね。

万が一にも、採点に不正が在っては駄目だと思ってるね。」

それは逆に言えば、本校舎教師陣は間違い無く、採点に不正すると確信しての行動。

事実、数人の教諭は、この理事長が、自身が採点すると聞き、凄く嫌な顔を…声に出さずも「余計な真似を…」と一瞬とは云え、明らかに顔に出していた。

「……………」。

今回のテスト、問題を作ったのは、理事長先生ですね？」

「よく分かったね？」

先生方には、秘密にしておいて貰っていたのだが…」

「理由を聞いても？」

「ああ、今の採点と同じだよ。

授業中、各教科の先生が、テストの答えや問題を教えたりする可能性が有ったと思っただからね。

やはり、勝負事は、フェアでないよね。

勿論、『それは考え過ぎです』って反論は受け入れるよ。」

「……………」。



「……このタイミングでの沈黙は、実際にそれが有ったと受け止めても良いのかな？」  
「いえ、そんな訳では……」

「そうだ。それに、そんな事は、どうでも良いのだよ、浅野君。」  
ピタ……

此処迄喋ると、今迄 口と一緒に動かしていたペンを止め、浅野(学)の顔を正面から真つ直ぐ見て、

「重要なのは、君達がE組に勝てるかどうかと云う話だよ。

まだ全教科、採点し終わった訳じゃないから断言出来ないが、明らかにE組の皆の方が、高い点数を出している。

今回の勝負、明らかにE組の勝ちになるだろう。

まあ、君達A組は負けた処で現状維持、新たなペナルティーを背負う事は無い訳だし、余り真剣になる必要性は無かったかな？

他のクラスの皆も、『頼まれもしないのに、勝手に署名を集めた(笑)』のが事の始まりな末の結果だから、ある意味、自業自得、雉も鳴かずば……つてヤツだ。

結果としては、不本意だけどね。」

「……!?!」

明らかに真相を知っていながら、且つ、「とつづくにバレていますよ?」と、暗に示しな





「各教科、1000点は勿論、900点台獲った奴、1人も居ないからな……」

結果から云えば、5教科の“間”スター、その予想外の難度（レベル）に殺られたのは響達だけでなく、本校舎勢、浅野ですら、同様に平等に返り討ちに遭っており、全体のランキング変動：特に上位陣はカルマが大きくアップした以外は、僅かな物だった。

本校舎勢との勝負も、響が総合トップを獲った時点でE組の完全勝利。

クラス内最下位の寺坂ですら、余裕で半分より上に位置していた。

そして そんな中、

「すがやんも、期末と比べたら、大きく順位上げてるよね〜?」

「ああ、あの時は偽律が気になって、集中出来なかつたからな。」

「でも、今回も彼女、隣だったよね?」

「もう慣れたから……な。」

逆に、モチベーション上がったぜ。」

「……よし、やつぱし この男は後でメよう!」「……」

「何でだよ!」

期末試験の時は、予告無しでの偽律の登場に動揺、不調だった菅谷も、今回は同じく偽律が隣の席に着くも、もう慣れたらしく、きよぬー美少女が隣の席と云う、現金な理由で大きくランクアップ。



「誰?」

そして この日、放課後の訓練を終えて下山したE組一同を待っていたのは、BとD組の一部の生徒。

ひよつとして…でなくとも、件の署名書に、自分の名前を書いた者達だろう。

普通なら授業を終え、部活動の者以外は…それも殆どは中学での部活は引退している筈であり、既に帰宅していても不思議でない時間帯に、である。

「あ、あの…吉良…君…」

「あ、あ?!」

「ひうつ?!」

代表して声を掛けてきた男子生徒に、まるでヤク○、の様な威圧的な返事で応える響。

「吉良…流石に今のは無いぞ?」

「やっぱりチンピラだわ…」

「ん、吉良っち、引くわ?」

「そんなだから、危険人物扱いされる。」

「え?え、えつ?!」

そして その受け答えに、クラスメートからも非難轟々大響聲、完全アウェイな展開

に戸惑ってしまおう響。

「あゝ、分かった、悪かった！」

…で、何か用か？」

空気を読んでか、ビビらせた生徒に一言謝り、用件を聞いてみると、やはりと云うかそれは、今回のテストに於ける勝負、それによる賭けの内容の取り消しの申し出だった。

「こ、今後は、E組に対して、差別的な対応はしないと誓うから、今回だけは勘弁して貰えないだろうか…」

「ふうん…誓う…ね？」

「ああ、だから…」

「だが断る。」

「「「「な…!!」「」」」」

その申し出を、迷わずバツサリと蹴る響。

「(ヒソヒソ) 吉良君…絶対に単にアレ、言いたかったただだけだよね？」

「(ヒソヒソ) ん、私も そう思う…」

「(ヒソヒソ) お、同じくですう。」

「(ヒソヒソ) 使い処は、間違っていないわ！」

「(ヒソヒソ) ええっ!」

以前 京都で、同じ台詞を聞いた事がある女子3人+1人が小声で話す中、響は話を続ける。

「テメー等から んな巫山戯た名前集めた紙、持って来といて、…で、勝負に負けた途端に勘弁してくれだ?」

巫山戯てるのか?

それとも、この曰わく、超々・危険人物様を舐めてるのか?

どっちにしろ、あんな行動に出た時点で、余所は知らんが、この学力至上の桐ヶ丘で、この流れになるのが読めなかつたか?」

「そ、それは、浅野君が、どうしてもって言うから!」

響の台詞に、女子の1人が溜まらずに口を出すか、

「嘘憑くなよ?あの お坊ちゃんまは、お前等が自主的に署名を集めて渡されたって言うてたぜ?」

本当は真実を知っているのだが、それを敢えて黙り、知らない振りをしている男は話し続ける。

「…其処迄言うなら、あの お坊ちゃんが、署名(アレ)について、『捏造(つく)つてました。嘘憑いてしまって、申し訳有りませんでした。』…って、認めたなら、考えてや



るよ。」



翌日の朝、校門前にて、浅野を筆頭に またもやA組一同が響に向けて、集団DOG EZAをする光景が見られたと云う。

「うゝん、今回に限っては、謝るのは浅野1人で良かったんだけどな…」

結局は、クラス全部の共謀だったか？」

そして この日の放課後、響は前回と同様に、クラス委員2人を引き連れ理事長室を訪ねると（事前にアポは取っていた）、今回の試験の賭けの内容にあった、E組と一部の本校舎生徒の応対に関して白紙に、同時に得ていた、『ある権利』の所持だけは、その儘活かす旨を伝え、理事長も それを正式に認めるのであった。

## 体育着の時間

「…で、吉良つち？吉良つちだけが、個別に あの理事長先生から貰った権利って、一体何よ？♪」

「ま、秘密って事で。」

「そっちのが面白いだろ？」

「……いや、そんな面白味、要らねーから！」「……」

中間試験、そして その結果発表も終わり、それに伴う賭け…浅野（坊）による署名のイザコザも終わった ある日の朝。

響は試験の結果、E組と本校舎勢との、その賭けによつて個人的に得た『ある権利』について、直接に その件で理事長との やり取りを聞いていた磯貝や、カルマ達から問われていた。

「心配しなくても、俺達E組には、何のダメージも無い事だから。」

その上で、本校舎側（やつら）には、最高に嫌がらせになる…みたいなの？

理事長先生からも、（柵ヶ丘の）教育者として、歓迎すべき事案だつて、既にOK貰つてるし。



「この朝のホームルームの時間を借りて、皆に報告しておく。

今後の、体育の授業を含めた、暗殺の訓練についてだ。」

「「「「「」」」」」」

鳥開の言葉に、皆が大小様々な疑問符を教室内に巻き散らしていると、彼の部下の3人：鶴田、鵜飼、園川が、大きなダンボール箱を持って入ってきた。

「おおおう…!!」

「これは…?」

「か、かつけーっ!」

皆に配られた、ダンボールの中身：それは真新しい、正しく技術大国日本・MAD E in JAPANを駆使した結晶と云うべきな、戦闘服：もとい、体操着だった。

「本日から、その”体操着”で、体育の授業を受けて貰う。

今迄のジャージでは、今後行われる、ハードな訓練は、耐えられんからな。」

「「「「「は…はいつ!!」」」」」

特殊強化繊維で編まれた黒のアンダーウェアと同素材のグローブ。

そして その上に着る、やはり様々な仕組みが込まれているダークグリーンの強化レザー製の軍服：もとい、体操着には要所に大小のポケット、パイザー付きのフード、膝

を保護する為のパッドも完備。

襟口を閉じる金具には、"E"の文字を象ったバッジが飾られていた。

尚、男女で多少？デザインは違っている。

「先に言っておく。それより強い体育着は、地球上には存在しない！」



どん！

「にゅやーーーーーっ!!？」

昼時 校舎裏の山で、生徒達に隠れて（…心算でバレバレな）1人、高級食材ふんだんなバーベキューを楽しむとしていた殺せんせー。

程良く肉が焼け、いざ「頂きまゝす」とばかりに網の上の食材に触手（て）を伸ばした瞬間、背後の崖から そのバーベキュー台目掛けて中村が落下。

それによってバーベキューセットは無惨にも飛散してしまう。

「凄いな…あの高さから落ちたのに、痛くも熱くもない…？」

「ななな、中村さん!？」

あなたは何処から落ちてくるんですか？」新しく支給された、超体育着の性能・防御力に驚く中村。



耐寒性

耐電性

耐水性

引つ張り耐性

斬突殴断射落等の各種衝撃耐性：

等々等々、あらゆる要素が世界最先端な、M A D E i n J A P A N (2回目)。

鳥間は止めたのだが、生徒達は「どうせ隠していても直ぐバレる」と、それなら嫌がらせ込みで、新装備の御披露目を実行。

それは隠れて食そうとした焼肉の邪魔だけでは終わらず、

パンパン！

「にゅやっ!？」

だ、誰ですか？りん〇〇先輩の読者サービスカットをインク塗れにしたのは？」

読書（ジャンプ）の邪魔、果てには、

「うがー！ー！っ!!」

ドシャアンツ!!

「にゅやー！ー！ー！っ!?!？」

「か、茅野、落ち着いて！」

窓ガラスを破つての強襲突撃、グラビアアイドル（G）をモデルに製作していた胸像（ロケット）の破壊と、超体育着の性能、防御力を遺憾無く発揮、存分に見せ付けた。

なお その際に、ガラスを破った茅野、渚、カルマが普通に説教されたのは、ご愛嬌。



「因みに、男女のデザインが別々なのは、私のアイデアよ。」

「へ〜？」

この日の放課後、イリーナの特別外国語教習が終わり、その儘 駄弁りタイムに入ったE組の教室。

話す御題は必然的に？超体育着の話になっていた。

「男は兎も角、女子には もう少し、可愛さを求めるべきなのに、全くカラスマは、あーゆーのには、無関心だからね？」

だから、…律？」

「は〜い♪」

ここで教室全員が、後ろの席の律に注目。

「先ずは、パターン①。男子のヤツね。」

パッ



イリーナの言葉に合わせ、液晶モニターの等身大律が、男子の超体育着に早着替え。両手に対せんせーナ이프を手にして、ポーズを取る。

「最初は女子も、コレだったのよ。」

次、パターン②。女子、正式採用版。」

パッ

今度は女子の体操着。

ダークグリーンの上着が長袖長ズボンの男子の それと違い、女子は半袖セパレート、ショートズボンの形状。

画面の中の律が、自動小銃を構えたポーズを決める。

手足、そして腹周りは黒のアンダーウェアが剥き出しとなるが、素材は一緒な為、御力には大した違いは無いとの事。

「ん。こつちのが断然 良いよね。」

「流石はビッチ先生。」

「なんだかんだで、女子の気持ち、解ってるよね。」

「そーだよね。」

言っちゃ悪いけど、鳥間先生、そっち方面はダメダメだからね〜！」

このイリーナ案は、女子からの評判は上々な様で、

「ふっふっふん！でっしよっう？」

得意気なドヤ顔になるイリーナ。

因みに男子は皆、「正直、どっちでも良いし」：な、興味無さ気な顔。

「でも、結局はボツにされたけど、私の一推しは こっちだったのよ！

律、パターン③!!」

調子に乗ったイリーナが、「更に讃えろ」とばかりに自身の一推しとやらを自信満々、律に着替えを指示。

「は〜い！♪」

パッ

「「「おおおおおおおっ!!」」」

「「「はあああああっ?!」」」

「「「うおおおおお!!」」」

「「「えええええええ〜?」」」

ノリノリな律が衣装換装（ドレスチェンジ）すると、教室内に歓声と喚声が交差する。

E組の皆が注目した液晶モニターには、アンダーウェア無し、下は上着素材の超ミニスカートに、上も同素材のビキニだけ：

一応、スカートの下には、アンダーウェアと同素材の、黒のビキニパンツという、体



E生徒一同とE組担任は、1週間位前からの、本人の然り気無い（ワザトラシイ）アピールで察して、プレゼントを渡していたのだが、どうやら副担任は、全然気付かなかった様だ。

「へく？それじゃあビツチ先生、バースデーの夜は、ぼっち先生だったんだく？」

「「「ぶつぶうーっ！」「」」」

このカルマの一言が大ウケ、数人が吹き出してしまう。

「なあ!? だ、誰が ぼっちだ? 誰が?!」

それに対して、顔を真っ赤にして怒る ぼっち先生。

「あーっ!!不愉快!

今日は もう、喋るの お終い!」

ピシャツ!

そして其の儘、教室から出て行った。

「あくあ、カルマ君、ぼっち先生、行っちゃったわよ?」

「今、結構マジに怒ってなかったか?」

「んく、明日の朝には、元の調子に戻るっしょ?」

それに大ウケした吉良っちゃんや櫻瀬さんだって、同罪と思うけど?」



## 死神の時間



あれから3日が過ぎた。

「今日もビツチ先生、来てないみたい。」

「やっぱしカルマのアレか？」

「…だね。」

「…原因はカルマ。」

『カルマ君が悪い』

「ちよ…マジ勘弁。」

イリーナは、あの日から、学校に顔を見せなくなっていた。

クラスの皆様は、先日のカルマの『ぼっち先生』発言が原因だと、冗談混じりに言っているが、それが原因で1日だけ無断欠勤する程度なら有り得なくもないと、そこ迄気にはしないだろうが、流石に3日となると、多少は何か遭ったのかと気に掛かる。

「鳥間先生も、連絡が取れないって言ってるし。」

その鳥間も、3日間連絡取れずとなると、単なる任務放棄だけでなく、想定外のトラ

ブル等、色んな意味での最悪を想定、彼女の後継候補の暗殺者との面接の為、防衛省に戻っている。



「碌でもない連中しか来なくなった…」

殺せんせーを殺る為の暗殺者の面接は、例外無く、学外で行われる。

学校敷地内で それをみると、その時に其の者の匂いを標的（ターゲット）であるタコに覚えられ、以後その殺し屋は、学校に入る前に”手入れ”されてしまうからだ。

この日も数人、面接を執り行ったが、その質は以前に比べて格段に落ちており、正直な話、現状のE組の生徒達にも実力的に劣っている人材ばかり。

烏間は焦っていた。

既に地球救済猶予は半年を割っており、しかしながら、絶対的な超生物抹殺の手立ては掴めない。

最近の一番の収穫も、沖縄での『完全防衛体制』という引き出しを1つ開けただけ。

更には言えば、政府に暗殺者を仲介してくれる筈のロヴロ・ブロフスキからも、2学期開始直前から、連絡が取れず、それが有能な暗殺者が政府に送られて来ないのも、焦っている理由の1つであった。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィ…

「……」

そんな風に思っている中、烏間のポケットの中のスマホが震える。

取り出してみると、画面には その連絡不通だった人物の名前が表示されていた。

「……烏間だ。」

ロヴロさん アンタ、1ヶ月近く連絡もせず、一体 何をしてたんだ？」

『……死にかけていた。』

「っ!?」

ロヴロが言うには、8月末に某国にて世界最高と謂われる殺し屋、死神と遭遇、その場で仕留められ、それから1ヶ月以上、生死の境を彷徨っていたらしい。

更には その間にも、自身の子飼いや提携を結んでいる暗殺者を次々と同様に仕留められたとの事。

何れも皆、同業者故に思う処が有ったのか、或いは標的(ターゲット)でないから、わざわざ殺す必要は無いと判断したのか……命には別状は無かつたらしいが。

『カラスマ、殺せんせー暗殺の件からは手を退け。』

でないとは、君達が危険だぞ。』

「……つまりは、ソイツがヤツを殺しに動き出した、我々は差し詰め、商売敵とでも云う訳



か？」

『その通りだ。』

ヤツは千を軽く越す屍を作り上げた怪物。

必要と判断すれば、誰でも殺し、誰でも利用するぞ。

例えそれが、女でも中学生でもな！』



キーンコーンカーンコーン…

「それじゃあ先生は、入間市に ちよつと用事があるのです。

イリーナ先生について、何か分かれば連絡して下さい。」

キィィィン…

1日の授業が終わると、そう言って わくわく顔で、教室から飛び出して行った殺せ

んせー。

「入間市（サイタマ）に何が有るんだ？」

「そう言えば結構前に、入間市（アツチ）で茶飲み友達が出来たって言ってた様な…」

「随分と自由奔放な国家機密だな!？」

空の彼方に消えて往く殺せんせーを見ながら、生徒達が呟く中、

ガラ…

「あ、烏間先生。」

「皆、席に着いてくれ。」

教室に入ってきたのは、慎重な顔をした烏間。

「…先に言えば、イリーナの所在がハッキリした。」

ガタガタツ…

「え?」「まじ?」「ビッチ先生の?!」

この烏間の言葉に、驚き席から立ち上がる生徒達。

♪ pikohn!

「はい?」

そして その次の瞬間、律の本体画面に、メール着信アイコンが表示された。

「律、画像を表示してくれ。」

「……………はい。」

p.i…

「はあ?」「びつ…」「えっ?!」「な…」

律が表示した画像に映し出されたのは、手足を拘束されて身体を畳まれ、体のサイズギリギリの箱に詰められた、黒のキャミソール姿のイリーナだった。

生徒達は それを見て、言葉を詰まらせる。



場所に来て下さい。」

カツカツ

普段の烏間を知るE組一同からはイメージ出来ない、優しい笑顔とですます口調の烏間…に化けた、死神を名乗る男が、黒板に人の形を書きながら、話を続ける。

「まあ、無理強いはいしないよ？」

その時は彼女の方を、君達に届けるから。

全員に平等に行き渡る様に、きちんと『小分け』にして…ね？」

「……………!!」

書いた人型を区分けする様、等分に線を書き足しながら、死神は言う。

その場の全員（一人除く）が確信した。

目の前の この人物こそ、夏休みにロヴロが言っていた、『死神』だと言う事を。

ザツ…ガタガタツ…

「ちよつと待てや、固羅?!」

「調子こいて喋ってるけどよ…」

「世界最高だか何だか知らないが、このアウェイど真ん中、俺等にフルボッコされる展開は想定しなかったのか？」

そんな中、寺坂を始めとした数人の男子生徒が、死神を囲み込む。

「クス…」

しかし死神は臆する事無く、僅かに口元を緩めると、

「僕が殺し屋になるに辺り、一番最初に磨いたのは、格闘…即ち、正面戦闘の技術（スキル）だった。」

何故だか解るかい？」

「!？」

そう言いながら、自身の正面に立つ寺坂…の、隣に立っていた男子生徒の顔面目掛けて、拳を放った。

ガシッ

「…そりゃあ普通に考えりゃ、殺し屋には99パー必要無いスキルだろうが、『コイツ』が無いと、残り1パーを殺り損なう…か？」

「「吉良!」「吉良君!」」

そして死神の問い掛けに答えたのは、その拳を掌で受け止めた響。

「…正解だよ。君も覚えておくが良い。」

世界一の殺し屋を志すなら、必須の技術（スキル）だ！」

…内心、受け止められた事に少しだけ驚くが、その素振りを見せない死神は、続け様

に前蹴りを繰り出すが、それを響はギリギリの間合いで躲す。

「せいやあつー！」

そして今度は、クラスメートの肉眼が、ギリギリ捉えられるスピードの左の正拳を放ち、それを避けられると、

(レベル修正！進れ！俺の小宇宙(コスモ)!!)

心の中で叫びながら、僅かに…本当にほんの僅かだけ小宇宙(コスモ)を燃やすと、  
「でえいいいやつ!!」

バッキキキッ!

死神の下顎目掛けて、痛烈な右のアップercutを炸裂させ、更には素早く背後に回り込むと羽交い締めからの、

「うっおりやあああつ!!」

どん!!

強烈な投げ技…所謂プロレスで云う、ドラゴンスープレックスを放ったのだった。

「…うがっ!?!」

ガタン…

『死神』と云えども『人間』、顎に真下からの殆ど垂直に近い一撃、そして続けて後頭部喰を痛打、この響の『聖闘士』としての一連の攻撃で、脳味噌を派手に揺らされた死神



それを受け、駆け付けて来た殺せんせーと烏間達により、死神は改めて専用器具で拘束され、政府の収容施設に送られる事に。

「それにしても、噂をすれば…か…」

まさか数時間前、ロヴロから注意を呼び掛けられた その日に事が動き、そして事が済んでいた事に、烏間は苦笑。

「それじゃ、皆、行くぞ。」

「「「「はい!!」」」」

そして烏間指揮の下、E組&殺せんせーは、死神がメールで指定していた、アジトと思われる場所に向かう事になった。

「さて…捕らわれのビッチ姫（笑）を助けに行きます…かね？」



## アジトの時間

「此処、か……」

死神に拉致されたイリーナを救出すべく、鳥間の指導の下、律に送られたメールに記された場所に到着したE組一同の約半数。

本来ならば、殺せんせーも これに同行する予定だったのだが、

》》》》

「あゝ？ 行くだけ無駄っしょ？」

死神つちさんに勝てる訳ないし〜？」

「いえ……彼は もう、倒されて捕まっていますから……」

「きやははは！ このエロタコ、ギャグのセンスあるう！ 超〜ウケるんですけどお？」

ぶーくすくす!!」

「……………。」

メールを開いたと同時に、ウイルス感染、ハッキングされた律の設定修復（ちりょう）に勤しんでいた。

「しかし、このハックド律さんの設定……」



尤も その全てを、一同の先頭を歩いている烏間が事前に察し、難無くクリアしていたのだが…

『『『『『がげげげげ…』』』』』』

…E組の目の前に立ちはだかったのは、重火器を背負い、軍用訓練された、数匹のドールマン。

侵入者に向けて番犬の放つ、野生でなく訓練による凄まじい殺気。

「『『『う…うわああ…』』』」

日頃からの訓練の賜物故に、それを敏感に感じた生徒達の殆どが、足を竦ませる。

「ふん…」

しかしながら、それに全く動じない男が1人、一歩前に踏み出した。

E組副担任、烏間惟臣。

…死神め、あのタコを殺す為に、生徒達を巻き込もうとしたばかりか、こんな動物迄暗殺用に仕込み、使おうとしていたのか？

許さん…ますます以て、赦さんぞ…

明らかに不機嫌な顔となり、

「何が赦さんってな…俺は、動物が…」

生徒達には聞こえない程の小声で、ぶつぶつと この暗殺仕様犬に近づく鳥間。

「特に、犬（わんこ）が大好きなんだ…!!」

にっこり…

出来る事なら傷付けたくない…

その思いからの満面な笑みで、自分には戦闘意欲が無いのを示す鳥間に対し、

びつくうっ!!（「ゝ〇ゝL」）

その顔（オーガ・スマイル）を見たドーベルマン達は恐怖に慄き、降参の意を示すかの様に、その場で伏せてしまう。

「凄えぜ鳥間先生！」

睨んだだけで あのだ共、完全に黙らせやがった！」

「……………」

鳥間の背中しか見てなかった生徒達は、まさか微笑んでの掌握とは気付かず やんやの歓声を送り、

「一応、この銃は外しておくか…」

堀部君、手伝ってくれるか？」

…かと言って、微笑み掛けたら それだけでビビられてしまったとは言える筈も無

く、内心かーなーり、凹みながらも この愛犬家は それを悟られぬ様、この軍用犬の  
武装解除に銃器の調整、整備を得意としているイトナにアシストを要請。



『くうくん、くん…』

「ぎやははは♪くすぐったいよ〜♪」

「はいはいはい〜。」

良し良し良し、良い子ですねぇ〜？」

「……………orz」

「……か、鳥間先生!?!」

その後、背中の大型機関銃を外された犬達は、何故か倉橋に対し、じやれる様に抱き  
付いて顔を舐め回し、そして響には、服従の意を示すかの様に仰向けとなり、所謂『腹  
撫で』のアピール。

その自分とは 打って変わる、自分が望んでいたリアクションに、「何故、俺には…?」  
とばかりに跪き項垂れる鳥間に、端から見れば、いきなり原因不明の凹みつ振りを見せ  
る副担任に、生徒達が心配の声を掛けていた。



「……ビッチ先生!?!」

そして進んで行った2階フロアの一室にて、天井から吊られたロープで手首を拘束されているイリーナを発見したE組一同。

「大丈夫…なのかよ？」

「うん…」

「ん！気を失ってるだけ…息はあるよ！」

そう言いながら、矢田がロープを切り、

「よつと…つたく、世話の灼ける…」

寺坂が彼女を背負う。

「寺坂く？どさまぎで お尻とか、触ったりしちや駄目だよく？♪」

「するかっ!!?」

カルマの冷やかす様な台詞に、必死に否定する寺坂。

「…成る程、『背中越しの胸の感触だけで充分です!!』…と。

寺坂あ、サあイテえくwwww」

「それも違う！」

そして便乗する中村の言葉にも、更に真剣に否定。

~~~~~

「んく…んんっ?!」

「お？起きたか？」

「「ビッチ先生！」」

死神アジトの改装された廃工場内、来た道に戻り、外に出る少し手間で、イリーナが漸く目を覚ました。

「ちよ…何で私、寺坂に負ぶされてる訳？」

「どーゆー事なのよ!？」

「とりあえず、早く降ろしなさい！」

「ゴン！」

「あ痛てっ?!」

目を覚ました途端、平常運転となるイリーナ。

そして未だ今一、状況が理解出来ないイリーナに、何が有ったのか、事情を説明する生徒達。

「はあ?! あれから3日経ってるう？」

「…つて、死神いい?!」

そして自分が最強暗殺者・死神に攫われた事に、驚きを隠せないイリーナ。

「し、しかも、ヒビキが死神、倒したですってえっ?!」

「吉良響は、死神殺しの魔王である!!」

「不破ちゃんく、人をカンピオーネみたいに言うの、止めてくれる?」

響はカンオーネでなく、聖闘士である。

「それにしても、如何に相手が世界最強の殺し屋だからって、ビッチ先生が訳解らない儘に、捕まるなんて…」

「「ん、確かに。」」

「……………(?!?)」

茅野の何気無い疑問(つぶやき)、それに同意する一同から、イリーナは気不味そうに目を逸らす。

「どうせ、カルマの『ぼっち先生』発言で凹み&半ギレしてた時に、烏間先生に変装してた死神に優しく声を掛けられ誘われて、チョロくも ほしい着いてって攫われた…つて処でしょ? この ぼっち。」

「わ、悪かったわね!?

えー、そーよ! 全く その通りよ!!

それから、ぼっちって言ーな!!」

グイ…

「ううげ!! お、俺に当たるな!!」

この響の推論に、半泣きで顔を赤くして逆ギレ、八つ当たりなのか、負ぶさっている寺坂に背後からチョークスリーパーを極めながらも、それを認めるイリーナ。

「と、兎に角、起きたんなら自分で歩きやがれ！」

「ふん！言われる迄も無いわよ！ガキ!!」

そう言つて、寺坂の背中から降りるイリーナ。

「あつ、痛うつ!!」

「「「び、ビッチ先生?!」」」

しかし その1秒後、一步 歩いた直後にイリーナは、間抜け顔と共に足を押さえてしまう。

「ビッチ先生?」

「どうしたんだよ?」

「だ、大丈夫?」

それを見て、心配顔で駆け寄る生徒達。

「は…裸足で小石踏んだ…」

ガタガタガタガタっ!!

その台詞に、派手にコケる生徒達。

「ハア…何なんだよ？ このビッチわ…」

溜め息と同時に、やれやれ顔な寺坂が腰を降ろし、
「ほれよ。」

再び負ぶされとばかりに背中を向けるが

「チェンジ。」

「「「「はあああ?!」「「「「「

このBitcchは寺坂の受け入れを拒否。

「何言ってるんだ!このビッチ!!?」

「チェンジって何よ?!」

「仮にも教育者の台詞じゃないわよ!」

「…そんなだから ぼっちって言われる。」

「まあ、そりや寺坂嫌だって、その気持ちは解るけどさく♪」

「んだとお?ゴラ、ア?!」

『チェンジ』…その意味、その元ネタを知っている故に（情報源：イリーナ）、その台詞に生徒達からは非難轟々。

「う…うっさいわね!」

兎に角、チェンジよ、チェン・ンジ!!

私にだって、選ぶ権利は有るわよ！

あとリンカ！ぼっち言ーな!!」

それ等をつ突つ込み込みで、イリーナは逆ギレで返し、その場の とある人物に、俯き加減で視線を向ける。

「……………!!」

その視線を、当人以外の全員が察知。

女子生徒が約1名、複雑な表情を浮かべる中、チームワーク抜群に悪（よ）い笑顔で頷き合うと、

「烏間先生〜?」「御指名で〜す♪」

「何?」

クラスを代表して、E組悪童コンビが烏間に話し掛けた。

「何故、俺が…って、もう自分で歩かせたら良いだろ!」

「……………はあ〜……………」

しかし この烏間（どんかんおとこ）の、全く察せない、それを拒むかの発言に、生徒一同は『駄目だ、コイツ…真剣（マヂ）に何とかしないと…』と、ばかりな、溜め息の大合唱。

「良ーから!今回の誘拐劇、烏間先生にも原因ってか責任が有るんだから!」

「「「ソーソー。」」」

「ソーだソーだ！全部、カラスマとカルマが悪い！だから、Harry up！」
「な……？何なのだ……一体……？」

この後 結局、生徒達……そしてイリーナからの責め立てに、訳の解らぬ儘に屈した鳥間は、腰を屈め、先日21の誕生日を迎えた同僚に背中を向けるのだった。



「~~~~~」

「……………。」

帰り道、未だ今一理解納得出来ない仏頂面の鳥間に、背負われているイリーナ。そして背後から その光景を見て、ニヤニヤしているのは、生徒達である。約3名の少年少女は、その様子をスマホで撮影。

彼等の頭や背中に、角や蝙蝠の様な羽が見えるのは、あくまでも幻覚（イメージ）である。

「うっうう~~~~~！！」

「よしよし」

そんな中に1名程、納得の往かない顔を浮かべている女生徒に、矢田と片岡が宥めあ

やす様に頭を撫でていた。

ふん…

カラスマ…まあ、アンタからのプレゼント、今年はコレで、勘弁してあげるわ！
その代わり…来年は、こんな程度じゃ、済まされないからね！！

…そう、心の中で呟く金髪美女は、満面の笑みを浮かべていたとか。

学園祭の時間

「いや……いや……きや……きやあああああ……つ!!?」

その日、桐ヶ丘学園中等部旧校舎に、絹を引き裂いたかの様な痴女（ビッチ）の悲鳴が響き渡った。

「ビッチ先生?!」

「大丈夫……かよ?」

「ハア……ハア……」

「何だか凄く、エロっぽいんですけど?」

顔を赤らめ、息絶え絶えなイリーナの顔を、E組の面々が心配気な顔で覗き込む。

そんなイリーナの着いている机の上には、一杯の漬け麺が。

「しよ……触手……」

「……はい?」

「一口啜った瞬間に、麺が触手の様に蠢いて纏わり憑いて……着ている衣服が全て剥ぎ取

それは町（そと）で金を払って仕入れるより、安価なのは勿論、質も良く、

それにより、スープ等の、どうしても外から取り寄せないと為らない材料に、予算を贅沢に回せる事となり、

「この麺、ラーメンより漬け麺向きだな。」

それに、そつちのが、スープも少なく出来て、経費も浮くぜ。」

最初の試作品を作った時の、料理長自らの感想で、方向性も確定。

そして肝心な、その味も、最初は『所詮はガキの料理』とか『世界中の美食は食べ尽くした』とか言いながら名乗り出た、イリーナの冒頭の反応で察しの通り。

更には…

「いや、大漁大漁♪」

「ただいま♪」

釣り竿を持った響と杉野が、プールでの戦果である山女魚、岩魚、追河に手長蝦等を、大量に盛った筈を持っている倉橋と共に登場。

そして、

「殺せんせー。言われた通り、適当に木の実とか獲ってきたよー。」

「食べても大丈夫かどうか、チェックしてねー。」

「こつちのキノコも、鑑定よろしく♪」

毒キノコだったら、教えてよね？

責任持って、俺が”処理”するからさく♪」

「お前は、それを、どうやって処理しようとしている?!」

渚、茅野、カルマが木の実に果実、山菜等を拾ってきて、メインである漬け麺以外のメニューにも、幅の広がりを見せる。

「あ、毒キノコは心配無く。」

先生が全責任持って、全て美味しく戴きますから。

例えば、この毒鶴茸。

毒キノコとして有名ですが、スライスして胡麻油で炒め、オイスターソースを少しだけ垂らすと、実は凄く美味しいんですよ。

普通の人はアウトですけど、先生、毒なんかは全然平気ですから。」

「「「「ちいっ!!」」」」

「でも本当に真面目な話、間違っても実践しては駄目ですからね! (切実)」

「誰に向かって言っているんだよ?」

「いや、本当に危ないんだよ!」

特に今、本小説(コレ)読んでいる人!

コレ食べても、巨大化なんかしないよ?

血を吐いて死んでも、誰も責任取らないからね？（警告！）」

「「「「不破さん?!」」」」



トンカントンカン…

「…で、E組って、どーよ?」

「いや、流星に今回は、無理ゲーだろ?」

学園祭の外舞台の準備に、校庭で大工仕事をしている、本校舎の生徒達が話す。

「食べ物かイベントか…何を出すかは知らないが、E組（あいつら）はあの山の上で店出さなきゃならねーんだぜ?」

「確かに…あの山を登ってくだけの価値の有る品（モン）、出すのは難いよな。」

「それとA組、あの浅野が何やらデツカイ爆弾、仕込んでるらしいぜ?」

「マジ?」

「ああ、A組のヤツが言ってたんだけどよ、何でも浅野が…」

「へ〜?♪」

「それ、詳しく教えてくれないかな?」

「「「「なあ!? きつキツ吉つ…」」」」

山の上にいる旧校舎を見上げながらの会話に、その旧校舎の生徒が、それこそ本校舎

「片岡さんの言う通り、如何に　あの浅野だからって、飲食チエーンや芸能プロの偉いさんと簡単に話が出来る訳が無いさ。」

「そーゆー事♪」

その　お偉いさん達は、浅野本人でなくて　その後ろに見える、父親（りじちようせんせい）と商談している心算なんだよ。」

「カルマ…」

確かに如何に『柵ヶ丘学園祭』の銘を口にしてスポンサーを呼び掛けたとしても、それが響やカルマだったら、『中学生如きが』の一言で一蹴されているだろう。

名門校理事長の御子息の、七光りが有ればこそその芸当であるのは明らかだった。

響とカルマの仮説に、生徒達は納得の顔を浮かべた。

「それにしても浅野君、『勝ちたい』って、こんな学園祭でも、勝負事を持ち掛ける心算なの？」

「売上（けつか）発表の後、一方的に俺達にドヤ顔したいんだろうよ。」

「俺達は今回は　そんな気、一切無いんだけどな…」

「平和に出来ないモンかねえ？」

「言ってやるなよ〜？♪」

浅野も必死なんだよ？解ってやりなよ♪」

「今頃あの お坊ちゃん、したり顔で『死角は無い!』とか、『吉良、今回は負けられない!』とか思ってるぜ? WWW」

今回は本当に本校舎勢…A組との勝負云々は考えに無かった響が、それに必死に、そして得意気になっている浅野の顔を思い浮かべ、やや深みの有る黒い笑みを零す。

「しかし、それでも負けは負けとなると、悔しいですね?

吉良君、やはり此処は…」

「応、やはり最初にアイデアに出ていた、メイド喫茶風の店を、もう一度 真剣に考え直すべく (ベキツ!) 「あじやばー!」」

「「吉良あ? 竹林いいーっ?!」」

~~~~~

「分かつては、いたけど…」

「扱いが、ぞんざいだ…」

各々のクラスが着々と準備を進める中、学園のホームページに記載されている学園祭の知らせのサイトを見た、中村達が呟く。

本校舎のクラスは それぞれ事詳細に、特に浅野率いるA組については「人気アイドル、S・S (他) のミニLIVE! あのお笑いタレントも やってくる! 無料の軽食、フリードリンク付き」等と大きく載っているのに対して、E組に関しては「中等部3年

「E組提供・どんぐり漬け麺」の一行が、ページの一番下に小さく書かれているだけ。

「S・Sって誰だよ？」

「さあ？」

「余計な詮索は無用よ。」

「ネタばらし防止の意味の、イニシャル表記なんだから。」

「不破ちゃん?!」

「ヌルフフフフ…」

「その一行だけで、充分ですよ。」

「『殺せんせー?』」

「そこへ会話に入ってきたのは殺せんせー。」

「只の『漬け麺』でなく、『どんぐり漬け麺』と、きちんとした名を載せて貰えたのですから。」

「『殺せんせー?』」

「『殺せんせー?』」

「この『どんぐり漬け麺』と云う、一風変わったネーミングに、興味を持った人は、少な

くは無い筈です。」

そうなる、そのワードを検索し、やがては三村君作成の特設ページに辿り着き、その中の菅谷君の料理イラストや岡島君の食品写真、漬け麺以外にも狭間さんや神崎さん





偶然にも、このE組作成のサイトを見つけ、そのメニューを見て話す若い男女達。

この彼等彼女等が この後、物語に関わるかは定かでは無いが、彼等の様に、不特定多数の者達が、学園祭に於けるE組の店に興味を持ったと云うのは、決して誇張では無かった。

そして翌日の、11月中旬の土曜日。

ドン！ドドン！

盛大な花火が打ち上がる中、翌日の日曜日と2日に渡り繰り広げられる、櫛ヶ丘学園祭…の商戦争が幕を開けた。

# ゲストの時間

「う…」

「美味しい…だと?!」

山の上、旧校舎に特設された飲食店で、此の時此の場でしか食せない、オリジナルの漬け麺を口に含んだ銀髪碧眼の少年と、頭に金細工の輪冠を嵌めた黒髪の青年が、その初めて口にする味わいに、驚きの顔を露わにした。

「ん〜、捻りの無い、普通な表現ね。」

如何にイメージと云えども、流石に男を挽ん剥く様な趣味は、作者は持つてないみたいね。

普段は…いや、最近は『コッチ』じゃ、影は潜めてるか?…意味も無く、上半身バサアツしてるけど。」

「…不破ちゃん?何故、俺を見る?」

その絶賛されているリアクションにも拘わらず、それに少し不満気な感想を呟く女子が、約1名。



櫛ヶ丘学園祭。

E組が企画したのは、殺せんせー原案、村松考案の【どんぐり漬け麵】をメインとした飲食店。

三村が中心となり作成したホームページの効果も有つてか、この看板メニューだけでなく、

「このキノコのソテー、凄く美味しいですよ！」

「はい。まさか、この様な場所では失言でしたね？」

マツタケやタマガダケ：こんな、高級食材が出てくるとは…」

「山女魚の燻製、美味だにゃ〜♪」

「山葡萄のジュース、美味しい。…おかわり所望。」

サイドメニューの、原が中心となって調理する、山の幸 川の幸をふんだんに使った料理も、来場した客には好評を得ていた。

そう、『来場した客』には…

「しかし…やっぱ客足、伸びないな。」

「いや、立地条件の悪い中、よくやっているとと思うよ？」

それでも やはり、山登りをしてくる者は、決して多いとは言えず、山の麓に寺坂達体力自慢をリヤカー（自転車牽引）での送迎要員として配備していなかったら、更に苦

戦していたのは明らかだった。

しかし、それでも、縁という物は確かに存在しており、

「「「おくい、杉野〜！」」」

「おお、進藤！……と野球部の皆！」

「ふっ……野球部総出で、来てやったぜ。」

「あんなページ見せられた日にゃ、食べてみたくなるぜ。」

「ああ、サンキュな！」

本校舎生徒としては珍しく、E組に対して歪んだ感情を持たない、嘗てのチームメイ  
トが、

「磯貝君〜！」

「磯貝先輩〜！」

「やあ、よく来たね。」

「……………」

日頃の行いの賜物か、そのイケメン男のイケメンっ振りに惹かれる本校舎の同級生下  
級生達が、

「前原君〜、来たよ〜。」

「やつほ〜☆！」

「おお！来てくれたか！ありがとな!!」

「……………!!」

日頃の交友範囲の広さの賜物か、遊び慣れている感の半端無い男の、学校の外からの友人が、

「「「吉良先輩〜!!」」」」

「お……おう……」

そして、やはり日頃の行いから、本校舎にて基本的には危険人物と謂われながらも、先の体育祭での大立ち回りで、その人物をカリスマ視する様になった一部の1年2年の男子生徒達が、徐々に足を運んできた。

尚、その際、何故か瞳から光が消えた片岡を茶化した響と、やはり何故か、夜叉の形相となった岡野に前原がシバかれたりしていたのは、別の話である。

「いや、磯貝や前原と俺、訪ねてきた人間のベクトル、何だか違つくね？ orz」



「H A H H A—!」

H I S A S H I B U R I D A N A ! B o y s & G i r l s !」

「あ、レッドアイさん!」

「ふん…死神に浚われたと聞いたが…

元氣そうだな…」

「せ…師匠（センセイ）!？」

「久方振りで候ぬ。」

「あ、おじさんぬ〜♪」

「しゅしゅしゅ…あのタコに、電話越しに泣いて頼まれたから、来てみたでしゅ。」

「「「あ…はい…どうも…（…つて、だ、誰?この人?!）」」」

更には特殊な暗殺教室だからこそ、その特殊な縁で知り合えた者達が、次第にこの旧校舎の店に足を運ぶ。

「ぎ、客の半数が、殺し屋になった…」

…その光景を見た者が、白目で突っ込み気味に呟くのも、決して悪くはない。



「…で、何なのですか?これは?」

「ヌルフッフッフ…」

先生がマツハで作ってみました。」

「手作りかよ!!?」

「3人共、似合う似合う♪」

暗幕が張られた、部外者侵入禁止のE組教室（スタッフルーム）にて、殺せんせー特製の燕尾服を着ているのは、響と磯貝と前原。

「…それじゃ俺達は校庭側に回るから、校舎内は吉良に任せるぜ。」

「俺達は…つてか、お前以外は『校則』で、必要以上に本校舎側を自由に歩き回れないだからさ…」

「ほら、更に こうすれば…」

「あつー…?!何すんだ、このタコ！」

「ね？これで簡単に吉良君（きけんじんぶつ）とはバレませんか？」

「はい、笑顔の練習！」

こーうやつて…ニィ〜♪（笑）」

「茅野ちゃん、楽しんでない？」

更には普段の髪型を無理矢理にオールバックに固められ、伊達眼鏡を装着させられた響が、親指と人差し指で口を左右に広げての笑顔作りのレクチャーを、茅野から受けていたり。

暗殺者の色合いが強くなってきた客層を払拭する為、そして更なる客足を延ばす為、本校舎側へ直接に客引きする刺客として、人徳の磯貝、社交性の前原、そして本校舎内を制限無しに動ける響が抜擢されたのだった。



一方その頃、浅野学秀率いる、A組は…

「♪嗚呼〜」

♪俺達は この勇ましき 儂さで何を護る？

もう、理性なんて無いなら…♪」

わーわーわーわー…!!

…半分以上は浅野の生徒会長としての権限を利用して大講義室をA組として丸々と借り受け、その部屋を2分割してのイベントカフェ、芸能事務所から派遣された若手アイドルと、お笑い芸人のミニライブを交互に開き、大いな盛り上がりを見せていた。

「どうだい？」

アイドルのライブが終わったと思えば、今度は反対側で お笑いショーの始まりだ。

各々30分から1時間のステージ。

それを交互に繰り返し。

でも…入り口は別々だから、ね？」

「成る程…アイドル見た後、お笑い見たけりや、また別途入場料払わないと…か。」

「それを繰り返し返してりや、そりゃあガンガン金が入るわな。」

ステージの脇でミニライブを見ながら、浅野のプロデュースに、改めて感心する五英



傑達。

「そういう事。しかも僕達から、彼女達へ払う報酬（ギャラ）は0だ。

所属の事務所が全て負担してくれる。

今 此の場で提供されている飲食物も全て、同様にスポンサーとなったチェーン店からのサービスだ。

云わば経費は0の利益100割、稼ぎは全て、A組の売り上げポイントとなるんだ！」

「キヒヒ…しかも、飲み食いタダだと愚民（バカ）は際限無く食って…」

「コツチで お腹は一杯で、E組（アッチ）の飲食店（みせ）に行く気は失せる…か。」

「その通りだ。」

別に今回は、勝敗に絡む賭けの約束なんかは していないが、それでも周りが勝手に期待してる以上…

それ以前にA組として、もう何事に於いても、E組に負ける訳には往かないんだ！

吉良…今回は、僕達が勝つ!!」



「今日は どうも、有り難う御座いましたあくってか？」

「あ、お疲れ様です。」

此方こそ、有り難う御座いました。」

先程、ステージで熱唱していた……高校生か大学生か位な少女が、この日の仕事を終え、ステージ衣装から私服に着替えた後、一応は今日の雇い主である浅野に、仕事場を去る前、やや軽い口調ながら、挨拶に やって来た。

「もう、学園を出るのですか？」

「いや、久し振りに、ガクセイキブンを満喫したい……みたいなの？」

今日は もう仕事も無いし、折角の学園祭、仕事（ビジネス）でなく私事（プライベート）で、もう少し学校人中、ぶらぶらしてみるわ。」

「どうやら このアイドルは、一般客として、この学園祭を楽しもうとしているらしい。あ、だったら僕が、学園を案内しますよ……（パシッ！）あ痛っ！」

それを聞いた榊原が、学園の案内役を買って出ようとするが、

「心配御無用。それから、気安く肩ポンしようとしてんなよ？義務教育のガキ？」

お前が確かにイケメンなのは認めてやるが、それが何でもな免罪符と思っていたら、何時か痛い目に遭うぜ？」

「「「「……………」」」」」

その際に肩に触れようとした手を弾かれ、更には とてもアイドルとは思えない？台詞遣いで、物理的にも言葉的にも、痛烈なカウンターで返されてしまう。

これには その場の皆が……浅野ですら、声を失い固まってしまう。

「…でも、アナタみたいな人が、しかも さつき迄ステージに立っていて、この学園に来ているのが知られている様な人が、一人で校内を歩こうなんて…」

そして榊原のフォロー…と云う訳では無いが、それでも世間から かなり認知されているタレントが一人で校内を歩くのは、幾らプライベートだからと言っても、色々と問題が有ると思い、浅野が注意を呼び掛けるが、

「大丈夫大丈夫♪」

このアイドルは上着のポケットから、顔の下半分をスツポリと隠してしまう様なマスクを取り出し それを被ると、

「こうすれば、以外と誰も、気付かないんですよ♪」

それじゃあ皆さん、失礼しますねえ♪」

「「「「「……………」」」」」」

先程の榊原への口調が豹変したかの様な…まるでキャラがチェンジしたかの様な口調で、その場を去って行った。

~~~~~

「お〜い！キ〜ラヒ〜ビキ〜い！！」

「さ…サキさんん?!」

…このアイドルが校舎内を1人歩く中、学外の来客に自分達の出し物を勧め誘っている、燕尾服を着た少年を見つけ、彼の名前を呼び掛けたのは、それから約10分後の話だった。

アイドルの時間

「~~~~~」

何だかんだで、彼女は上機嫌だった。

本来ならば、この日は久し振りの休暇（オフ）だった。

しかし、急遽 飛び込んで来た この仕事。

事務所の社長に頭を下げられるが、

「まあ…別に、良いけど？」

高校を中退して この業界に足を踏み入れた時から、まともに休めない事は覚悟していた彼女は、嫌な顔をせずに それを了承。

中高一貫の有名私立校の学園祭の特設ステージにて、数曲歌うだけという、その職種にプライドを持って就いた者としては やや物足りなさを感じながらも、課せられた仕事をこなし後は、せっかくだからと その儘、今度は一般来訪者として、久し振りとなる『学校の空気』を堪能していた。

そう、例えば校内を歩くと言った際、エリート様は何をしても赦されると勘違いしている様な中学生（ガキ）に、肩ポンされそうになり、気分を少しだけ害したのを差し引い

たとしても…

それなりに…と云うか、かなり売れている筈の顔も、顔の下半分をマスクで覆っているからか、周りの者達も、誰も彼女を『彼女』だと気付かない。

それには半分、複雑な思いを抱きながらも、この学園の雰囲気を楽しんでいた。

「…ん？アイツって…？」

そんな中、彼女は、燕尾服を着た少年…恐らくはこの学校の生徒であろう少年が、やはり一般来訪者に対して自分達の出し物を推している場面に遭遇する。

髪、固めてるし、眼鏡掛けてるけど、間違い無いよな…

アイツ、此処の生徒だったのか…

既に過去、私事（プライベート）で数回程会って話しており、その知っている容姿でないにしろ、その雰囲気や目付きから、自分が知っている人物と確信した彼女は、

「お〜い！キ〜ラヒ〜ビキ〜い!!」

その名前を呼んだのであった。

~~~~~

「さ…サキさん?!」

「おう、やつぱし吉良君だったし〜♪

…で、何なの、そのカツコ？

悪いけど、全然 似合っていないよ〜？ w w w」

超々・危険人物と云う悪名故に…校内の生徒に声を掛けたら、それはそれで、脅えながらも山を登ってくれるだろうが、それは自身の、そして今回の場合、E組の評判を落としかねないので…外からの来校者をターゲットとし、とりあえずはと、廊下を歩いていた親子連れにメニニューを見せながらの客引きをしていた響。

そんな響に、いきなり背後からフルネームで呼び掛けてきた人物。

須木奈佐木咲（スキナサキサキ）。

浅野が企画した、イベントカフェに派遣されたアイドルの1人。

昨年の7月頃に「殺気姫」の愛称デビューした彼女、実は響とは、とあるネットサイトでのサークル仲間で、そのオフ会で何度か顔を合わせ、その時に所謂フラグ等は立たずに、普通に仲良くなっていた。

それもあつてか、顔を合わせた早々に、響が着用している燕尾服を容赦無く弄り倒しだした。

「じ…：自覚は有るから、放つといて下さい…：（T | T）」

勿論、最初は そのオフ会、まさかの人気アイドル登場に、響だけでなく、他のメン









「はいどーぞ、E組特製どんぐり漬け麺で〜す!」

「うわ!美味しそ〜!!」

矢田が持つて来た漬け麺を目にして、それ迄着用していたマスクを外し、箸を割る須木奈佐木咲。

「……………」

その際、一瞬だが彼女の目付きが変わったのに気付いた響は

「ちよいちよい…片岡さん岡野さん中村ちゃん?」

「「??」」

近くに居た、数人の女子を手招き。

「何なの、吉良っち?」

「いや…いざって時は、全力でサキさんを止めてくれ…ってね。」

「はい?」

「知ってるだろ?あの人の悪癖。」

「「あ…」」

「それじゃ、頼んだぜ。」

「おう…」「了解。」「…頼まれた。」

ちゆる…

陰で そんな遣り取りが行われている中、 麵を口に運び、 一口啜る咲。

「……………?!う…美味っ!!」

そして まさかの驚きの表情。

正直な話、 所詮は中学生の料理…

とりあえずは友達達の催す出し物だからと、 一応は社交辞令な対応を見せる心算だったが、 その想定外予想以上の完成度に、

ちゆる…ちゆるるる…ずずずずずず…!!

何処ぞのラーメン系グルメマンガの如く、 一心不乱に食べ始める。

そして、

「ちよ…マジに美味しいんですけどっ!?

ヤツベ…マジにヤツベ…!!

テンション、 上がってキタア…?」

バサア…

「……………!!」

そう言いながら、 羽織っていたジャケットを脱ぎ捨て、 更には その下に來ていた

シャツも同様とばかり、その裾を捲り上げようとした時、

「だ、ダメえー！ー！！」

その先のアクションの続きは、片岡、岡野、中村の3人に、全力で阻止された。

「まさか本当に…」

「吉良つちの言う通りに なるわ…」

「余りの美味さにイメージでなく、リアルに脱ごうとするなんて、流石はアイドル、恐るべし！」

「不破さん？」

彼女の悪癖…

実はアイドル・須木奈佐木咲は、テンションがクライマックスに達すると、上だけではあるが、着ている衣服を脱ぎ捨て ぼろりすると云う、誠に素晴らしき癖が有り、そのせいでテレビの生放送には出演出来ないと言っ背景が有った。

尤も何処その露出狂（笑）と違い、当人も この癖は気に病んでおり、何時も後々楽屋にて、死ぬ程恥ずかしがって後悔しているらしいのだが…

「吉良と殺気姫が友達なの、何だか納得出来たぜ…」

「…類友。」

「ま、まさか知り合ったサークルって、『そっち系』じゃないでしょうね？」

…『そつち系』と云うのが、どちらの方向を示しているのは定かでは無いが、件のサークルの名前は【原点回帰】。

このサークル、とあるE組女子の従兄も加入しているのは、別の物語である。(2回目)

(((((な、何て余計な真似をしてくれたんだ!!! or z))))))

そして咲と片岡達との遣り取りを見て、E組、本校舎生徒…そして来校客問わずに、その場の殆どの男衆が心の中で慟哭。

勿論、

「にゅやー(´。O。L)ーっ?!

何て余計な事を!?

例えば咲さんが ぼろり全開したとしても、先生がマツハで駆け付け、触手ブラで隠したのに!」

E組担任のエロダコも、部外者の入ってこないスタッフルームで、その感情を隠す事無く、嘆き悲しんでいた。

「何言つてんだよ、殺せんせーわ…」

「アイドルが触手に襲われたって、ネタにしかないわらないわよ?」

「だから、国家機密が簡単に表に出るな…」



「???

この学園に於ける、E組と本校舎勢との関係を知らない咲が、カルマの問い掛けに、何かを誤魔化す様に、笑いながら答える。

いや、まさか、用意されたステージが余りにもチャチくて、イマイチ乗り切れなかった…なんて、学校の催しをデイスる発言、言える訳が無いよな…

浅野のプロデュースしたイベントより、自分達の企画した催しの方がテンションが上だった…。

実は その本音は、E組の生徒達が聞けば最高に喜ぶ内容だったのを、咲は知らない。

「いや、今このガッコに来てる奴等で、時間の有る連中（タレント）呼び出すからさ、それで勘弁してよ〜?」

確かにE組の催す会場で、アイドルの…否、アイドルでなくとも女性の ぼろり…破廉恥な事故が有ったと本校舎側に知られれば、直ぐに風紀委や それこそ浅野率いる生徒会が正当な理由として、此処ぞと…普段の怨みとばかりに乗り込んで、E組の出し物

を中止させていただろう。

自身の恥ずかしい姿を晒すのを止めて貰った感謝の気持ちだけでなく、そちらの意味合いでも申し訳無いと思っっているアイドルは、そう言いながらスマホを取り出すのだった。



翌日の日曜日。

「うおっつす。」

「あ、おはよう、吉良君。」

「おは〜♪」

山登りの途中、合流したのは響、渚、倉橋の3人。

「正直、どう思う?」

「うくん、咲ちゃんが最後、タレントさん呼んだりしてくれて、それに一緒に付いて来てくれた人達が、結構居たけどね〜?」

「まあ、今回は其処迄勝負に拘る必要、無いんじゃない?」

最初から んな気は無かった訳だし。

殺せんせーだつて、『今回は純粹に学園祭を楽しむ』を優先つて言つてたろ?」

浅野（おぼっちゃま）には、勝手に勝ち誇らせときや良ーさ。





「これって…」

「皆、ウチの開店待ち〜?」

「昨日の今日で、何なんだよ?」

「この差わ…?」

その圧巻な光景に、一面食らう響達。

「律?これって、もしかして…」

「はい♪」

律が言うには響達の予想通り、咲や、その咲に呼ばれ誘われて来たタレント達が、いずれも自身のブログ、ホームページ等でメニューを絶賛。

当然 他の一般客も、ツイート等で、学園祭…E組の出し物を紹介している者は少なくなく、その影響の可能性が高いとの事。

「…そして、この人の影響が、一番強いと思われれます。」

「あ、この人って、昨日、一番最初に来た人だよ〜!」

本名かは判らないが、『漆原芭有』と名乗る、響達と歳が変わらなく見える銀髪碧眼の少年が自身のホームページ上で、漬け麺だけでなく、サイドメニューも絶賛していた。

「この方はラーメン好きの人達の間では、それなりに有名な人らしく、この人の評価は、かなり信頼度が高いそうです。」





## 友、遠方より来る時間

時刻にして昼食時前のAM11時、ネット等の評判も手伝い、更には朝早い内に取材を受けたテレビ放送の影響も在るだろう、忙しさがピークに突入し始めた頃、

「吉良〜！」

「吉良君〜♪」

「ひ〜びきい〜〜〜〜〜〜〜っ!!♪」

「おお！来たか！…っつて、うおわい!？」

「「き、吉良あ?!」「」」

私服姿から察するに、余所の中学校と思われる少年少女が、響の名前を呼びながらやってきた。

そして、その先頭を歩いていた、長い白金の髪の少女が、胴タツクルさながらに、響に飛び付く。

その凶に、本人は基より、驚きたじろぐ其の場のE組生徒達。

「ちよ…晴華、離れろっつて！」

「う〜、久し振り…夏休み以来なのに〜」

そんな彼女を、顔を赤くした響が無理矢理に引き剥がし、

「おく、晴華っち、雲仙ちゃんに白鳥君、久し振り！」

「あ、岡野さん！」

ぽかあー………

いきなりのダイビングハグに、その場の殆どの者が呆けている中、彼女達と面識の有る、岡野が話し掛ける。

「チャラ男さんも、久し振りですね♪」

「いや、前原だつての！」

そして響にダイヴしたのとは別な、もう一人の少女が、やはり面識有る前原に挨拶。

その呼び名を必死に否定する前原だが、間違つてはいない。事実だ。

「とりあえずは吉良っち、でかした。」

「どーも。」

実は事前に、前の中学のクラスメートに学園祭の事を話していた響。

その甲斐有つてか、響の現在遠距離恋愛進行形の彼女、早乙女晴華や、当時から仲の良かった白鳥瑞樹、雲仙星乃が訪ねてきた訳である。

地味な集客活動に、岡野から労われる響。



「「ちつくしよおー！リア充、爆死しろおー！！！！！」  
 響の彼女。」

岡野と前原は5月の連休時に一緒に白鳥、雲仙と共に遊んだ事が有り、他のE組の面々も、彼女の存在は以前から、響の無自覚な然り気無い惚気や、スマホ写真で顔は知っていた。

そして目の前に実際に現れた、プラチナブロンドの少女。

その彼女と響との（どちらかと言えば、晴華の一方的な）バカップル振りに、E組男子の殆どと来客男性陣の殆ど、ついでに一部女性陣がシンクロする。

「へい！E組特製どんぐり漬け麺4つと、モンブラン2つ、お待ち!!」

晴華達の着いたテーブルに、注文された品を運んできたのは勿論 響。

「これ食った後も、本校舎（した）の方で色々イベント系とかもやってるみたいだから、まあ ゆっくりしていけよ。」

「……………」

「ん？どした？」

話している途中、ほんの一瞬だが、顔を暗くした晴華。

それを逃さず気付いた響が、何かあったのか聞いてみると、







それから暫くして、晴華達は下山。

「さうして？」

「…殆ど彼女に付きつきりだった、吉良つち君？」

「う…」

「さあ、今迄の分を取り戻すべく、きっちり働いて貰おうか？」

「…は…はひ…」

そして、それを見送った響の背後には、ブラック上司の様な、女子3人。

その、先程 自身が放っていた以上の暗黒のオーラが如くの迫力の前に、顔を引き引き攣らせながら首を縦に振る響。

その後、彼は食材ストックが無くなって閉店する迄の間、1人だけ途中休憩無しで注文取りから品運び迄、馬車馬の如く働く事になり、最後は壁に背を預け、へたり込んでしまう。

「ねえ、吉良つちい、大丈夫？」

何か口から、魂っぼいのが出てね？♪」

「う…」

彼の名誉？の為にフォローしておくが、決して響は晴華と ずっとイチャコラしていた訳では無く…例えば、イリーナが外に顔を見せた際、この外国人教諭の授業スタイル

をある程度、連休時に前原から聞いていた晴華が夜叉の形相で彼女に詰め寄り、一触即発（しゅらば）な空気を醸し出したりするのを、それこそ先程な磯貝達の如く、必死に宥めたりとかで大変だったのだ。

「又ルフフフ…いや、青春ですね。」

「殺せんせー…バレたら殺されるよ?」

「いや、吉良君には、後で教えるけど…」

尚、一番最初の飛び付きの時から、カメラとメモ帳を持ったピンク色のタコが、スタツフルーム内、閉められた暗幕の隙間から、その様子をつつと観察していたのは、今更な話。



そしてPM3時過ぎ。

「おっ疲れさん〜〜〜〜〜!」

「村松君、お疲れ!」

「応よ!!」

学園祭閉幕迄、約2時間を残した時点で、用意していた食材を全て消費しきったE組

の店は、

「おら大将、皆さんに お礼の挨拶だ!!」

「いや…俺は そーゆーのは、パスだし…」

「いやいや、こういうのは、調理の中心になった人がするのが、一番湧くから…」

「お前の今のカツコ、凄く分かり易いし、絶対にウケるぜ?」

…な、遣り取りの末、

「み、皆さん、御陰様で全商品、完売する事が出来ました!

本日は本当に、有り難う御座いました!!」

「二」うおおお~~~~~!!「二」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ…

この2日に渡り、初めて表側に顔を見せた村松シェフの言葉により、其の場に残っていた客の歓声と拍手の中、締められるのだった。

## OHANASHIの時間

「…………おはようござ (バキイッ!!) ぶぎよえつ?!」

「…………えええつ?!」

学園祭翌日の月曜日…は休校。

その翌日の火曜日の朝、E組生徒を出迎えての挨拶の為、校門に並んでいたA組の生徒達。

E組の生徒数人が校門前に現れたので、頭を下げての挨拶の途中、その数人の内の一人の左拳が何の前振りも無く、A組男子生徒一人の右頬を撃ち抜いた。

いきなりの暴挙に、声を挙げて驚くA組生徒の皆さん。

「うぐ…な…何を…いきなり (ドガッ!) ぎゃんつ?!」

「…………きやあああああつ?!」

訳の解らぬ儘に殴り倒され、立ち上がれない男子生徒に対して、拳を振りかざした

この男は、追撃の爪先蹴りを鼻頭目掛けて放ち、それを見た女子生徒達が、悲鳴を上げる。

「や、止めろ! いきなり、何をやってるんだ!」

「…邪魔、するな!!」

バキイツ!!

「ぎゃぴりーいん!」

「「あ、浅野君?!」」

その暴行をA組トップの浅野が止めようとするが、このバイオレンス男の肩を掴んだ瞬間、振り向き様の裏拳が飛んできて吹き飛ばされてしまう。

「あ…あわわわ…」

腰を地面に落とし、頬を腫れ上がらせ、どくどくと鼻血を垂れ流しながら、この突然の暴力に恐怖に打ち拉しがられるA組の男子生徒…五英傑が1人、榊原蓮。

その榊原に、893ですらアホのフリをしてダツシユで逃げ出してしまふ様な鬼の形相で詰め寄る男…言わずもがな、本校舎勢指定、超々危険人物・吉良響である。

「吉良、マジにキレてるな〜。」

「ですな〜。」

「言ってる場合か?!

クラスメートだろ?止めさせろよ!」

「やだよ。浅野みたいになりたくね〜し。」

止めたいなら、自分でやれよ?。」

「はあ!？」

瀬尾が、響と一緒に歩いてきた、岡島と吉田に、この暴挙を止めさせようとするが、御尤も?…な発言で切り返される。

「ぐ…だからって…理由無き暴力が、赦されると…思つて…

蓮が一体、何をしたって言うんだ!？」

此処で浅野が、響に向かって叫ぶ。

「……………」

その言葉に反応したのか、響は無言でズボンのポケットからスマホを取り出すと画像ページを開き、

「見覚え有るよな?」

…俺の、彼女(オンナ)だ。」

「…!!?」

そう言つて、白金色の髪の少女の写真を榊原に見せた。

ささあー…

その画像を見た途端、まるで顔に蒼い縦線が幾本も入ったかの様な、血の気の引いた顔になる榊原。

確かに それは、見覚えの有る顔。





両手で腹を押さえ、両膝を着く榊原。

「い、好い加減にしろよ！やり過ぎだろ？単なるスキンシップ（ドガッ！）ぐわあつ!!」  
その余りな惨状を見かねた小山が、勇気を出して響を諫めようとするが、その言葉を  
言い終わる前に飛んできたのは、響の脚。

「スキンシップ…ねえ？」

つまりA組（オマエラ）からすると、手を出した側がスキンシップ主張すれば、それ  
はセクハラでも…そして暴力でも無く、スキンシップとして受け入れないと駄目…

そーゆー事だな？

な・ら・ば…悪羅悪羅悪羅悪羅！スキンシップスキンシップスキンシップ〜!!」

「ひっ!?や、止め…ぎやああ?!」

ガシガシガシガシ…

最初の蹴りで倒れた小山に、ストンピングの連打を浴びせる響。

「う…」「うう…」

2年生時の3月に、実力差を見せ付けられる程にボコボコにされている瀬尾。

2学期早々に響…否、吉良兄弟（特に兄の方）にトラウマを植え憑けられた荒木。

この2人も既に、この修羅が如きな迫力の前に、巻き添えを恐れてか、その暴行を止  
める勇氣は持てず、他のA組生徒（モブ）達と一緒に見ているだけ。

「スキンシップ名乗ったら何でもアリなら世の中、セクハラ報道は出回ったりしねーんだよ、このタコ！」

あーゆーのは基本、『何を』されたかでなく、『誰に』されたか：なんだよ！

そっちの女子達も：例えば○ヤニーズとかにハグされても別に問題無いが、もしもこれが岡島だったら、視界に入れられただけでセクハラだろ？」

「うおおをゐ!!？」

脚を止めての響のセクハラ論に、一緒に居た岡島から、異を唱えるが如くに突っ込みが入った。

「|||||.....|||||」

「いや、お前等も『それは違う』って否定しろよ!？」

そして響に続けて、それを肯定するかの様に何も言わない、A組女子達にも突っ込みを入れる岡島。

「さ・て……」

「ひいっ!!？」

余計な口出しをした者への制裁と、一通りなボケ・ツツコミを終わらせた響は、再度本来の処刑対象（ターゲット）である、榊原に目を向ける。

「ほ、本当にスイマセン！まさか、吉良…サンの彼女とは、知らなk（ベキツ！）とわあーっ!？」

そして また、台詞を全て言い終わる前に側頭部に向けて放たれる、左の上段蹴り。

「お前…この期に及んで それか？」

俺のオンナだったから…それも確かに重要だが、俺の女で無かったら問題無い…つて訳でも無いだろ？

とりあえず その巫山戯た発想、根本から やり直せ!!」

ドスツ!!

「あ…あああ…?!」

「「「「う…うわあ…」」」」

「「「い、いやああああ!!」」」

そしてトドメとばかり、勢い良く突き上げた響の右足の甲が、榊原の股座を直撃。

その蹴られた部位を両手で庇い隠す様に押さえ、顔面蒼白、前のめりに蹲る榊原。

仮にアニメやバラエティー番組だったら、『キーン』とか『ちーん』な金属的效果音が似合いそうな その蹴りに、A組男子だけでなく、その場に居合わせている岡島と吉田も、顔を歪ませてドン引いてしまう。

「コイツ等全員、お前の”犬”だろーが？」

柵ヶ丘（ガツコー）内のエリート様意識なんざ、外じゃあ一切合切通用しない事位、飼  
い主の お前が事前に きっちり教えて貰とけ、ボケが！」

そして最後とばかり、悶え苦しんでいる榊原を尻目に、ペットの不始末の責任を負わ  
せるが如く、

ドゴツ！

「うがつ…ゴホオツ…?!」

「げ…また このパターンかよ？」

こりやまた暫く、もんじやも お好み焼きも、食えないぜ。」

リバース必至のリバブローを、浅野に浴びせた後に、

「しかし お前、本当に容赦無いな…」

「いやいや、ウチの お鬼いたま程ぢや無し。」

「あの御方を引き合いに出すな！」

一緒に居た吉田岡島と そんな会話をしながら、山を登るのだった。

尚、朝のホームルームにて、響が鳥間から説教されたのは、至極当然？な話。





「「ひゃっは〜い！」」

「良い線イケる気は、してたけど…」

「3位、キターー(。▽。 ) ー!!」

教室は まるで、1位を獲ったかの様な騒ぎ様。

「まあ、俺がサキさん、連れて来たのがデカイよな! (?-!?)」

「あゝっ! そのドヤ顔、ムカつくんですけど!!?」

「くっ…でも、地味に否定は出来ない。」

「よろし、ヒナ、ユヅ、リオ!

吉良つちに抱き付け。

画像、晴華つちに送りつけてやる。」

「は〜い♪」

「了々解。」

「抱き付くだけで、良いのか? w w w」

「ゴメンナサイ。スイマセンした。」

ちよつとだけ調子乗ってました。

それだけは、何卒御勘弁を。 m ( ) m

そして この良結果の立て役者を主張するも、ソッコー謝る者が居たり。



その頃、理事長室では呼び出しを受けたA組・浅野学秀が、この学園祭での結果について理事長・浅野学峯と話していた。

その やや棘の有る、含み有る誉め方に、浅野（学）はその真意を問う。

「いや、今回の結果、浅野君、まさか君は、これが、自分だけの力と想っている……ね？」

「……そんな考えは持っていません。

確かに企画は僕が中心でしたが、僕だけでなく、クラスの皆も、協力

「あゝ、違う違う。そうでなくて……」

「??」

「今回の1位、自分自身の能力（チカラ）故だと思っていると、聞いているんだ。」

「な……!?この度のA組が立ち上げたイベントは、僕自らが、飲食チェーンや芸能事務所に声を掛けて、その結果、この成果を作ったと思っっています!!」

まるで その成果を認めていない言い種な理事長に、あくまでも浅野（学）は、自身が出した結果を主張する。

「……君が各社にスポンサー契約をした その日の内に、その会社の社長さん達が、”私”の所に挨拶に来られたよ。」

『今後とも よろしく』ってね。」



「…!!?」

「柵ヶ丘学園の『アサノ』と云えば、理事長（わたし）か、浅野君（そのむすこ）か居ない。

解るかい？

彼等は君でなく、学園理事長である、私と契約を取り次いだ心算でいたのだよ。

仮に私が、その時、『何の話ですか?』…なんて、そのスポンサー契約、君と私は無関係だと言っていたら、君が企画していたイベントも、その儘成立成功していたかも、判らないね。

事実、その件は私も何も聞いていなかったから、最初は何の事か、本当に分からなかったし。

尤も、直ぐに君のやった事だと解ったから、とりあえずは無難な返事をしてあげただけ…

さて、浅野：”君”、私は彼等に、柵ヶ丘の理事長として、何かしらの見返りを差し出さなければならぬのかな?”

しかし其れを、にこやかな顔で斬り返し、否定する浅野理事長。

「いいかい、浅野君、親（わたし）の七光りを利用するのは大いに結構だ。

でもね、それを自分の”武器”でなく、自分の”能力（チカラ）”と勘違いしている

のは、感心出来ない。」

「…………?!」

更に続く言葉に、改めて言われて理解自覚したのか、完全に黙り込む浅野（学）。

それでも理事長の口は停まらない。

「1位のA組、2位の高校のクラス、そして3位のE組…一応は順位が はつきりしているが、それぞれが圧倒的に差をつけている訳じゃあない。

企画の段取りの殆どを君だけがやり、他の生徒達（みな）は何もせず、只傍観していただだけのA組。

各々の技能（スキル）を活かし、それぞれが全員、与えられた役割をこなしたE組。

柗ヶ丘のシステムは一時、脇に置くとして、一般的に教育者なら この結果と工程を見て、どちらを評価すると思うかい？」

理事長の口は止まる事を知らない。

「飲食店…その情報だけで、具体的に彼らが どの様な品を提供するか？

…とか、その辺の下調べも大して行っていなかっただろう？

加えて言うなら、君が呼んだアイドルの1人が偶然だが、E組の1人と、プライベートで友達だったそうじゃないか？

その彼女の、そして彼女に誘われたタレント達のブログ等での店の紹介が、E組の売

上が大いに上がった要因の1つだと聞いている。

友達：は流石に想定外だったとしても、売上競争を意識していたなら、呼び寄せたタレント達には、事前に雇い主として、その旨を伝えて、他のクラスの売上協力を繋がる行為は控える様、釘を刺しておくべきだった。

それ等を怠り、また、彼等に対しても、何の対策も執らなかつたのは、君の驕りだ。

結果、E組の評価は、また1年生2年生を中心に上昇だ。

浅野「君」：君は、此れ等を全て踏まえた上で、彼等に勝つた心算で居るのかい？  
普段から言っているよね？

この私の教育理念……本校舎（きみたち）は常に強者で有り勝者で在れ。

そしてE組は常に、弱者で有り敗者で在らねばならない……と。

本年度に入つて、その基本的母体が、崩れている。

彼等が有能だから？……違うね。

君達が本校舎という温ま湯に緊張感の無い儘に浸かり、強者で有り勝者で在る努力を怠っているからに他ならない。」

「そ、そんな事は……僕達は!!」

理事長の永く続く言葉に、漸く反論出来る隙を見つけ、その台詞に浅野（学）が口を挟むが、

「ならば今期、未だに成果らしい成果を残せないのは何故だい？」

「うっ……」

返す刀の様な問い掛けに、また言葉詰まらせてしまふ。

「私も君に任せて、君の提案した計画に合わせて、今迄色々協力もしてきた。

……でもね、浅野君、これは教育者でなく学校経営者として言わせて貰うけど、例えば2学期早々、体育祭に合わせて呼び寄せた彼等や、今月末に訪れる予定の彼等達……その呼び出す際の費用や、その後の滞在費だって、決して只じゃあないんだ。

ケチな話だと思ukai？

でもね、体育祭の時みために結果を残せないのなら、それは お金をドブに捨てるのと同じだ。

本当に君に任せて良いのかと、そろそろ疑問に感じてきたのだが？

そもそも今度のアレの為に、わざわざ彼等を……しかも急遽呼び出すよりか、選ばれしエリートを自称するなら、純粋に学力……期末テストで、完膚無きまでに彼等を叩きのめして証明して欲しいね。」

「……最善を尽くします。」

「ん、期待してるよ。」

では、下がって良いよ。」

「…はい、失礼します。」

学園理事長と、本校舎を束ねる、生徒会長の対話が、終了した。

## 名前の時間

「待ちやがれ！このタコ!!」

「にゅやーにゅやーにゅやーにゅやー!!?」

金曜日の放課後。

旧校舎の在る裏山にて、特殊素材のナイフやグローブを装備して、黄色いタコを追い掛けていた響達。

「待てタコ！その手帳、渡しやがれ!!」

そうしたら、今なら、楽に殺つてやる！」

「そ、そーは行きませーん！」

これは生徒（キミ）達が健全な男女交際をするに当たつての、大事な記録（レポート）なのですからあ!!」

「…むっ殺す!!」

…今回の本命の狙いは、殺せんせー暗殺でなく、このタコが持っているメモ帳強奪。

少し前迄 彼等は、先週末に開かれた学園祭について改めて、教室に残っていた皆で話していた。

やがて話題は、その場に訪ねてきた、響の彼女：晴華達の事に。

「そう言えば殺せんせー、吉良つちと彼女サンのバカップル振り、隠れて観察してメモつてたね〜♪」

その際の、カルマの口から出た一言：でなく1つの単語に、  
ぷち…

「……………ほう?」

「き、吉良君?」

一際喰い付く様な反応を見せた響。

「メモ…ねえ?」

『バカップル』でなく…『メモ』に、である。

…結果、

「「「「悪い出歯亀タコは、居、ねーがー!!」」」」

「にゅやーにゅやーっ?!」

な、何なのですか?いきなり!」

そして教員室にて、グラビア雑誌鑑賞に夢中になっていた殺せんせーを強襲する、超体育着を着込んだ集団。

響だけでなく、その手帳とやらに、色々と自分達の事を書き込まれている気がしてきた男女数名と、面白がって同行した数名による、タコ狩りが解禁、冒頭の流れに至るのだった。



「そっち、行ったよ！」

「応!!」

そして そのタコ狩りは律を介し、先に裏山で遊んでいたり、或いは訓練していた生徒達も参加する事に。

標的（ターゲット）自体、まだまだ余裕を見せての舐めプではあるが、徒手やナイフ、そして銃器使用の連携プレーを駆使して、

「にゅや?」

プールへと誘導していった。

「人のプライベート、覗き込みやがって！」

「逝けや、このタコがああっ!!」

「うゝむ、女が絡むと主人公がチン〇ラになるのは、この作者からすれば、最早 様式美と化してるわね。」

「不破さん?」



…多少、メタな発言も有る中、水（プール）際に追い詰めた殺せんせーに手刀を向け、特攻を仕掛ける響。

「吉良！」

それをサポートする様に、後からナイフを持った、岡島と木村が続く。

パパパパパパ…!!

「にゅ…」

更に その後ろには、空中への退路をを塞ぐかの様に、千葉と速水が中心となり、数名の生徒が殺せんせーの頭上に弾幕を張る。

「獲ったあ!!」

最初に仕掛けたのは木村。

E組一の俊足が、響より一步先に前に出で、手に持ったナイフで正面から突きを放ち、それより一瞬遅れて響が右側面から手刀を、更に時間差で、左側面からは岡島がナイフで切りつけに掛かる。

「又ルッフッフ…」

見事なコンビネーション…と、言いたいですが、甘い！」

スカッ…

「「な…?!」」



「ちつくそ！あの体育着（ふく）、完全防水仕様じゃなかったのかよ？

…まあ、確かに下着なんかは濡れてなかったけど…」

何やら ぶつくさ言いながら、病院に足を進める響。

「へ？」「あ…」「よっ♪」

そして その診療所の待合室に居たのは、昨日、響とプールに仲良くダイブした岡島と木村の2人だった。

「お前達もかよ？（笑）」

「応よ。くしゃみは止まらんし鼻水は止まらんし、地味に熱出てるし…」

「ああ……………」

響の問い掛けに、岡島はヤン○ヤンの水着アイドルのグラビアページを、にやけた顔で凝視しながら応え、木村は緊張した面持ちでロビーチェアに身を縮こまらせて座り、小声で言葉少ない受け答え。

「俺も さつき来たばっかだけど、木村は もう診察終わって、会計待ちなんだよな？」

「…うん。」



「……………♪」

「……………。」

「……………?」

待合室のロビーチェアに座る、3人の中学生男子。

1人は喰い入る様にグラビア雑誌を熱読、1人は何やら落ち着きが無く、そわそわと体を震わせている。

そして最後の1人は、その挙動を少し不審に思いながらも、スマホにヘッドホンを当て、音楽を聞いていた。

因みに今 流れている曲の歌い手は…先日 学園祭にやってきた、『彼女』だ。

…そんな中、受付カウンターから呼び出しが。

「木村さーん、木村m…じゃ…すていすサア〜ン…」

「!!」

「……………?!」

受付ナースの やや引き気味の呼び出しに僅かに どよめく待合室の中、瞬時に顔を真っ赤にする木村。

慌てて隣に座っているクラスメイト達に顔を向けると、

「……………♪」

「……………♪」

1人は水着アイドルのグラビアページに熱中、もう1人はスマホから流れる音楽に興じており、如何にも『何も聞こえていない』様なリアクションを取っていた。

「……………。」



「悪い、あーゆー時、どんなリアクションを取れば良いか、分からなかったんだ。」

「笑えば良いと思うよ。」

「ん。不破ちゃん、少し黙ろうか。」

「いや、本当に笑えば良かったんだよ〜！

…ってか、いつその事、マジに一思いに笑ってくれ！」

「木村、落っ着け！www」

月曜日の朝。

教室にて、あの病院での一連の流れを改めて話している響達。

「いや、悪いが そっち系のニュースのネタとして話すなら兎も角、流石に当人の前じゃ、笑えねえ。」

「あの病院、フルネームで呼び出しするからなあ…

俺は前から知ってたが、吉良は知らなかったん？」

「応。今迄、普通に”マサヨシ”か”セイギ”だとばかり思ってたぜ。」

「あの時の お前達の『何も聞こえていなかったとばかりの気付いてないフリ』、マジに友情を感じたぜ……(T—T)」

「あの時の木村のキヨドリまくりな落ち着きの無さ、その理由も納得だぜ。」

「それは言わないでくれよ……」

木村正義  
ジャスティス

警察官である両親が、初めての子供に対し、その持ち前の正義感から、舞い上がって付けた名前らしい。

「この名前の件に関してだけは、本校舎の連中でさえ、武士の情けなのか触れずにいてくれるからなあ……」

はあ~~~~~

「い、いや、『正義』と書いて『Justice』なら、まだマシだぜ？」

前にニュースで見たが、”火星(Venus)”ちゃん：いや”金星(Mars)”君だったかな？

それに比べたら……」

「そ、それは酷いな……」

「親が二重（ダブル）、いや三重（トリプル）の意味でバカだぜ…」

「絶対に それ、あのアニメが元ネタだよね…」

「役所も突っ込めよな…」

英訳、間違ってるってさ…」

「そっち?!」

「…親戚に、小学校の先生が居てさ、何年も前の話だけど、『今年はピカ○ユウ3匹ゲツトだぜ!!』って言ってた…」

「「「「「ぶふうーーーっ?!」」」」」

上手い!でも、笑えん!!「「「「「」

「てゆうか、ピ○チュウなら、B組に居るぞ。」

「マジ?」

改めて凹む木村に対し、フォローに努めるE組の面々。

次第に話す話題はDQN…所謂、「個人的（バ○）過ぎるネーミング」な話となり、  
「え〜?俺? 俺は、自分の名前、気に入ってるよ〜♪」

とか、

「そー言えばウチ、親戚に”ケンシロウ”（健四郎）さん（51）が居るぜ。」

四男だけど。」

「へ〜？ 因みに その長男の名前は？」

「淳壺郎さん（62）。」

「おい、そこはラ〇ウだろ？」

「何処の世紀末兄弟だ!!」

とか、

「よーし、狭間ちゃん？」

「アンタ、吉良つちと結婚なさい!!」

「「奇〇組かよ?!」」

…な会話が交わされていった。

「ヌルフッフッフ…私も名前については、気に入らない点があります。」

そんな会話に参加する人物が1人。

「え？殺せんせーって茅野ちゃんが付けた その名前、気に入ってるんじゃないかかったっけ？」

殺せんせーである。

「はい。気に入ってるからこそ…」

響の問い掛けに、殺せんせーは

「それなのに、未だに その名前で読んでくれない人が、約2名!!」



ビシイ!

「う!」「ぬ…」

そう言つて、教室の前側で話していた、鳥間とイリーナを やや怒りな表情で触手(ゆび) 差した。

その指摘に、気拙い顔をする2人。

「イリーナ先生は”タコ”ですし…」

鳥間先生に至つては、”おい”とか”お煎”ですよ!

何処の倦怠期の夫婦なんですか!?

「いや、それはだな…」

「だ…だつて…この年齢(トシ)で”殺せんせー”なんて、キツイし…」

「イリーナ先生は一番最初は、笑顔を振り撒きながら、「殺せんせ〜(はあと)♪」つて

言つてくれてたじゃないですか?」

「それは暗殺で、油断させる為よ!

『素』で言う訳、無いじゃないの!!」

「理事長先生は嫌な顔をせず、普通に この名前で呼んでくれてますよ?

ロヴロさんだつて!」

「「うう…!!」」

兎に角 呼んで欲しい殺せんせーと、絶対に呼びたくない顔を見せる2人。

「よし、こうしましょう！」

コードネームです!!」

「」「」「コードネーム?」「」「」

殺せんせーの”コードネーム”発言に鸚鵡返しする生徒達。

「はい。皆さんの名前をもう一つ、新しく作るのです。」

「レッドアイさんや、沖縄で会った、殺し屋達みたいに?」

「その通りです、磯貝君。」

レッドアイさん、そしてスモッグさんグリップさんガストロさん…彼等は互いに、本名を隠して異名(コードネーム)で呼び合っていましたよね?」

「確かに、如何にも”THE・殺し屋!…みたいな感じだったよな。」

…そんな訳で、

「皆さん各自、クラス全員分のコードネーム候補を書いて貰い、先生が その中から一枚、無作為に引いた物が、皆さんの今日のコードネームです。」

これは皆さんが将来、父親母親になった時の、ネーミングセンスを鍛える意味合いも有ります。

そして何よりも！

あの頭の固い2人も、渾名呼びに慣れるべきという意味合いが有りますから、皆さん真剣に考えて下さい。」

「ううっ?!」

クラス全員に、烏間とイリーナを含む、クラス人数分の札が配られ、

(いや、面白いけど、全員分考えるって…)

(思い付きでテキトーに書きちゃうべ)

(ビッチ先生…「ぼっち先生」…っと。)

この日は互いをコードネームで呼び合う事となり、本名で呼ぶのは禁止となった。

「因みに先生のコードネームは、既に決まっております…」

「「「「???」」」」

カキカキカキカキ…

「今日は、これで呼んで下さい。」

そう言つて、ドヤ顔と共に黒板に書かれたのは、

【悠久(とわ)なる疾風(かぜ)の運命(さだめ)の皇子(プリンス)】



留める手筈になっていきます。」

この日の1時限目は、体育の授業。

裏山にて、胸元と背中に標的（ターゲット）マークを貼った体育教師【堅物】を、攻略する内容だったが…

~~~~~

「2人共 甘い！」

「なあっ?!!」

【堅物】は、後方の茂みから、銃を持って迫る2人の間を潜り抜ける。

「特に【女つ垂らし糞チャラ男】!!」

銃は常に、撃てる高さに構えておけ！」

「うぐが…?!」

ダメ出ししながら、そして無自覚に精神的ダメージを与えながら、その場を走り去る【堅物】。

「はい、通行止めです！」

「この先は、進ませないよ〜?♪」

その【堅物】の前に、次に立ちはだかったのは、【変態坊主パラッチ】と【紅髪の厨

式悪魔】。

パアン！

?!」

その存在力行動力故に、E組のエースの1人と言つて良い、「紅髪の厨式悪魔」に氣を捕られた瞬間、【堅物】の背中ターゲットマークにペイント弾が炸裂した。

「よっしやあつ!!」

本来ならば「エース(きりふだ)」を「囧(みせふだ)」として前に出して地上に注意を引き付け、其処を木の上で隠れスタンバっていた【ジャイアントブタゴリラ】の一撃だ。

「続くわよ！

【お母さん】と【男の娘】！」

「ええー!」「りよ…:了解…:い」

更には「凜!!」として OHANASHI の指揮の下に、命中(ヒット) 目的でなく、進行進路を狭めるのを目的とした弾幕狙撃が【堅物】を襲う。

「誘導されているな…:」

それを解つていながら、敢えて弾幕の中、唯一開かれた退路を進む【堅物】。其処に待つていたのは…:

パアアン!!

そのポイントをスコープでマーク、待機していた、「恋愛SLGの主役」の遠距離狙撃（ロングスナイプ）。

「恋愛SLGの主役」!! 君の狙撃は、常に警戒されていると思え!」

しかし、その一撃は読まれており、その場に落ちていた木片を拾われ、それで盾の如く受け止められた。

「解つてますよ…」

だから締めは、俺でなくて…」

バサア!!

【堅物】の このダメ出しに、「恋愛SLGの主役」が不敵に笑いながら呟いた瞬間、茂みから飛び出し、【堅物】の死角に回り込みながら、ナイフの如く手刀を突き突ける1つの影。

「君もだ、【露出リア充】!

遠距離狙撃と近接格闘の両エースの連携、今回の授業（ミッション）で俺が想定してないとも思っていたか?!”

ガシィッ

そう言いながら【堅物】は、【露出リア充】の放った手刀…その腕をがっちりとキャッ

チ。

「そつりやあ勿論……」

その言葉に苦笑する【露出リア充】。

「だ・か・ら・締めは、俺達でなく……」

バサア!!

!!?」

【堅物】の背後、【露出リア充】が潜んでいた茂みから、もう1つの影が飛び出した。

「殺っちまえ!」【Justice】!!

「……………」

「な……んだと……!?!」

パ。パ。パ。パ。パ。アン……



「「「「「……………」」」」」

ぐっで……………ん……

1時限目が終了。

精神的にキツかったのか、E組の面々は机の上に顔を置くが如く、項垂れていた。

「何なのよ……【衝撃の”E”】って……?」

メタは止めて……」

「【この猿 半端無いって！】……って連呼された……」

「うう……【天然腹黒きよぬー箱入りコスプレ娘】……って……設定盛り過ぎですう……」



「……で、皆さん どうでしたか？」

「一時限目をコードネームで過ごしてみた感想は？」

「「「「「何か……どつと傷ついた……。」「」「」」」

「エロなるバカのヘタレのタコ】の問い掛けに、ぐったりした儘 答える、E組の皆さん。尤も それは そのコードネームの殆どが、何かしら毒やら棘、悪意の有るネーミングだったから致し方無し。」

「……で、【エロなるタコ】せんせー？」

「にゅや？ ついに略したー?!」

自分達で名付けておきながら、流石に余りにも長すぎたのか、略したコードネームで【Justice】が尋ねる。

「どうせなら、”エロ”の部分我真つ先に端折って欲しかったのですが……」

「いや、そんな事より、今回のコードネーム、何で俺だけ、”正義（ジャスティス）”って本名その儘だったんだよ？」

「Justice」…木村の この問い掛けに「エロなるタコ」…殺せんせーは、
「今日の体育の内容は知っていましたから、君なら その持ち前の脚を活かして活躍す
ると思つたからです。」

事実、最後にカツコ良く決めた時、「Justice」のネーミングが しつくりきて
いたでしょ?」

「うゝむ、確かに…」

無数のペイント痕が付着した標的（ターゲット）を見せ、そう答えた。

「それから木村君…」

更に殺せんせーは話を続ける。

「安心の為に言っておくと、君の名前は比較的簡単に改名手続きが出来る筈です。」

「え? そうなの?」

「はい。極めて読み辛い…親御さんには失礼ですが、常識から逸脱された名前であり、し
かも君は既に”まさよし”と、普段から普通に読み易い名前で通しています。」

改名の条件は満たしています。」

「…そ、そうなんだ…!」

その言葉に、安堵の笑みを浮かべる木村。

「でもね…仮に君が先生を殺す事が出来たなら、世界は きっと、君の名前をこう解釈す

るでしょう。

『正しく正義（ジャスティス）だ！』『世界を救った英雄の名に相応しい!!』……と。」

「……………」

更に更に続く、殺せんせーの言葉。

これを聞いた木村は、『His name is Justice!!』の見出しで、自身がドヤ顔でサムズアップする写真が、大きく一面に載せられた英字新聞を脳内でイメージ。

ぶるんぶるん……！

一瞬、「この名前、実は良んじやね？」と自分の名前に対する考えを揺るがせるが、「いやいや、やっぱり無い！」……とばかり否定する様に、首を横に大きく振る。

「まあ結局の処、親御さんが付けてくれた名前には、多少の願いは有っても、大した”意味”は無いです。」

”意味”が在るのは、その名の人、その人生の中で、何をやってきたのか……。

「……………」

「名前は人を造りはしない。」

人の歩み……その足跡の中に、そつと その人の名前が刻まれるだけなのです。」

気付けば続く台詞は木村だけでなく、教室の生徒全員が、聴き入っていた。

「……だから木村君……」

もう暫く正義（ジャスティス）という その名前……

大事に持っていては、どうですか？

少なくとも この教室内での暗殺に決着が着く時迄は……ね？」

「……………」

そう言つて、殺せんせーは笑顔で締めた。

「仕方無えなあ……」

まあ、そーゆー事に してやるか……」

その言葉に、僅かながら自分の名前の方について、軟化したかの様な表情を見せる木村。

今後、早くて彼が約1年後……或いは成人後に、改名手続きを取るか否かは、彼次第であり、それは別の話である。

彼等は既に その先の、期末テストに標準を絞っている様だった。

しかし、その消極的姿勢に難色を示す人物が1人。

「いやいや皆さん、試験も確かに大切ですが、折角 参加するからには、やはり優勝を目指さないとい！」

顔をサッカーボールとバレーボールのハーフ&ハーフにしている殺せんせーである。

「いやいや、優勝って、E組（おれら）、1学期の野球と同じく、クラス対抗のトーナメントからは外されてるから。」

「ん。サッカー部とバレー部と対戦だからね。」

この球技大会は、4月：即ち新年度の時点で既に、学内行事として多分に漏れず、E組を専門職相手に晒し者とする目的で組み込まれていた。

「勿論、簡単に無様晒す心算は無いんだけど…」

ぶつちやけ、柵ヶ丘（ウチ）のサッカー部って、どうなんだ？前原？」

「ん、野球部と比べてみると…：な、都内でも そこそこな実績。」

でも、素人集団相手なら、充分に無双出来るぜ？」

「因みに、女子バレー部は？」

「ん、集会なんかで、地区大会の結果発表とかされたの、見た事無いし…」

まあ、それなりなんじゃ、ないかしら？」

…つまり、男女共に、素人集団である自分達では、勝つのは難しいと。

「いやいやいやいやー！」

諦めたら、そこで試合終了ですよ!!

君達は1学期、野球部とバスケット部に勝てたじゃないですか?!

今回も勝ちに行きましょうよ?!

私が、また烏間先生に、お願いして、暗殺とサッカーとバレーの特訓が両立出来るメニューを組んで貰いますから?!

サッカーとなると、君の見せ場ですよ?

ね?前原君?!

次回は「前原の時間」ですよ?!

「ちよ…あ、足に、しがみつくな!」

「メタるな!」

「泣くな、泣くな!!」

…結局は安〇先生に扮したタコの、涙ながらの説得に折れてしまうE組の面々。

「…まずは、スタメンと、そのポジション決めだな。」

「前原は、やっぱしFW（フォワード）?」

とりあえず男子の方は、元サッカー部の前原が中心となって、レギュラーを決める話し合いが始まった。

「いや、俺は中盤に下がる。」

「ん。このクラスで、ゲームメイクが出来るのって、前原しか居ないからな。」

確かに、こういうのは素人よりか、経験者に任せたいが良いよ。」

「それと寺坂、とりあえず お前キーパーで決まりな。」

「テメー等、どーゆー意味だ？ 固羅ア!!？」

…そんなこんなで、女子の方も、片岡が中心となったミーティングでレギュラーもきまったり、その後も それぞれの競技と暗殺の特訓が両立出来る訓練メニューをこなしたりで、球技大会当日に至ったのだった。



「うゝむ…」

「これは…」

「ケツ！面白いじゃねーか!!」

第1試合のA組 v s D組の試合がグラウンドで行われているのを見ながら、渡された球技大会の組み合わせ表を見て、様々な反応を見せる、E組男子。

「野球の時のアレを踏まえて……ってヤツだね〜♪」

その紙に記されていたのは、変則的なトーナメント表。

A〜D組のクラス対抗トーナメントの隣に、特殊ブロックとして、サッカー部 v s E組が書き込まれてあった。

万が一、E組がサッカー部に勝利した場合、リアル・ファイナルとして、トーナメント優勝クラスとの試合を行う仕様。

これは今、体育館で行われている、女子のバレーボールも同様な仕組みだった。

「あの負けず嫌い……いや、負ける展開が嫌いな お坊ちゃんが進んで、こんな進行して来るか〜？」

「俺達が勝てる訳が無いと、余っ程サッカー部を信用しているのか……」

「いや、アイツが他人を信用するとか、有り得んぞ。」

「ん。」唯我独尊”を地で行ってる様な奴だからな……」

「それじゃ、自分達が勝つ自信……秘策か何かが有るとか？」

「「「う〜〜〜〜〜む……」」」

「あ、それと岡島？」

一応 何が言いたいかわわつてはいるが お前、その”唯我独尊”で、本来は そーゆー意味じゃ無いからな？」

ついでに女子は、バレーボールらしい。」

「マジか？」

「応。しかも、部活練習レベルのガチな内容だったらしいぜ？」

「俺達の最近の体育ってーと…」

「烏間先生のハンティング。」

「烏間先生との模擬戦。」

「烏間先生&タコとのケードロ。」

「…一般的な体育の授業じゃねーよな…。」

…そんな会話の中、試合は進んで行き、

ピーーーーーッ！

「く…!!」

その笛の音に、思わず顔を歪ませる、A組・浅野学秀。

前半終了間際、B組・進藤の放ったシュートが決まり、1―3、B組の2点リードで折り返しとなった。

サッカー部の時間



「……………」

試合終了。

その結末に、どん引きなE組男子。

「……………」

いや、E組だけでなく、その場全ての観衆が、その結果にどん引いていた。

「おいおい？ あの お坊っちゃん、其処迄するか？」

球技大会（秋）クラス対抗トーナメント、3年男子のサッカー決勝は、7 v s 3でA組がB組から勝利、A組の優勝となった。

「ま、まさかの…」

「外国人部隊、再び…？」

…そうなのである。

B組2点リードの形で突入した後半戦、A組は偶々？3日前から研修留学生として来日していた、スペイン、アルゼンチン、イングランド、ドイツからの留学生を投入。

E組のゲームが始まる前のサッカー部側ベンチでは、サッカー部顧問が選手達に指示を出していた。

何が有ったかは知らんが、今年のE組は、色々と『やる』みたいだ。

だからこそ、彼等には悪いが、今年は本当に公開処刑になるかも知れんな…。

俺は野球部や女子バスケット部の顧問みたいに、理事長からOHANASHIされるのは、勘弁だからな。

この顧問は1年生クラスの担任を受け持っている為、今年のE組の行動力については殆ど知らない。

体育祭での活躍を見た程度なのだ。

しかし、それだけで学力は兎も角、運動能力だけは油断ならない存在なのは、充分に理解出来ていた。

「属、この試合、お前がグラウンドで指揮を執れ。」

「はい!!」

…だからこそ、サッカー部からすれば、普通なら夏に引退した3年生は外し、2年生を中心とした新生スタメン御披露目の儀式を兼ねている。この秋の球技大会なのだが、

その3年生もスタメンに組み込んだ、実質的に最強のメンバーで試合に挑む姿勢。

2年生の新キャプテンでなく、経験値を持っている3年生の先代キャプテンに、グラウンド内での指示を一任する。

「…いくら運動神経が良くたって、それだけでサッカーが出来たら世話しねえ。

赤羽と吉良…。

如何に危険人物とか言われてても、アイツ等は所詮、サッカーは素人な筈。

本当に注意しないとイケないのは、前原だけだろう。

赤羽に茂部、木村に駆浮。

吉良には七志乃がマークに付け。

前原には、俺が付く。

それから大橋：お前は あ の、バンダナをマークだ。」

「「応!!」「は…はい!!」

試合前、先代サッカー部キャプテン、属修人が、部員に それぞ指示を出す。

「よし、行くぞ!!」

「「「「「「「「「「」

先代キャプテンの掛け声に勢い良く答え、白地に左胸元には縦書きの黒文字で『櫛ヶ丘』のロゴ、肩口に緑と黒と赤、3色のラインが入った上着に黒のパンツの、公式試合

コイントスにより、ボールの権利を得たE組。

前原がドリブルで進もうとする中、早速 属がマークに張り付いた。

「ちいっ!!」

元チームメイト、先代キャプテンのマークに、嫌な顔をする前原。

カルマには茂部が張っ付いて、木村には駆浮…

イトナには…ゲッ!! 七志乃かよ!?

俺等E組だぜ!?

どんだけ本気なんだよ、コイツ等?

少しは油断しやがれ!!

だったら…

「杉野!」

パシイツ

属の執拗なカットを躲しながら、巧みにボールをキープする前原。

前線を走る杉野に向け、パスを放つ。

しかし このボールは、

「あ…」「しゃあっ!!」「しまっ?!」

サッカー部のディフェンス陣にインターセプトされてしまう。

パシイッパシイッパシイッパシイッパシイッ!

「な?」「うげ!?!」「速っ?!」

そして、そこから始まる高速のパス回し:

予め、パスのルート、受け手蹴り手の順番が決められていたかの様な、無駄の無い組織プレーでボールをガンガンと前に進めて行くサッカー部。

「大橋!」

「ああっ!」

そして最前線に位置していた、サッカー部 新キャプテン・大橋にパスが放たれる。

後方からのパスを、まるでボールの落下地点が分かっているかの様に、その位置迄

振り向く事無く走り込むと、ワンバウンドしたボールをその儘 足で受け止めてドリブル、ペナルティーエリア内に切り込む。

「させるかよ!」

その進撃を止めるかの如く、前に立ちはだかるのは寺坂。

「…!!」

シュ…

「な……？」

しかし、その正面からのプレスを、フェイントを混ぜたサイドステップで躲した大橋は、

「テヤアツ!!」

バスウツ!!

その儘、其処で強烈なシュートを放った。

バシイッ!

「な……？」

「「吉良っ!!」」

しかし、そのゴール枠右上角を狙って撃たれたボールは、キーパーである響の左のパシチンクに弾かれ、テンテンと転がりながら、フィールドの外に。

サッカー部のコーナーキックとなる。

「ふうくくく、危な!!」

「しつかり捕れよwww」

「いや、ナイスセーブだよ!」

「ああ。俺達だったら、普通に決められてたな、今の……」

ゴールされるのを防いだが、キャッチ出来なかった響を茶化す寺坂と、それをフオ

ローする磯貝と千葉。

サッカー練習の初日、キーパーを決めるべく、前原を含む、E組男子で行った鳥間とのPK対決。

その中で唯一、鳥間の撃った殺人的シュートに反応だけは出来た響が、キーパーと決まったのだったが：

「吉良つちがキーパーで、正解だったね〜♪」

「…全くだぜ！」

守備の為、ゴール前に戻るカルマと前原も、その頼もしさに改めて、感心と安心の笑みを浮かべていた。

「嘘…だろ…」

絶対に決まったと思ったのに…」

そして、信じられないと云う表情を浮かべているのは、ボールを蹴った大橋。
パシッ！

「あ痛あつ?!」

そんな大橋の頭上に、手刀が落ちる。

「引き摺るな、切り換えろ!!」

「…キャプテ（ビシイッ！）痛いっ?!」

そして再び落ちる手刀。

「今のキャプテンは、お前だろがwww」

「痛いっすよお、先輩…」

それは動揺している新キャプテン（後輩）に対して、先代キャプテン（先輩）流の、少
しだけ手荒いフオローだった。

「今のは吉良（アイツ）が見事だったとしか、言えねー。」

「背負い投げの人ですよね？ あの人…」

「それよかコーナーキック、極力お前に合わせるから、きっちり決めていけ！」

「はい！」



ピッ…

コーナーキック。

敵味方、殆どのプレイヤーが集まったE組ペナルティーエリア内、属が高く蹴り上げたボールに合わせる様に、大橋が高くジャンプ。

ヘディングを狙うが、

「うおらっ!!」

「…で、でも、お互いに1セットずつ取り合って、ラストもデュース迄、纏れ込んだんだから！」

「イケメグが無双して、1年2年の女子が、『きゃーっ!!♪』だった。」

「いい、言わないで…(T|T)」

「トーカも意外と？大活躍だったよね？」

「ん、自分でも驚いた。」

高校になったら、本格的に始めてみようかな？」

「…で、渚？こっちは どーなん？」

…って、まだOvsO？」

「ん、それが…」

バシィッ!!

「…つとお！」

「つらあつ!!」

この遣り取りのタイミングで、またサッカー部員のシュートがE組ゴールを脅かすが、それを響がパンチングで弾き、そのこぼれ球を、寺坂が大きくクリアー。

「…見ての通り、吉良君の活躍で、失点は免れているって感じだよ。」

ピピーツ!

そして此処で、前半終了のホイッスルが鳴った。



「クソっ!?!」

先輩、何なのですか、あの人は?」

「素人とは思えないっすよ?!」

「大橋、お前達も落ち着け。」

ハーフタイムのサッカー部ベンチでは、3年は兎も角、前半、結局は得点の出来なかつた新レギュラーの2年生達が苛立っていた。

「吉良は特別なんだよ……」

勉強でも、スポーツでもな。」

「アイツは2年の終わりに、余所から転校してきたんだが、兎に角 浅野クラス……いや、それ以上にチートな奴なんだ。」

「浅野さん……ですか……」

その苛立ち……無得点の元凶の響の事を話すサッカー部員。

「しかし当然、あのキーパーからゴールを奪わなきゃダメなのは変わらん。

いや、大丈夫だ。」

前半も、ボールの支配は殆ど お前達だったんだ。

得点出来なかった以外は、ダメ出しする要素の無い試合運びだった。

焦らずに今迄通り…いや、今迄以上に畳み掛けて行け!!」

「「「「「はい!!」「」」」」」

サッカー部顧問の言葉に、氣迫有る大声で応えるサッカー部員達。

「当然だ…。」

あんな巫山戯たトーナメント表…

無意味にしてやるぜ…!!」

「属…：気持ちは解るが、お前も落ち着け。」

立场上、お前が一番、冷静に ならないといけないんだ。」

「…はい。」

サッカー部からすれば、やはり櫛ヶ丘の生徒故な差別意識からか、E組の公開処刑の執行人となる事には、差程の抵抗は持っていなかった。

しかし、今回のプログラム…

如何にもサッカー部がE組に敗れるのが前提な、変則的トーナメントシステムに不快を感じない者は居なく。

しかも一応は偶々日程が重なったとされているが、どう考えてもE組生徒をサッカー

で叩きのめす為だけに喚んだとしか思えない、留学生の存在が明らかになった事で、その感情は最高点に達していた。



「吉良君の本職は空手だよね？」

三角蹴りディフェンスって、でk

「出来るか?!」

「…じゃあ、せめて、手刀ディフ

「突き指するわっ!!」

「ちいっ…使えないヤツ!」

「何でだよ!?!」

一方のE組ベンチ。

「ボブカット女子と響が漫才?をしている中も、一応は真面目に作戦会議が行われていた。」

「ねえ、吉良つちい! 『アレ』、やってみない? ♪」

「ん? 俺は構わないが、あの執拗なマークの中で、出来るのか?」

「…やるって言うなら、意地でも振り切ってみせる。」

「…決まりだな。」

「どうせA組…あの外人キーパーには通用しねーだろうし、出し惜しみする必要も無いだろうが!」

「そりや、そーだ。」

「でも、やるからには確実に決めないといけませんね。」

「決めようが外そうが、1度見せたら、次からは間違い無く警戒されるからな。」

「吉良?」

「…分かった。」

じゃ、その時は、分かり易い掛け声出すから、頼んだぜ。」

「—————応!!」—————」



ピーッ!

後半、サッカー部のキックオフで試合が開始した。

「おいおい属あ? ボール持ってない俺にばっか、構って良いのかよ?」

さっさと攻め込んだのが良いんじゃないやね?

俺、ストーカーは…ましてや、ヤローの ストーカーは、お断りなんだが?」

「喧しいわ! この、女っ垂らしの糞チャラ男が!!」

「そ、その呼び名は止めろおーおっ!!」

偶然だろうが、つい最近に付けられた、不名誉な二つ名で呼ばれ、思わず絶叫する前原。

…しかし、事実だ。

バシィッ!!

「…つとお!!」

「な…ナイス、吉良…!」

そして試合は、相変わらずサッカー部が主導権を握る展開に。

前半からの話なのだが、ボールはセンターラインより先、サッカー部側には殆ど侵入する事の無い、E組劣勢の状況が続いていた。

ゴールを守るのが響でなければ、既に10点以上の点差が着いていても、不思議では無かった。



「ケケケ…こりや、時間の問題だな。」

「フルボッコになつてないのが、気に入らないけどな。」

観客席でE組…特に個人的理由で響を快く思っていないD組の男子生徒2人が、E組のピンチを見て嬉しそうに、下卑た嗤い顔を浮かべる。

このイケメン委員長の目立たない仕事が大きかった。
「構わない磯貝！」

仕掛けるから、撃たせろ!!」

「「「「はああ?!」」」」

この響の大声の指示に、それを聞いた選手達が敵味方問わず、驚き、或いは呆れの声を出す。

特にE組（みかた）は、

こ…この男、確かに仕掛ける時は「分かり易い掛け声出す」と言っていたがオマエ…
分かり易過ぎるだろうが!

そんな弩ストレートに言って どーすんだ!?

サッカー部にもダダバレじゃねーか?

こっの、露出リア充!!

…ベンチの渚達、女子達も一緒となって、心の中で心を一つにしての総突っ込み。
ダダダッ…!!

「あ?」「えっ?」「何?」「しまっ…」

しかし そんな中、心中 突っ込みながらも前原、カルマ、イトナ、木村が各々に粘着するかの様に張り憑いていたマークを外すべく、一齐にダツシユ。

そして、

「な、舐めるなあ!!!!」

ドツガアアツ!!」

響の指示通り、磯貝がマークを外した事により、フリーとなった大橋が、怒りの雄叫びと共にシュートを放つが、

ガシィッ!

「な…!?!」

ゴール左下を狙った そのボールは、響の横つ飛びのキャッチで止められてしまう。「きいっええええええええええいゃあ!!」

バシィッ!!

そして自らに気合いを入れる様に：端から見れば、奇声とも受け取られかねない：独特の空手流の雄叫びで、大きく前方にボールを蹴り上げる響。

センターラインを大きく越え、敵陣地、ペナルティーエリア手前迄達したボール。

そのボールに誰よりも早く追いつき拾うのは、

「取りいー!」

E組一の俊足・木村である。

自身のマークカーの一瞬の隙を突き、そのマークを振り解いた後は、誰も彼に追い付く事は出来ず。

「木村！」

「……！」

そして、やはりマークから逃れ、ペナルティーエリアに入っている前原、カルマ、イトナ。

響のあの掛け声の中、心の中で突っ込みながらも、何だかんだで放たれるシュートは止めてくれると信用、守備は棄て、敵陣深く、斬り込んでいた。

パシィツ

その中に、クロスを放る木村。

「…貫った。」

サッカー部守備陣との凌ぎ合いを制し、このボールをゲットしたのはイトナ。
ピシィツ!!

トラップ後、執拗なプレスの前に、体勢を崩しながらもシュートを打ち込むが、これはキーパーに弾かれ、ゴール前に浮き球となってしまう。

「クリアだ！早くクリアしろ！」

これを倒れ込んでいるキーパーが、上体を起き上がらせながら指示。

それに対し、サッカー部ディフェンダーと菅谷が、ボールを追い大きくジャンプ

「うおおあああつ!!」

パシィツ!

上空でのボールの奪い合い…空中戦は、上背で勝る菅谷が競り勝ち、ゴール目掛けて強烈なヘディングを落とした。

「ぎ・せ・る・か!!」

ピシィ!

だが、これは まだ完全に体勢を整えていないながらも、咄嗟に出したキーパーの足に阻まれる。

ゴール前で大きくバウンドするボール。

ダツ…

そして今度は そのボールに、頭から飛び付こうとする人影が1つ。

「ううく…あああつ!!」

「前…原あつ!!」

そして更には、そのダイビングヘッドを阻止せんと、属がスライディングから脚を延ばし、ブロックに入った。

「木村も、良いクロスだったぜ!!」

サッカー部ゴール前、互いのプレーを讃え合い、もう勝ったかの様に やんややんやな前原達。

「…ねえ、俺は？」

俺のロビングは…？ orz」

「い、いや…吉良も、ナイスキックだったから！」

「アイツ等も、それは分かかってるって…」

「orzるな、orzるな!!www」

その様子をE組ゴール前から遠目に見て、ぼつりと呟く男が1人。

「クっソが…!」

「まだ、終わってないっすよ…!!」

「行くぞ!倍返しだ!!」

「」「」「」

そしてサッカー部。

その失点1つで諦めて試合終了してしまう程、彼等のメンタルは脆く無く、寧ろそ

「やりましたね！」

「「勝ったどーっ！っ！！」」

「ま、当然だろう？」

それは、ベンチも同様。

「やりましたあー！」

茅野が持つスマホの画面の中で、日本代表・青のユニホーム（15）を着た少女も、喜び飛び跳ねている。

「あ……」

「負……けた……のか……？」

「E組相手に……」

「俺達……が……」

「負け……た……？」

そしてサッカー部。

自分達が負けたのが、信じられない様に、全員が呆然としている。

「あつはつは……こりゃ、理事長に呼び出されて、OHANASHIかな？」

「いや、前原先輩！」

俺、先輩に負けたって、これぼっちも思っていないすからね！

強いて言うなら、吉良さんには、完敗って、認めてやってm（パシイッ!!）あ痛あ!?!」

「お前は黙れ。」

「ははは…負けず嫌いは良い事だよ。」

頼もしい新キャプテンじゃないか?」

そして今回の試合、サッカー部の攻撃の柱となっていた、大橋も会話に加わる。

「…でも お前等、次、大丈夫なのかよ？」

あの外人部隊…

ぶっちゃけ、俺達に負けてた方が、ダメージが少なかった

「あく、話している処 済まないが、サッカー部の諸君は、速やかにグラウンドから退散し

て貰えるかな?」

今からA組v s E組の、リアル・ファイナルを始めるんでね?」

「!?!?!」

!!?!?!」

プライドの時間

ノーサイドという言葉がある。

ラグビーで、試合の終了を差す言葉だ。

原義は、試合が終わった瞬間に敵味方の区別がなくなる事。

試合終了、その戦いの後、互いの健闘を讃え合うという精神である。

それに習ってか、E組とサッカー部がフィールド上にて互いの健闘を合っていた時、

「あゝ、話している処 済まないが、サッカー部の諸君は、速やかにグラウンドから退散して貰えるかな？」

今からA組 v s E組の、リアル・ファイナルを始めるんでね？」

「!?!?!」

まるで空気を読めていない台詞が乱入してきた。

「浅野お前…本気で言っているのか…？」 A組・浅野学秀である。

「ああ、勿論さ。」

万が一（笑）、E組がサッカー部に勝った場合、特別試合を行うのは決定事項だ。

不本意だが野球の時に、あんな実例を作ってしまった為にね。」

「そういう意味じゃねーっ!!」

そう言って浅野に詰め寄っているのは、サッカー部（元）キャプテンの属。

「E組（コイツラ）、今俺達相手に1試合を終えたばかりだぞ？」

最低でも、10分程度のインターバルとか入れるのが普通だろうか!!」

「そ、そうっすよ！」

連戦とかで、有り得ねーし!!」

「おい…属?大橋?」

「クス…随分と、彼等の片を持つんだね?」

まさか、E組（じぶんたち）のフォローに回っている新旧サッカー部キャプテンに、前原も少し吃驚である。

「この試合、決定事項と云っても、同時に、イレギュラー・プログラムでも在る事は変わりがないんだ。

僕は今回の実行委員長として、球技大会を早く締める義務が有る。

だから、さっさと試合を始めたいだけなんだが?」

「いくらE組を蹴落としたいからって…」

プライドが無いのか? お前…?」

「いや、そーゆーりゆーなら、しかたないだろー? な? まえはらー?」

※※※ E組・対A組先発オーダー ※※※

F W 前原 赤羽

M F 堀部

木村 杉野 吉田

D F 寺坂 村松

磯貝 岡島

G K 吉良

※※※※※※※※※※※※※※※※※※

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーッ

ポン…

キックオフの笛の音と共に、浅野がボールを軽く蹴り、隣に立っていたアギヤアラに
パスし、

ポン…

アギヤアラは、やはり直ぐ傍に立っていた、ティグレにパス。

「H A A A A A A A A A A U!!」

「[「[「[「[「[「[「[」」」」」」」」」」」」

そして そのティグレが、自分の足下に来たボールを、猛々しい咆哮と共に、

ズガシヤアツ!!!

センターサークル内、その場のグラウンドの土を激しく抉り削りながらの、超ロングシュートを撃ち放つ。

バキイツ!!

「ドイヒ——————っ!!?」

「[「お、岡島ああ?!!」」」

しかし その、ゴールに向けて一直線に放たれたボールは、偶々その軌道上に立っていた、岡島の顔を直撃。

「寺坂、一旦 外だ!」

「お、応!」

ポン…

ボールのフォローに入った寺坂が、響の指示でボールをフィールドの外に蹴り出し、

一時 試合を止めた。

岡島↓OUT

三村↓IN

「岡島、仇は討つてやるぞ…」

「お前の犠牲、無駄には しない！」

「…教室では常時、グラビア雑誌鑑賞か、カメラ越しに女子を舐める様に追い掛けてるわ、真夜中の校舎では全裸で走り回ったりする様な変態だったが…決して悪いヤツではなかった…!!」

「弔い合戦だ!!」

「いや、お前等…別に岡島（アイツ）、死んじやいないからな？」

改めて決意を固め、険しく顔を引き締める響達に、やや引きしながら突っ込んでいるのは、磯貝である。



パシイツ!!

「うつわ…くつそー!」

「な…なんちゅードリブルだよ?」

試合再開後も、A組の猛攻は止むことは無い。

スローインからのボールを受けたティグレは再び、その場から、あの地面を抉りながらのシュート……を撃つ事は無く、今度はドリブルで進軍。

ブロックに入った吉田を、交通事故さながらに吹き飛ばした。

「磯貝、杉野！」

その18番に、2人掛かりで付け!!」

「わ……分かった!」「了解!」

響の指示で、ティグレに2人掛かりでマークに付く2人。

「ティグレ!こっちだ!!」

「……………」

ポーン……

無理をすれば、別に躲せなくは、抜けなくは無い……

しかしスペインのクラブチームのエースは、より確実な試合運びを優先させ、逆サイドを走るアギヤアラに向けて高い浮き球を蹴り渡す。

パシィ……

それを受け取り、ドリブルで進むアギヤアラ。

「行かせるかよっ!!」

それを寺坂が止めに入るが、

「……………」

「んなつ…?!」

フェイントを混ぜた、巧みなボールキープで それを突破。
バシィツ!!

直撃、ペナルティーエリア外からの、ロングシュート。

ガツシ…

しかし、天空から獲物を見つけた荒鷲が、急降下から その獲物目掛けての低空飛行の様な鋭い一撃は、

「Q u e?!」

「いつてえ~~~~~~~~!!?」

響の両手に受け止められる。

「ば…馬鹿な…」

俺のシュートを止めただと?

「アサノ、ヤツは前の試合も、かなりの守備を見せていたが…アイツはJ a p o nのクラブユースの代表か何かなのか?」

「いや、そういう訳じゃない…」

唯単に、油断ならない奴…なんだ…。」

自身のシュート、或いは その実力を認めている者のシュートを、如何に距離が有ったとは云え、完璧に防がれた事に、驚きを隠せないアギヤアラとティグレ。

「次は…決めてみせる!!」

~~~~~

「吉田、村松! お前達はボール関係無く、17番に付いてくれ!」

「お応…つて…」

「良いのかよ?」

もう1人の外人にも、既に磯貝と杉野が2人、付いてるんだぜ?」

「大丈夫だ! 問題無い!!」

厄介なのは海外組だけ、残りの雑魚(モブ)如きに、ゴールを赦したりはしない!」

「お…応!」

ティグレに続き、アギヤアラにも、2人マークを指示する響。

守備の隙間を気にする村松と吉田だが、響は無問題をアピール。

「な、舐めるな、吉良あ!!」

アギヤアラ! ボールを僕に寄越せ!!」

「アサノ?」

響達は何を言っていたのから分からないが、それに反応したのだろう、浅野の怒声に

少し驚いたアギヤアラが、パスを出す。

パシイツ！

「巫山戯るな！吉良あ!!」

ペナルティー内、殆どフリーな浅野のシュートが、ゴール中央に立つ、響の右真横を通り過ぎようとするが、

ガツ…

「なあ?」

ボールは その場から動かず、横に伸ばしただけの響の左手に、ワンハンドキャッチされる。

「行くぞー…木いつ村あ!!」

「「「応!!」」」

バシイツ!!

透かさず、前線に大きく蹴り上げる響。

それに合わせ、ダツシユする木村達。

それはサッカー部との試合で見せた、得点のパターン。

スタツ…

「…っつと」

バスッ：

かなり練習していたのか、ボールを目で追う事無く、その落下地点迄走り込み、ボール着地と同時に、ペナルティーエリア内にクロスを上げる木村。

「ナイスだ！」

それに合わせた前原がゴール前、胸でワントラップした後にシュートを放とうとするが、

「Tha's Naive！」

スバアッ！

「うわわっ?!」

イングランドからの留学生、レイザーの刃の如きな鋭いスライディングタックルに刈り穫られる。

「行くぜ!!」

タッ：

その儘、DFポジションからオーバーラップするレイザー。

パシィッ：

そして中央線を少し超えた辺りで、アギヤアラの居る方向に体を向けて、低空のパスを出す。

「…貰った!」

しかし そのパスコースにイトナが割って入り、ボールをカットしようとするが、

「Ha! I said:; That's Naive!」

クイ…

「何…だと!?!」

レーザーの蹴ったボールには特殊な回転の掛かっており、イトナの足に触れる寸前で弧を描く様に その起動を変え、

「……。」

トン…

「あつ…!?!」「しまつ…?!」

ティグレの足下に収まってしまふ。

「HAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAUU!!」

そしてフィールドに再び、轟雷の如き雄叫びが響き渡る。

そして しなやかな野獣の如き脚から繰り出されるのは、

ズガシヤアツ!!!

キックオフ直後、試合開始早々に岡島を退場に追い込んだ、あのシユート。

今度はセンターサークルでなく、ペナルティーエリア内側。

2人掛かりのマークを物とせず、土塊を周囲にバラ撒きながら…正しく猛獣の爪と牙と化したと形容するに相応しい超弾が、E組ゴール、左上角を襲うが、

「霸あつ!!」

バキッ!

「q…Que?!」

斜め上方に跳んだ響の拳に弾かれ、

「オラっ!!」

ぽーん…

それを拾った寺坂に、大きく前方に蹴り出された。

「正拳突きティフェンス…不破ちゃん、これで勘弁ちよ♪www」

「いや お前…それ、要は只のパンチングだよな? (ー|ー:)」

…ドヤ顔の響に、ジト目で突っ込むのは、寺坂である。



「何なんだ、アイツは?!」

俺のシュートは、プロ選手からもゴールを奪えるんだぞ?!」

「ティグレ、落ち着け!」



…結局 前半は、デイグレとアギヤアラが中心となり、何度となくE組ゴールを攻め立てるが、磯貝達の執拗なマークや、最早 鉄壁と謂つても良い、響のセービングに阻まれ、両者無得点で終わっていた。

A組側ベンチでは、その結果に…特に、自身のシュートを何度も止められたと云う現実、デイグレがヒートアップ。

同様に何度もシュートを止められるも、辛うじて平静を保っているアギヤアラが、怒れる猛獣のクールダウンに努めていた。

「デイグレ、アギヤアラ…ちよつと良いかな?」

「アサノ?」



「大丈夫だったか、岡島?」

「ボールは友達だぞ? 怖くないぞ?!」

「…いや それ、不破にも言われたから…」

一方のE組ベンチ。

戻ってきた響達は真つ先に、試合開始早々に超弾直撃を受けて退場した岡島の下に。「避けられはしなかったが、鳥間先生の殺人シュートのが速かったし…」

…だろ? 吉良?」

「まあ……な。」

「それに、普段の女子達のシバキのが、断然痛いし……」

「「「「「……………」」」」」」

「どうやら、岡島は大丈夫な様だ。」



「何だとアサノ?!

もう一度、言ってみろ!!?」

再び視点（カメラ）はA組側ベンチ。

「……だから、僕がゴール前、高めのクロスを打って吉良を誘い出すから、其処へ攻撃選手

全員で飛び出して、吉良を潰s（バキイツ!!）うわあつ?!

「「「「「きゃあああああ??!」」」」」

「浅野?!」

「浅野君?」

「お……落ち着け、デイグレ!」

「これが落ち着いていられるかつ?!」

後半に対しての、浅野の出した指示……作戦を聞いたデイグレの拳が、その説明を言い

終わる前の浅野の顔面を撃ち抜いた。

スペイン語での会話故に、何を話しているか分からない中の、いきなりの暴力。A組女子が悲鳴を上げる中、アギヤアラが頭の中では既に無駄だと理解しつつ、更なる宥めに入るが、怒りの野獣は静まりはしない。

「フウ…此迄…だな。」

溜め息一つ吐いたアギヤアラは、自身が所属しているチームユニフォームの上から着ていた白いゼツケンベストを脱ぐと、

「君が、俺の代わりに出るんだ。」

「え?ええっ??」

そう言つて、控え要員のA組男子に手渡した。

その男子は、言葉は通じなくとも、そのアクションだけで何を言っているかは理解出来た為、呆然且つ、驚きな表情となってしまう。

「お前が出る!!」

パシイッ!

「うわわっ?!」

そしてティグレも同様に、別の控え男子に向けスペイン語で怒鳴りながら、ゼツケンを投げつける。

「ま、待て2人共? 何の心算だ?」

慌てて浅野が、その行為を質すが、

「解らないのか？」

「そんな巫山戯た指令を出す様な奴と、一緒に試合（ゲーム）が出来るか!？」

「う…」

2人から返ってきたのは、痛烈な応え。

「わ、分かった…さつき言った作戦は無しにするから…だから…」

「…もう、遅いよ。」

「……………」

狼狽える様に、前言撤回しようとする浅野だが、アギヤアラは冷めた目で目の前の人物を見据え、デイグレは既に、『コイツは話す価値無し』とばかり、沈黙を決め込んでいる模様。

「で…でも2人共、悔しくないのか？」

前半、吉良（アイツ）に完全に抑えられてたじゃないか？

負けた儘で、良いのか？

勝ちたくは、無いのか？」

「A・・a a h!!？」

「ひいっ…?!？」

戦る気の失せた2人に対して、今度はプロ（…の卵）のプライドを挑発するかの言葉を投げ出す。

…が、その台詞を聞かされた2人は、何処かの危険人物の様な、本職（893）も土下座して逃げ出すかの形相で浅野を睨み付ける。

「テメー、巫山戯るのも、大概にしろ!!」

「…お前の様な、下種の下でプレイする方が、俺達にとっては、余つ程 屈辱的なんだよ…。」

手段選ばずも結構だが、お前は その手段とやらの選択も、それを持ち掛ける人選も、誤り過ぎた。」

…しかし その言葉は、その前の台詞が逆鱗（プライド）に触れるのに十分過ぎた為、既に効果を持つてはいなかった。

「……………?」

その遣り取りに、残る留学生、レイザーとテイタイネンも、頭上に疑問符を浮かべて見ている。

「アサノ、せめてもの情けだ。」

アイツ等には黙っていてやる…

スズキサンも、余計な通訳は、しないでくれますね？」

「今のを知れば、アイツ等もボイコット必至だろうからな。

まあ、それは、それで、面白いが？」

「…Sii。」

そんな2人に目を向け、来日に合わせ、一緒に派遣された日本人の通訳担当に、他言無用を釘さし、本当に試合に出る意志は無いとばかり、設けられているパイプ椅子に座るテイグレとアギヤアラ。

「それに元々これは、クラス対抗のイベントなんだろう？」

だったら、せめて最後は、俺達外様に頼らず、本来の自分達のメンバーだけで戦り抜

いてみたら、どうだ？ Cachitoo？」

「うう…」

体育祭、そのラスト競技として企画された、本校舎3年選抜チームvsE組の棒倒し。

その際、本校舎勢として呼び寄せられた、アメリカ人とカナダ人の2人が、参加人数の差を問い質し、その返ってきた答えに激怒、競技出場を放棄した事が有った。

E組を潰す事だけを優先して、彼等のアスリートとしての誇り（プライド）を蔑ろにした結果である。



どーせ、あの外人キーパーも、鬼スペックの塊だろうからな!!」

「「「「「「応!!」」」」」」

ドリブルしながらの前原の指示に応え、志気を上げるE組メンバー。

前半、A組の攻撃の要となった留学生2人が不在となり、この後半はE組がボールを支配する割合が多くなる。

4月からの訓練で、基本的な運動能力は既に、E組の方が遥かに上に位置していた。

「そろれ…つとお!!」

ビシィッ!

作戦通り、DFのレイザーの守備を避け、その守備範囲の外から、パスを受けたカルマがシュートを放つが、

ガッ…

「…つですよね〜?」

それは難無く、ドイツからの留学生、ティタイネンに あっさりと止められてしまう。

「ティタイネン! レイザーにパスだ!!」

レイザー! 攻撃に参加しろ!!」

ドイツ語と英語を巧みに話し、留学生達に浅野が指示。

トン…



「SHAAAAAAAAAH!!!」

指示通りにパスを受けたレイザーが、ドリブルで進軍。

「「ヤッロ！」」

それを止めるべく、木村、杉野、吉田が前に立ちはだかるが、

パシィツ…！

流石に3人掛かりのプレスは捌き難いと判断したか、レイザーは横方向にパス。

「…もう、騙されは、しない！」

それをイトナが、カットに入る。

前半、難無くパスカット出来ると思っていたボールには、特殊回転が加わっていた。

イトナは今度は、それを踏まえ、想定されるコースに脚を延ばそうとするが、

クイ…

「な…に…?!」

「H A H ー！ It, s The W・Edge!!」

そのボールは、先程とは逆の方向に、弧を描く。

パシィツ…

そして、そのボールを受け取ったのは浅野学秀。

「ヤッロ！」

「往生せいや!!」

その前に出てきたのは、吉田と村松。

吉田のプレスを横スライドのフェイントで、間髪入れずの村松のスライディングを両足でボールを挟み持ったのジャンプで躲すと、

「浅野君!」

「……………」

ダダッ……!

「あ……浅野……君?」

左側、真横やや後方を走る、榊原の呼び声を見無視して、その儘ドリブルで前進。

ペナルティーエリアに入ってからのシュートを打つが、

「うおらっ!!」

どん!

それは真正面に立った、寺坂のブロックに阻まれる。

「へっ!吉良やイトナの一撃が、余っ程 重くてキツかったぜ!!」

腹を押さえながら、ニヤリと笑う寺坂。

パシィッ……!

そして大きく蹴ったボールは杉野が拾い、再びE組のターンが始まった。

しかし、この攻勢もキーパー・テイタイネンには全く通用せず、やがて…

ピツ…ピツピーーーーーー！！

タイムアップを告げる、ホイッスルが鳴るのだった。

## PKの時間

秋の球技大会、リアルファイナルと銘された、A組とE組の試合は両者無得点で終わり、PK対決で勝負を委ねる事となった。

「よし、最初は俺が行くよ。」

「吉良……？」

先攻のE組。

その一番手を名乗り出たのは、ゴールキーパーを務めていた響。

「良いじゃんかよおお！」

PK位、蹴らせてくれよおお！」

俺だって本当は、FWかMF、やりたかったんだからよおおおっ!!」

「わ……分かった……分かったから!!」

「泣くな、泣くな!!」

半泣きでの本音の訴えに、やや引き……呆れながら、今回の球技大会、一応はクラス内のキャプテンを務めている前原が、チーム内……もしかしたら、大会MVPと言っても良いかもしれない、クラスメートの背中を押した。

ピッ…

合図の笛の音に習い、僅かな助走から

「行くぜ！ドライヴウ〜…シューーーッ!!」

バシィッ!

「!!おおおっ?!」

大見得を切った台詞と共に、豪快なシュートを放つ響。

そのボールはゴールより遙か上空へ打ち上げられ、特大ホームランになる…と誰もが思ったが、最高点迄達すると、突如として生じた高速回転と共に、ゴールネット目掛けて急降下…

…等、する訳が無く。

響が蹴ったのは、唯単にゴール下左角に狙いを定めた、ストレートの高速低空弾。

「……………!!」

それにドイツ人留学生のキーパー、テイタイネンも、シュートの際の台詞に惑わされる事無く反応（…てゆうか、何を言ってたのか分からない）、巨軀を横つ飛びさせてのセービングを試みるが…

バスウツ!

「u……?!」

「良・おお~~~~~っし!!」

それでもシユート速度の方が やや速かったのか、響の蹴ったボールは、ゴールネットに突き刺さった。

両腕を天に突き上げ、思わず会心のガッツポーズを見せる響。

「「この、卑怯者——!!」」

「何がドライヴシユートだ？」

でっちかっつてーと、タイオーシヨットぢやねーか！テメーっ!」

「謝って！」

今直ぐ、キーパーの人に謝って!!」

ぶーぶーぶーぶーぶーぶーぶー…

「何で?! (。D。;)」

しかしシユートが決まったにも拘わらず、そのハツタリとは真逆の弩ストレートな弾道に、男女問わずに非難囂々罵詈雑言を浴びせるE組の皆さん。

「う、うっせー!」

大体 普通な素人中学生が、んなマンガみたいなシユート、打てる訳が無いだろ!」



吉良！アイツは！」

「大丈夫だ、イトナ。」

ゴール前で構える響に、ボールの前に立ったレイザーを見て、イトナが声を張り上げる。

ヤツの蹴る球は、曲がる……！

試合中、そのボールに何度も翻弄されたイトナが注意を呼び掛けるが、響は心配無用のゼスチャー。

ピツ……

「D a s s h a !!」

バスイツ！

そしてシュートを放つレイザー。

その球は、ゴール中央で構える響の真正面に進み、

クイ……

……と、見せかけて、その途中、蹴る際に付加された特殊な回転によって左に曲がり、ゴール左角へと吸い込まれて行く。





ガシイッ…

「くっ…!!」

続くE組2番手、磯貝の蹴ったボールは、あっさりとティタイネンに止められ、A組の2番手として、ペナルティーエリアに立ったのは、

「さっきのリベンジ…つてか?」

「……………」

A組キーパー、ティタイネンである。

「…よつとお!!」

パシイッ…

「ga…?!」

だが、このドイツ人留学生のシュートも、ジャンプしてのパンチングで、響は捌く。

そして続く、E組A組の3番手、4番手のキッカーも、それぞれ響とティタイネンの鉄壁の守備の前に、得点出来ずに終わってしまう。

「…じゃ、決めてくるわ。」

「……………」よし行け! 【女っ垂らしの糞チャラ男】!!……………」

「だから、その呼び名は止めれ!! (怒)」

E組のラストキッカーは前原。

クラスメート達の暖かい（笑）エールを受けて、ゴール前に立つ。

仮に これで、前原がゴールを決めた場合、それで後攻めのA組がキックを打つ前に、E組の勝利となる。

ピッ……

「そらあつー！」

ビシィッ！

シュートを促す笛の音に應える様に、前原がシュートを放つが、それも難無く、ティ・タイネンの右掌に止められる。

そしてA組のラストキッカー、浅野が定位置に立った。

「……クソ、ティグレやアギヤアラさえ、試合を降りなければ……!!」

「……………」

恨めしそうに、スペインとアルゼンチンからの留学生を睨み付ける浅野。

自分達と浅野の、勝負に挑む心構えの食い違いからの衝突により、後半には試合に出場していなかった2人は、このPKにも参加する権利も無く。

今から浅野の蹴ったボールを、響が止めたらE組の勝利で試合終了。

もしも浅野がゴールを決めたら、サドンデスでPKを続ける事となる。





「無様だね？ あ・さ・の・；・く・ん？」

「っ……!!」

放課後。

理事長室では、浅野父子…否、学園理事長と、理事長に呼び出しを受けた生徒会長が、この日の球技大会について話していた。

「学園祭の時にも少し話したが、”勝ち”と云う結果が出たら、それで良いという訳じゃ無い。」

聞けば、サッカー部との試合の直後、疲労困憊なE組に対し、休憩も挟まずに直ぐに勝負を持ち掛けたそうじゃないか？

仮に…それで仮に勝てたとして、君自身は兎も角、他の皆は、それでE組を弱者と見ると思ukai？

A組を強者と、認めると思ふのかな？」

「う……」

「結果、負けてるしね？」

「……………!!」

「1年2年生が言ってたよ。」

『E組まぢパ無え！』…っつてね。」

「……………!!」

「しかも、」今回の為に急遽…E組に勝つ為だけに わざわざ呼び寄せた海外留学生も、十全に活かしきれなかった様だし…

ティグレ君とアギヤアラ君…

後半から試合に出なかった2人、一体、何が有ったのかな？

彼等は『ノーコメントだ!』って、何も話してくれなかったけど。」

「……………。」

「…まあ、通訳さんに、全部 聴いているけどね。」

「……………!?!」

「そりやあプライド有るアスリートに、あんな命令を持ち掛けたりしたら、普通は誰だつてキレルさ。」

自分達の力を信用していない…そう言ってるのと同じだからね。

それさえ無ければ、違った結果になっていた可能性は、凄く高い。

それは、その後の番外戦とやらの結果を鑑みれば、君にも理解出来る筈だ。」

「くっ…!!」

「ねえ、浅野”君”?

どうして君は、せっかく私が最強な戦力を用意してあげても、それを悉く誤った使用・





大丈夫。

私が直接、彼等に どうこうする訳じゃあ無い。

君達の やる気を促す手伝いを、ほんの少しするだけさ。

詳しくは、明日の全校集会で話すから。

お疲れさん。

今日は もう、帰って良いよ。」









それに私は、今回、資格を失うであろう彼等に、その外部受験の資格すら認めないと、一言も言っていないませんか？

それから…今回の件、本校舎生徒の成績を高見に導けなかった先生方にも、責任の一端が有る事を忘れずに。」

「………。」



「ヌルフッフッフ…」

理事長先生のお話は、先生、体育館天井の鉄骨の陰に隠れて聞いていましたが…集会が終わった後の、E組ホームルーム。

烏間の注意をガン無視して山を降り、人影忍びつつも集会に参加していた殺せんせーが、自分の教え子に問う。

「どうしますか？」

彼等に遠慮して…或いは憐れんで、期末試験はまったりと往きますか？」

「………。」

しかしながら当然、その応えは『否』。

極々数名、僅かな罪悪感を抱く者も居るのは居るが、それは其れ、これは此である。何よりもE組には、全員が試験で学年ランキング・ベスト50入りすると云う、担任のタコ暗殺と並べて1学期から掲げている目標がある。

今更、本校舎（アチラ）の事情で、取り止めにする選択肢は無かった。

例え、その結果、本校舎（ムコウ）の殆どの者が、内部進学資格を喪う事となつても。

寧ろ、此迄の本校舎生徒達の自分達への対応から、更なるモチベーションアップの起爆剤とする者の方が多かったのは、説明不要？

皮肉なのか、それとも当人からすれば、これも想定内なのか：理事長が放った発破は、E組の生徒にも降り掛かつていた。

「…宜しい。ならば、勉強です。」

自分の投げ掛けた質問に、ある者は思い詰めた様な表情を浮かべ、また、ある者は不敵に微笑みながら、それでも揃って、無言で首を横に振る生徒達。

そんな教え子達の『答え』に応えるかの様に、殺せんせーは試験前恒例の、  
 ヴオンヴオンヴオンヴオンヴオン…

『……………』さあ、始めましょうか。『……………』

多重分身を繰り出した。





ヌルフフフフフ：

他人に教える事で、それと同時に教える側も改めて、より深く理解出来る物なのですよ？

そして それに伴い、チームワークもより強化されます。

特に…

「ほらほら〜♪

この場合、コッチを先に代入していくんだよ〜？」

「くっ…な、何か…」

「ムカつく…!!」

特にカルマ君には、効果靚面。

1学期期末の時の慢心を反省した点も加わり、より隙が無くなり、より完璧に仕上がっています。



…その頃の、A組教室。

「皆、解るね？」

とりあえずは僕達がトップ層を独占、それにBくD組が続く。

そして その一番下に、奴等が這い蹲る。

それが この学園の、本来の姿なんだ。

その為にも…」

同じくB組。

「…死又気デエ！殺ス気デ脳味噌ニ詰メ込メエ！

奴等ニ負けタクナケレバナア！！」

そしてC組。

「…良イノカイ？」

彼等ニ勝ちタクナイノカイ？

ソナナ事ジャ君、学校ニ居ラレナクナツチャウヨ？」

更にはD組。

「…サア、共ニ…アイツ等ヲ、蹴落トソウ、ソノ為ニモ…」

生徒が生徒を教えると言う手法を執っていたのは、E組だけではなかった。





「ふうん…」

…で、その進藤は平気だった訳？」

「アイツは一年の時から、エスカレーターターしないで、高校は『帝蜂』に行くって言っていたからな。」

「あつ、野球か！」

「そ。だから別に、内部進学資格無くても関係ないから。」

浅野はアツチの皆に、全員強制参加を呼び掛けてたけど、それをシカト、スルーしたらしいぜ。」

「へえ〜？」

あの お坊ちゃんの影響力も、大分 薄れてきてんじやない〜？♪」

「スポーツ関係で余所の学校に進学する予定の奴等、皆 浅野の呼び掛け、拒否ったりしててな？（笑）」

この何気に言った菅谷の一言、実は正解である。

特に進藤に至っては、体育祭の時から、そして先日の球技大会…その何振り構わぬE組潰しの姿勢に、浅野に対する不信感をかなり募らせていた。

「あ、掛布ちゃんも、別の学校に行くから、それ、サボるって言ってた。」

更には茅野からも追加情報。

「掛布って、あのバスケ部の？」

「そーだよ。」

「…って、茅野っち、アイツと仲悪くなかったっけ？」

「んん。遭う度に、互いに『うがーっ!!』って…」

「頭の上で、兎と虎が、鳥獣戯画なバトルしてたよな。」

「あははは…」

まあ、色々と有って…和解したのよ。」

色々と…その詳細は話したくないのか、誤魔化すように笑い、結果だけを言う茅野。

「ふうくん？ まっ、差し詰め…」

「貧○同士で、打ち解け合ってたって処k

「う…ウルサイ煩い五月蠅あーい!!」

バキイツ!! x2

「くくはちじゆうはち!!?」

「お、岡島あ?!」「吉良っちいー!?!」

それは正解だったのか…

しかし、大凡”其方方面”を気にしている女子に対しては、絶対に言っではいけない発言をした大馬鹿者2人の顔面に、怒れる少女のモデルXXXXG—00WOによる、

二刀流フルスイングが炸裂した。

「…巫山戯るなっ!!!!!!」

「「「「「「!?」」」」」」」

そんな中、いきなり教室に届いた怒声。

「今の声…」

「烏間先生?」

「何かあったのか?」

その声の主は、烏間。

そして声の出処は、恐らくはE組教室から、3つ部屋を空けた教員室。

何が起きたのは定かでは無いが、その距離からでも はっきりと聞こえる程の、怒鳴り声。

どたどたどたどたどたどたどたどたどた…

ガラッ…

「失礼します!」

「な、何があったんですか?」

「烏間先生?」





「あの怒り具合、尋常じゃ無いですよ？」

「ト…」

「……………」

両クラス委員長の言葉に対し、コーヒーカップを机の上に置き、黙り込む烏間。話すべきか否か…その表情（かお）は、明らかに迷っている。

「いえいえ、烏間先生、私も あの電話、何だったのか知りたいですね？」

「そーよ！何も知らない儘じゃ私、ビビり損じやないのー」

其処に先程迄は涙目ガクブルだった、殺せんせーとイリーナも、会話に割って入る。

「ふう……」

それに観念したのか、烏間は溜め息一つ零し、

「実はな、3ーAの大野先生から、今回の期末試験、E組（きみたち）に手を抜く様に指示を、頼まれてな……」

「は・い……!?!」

その一言で、瞬時に身体の色を、やや怒りの『赤』に変える殺せんせー。

「呆れた……」

そして台詞通りな顔をするイリーナ。

「マジかよ……」

「教師の台詞じゃないわね…」

「あー、全くだ。」

そーりや烏間先生、ゴゴゴつても仕つ方無いわー。」

「何？その言葉？造語？新語？」

生徒達も同様な反応（+α）を見せる。

「兎に角だ、俺は つい、感情が先走つて、一言怒鳴つて終わらせてしまったが、今度は生徒（キミ）達に直接、接触してくる可能性も在る。

当然この事は、此の場に居ない皆にも伝えてくれ。

そして もしも本当に、本校舎の教師が君達に そういう話を持ち掛けてきた その時は、毅然とした態度で断り、直ぐに俺に知らせてくれ。」

「「「は…はい！」「」」

「その時は…本校舎の職員室に押し掛けて、その当人に O・H・A・N・A・S・H・I  
 ★…してやる。」

((((ひいひい!!)) 怖い！烏間先生、笑顔が怖いから!!!))

~~~~~

「…以上、烏間先生からだ。」

「「マジかよ…？」」

「付けなよ〜?」

「な…!?!」

「どーして俺g…って、俺がE組でビリッケツツだからか?」

「そ♪本校舎の連中からすりゃ、E組の誰か1人より、上位に…だからね。」

「ケツ! 300億、現金一括先払いなら、考えてやるぜ!!」



「ん?」

「誰だ?アレ?」

「さあ…?」

放課後の分身殺せんせーによる特別授業も終え、山を降りたE組一同。

その麓、彼等を待つていたかの様に、1人の中年男性が立っていた。

「やあ。吉良君…は、居るかな?」

そう言つて生徒達に尋ねる中年男。

「…俺ですけど?」

「そうか。」

俺は、高等部でサッカー部の顧問をしている、三鷹つてモンだが…

「……………」。

指名されて名乗り出た響に、自身も名乗る中年男……高等部サッカー部顧問・三鷹。

「……と、二云う訳だ。」

サッカー部に入ってくれると約束してくれるなら、本校舎復帰、内部進学について、俺が理事長に働きかけるから……」

「……………」

その用件は、先日の球技大会での響の無双セイビングを、誰かから聞きつけてのスカウトだった。

「……どうだろうか？」

「……………」

普通に考えたら、かなりな好条件を出す三鷹。

それに対する響の応えは、

「試合には出る。」

練習は、気が向いたら出る。」

「な……?!」

普通に考えれば、かなりな我が儘な条件だった。

「それと、エスカレーター進学部の部員は即退部（クビ）に。」

当然、来年度以降も、桐ヶ丘中等部からの生徒の入部は認めない。

…さしあたって、こんなモンですか？」

撤回。

普通に考えなくとも、かなり我が儘な条件を、このグレイトでスーパーな？ゴールキーパーは突き付けてきた。

「ふっ…巫山戯ているのか、キミわっ!!？」

それを聞いた三鷹は、顔を真っ赤にして大声を出すのが、
「だって、当然でしょ？」

内部進学上がりって事は、俺達との直接的絡みは無かったとしても、当時のE組に対して、上等な態度を取ってきた奴等なのは、間違い無い。

そんな連中と仲良くチーム、やれると思います？

少なくとも、俺は全く思わない。

…て・ゆーか、ん、絶対に無理。」

練習云々は別として、部員云々の件に関しては、E組生徒からすれば、至極尤もな応えで返す響。

「くっ…仕方無い…。」

分かった…。

滲みた顔に、戸惑う渚。

「何か…用…?」

「アア!?」「ハアア?!」

そんな渚の問い掛けに、輩の様な口調で返す2人組。

「ンナノ決マツテンダロガ、コラ!?」

焦点が定まっていない印象な眼で、田中が渚に詰め寄る。

「ヲマエ、期末テスト、一切 解答スルナ。

全部、0点取レ。」

「え…?」

「え…?…?…ヂヤ、無エヨ!!」

ドウセ 才前、内部進学ノ権利持つテナインダカラ、関係無―ヂャネーカ!!」

「才前ガ素直ニ最下位ニナツタラ、誰モ内部進学ノ資格、無クナラナインダヨ!」

それは、如何に相手がE組だったとしても、余りにも理不尽過ぎる要求。

先の間試験、学年でワースト1&2だった2人は、理事長の爆弾発言による焦りと、榊原達を介しての、浅野による洗脳（しこみ）で、E組を地に平伏させる事しか考えられない…既に冷静な判断が不可能なレベルに迄達していた。

ついでに言えば、渚…E組の皆さんは一応は、期末試験の成績次第で、本校舎復帰の

権利を得られるので、全く関係無くもなかったりする。

「……………」

「聞イテンノカヨ!?!」

「巫山戯テンノカ? 殺スゾ!!」

グイ…

凄む顔でネクタイを掴み、その儘締め上げる田中。

ガンツ!!

「ぐええ?!」

「巫山戯てんのは どっちだ? コラ?」

その田中の頭上に、突如として墜ちる拳。

ドゴツ!

「ぎよえつ!?!」

「お前が死ぬか? ああん!?!」

そして高田の腹には、赤地に黒ラインのスニーカーが突き刺さる。

「て、寺坂君? 吉良君?」

その場に現れたのは、寺坂、吉田、村松、イトナ、そして響。

「き、きつきつきつ吉つ…?!」

「猿かつ?!」

拳骨と蹴りの衝撃（シヨック）、そして天敵（笑）の登場が原因なのか、眼から殺気が消え、洗脳が解けて正気に戻ったかな2人。

しかし、同時に絶体絶命的状況を理解、それ故のテンパった口調を、吉田と村松から突っ込まれる。

「でも、どうして？」

吉良君達、帰ったんじゃ…?」

「実は俺達、あのタコに、更なる追加（強制）講習、受けさせられてな。」

そして、正しく様式美（おやくそく）なタイミングの登場の解説をする寺坂達。

「…本当に、それが必要だったのは、実は寺坂だけだったが、1人残すのは可哀相だから、仕方無く付き合ってた。」

「喧しいわ!!」

「…で、それ終わった後、このメンツで駄弁りながら山降りてたらよ、最終的に『今からもんじゃ、食いに行こーぜ♪』って話になってよ。」

「駅に着いてみたら、何だか『渚きゅん、ピイツーンチ!!』な展開？」

「まあ、そーゆー訳だ。」

渚、お前も一緒に来るか?♪」

「あははは…お供します。」

渚、同行決定。

「んじや その前に、とりあえずコイツ等の処刑だな。」

「ひいっ!!」

パキパキ…

拳を、指を鳴らしながら、腰を抜かして　しゃがんでいる2人に死刑執行人（マニゴルド）の顔を見せる響。

「吉良く？今から何、食べに行くか分かってるよな〜？」

鳩尾（ボデー）は、止めとけよ〜？」

「らじやあ〜www」

学園祭明け、榊原制裁の際、浅野にリバース必至なりバブローを放ち、その場で”もんじやのタネ（笑）”を作らせた場面に居合わせていた、吉田が注意を投げ掛ける。

「ちよ…」

吉良君、僕は　もう、大丈夫だから！」

ここで渚が止めに入るが、

「何言ってるんだ、オメーわ!？」

此処でコイツ等潰しとかなないと、今度は茅野ちゃんや倉橋ちゃん、奥田さんや神崎さ

そんな彼等の前に絶望を与えるべく、獯猛な咆哮と共に天空より降り立ったのは、禍々しい程に凶悪な角と鉤爪と牙を備えたラスト問題：巨大な翼飛竜だった。



「ぐったり…」

「おい、お前達は効果音？をリアルに口に出すな。」

「アンタ達が、それだと、私等にも伝染するから！」

E組試験教室では、クラスの2凶問題児：もとい、2大エースが その台詞通りにぐったりと、机の天板に顔を埋めていた。

「いや、辛うじて…」

「殺ったって、手応えは有るんだけど…」

「ん。多分…殺れてる…って、思えたら、良いな…」

「『』『……………』『』『』」

強気だが弱気だか判らない発言に、動揺の色を隠せないE組の面々。

この2人が この有り様なのだから、当然、他の皆も、解けきれている筈も無く。

「問題エグいわ…」

「それでいて、数も有るわ…」

「まあ、ある程度は予想してたけど…」

素早い動きで、ヒット&アウェイでの攻撃を繰り返すこの妖猫に向け、戦鎚を振り回す吉田と二振りの短剣を振り翳す村松だが、その攻撃は掠りもせず。

ズバアッ！ x 2

『フニ、ヤー……ツツ?!?』

「っ!?」

だが、この吉田の攻撃を避けた直後、黒猫は大小2本の矢に射抜かれた。

「…素早い敵に対して、只 武器を、闇雲に振り回しても、駄目。」

「躲した先の動きを、見切るんだ。」

「お…応…」

駆け付けてきたのは、小型ボウガンを構えた速水と、巨弓を背負った千葉。

「来たわ…」

「…新手だ。」

「…!!」

この4人の前に、次なる問題（てき）が襲来する。

スチャ…

各々の武器を手に、構える吉田達。

『汝等に問う…』

光の反射によって、初めて その輪郭のみが視認出来る蝶が集団で、響達の周りを飛び回り、羽ばたきによって巻き散る鱗粉の毒素が身体の自由を奪い、更には剃刀の如く鋭い羽で、身を切り刻むかの様に纏わり憑く。

「くっ…流石は、五教科の中でも最強と謂われる家庭科様…」

攻撃が、えげつない、で・す・わああ…♪」

「そのネタは もう良い！」

「…ってゆるかアಂತタ!! 悦んでないか？」

五教科最強・家庭科”様”。

それは1学期期末試験時、寺坂組が殺せんせー触手破壊権利奪取の為に用いた奇策（ネタ）。

但し今は、それを自虐的に懐かしんでいる暇は無く。

ヒュン！

「ぐわっ!？」

「イトナっ!」「イトナ君!!」

不可視蝶で動きを封じられたイトナに、黒き妖女が振り降ろす巨大な処刑鎌が襲い掛かった。

家庭科様が本当に最強かどうかは さて置き、それこそ2ヶ月前の中間試験…響の喉

元に膝を食い込ませ斃した、数学最終問題にも匹敵な厳しい責め…その前に、イトナが倒れてしまう。

「吉良つち君！」

律さん（本物）から話は聞いてるわ!!

今回の期末、クラス全員が50位以内を狙ってるって!

確かに この家庭科（きょうか）は、学年ランキングの採点枠の外だけど…」

薙刀で不可視の蝶を振り払いながら、2学期中間試験、学年17位だった偽律が響に話し掛ける。

バシィッ!

「…幾ら、メイン教科でないからと言って手を抜いて、彼方の皆さんに、花を持たせなくても好いんでなくて?」

そして身体から雷を発生させ、周囲の蝶を焼き落とした。

「…確かに!」

ニヨキ…パサ…パタパタ!

そして それに、響も同調。

正直、今回はメイン5教科以外は適度に流す心算だった響だが、律（偽）の言葉に、テストに対する、心構えを少し変更する。

但し それは、本校舎勢に：特に、浅野に対する、嫌がらせ的な意味合いであるが。
パサアツ……!

「本気出すぜえー………っ!!」

「ま、っ??」

ドガガガガガガガガガガガ!!

制服のブレザーとカッターシャツ、そしてアンダーシャツを脱ぎ捨て、本気モードとなった響が、両手に持っていた旋棍（トンファー）での、大振りと小刻みのコンビネーション連打で、周囲の蝶を全て叩き墜とした。

その際、両手を朱に染めた頬に添え、凄く嬉しそうに、且つ艶やかな表情をした少女が、その様をガン見していたのは、別の話。

ズシャツ!

「うおっ!」

不可視の蝶を掃討した響に、妖女：或いは魔女か、そんな形容が相応しい、家庭科ラスト問題が、両手で携えた大鎌で襲い掛かってきた。

白銀の蛇が巻き付いたかの装飾が施された黒鋼の長い柄に、鈍い光を放つ黒刃。

その振り下ろされた凶刃を、響はトンファーのクロスガードで受け止める。

「ぬわわ……な、何ちゆうパワーだよ!」

『……………』

グイグイ…

しかし、その華奢な容姿からは想像出来ないパワーで、響のガードを押し潰そうとする黒衣の魔女。

「吉良っち君！」

「り、律（偽）う、家庭科（コイツ）、俺が引き留めとくから、トドメ、刺せないか？」

処刑鎌とトンファーでの力比べをしながら、響は律（偽）に攻撃を要請。

「…そ、その位置だと、諸共になっちゃいますが？」

攻撃方法は確かに有る。

しかし それは響も巻き込んでしまう為に躊躇している律（偽）だが、

「…構わん、殺れ。」

「い、イトナあああああつ!!？」

斃れていたイトナが上体を起こし、（巻き込まれる本人の意見は無視で）それを後押し。

「ん…！」

パサツ…

その言葉を背に、律（偽）は律（本物）と同型の桃色のウィッグを外し、本来の黒髪

ポニーテールを露わにすると、着ていた櫛ヶ丘の制服も、瞬く間に白小袖緋袴に換装。

「ちよ……待て……」

ス……

テンパる響を余所に、律（偽）は右掌を前方に差し出すと、

「……雷光よおおつ!!♪」

カツ……!!

『……!?!?』

「あばばばばばば!!?!」

その掌から、煌めき迸る雷光を放出、家庭科ラスト問題、そして響に直撃させた。

「あらあらあら?」

吉良つち君、大丈夫ですか?」

「……………」

結果、家庭科ラスト問題は、その場から姿を消した。

……が、その際の、雷光を放った時の律（偽）の顔。

それを見ていた響とイトナは、それが物凄く嬉しそうにしていた満面の笑みだったの

は気のせいだった…と、自身に言い聞かせていたとか。



「ちーん…」

「だ・か・ら、効果音をリアルに口にするなつての…」

4時限目の後の昼休み、机に甲垂れ込み、”あしたの〇、ヨー”な如く真つ白になっている、問題児コンビに突っ込むのは木村である。

「重傷ね…」

「ま…まあ、他のクラスだつて、条件は一緒ですから…ですよね？」

「ん…1時限目の後、チラッとA組、覗いてきたけどさ…」

「クツククク…」

そおりや もう、滾つてたわよく？」

「朝と違つて私達が廊下、歩いてるの眼中無いのか全然気付かないのか…」

全員が狂つたかのように、机の前で集中して何かブツブツ言つてた。

憎悪つて…あんなにも潜在能力（チカラ）、引き出せるんだ…つて感じ？」

「「「「「「……………」」」」」」



【社会】

2 学期期末試験、初日終了。



期末の時間 ～2学期～②



キーンコーンカーンコーン…

期末試験2日目。

5時限目の始まりを、つまり、最後の試験の開始を告げる予鈴が鳴った。

「次がラスト…ね…

ねえタコ?

あのコ達、本当に大丈夫なの?」

「ヌルフッフッフ…

心配ですか、イリーナ先生?

本当の教師みたいですよ?」

「な…!?!

ベベ、別に私は唯単に、一応はこの私だって、随分と世話焼いてやったのだから…だから、きっちりと結果を出してくれないと、色々と面倒見てやった甲斐が無いって…唯、それだけよ!!」

「ヌルフッフッフッフ…そーですか〜？」

それじゃ、そういう事に、しておいてあげますよ〜♪」

「…殺す！」

それは、旧校舎の校庭から本校舎を見下ろす、とある2人の遣り取り。



【数学】

「な、なんじゃあ ありやあ〜!?」

「漸化式…だと…!?」

「中学校のテストなんかで、出す問題じゃあ無あ〜いい!!」

「集中しろ！」

少しでも気を緩めると、意識を全部、持って逝かれるぞ!!」

2学期期末試験、その最後の科目である数学。

地中より沸き出てきた、黒い甲冑を纏った鬪體（きそもんだい）の大軍を退け、続げざまに襲い掛かってきた、三首の巨大犬を全員で取り囲んでの全方位集中攻撃で攻略したE組の面々。

『……………。』

そんな彼等の前に、次に現れたのは黒のローブを纏い、片や金の髪に金の瞳、片や銀

ズドドドツ!

『!!?』

「『『『『へ!?!』』』』』」

更に次の瞬間、その場の地面が輝割れたかと思えば巨大な穴が空き、2柱は其の儘、その穴に落ちてしまう。

『?!?!』

網で動きを封じられ、追い討ちの落とし穴のトラップ。

何が起きたのか判らず、先程迄の達観していたかの表情が嘘の様に、2柱は動揺、慌てふためいた顔を覗かせる。

スタ…

「先週、殺り方教えたる♪?」

「それ、特殊解に持つてくんだよ。」

「『『カルマあ?』』』」

「『『吉良君!』』』」

投網に捕らわれ穴に落ち、身動き適わず雁字搦めになり もがいている双子神の頭上を踏みつける様に立ち現れたのは、鶴嘴とスコップを片手に担いだカルマと響。

「基礎問題は兎も角…」

「さあて……♪」

「どーやって、」

「……仕留めて殺るかな？」

3人に絞られていた。

『……………』

病的な迄に白い肌、艶のある長い黒髪、闇よりも暗く深く、だが澄みきっていると云う、相反する形容が似合う黒い瞳。

禍々しく、且つ神々しく煌めく漆黒の甲冑を纏った美丈夫……

それは正しく、冥府の神を連想させる。

この数学最終問題が、腰に携えていた……鞘や柄は勿論の事、刀身すら鋭く光る黒で統一された剣を抜き、己に立ち向かう者達全員に向けて、その漆黒の刃を振り翳した。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

1辺aの立方体が規則正しく周期的に重なり並び、其の各頂点と中心に原子が位置する結晶構造を”体心立方格子構造”という。

Fr (フランシウム) やCs (セシウム) 等、アルカリ金属の多くは“体心立方格子構造”をとる。

この“体心立方格子構造”において、ある原子A₀に刮目した時、a空間内の全ての点の内、他のどの原子よりもA₀に近い点の集合が創る領域をX₀とする。

この時のX₀の体積を求めよ。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「「「「「「「「!!?」」」」」」

「な…!?!」／「ぬ?」／「これはっ?!」

剣が振り抜かれた…即ち出題された瞬間、最終問題に立ち向かっていた者達全てが各自、推定5辺四方の立方体(はこ)の中に閉じ込められた。

ボウツ

そして箱の内部、床と天井の四角に火が灯ったかと思えば、其れ等は青い血管が血走る邪眼へと変貌する。

ビッ!!

「ひえっ!?!」

その8つの邪眼が、箱の内部中央に立つ生徒を凝視、光弾の一生射撃。

「ええい、冗談でわ無い!!」

「何なのよ、一体?!」

「もく、訳解んないんですけど!!」

それに対して大半の生徒達は、自身が手に持っていた光子銃の弾丸で相殺するか、光盾（シールド）を展開し、防ぐしか術が無く…反撃出来る隙間を見いだせなかった。

…そう、『大半の生徒達』は。



「……………」。

『原子』とか『体心立法格子構造』とか、そんな余計な言葉に惑わされては、騙されてはいけない。」

「問題の要点その物は、至って簡単（シンプル）なんだよね〜♪。」

「八方を邪眼（てき）に囲まれた この箱（なか）での…」

「二現状での、敵の攻撃と己の防衛との境界線内側…」

い代わりに、それは向こうも同じ。

つまり、現状は50:50(ヒイフティ・ヒイフティ)!!

はは::はははははははははははは!

何だ、凄く簡単じゃん!

難しい数式なんて、要らないじゃん!!

「答え。【2分の α 乃3乗】:と。」

パリン:

その瞬間、カルマを閉じ込めていた立方体(へや)が、音を立てて崩れて消える。

タタツ:

そして間髪入れず、場内に立つ、最終問題本体に、解放されたカルマが飛び込む。

ヴオオン:

「そおくれつとおー!♪」

ドスツ!

『!!』

!! 光子ライフルの弾丸エネルギーを全放出、刃状に安定させ、その光の剣で、漆黒の甲

冑を纏った冥府の神の胸元を貫いた。

キーンコーンコーンコーン…

「其処迄!!」

「くっ…」／「ちいつ…!!」

そして、死闘（しけん）終了を告げる鐘（チャイム）が鳴った。

「浅野君…終わりだよ…」

「くそ…」

「吉良、終了だ！鉛筆（ペン）を止めろ!!」

「ちい…あと、一行…!!」

「…分かっていたのに…!!」

数学最終問題

赤羽業 20／20点

吉良響 15／20点

浅野学秀 13／20点

???? 20／20点

「「「「はあああああ!?!?!」」」」

カルマに同調する意見が1つ。

その意見其の物でなく、その意見を発した人物に、その場全員が驚きの声を上げた。

「テメー等、驚き過ぎだ（怒）!!」

「いや、でもよう、寺坂あ…」

それは寺坂龍馬。

「参考迄に、答えは？」

「2分の α 乃3乗。」

「ん。正解♪。」

「カルマ君？」

そしてカルマが、寺坂の出した答えを、正解だと支持。

「まあ、アレは直感とか閃きとか、そーゆーのが有ったのが良かったかもね。」

その点、そーゆー意味じゃ、寺坂みたいな単純なヤツのが、有利だったんだよ。」

「た…単純とわ何だ!!? テメーツ！」

「ちよ…誉めてんだけど?!」

ガタツ…

「……………。」

理事長の時間

V^V^V^V

【2学期期末テスト・トップ50】

☆1位	赤羽 業	500点
☆2位	吉良 響	495点
3位	浅野 学秀	493点
☆4位	竹林 考太郎	488点
☆5位	磯貝 悠馬	478点
☆6位	片岡 メグ	467点
7位	諸星 段	462点
☆7位	自律	462点
☆9位	神崎 有希子	461点
☆10位	潮田 渚	455点
☆10位	中村 莉桜	455点

☆ 2 8 位	☆ 2 7 位	☆ 2 6 位	☆ 2 5 位	☆ 2 4 位	☆ 2 3 位	☆ 2 2 位	☆ 2 2 位	☆ 2 0 位	☆ 1 9 位	☆ 1 8 位	☆ 1 7 位	☆ 1 5 位	☆ 1 5 位	☆ 1 4 位	☆ 1 3 位	☆ 1 0 位
不破	狭間	天羽	倉橋	茅野	速水	村松	荒木	三村	榊原	小山	進藤	千葉	志場	赤目	東郷	奥田
優月	綺羅々	時貞	陽菜乃	カエデ	凜花	拓哉	鉄平	航輝	蓮	夏彦	一孝	龍之介	由紀	恵	十三	愛美
3 8 0 点	3 9 2 点	3 9 3 点	3 9 5 点	3 9 9 点	4 0 4 点	4 0 5 点	4 0 7 点	4 1 0 点	4 1 2 点	4 1 5 点	4 1 8 点	4 2 6 点	4 2 6 点	4 3 9 点	4 4 1 点	4 5 5 点

			☆ 2 9 位	広島	ケン	3 7 8 点
		☆ 3 0 位	堀部	糸成	3 7 6 点	
		3 1 位	掛布	ランダイバー	3 7 4 点	
	☆ 3 2 位	矢田	桃花	3 7 3 点		
	☆ 3 3 位	木村	正義	3 7 2 点		
	☆ 3 4 位	原	寿美鈴	3 7 0 点		
	3 5 位	七志乃	権兵衛	3 6 7 点		
	☆ 3 5 位	菅谷	創介	3 6 5 点		
	☆ 3 7 位	櫻瀬	園美	3 6 4 点		
	☆ 3 8 位	岡島	大河	3 6 3 点		
	☆ 3 9 位	吉田	大成	3 6 1 点		
	☆ 4 0 位	前原	陽斗	3 5 9 点		
	☆ 4 1 位	杉野	友人	3 5 7 点		
	4 2 位	属	修人	3 5 4 点		
	☆ 4 3 位	岡野	ひなた	3 5 1 点		
	4 4 位	獅子雄	実琴	3 4 8 点		
	4 5 位	魏利	誠富	3 4 7 点		

それを理解、確認した瞬間、教室が歓喜に包まれる。

「全員、50位以内、達成したよお!!」

「上位争いも、浅野以外は五英傑を完全に抑えての圧勝だ!」

「そしてカルマが1位に!」

「どーよ?カルマ?」

「ん、正直1位ってより、吉良つちに勝てた…ってのが、凄く嬉しいかも?」

「そりゃ良かったな!

因みに俺は、凄く悔しいぞ!」

「きーちゃん、遂にトツプ陥落♪」

特にカルマは感無量な表情を浮かべ、逆に響は若干な凹み顔。

「因みに…」

「殺せんせー?」

「トツプ3の勝敗の分かれ目は、数学の最終問題だそうです。」

「あー…」

「あれ、ね…orz」

ガクツ…

「…「き、吉良あ?!」」

君ん?!」

》》》

「「やったぜ!寺坂あつ!!」

ぺしぺし…

「あ痛たた…痛えよ、吉良…w」

教室内の お祭り騒ぎは終わらない。

響他数名の手荒い祝福に、笑い、喜び、照れながらも、地味に本気で痛がる寺坂。

ドガツ!ベキツ!ガンツ!

そして それでも お構い無し、遠慮も容赦も躊躇無く、叩き続ける響。

バキツ!ゴンツ!ドンツ!

「吉いっ良あつ!

痛えつつてんだろーが!ごる、ああ、っ!!!」

「ぎゃばー………っ!!?」

怒りの寺坂が、響をセントエレモスファイヤー(※後書き参照)に捕らえ、メ上げる。

ガラ…

「「「「「!!?」」」」」

その最中、不意に教室の扉が開いた。

教室内に入ってきたのは、桐ヶ丘学園理事長、浅野學峰。

「何の用で……？」

静まり返る教室。

先程迄のお祭り騒ぎを一瞬にして鎮めた男の登場に、警戒を露わにした表情で、殺せんせーが問う。

生徒達も……響も、寺坂の拷問技から抜け出し、この来訪者を猜疑の目で刮目。

「いや、そんなに慎重にならずとも。」

今回は本当に、決して悪い話で来た訳ではありませんよ。」

「「「「「「………。」」」」」」

やれやれ、本当に信用が無いですね……

生徒達の視線に、そう言いた気な苦笑を浮かべ、理事長は生徒達に顔を向け、話を続ける。

「率直に質問します。」

E組の皆さん、君達は、本校舎に戻る気は有りませんか？」

「「「「えええっ?!!」」」」

いきなりの質問に、驚く生徒達。

「…理事長先生、今度は一体、何を企んでいるのですか?」

未だ警戒を弛めない担任教師に、浅野は笑顔で言う。

「いえ…、純粹にね、本当は認めたくはありませんが、純粹な敗北宣言ですよ。」

「え?」「へ?」「は?」

.....

「「「「えっ、ええー……っ」」」」

!!!???

教室内の皆が、驚きの声を上げる。

当然である。

浅野理事長が…あ・の・浅野學峰理事長が、柵ヶ丘の最高権力者が、自らの負けを認める旨を伝える為に、わざわざ山を登り、旧校舎のE組を訪ねに来たと云うのだ。

「…今回の期末試験、ENDの象徴である筈のE組の君達は見事 全員、トップ50圏内にランクインした。」

皆さん御存知の通り、3学期の中間、期末試験はエスカレーター進学の本校舎と、その権利を持たないE組は、別々の試験問題となる。

即ち、本校舎の生徒達との、学力を直接に競う対決は実質、君達の勝ち逃げだ。

最後に赤羽君に その座を渡したが、吉良君が1学期中間から ずっとトップを獲っていたので、これは もう、E組の完全勝利と言っても良いだろう。

流石に その事実には、背を向ける訳には いかないからね。」

「……………」

理事長の言葉を、無言で聞き入る生徒達。

「既にE組の”E”は、『END』の”E”から、『ELITE』の”E”へ変わったと、認めざるを得ない。」

だからこそ、こんな足の便の悪い山の上でなく、本校舎で授業を受けないかと聞いてるんだ。

勿論、今迄にE組に強いられていた、差別待遇等は無い。」

「……………」

「理事長先生?」

「ん？吉良君？」

理事長の語りに生徒達が黙る中、響が口を開いた。

「…何て言えば良いか…俺には今のE組を認めているって言うの、それに嘘は感じられないんですが、正直、まだ違和感みたいなのが有るんですよ。

何か、隠してるってか、その負けを認める事になった経緯みたいなの、省略してますよね？」

単に、いきなりな掌返しじゃ、皆も素直に、YESもNOも、答えられませんよ？」

「ははは…敵わないな…。」

良いだろう。これは正直、余り語りたくはないが、君達を納得させる為には、仕方無いか…。」

響の問い掛けに、にこやかに笑いながら、理事長は喋り続けた。

「殺せんせーなら、納得は兎も角、理解出来ると思いますが、私は…というか、大人と云う生き物はね、悪く言えば卑怯、良く言えば強かなんだよ。」

「「「「「」」」」」」

「又ルフ…。」

この言葉に再び、疑問符を撒き散らす生徒達。

対して殺せんせーは、理事長が何が言いたいのか、悟った顔を見せる。

「元々 君達の殆どは、成績不振が理由で、このクラスに墮とされた訳だ。」
「[[[[[:!?!]]]]」

「特別強化教室…通称・ENDのE組。」

建て前は成績が芳しくない生徒を一纏めにして、1人の教諭が集中的に教鞭を執り、成績の向上を計る為に編成されたクラス。

そして その実態は、残った本校舎の生徒達に優越意識を与える為、同時に『明日は我が身』という危機感を抱かせ、学力のアップを進める為の生贄…と、此処迄は、今更の説明は要らないか。」

「[[[[[:!?!]]]]」

「しかし、今年度に限っては、担任を始めとする先生方の指導が良かったのか、その当初の建て前に付随した結果と なってしまった。」

さて、この先が本題だ。

君達は確かに、私が理想とした、少数を生贄とし、多人数にエリート意識を持たせて大成させると言う教育理念からすれば、造反に値する存在だ。

しかし最初に言った、建て前からすれば、どうだい？

どん底から這い上がり、トップを獲った。

君達は、E組の意義を実証させた、成功例となるんだ。

確かに君達の成績アップは、殺せんせー達の力も有ったと思う。

しかし、私は生徒の成功は、教師の手柄ではなく、最終的には生徒自身の努力の結果だと思っっているんだ。

それが自主的、強制と関係無くね。

逆に、生徒の失敗は、それは全て、生徒を指導していた教師の責任だと思っっている。

つまり、今回の浅野“君”を始めとする、A組の…A組だけじゃない、本校舎の生徒の敗北は全て、彼等に教鞭を揮っていた教師に…それは最終的には、その者達を統べる私に、責任が有る事になる。

私の指導が、君達の努力に勝てなかった…

それが、私が敗北を認めた理由だよ。

だが、それと同時に結果的に、私が組み上げた、特別強化クラス・E組というシステムは、間違っではないなかった事になる…。

…どうだい？

此処迄話せば、いきなりの掌返しも納得して貰えるんじゃないかな？」

（（（（（本当に強かってか卑怯！

そして、台詞が長い!!）））））

とりあえず、動機、経緯は どうであれ、他意は無い事だけは理解したE組一同。

「…でも、だったら…」

そして、この場で片岡が口を開く。

「仮に私達が、本校舎で授業を受けるとしたら、担任の先生は…担任だけじゃない、授業は、誰が教える事になるんですか？」

この質問に対して理事長は、

「流石に本校舎に殺せんせーを迎える訳には往かない。

当然、3年生の学科担当で担任クラスを持つていない先生に任せる事になります。

授業の方も他のクラスと同様に、各教科担当の先生方が教える事になりますね。」

と応える。

そして それを聞いたE組一同は、本校舎回帰の誘いに対する答えを、全員一致で即答した。

》》》》

「まあ、実を言えば、最初から そう答えられるのは分かっていますけど…」

確かに本校舎の先生方では、今の君達の学力の維持、そして今より上に引き上げる事は難しいだろうからね。」

少しだけ残念そうな顔で、理事長は話す。

「とりあえず、今回の期末試験の結果により、元来のE組の差別待遇は取り除く事にしま

す。

それと…私の権限で、E組生徒の高等部へのエスカレーター進学を認めます。

尤も、既にウチ以外の学校に標準を合わせている人が多いみたいだから、無意味だろうがね。」

「いえ、俺は その権利、使わせて貰いますよ。」

「俺も〜♪」

外部受験で櫛ヶ丘を受ける予定でいた2人が名乗りを上げた。

》》》》

「それとから…一応、言っておくか…」

一通り、伝えたい事を伝え、確認したかった事を確認した理事長。

教室を去ろうと扉を開けた後、今一度、生徒達に顔を向けて話し掛けた。

「さっきも言ったが、今回は素直に負けを認めるが、自分が間違っていたとは思ってはいない。」

事実、君達がトップ圏を獲ったとは云え、試験の点数自体は前回の中間試験と比べても全体的に…一部の生徒を除けば、かなり高かったんだ。

彼等も また、君達に、E組に負けまいと必死だったんだよ。

その事だけでも、君達の様な存在の必要性が証明された事になる。

学力アップは生徒の努力の結果、教師の手柄では無いと言ったが、全体的な それは、最終的には学校経営者の評価には繋がるからね。」

((何て卑怯な解釈なんだ!?!))

「…そう、君達の様なポジションは必要。」

『あんな風には なりたくない』『明日は我が身』と思わせ、緊張感を持たせる為の生贄な存在は、絶対に必要なんだ。

今回は、それを私自身にも、改めて教えてくれた。」

「……………」

その言葉を最後に、理事長は山を降りて行った。

演劇の時間

「さて…改めて皆さんに問いますが…」

期末試験結果発表からの理事長来訪、そして その理事長の口からでた敗北宣言…

朝からイベント盛り沢山だった、この日の放課後の教室、生徒一同と烏間、そしイリーナが、殺せんせー注目していた。

「朝の理事長先生の呼び掛けにも、”否”で応えていた訳ですが、皆さん本当に、この山を降りると言う人は居ないのですね？」

この質問に対し、生徒一同は不敵な笑みを浮かべ、

「今更つしよ？」

「第2の刃の証明、したばつかだし？」

「…後は、殺るだけ。」

「…いつからでしょ？この教室。」

シャキ…

ナイフに拳銃にライフルにグローブ…

それぞれが それぞれの得意な得物を構えての、改めての暗殺宣言。

「……………」

この返事に、烏間とイリーナも、無言で満足気な顔を浮かべている。

「ヌルフフフフ…宜しい！」

良い答え、良い覚悟です!!

それでは今回の褒美に、先生の最大の弱点を教えてあげましょう！」

「「「弱点?」」」

「…!」!!?」

オレンジの顔に、大きな○（まる）を浮かべ微笑む殺せんせー。

”弱点”と云う言葉。

この言葉に、生徒だけでなく、烏間とイリーナも、眼の色を変えて、殺せんせーに注目する。

「きよぬーに弱いか? ん。知ってるし。」

「…乗り物に弱い。」

「水。」

「あと、怖い話に弱いよね。」

「基本、チキンだよな。」

「存在を公に出来ない国家機密の分際で、世間体を気にするし。」

「…失態だね、浅野君。」

「……………!!」

「荒木君達と連携で、3年生全員にテコ入れしようとしたのだけは、誉めても良いけどね
…

その方向が間違っていた。

結果論だが、他者…E組を潰す事は忘れ、自分自身を高める様に、洗脳（ちようきよ
う）すべきだったね？

そうすれば、もう少し違う結果になっていたかも知れない。」

理事長・浅野學峯と生徒会長・浅野学秀とのOHANASHIが行われていた。

「殺意によるドーピング？」

まあ、それ其の物は、間違っではないない。

…でもね、それをするなら一夜潰けでなく、もっと早くから…そう、それこそ4月か
ら執り行うべきだった。」

…そう、彼達のように…ね。

「君は兎も角、荒木君や榊原君達の順位の大幅ダウン…

それ自体が、君の執った方法が間違っている証明だよ。」
「……………!!」

これは進藤や掛布等、今回の浅野の呼び掛けを拒否して、講習に参加しなかった者が上位に立っている結果が、それを裏付けている。

進藤に至っては、五英傑より上位だ。

そしてE組最下位の寺坂が46位という成績を収め、単純に3年生180人中、134人が、内部進学の権利を失った事実。

荒木達に施した浅野の洗脳（しこみ）。

そして荒木達を通じて、間接的に本校舎3年に施した浅野の洗脳（しこみ）其の物が、失敗だったのは明らかだった。

しかも、寺坂より上位だった本校舎生徒の内の約半数が、部活（スポーツ）関連等の理由で、他校受験する考えを既に、各人が進路相談の席で示している。

結果、今期の3年生で内部進学する者は、10名にも満たなくなつた。

「既に、ホームページで外部受験の定員大幅拡大は、報せている。

来年の入試、都内は基より、他県からの志望者も、普段以上に沢山集まるだろうからね。

尚更、倍率も高くなるだろう。

ウチの3年生も一緒に受験するとして、果たして何人、合格出来るかな？」

「……………つ!!？」

それは、現状で浅野の”手駒”となる人材が、かなり減ってしまうという事。

進学後、直ぐに生徒会選挙に立候補して、高等部掌握を計画していた浅野にとつては、大きな打撃となる。

普通に考えれば、エスカレーター進学と同級生の票、実質的に全体の約1/3は確保、それだけで当選は、ほぼ確実だったであろう。

しかし、それが無くなった今、外からの同級生を選挙迄に懐柔出来るかとなると、流石に疑問符が付くし、2年3年生は尚の事、如何に理事長の身内だからとて、簡単に入学したての1年生に票を投じるのは、想像に難しい。

浅野の高校支配構想は、入学前：中学卒業前から頓挫してしまっていた。

「まあ、良いよ。」

君には、もう、何も期待しない。

下がって宜しい。」

「…お咎めは、無いのですか？」

「生徒（こども）の失敗は、教師（おとな）に責任が有るんだよ。」

大丈夫。君は、何も、しなくても良い。

「肴かよっ!？」

「これって、差別じゃないの?」

「いや…それは、その…」

あらゆる方面に、不満たらつたらなE組の皆さん。

特に、演じる時間帯について文句が続出した時、それを遮ぎしたのは、会議に出席したクラス委員長の磯貝。

「はああ? くじ引きい?!」

「肝心な時に、ボンビースキル、発動させてんな!」

「いや、悪かった…って、ほ、ボンビースキルって何だよ!？」

「どうやら磯貝の”持ってなき”が、原因だった様だ。

「まあ、くじ引きなら仕方無いじゃん。」

「それよりか、何を演るか、皆で話し合おうよ?」

「カルマ…渚…」

~~~~~

「ふっふっふ…」

メシ時にE組（オレラ）に当たったの、後悔させてやろうぜ…

なあ、狭間さん?」

「クククク…任せときな、吉良。

食欲喪せる程な、スプラッターな脚本（はなし）、書いてやるよ…」

「「「お前等は お前等で、結構、混ぜると危険」だな!？」

いいぞ、もつと殺れ!」「」

この新たに発掘された、凶コンビの意見に皆が賛同する中、一部からは反対意見もちらほら。

「いや、そーゆー嫌がらせみないのは、折角1年2年中心に上がってきた好感度、下げたりするから止めたのが良いかも?」

「そそそ、そうですね、皆さん!」

早まつちや駄目です!!

もつと中学生らしく、健全にですな…」

それは沖縄での肝試しの時、初めて自身がホラー・オカルト系が苦手なのを自覚した中村と、何時の間にか話し合いに参加していた、やっぱしホラー系が苦手な担任のヘタレタコ。

そして、

「「「」、怖いのだメ!絶対!!」

まるで原発反対デモや、某県の軍事基地への、新鋭機体導入反対のデモな皆さんの如







とあるゲームソフト会社の、プログラム担当の1人である。

現在、社内の壁……はい此処で、セツトの右上に、注目！

……社内の壁に大きく、【目指せ！今度こそ、ク○ゲー オブ ザ イヤー大賞受賞回避  
！】と書かれた貼り紙を正面にして、彼女が中心となつて制作した、新作のホラー系ア  
クションRPGのバグ消去……デバッグ作業、そして違法コピー対応プログラム導入の、  
真つ最中なのであつたー！』

♪ててててて！ててててて！てててて！♪

》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》

カタカタカタカタカタカタ……

「はあ……」

何か、どつと疲れた様な顔で、パソコン操作している片お……もとい、克己。

先程のナレーションの、実際、リアルで起きた出来事をアレンジして語られたアドリ  
ブに、かなりダメージを受けている様だ。

「……………」

「ん？」

デバッグ作業中、彼女は画面に、不意に人影が写るのを見た。

しかし彼女は、それを気にする事無く、作業を続ける。

夜遅くだが、ゲームソフト会社なら、この時間帯に事務所に戻る者が居ても不思議は無く、誰か同僚が、外から戻ってきて、それが写ったのだろう、その程度の認識でしかなかった。

実際に その場には、何処から途もなく現れた、おおよそ現代の日本人とは思えない、時代離れた黒装束を纏った銀髪の男が、無言で彼女の背後に立っていたのだが。

しかし克己は、その存在に気付いてなく。

「ふう〜バグ消去、終わり！」

次は、違法コピー対策ね。」

カタカタカタカタカタカタ……

そして続けて、次の作業へ移行。

「……………」

そして銀髪の男は、更に足音立って彼女に近付き、画面を覗き込む。  
必然的に、はつきりと男の顔は、画面に写ってしまい……

「……!?!?」

初めて、男の存在に気付いた克己。

不法侵入者な見知らぬ男。

驚きの余りに……余りも驚き過ぎたからこそ、逆に悲鳴も出せず、固まってしまふ。

「……………」

「あ、アナタ、誰…なの？」

それでも声を振り絞り、無言で目の前に立つ、正体不明の男に、克己は尋ねると、  
「分からないかい…ほらあ、俺だよお…」

「アンタが散々、バグだつて言つてえ…」

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何ども

「え!? その格好…」

まさかアナタ、AKIRA…

「そうさあ!俺だよおお!

A・K I・R A…だ、よおおおっ!!」

バサアツ…

AKIRAと名乗った男は、その証明な心算なのか、黒装束の上着を肌けると、鍛え絞られた筋肉の鎧の様な…全身、大きく深い傷だらけの、血塗れの上半身を、克己の前で晒した。

「ひいいいっ!!?」

血塗れ傷らけの身体に戦慄したのか、見慣れぬ筋肉（おとこのはだか）に、どん引いたのか、上擦った声を、克己は上げる。

「あああ……う嘘、嘘よ！」

A K I R A 　あくまでもゲームキャラなのよ！

リアルに居る訳、無いじゃないのよっ!!?」椅子から滑り落ちるが、腰を抜かしたのか立ち上がる事無く、尻餅を搗いた儘で後退りする克己に、自称A K I R Aは　ゆつくりと歩を進め、距離を詰める。

「さあ?それは俺にも分からない。」

ただ、分かっているのは、俺はアンタによつて、消された存在だと云う事だけ。

……だ・か・ら・この場へ……

この場へと　やつて来たんだよおっ!!」

「き……きやあああああああああっ!!?」

ここで舞台は、暗闇に包まれ、少しの間が置かれて、アナウンスが流れる。

『翌朝、このオフィスで、彼女は首を喪った姿で発見された。』



『あれから少しの時が、流れました。』

件のゲームソフトは、その後 社内で色々と有りましたが、無事に発売されました。

出処は不明ですが、世間では“彼女”の噂に脚が付き色が憑き、このソフト会社は、元から ある方面からすれば、ユーザーの間で かなり有名だったのですが、今回は尚の事 話題作となり、発売前から予約殺到、爆発的な売り上げを叩いたとか。』

カチャ：

『あ、この部屋の主である、少年が帰ってきた様ですね。』

早速テレビを点け、ゲームをプレイするみたいです。』

パツ：

このタイミングで、舞台左半分にも照明が点いた。

古城の内部の様なセット、野獣の呻き声の様なBGMの中、対峙しているのは両の手にナイフを逆手で持った、忍者（くノ一）っぽい服装の髪の短い少女と、大剣を両手持ちで構える、銀髪黒装束の男。

♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪

急遽、BGMがサーカス等で お馴染みな“剣の舞”にチェンジすると同時に、黒装束が少女に向けて突進、一刀両断するが如くな大剣の振り降ろし。

それを少女は、バク転しながら後方へと躲すと、今度は身体を流れる様に回転させて

の、連続の斬り込みを繰り返すが、黒装束はコレを、大剣で巧みに捌く。

そして次は、黒装束のターン。

足元を狙った、床スレスレの水平な斬撃を、少女はジャンプで避けると、その儘 空中での二段蹴りに移行。

パシッ：

その二段目の蹴りが、黒装束の大剣を弾き落とすが直後、この銀髪男は意に介さぬ様に、大振りな右の裏拳を繰り返した。

これを少女は着地と同時に、再度のバク転で後方へ回避。

この後も、両者は互いの攻撃を捌き躲すの攻防を繰り返す。

バスイッ！

少女の突き上げる様なハイキックと、黒装束の身を旋回させての手刀が ぶつかり合い、直後に両者はバックステップで距離を空ける。

「……………」

そして互いが間合いの外、睨み合い牽制し合うかの様に、戦闘体勢を取り直した。

「……………」



その儘 両者は、まるで凍りついた様に、動かなくなった。

「あら？ またフリーズしやがったか？

マジにバグの多い会社だな！」

カチカチカチカチ：

動かなくなったゲーム画面を見ながら、コントローラーのボタンを無差別に押し、少年は眩く。

パチ：

ここで舞台全体の証明が落ち、ゲーム少年一人に、スポットライトが当てられる。

その少年の背後、

「そういう仕様よ……」

「????」

びっくうう……！

不意に耳元で囁く女の声。

驚きの余り、少年は思いつきり、肩を跳ね上げてしまう。

「“そういうソフト”で、ある程度ゲームを進めていくと、トラップが作動する様にプログラミングされてるの。」

「……??」

恐る恐る…アニメ等で よく表現される、”ギギギ…”と云う効果音が よく似合う、ぎこちないスローな動作で、声が聞こえる後方に首を向けてみると、

「違法コピーしたりしちや、駄目じゃない？」

「……?!？」

そこに、少年の目線の高さ位置に、髪の毛の長い女…克己が首”だけ”の姿で現れ、ここにやかに微笑みかけた。

「キミ、ウチの会社のゲーム、違法コピーしちや駄目じゃない？」

私と少しだけ、O・H A・N A・S H I…

…しようか？」

「う…うわあああああああつ?!？」

♪ででででででででででででででででんでん!!♪

スウ…

舞台は再び、真つ暗闇と静寂に包まれた。

パツ…

暫くの間、その後、舞台中央に、少年の首”だけ”が浮かび上がり、

「……………（ニタア）♪」

客席に向かい、静かに微笑んだ。

目元は長く垂れた前髪で隠され、口元が緩むだけなのが、却って不気味だ。

そして数秒後、その少年の首が音も無く暗闇に溶ける様に消え、入れ替わる様に、首だけの克己が姿を見せ、客席に微笑みかけ話し掛ける。

「ゲームソフト等の違法コピー、絶対に駄目。

彼みたいになりたくないなら…ね？

追伸。

今夜、アナタの下へ、伺います、まる」

♪来るう…きつと来るう…きつと来る♪

そしてライトが消え、幕は降りた。



「「「「「「………。」「」」」」しーん…

静寂に包まれた観客席。

元来、この時間帯は食事時間。

箸を持った手もフリーズしており、

「( )…」「( )…」「( )…」

「「「「「怖いわっ!!」「」」」」

「メシ時の出しもんじゃねー!!」

「食欲、無くなったじゃないのよ!!」

「…でも、戦闘のアクションは、凄く良かったぞ!」

ぶーぶーぶーぶーぶーぶーぶー…!!

当然ながら、館内はブーイングの嵐に包まれた。

「「「「「いっえくしい!♪」」」」

パチイン…!

「「「「「………。」「」」」」

そんな舞台裏でハイタッチをするのは、この脚本を書いた狭間と、銀髪のカツラを被った響の”混ぜるな危険コンビ・ver. 2”。



## 激変の時間

「な…渚、ちよつと…良い…かな？」

「茅野？」

それは演劇発表から数日後の昼休み。

弁当を食べていた渚に、茅野が何やら思い詰めた様な表情で話し掛けてきた。

「ん…別に…良いけど…」

そして その様子に、少し戸惑い気味に返事をする渚と共に、茅野は教室を去って行く。

ニヨキ…パサ…パタパタ…x3

その光景を見て、何かを察したのか、悪魔の角と羽を生やし、邪な笑みを浮かべる約3名。

「おおつと〜？これは もしかして修学旅行の…あの時の続きが、漸く やつてきましたか？」

「…でつすよね〜♪」

もう、着けて行くしか無いでしょう♪」

「何やってんだ2人共、ぐずぐずするな！」

置いてくぞ!!…って、片岡さん？岡野ちゃん？」

》》》

「離せ！放してくれ！話せば分かる！」

茅野と渚の後を、スマホ片手に着いて行こうとした、響、カルマ、中村。

…を取り押さえる片岡と岡野、他数名。

「全くアンタ達、そつと見守るとか、出来ない訳？」

「特に吉良っちー！アンタは彼女持ちだから そーゆーの、解るでしょうが?!」

晴華っちにコレ、送ってやろうか？」

「う…それは、その…すいませんした。」

それだけは、何卒、御勘弁を！」

…って、まだ保存してたのかよ、それ!？」

そう言いながら岡野が響に見せたスマホの画面には、沖縄の時の、”ハーレム王・吉良響の図”の写真が。

「いや、私等は あの2人が、何か間違い起こしたりしないかと心配でさあ…」

「…で、その『間違い』とやらが起きた時、それをスマホに収め、後で弄る気満々だった癖に！」

「「う……」」

完全にバレテラな3人。

「……でも、良いの〜？」

「……こーゆー時つてさあ、俺達以上に最優先で取り押さえないといけないタコが存在、忘れてな〜いい？♪」

「「あ……」」

》》》

「……………」

「……………」

用具倉庫に入った2人。

扉を閉めた後、互いに顔を向け合い……は、せずに、俯いて顔を赤くした儘、沈黙の時間が流れる。

「ヌルフッフッフッフッフッフッフッフ……」

「いや〜、青春ですな〜。」

その様子を部屋の隅、茅野の背後の位置で物陰に隠れ気配を消し、カメラとメモ帳を持つ、パラッチ衣装のピンク色のタコが1人。

「ええい、じれったい！」



渚君、あなたも もう、察しているでしょう！

まさか草食通り越して絶食系な上に、鳥間先生以上の鈍感系ですか？

こーゆー時は、男の方が、リードする感じに話を切り出すのですよ！

ほら、茅野さんの後ろ、何故だか既に言い感じに、マツトも敷かれているじゃあ〜りませんか！

許します！

吉良君ならアウトですが、君達なら、今回は特別に、先生が許します！

一気に決めてしまいなさい！

さあ、何時 漢を見せるの？ 今でしょ！

それは既に、教育者の言葉では無く。

「な、渚っ！」

「ひゃ、ひゃいいい!?!」

そして その後の意を決したかの様な茅野の呼び掛け、渚も その迫力に声を裏返しながら返事。

「あ、あのさ…目、瞑って…くれないか…な？」

「え…えええっ?!」

自分の真後ろ、気配を殺した覗き魔タコが居るにも拘わらず、その台詞にテンパる渚御構

い無しに、殆んど0距離ゼロに近付くという行動に移る茅野。

「ちよ……かや……」

如何に鈍感系絶食男子と云えど、此処までのアクションで迫られると、流石に何かを察したのか、そして自分も悪くないと思つたか、覚悟を決めたかの様に、混乱状態ながらも、言われた様に目を閉じる渚。

「お……おお……!!」

茅野さん、素晴らしい！」

その様子を、息を荒げながら、カメラを構える殺せんせー。

「渚……」

緊張の余り、身体はガチガチ、目を閉じた儘 顔を紅潮させている渚に、茅野が声を掛ける。

「……(めんね♪)」

「……えっ……」

それは、今までの緊張感を打ち消す様な、軽く明るい口調。

……そして それと同時、

ヒュン！

彼女の首筋から突如、2本の黒い触手が生え出で、それが彼女の背後に身を隠していた殺せんせーに超スピードで襲い掛かった。

「は、はい〜いつ?!」

ズドツ！

出歯亀行為に全神経を注いでいた殺せんせーは回避の反応が遅れ、持っていたカメラを盾代わりにする事で、辛うじてその直撃を免れる。

「え…茅…野…?」

まさかの出来事に、渚も何が起きたのか、解らなくなり、

「あ…わわ…カメラが…」

レンズを貫かれ、中にはまだ現像前の、生徒の恥ずかしい場面を収めていたフィルム毎に、破壊された高級カメラに泣き顔を見せる殺せんせーだが、それも一瞬の事。

「か、茅野さん!」

触手それは…?」

キミは、一体…?!」

即座に教師の顔となり、その触手について尋ねるが、

「黙れ、人殺し。」

「……………!!」

それは冷たい表情からの、冷たい台詞で返された。

「…雪村あぐりの妹。」

「こう言えば、解るでしょ？」

「……………!」

「え…?」

雪村あぐり。

E組の元担任の名前を聞き、そして自分は その妹だと聞かされ、驚きの表情を隠せない殺せんせー。

そして超展開から茫然、漸く落ち着きを取り戻した渚も、再びの驚愕。

「あくあ、色ボケ状態の殺せんせーなら、確実に殺れると思っただけどなく？」

普段とは違う、別人の様な冷酷な笑顔で茅野が話す。

「まあ、良つか。次は、絶対に殺すから。」

場所とかは、直前に連絡するわ。」

ガッ…

「ま、待ちなさい、茅野さん！」

そう言うのと茅野は倉庫の壁を破壊すると、触手を解放した事で備わった超運動能力を活かし、木々の枝に飛び移りながら、その場から姿を消した。

「茅野……」

「茅野さん……」



「……な、何だって……っ?!」「……」

その後、E組では、教室に1人だけで戻ってきた渚に対し、響達が茅野とは どうなったのかを問い詰めようとするが、「実は……」から始まった その返答にクラス全員が、驚きの声を轟かせた。

「茅野さんが、雪村先生の妹?」

「いや、意味分かんないし!」

「どうなってんだってばよ!?!」

「あつた事を有りの儘 話なさい!」

更に渚を問い詰めるE組の面々。

しかし渚からしても、あつと言う間の出来事だったので、最初の説明以上の事は話せ

ない。

「まさか、茅野ちゃんが…いや、磨瀬榛名が雪村先生の妹だったなんてな…」

「「「へ？」」」

「「「え？」」」

「「「は？」」」

そして、響の一言。

「いやいや、お前の言う事も分かんないぞ？」

「磨瀬榛名って…あの、磨瀬榛名の事を言ってるのよね？」

「お…応…」

磨瀬榛名。

自分達と同年の、数年前までは天才子役として、テレビドラマに多数出演していた役者。

「子役なんか、受験時期に合わせて一時休業するって、よく有る話だろ？」

…で、その際に正体みもとも隠したりもするのかわく？…と思つて、敢えて触れなかつただけど…」

「其処は、こつそりで良いから教えなさいよ！」

「確かに言われてみれば…だったけど！」

「くそっ！サイン欲しかった！」

「マジに使えねーな、おい?!」

「…酷くない?」

その茅野の素性に最初から気付いていたらしい響に、非難殺到なE組の皆さん。

自分達と同年だったからか、クラス内でも それなりにファンが居た様だ。

「いや、今は そんな事を話している場合じゃないだろ?」

「そうよ、確かに茅野さんが役者だったり雪村先生の妹だったりも驚きだけど、今は触手でしょ?」

「[[[[[.....]]]]」

しかし そんなカオスな空気も、クラス委員長2人によつて取り払われた。

「あの触手は…」

「イトナ君?」

そして茅野と同じく、嘗て その身に触手を宿らせていたイトナが口を開く。

曰く、自分と違い、茅野には柳沢シロの様なメンテナンスを施す者は近くに居ない筈。

ならば常に、地獄の様な苦痛を…特に脳内に感じていた筈。

それを表情かおに出さずに耐え切るのには絶対に不可能。

「それを、1年近く…?」

「大した演技力……ってヤツか？」

「それよりも！」

その茅野の精神力や演技力に衝撃を覚える中、櫻瀬が口を開いた。

「カエデちゃん、殺せんせーに『人殺し』って言ってたんだよね？」

それって、つまり……

「「「「「「……!!」「」」」」」」

その全てを言い終える前に、教室内の皆が理解した。

E組元担任、雪村あぐりは、殺せんせーに殺害された。

少なくとも茅野は、そう思っている事を。



「……片方からの情報だけで、あっさり疑ったりはしないけどさ……」

「それでも、きちんと話してくれなきゃ、誰も納得しないよ？」

「……………」

……その後、E組教室にて、生徒達が担任教師に問い掛ける。

響も雪村あぐりが死亡した経緯、そして殺せんせーがE組担任となった経緯は、4月の決闘失敗時に聞いていた。

「皆の前で話すべきだよ。」



雪村先生の事を含め…一体、何が有って、先生がE組こに やってきたのかを。」

…が、まさか茅野が その元担任の家族とは知らなかった訳で。

鳥間とイリーナも神妙な顔で様子を窺う中の、響の言葉。

それに殺せんせーも観念したかの様な困り顔で、口を開く。

「分かりました。」

先生の…過去の全てを話すべきですね。

しかし、もう少しだけ待って下さい。

茅野さんが戻ってきた時…クラス全員が揃った時に、全てを話すと約束しますよ。」

「……………」

その言葉に、その場の皆が、無言で頷いた。



そして少し経ち、殺せんせーのスマホにメールが届く。

※※※

【from:茅野さん

【s u b : 殺せんせーへ♡

今夜11時、櫛ヶ丘公園奥の

すすき野原にて待っています♪